（財）広島市未来都市創造財団発掘調査報告書　第１集

トンガ坊城遺跡・坊主山遺跡
柳遺跡・琴平遺跡

－一般国道５４号（可部バイパス）建設工事に伴う発掘調査－

－本文編－

2011

財団法人広島市未来都市創造財団

はしがき

広島市安佐北区の三入・大林地区は，中央を根の谷川が流れ，その両岸には山並が連なる自然に恵まれた場所です。古くは雲石街道が，現在では一般国道 54 号といった幹線が通る交通の要衝の地でもあり，また，中世には三入荘地頭熊谷氏が長く支配をしたことでも知られるなど，古くから栄えてきた場所でした。このことを示すかのように，この地域には古墳や山城など，数多くの遺跡が確認されています。

この度，一般国道 54 号の渋滞の解消などを目的とするバイパス道路が建設されることとなり，建設事業地内で発掘調査が行われました。調査の結果，弥生時代後期から古墳時代初頭の集落跡や集団墓地・古墳・山城跡などであるトンガ坊城遺跡，弥生時代後期から古墳時代初頭の集団墓地である坊主山遺跡・琴平遺跡，弥生時代後期から古墳時代初頭の集落跡である柳遺跡を確認し，これまで遺跡の発掘調査があまり行われていなかった本地域の歴史を解明する貴重な資料を得ることができました。

この報告書が一人でも多くの方に活用され，広島市域の歴史を理解する一助となれば幸いです。最後になりましたが，この調査にあたってご指導，ご助言をいただきました諸先生方，ご協力いただきました関係諸機関と関係者の皆様，ならびに調査に従事していただいた皆様に，厚くお礼申し上げます。

平成 24（2012）年 3 月

財団法人広島市未来都市創造財団　文化科学部　文化財課

例　　言

1．本書は，一般国道 54 号（可部バイパス）建設工事に伴い，平成 17 年度から平成 23 年度にかけて実施したトンガ坊城遺跡，坊主山遺跡，柳遺跡，琴平遺跡の発掘調査報告書である。

トンガ坊城遺跡　安佐北区可部町字上町屋字新迫
坊主山遺跡　　安佐北区大林町字真香
柳遺跡　　安佐北区大林町字柳
琴平遺跡　　安佐北区大林町字真香

2．発掘調査は，国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所（平成 17・18 年度）及び同局広島国道事務所（平成 19 ～ 23 年度）から委託を受け，財団法人広島市文化財団（平成 23 年度から財団法人広島市未来都市創造財団に移行）が実施した。

3．本書の執筆はⅠ～Ⅴ，Ⅵ－ 5，Ⅶを椙木敬太が，Ⅵ－ 1 ～ 4 を平岡啓二が行い，編集は椙木が実施した。

4．遺構の実測及び写真撮影は平岡・高下洋一・荒川正己・椙木・濱岡大輔が実施した。遺物の実測・図面の製図及び写真撮影は椙木・野田希和子が実施した。なお，トンガ坊城遺跡及び柳遺跡出土鉄器の実測は特定非営利活動法人ひろしま文化・健康サポートセンターに，柳遺跡の遺物図面のトレースは株式会社イビソクに委託した。

5．人骨の取り上げ及び分析は土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長　松下孝幸氏，同職員松下真実氏に依頼した。

6．本書に掲載した航空写真の撮影は，スタジオ・ユニ，デジタルビジネス秋田，写測エンジニアリング株式会社，株式会社イビソクに委託した。

7．基準点測量は，写測エンジニアリング株式会社，株式会社イビソク，国際文化財株式会社に委託した。なお，各遺跡図面における基準点のデータは下記のとおりである。

（トンガ坊城遺跡）

基準点①　X ＝－ 160935.658　Y ＝ 33521.425
基準点②　X ＝－ 161016.697　Y ＝ 33553.175
基準点③　X ＝－ 160984.912　Y ＝ 33528.359

方向角は，基準点①から基準点②は 158-36-19，基準点②から基準点③は 322-01-09 である。

（坊主山遺跡）

基準点①　X＝－ 160866.341　Y＝ 33690.379

基準点②　X＝－ 161853.048　Y＝ 33682.758

方向角は，基準点①から基準点②は 330 － 10 － 26 である。

（柳遺跡）

基準点①　X＝－ 160739.329　Y＝ 33839.024

基準点③　X＝－ 160738.859　Y＝ 33850.137

基準点④　X＝－ 160691.154　Y＝ 33830.229

方向角は，基準点①から基準点③は 87-34-42，基準点③から基準点④は 337-20-55 である。

（琴平遺跡）

基準点①　X＝－ 160597.225　Y＝ 33961.572

基準点②　X＝－ 160570.204　Y＝ 33960.523

方向角は，基準点①から基準点②は 357 － 46 － 36 である。

8．遺物の科学分析については，関西 X 線株式会社（鉄器 X 線撮影），株式会社加速器分析研究所（年代測定），株式会社古環境研究所（年代測定），パレオ・ラボ（炭化材同定・土器胎土分析）に委託した。

9．本書に掲載した挿図の方位は，第 1 図は真北，その他は全て方眼北である。

10．第 1 図は，国土交通省国土地理院発行の 25,000 分の 1 の地形図（可部）を複製して使用した。

11．本書に使用した遺構の略記号は下記のとおりである。

SH：竪穴住居跡　SB：掘立柱建物跡　SX：テラス状遺構　SK：土坑　ST：墓壙　P：柱穴等

12．土層断面図及び土器の色調は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社発行）に拠った。

13．本書での弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器編年は，若島一則氏の編年（若島編年）に基づく。

若島一則「広島湾沿岸における弥生時代後期土器等に関する一考察」『研究連絡誌 I 』財団法人広島市文化財団　2002 年（ひろしま WEB 博物館 http://www.mogurin.or.jp/ にて閲覧可）

14．本発掘調査で得られた資料は，広島市教育委員会から委託を受けて，財団法人広島市未来都市創造財団文化科学部文化財課において保管している。

目　　次
第１分冊・本文編

Ⅰ　はじめに…… 1
Ⅱ　位置と環境…… 3
Ⅲ　トンガ坊城遺跡…… 9
Ⅳ　坊主山遺跡……141
Ⅴ　柳遺跡……174
Ⅵ　琴平遺跡……236
Ⅶ　まとめ……262
Ⅷ　自然科学的分析……270
・広島市トンガ坊城遺跡出土の近世人骨……271
・トンガ坊城遺跡住居跡出土炭化材の樹種同定……284
・トンガ坊城遺跡から出土した弥生土器の胎土材料……287
・トンガ坊城遺跡における放射性炭素年代測定……295
・広島市坊主山遺跡出土の弥生人骨……301
・坊主山遺跡における放射性炭素年代測定……312
・広島市琴平遺跡出土の弥生人骨……316
・琴平遺跡出土赤色顔料の蛍光Ｘ線分析 ……320

挿　図　目　次

第 1 図　周辺主要遺跡分布図 …… 5
第 2 図　周辺地形図 …… 8
第 3 図　トンガ坊城遺跡調査前地形測量図 …… 11
第 4 図　トンガ坊城遺跡基本層序（1） …… 12
第 5 図　トンガ坊城遺跡基本層序（2） …… 13
第 6 図　トンガ坊城遺跡基本層序（3） …… 14
第 7 図　トンガ坊城遺跡遺構配置図 …… 15
第 8 図　トンガ坊城遺跡 SH1 周辺実測図 …… 20
第 9 図　トンガ坊城遺跡 SH1 実測図 …… 21
第 10 図　トンガ坊城遺跡 SH2・SH3・SH4・SK2 実測図 …… 23
第 11 図　トンガ坊城遺跡 SH4b 実測図 …… 24
第 12 図　トンガ坊城遺跡 SH5 実測図 …… 26
第 13 図　SH5 コシキ形土器出土状況実測図 …… 27
第 14 図　トンガ坊城遺跡 SH6・SH7・SH8・SK1 実測図 …… 28
第 15 図　トンガ坊城遺跡 SH7 実測図 …… 29
第 16 図　トンガ坊城遺跡 SX10 実測図 …… 30

第 17 図　トンガ坊城遺跡 SX18 実測図 …… 31
第 18 図　トンガ坊城遺跡 SH9・SH10 実測図 …… 34
第 19 図　SH10 樹種別出土状況実測図 …… 35
第 20 図　SH10 コシキ形土器出土状況実測図 …… 35
第 21 図　トンガ坊城遺跡 SX1・SX2・SX3・SX4 実測図 …… 37
第 22 図　トンガ坊城遺跡 SK4 実測図…… 38
第 23 図　トンガ坊城遺跡 SK5 実測図…… 39
第 24 図　トンガ坊城遺跡 SX6 実測図 …… 40
第 25 図　トンガ坊城遺跡 SX11 実測図 …… 42
第 26 図　トンガ坊城遺跡 SK3 実測図…… 43
第 27 図　トンガ坊城遺跡 SH11・SX5 実測図 …… 45
第 28 図　トンガ坊城遺跡 SX7 実測図 …… 46
第 29 図　トンガ坊城遺跡 SH12 実測図 …… 48
第 30 図　SH12 コシキ形土器出土状況実測図 …… 48
第 31 図　トンガ坊城遺跡 SK8・SK9 実測図 …… 49
第 32 図　トンガ坊城遺跡 SX8・SX9 実測図 …… 51
第 33 図　トンガ坊城遺跡 SK6 実測図…… 52
第 34 図　トンガ坊城遺跡 SK7 実測図…… 53
第 35 図　トンガ坊城遺跡 SK10 実測図 …… 53
第 36 図　トンガ坊城遺跡 SH13 実測図 …… 55
第 37 図　トンガ坊城遺跡 SX12 実測図 …… 56
第 38 図　トンガ坊城遺跡 SX13 実測図 …… 58
第 39 図　トンガ坊城遺跡 SK11 実測図 …… 59
第 40 図　トンガ坊城遺跡 SK12 実測図 …… 59
第 41 図　トンガ坊城遺跡 SX14 実測図 …… 60
第 42 図　トンガ坊城遺跡 SK13 実測図 …… 61
第 43 図　トンガ坊城遺跡 SH14 実測図 …… 62
第 44 図　SH14 コシキ形土器出土状況実測図 …… 63
第 45 図　トンガ坊城遺跡 SX15・SX16・SX17 実測図 …… 65
第 46 図　ST1 実測図…… 66
第 47 図　ST2 実測図…… 66
第 48 図　ST3 実測図…… 66
第 49 図　ST4 実測図…… 68
第 50 図　ST5 実測図…… 68
第 51 図　ST6 実測図…… 68
第 52 図　ST7 実測図…… 68

第 53 図　ST8 実測図…… 68
第 54 図　ST9 実測図…… 70
第 55 図　ST10 実測図 …… 70
第 56 図　ST11 実測図 …… 70
第 57 図　ST12 実測図 …… 70
第 58 図　ST13・ST14・ST15 実測図 …… 71
第 59 図　トンガ坊城古墳実測図 …… 72
第 60 図　出土遺物実測図（1）……102
第 61 図　出土遺物実測図（2）……103
第 62 図　出土遺物実測図（3）……104
第 63 図　出土遺物実測図（4）……105
第 64 図　出土遺物実測図（5）……106
第 65 図　出土遺物実測図（6）……107
第 66 図　出土遺物実測図（7）……108
第 67 図　出土遺物実測図（8）……109
第 68 図　出土遺物実測図（9）……110
第 69 図　出土遺物実測図（10）……111
第 70 図　出土遺物実測図（11）……112
第 71 図　出土遺物実測図（12）……113
第 72 図　出土遺物実測図（13）……114
第 73 図　出土遺物実測図（14）……115
第 74 図　出土遺物実測図（15）……116
第 75 図　出土遺物実測図（16）……117
第 76 図　出土遺物実測図（17）……118
第 77 図　出土遺物実測図（18）……119
第 78 図　出土遺物実測図（19）……120
第 79 図　トンガ坊城跡・墓群遺構配置図 ……122
第 80 図　トンガ坊城跡 D － D′ 土層断面図 ……123
第 81 図　トンガ坊城跡 E － E′ 土層断面図 ……125
第 82 図　トンガ坊城跡階段状遺構実測図 ……126
第 83 図　トンガ坊城跡 F － F′ 土層断面図 ……128
第 84 図　トンガ坊城跡竪堀状遺構 A － A′ 土層断面図 ……129
第 85 図　トンガ坊城跡竪堀状遺構実測図 ……130
第 86 図　トンガ坊城跡竪堀状遺構 B － B′ 土層断面図 ……131
第 87 図　火葬墓群（ST1 － 20）実測図 ……132
第 88 図　ST21 実測図 ……133

第 89 図　ST22 実測図 …… 135
第 90 図　ST23 実測図 …… 135
第 91 図　出土遺物実測図 …… 140
第 92 図　坊主山遺跡遺構配置図 …… 143
第 93 図　坊主山遺跡基本層序 …… 144
第 94 図　坊主山遺跡 ST1 実測図 …… 145
第 95 図　坊主山遺跡 ST5 実測図 …… 146
第 96 図　坊主山遺跡 ST2・ST3・ST4 実測図 …… 147
第 97 図　坊主山遺跡 ST6 実測図 …… 148
第 98 図　坊主山遺跡 ST7 実測図 …… 148
第 99 図　坊主山遺跡 ST8 実測図 …… 149
第 100 図　坊主山遺跡 ST9・ST10 実測図 …… 149
第 101 図　坊主山遺跡 ST11 実測図 …… 150
第 102 図　坊主山遺跡 ST12・ST13 実測図 …… 151
第 103 図　坊主山遺跡 ST14 実測図 …… 152
第 104 図　ST14 人骨出土状況実測図 …… 153
第 105 図　坊主山遺跡 ST15 実測図 …… 154
第 106 図　坊主山遺跡 ST16 実測図 …… 154
第 107 図　坊主山遺跡 ST17・ST18 実測図 …… 156
第 108 図　坊主山遺跡 ST19・ST20 実測図 …… 158
第 109 図　坊主山遺跡 ST21 実測図 …… 158
第 110 図　坊主山遺跡 ST22 実測図 …… 159
第 111 図　坊主山遺跡 ST23・ST24 実測図 …… 160
第 112 図　坊主山遺跡 ST25 実測図 …… 161
第 113 図　坊主山遺跡 ST26 実測図 …… 161
第 114 図　坊主山遺跡 ST27 実測図 …… 162
第 115 図　坊主山遺跡 ST28・ST29・ST30 実測図 …… 163
第 116 図　坊主山遺跡 ST31・ST32・ST33・ST34 実測図 …… 165
第 117 図　坊主山遺跡 ST35 実測図 …… 166
第 118 図　坊主山遺跡 ST36 実測図 …… 166
第 119 図　坊主山遺跡 ST37 実測図 …… 167
第 120 図　坊主山遺跡 ST38 実測図 …… 167
第 121 図　坊主山遺跡 ST39・ST40・SK1 実測図 …… 168
第 122 図　出土遺物実測図 …… 171
第 123 図　柳遺跡遺構配置図 …… 176
第 124 図　柳遺跡基本層序 …… 177

第 125 図　柳遺跡断面図 …… 178
第 126 図　柳遺跡 SH2・SH3 実測図 …… 180
第 127 図　柳遺跡 SH1 実測図 …… 181
第 128 図　柳遺跡 SH4 実測図 …… 182
第 129 図　柳遺跡 SH5 実測図 …… 183
第 130 図　柳遺跡 SH6・SB1 実測図 …… 186
第 131 図　柳遺跡 SH7 実測図 …… 187
第 132 図　柳遺跡 SH8・SH9 実測図 …… 189
第 133 図　柳遺跡 SH10 実測図 …… 190
第 134 図　柳遺跡 SH11・SH12・SX6 実測図 …… 192
第 135 図　柳遺跡 SH13 実測図 …… 194
第 136 図　柳遺跡 SX1 実測図 …… 195
第 137 図　柳遺跡 SX2 実測図 …… 197
第 138 図　柳遺跡 SX3 実測図 …… 197
第 139 図　柳遺跡 SX4・SX5 実測図 …… 198
第 140 図　柳遺跡 SK1 実測図 …… 199
第 141 図　柳遺跡 SK2 実測図 …… 200
第 142 図　柳遺跡 SK3 実測図 …… 201
第 143 図　柳遺跡 SK6 実測図 …… 202
第 144 図　柳遺跡 SK4・SK5 実測図 …… 203
第 145 図　柳遺跡 SK7 実測図 …… 204
第 146 図　柳遺跡 SK8 実測図 …… 205
第 147 図　柳遺跡 SK9 実測図 …… 206
第 148 図　柳遺跡 SK10 実測図 …… 206
第 149 図　出土遺物実測図（1） …… 223
第 150 図　出土遺物実測図（2） …… 224
第 151 図　出土遺物実測図（3） …… 225
第 152 図　出土遺物実測図（4） …… 226
第 153 図　出土遺物実測図（5） …… 227
第 154 図　出土遺物実測図（6） …… 228
第 155 図　出土遺物実測図（7） …… 229
第 156 図　出土遺物実測図（8） …… 230
第 157 図　出土遺物実測図（9） …… 231
第 158 図　出土遺物実測図（10） …… 232
第 159 図　出土遺物実測図（11） …… 233
第 160 図　出土遺物実測図（12） …… 234

第 161 図　琴平遺跡遺構配置図 …… 238
第 162 図　琴平遺跡基本層序 …… 239
第 163 図　琴平遺跡 ST1 実測図 …… 241
第 164 図　琴平遺跡 ST2 実測図 …… 241
第 165 図　琴平遺跡 ST3 実測図 …… 242
第 166 図　琴平遺跡 ST4 実測図 …… 242
第 167 図　琴平遺跡 ST5 実測図 …… 243
第 168 図　琴平遺跡 ST6 実測図 …… 245
第 169 図　琴平遺跡 ST7 実測図 …… 245
第 170 図　琴平遺跡 ST8 実測図 …… 246
第 171 図　ST8 人骨出土状況実測図 …… 246
第 172 図　琴平遺跡 ST9 実測図 …… 247
第 173 図　琴平遺跡 ST10・ST11 実測図 …… 248
第 174 図　琴平遺跡 ST12 実測図 …… 249
第 175 図　琴平遺跡 ST13 実測図 …… 249
第 176 図　琴平遺跡 ST14 実測図 …… 250
第 177 図　琴平遺跡西側斜面遺構断面図 …… 251
第 178 図　琴平遺跡 ST15 実測図 …… 252
第 179 図　琴平遺跡 ST16 実測図 …… 253
第 180 図　琴平遺跡 ST17・ST18 実測図 …… 254
第 181 図　琴平遺跡 ST19 実測図 …… 255
第 182 図　琴平遺跡 ST20・ST21 実測図 …… 256
第 183 図　出土遺物実測図 …… 258

付　表　目　次

第 1 表　トンガ坊城遺跡出土土器観察表…… 79
第 2 表　トンガ坊城遺跡出土石器観察表…… 100
第 3 表　トンガ坊城遺跡出土鉄器観察表…… 100
第 4 表　トンガ坊城遺跡近世墓出土鉄器観察表…… 137
第 5 表　トンガ坊城遺跡近世墓墓壙計測表 …… 139
第 6 表　坊主山遺跡出土土器観察表…… 172
第 7 表　坊主山遺跡墓壙等計測表…… 172
第 8 表　柳遺跡出土土器観察表…… 212
第 9 表　柳遺跡出土石器観察表…… 221
第 10 表　柳遺跡出土鉄器観察表 …… 222
第 11 表　琴平遺跡墓壙計測表 …… 259
第 12 表　琴平遺跡出土土器観察表 …… 260

Ⅰ　はじめに

広島市教育委員会生涯学習課（現市民局文化スポーツ部文化財課，以下「市文化財課」）は平成14･15年度に，国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所（以下「三次国道」）の依頼を受け，一般国道54号（可部バイパス）建設事業予定地内における文化財等の有無及び取り扱いについて照会を受けた。事業予定地内には周知の遺跡としてトンガ坊城跡・坊主山古墳・琴平古墳が知られていたが，事業予定地内の試掘調査を行った結果，新たに柳遺跡の存在を確認した。これらの遺跡の取り扱いについて両者で協議が行われたが，計画の変更は困難であり，記録保存の措置を講ずることとなった。

そこで，三次国道は財団法人広島市文化財団（以下「文化財団」とする）に発掘調査及び報告書作成の実施を依頼した。これを受け，文化財団文化科学部文化財課では，平成17年から平成22年にかけて遺跡の調査を実施した。

現地調査期間（調査担当者）

トンガ坊城遺跡	平成17年6月13日から平成19年3月16日（荒川・椙木・濱岡）
坊主山遺跡	平成19年11月26日から平成20年3月31日（高下・塲正）
柳遺跡	平成20年3月6日から平成20年3月31日（高下・塲正）
	平成20年7月1日から平成20年12月25日（高下・椙木）
琴平遺跡	平成21年5月11日から平成21年7月31日　（平岡・椙木）
整理期間	平成22年4月1日から平成23年3月31日

発掘調査の関係者は以下のとおりである。

調査委託者　平成17・18年度　国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所
平成19～22年度　国土交通省中国地方整備局広島国道事務所

調査主体　財団法人広島市文化財団（平成23年度から広島市未来都市創造財団に移行）

調査担当課　財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課

調査関係者　平成17・18年度
金子文夫　常務理事，沼田眞之輔　文化科学部長，幸田　淳　文化財課長
中西　進　文化財課主幹，若島一則　文化財課主任指導主事
平成19・20年度
東山章次　常務理事，沼田眞之輔　文化科学部長，幸田　淳　文化財課長
中西　進　文化財課主幹，若島一則　文化財課主任指導主事
平成21年度
山田　稔　常務理事，石田正博　文化科学部長，幸田　淳　文化財課長
若島一則　文化財課主任指導主事
平成22年度
山田　稔　常務理事，石田正博　文化科学部長，幸田　淳　文化財課長
小林奈緒美　文化財課主任

調　査　者　　平成 17 年度

荒川正己　文化財課学芸員，椙木敬太　文化財課学芸員

平成 18 年度

椙木敬太　文化財課学芸員

濱岡大輔　調査員（財団法人安芸高田市地域振興事業団派遣職員）

平成 19・20 年度

高下洋一　文化財課学芸員，椙木敬太　文化財課学芸員

塲正　勝　調査員（財団法人安芸高田市地域振興事業団派遣職員）

平成 21・22 年度

平岡啓二　文化財課指導主事，椙木敬太　文化財課学芸員

調査補助員（50 音順）

相原茂美　麻田チズ子　岩田恭子　岩村京子　植木真澄　大木暁美　太田純子　大塚勝宏　大町作太　尾杉加代子　折出誠治　梶谷ミヱ子　加藤恒子　上土井博司　川手京子　久保田弘子　桑原晴美　神田稔典　河野正明　河野美和子　児玉秀良　澤岡忠重　正図正暁　高田和子　高本すがこ　田上健吾　宅見陽子　竹内清光　田中実　谷口敏枝　坪木征子　寺尾睦次　利元明則　西村与三郎　西本和則　庭尾勝美　野田希和子　増井伸昭　舛田愛子　三田春雄　森田美恵子　山田結紀江　山手忠三　横光美里

整理作業員（50 音順）

佐伯ひとみ　酒本由理郁　菅原彰子　住川香代子　橋本礼子　村田智子　山脇啓子

なお，国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所，同局広島国道事務所，広島市市民局文化スポーツ部文化財課の職員の方々，三入・大林地区の住民の方々には，調査を円滑に進めるにあたって多大なご配慮とご協力をいただいた。さらに，調査期間中及び報告書作成にあたり，本財団埋蔵文化財発掘調査指導委員会の委員である広島大学名誉教授河瀬正利氏（故人），同教授古瀬清秀氏からは，貴重なご助言・ご指導をいただいた。また，土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長松下孝幸氏，島根県教育庁埋蔵文化財調査センター中川寧氏から広範なご教示をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

Ⅱ　位置と環境

１．自然的・地理的環境

本遺跡群の位置する上町屋・大林地区は広島市街の中心部から北へ約 15km の位置にある。本地区には，太田川の支流である根の谷川が上根峠から可部地区へと南に流れ，可部地区の北で支流の南原川と合流し太田川へと流入する。この上根峠から可部地区にかけての流域には，根の谷川によって形成された幅の狭い谷底平野が広がる。根の谷川と南原川に沿った谷筋は，古くから主要な交通路であり，根の谷川筋は三次や松江方面へ続く出雲路と，南原川筋には浜田方面へ抜ける石見路の２つの脇往還（雲石街道）が通っている。本街道は根の谷川と南原川が合流する横川で分岐するが，上町屋地区と下町屋地区の間を流れる山倉川に沿って，両街道へと抜けることができる。一方，谷底平野周辺の山地に目を転じると，根の谷川西岸には備前坊山（標高 789.4m）から延びる山脚が広がり，東岸には押手山（標高 706.8m）と白木山（標高 889.3m）から延びる山脚が広がる。両岸に急峻な山塊を控えるため，谷底平野は細長い形状を示すが，山倉川・桐原川など複数の小河川が合流し，大林地区から下町屋地区は幅 500 ～ 750 mの広い平地を有する。

本遺跡群は，備前坊山（標高 789.4m）から南へと延びる山脚が南東へと分岐し，根の谷川に向けて南へとそれぞれ派生した，標高 105 ～ 115m の尾根の先端部に位置する。琴平遺跡の位置する尾根を除き，それぞれの尾根は標高 150m 付近で比較的なだらかな傾斜へと変換し，互いの尾根には尾根元から容易に移動することができる。それぞれの尾根からは，可部地区の平野部から大林地区の平野部までを一望することができる。また，尾根筋に挟まれた谷間は小河川が流れるなど水資源が豊富であり，水田や畑作地等の耕作地として利用されてきた。

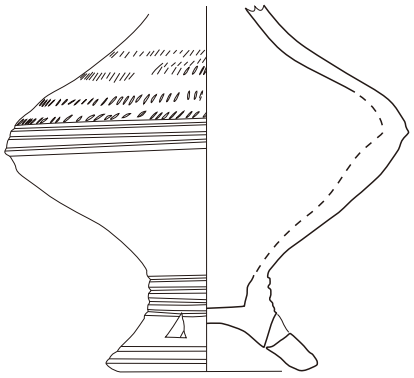
２．歴史的環境

本地区では，現在までのところ旧石器時代の遺構や遺物は確認されていない。縄文時代では，本地区近辺は南原と草田にて縄文時代の特徴をもつ石斧が採集されているのみで，可部地区でもわずかに遺物が採集されているのみである[1)]。

続く弥生時代では造成工事中等に土器や石器などが見つかった例が多い。出土した土器片の大半は弥生時代後期の特徴を示しており，それ以前の遺物の少なさとも考え合わせると，太田川下流域や広島湾岸域と同様に，この時期になって多くの人々が本地区一帯で生活を営むようになったと考えられる。

本地区では発掘調査がほとんど行われていなかったため，住居跡や耕作地跡などの生活や生産基盤を物語る遺構は確認されていない。わずかに山田遺跡[2)] で土砂採取の際に，斜面から袋状土坑の一部が確認され [3)]，内部から後期の特徴を持つ土器片が出土しているのみである。一方，墳墓としては，丸子山遺跡の発掘調査が行われている。丸子山遺跡は根の谷川東岸の桐原川が合流する付近の丘陵斜面に位置しており，弥生時代中期から後期にかけての成人・小児用合わせて 15 基の箱式

石棺が確認され，合計 8 体分の人骨が出土している。このうち，第 6 号石棺からはイモ貝製の腕輪や小札状貝製品が出土している。なお，可部バイパス建設工事予定地内の下町屋トンネル付近の斜面からは，本工事中に土器が出土している（右図・図版 85）。算盤玉状に強く張る胴部に短脚を持つ長頸壺で，弥生時代中期後半のものと考えられる。斜面からの出土であり，上方の尾根鞍部から流れ込んだものと考えられ，上方の尾根上（山根城跡）には弥生時代の集落跡や墳墓群があると考えられる。



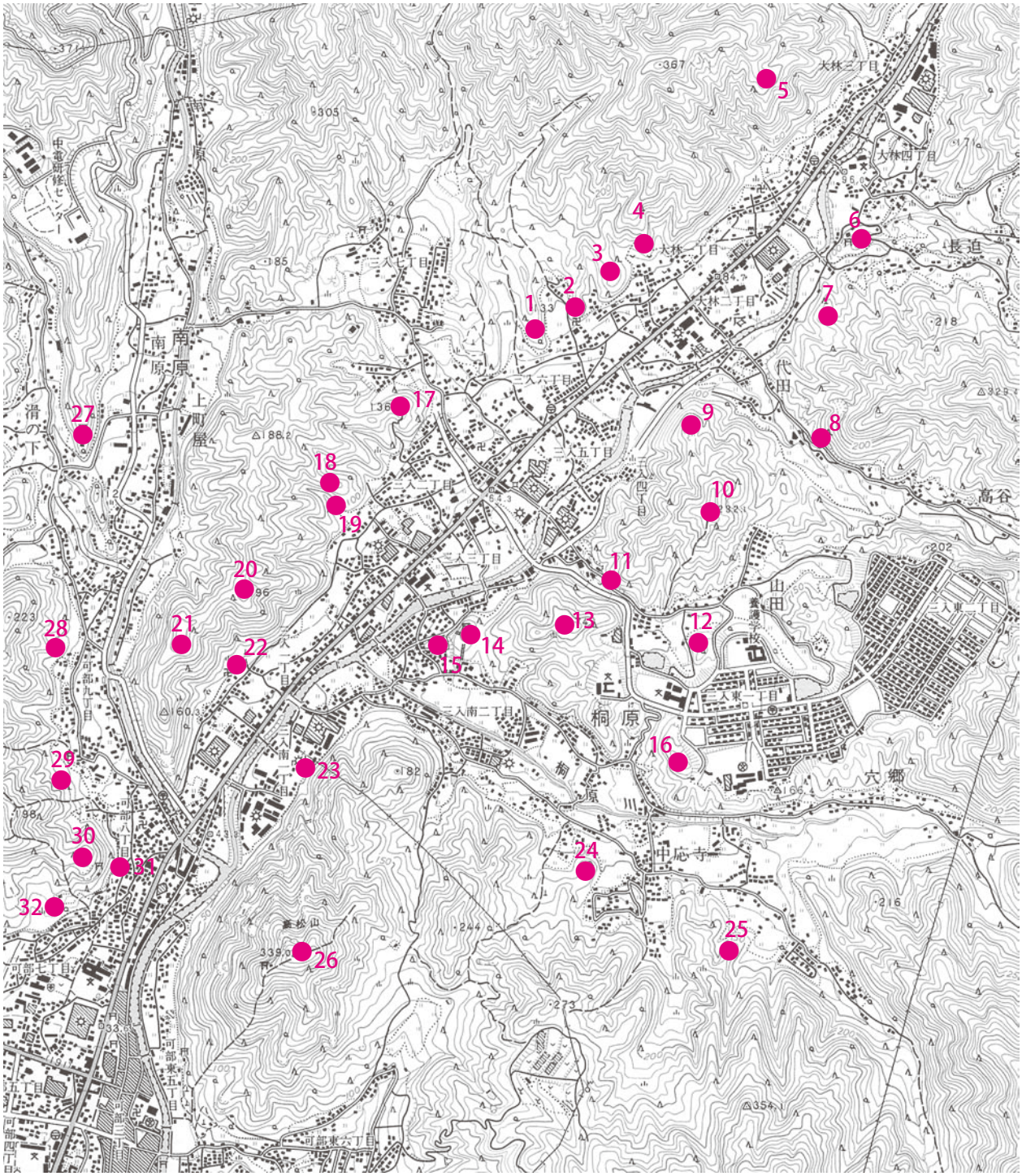
下町屋トンネル工事中出土土器（S=1/3）

古墳時代については，古墳以外の遺構は確認されていない。前・中期に属する古墳としては上ヶ原古墳 E 支群・虹山古墳[4]・可部寺山古墳群[5]などが従来から知られている。上ヶ原古墳 E 支群は箱式石棺 5 基と竪穴式石室を持つ古墳 1 基からなっている。虹山古墳は全長 24.6m の帆立貝式古墳もしくは造出部をもつ円墳で，墳頂中央部からは大小 2 基の埋葬施設が確認されている。中心的な 1 号主体は長さ 4.8m の割竹形木棺を収めた埋葬施設を持ち，棺内からは鉄剣・鉄鏃・刀子・ガラス製小玉が，棺外からは鉄斧や土師器が出土した。2 号主体は長さ 3m の 2 段掘りの埋葬施設をもち，副葬品は出土していない。築造時期は 5 世紀の前葉から中葉にかけての頃と考えられている。可部寺山古墳群は丘陵上にある 6 基の古墳からなる古墳群である。このうち第 2・3 号古墳は直径 10m 程度の円墳と考えられ，埋葬施設はいずれも木棺墓と考えられる。第 2 号古墳の埋葬施設からはガラス製小玉・鉄剣・刀子が，第 3 号古墳の埋葬施設からは鉄鎌・刀子が出土した。第 5 号古墳は長径 12.5 m短径 10.5m の長円形の墳丘で，墳丘上に 2 基の墓壙と墳丘外に 1 基の墓壙をもつ。このうち中心主体と考えられる墓壙は長辺 3.25m 短辺 2.25m の隅丸長方形の墓壙に木棺を伴ったもので，内部からは短冊形鉄斧が出土している。第 6 号古墳は墳丘の形状は不明であるが割竹形木棺の痕跡が確認されており，埋葬施設から鉄斧・鉄鎌が，溝からは土師器甕が出土している。時期は第 2・5 号古墳が 5 世紀前半に，第 3・6 号古墳が 5 世紀中葉から後半に推定されている。

古墳時代の後期に属する古墳としては，福王寺山の東麓から南麓にかけての一帯にある可部古墳群と総称される群集墳が知られる。可部古墳群は九品寺北古墳群・九品寺南古墳群・城ヶ平古墳群・上ヶ原古墳群・原迫古墳群・青古墳群・給人原古墳群の 7 群の古墳群からなり，総数は 80 基を超えていたとみられる。内容は横穴式石室を持つ，直径 10 ～ 20m 程度の規模の円墳が主体で，6 世紀から 7 世紀中頃にかけて築造されたものと考えられている。

上記のとおり，可部地区では古墳時代全般にかけて複数の古墳の存在が確認されているが，本遺跡群の位置する三入・大林地区一帯では現在のところ明確な古墳は確認されていない[6]。

続く古代になると，古代条里制のもと可部平野部には条里が敷かれ，近年まで碁盤目状の土地区画が名残をとどめていた。三入地区の平野部においては，碁盤の目状の条里地割はすでに見られないが，同様の条里地割があったことが古文書などにより知られる。



第 1 図　周辺主要遺跡分布図（S=1:25,000）

1. トンガ坊城遺跡　2. 坊主山遺跡　3. 柳遺跡　4. 琴平遺跡　5. 火打岩城跡　6. 伊勢ヶ坪城跡
7. 友近城跡　8. 高谷古墳　9. 二遍山城跡　10. 王子城跡　11. 山田遺跡　12. 山田古墳群　13. 雨乞城跡
14. 新宮城跡　15. 丸子山遺跡　16. 山田城跡　17. 門田城跡　18. 山根城跡　19. 下町屋トンネル土器出土地
20. 宇祢能城跡　21. 観音寺山城跡　22. 菩提所観音寺跡　23. 土居屋敷跡　24. 新城山城跡
25. 天上山城跡　26. 高松山城跡　27. 南原遺跡　28. 九品寺北古墳群　29. 九品寺南古墳群
30. 申宮城跡　31. 水落古墳　32. 城ヶ平古墳群

10 世紀に成立した『和名類聚抄』には，安芸国安芸郡内 11 郷の中に「彌理・弥理（みり）」の郷名があり，現在の上町屋・下町屋・大林・桐原・上原の根の谷川及び南原川・桐原川流域一帯に比定されている。

平安末期には石清水八幡宮領「三入保」の名がみえ，その後，新熊野社領「三入庄」となり，荘園として立荘され中世を通じて存続していく。その後，当地は熊谷氏が長きにわたって支配していくこととなる。熊谷氏は武蔵国熊谷郷に本拠をおいた関東御家人で，承久の乱（1221 年）の恩賞として三入地頭職が熊谷直時に与えられた。その後，三入庄は弟祐直との兄弟間で本庄（直時）と新庄（祐直）に分割され，本庄方は伊勢ヶ坪城を居城とした根の谷川沿いを，新庄方は新城山城（桐原城）を居城とした桐原川沿いの平野部中心を本拠とした。南北朝期には本庄方・新庄方ともに庶子の分立が進んだが，貞治 4 年（1365 年）に本庄方で単独相続が始まり，明徳 2 年（1391 年）には本庄方･新庄方で一族一揆が結ばれ，本庄と新庄の統一が図られたと考えられている。その後，戦功などにより領地を拡大し，可部庄域まで熊谷氏の勢力下に入ることとなる。熊谷氏は安芸国守護武田氏の配下にあったが，16 世紀前半には武田氏から離反し，台頭してきた毛利氏の配下となる。この頃，武田氏に対するため，居城を伊勢ヶ坪城から高松山城に移転したとみられる。以後，熊谷氏は毛利氏直属の有力家臣として，17 世紀初頭に毛利氏が長門国萩に移封されるまで，可部地域一帯の支配をおこなった。

根の谷川両岸の丘陵上や三入地区一帯には多数の山城跡の存在が確認されている。根の谷川東岸には，北から伊勢ヶ坪城跡・友近城跡・二遍山城跡・王子城跡・雨乞城跡・新宮城跡・高松山城跡が，西岸には北から火打岩城跡・トンガ坊城跡・門田城跡・山根城跡・宇祢能城跡・観音寺山城跡・申宮城跡が，桐原川沿いには新庄山城跡（桐原城跡）・山田城跡・天上山城跡が存在する。また，高松山城跡の北側山麓には，熊谷氏の屋敷地である土井屋敷跡が，対岸の観音寺山城跡の東側山麓には熊谷氏の菩提所観音寺跡が存在する。

以上のように本地区には多くの遺跡が残されており，中でも古墳時代後期の一大群集墳や中世の熊谷氏に係る一連の遺跡群は，広く太田川の歴史を紐解く上でも従来から注目されてきた地である。今回の調査では古墳時代に先立つ弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡・墳墓群，古墳時代中期の古墳など状況が明らかでなかった時代の遺構を確認し，また，山城跡ではデータの蓄積できる好資料を得たといえよう。

注

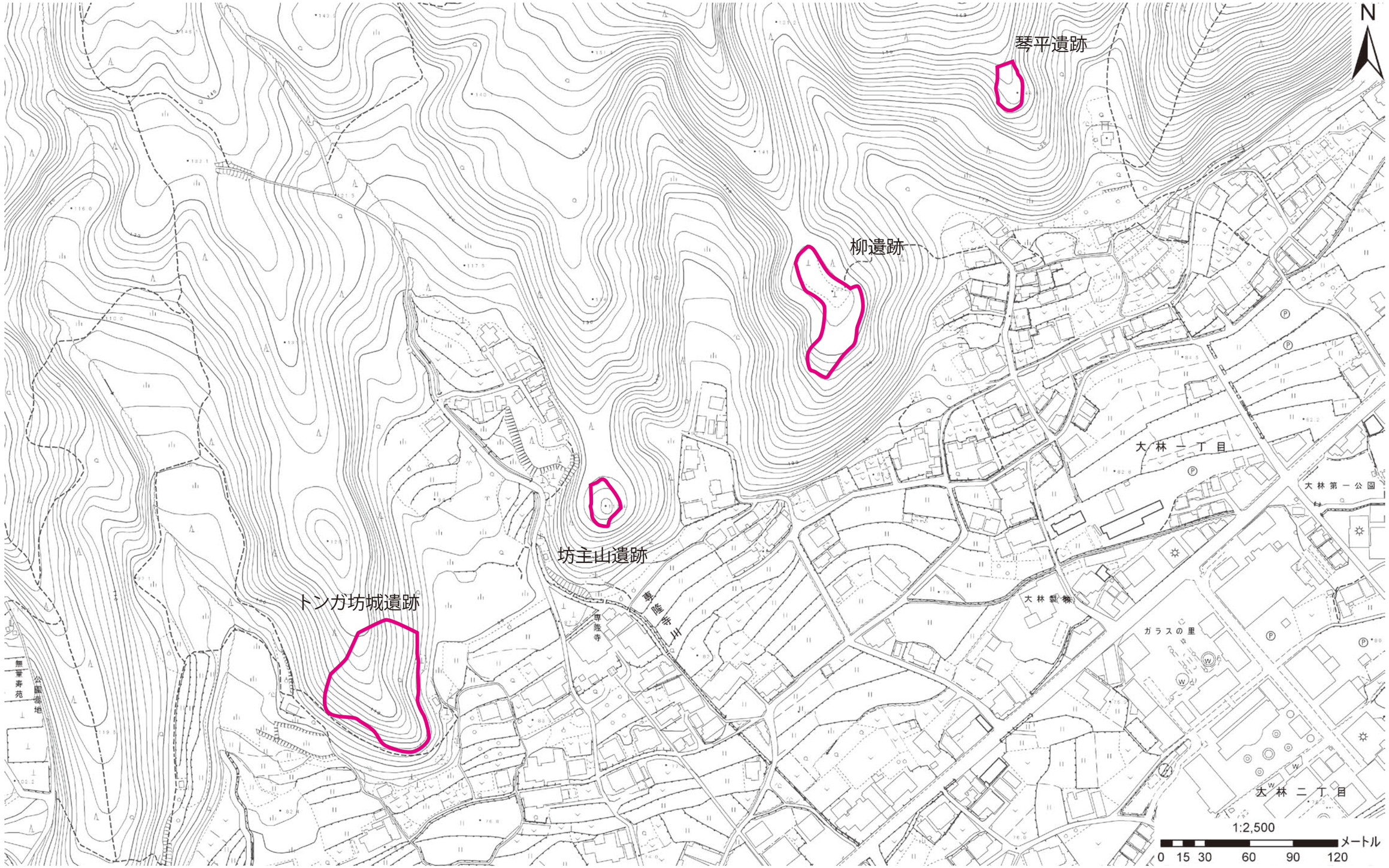
1．城遺跡で石鏃が，給人原第 1 号古墳の石室流入土及び番谷遺跡からは磨消縄文の土器片が確認されている。
2．『可部町史』では王子遺跡と記載があるが同一の遺跡と考えられ，本書では山田遺跡として記載する。
3．土坑は推定で，掘り方上面は直径 70 ～ 80cm，底面は直径 1.9 m程度の円形で，深さは 1.2m 以上である。
4．虹山古墳発掘調査団『虹山古墳発掘調査報告』 1989 年
5．財団法人広島市文化財団『可部寺山 1 号遺跡』 2004 年
広島県教育委員会・株式会社アコード『可部寺山第 5 号古墳・可部寺山 2 号遺跡発掘調査報告書』 2004 年
財団法人広島県教育事業団『寺山城跡』 2004 年
6．山田古墳群，高谷古墳など古墳の名称がつくものはある。現地踏査や聞き取り調査の結果，弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての石棺墓群である可能性が高い。

参考文献

東京大学史料編纂所「熊谷家文書」『大日本古文書家わけ十四』 財団法人東京大学出版会　1937 年
広島市役所『可部町史』 1976 年
広島県立可部高等学校史学研究部『はにわ』第 16 号　1977 年
栗田義一『安芸三入庄熊谷氏』 1990 年
広島市役所『中山村史』 1991 年
錦織勤「安芸熊谷氏に関する基礎的研究」『日本歴史』437 号　吉川弘文館 1984 年
篠原達也「熊谷氏の高松城跡－遺構の外観と資料の再検討について－」『芸備地方史研究』第 221 号　2000 年
佐々木卓也『芸備両国の条里遺構』 渓水社　1996 年

参考　下町屋トンネル西側斜面出土土器観察表

器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	成形・調整	備考
長頸壷	下町屋トンネル西側斜面工事中出土	胴部最大径 16.0 底径 7.5	算盤玉状に強く張る胴部に，短脚の脚台をもつ	外面：磨き 内面：ナデ？ 脚部に 4 条の強い凹線，4 個の 3 角形の透かしをもつ。胴部最大径上方に 3 条の弱い凹線，胴部上半に 4 条の爪形刺突文が巡る。	胎土：～ 1mm の石英少し含む 焼成：良好 色調：橙色 (6YR6/8)



第２図　周辺地形図（S=1/2500）

Ⅲ　トンガ坊城遺跡

1．調査の概要

本遺跡は，備前坊山（標高 789.4m）から南へと延びる山脚から派生した尾根筋の先端部に位置する。遺跡の位置する尾根は，階段状の地形や竪堀状の落ち込みがあり，「トンガ坊城跡」として周知されていた。広島市教育委員会が，遺跡のうち事業予定地にかかる範囲を試掘調査した。その結果，人為的に形成された構造を確認したことや瓦質土器の破片が出土したことから，中世を下限とする山城跡であることを確認し，当初「トンガ坊城跡」として調査を開始した。本調査にあたり，調査区の各所にトレンチを設定し掘り下げを行った結果，山城面のさらに下層に複数の住居跡などの集落跡に関する遺構や古墳などの遺構面が存在することを確認した。

調査の結果，本遺跡の位置する尾根は，複数の時代にかけて人々に利用されてきたことが分かり，弥生時代終末から古墳時代前期の集落跡，墳墓群，古墳，山城跡，及び近世墓群を確認した。集落跡に関連する遺構として，竪穴住居跡 14 軒（SH1 ～ 14），テラス状遺構 18 か所（SX1 ～ 18），柱穴群 1 か所，土坑 13 基（SK1 ～ 13），土壙墓 13 基，石棺墓 2 基，古墳 1 基，山城跡，近世墓 23 基（ST1 ～ 23）を確認した。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・鉄器・石器などが出土した。

本報告では，これらの複数の遺構をあわせて「トンガ坊城遺跡」として，それぞれの遺構の報告を行うものである。

2．地形と基本層序（第 4 ～ 7 図）

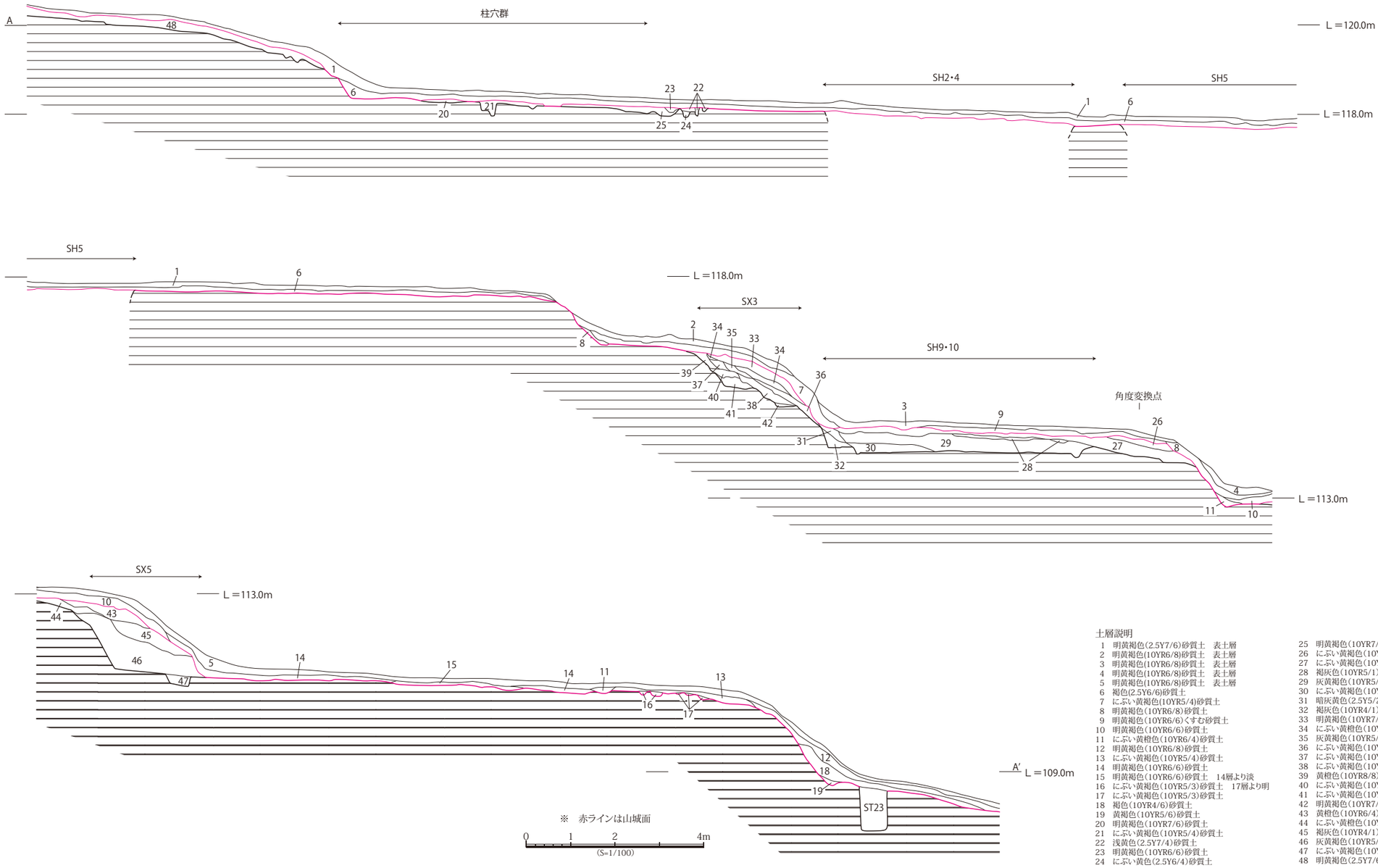
本遺跡は南北にのびる尾根の先端部，全長約 100m 尾根幅 10 ～ 16m の長細い尾根上に位置する。調査区の最低所から最高所の標高は 104 ～ 119m と比高差が約 15m もある。尾根のふもとには水田面が広がり，東の尾根に位置する坊主山遺跡との間の谷間には専隆寺川が，西の谷間には幅 1 m前後の小川が流れる。

尾根は調査前から階段状の地形を呈しており，尾根筋上のピークに設けられた平坦面を中心に，これを取り巻くように階段状の平坦面が巡っていた。東側斜面は急峻な崖面に，西側斜面の北半分は比較的緩やかな斜面に，西側斜面の南半分は土採り跡のため急峻な崖面となっており，各斜面には竪堀状の落ち込みが数か所確認できた。なお，西側斜面の調査区外北側には植林による段が，東側斜面裾から調査区外北側に向かっては竹林段が広がる。また，調査区外の南側尾根先は急峻な崖面となっており，さらに 10m 程下には平坦面が広がる。

調査にあたり，尾根筋及びこれに直交する形で調査区の各所にトレンチを設定し，土層観察を行った。設定したトレンチのうち，尾根筋中央に沿う A － A’ 土層，東西斜面の B － B’・C － C’ 土層を基本土層として示す。本遺跡の位置する尾根は，地盤が風化した花崗岩（地山）で形成され，堆積する土は基本的に花崗岩バイラン土が主な成分となっているため，土質は砂分の多い砂質土が大半を占める。

調査前の地形観察では 10 か所の主要な平坦面が確認できた。土層観察によると，弥生時代には

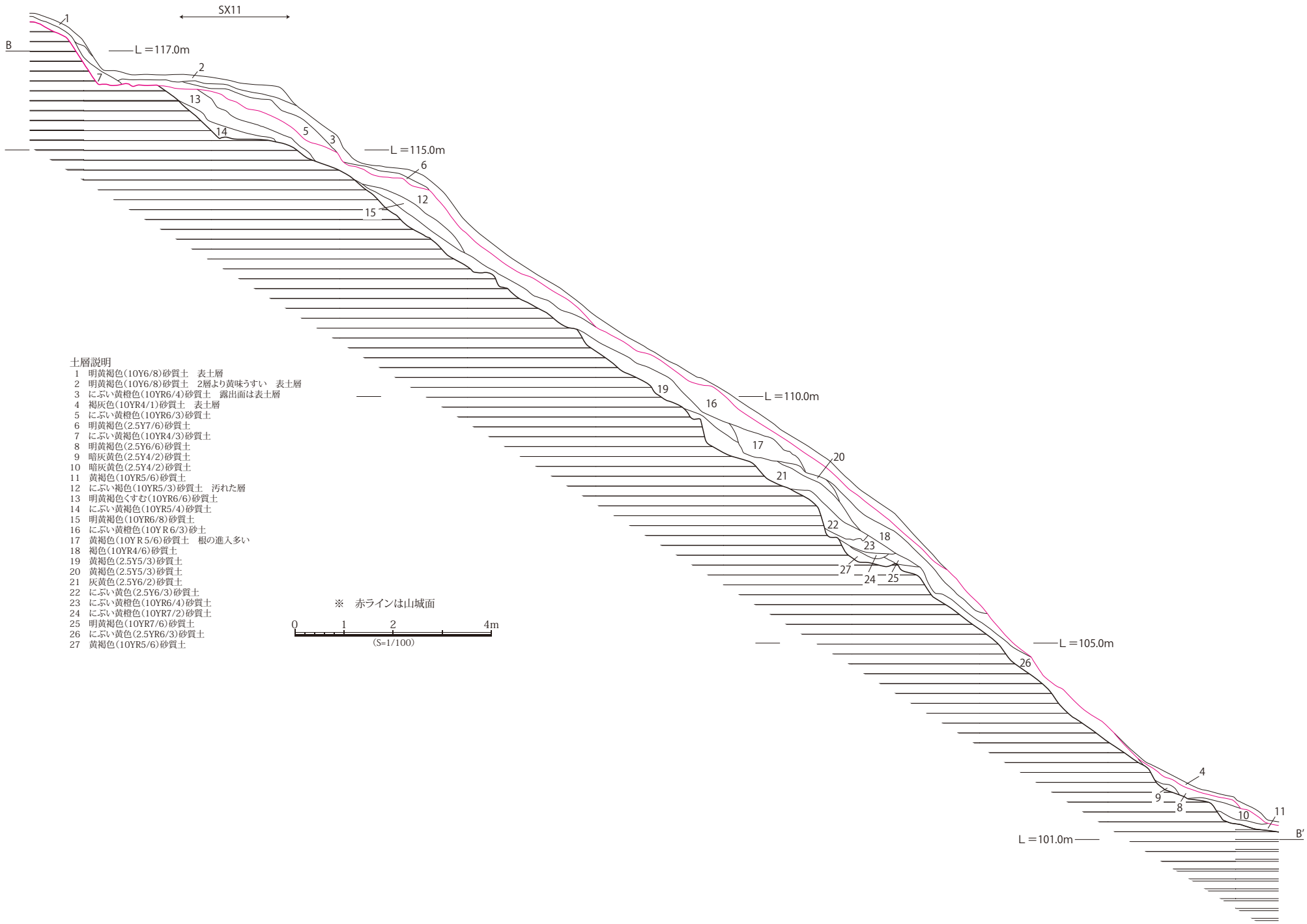
第３図　トンガ坊城遺跡調査前地形測量図（S=1/300）



土層説明

1　明黄褐色(2.5Y7/6)砂質土　表土層
2　明黄褐色(10YR6/8)砂質土　表土層
3　明黄褐色(10YR6/8)砂質土　表土層
4　明黄褐色(10YR6/8)砂質土　表土層
5　明黄褐色(10YR6/8)砂質土　表土層
6　褐色(2.5Y6/6)砂質土
7　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
8　明黄褐色(10YR6/8)砂質土
9　明黄褐色(10YR6/6)くすむ砂質土
10　明黄褐色(10YR6/6)砂質土
11　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
12　明黄褐色(10YR6/8)砂質土
13　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
14　明黄褐色(10YR6/6)砂質土
15　明黄褐色(10YR6/6)砂質土　14層より淡
16　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土　17層より明
17　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
18　褐色(10YR4/6)砂質土
19　黄褐色(10YR5/6)砂質土
20　明黄褐色(10YR7/6)砂質土
21　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
22　浅黄色(2.5Y7/4)砂質土
23　明黄褐色(10YR6/6)砂質土
24　にぶい黄色(2.5Y6/4)砂質土
25　明黄褐色(10YR7/6)砂質土
26　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土　炭片混じる
27　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
28　褐灰色(10YR5/1)砂質土
29　灰黄褐色(10YR5/2)砂質土　炭片混じる
30　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
31　暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土　炭片多く混じる　SH10埋土
32　褐灰色(10YR4/1)砂質土　炭片多く混じる　SH10埋土
33　明黄褐色(10YR7/6)くすむ砂質土
34　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
35　灰黄褐色(10YR5/2)砂質土
36　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
37　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
38　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土　36層より暗い
39　黄橙色(10YR8/8)砂質土
40　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土　37層より黄味強い
41　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
42　明黄褐色(10YR7/6)砂
43　黄橙色(10YR6/4)くすむ砂質土
44　にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土
45　褐灰色(10YR4/1)砂質土　炭片含む　SH10埋土流出土か
46　灰黄褐色(10YR5/2)砂質土に黄橙色(10YR7/8)砂質土10％混じる
47　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
48　明黄褐色(2.5Y7/6)砂質土

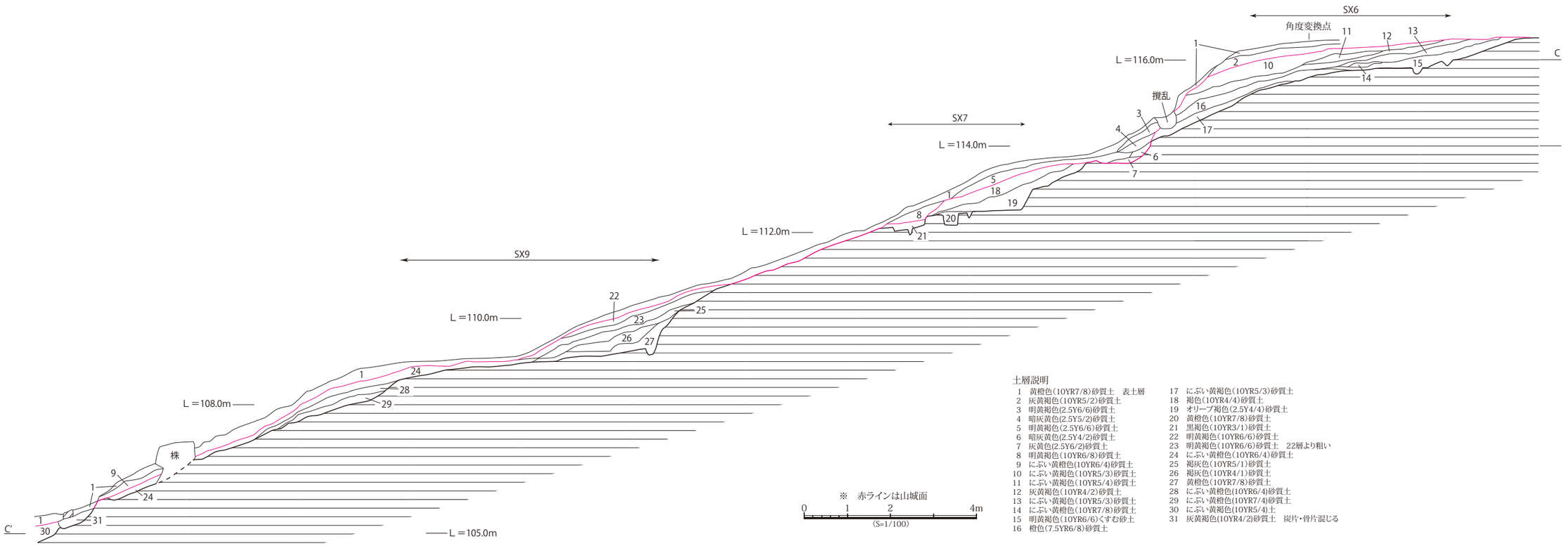
第４図　トンガ坊城遺跡基本層序（1）(S=1/100)



土層説明

1　明黄褐色(10Y6/8)砂質土　表土層
2　明黄褐色(10Y6/8)砂質土　2層より黄味うすい　表土層
3　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土　露出面は表土層
4　褐灰色(10YR4/1)砂質土　表土層
5　にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土
6　明黄褐色(2.5Y7/6)砂質土
7　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
8　明黄褐色(2.5Y6/6)砂質土
9　暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土
10　暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土
11　黄褐色(10YR5/6)砂質土
12　にぶい褐色(10YR5/3)砂質土　汚れた層
13　明黄褐色くすむ(10YR6/6)砂質土
14　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
15　明黄褐色(10YR6/8)砂質土
16　にぶい黄橙色(10YR6/3)砂土
17　黄褐色(10YR5/6)砂質土　根の進入多い
18　褐色(10YR4/6)砂質土
19　黄褐色(2.5Y5/3)砂質土
20　黄褐色(2.5Y5/3)砂質土
21　灰黄色(2.5Y6/2)砂質土
22　にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土
23　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
24　にぶい黄橙色(10YR7/2)砂質土
25　明黄褐色(10YR7/6)砂質土
26　にぶい黄色(2.5YR6/3)砂質土
27　黄褐色(10YR5/6)砂質土

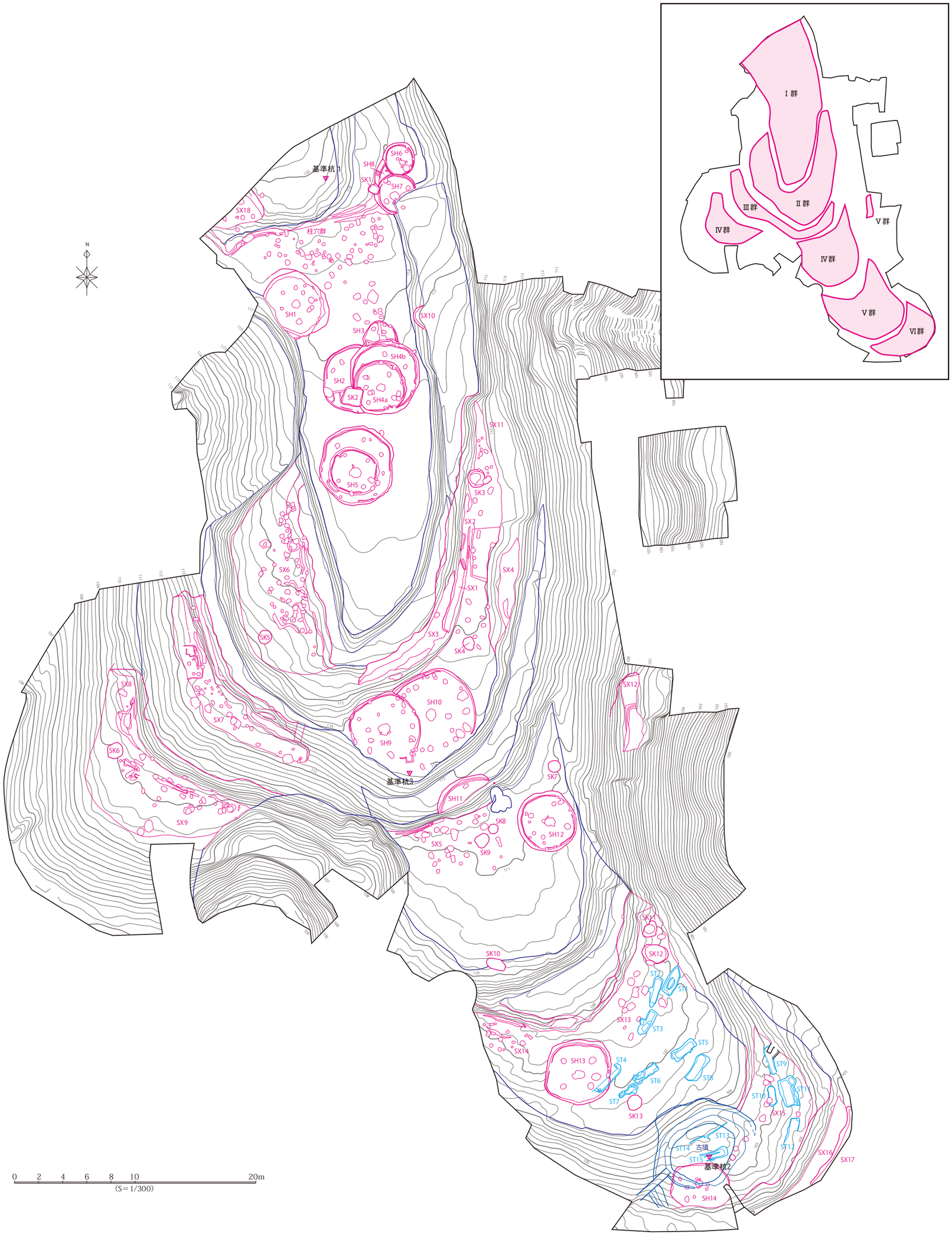
第５図　トンガ坊城遺跡基本層序（2）(S=1/100)



土層説明

1　黄橙色(10YR7/8)砂質土　表土層
2　灰黄褐色(10YR5/2)砂質土
3　明黄褐色(2.5Y6/6)砂質土
4　暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土
5　明黄褐色(2.5Y6/6)砂質土
6　暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土
7　灰黄色(2.5Y6/2)砂質土
8　明黄褐色(10YR6/8)砂質土
9　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
10　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
11　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
12　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土
13　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
14　にぶい黄橙色(10YR7/8)砂質土
15　明黄褐色(10YR6/6)くすむ砂土
16　橙色(7.5YR6/8)砂質土
17　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
18　褐色(10YR4/4)砂質土
19　オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質土
20　黄橙色(10YR7/8)砂質土
21　黒褐色(10YR3/1)砂質土
22　明黄褐色(10YR6/6)砂質土
23　明黄褐色(10YR6/6)砂質土　22層より粗い
24　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
25　褐灰色(10YR5/1)砂質土
26　褐灰色(10YR4/1)砂質土
27　黄橙色(10YR7/8)砂質土
28　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
29　にぶい黄橙色(10YR7/4)砂質土
30　にぶい黄褐色(10YR5/4)土
31　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土　炭片・骨片混じる

第 6 図　トンガ坊城遺跡基本層序（3）（S=1/100）



第７図　トンガ坊城遺跡遺構配置図（S=1/300）

尾根の自然地形をそのまま利用した時期と，その後尾根を階段状に造成した時期があることがわかる。また，山城の郭配置は弥生時代に造成された階段状の地形を基本的には踏襲し，これを利用したものと考えられる。以下，調査前に確認できた平坦面ごとにその概観と生成要因を述べていきたい。

平坦面 1 は調査範囲の尾根元側（北側）の，尾根の中央に沿って位置する広い平坦面で，眺望は極めてよい。平坦面は標高約 118 m，長さ約 33 m幅約 10 mで，南に向けて緩やかに傾斜する。平坦面の埋土は 20cm 前後と全体的に薄く，近年まで使用された痕跡が見られるなど遺存状態はよくない。本平坦面からは，弥生時代の遺構として竪穴住居跡 5 軒（SH1 ～ 5）及び土坑 1 基（SK2）が，山城の遺構として第 1 平坦面が確認された。土層観察によると，弥生時代と山城の遺構面が地山上に共通して存在する。さて，本平坦面に位置する SH2・3 の掘り込みは 10 ～ 20 ㎝と浅く削平されたことは明らかであるが，重複する SH4 や SH1・5 の掘り込みは 80cm 前後と十分な深さをもっており，山城面で削平されたとするには深すぎる掘り込みとなる。このことから，弥生時代には，後述する平坦面 10 から続いたと考えられる緩やかな地形に住居（SH2・3）を造った時期があり，その後，平坦面を造成し住居（SH1･4a･5）を構築した時期があったものと想定できる。以上から，平坦面 1 は弥生時代にはすでにその基本地形が形成された平坦面と考えられる。

平坦面 2 は平坦面 1 を取り巻いて位置し，上段との比高は約 0.8 mである。平坦面はその形状から西側に位置する比較的広い西面と，中央から東側にかけて帯状に位置する東面の 2 つに便宜上分けることができる。本平坦面からは弥生時代の遺構としてテラス状遺構 2 か所（SX6・10）・土坑 1 基（SK5）が，山城の遺構として第 2 平坦面が確認された。西面の標高は約 116.5m，長さ 15 m幅 6 mで西に向けて緩やかに傾斜する。土層観察によると，弥生時代の遺構面（SX6）は現状の平坦面から約 1 m西に地山を削り形成されており，弥生時代には上段の平坦面 1 が現状より西へ広がっていたことが窺える。その後，弥生時代の遺構面上に 0.4 ～ 1 m程土を盛り（第 6・81 図赤ライン），上方斜面（平坦面 1）側を削り込んで平坦面を拡張し，山城の遺構面（第 2 平坦面）が形成されている。一方，東面は西面の南東端で一旦くびれた後東に向けて広がる帯状の面で，上段との比高は 0.6 ～ 1m である。標高は 116.5 ～ 118 m，幅 2 ～ 4 mで尾根元から南に向けて緩やかに傾斜する。土層観察によると東面は山城面により地山まで削平されており，山城構築時に造成されたことが窺える。このため弥生時代には東面は無く，SX10 は上段の平坦面 1 に位置していたことが窺える。なお，下段の SX11 の上面付近は約 1 mの盛り土で山城の遺構面が造られている。以上から，平坦面 2 は弥生時代は平坦面 1 と同一の面で，山城構築時に基本地形が形成された平坦面と考えられる。

平坦面 3 は平坦面 2 の東面を取り巻いて位置し，上段との比高は約 1 mである。南へと延びる尾根はこの平坦面の南端付近で南東へと角度を変える。平坦面の南部は幅約 7 mの比較的広い面をもち，東に向けて一旦幅約 4 mに狭まった後やがて幅約 1 m程度の細い帯状となる。本平坦面からは弥生時代の遺構として竪穴住居跡 2 軒（SH9・10）・テラス状遺構 5 か所（SX1 ～ 4・11）及び土坑 2 基（SK3・4）が，山城の遺構として第 3 平坦面が確認された。土層観察によると，弥生時代の遺構面は SX1 ～ 3 が位置する上段と SH9･10 や SK4 が位置する下段の 2 段に分かれるが，

土層観察と竪穴住居跡等の遺構の掘り込みの状況から，弥生時代には上段のレベルで広がる一連の面として存在しており，山城面により削平され２段に分かれたことが窺える。山城面はSX1 ～ 3の東側を掘り込んで，地山面上に約10cm程度の整地土を盛り遺構面が形成される。以上から，平坦面３は弥生時代は斜面で，山城構築時に基本地形が形成された平坦面と考えられる。

平坦面４は平坦面３の南東側に位置し，上段との比高は約１ｍである。標高は113 ～ 114 m，長さ約30 m幅1.5 ～ 2.6 ｍで，南に向けて緩やかに傾斜する。本平坦面からは弥生時代の遺構として竪穴住居跡１軒（SH11）が，山城の遺構として第４平坦面が確認された。土層観察によると，山城面が上段側を削平し，下段側に土を盛ることで形成されていることから，山城構築時に造成されたことが窺える。ただし，SH11の残存状況と地形観察から，弥生時代のSH11が存在する時期には，上段の平坦面２・３から下段の平坦面５の南端部に向かって緩やかに下る地形で，その後下段のSX5が造られた時期にSH11の南部が下段のSX5により削平されたものと想定できる。以上から，平坦面４は弥生時代は斜面で，山城構築時に基本地形が形成された平坦面と考えられる。

平坦面５は平坦面４の南側に位置し，上段との比高は約1.4 ｍである。標高は約111m，長さ約12m 幅約14 ｍで，南に向けて緩やかに傾斜する。平坦面の埋土は上段側を除き20cm前後と全体的に薄く，近年まで使用された痕跡が見られるなど，遺存状態はよくない。本平坦面からは弥生時代の遺構として竪穴住居跡１軒（SH12）・テラス状遺構（SX5）・土坑４基（SK7 ～ 10）が，山城の遺構として第６平坦面が確認された。土層観察によると，弥生時代の遺構面は上段側を削平して形成されており，上段側から約２ｍはSX5の埋土として自然堆積した土を削平して山城の第４平坦面が造られている。これより南側は地山が弥生時代と山城の第６平坦面として共通する。以上から，平坦面５は弥生時代に基本地形が形成された平坦面と考えられる。なお，本平坦面の西側は後世の土取りにより大きく崩落している。

平坦面６は平坦面５の南東側に位置する調査区内最大の平坦面で，上段との比高は約1.6 m，南の調査範囲外の平坦面との比高は約10 ｍである。標高は104 ～ 109 m，長さ約28 m幅13 ～ 17 ｍで，南東に向けて緩やかに傾斜する。本平坦面は近年まで畑として使用され，電柱が立つなどし，特に南半側の地表付近の遺存状態は悪い。本平坦面からは，弥生時代の遺構として竪穴住居跡２軒（SH13・14）・テラス状遺構５か所（SX13 ～ 17）・土壙墓15基（ST1 ～ 15），古墳１基，山城の遺構として第９平坦面，近世墓２基（ST22・23）が確認された。土層観察によると，弥生時代の遺構面はSH13やSX13・14の位置する上段と，SH14やSX15の位置する下段の２段に分かれていたことが窺える。古墳は上段の先端部を削り込んで造られていることから，自然地形を利用したものと考えられ，上段はさらに南へ広がっていたことが想定できる。また，ST4 ～ 8付近は埋土が浅く遺構の上面が削平されていることから，弥生時代にはSX13・14の平坦面と同レベル程度の高さがST4 ～ 8付近まで続いていたことが想定できる。山城の遺構面は，近世墓（ST22・23）の位置する付近は平坦面５の南端部の斜面を削り込んで平坦面を拡張し，これより南は弥生時代の遺構面に盛り土をして一連の平坦面を形成している。以上から，平坦面６は弥生時代は緩やかな斜面で，山城構築時に基本地形が形成された平坦面と考えられる。

平坦面７は尾根の西斜面，平坦面２の西側に位置し，平坦面２との比高は約2.2 ｍである。標

高は約 113.8 m，長さ約 20 m幅 1 ～ 2m の帯状を呈する。本平坦面からは弥生時代の遺構としてテラス状遺構 1 基（SX7）が，山城の遺構として第 5 平坦面が確認された。土層観察から，弥生時代の遺構面（SX7）は現状の平坦面から約 0.8 m西に地山を削り形成されている。その後 SX7 に自然堆積した面をもとに，上方斜面を削り込んで平坦面を拡張し，山城の遺構面が形成されている。以上から，平坦面 7 は弥生時代に基本地形が形成された平坦面と考えられる。

平坦面 8 は尾根の西斜面，平坦面 7 の南西に位置し，平坦面 7 との比高は約 2.8 mである。標高は約 110.8 m，長さ約 26 m幅 1.5 ～ 2 mの帯状を呈する。本平坦面からは山城の遺構として第 7 平坦面が確認された。土層観察によると，弥生時代には平坦面は存在せず，山城構築時に地山を削平し造成したことが窺える。以上から，平坦面 8 は弥生時代は斜面で，山城構築時に基本地形が形成された平坦面と考えられる。

平坦面 9 は西側斜面の最下部，平坦面 8 の南西に位置し，平坦面 8 との比高差は約 1.2 mである。標高は約 109 m，長さ約 10 m幅約 4 mの比較的広い面をもつ。本平坦面からは弥生時代の遺構としてテラス状遺構 2 基（SX8・9）・土坑 1 基（SK6）が，山城の遺構として第 8 平坦面が確認された。土層観察によると，弥生時代の遺構面は地山を削りだして形成されており，その後 SX8・9 に自然堆積して縮小した平坦面をもとに，山城の遺構面（第 8 平坦面）が形成されている。以上から，平坦面 2 は弥生時代に基本地形が形成された平坦面と考えられる。なお，本平坦面の南側は後世の土取りにより大きく崩落している。

平坦面 10 は調査区の北端，平坦面 1 の北に接して位置する。標高は約 117 m，幅約 16 mで平坦面の大部分は調査区外北に広がる。本平坦面からは弥生時代の遺構として竪穴住居跡 3 軒（SH6 ～ 8）・テラス状遺構（SX18）・土坑 1 基（SK1）を，山城の遺構として第 10・11 平坦面が確認された。土層観察及び遺構の配置状況から，弥生時代には SH6 ～ 8 の位置する部分は，本来は SH1 ～ 5 の位置する平坦面 1 と一連の面であったことが窺え，SH6 ～ 8 の位置する所を削平し盛り土をすることで山城の遺構面が形成されている。以上から，平坦面 10 は弥生時代は平坦面 1 と同一の面で，山城構築時に基本地形が形成された平坦面と考えられる。

東側斜面は急峻な斜面となっており，調査区北東端では調査前から帯状の平坦面が複数確認できたが，土層観察の結果，後世のもので山城に伴うものではなかった。山城跡の面は B － B’ 土層 12・16 層上面（第 5 図）に形成されている。また，東側斜面は部分的な崩落や地滑りが所々で発生しており，弥生時代の面については明らかにできなかった。

以上のように，本遺跡の弥生時代～古墳時代の遺構は，一見個々の平坦面に立地するようにみえるが，山城の造成や後世の地形改変によるものがあり，本来は同一の平坦面の遺構（群）として捉えるべきものである。このことから集落に関する遺構は，土層及び地形から想定したそれぞれの平坦面に属する遺構を，Ⅰ群（平坦面 1 ・ 2 東・10），Ⅱ群（平坦面 2 西・3），Ⅲ群（平坦面 4・5），Ⅳ群（平坦面 5・9），Ⅴ群（平坦面 6 北）・Ⅶ群（平坦面 6 南）の 7 群に分けることができる。（第 7 図右上）。以下，弥生時代～古墳時代の遺構の詳細については，各群に基づき報告を行う。

3．弥生時代～古墳時代

(1) 遺構

① Ⅰ群の遺構

Ⅰ群は調査前の平坦面 1・2（東）・10 に位置する遺構の一群である。主要な平坦面は SH1 ～ 5 が位置する平坦面 1 である。SX10 が位置する平坦面 2（東）は山城の築造により形成された面であり，SH6 ～ 8 が位置する場所も山城により形成されていることから，もともとは平坦面 1 と同一の面であったと考えられる。また，重複する SH2 ～ 4 のうち，古い段階の住居である SH2・3 の現壁高は 10 ～ 20cm と浅いことから，古い段階には遺構掘削面が高く，SX18 が位置する平坦面 10 から続く緩やかに下る地形であったことが想定できる。これらのことから，SH1 ～ 8，SX10・18，SK1・2 は一連の群として捉える。

○ SH1（第 8・9 図）

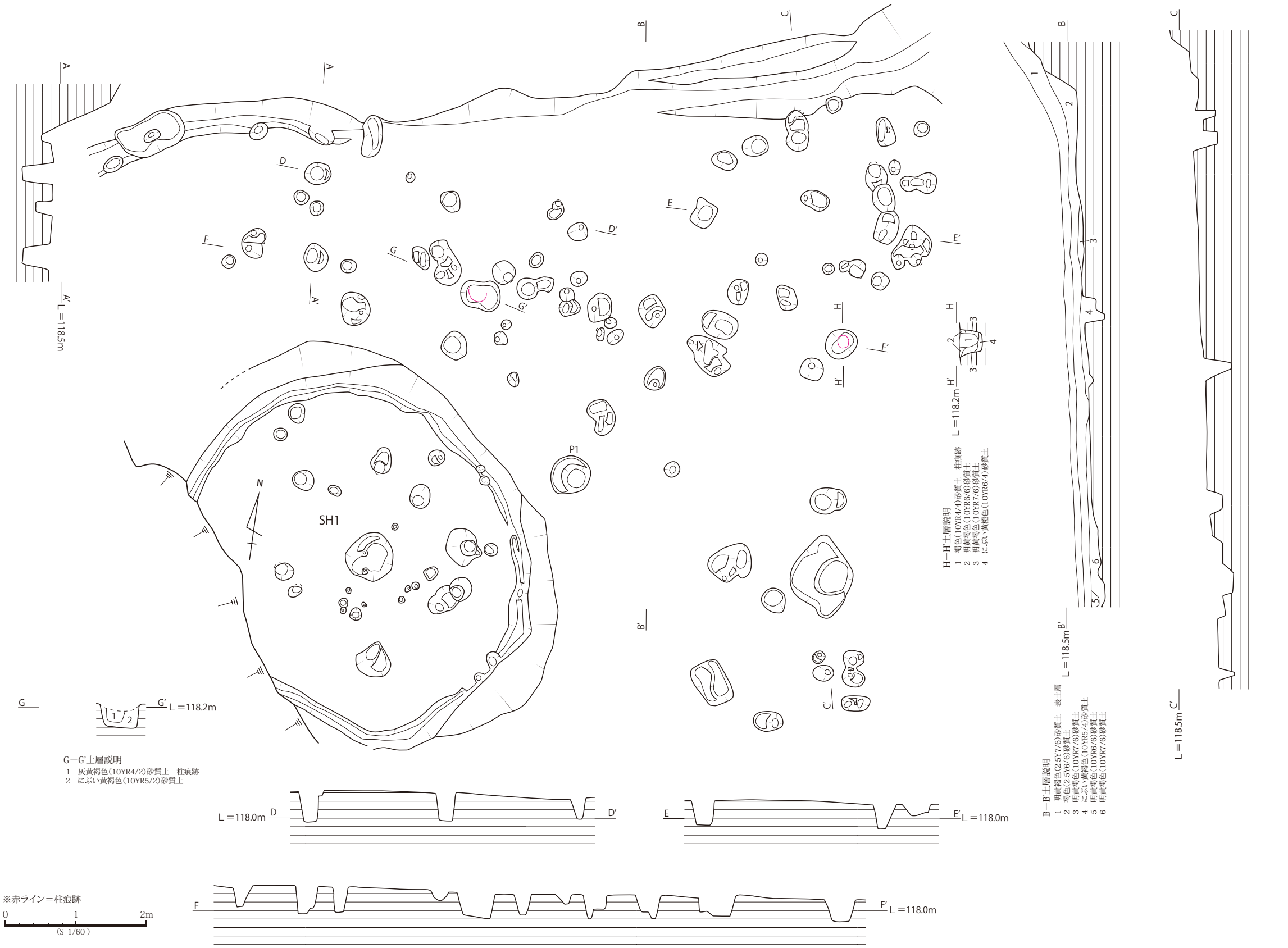
SH1 は調査区北端の西側，標高 118m 付近に位置する竪穴住居跡で，西側は斜面により流失している。残存部から推測できる平面形状は長円形で，床面の規模は北西－南東 4.7m，北東－南西 4.1m である。床面標高は約 117.4m で，残存する壁高は最大 82cm である。壁溝は流失した西壁側以外はほぼ全周しており，幅 10 ～ 20cm，深さは 5 ～ 12cm である。床面の南西には壁溝を挟んで，床面からの高さ 13 ～ 18cm の段状の高まりを確認した。ベッド状遺構と思われるが，住居全体の形状から推測すると西へ大きく広がるものとは考えられず，物置的な役割や入口部の階段等の可能性もある。

主柱穴は位置とその規模から P1 ～ P4 の 4 本もしくは P5 を含む 5 本柱が考えられる。各柱穴と壁面からの距離は 1 ～ 1.2m 離れているが，4 本柱とした場合 P1 － P4 間と北西壁側は約 1.8m と間隔が大きいことから 5 本柱の可能性が高い。各柱穴の規模は，P1 は底面形状が長径 18cm 短径 14cm の長円形で，底面標高は 116.90m である。P2 は底面形状が直径 14cm の円形で，底面標高は 116.76m である。P3 は底面形状が長径 26cm 短径 14cm の長円形で，底面標高は 116.83m である。P4 は底面形状が直径 17cm の円形で，底面標高は 116.73m である。P5 は底面形状が直径 16cm の円形で，底面標高は 116.80m である。柱間距離は P1 － P2 間が 1.7m，P2 － P3 間が 2.1m，P3 － P4 間が 1.7m，P4 － P5 間が 1.3m，P5 － P1 間が 1.1m である。

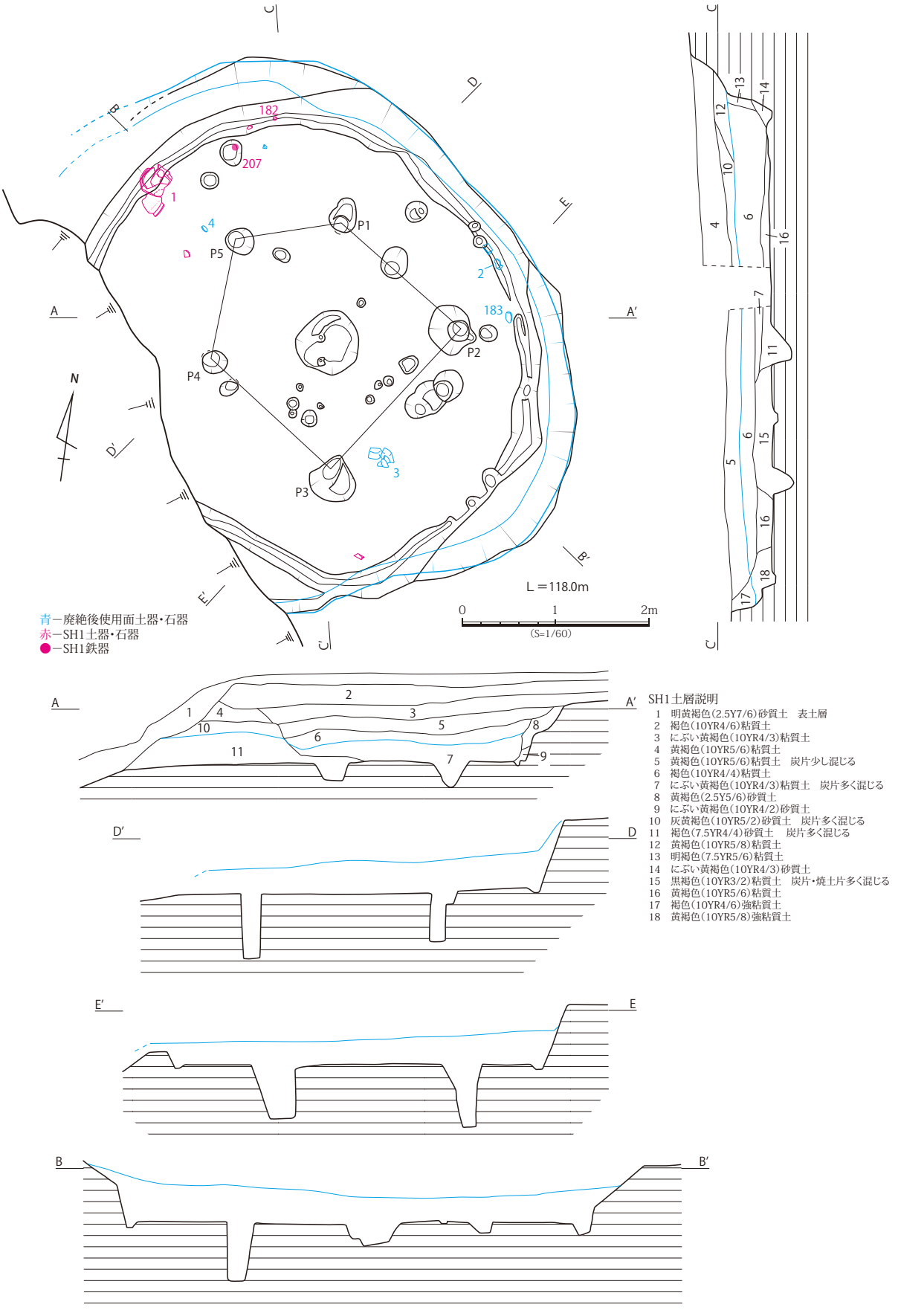
床面の中央には直径約 70cm 深さ約 23cm の掘り込みを確認した。その形状や床面での位置，埋土に炭片を多く含むことから炉跡と考えられる。

本住居跡からは弥生土器（1）・磨石（182）及びヤリガンナ（207）が出土している。本遺構の時期は出土土器の形態からⅡ－ 1 期[1)]に属すると考えられる。

また，本住居跡の床面から約 25 ～ 30cm 上の埋土中に堅緻な面を確認した。面には柱穴や溝等は確認できないが，面上に土器・石器が位置すること，主に面の中央付近に炭化物片・焼土片が出土し火が使用されたと推定できることから，住居の廃絶後に窪地となっていた場所を一時的に利用



第 8 図　トンガ坊城遺跡 SH1 周辺実測図（S=1/60）



第９図　トンガ坊城遺跡 SH1 実測図（S=1/60）

したものと考えられる。壁面はSH1とほぼ共有するが西壁側は流失しており，東壁はSH1壁面の内側に堅緻な壁面をもつ。面の規模は北西－南東約5.4m，北東－南西4.3 m以上である。面の標高は約117.75mで，残存する壁高は最大35cmである。面上からは土器（2～4）及び磨石（183）が，埋土中から土器（5）が出土している。出土した土器は，その形態からⅡ－3期に属すると考えられる。

なお，SH1の東側には多数の柱穴と考えられるピットを確認した。集落の時期に属するものと，山城の時期に属するものが合わせて存在するものと考えられるが，それぞれの時期の想定や柱穴などの組み合わせを想定することはできなかった。このうち第8図P1の埋土中からは鼓形器台（144・145）が2点出土した。明らかに別個体のものが同一ピット中から出土したことから，建物の廃棄などに係る何らかの祭祀が行われた可能性がある。

○ SH2・SH3・SH4・SK2（第10・11図）

SH2は第1平坦面の中央付近，SH1の南約2mに位置する竪穴住居跡である。東半分をSH4に，南側をSK2により削平されている。床面までの埋土は浅く，遺存状態は悪い。床面は南北で最大5.1m残存し，床面標高は約117.7mで，残存する壁高は最大22cmである。

本住居跡の平面形状を残存する床面の形状から推定すると，一辺2.5m程の多角形と考えられる。床面からは柱穴と考えられるP1を確認したが，対応する他の柱穴は確認できなかった。P1の規模は底面形状が直径18cmの円形で，底面標高は116.71mである。

SH2埋土中から弥生土器の破片が出土したが，いずれも細片でその時期は不明である。

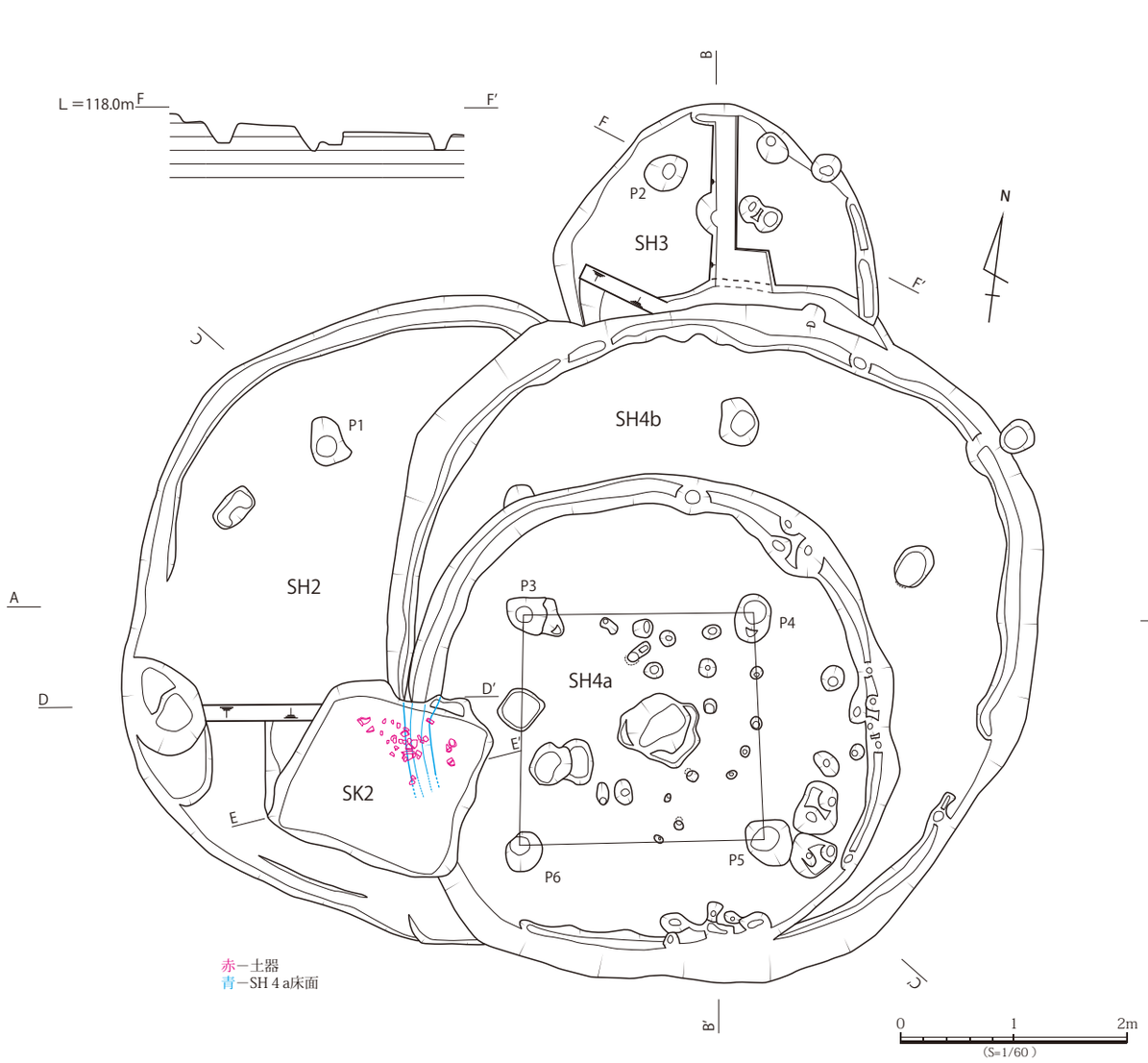
SH3はSH2の北東に隣接する竪穴住居跡で，南側をSH4bに削平されている。床面までの埋土は浅く，遺存状態は悪い。床面の規模は東西2.5m，床面標高は約117.8mで，残存する壁高は最大11cmである。

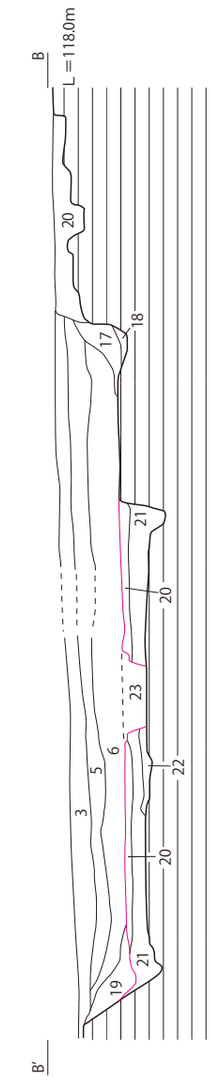
本住居跡の平面形状を残存する床面の形状から推定すると，一辺1.5m程の六角形と考えられる。床面からは主柱穴と考えられるP2を確認した。規模は底面形状が長径13cm短径10cmの長円形で，底面標高は117.69mである。床面にP2以外の主柱穴に適した柱穴がないことから，削平された南側床面にもう一つの柱穴をもつ，二本柱構造と想定できる。なお，本遺構に伴う遺物は出土していない。

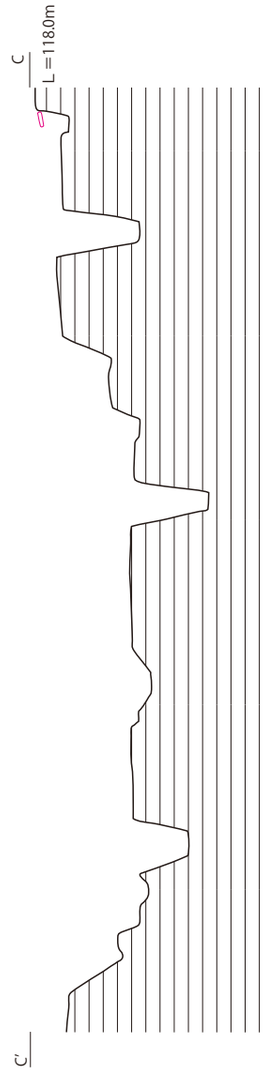
SH4はSH2の東側及びSH3の南側を削平して造られている竪穴住居跡である。本住居跡は土層観察により，1回の拡張もしくは建て替えを行っている。以下，拡張前の住居をSH4a，拡張後をSH4bと呼称して述べていくこととする。

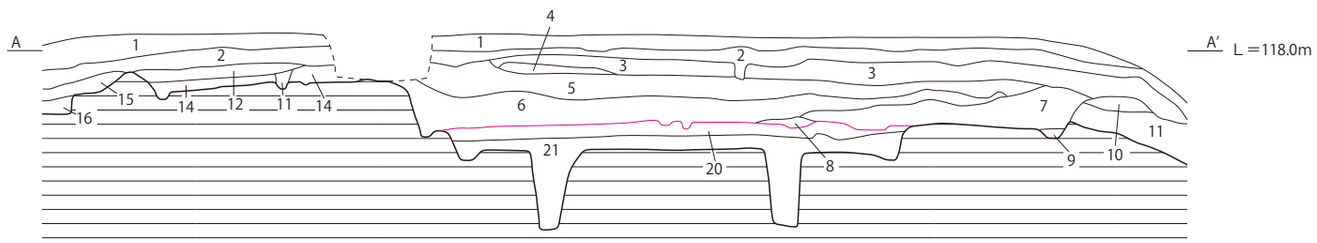
SH4aは床面の規模が直径3.8mの円形の住居である。床面標高は約117.16mで，残存する壁高は最大60cmである。南西部はSK2上に構築され床面は明確ではないが，壁溝はほぼ全周しており，幅10～20cm，深さは4～10cmである。

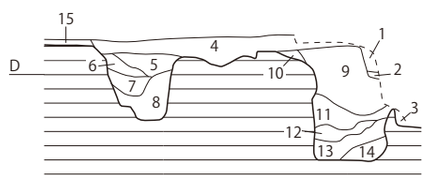
主柱穴はその位置と規模から，P3～P6の4本と考えられる。各柱穴の規模は，P3は底面形状

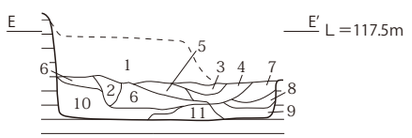












A－A′, B－B′ 土層説明

1 明黄褐色(2.5Y7/6)砂質土　表土層
2 明黄褐色(10YR6/6)砂質土
3 褐灰色(10YR4/1)砂質土
4 明黄褐色(10YR6/8)砂質土
5 明黄褐色(10YR7/6)くすむ砂質土
6 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土
7 にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
8 褐灰色(10YR4/1)砂質土　炭片わずかに混じる
9 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
10 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土
11 灰黄褐色(10YR7/8)砂質土
12 褐灰色(10YR4/1)砂質土
13 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土
14 にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土
15 明褐色(10YR5/6)くすむ粘質土
16 明褐色(10YR5/6)くすむ粘質土　15層より明
17 黄褐色(10YR5/6)くすむ砂質土
18 黄橙色(10YR8/6)砂質土
19 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土　炭片混じる
20 明黄褐色(10YR7/6)砂質土　貼床土
21 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
22 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土　炭片多く含む　炉埋土
23 E－E′土層参照　炉埋土
※赤ライン＝SH４b床面

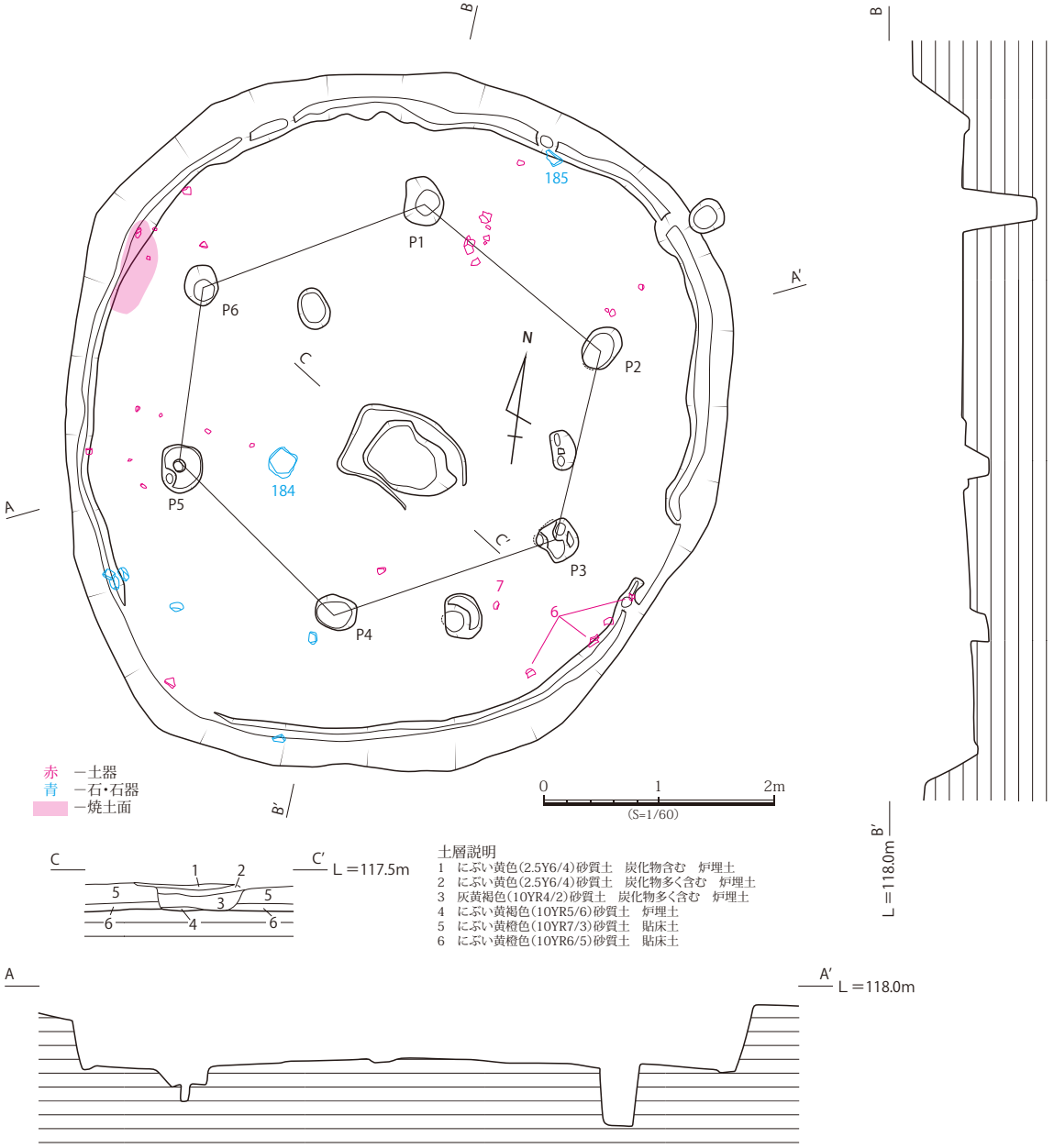
D－D′土層説明

1 にぶい黄橙色(10YR5/3)砂質土
2 灰黄褐色(10YR6/2)砂質土
3 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
4 にぶい黄橙色(10YR7/4)砂質土　炭片少量混じる
5 にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土
6 灰黄褐色(10YR6/2)砂質土
7 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土　炭片少量混じる
8 にぶい黄褐色(10YR6/3)砂質土
9 にぶい黄橙色(10YR7/2)砂質土　炭片少量混じる
10 にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土
11 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土　炭片多く混じる
12 にぶい黄褐色(10YR6/3)砂質土
13 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土　炭片多く混じる
14 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土

E－E′土層説明

1 にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土に、にぶい橙色(7.5YR6/4)が1cm幅で入るクロスラミナ層　炭片混じる
2 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土 1cm角の炭片5％混じる
3 明黄褐色(10YR7/6)砂質土
4 にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土　1cm角の炭片15％混じる
5 にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土
6 浅黄橙色(10YR8/3)花崗岩パイラン土　固くしまる　炭片・土器片わずかに混じる
7 浅黄橙色(10YR8/3)花崗岩パイラン土
8 浅黄橙色(10YR8/3)花崗岩パイラン土　固くしまる　炭片わずかに混じる
9 褐灰色(10YR4/1)砂質土　炭片多く混じる
10 灰黄褐色(10Y5/2)砂質土
11 褐灰色(10Y6/2)砂土　3mm角程の細かな炭片7％混じる

第 10 図　トンガ坊城遺跡 SH2・SH3・SH4・SK2 実測図（S=1/60）



第 11 図　トンガ坊城遺跡 SH4b 実測図（S=1/60）

が直径 14cm の円形で，底面標高は 116.48m である。P4 は底面形状が直径 20cm の歪な円形で，底面標高は 116.50m である。P5 は底面形状が長径 24cm 短径 19cm の長円形で，底面標高は 116.66m である。P6 は底面形状が直径 17cm の歪な円形で，底面標高は 116.61m である。柱間距離は P3 ― P4，P4 ― P5 間が 2.0m，P5 ― P6 間が 2.2m，P6 ― P3 間が 2.1m である。

床面の中央には，東西 67cm 南北 55cm 深さ約 16cm の掘り込みを確認した。その形状や床面での位置，埋土に炭片を多く含むことから炉跡と考えられる。

SH4a 埋土中からは土器片が出土したが，いずれも細片でその時期は不明である。

SH4b は SH4a の約 20cm 上に床面を構築しており，先行する SH4a の床面と重なる部分は貼床により床面を構築している。床面の規模は東西 5.1m 南北 5.2m の歪な円形の住居である。床面標高は約 117.38m で，南西壁は SH4a と共有しており，残存する壁高は最大 56cm である。壁溝は

南西部を除きほぼ全周しており，幅 10 ～ 24cm，深さは 2 ～ 8cm である。

主柱穴はその位置と規模から，P1 ～ P6 の 6 本と考えられる。各柱穴の規模は，P1 は底面形状が直径 20cm の円形で，底面標高は 116.73m である。P2 は底面形状が長径 34cm 短径 21cm の長円形で，底面標高は 116.82m である。P3 は底面形状が長径 27cm 短径 23cm の長円形で，底面標高は 117.05m である。P4 は底面形状が長径 29cm 短径 23cm の歪な円形で，底面標高は 117.15m である。P5 は底面形状が直径 34cm の円形で，底面標高は 117.14m である。P6 は底面形状が直径 17cm の円形で，底面標高は 116.79m である。柱間距離は P1 － P2，P4 － P5 間が 1.9m，P2 － P3，P5 － P6 間が 2.2m，P3 － P4 間が 2.0m，P6 － P1 間が 2.1m である。

床面の中央には，東西 105cm 南北 72cm，床面からの深さ約 5cm の長方形の掘り込み内に，東西 79cm 南北 49cm，上段からの深さ 19cm の段を有する掘り込みを確認した。その形状や床面での位置，埋土に炭片を多く含むことから炉跡と考えられる。

SH4b からは弥生土器（6・7）及び石器（184・185）が，埋土中から土器（8・9）が出土している。その形態からⅢ－ 1 期に属すると考えられる。

SK2 は SH2 の床面南部及び SH4a の南西部に位置する土坑である。平面形状は方形で，底面の規模は一辺約 1.3m，底面標高は 116.77m である。本遺構の埋土中から弥生土器（130）が出土した。土層観察によると，E － E’ 土層の 6･8 層が堅く締まり，主にその上面から出土することから，ある程度廃棄から時期をおいて埋土が堆積した窪地に廃棄したものと思われる。遺構の年代を決定づけるものではないが，出土した土器はその形態からⅡ－ 3 期に属すると考えられる。

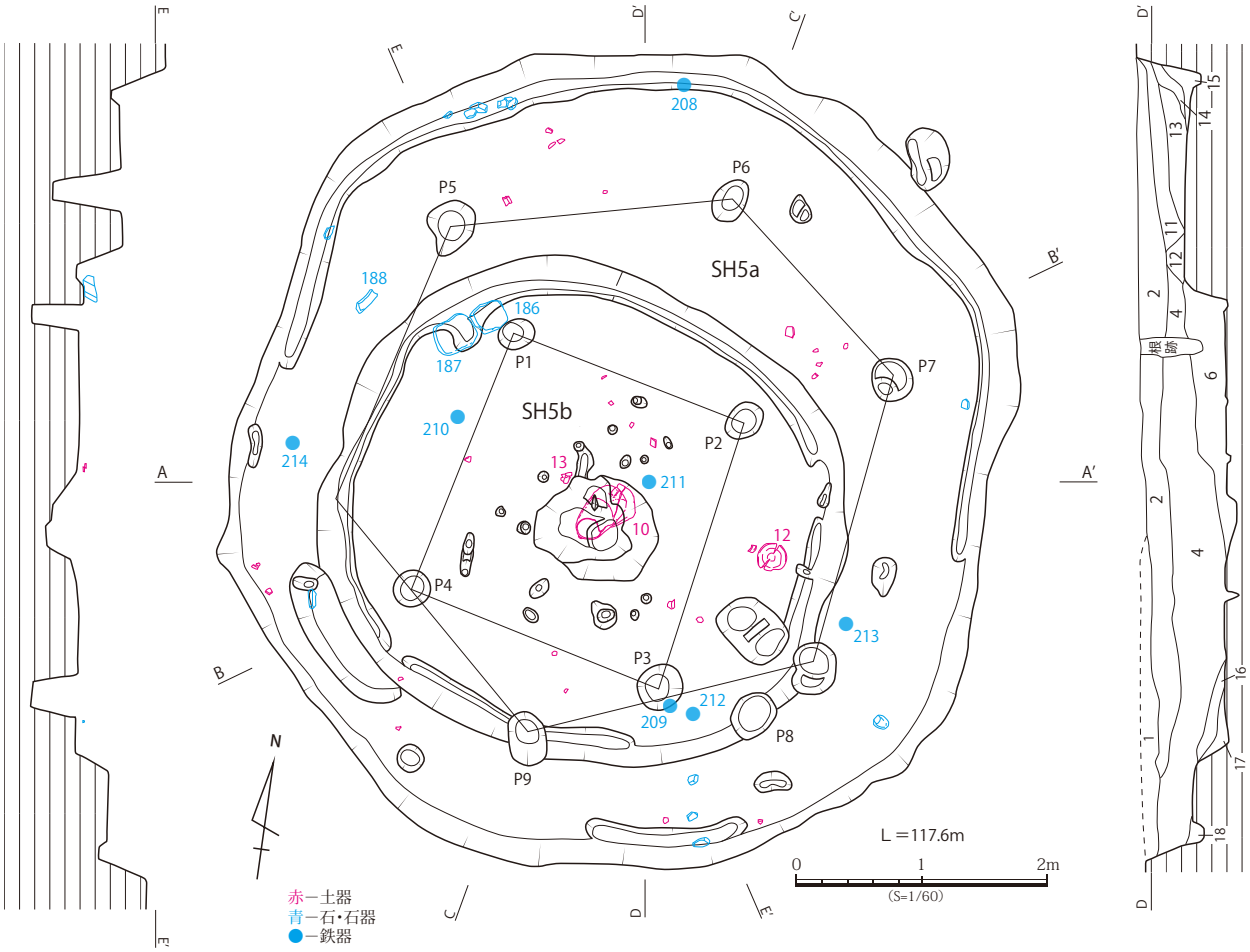
ここで，それぞれの遺構の先後関係についてみると，B － B’ 及び D － D’ 土層の観察と遺構の切り合い関係，出土土器の時期から，SH2 → SK2 → SH4a → SH4b，SH3 → SH4a → SH4b の順に営まれたことが想定できる。なお，SH2・SK2 と SH3 の先後関係は不明である。

○ SH5（第 12・13 図）

SH5 は SH2 の南約 1m に位置する竪穴住居跡である。本住居跡は六角形の床面の内側に，もう一段円形に掘り込んだ床面を確認した。便宜上，外側床面を SH5a，内側床面を SH5b と呼称し述べていくこととする。

SH5a は床面の規模が東西 5.7m 南北 6.0m で，一辺約 3m の六角形である。床面標高は約 117.25m で，残存する壁高は最大 54cm である。壁溝は床面の北半分及び南壁の一部に残存しており，幅 10 ～ 16cm，深さは 2 ～ 6cm である。

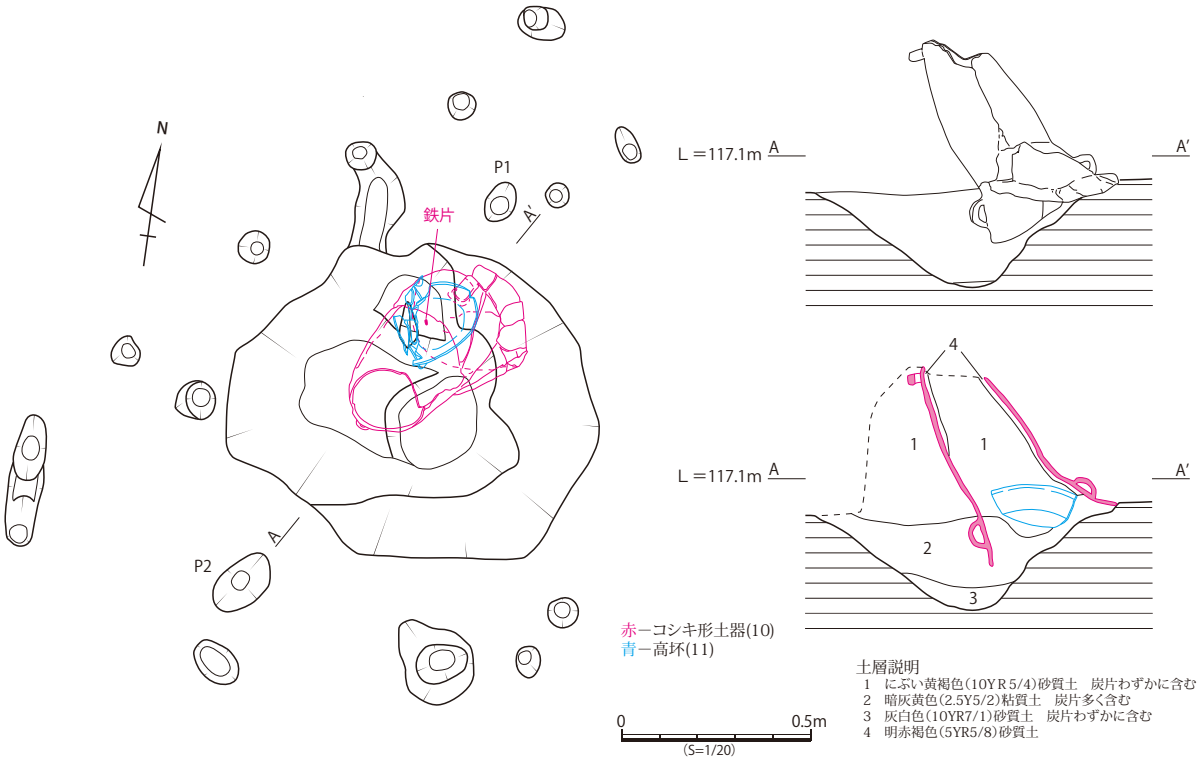
主柱穴はその位置と規模から，P5 ～ P9 及び南西側の想定位置（SH5b 掘り方内）の 6 本柱構造と考えられる。各柱穴の規模は，P5 は底面形状が長径 21cm 短径 24cm の楕円形で，底面標高は 116.79m である。P6 は底面形状が長径 21cm 短径 14cm の長円形で，底面標高は 116.70m である。P7 は底面形状が直径 25cm の円形で，底面標高は 116.64m である。P8 は底面形状が長径 24cm 短径 20cm の楕円形で，底面標高は 116.70m である。P9 は底面形状が直径 19cm の円形で，底



土層説明

1　黄褐色(10Y5/6)砂質土　表土層
2　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
3　明黄褐色(10YR6/6)砂質土
4　黄褐色(2.5Y5/3)砂質土
5　明黄褐色(2.5Y6/6)砂質土
6　オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質土　炭片多く含む
7　暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土
8　明黄褐色(10YR7/6)砂質土
9　にぶい黄褐色(10Y4/3)砂質土
10　にぶい黄褐色(10Y5/4)砂質土
11　黄褐色(2.5Y5/4)砂質土
12　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土　炭片多く含む
13　にぶい黄色(2.5Y6/4)砂質土
14　明黄褐色(2.5Y6/6)砂質土
15　暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土
16　黄褐色(2.5Y5/4)砂質土
17　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
18　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
19　にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト

第 12 図　トンガ坊城遺跡 SH5 実測図（S=1/60）



第 13 図　SH5 コシキ形土器出土状況実測図（S=1/20）

面標高は 116.58m である。柱間距離は P5 － P6 間が 2.2m，P6 － P7 間が 1.9m，P7 － P8・P8 － P9 間が約 2.4m である。

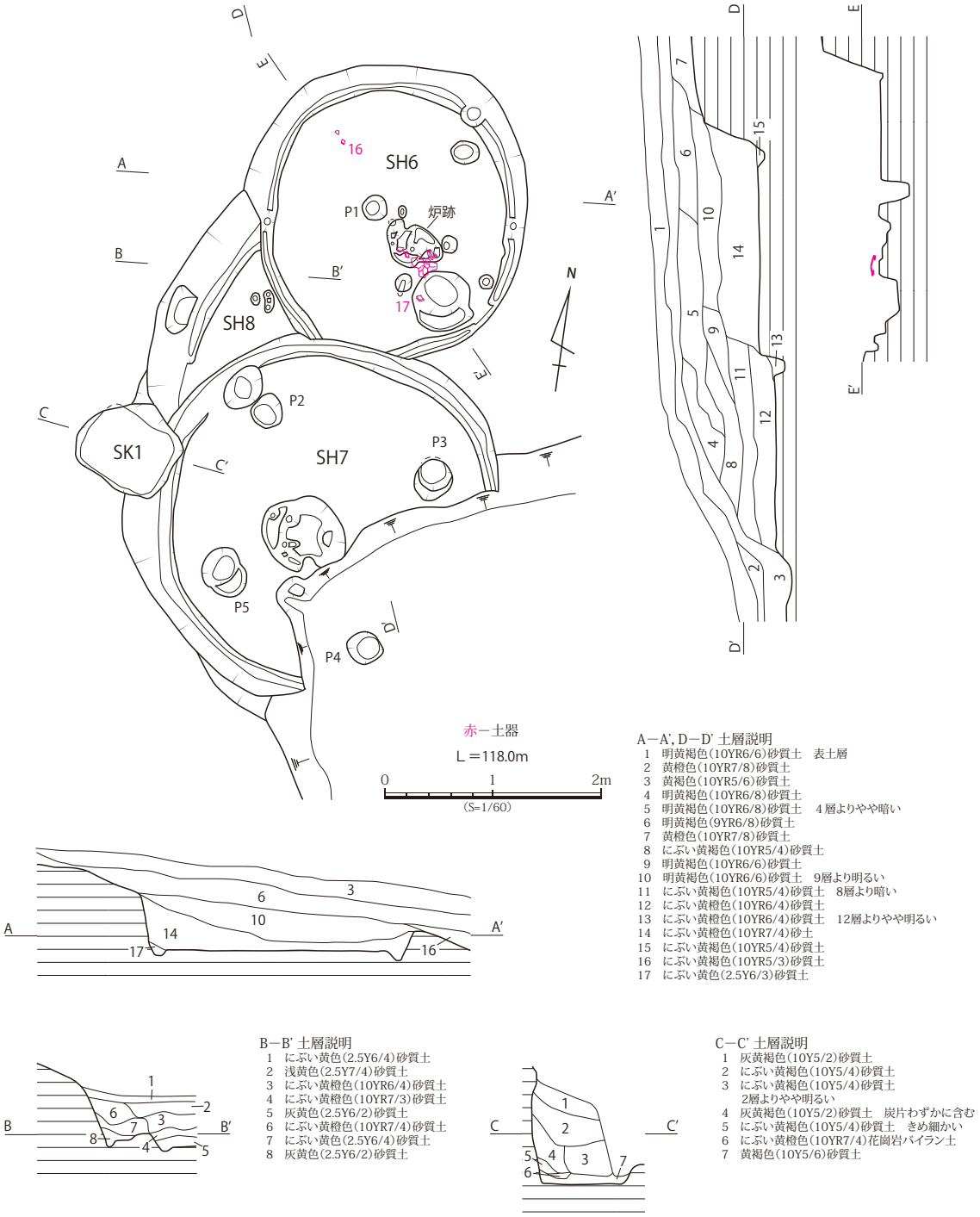
SH5b は床面の規模が東西 3.6m 南北 3.3m の円形である。床面標高は約 117.00m で，SH5a 床面までの壁高は最大 33cm である。壁溝は南東部を除きほぼ全周しており，幅 9 ～ 16cm，残存する深さは 3 ～ 6cm である。

主柱穴はその位置と規模から，P1 ～ P4 の 4 本柱構造と考えられる。各柱穴の規模は，P1 は底面形状が長径 16cm 短径 14cm の楕円形で，底面標高は 116.52m である。P2 は底面形状が長径 20cm 短径 16cm の楕円形で，底面標高は 116.70m である。P3 は底面形状が直径 19cm の円形で，底面標高は 116.60m である。P4 は底面形状が長径 20cm 短径 16cm の楕円形で，底面標高は 116.51m である。柱間距離は P1 － P2 間が 2.5m，P2 － P3 間が 2.8m，P3 － P4 間が 2.6m，P4 － P1 間が約 2.7m である。

床面の中央には東西 90cm 南北 85cm 深さ約 19cm の掘り込みを確認した。その形状や床面での位置，埋土に炭片を多く含むことから炉跡と考えられる。また，炉跡の東側を除いた周囲で底面径 3 ～ 7cm，深さ 1 ～ 15cm の小ピット群を確認した。炉に伴う施設と考えられる。

SH5b のほぼ中央部，炉跡の上部からコシキ形土器（10）が広口部を下にして，ほぼ直立した状態で出土した。コシキ型土器の下には高坏（11）が重なって出土した。高坏の坏内から鉄片が出土したが，細片のため器種は不明である。本住居跡からは前述したもののほかに，弥生土器（12・13）・台石（186・187）及び鉄器（208 ～ 214）が，埋土中から土器（14・15）及び砥石（188）が出土している。出土した土器はその形態から Ⅲ－ 2 期に属すると考えられる。

さて，SH5a・5b の先後関係であるが，土層断面の観察から SH5a → SH5b の順に営まれたこと

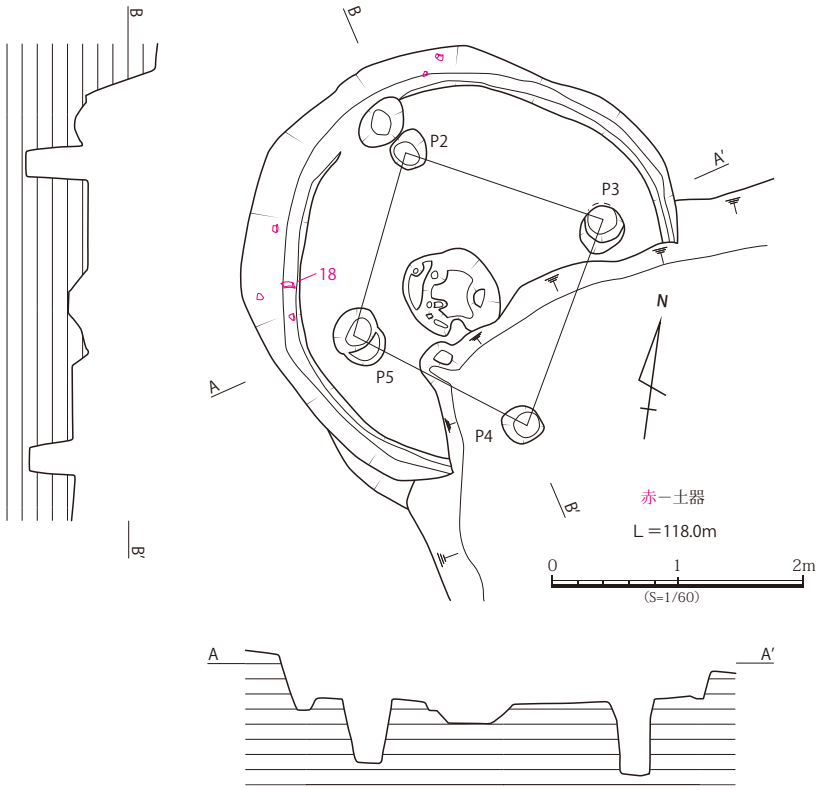


第 14 図　トンガ坊城遺跡 SH6・SH7・SH8・SK1 実測図（S=1/60）

が想定できる。

○ SH6・SH7・SH8・SK1（第 14・15 図）

SH6 は調査区北端の東側，標高 118m 付近に位置する竪穴住居跡で，南側を SH7 に削平されている。床面の規模は東西 2.1m 南北 2.3m の円形である。 床面標高は約 117.85m で，残存する壁高は最大 59cm である。壁溝は削平された南壁側以外はほぼ全周しており幅 6 ～ 13cm，深さは 3



第 15 図　トンガ坊城遺跡 SH7 実測図（S=1/60）

～ 5cm である。

主柱穴は位置とその規模及び住居の規模が小規模であることから，P1 の 1 本柱と考えられる。柱穴の規模は，底面形状が直径 13cm の円形で，底面標高は 116.90m である。

P1 の南東側の床面に長径 55cm 短径 40cm 深さ最大 22cm の不整形な掘り込みを確認した。床面での位置，埋土に炭片・焼土を多く含むことから炉跡と考えられる。

SH6 からは弥生土器（16・17）が出土している。また，炉跡上から土器片がまとまって出土しているが依存状態が悪く復元に至らなかった。本遺構の時期は出土土器の形態からⅡ－２－③期に属すると考えられる。

SH7 は SH6 の南端部を切って造られている竪穴住居跡で，南東側を山城の郭面により削平されている。床面の規模は直径約 2.9m の円形である。床面標高は約 117.68m で，残存する壁高は最大 63cm である。壁溝は削平された南東側以外はほぼ全周しており，幅 10 ～ 18cm，深さは 2 ～ 10cm である。

主柱穴はその位置と規模から，P2 ～ P5 の 4 本柱構造と考えられる。各柱穴の規模は，P2 は底面形状が長径 21cm 短径 16cm の楕円形で，底面標高は 117.18m である。P3 は底面形状が直径 24cm の円形で，底面標高は 117.11m である。P4 は底面形状が直径 20cm の円形で，底面標高は 117.22m である。P5 は底面形状が長径 23cm 短径 16cm の楕円形で，底面標高は 117.21m である。柱間距離は P2 － P3 間が 1.6m，P3 － P4 間が 1.7m，P4 － P5・P5 － P2 間が 1.5m である。

床面の中央から東西 90cm 南北 70cm の深さ約 15cm の掘り込みを確認した。その形状や床面

での位置，埋土に炭片を多く含むことから炉跡と考えられる。

SH7 からは弥生土器（18）が出土している。本遺構の時期は出土土器の形態からⅡ－３期に属すると考えられる。

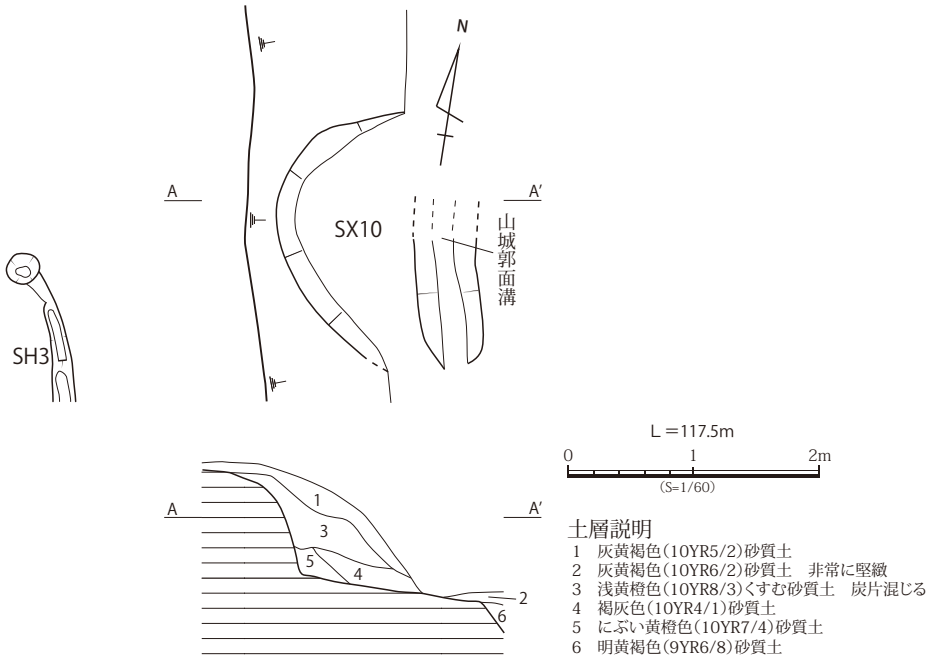
SH8 は SH6 の南西部及び SH7 の北西部に削平され位置する竪穴住居跡で，わずかに床面及び壁面が遺存している。床面標高は 117.96m で，残存する壁高は 58cm である。壁溝は幅 4 ～ 8cm，深さは約 6cm である。なお，本遺構に伴う遺物は出土していない。

SK1 は SH7 の東壁に重複して位置する土坑である。平面形状は長方形で，東側は SH7 に削平されている。底面の規模は長辺 78cm 短辺 62cm，深さは現状で最大 110cm，底面標高は約 117.5m である。本遺構に伴う遺物は出土していなく，その性格などは明らかではないが，形状から貯蔵穴と考えられる。この場合 SH7 及び SH8 の付属施設としては土層観察及びその位置関係から想定しにくい。SK1 と SH6 の位置関係から SK1 は SH6 の付属施設であった可能性がある。

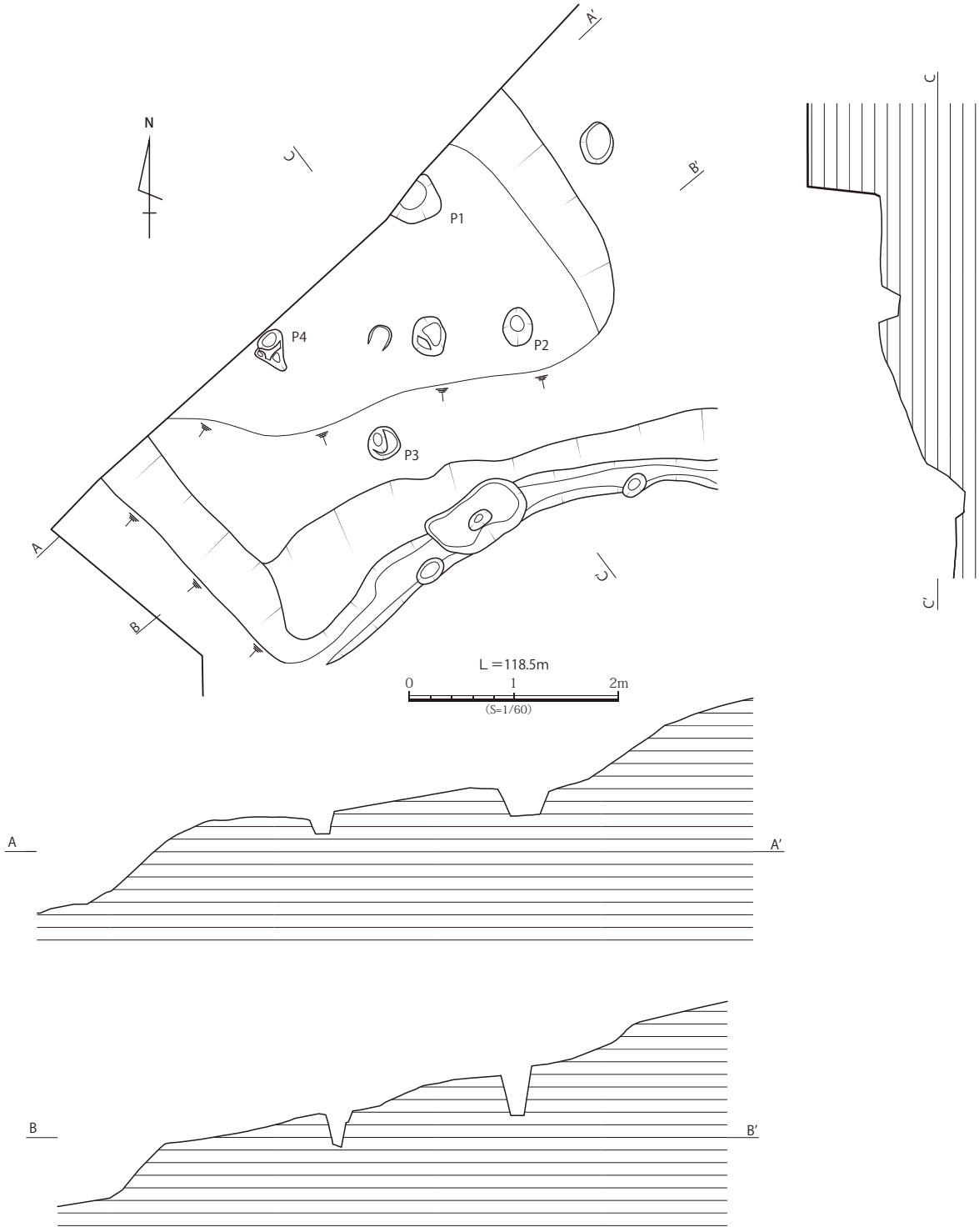
ここで，それぞれの遺構の先後関係についてみると，それぞれの土層断面の観察から，SH8 → SH6 → SH7 の順に営まれたことが想定できる。また，SK1 が SH6 の付属施設である可能性があることから，SH8 → SH6・SK1 → SH7 の順に営まれた可能性がある。

○ SX10（第 16 図）

SX10 は SH3 の東約 2m に位置する。東側の大半を山城構築時に削平されており，西側の壁面の一部と，これに伴う床面がわずかに遺存する。壁面は北東－南西方向に約 100cm，角度を変じて



第 16 図　トンガ坊城遺跡 SX10 実測図（S=1/60）



第 17 図　トンガ坊城遺跡 SX18 実測図（S=1/60）

北西－南東方向に約 160cm の範囲で遺存している。床面標高は約 116.9m で，残存する掘り込みの深さは最大で 63cm である。掘り方が斜面中に位置するため，本来は第 1 平坦面から掘り込まれていたと考えられ，少なくとも掘り込みの深さは 95cm 以上あったと想定できる。

さて，本遺構の性格であるが，その平面形状から，土坑もしくは隅丸方形の竪穴住居跡の隅部の可能性がある。竪穴住居跡の場合は，東側が急峻な斜面であり平坦面があまり確保できないこと，近隣に SH3・6 ～ 8 などの直径 3m 程度の小規模な住居跡が位置することから，SH3・6 ～ 8 と同規模の竪穴住居跡であると想定できる。

○ SX18（第 17 図）

SX18 は調査区の最北端に位置するテラス状遺構である。南側は平坦面により削平され，西側は急斜面のため流失し，東側の壁面と平坦面が残存している。北側は調査範囲外に延びており，遺構全体は確認できなかったが，現地形から北に延びることが推測できる。平坦面の標高は約 119.0m で，残存する掘り込みの深さは約 50cm である。平坦面からは，柱穴と考えられる P1 ～ P4 を確認した。各柱穴の規模は，P1 は底面形状が長径 28cm の円形と推定でき，底面標高は 118.81m である。P2 は底面形状が長径 15cm 短径 13cm の楕円形で，底面標高は 118.68m である。P3 は底面形状が長径 25cm 短径 10cm 底面標高 118.60m の半月状の底面と，長径 12cm 短径 7cm の楕円形で底面標高は 118.41m の 2 段の底面を持つ。P4 は底面形状が長径 15cm 短径 9cm の楕円形で，底面標高は 118.65m である。位置と規模から掘立柱建物などの柱穴と考えられる

なお，本遺構の埋土中からは弥生土器の破片が出土しているが，細片のため図示するに至らなかった。

②Ⅱ群の遺構

Ⅱ群は調査前の平坦面 2（西）・3 に位置する遺構の一群である。平坦面 2（西）の山城の遺構面は，弥生時代の遺構面（SX6）上の自然堆積土と東側の地山を削平して造られており，弥生時代には SX6 の掘り方上面付近まで上段（平坦面 1）が広がっていたことが窺える。また，平坦面 3 の SK3 よりも北側は，山城の遺構面が約 1m 盛り土をして造られていること，SK3 の深さが約 190cm と深いことから，山城による削平はなく弥生時代の状況を残しているものと考えられる。SK3 よりも南側においては，SX2・3 の東側が山城により削平されていること，SH9・10・SK4 の深さが他の遺構に比べ浅く，南西に向けて浅くなっていることから，SH9・10・SK4 が位置する付近の弥生時代の地形は，SX11・3 と同レベルの高さ，すなわち一連の平坦面であったと考えられる。また，SX6 の平坦面の東側と SX3 の平坦面が同レベルにあることから，本来は一連の馬蹄形状地形を呈していたものと考えられ，SH9・10，SX1 ～ 4・11，SK3 ～ 5 は一連の群として捉える。

○ SH9・SH10（第 18 ～ 20 図）

SH9 は調査区のほぼ中央部，標高 114m 付近に位置する竪穴住居跡で，南西側は斜面により流

失している。残存する床面形状から推測すると，床面の規模は直径約 5.5m の円形と考えられる。床面標高は約 114.04m で，残存する壁高は最大 46cm である。壁溝は床面の北側から西側の一部で確認しており，幅 10 ～ 15cm，深さは 1 ～ 5cm である。

主柱穴はその位置と規模から，P1 ～ P5 の 5 本と考えられる。各柱穴の規模は，P1 は底面形状が長径 20cm 短径 15cm の楕円形で，底面標高は 113.53m である。P2 は底面形状が直径 19cm の円形で，底面標高は 113.64m である。P3 は底面形状が直径約 20cm の円形で，底面標高は 113.84m である。P4 は底面形状が長径 27cm 短径 25cm の歪な円形で，底面標高は 113.36m である。P5 は底面形状が長径 23cm 短径 15cm の楕円形で，底面標高は 113.31m である。柱間距離は P1 － P2・P2 － P3 間が 3.0m，P3 － 4 間が 2.2m，P4 － P5 間が 1.9m，P5 － P1 間が 2.7m である。

床面の中央から直径約 90cm 深さ約 17cm の掘り込みを確認した。その形状や床面での位置，埋土に炭片を多く含むことから炉跡と考えられる。

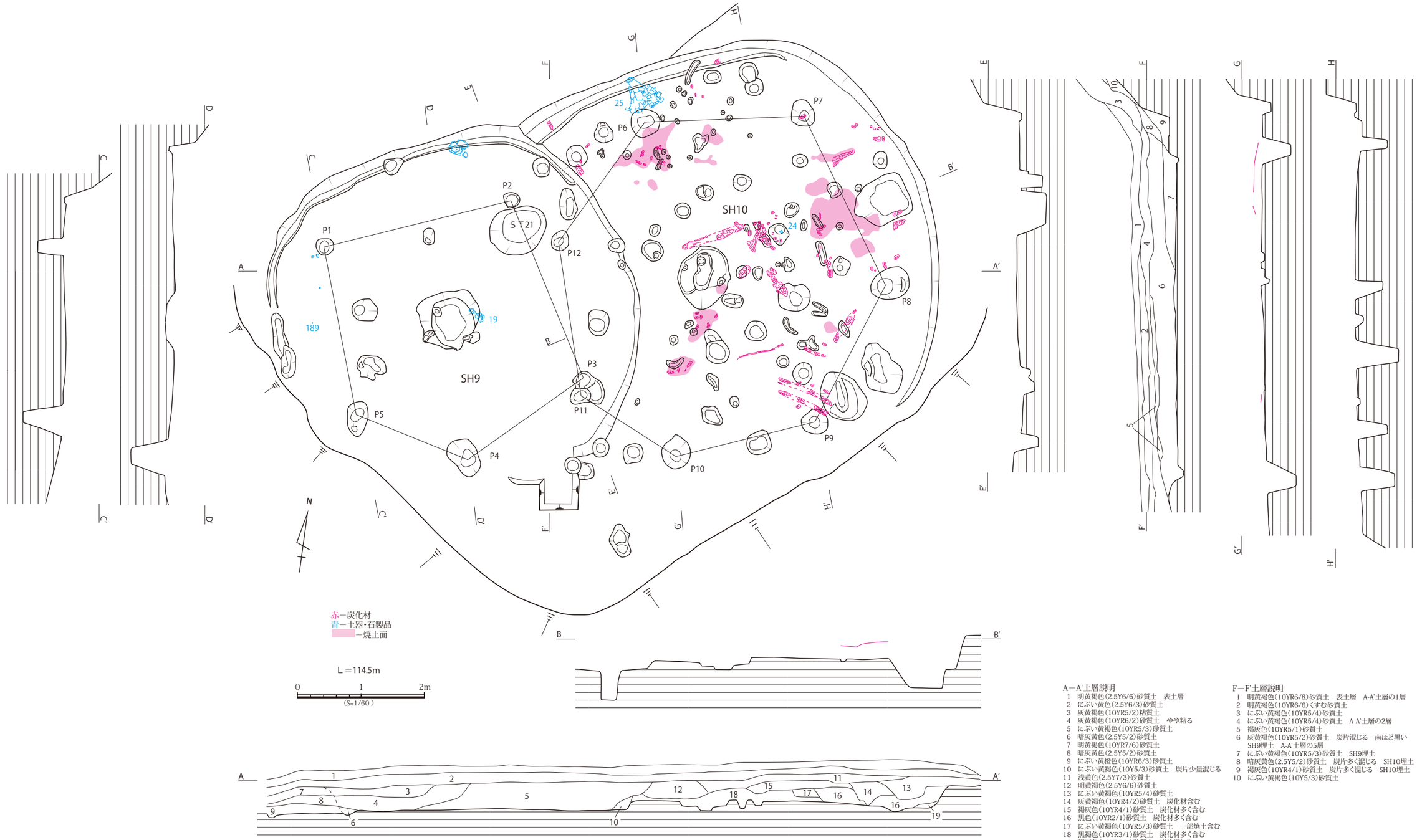
本住居跡からは土器（19）・土製丸玉（20）及び管玉（189）が，埋土中から土器（21）が出土している。その形態からⅡ－ 3 期に属すると考えられる。

SH10 は SH9 の東に接して位置する竪穴住居跡である。西側の壁面と床面の一部は SH9 に切られており，南壁は斜面により流失している。残存する床面形状から推測すると，床面の規模は直径約 6m の円形と考えられる。床面標高は約 114.18m で残存する壁高は最大 30cm である。壁溝は床面の北側で確認しており，幅 7 ～ 26cm，深さは 4 ～ 15cm である。

主柱穴はその位置と規模から，P6 ～ P12 の 7 本と考えられる。各柱穴の規模は，P6 は底面形状が長径 25cm 短径 18cm の楕円形で，底面標高は 113.73m である。P7 は底面形状が直径 15cm の歪な円形で，底面標高は 113.77m である。P8 は底面形状が直径 25cm の円形で，底面標高 113.51m である。P9 は底面形状が直径 17cm の円形で，底面標高は 113.57m である。P10 は底面形状が直径 17cm の円形で，底面標高は 113.65m である。P11 は底面形状が長径 21cm 短径 14cm の楕円形で底面標高 113.78m である。P12 は底面形状が長径 19cm 短径 12cm の楕円形で底面標高 113.78m である。柱間距離は P6 － P7 間が 2.5m，P7 － 8 間が 2.9m，P8 － P9・P11 － P12 間が 2.4m，P9 － P10 間が 2.2m，P10 － P11 間が 1.8m，P12 － P6 間が 2.3m である。他にも壁際の床面には主柱穴として妥当な規模・深さをもつピットが多数あることから，本住居跡は少なくとも 2 回以上の建て替えが行われている可能性があるが，その柱穴の組み合わせは特定できなかった。

床面の中央には，東西 80cm 南北 100cm 深さ約 8cm の掘り込みに，東西 26cm 南北 58cm 上面からの深さ 8cm の 2 段の掘りこみを確認した。その形状や床面での位置，埋土に炭片を多く含むことから炉跡と考えられる。また，炉跡の南西側を除いた周囲で，底面径 5 ～ 10cm 深さ 5 ～ 20cm の小ピット群と，底面径 12 ～ 26cm 深さ約 40cm のピット群を確認した。

本住居跡の床面の北壁側からは甕形土器（24）及びコシキ形土器（25）が出土した。コシキ形土器は，出土状態から広口部を下側に床面に置かれていたものが，上屋の崩壊・土圧などにより押



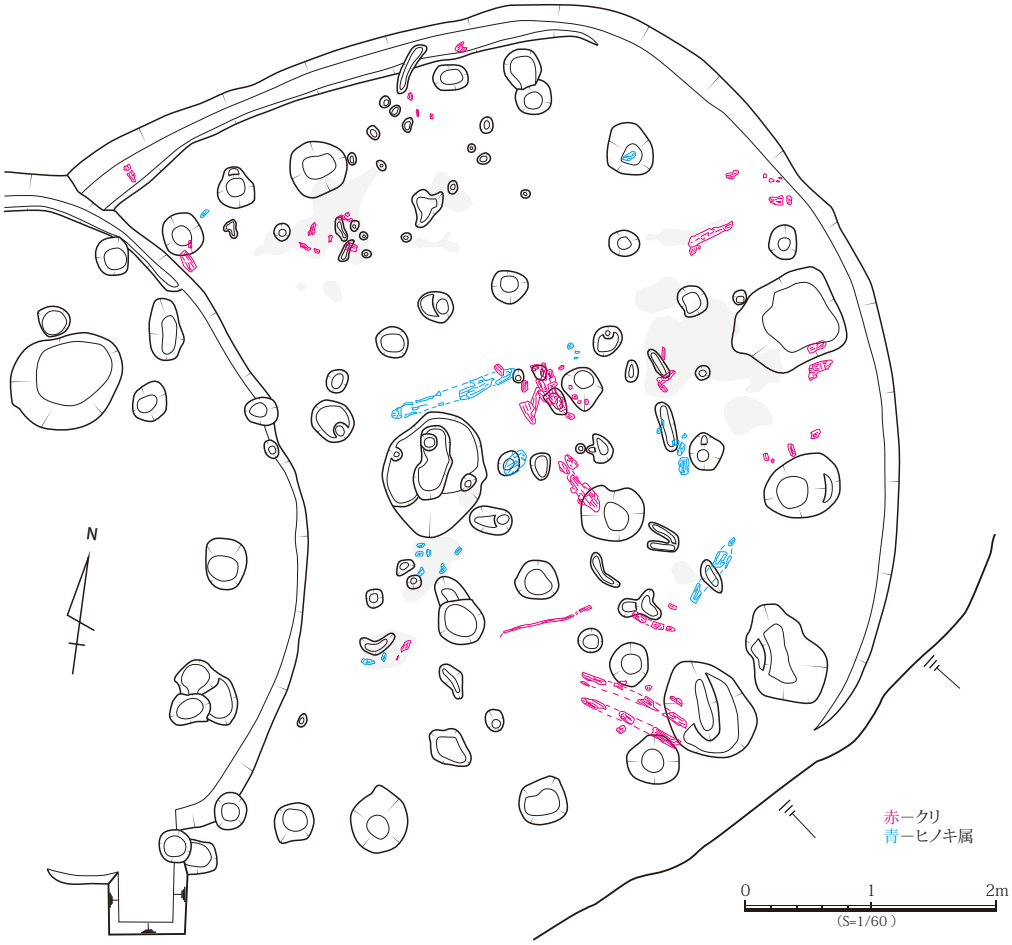
A－A′土層説明

1 明黄褐色(2.5Y6/6)砂質土　表土層
2 にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土
3 灰黄褐色(10YR5/2)粘質土
4 灰黄褐色(10YR6/2)砂質土　やや粘る
5 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
6 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土
7 明黄褐色(10YR7/6)砂質土
8 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土
9 にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土
10 にぶい黄褐色(10Y5/3)砂質土　炭片少量混じる
11 浅黄色(2.5Y7/3)砂質土
12 明黄褐色(2.5Y6/6)砂質土
13 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
14 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土　炭化材含む
15 褐灰色(10YR4/1)砂質土　炭化材多く含む
16 黒色(10YR2/1)砂質土　炭化材多く含む
17 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土　一部焼土含む
18 黒褐色(10YR3/1)砂質土　炭化材多く含む
19 褐灰色(10YR5/1)砂質土　炭片混じる

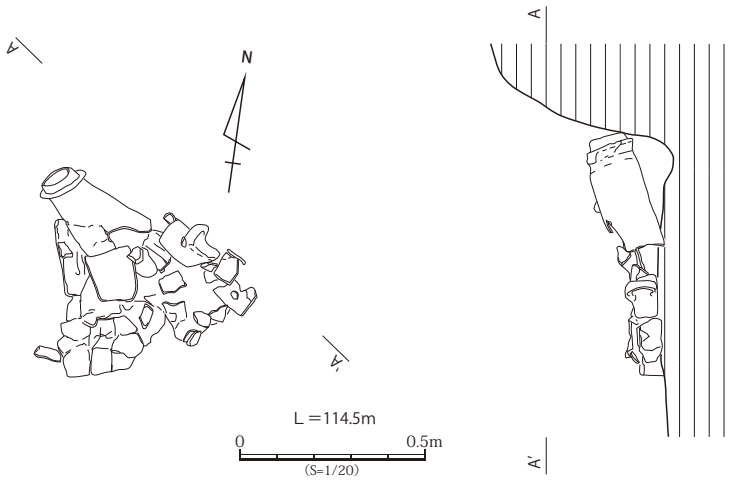
F－F′土層説明

1 明黄褐色(10YR6/8)砂質土　表土層　A-A′土層の1層
2 明黄褐色(10YR6/6)くすむ砂質土
3 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
4 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土　A-A′土層の2層
5 褐灰色(10YR5/1)砂質土
6 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土　炭片混じる　南ほど黒い
SH9埋土　A-A′土層の5層
7 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土　SH9埋土
8 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土　炭片多く混じる　SH10埋土
9 褐灰色(10YR4/1)砂質土　炭片多く混じる　SH10埋土
10 にぶい黄褐色(10Y5/3)砂質土

第 18 図　トンガ坊城遺跡 SH9・SH10 実測図（S=1/60）



第 19 図　SH10 樹種別出土状況実測図（S=1/60）



第 20 図　SH10 コシキ形土器出土状況実測図（S=1/20）

しつぶされたものと考えられる。遺構内からは（24・25）を除き，土器などの遺物がほとんど出土していない。また，本住居跡の床面からは多量の炭化材及び焼土面が出土した。焼土面は炭化材と同じ高さに位置しているが厚みはあまり無く土葺き屋根とは考えにくい。炭化材は科学分析を行った結果，クリ及びヒノキ属であることが確認できた。

本遺構の時期は，出土した炭化材の放射線炭素年代測定をおこなった結果，暦年較正年代がAD80 ～ AD210（2 世紀前半頃）に相当する結果が出た。また，出土土器の形態からⅡ－ 2 期のいずれかの時期に属すると考えられる。

ここで，それぞれの遺構の先後関係についてみると，土層断面の観察から，SH10 → SH9 の順に営まれたことが想定できる。

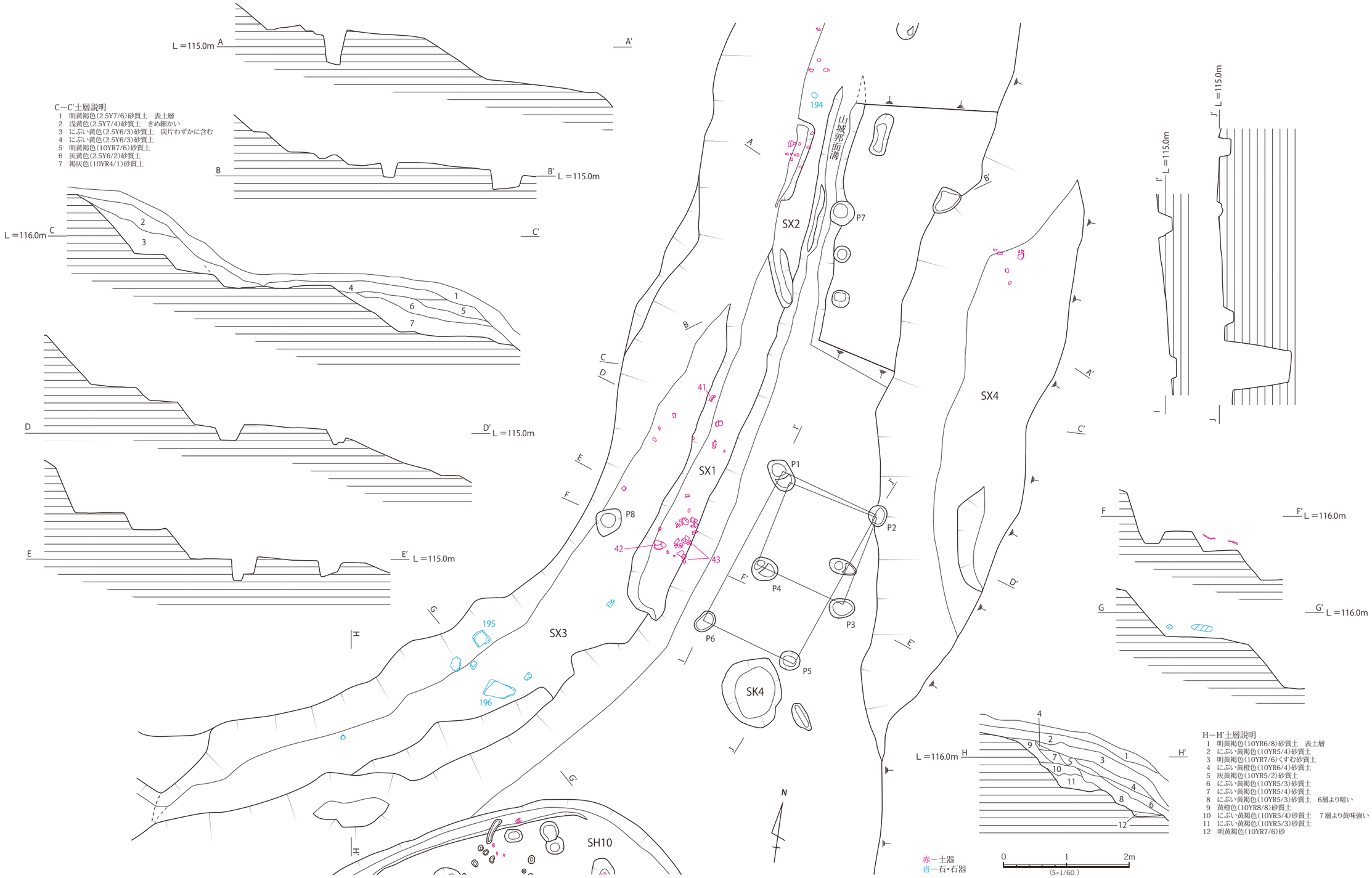
○ SX1・SX2・SX3・SX4・SK4（第 21・22 図）

SX1 は SH10 の北約 3m に位置する，標高約 115.6m の等高線に平行して掘り込まれ，平坦面が形成されるテラス状遺構である。北側は SX2 により，東側は大半を山城構築時に削平されており，遺存状態は悪い。遺構は，確認範囲で長さ約 6m 幅約 0.7m の範囲で掘り込まれており，平坦面は長さ約 5.9m 幅約 55cm の範囲で遺存している。掘り込みの深さは最大 33cm で，平坦面の標高は約 115.4m である。

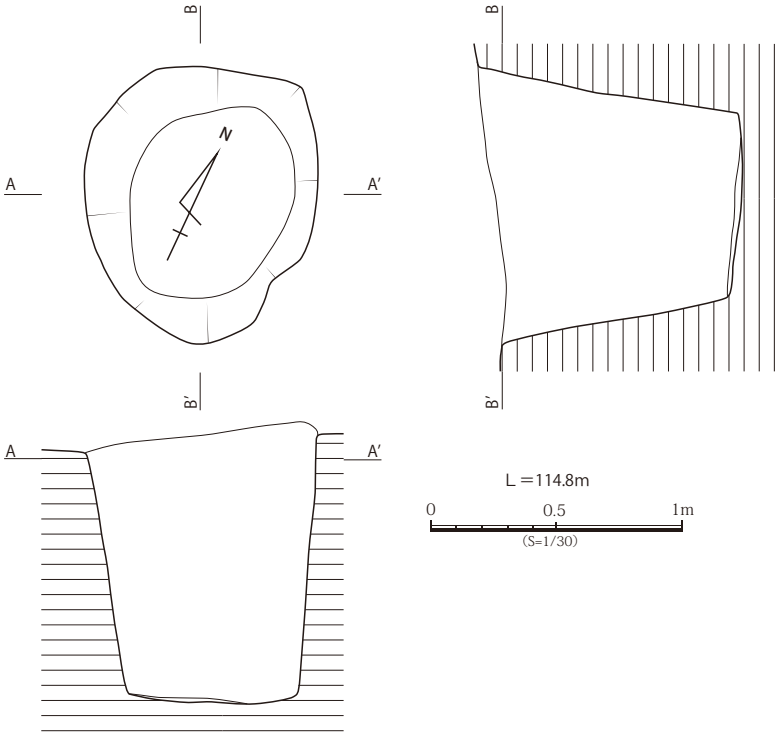
SX1 の底面から 10 ～ 20cm 上の埋土中からは土器（41 ～ 44）が出土している。遺構の時期を直接示すものではないが，本遺構の廃棄時の下限は，土器の形態からⅢ－ 2 期に属すると考えられる。

なお，本遺構の東側，山城構築時に削平されたと考えられる平坦面部分で，柱穴と考えられる P1 ～ P6 を確認した。各柱穴は山城の整地土の下から確認できたことから，弥生時代に属する柱穴の可能性が高く，本項目で報告する。各柱穴の規模は，P1 は底面形状が長径 25cm 短径 14cm 底面標高 115.00m の半月状の底面と，直径 20cm 底面標高 114.90m の楕円形の 2 段の底面を持つ。P2 は底面形状が長径 27cm 短径 15cm の楕円形で，底面標高は 114.83m である。P3 は底面形状が長径 31cm 短径 21cm の楕円形で，底面標高は 114.83m である。P4 は底面形状が長径 22cm 短径 16cm 底面標高 114.76m の半月状の底面と，長径 19cm 短径 11cm 底面標高 114.67m の楕円形の 2 段の底面を持つ。P5 は底面形状が長径 22cm 短径 15cm の楕円形で，底面標高は 114.77m である。P6 は底面形状が長径 30cm 短径 16cm の楕円形で，底面標高は 114.83m である。柱穴の組み合わせはその位置関係から，P1 ～ P4 と P1・P2・P5・P6 の 2 種類の組み合わせが想定できる。

SX2 は SX1 の北側を切って造られたテラス状遺構である。東側の大半を山城構築時に削平されており，わずかに平坦面の一部とこれに伴う溝が遺存する。平坦面は確認範囲で東西 0.5m 南北 3.0m の範囲で遺存し，標高は約 115.3m である。壁溝は南端で南東側に緩やかに弧を描き，規模は幅 10 ～ 13cm，残存する深さは 3 ～ 6cm である。平坦面からは柱穴と考えられる P7 を確認した。



第 21 図　トンガ坊城遺跡 SX1・SX2・SX3・SX4 実測図（S=1/60）



第 22 図　トンガ坊城遺跡 SK4 実測図（S=1/30）

規模は底面形状が直径 22cm の円形で，底面標高は 114.78m である。他のテラス状遺構が等高線に沿って造られているのに対し，本遺構の溝は弓状を呈することから，竪穴住居跡の一部である可能性もある。

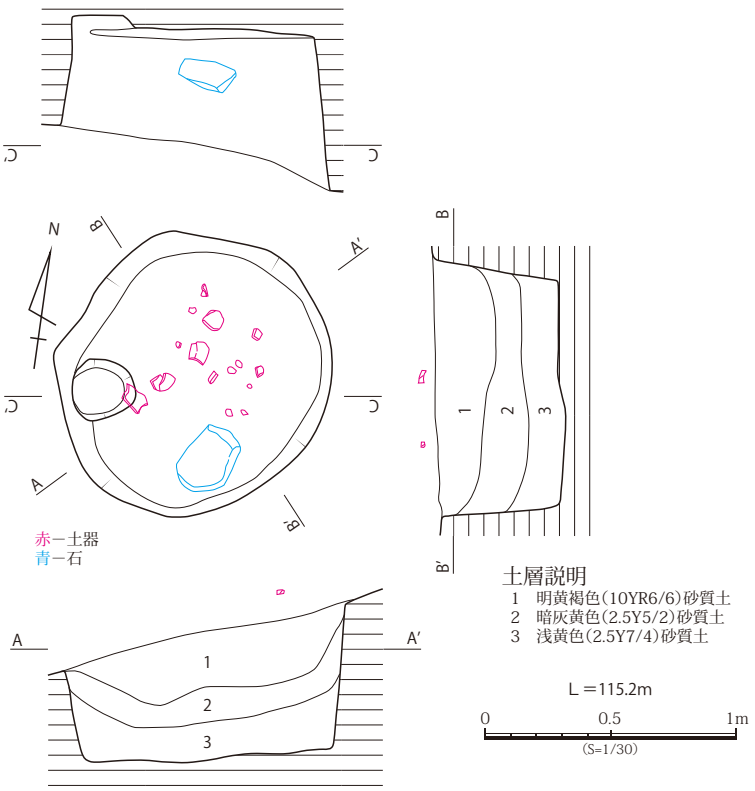
SX2 からは石器（194）が，埋土中からは土器（45 ～ 47）が出土している。なお，壁溝内から土器片が出土しているが，時期を確定できるものは無かった。本遺構の廃棄時の下限は，土器の形態からⅢ－ 2 期に属すると考えられる。

SX3 は北東側を SX1 の西に接して位置する，標高約 115.5m の等高線に沿って平坦面が形成されるテラス状遺構である。平坦面は，確認範囲で長さ約 12m 幅 0.6 ～ 1.5m の範囲で残存する。平坦面は北から南へと緩やかに傾斜し，標高は南西端で 115.2m 北東端で 115.70m である。前述したように東側の SK4 の位置する平坦面は山城により削平されており，本来は SX3 のレベルで平坦面が広がっていたものと考えられることから，SX3 は SH9・10 に伴う平坦面であったと想定できる。

SX3 の P8 内埋土中からは土器（48）が，埋土中からは土器（49）・台石（195・196）が出土している。本遺構の時期は，土層観察及び遺構の配置状況から，SH10 と同時期（Ⅱ－ 2 期）から SX1 と同時期（Ⅲ－ 2 期）にかけて属するものと考えられる。

SX4 は SX1・2 の東約 3m に位置する，標高約 115m の等高線にほぼ平行して掘り込まれ平坦面が形成されるテラス状遺構である。東側は急斜面になっており，流失している可能性がある。

本遺構は確認範囲で，長さ約 10m 幅約 2.5m の範囲で掘り込まれており，平坦面は長さ約 7.5m



第 23 図　トンガ坊城遺跡 SK5 実測図（S=1/30）

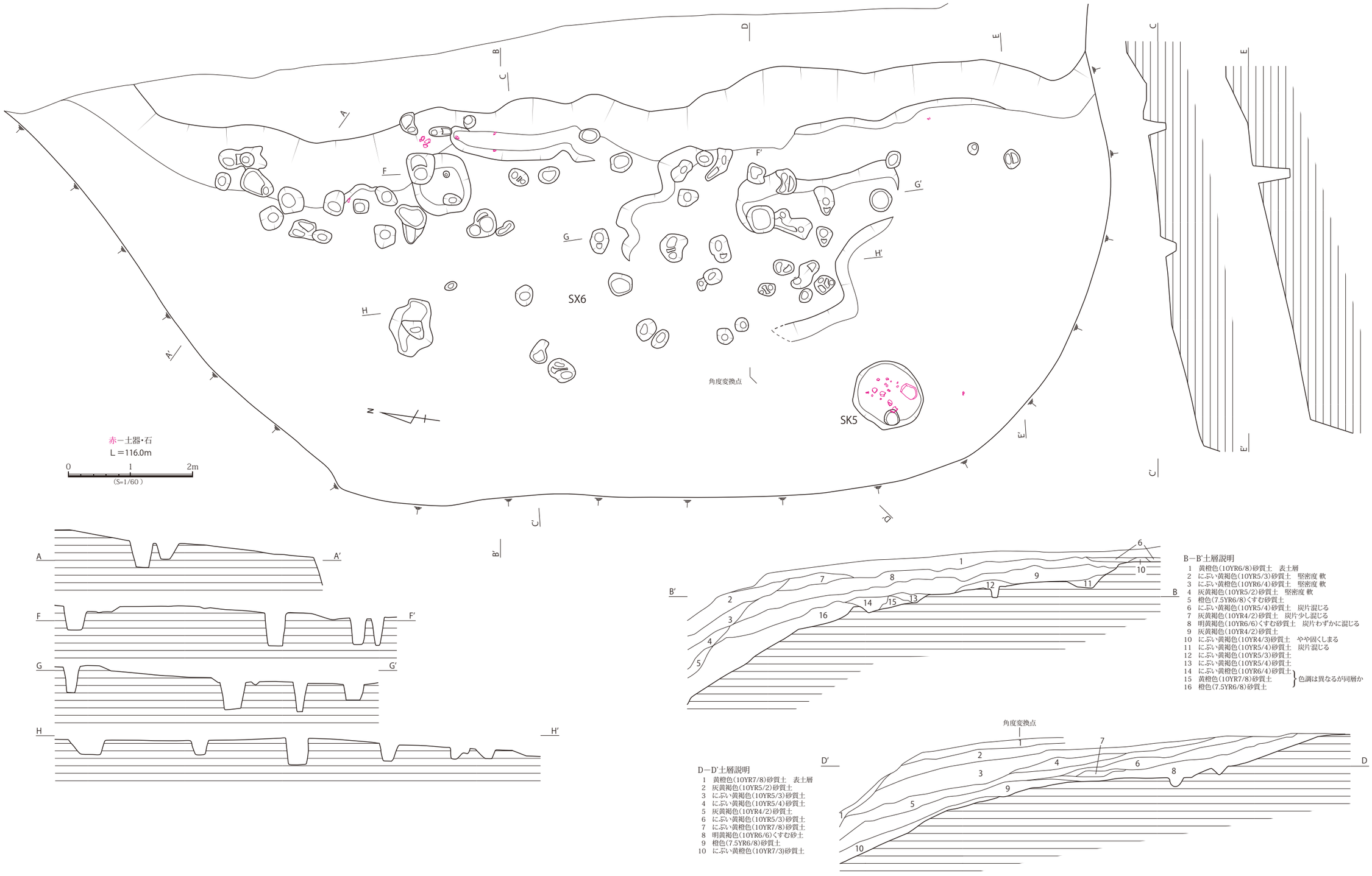
幅最大 1.1m の範囲で残存している。掘り込みの深さは最大 58cm で，平坦面は北から南へゆるやかに傾斜し，標高は北端で 114.47m，南端で 114.33m である。

なお，本遺構の床面北端からは弥生土器の破片が出土しているが，細片のため復元するに至らなかった。

SK4 は SH10 の北東約 2.3m に位置する土坑である。平面形状は楕円形で，底面の規模は長径 83cm 短径 63cm，底面標高は約 113.85m である。掘り方の上面は山城により削平されている。遺構の深さは約 1.4m であるが，直近に位置する SH10 の壁高が 50cm しかないこと，北側の削平されていない個所に位置する SK3 の深さや，他の遺存状態のよい土坑の深さが 1.8 ～ 2m あることを考慮すると，掘り方上面は 50cm 程度削平され，SX3 の平坦面が広がっていたものと考えられる。本土坑は，その規模・形状から貯蔵用と考えられ，その位置から SH10 に付随する貯蔵穴の可能性がある。

なお，本土坑埋土中から弥生土器の破片が出土しているが，細片のため図示するに至らなかった。

ここで，それぞれの遺構の先後関係についてみると，C － C’ 土層断面の観察から，SX3 は SX1 と同時期にも使用されていたことが想定できる。また，SX1・3 の遺構面直上の土層である 3 層が，SX4 の埋土である 4 層と類似することから，SX4 → SX1・3 の順に営まれた可能性がある。また，遺構の切り合い関係から SX1 → SX2 の順に営まれたことが想定できる。以上のことから，SX4 → SX1・3 → SX2 の順に営まれたことが想定できる。



B－B′土層説明

1 黄橙色(10YR6/8)砂質土　表土層
2 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土　堅密度 軟
3 にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土　堅密度 軟
4 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土　堅密度 軟
5 橙色(7.5YR6/8)くすむ砂質土
6 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土　炭片混じる
7 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土　炭片少し混じる
8 明黄褐色(10YR6/6)くすむ砂質土　炭片わずかに混じる
9 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土
10 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土　やや固くしまる
11 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土　炭片混じる
12 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
13 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
14 にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
15 黄橙色(10YR7/8)砂質土　} 色調は異なるが同層か
16 橙色(7.5YR6/8)砂質土

D－D′土層説明

1 黄橙色(10YR7/8)砂質土　表土層
2 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土
3 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
4 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
5 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土
6 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
7 にぶい黄橙色(10YR7/8)砂質土
8 明黄褐色(10YR6/6)くすむ砂土
9 橙色(7.5YR6/8)砂質土
10 にぶい黄橙色(10YR7/3)砂質土

第 24 図　トンガ坊城遺跡 SX6 実測図（S=1/60）

○ SX6・SK5（第 23・24 図）

SX6 は SH5 の南西約 2m，平坦面 2 の西側に位置するテラス状遺構である。本遺構の位置する平坦面は，土層観察によると山城構築時や比較的後世まで利用された形跡があり，上段側の斜面は山城により削平されている。平坦面は東西約 6m 南北約 16m と広い範囲を有し，上段からの深さは約 1.2m である。平坦面は東から西に傾斜し，平坦面の最高所は 116.15m である。土層観察によると，上段側は地山を削平し，下段側は土を盛って平坦面を造っている（第 24 図 B － B′ 土層第 13 ～ 16 層上面）。平坦面上には溝や多数の柱穴と考えられるピットを確認した。しかしながら，建物などを想定することはできなかった。

本遺構の床面や埋土中から，土器片を確認したが，いずれも細片でその形態や時期を確定できるものは無かった。

SK5 は SX6 平坦面の南西隅に位置する土坑である。平面形状は円形で，底面の規模は長径 101cm，短径 86cm，底面標高は約 114.74m である。掘り方の深さは最大 61cm であるが，平坦面が最も流失している西端に位置しており，遺構上面も流失しているものと考えられる。SX6 の床面最高所からの比高差から考慮すると，深さは 1.2m 以上あったと考えられる。本土坑は，その規模・形状から貯蔵用と考えられる。

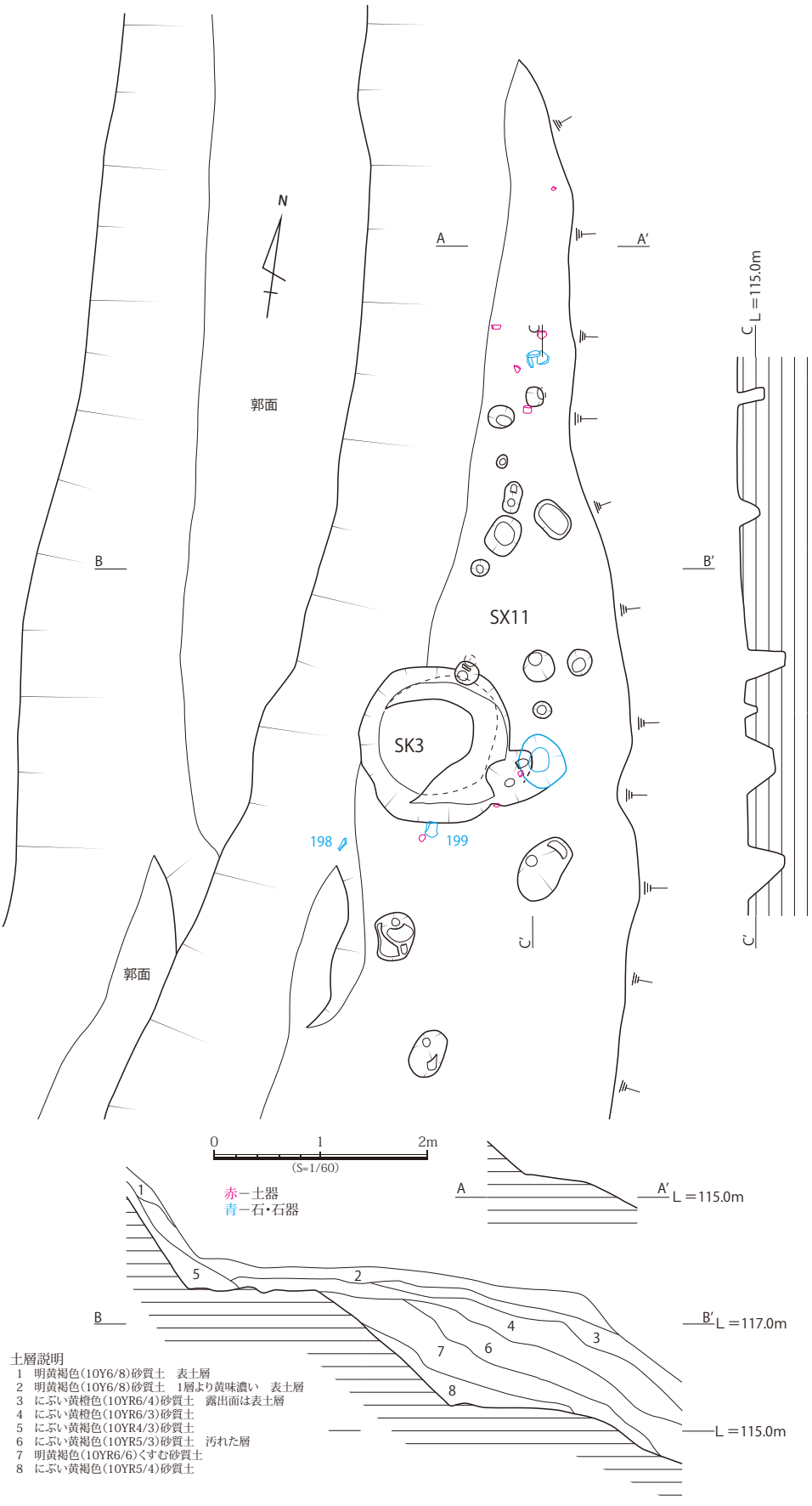
なお，本土坑の掘り方上面に集中する形で土器片が，埋土中からは約 30×20cm の角礫が出土した。土器片はいずれも細片でその形態や時期を確定できるものは無かった。本遺構の廃棄時に，何らかの祭祀が行われたものと考えられる。

○ SX11・SK3（第 25・26 図）

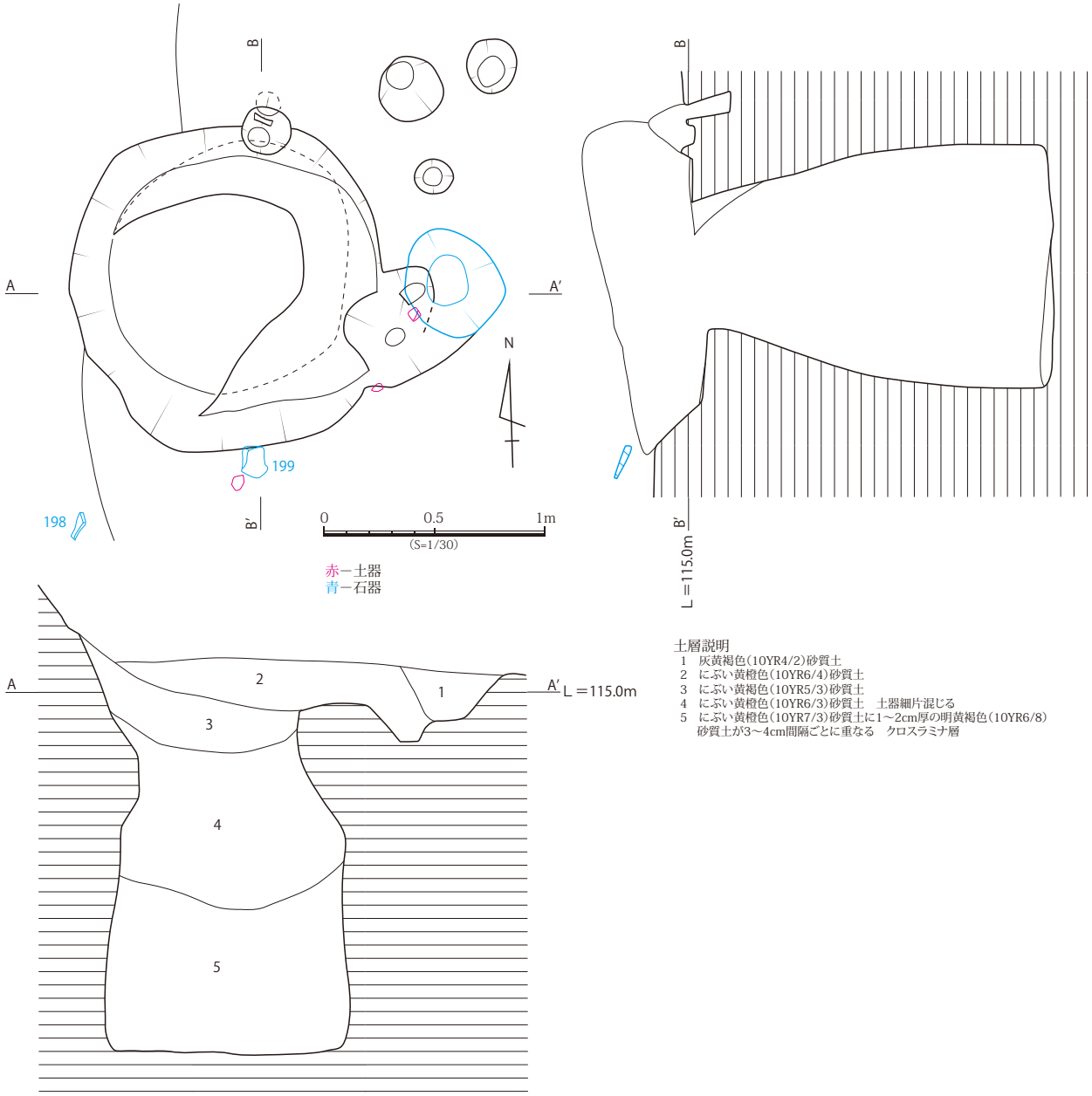
SX11 は SX2 の北に接して位置するテラス状遺構である。東側は急峻な斜面となっており，南側は SK3 の約 2m 南付近で山城構築時に削平され明確な範囲が不明であるが，平坦面の標高が南に位置する SX2 の標高より低いことから，SX2 の北端までは及ばなかったものと想定できる。平坦面の規模は確認範囲で南北約 9.5m，掘り込みの深さは SH5 の位置する平坦面 1 から約 2.3m，SX10 の位置する平坦面 2 から約 1m である。平坦面は北から南に向けて緩やかに傾斜し，標高は 115.1m ～ 115.2m である。平坦面には掘り込みに沿う形で柱穴と考えられる複数のピットを確認した。しかしながら，建物などを想定することはできなかった。

SX11 の平坦面からは石器（198・199）が出土している。また，胎土が赤褐色の弥生土器片が出土しているが，時期を確定できるものは無かった。

SK3 は SX11 の平坦面の南に位置する袋状土坑である。掘り方上面の平面形状は東西 140cm 南北 145cm の円形で，そこから約 25cm 掘り込んだ直径約 110cm 幅最大 46cm の三日月状の段をもつ。入口部の平面形状は東西 85cm 南北 57cm の楕円形である。底面の平面形状は直径 106cm の円形で，底面標高は 113.38m である。掘り方の深さは最大 189cm，上段からの深さは約 160cm である。



第 25 図　トンガ坊城遺跡 SX11 実測図（S=1/60）



第 26 図　トンガ坊城遺跡 SK3 実測図（S=1/30）

本土坑はその規模から，貯蔵用の土坑と考えられる。なお，埋土内からは弥生土器の破片が出土しているが，細片で摩耗が著しいため図示するに至らなかった。

③Ⅲ群の遺構

Ⅲ群は調査前の平坦面 4・7 に位置する遺構の一群である。土層観察によると平坦面 4 は山城の築造により形成された面である。しかし，SH11 が浅いながらも存在することと地形観察から，SH11 が存在する時期のこの付近は上段側から下段の平坦面 5 の南端部に向かって緩やかに下る地形であったことが想定できる。SX7 は斜面を削平して平坦面を造り出している。SX7 の下段側は斜面により流失しているが，削平で生じた排土を斜面下方に盛り土をしたものと考えられる。なお，山城の遺構面は SX7 上に自然堆積した土と東側の地山を削平して造られており，弥生時代には

SX7 の掘り方上面付近まで上段が広がっていたことが窺える。SH11 と SX7 の床面レベルは約 112.5 mとほぼ等しく，弥生時代には上段を取り巻く馬蹄形状の地形を呈していたものと考えられ，SH11・SX7 は一連の群として捉える。

○ SH11（第 27 図）

SH11 は SH10 の南約 2.5m に位置する竪穴住居跡である。北壁が約 4.7m とそれに伴う床面が円弧状に残存しているが，それ以外は，下段により削平されている。その大半は削平されているが，平面形状及び壁面・壁溝の遺存状態から竪穴住居跡と考えられる。残存部から推定できる平面形状は直径約 6.5m の円形である。床面標高は約 112.4m で，残存する壁高は最大 52cm である。壁溝は残存している部分は全周しており，幅 20 ～ 26cm，深さは 5 ～ 8cm である。

なお，本遺構からは遺物は出土しなかった。

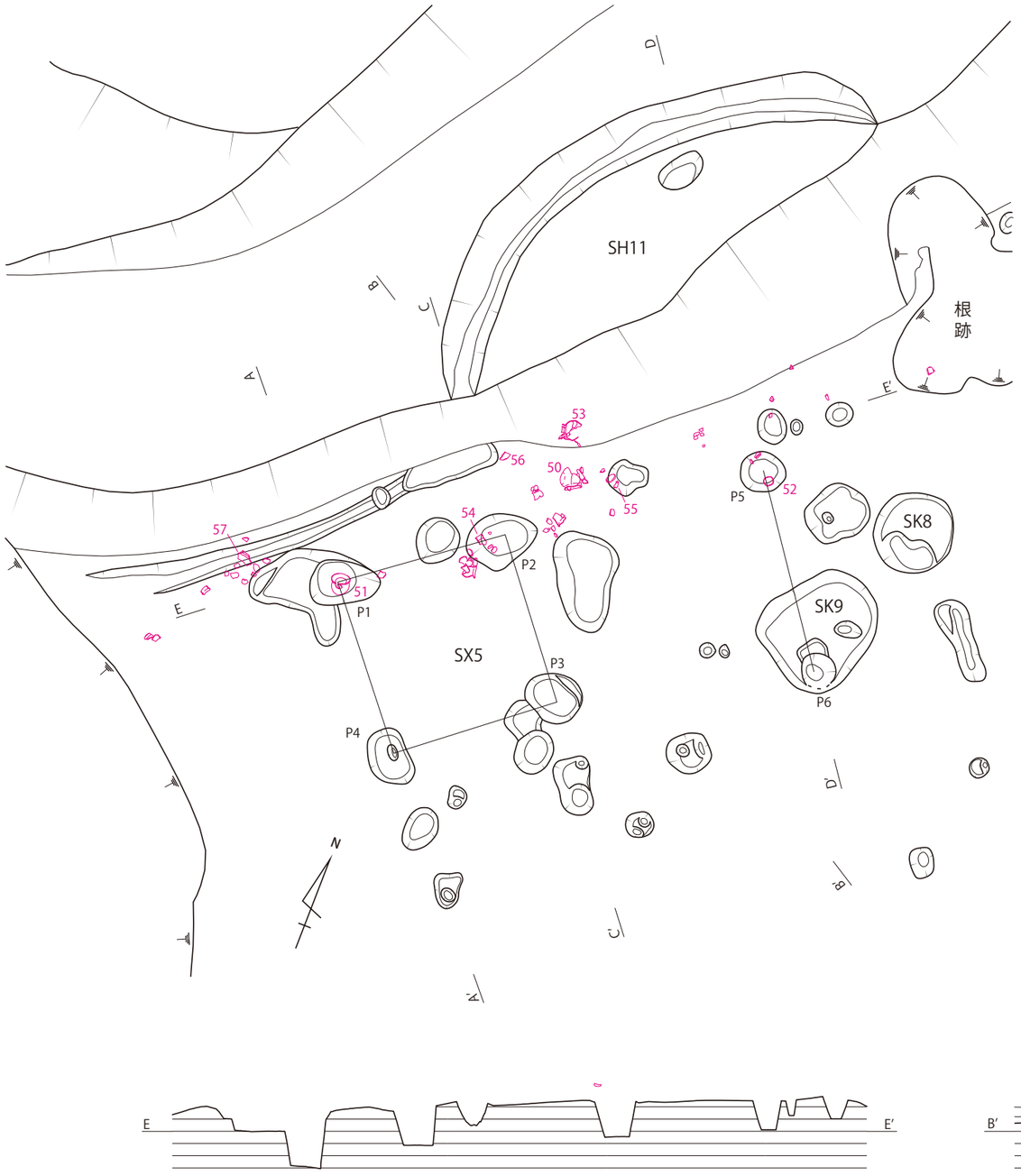
○ SX7（第 28 図）

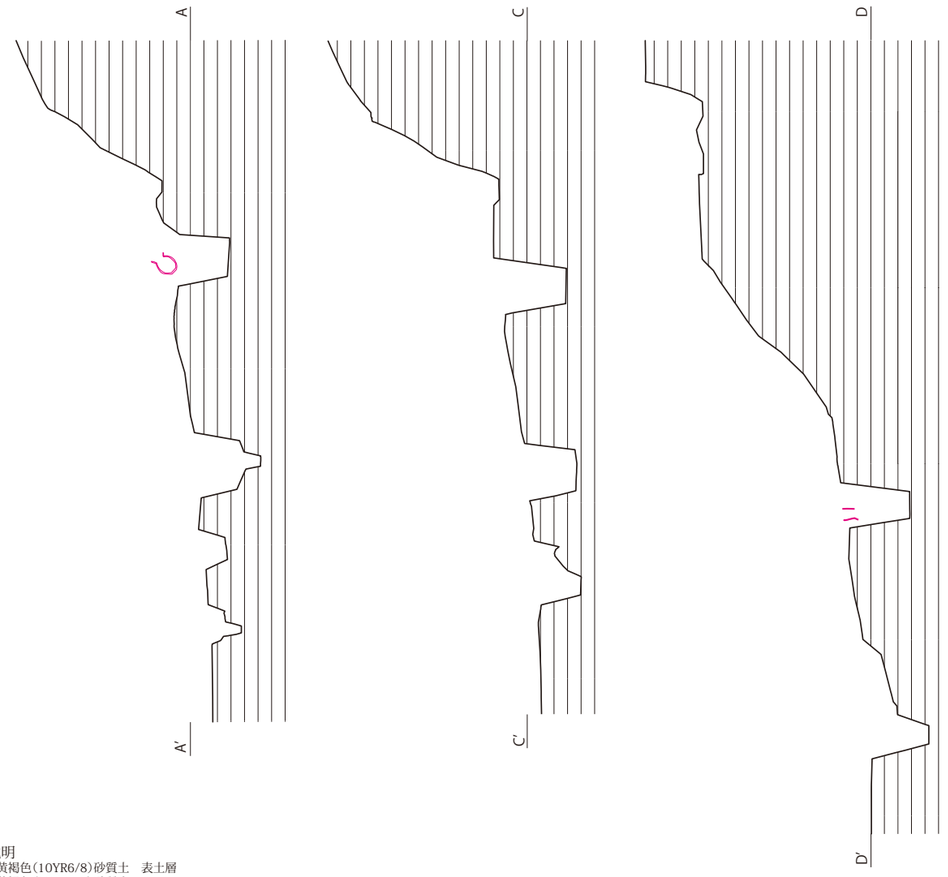
SX7 は SX6 の南西約 5m に位置する，標高約 112.4m の等高線に平行して掘り込まれ，平坦面が形成されるテラス状遺構である。平坦面は北端から南へ約 10m の地点で南東方向へ約 60 度屈曲し，さらに約 9m の範囲で残存している。主となる平坦面の標高は約 112.4m である。平坦面の西側は斜面により流失しているが，本来は西側へ削平した土を盛り平坦面を作り出していたと考えられる。平坦面の中央部を除く北側と南側には段をもつ。その配置及び土器などの分布状況から，便宜上北側の段付近を SX7a，中央付近の屈曲部を SX7b，南側の段付近を SX7c と呼称し述べることとする。

SX7a は東西 25 ～ 50cm 南北約 7.3m，標高約 113.1m の段と，そこから約 65cm 掘り込んで造られた平坦面からなる。平坦面は東西 2 ～ 2.2m の幅で広がり，その北半は下段側が流失し，南側は SX7b へと続く。床面の中央には南北約 2.8m 東西 1.2m，残存する深さ 11 ～ 23cm の方形の掘り込みと，これに伴う平坦面を確認した。平坦面の標高は約 112.3m である。掘り込みには壁溝や柱穴に適したピットが確認できないが，小型の住居の可能性もある。また，掘り込みの東に接して，長さ 270cm 幅 24 ～ 30cm，残存する深さ 11 ～ 14cm の溝状の掘り込みを確認した。本掘り込みの付近の床面や埋土中に集中して多量の土器が出土した。

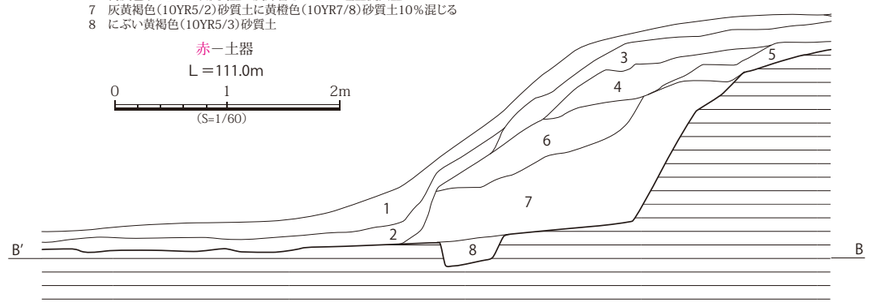
SX7b は中央の屈曲部付近にあたり，平坦面は残存部で北西－南東約 3m，幅約 3m 範囲で広がる。平坦面には直径 10 ～ 20cm の小ピットや，直径 40 ～ 50cm の柱穴として妥当な規模を持つピットを複数確認した。しかしながら，組あわせを想定することは困難であり，建物などを想定することはできなかった。SX7b からは SX7a･c に比べ，平坦面や埋土中からはあまり土器が出土しなかった。

SX7c は東西 1.5m 幅最大 32cm 標高約 113.0m の段と，そこから約 30cm 掘り込んだ東西約 4.1m 幅 40 ～ 65cm 標高約 112.7m の段と，そこから約 30cm 掘り込んで造られた平坦面からなる。平坦面は 1.5 ～ 1.8m の幅で広がる。平坦面の南東端付近の床面や埋土中に集中して多量の土器が出土した。また，南東端には東西 80cm 南北 73cm 深さ約 12cm の円形の掘り込みを確認し，内部

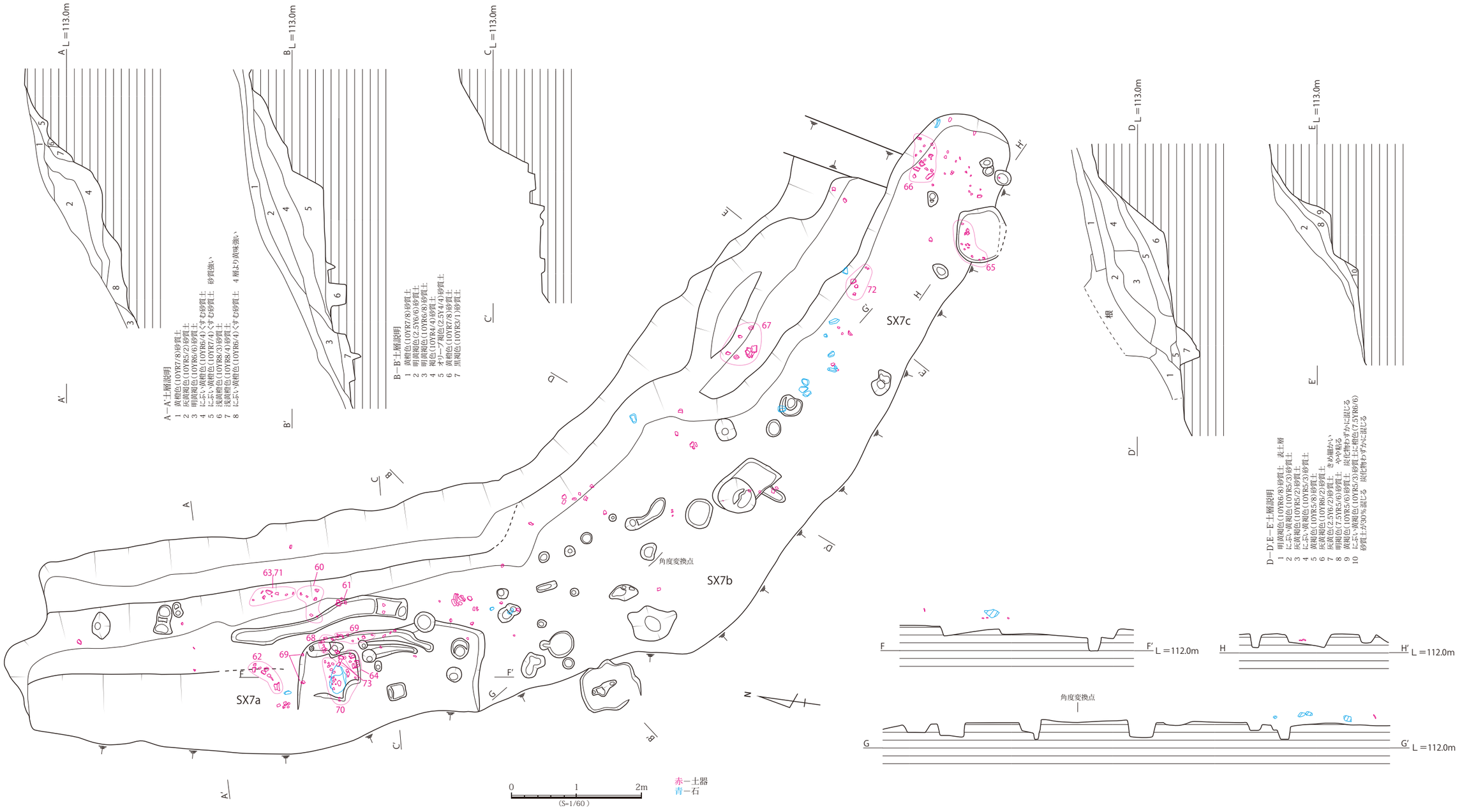




土層説明
1　明黄褐色(10YR6/8)砂質土　表土層
2　明黄褐色(10YR6/6)砂質土
3　明黄褐色(10YR6/6)砂質土　2層よりやや暗
4　黄橙色(10YR6/4)くすむ砂質土
5　にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土
6　褐灰色(10YR4/1)砂質土　炭片含む　SH10埋土流出土か
7　灰黄褐色(10YR5/2)砂質土に黄橙色(10YR7/8)砂質土10%混じる
8　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土



第 27 図　トンガ坊城遺跡 SH11・SX5 実測図（S=1/60）



第 28 図　トンガ坊城遺跡 SX7 実測図（S=1/60）

から土器（65）を確認した。掘り込みはその位置状況から本遺構に伴うものと考えられ，土器は使用時の時期を示すものと考えられる。

さて，SX7 の床面及び埋土中からは，多量の土器が出土した。主に SX7a の掘り込み一帯と，SX7c 一帯にかけて出土し，SX7b 付近からはあまり出土しなかった。土層観察及び出土状況から，北側の一群は，床面から 10 ～ 20cm 上に集中して位置し，また，埋土中からも多量の土器が出土したこと，破片が激しく割れながらも比較的まとまっていることから，SX6 などの上段から廃棄・流入したものと考えられる。また，SX7b ではあまり土器が出土しなかったこと，段がないことから平坦面の広さを確保する意図があったと想定でき，SX7b は広場的な場の役割を持っていたことが考えられる。

本遺構からは土器（60 ～ 73）が，埋土中から土器（74 ～ 95）が出土している。SX7c の時期は出土土器の形態からⅡ－２－②期に，SX7 全体の廃棄時の下限はⅢ－１期に属すると考えられる。

④Ⅳ群の遺構

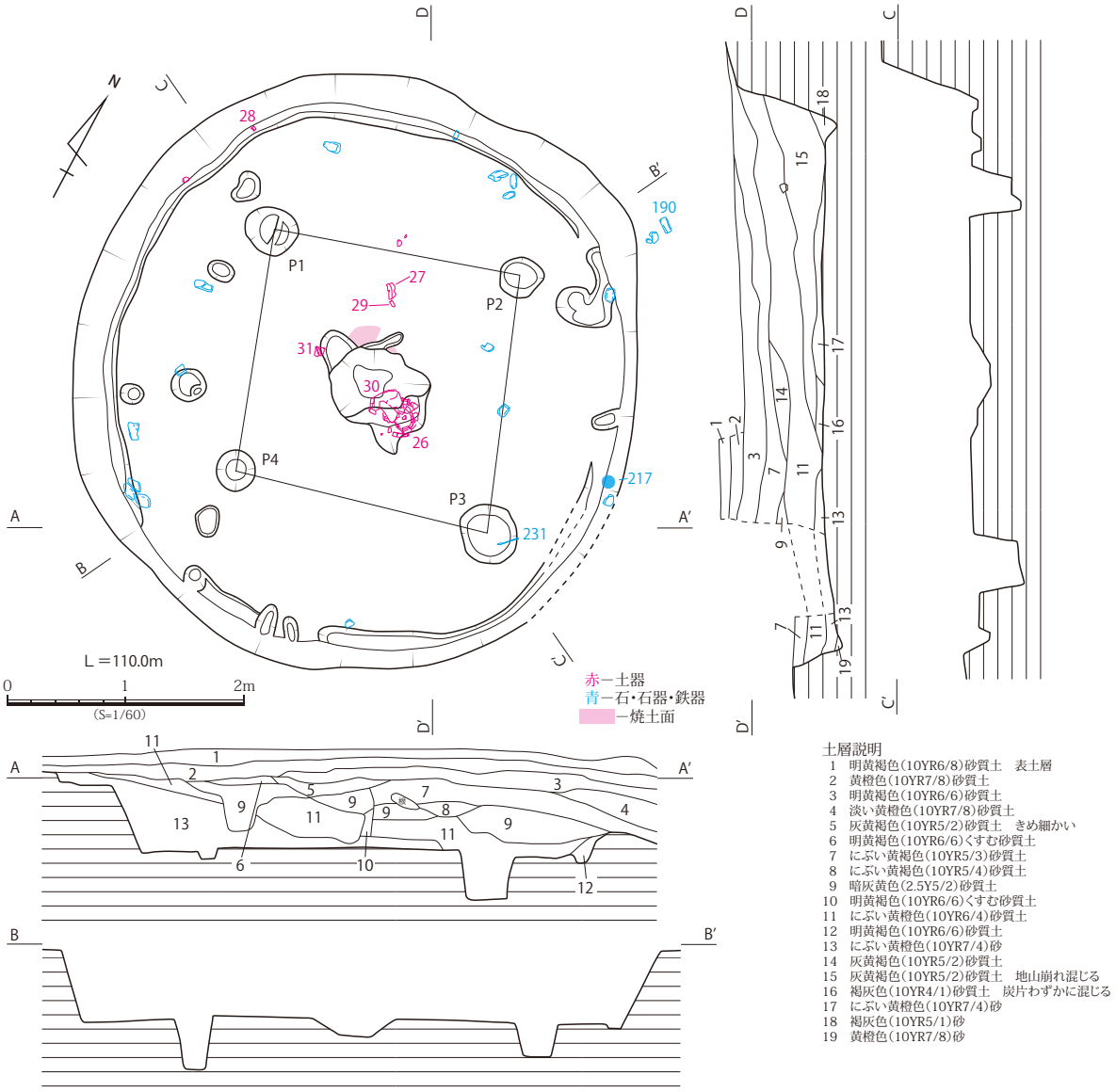
Ⅳ群は調査前の平坦面 5・9 に位置する遺構の一群である。平坦面 5 の上段（平坦面 4）側は SX5 により斜面を削平して平坦面を造り出している。上段側の削平部から約 2m は SX5 上に埋土が自然堆積するが，これより南半分は山城の第 6 平坦面により削平されている。ただし，SH12 の掘り込みが約 0.8 mと十分な深さをもつことから，山城による削平はそれほど及んでおらず弥生時代の地形を踏襲しているものと思われる。平坦面の南端部は山城の築造により削平されているが，平坦部の端に SK10 が位置することから，弥生時代には平坦面は下段（平坦面 6）の SX13・14 の掘り方上面付近まで広がっていたと想定できる。平坦面 9 には SX8・9 が位置するが，それぞれ斜面を削平して平坦面を作り出している。平坦面 5 と 9 の間は大きくえぐれ分断されているが，後世の土取りと崩落によるもので，弥生時代には上段を取り巻く馬蹄形状の地形を呈していたものと考えられる，これらのことから，SH12，SX5・8・9，SK6 ～ 10 は一連の群として捉える。

○ SH12（第 29・30 図）

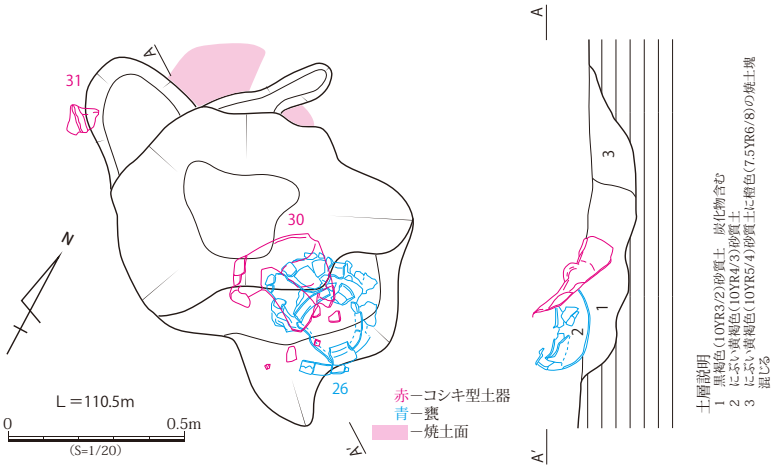
SH12 は調査区中央部付近に位置する標高約 111.0m の加工段（調査前平坦面 5）の北東部に位置する。床面の規模は直径約 4.2m の円形である。 床面標高は約 110.40m で，残存する壁高は最大 77cm である。壁溝は北東側を除いてほぼ全周しており，幅 11 ～ 19cm，残存する深さは 3 ～ 8cm である。

主柱穴はその位置と規模から，P1 ～ P4 の 4 本と考えられる。各柱穴の規模は，P1 は底面形状が長径 22cm 短径 7cm の半月形で，底面標高は 109.95m である。P2 は底面形状が長径 27cm 短径 10cm の楕円形で，底面標高は 110.06m である。P3 は底面形状が直径約 33cm の円形で，底面標高は 109.99m である。P4 は底面形状が直径 17cm の円形で，底面標高は 109.95m である。柱間距離は P1 － P2 間が 2.1m，P2 － P3・P3 － 4 間が 2.2m，P4 － P1 間が 2.0m である。

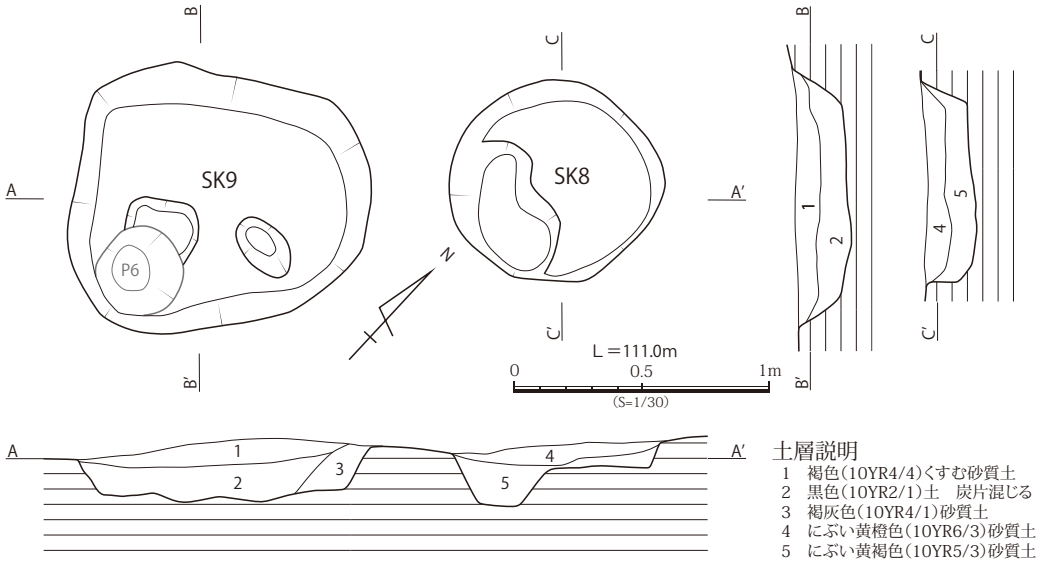
床面の中央からは長径約 80cm 短径約 65cm 深さ約 16cm の掘り込みを確認した。その形状や床面での位置，埋土に炭片を多く含むことから炉跡と考えられる。



第 29 図　トンガ坊城遺跡 SH12 実測図（S=1/60）



第 30 図　SH12 コシキ形土器出土状況実測図（S=1/20）



第 31 図　トンガ坊城遺跡 SK8・SK9 実測図（S=1/30）

本住居跡の炉跡内からは甕（26）に覆い被さる状態でコシキ形土器（30）が出土している。コシキ形土器（30）は広口部の半分のみが出土し他に同一個体の破片は確認できないこと，出土状態が甕（26）を覆うように位置することから，蓋として転用したものと考えられる。床面からは土器（27 ～ 29･31）･鉄器（216･217）が，埋土中からは土器（32）が，住居の周辺から砥石（190）が出土している。本住居跡の時期は出土した土器の形態からⅢ－ 1 期に属すると考えられる。

○ SX5・SK8・SK9（第 27・31 図）

SX5 は調査区中央部に位置する標高約 111.0m の加工段（調査前平坦面 5）の北西部分，SH11 の南側を切って造られている。上段からの掘り込みは最大 1.7m，SH11 床面との比高差は約 1.3m である。

平坦面からは，その規模と配置から柱穴と考えられる P1 ～ P4 を確認した。各柱穴の規模は，P1 は底面形状が長径 37cm 短径 33cm の楕円形で，底面標高は 110.60m である。P2 は底面形状が長径 45cm 短径 31cm の楕円形で，底面標高は 110.59m である。P3 は底面形状が長径 43cm 短径 27cm の楕円形で，底面標高は 110.53m である。P4 は底面形状が長径 43cm 短径 28cm の楕円形で，底面標高は 110.52m である。柱間距離はいずれも 1.7 ～ 1.8m である。他の竪穴住居跡の主柱穴に比べ，柱穴の規模が 2 倍近く大きいこと，炉跡などの住居跡に付属する設備が確認できないことから，櫓や掘立柱建物などの建物跡と推測できる。また，柱穴の北側には，建物に沿って掘りこまれた排水施設と考えられる，幅 16 ～ 23cm，残存する深さ約 6cm の溝を確認した[2)]。平坦面には他にも P5・P6 や，主柱穴として妥当な規模・深さをもつピットが多数あるが，遺構としての組み合わせを特定することはできなかった。

本遺構の上段側，平坦面直上の埋土（B － B’ 土層第 7 層）中から平坦面直上にかけて，多数の土器が確認された。土器は完形に近いものや，一個体分のまとまりをもって検出されたことから，SX5 上段の加工段から流入したもの（SH9・10 流出土など）と考えられ，SX5 廃棄時の年代に近

いものと考えられる。本遺構の平坦面直上から土器（50）が，P1 内から（51）が，また，P5 内から土器（52）が，埋土中から土器（53 ～ 59）が出土している。出土土器の形態から，本遺構の廃棄時の下限はⅢ－ 1 期に属すると考えられる。

SK8 は SX5 の P5 の約 1 m 東側に位置する。他の SX5 平坦面上に位置する掘りこみと比べ成形がしっかりとしていることから土坑とする。掘り方上面の平面形状は円形で，底面の規模は長径 56cm 短径 44cm 底面標高 110.97m の半月形の底面に，そこから掘り込まれた長さ 45cm 幅 12 ～ 24cm 底面標高 110.82m の段をもつ。

なお，本土坑埋土中から弥生土器の破片が出土しているが，細片のため図示するに至らなかった。

SK9 は SK8 の南約 0.3m に位置する。他の SX5 平坦面上に位置する掘りこみと比べ成形がしっかりとしていることから土坑とする。平面形状は歪な隅丸長方形で，底面の規模は長辺 96cm 短辺 85cm 底面標高は約 110.86m で，SX5P6 の他，直径 15 ～ 28cm 深さ 10 ～ 20cm のピット 2 基が重複する。なお，掘り方検出時には SX5P6 の掘り方を確認できなかったことから，本土坑が後出するものと考えられる。本遺構の底面直上の埋土は炭片を多く含んでおり，屋外炉などの施設の可能性がある。

○ SX8・SX9・SK6（第 32・33 図）

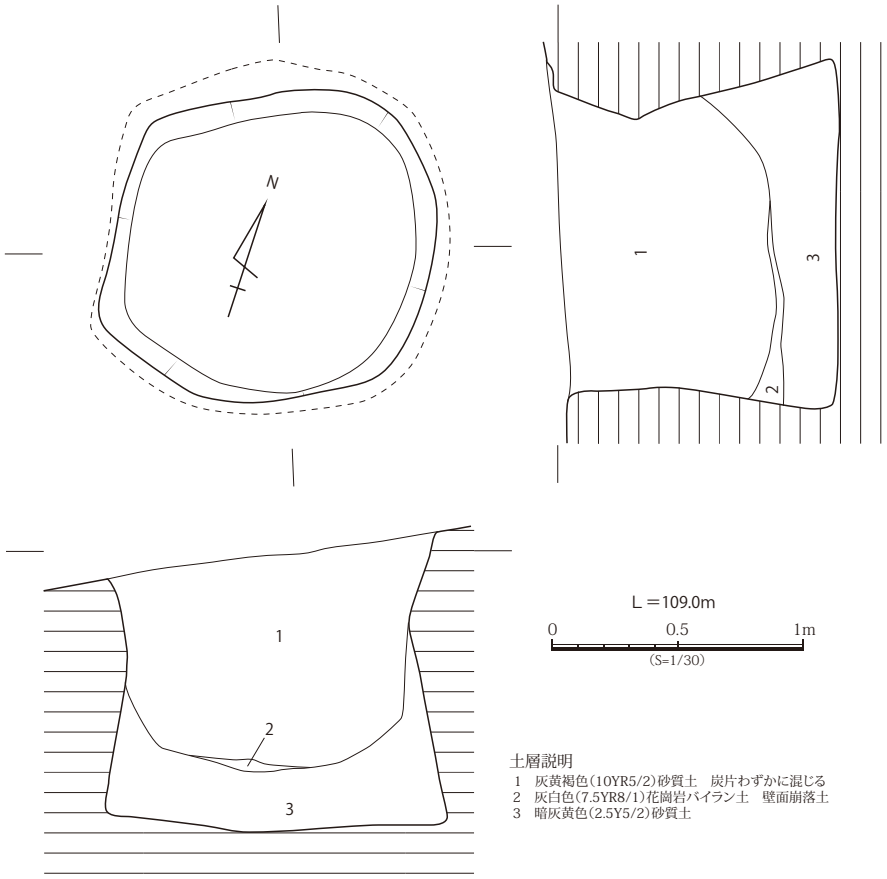
SX8・9 は SX7 の南西約 5m に位置し，標高約 109.0m の等高線状に沿って平坦面が形成されるテラス状遺構である。平坦面の北側には，他の平坦面より一段高い面があり，この面の上に集中して土器が出土した。土層観察によりこの面は他の面とは別時期に造られた面であることが確認できた。この北側の一段高い面を SX8，その他に広がる平坦面を SX9 とする。

SX8 は SX9 により平坦面の大部分を削平され，遺存状態は悪い。平坦面の規模は，確認範囲で，幅は北側で最大 1.5m，南側で 0.5m，長さは南北 6.2m の範囲で残存している。掘り込みの深さは最大 114cm で，平坦面の標高は約 109.5m である。

SX8 からは土器（96 ～ 99）及び鉄鏃（219）が，埋土中からは土器（101）・砥石（197）及びヤリガンナ（220）が出土している。本遺構の廃棄時の下限は，出土土器の形態からⅡ－ 3 期に属すると考えられる。

SX9 は SX7 の南西約 5m に位置するテラス状遺構である。平坦面の南東端は，後世に切り崩され，大きく流失している。平坦面の規模は，確認範囲で長さは南北約 16m 幅は中央部で最大 5.8m の範囲で残存する。掘り込みの深さは最大 201cm で，平坦面の標高は 108.8m ～ 109.0m の範囲で緩やかに傾斜する。平坦面には多数の柱穴と考えられるピットを確認したが，建物などを想定することはできなかった。また，中央付近の壁際から約 80cm 離れた個所に，幅約 30cm 深さ 8 ～ 10cm の溝を断続的に確認した。主に柱穴と考えられるピットの位置する範囲に沿っていることから，建物に沿って掘り込まれた，排水を目的とした溝の可能性がある[3)]。

第 32 図　トンガ坊城遺跡 SX8・SX9 実測図（S=1/60）



第 33 図　トンガ坊城遺跡 SK6 実測図（S=1/30）

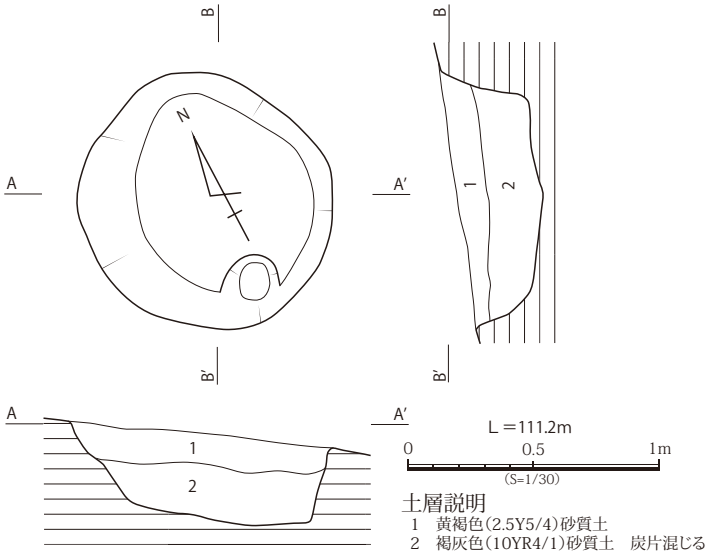
SX9 からは土器（100 ～ 102）が，埋土中からは土器（103 ～ 107）が出土している。本遺構の廃棄時の下限は，出土土器の形態からⅡ－ 3 期に属すると考えられる。

SK6 は SX9 平坦面の北側に位置する土坑である。平面形状は歪な円形で，底面の規模は直径 110cm，底面標高は 107.89m である。掘り方の深さは最大 1.2m である。本土坑は，その規模・形状から貯蔵用と考えられ，その位置から SX8 もしくは SX9 に付随するものと考えられる。なお，本土坑の埋土中からは弥生土器の破片が出土しているが，細片のため図示するに至らなかった。

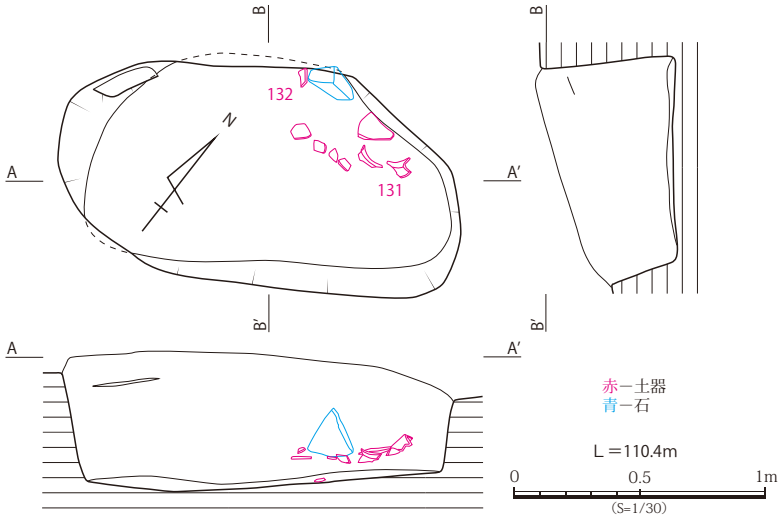
ここで，それぞれの遺構の先後関係についてみると，C － C’ 土層の観察から，SX8 → SX9 の順に営まれたことが想定できる。なお，SK6 との先後関係は不明である。

○ SK7（第 34 図）

SK7 は SH12 の北約 1.5m に位置する土坑である。掘り方上面の平面形状は円形で，底面の規模は長径 75cm 短径 56cm の楕円形で，底面標高は約 110.8m である。底面の南端には直径約 24cm 深さ 10cm の掘りこみを持つ。なお，本遺構に伴う遺物は出土していなく，その性格などは明らかではないが，本遺構の底面直上の埋土は細かな炭片を含んでいることから，屋外炉などの施設の可能性がある。



第 34 図　トンガ坊城遺跡 SK7 実測図（S=1/30）



第 35 図　トンガ坊城遺跡 SK10 実測図（S=1/30）

○ SK10（第 35 図）

SK10 は SX14 の北上段約 4m に位置する土坑である。平面形状は長円形で，底面の規模は長径 145cm 短径 82cm，底面標高は約 109.9m である。南側は山城により削平されているため，本遺構の位置する平坦面はさらに南に広がっていたものと考えられる。

本遺構からは土器（131・132）が，埋土中からは土器（133）が出土している。本遺構の時期は出土土器の形態からⅡ－２－③期に属すると考えられる。

⑤Ⅴ群の遺構

Ⅴ群は調査前の平坦面 6 の北半分に位置する遺構の一群である。平坦面 6 は調査前には一つの段として認識できたが，土層及び地形観察によると弥生時代には SH13 や SX13・14 が位置する上段（Ⅴ群）と，SH14 や SX15 が位置する下段（Ⅵ群）の 2 段に分かれていたことが窺える。そ

の後，山城の築造により平坦面 5 側の斜面を削平・拡張し，下段側に土を盛り一つの段として造成することで，山城の第 9 平坦面を造成している。SX12 は東側斜面に単独で位置するが，あまりにも急峻な斜面で移動は困難である。現状では SX12 と SX13 の間は崩落により大きく崩れているが，SX12 と SX13 はほぼ同レベルに造られていることから，本来は SX13 から等高線に沿って延びる一連の平坦面であったと考えられる。これらのことから，SH13，SX12 ～ 14，SK11 ～ 13 は一連の群として捉える。

○ SH13（第 36 図）

調査区の南端の平坦面の西側，標高 107m 付近に位置する竪穴住居跡である。本住居跡は土層観察により，旧住居廃棄後の埋土中に生活面と考えられる堅緻な面を確認した。以下，廃棄前の住居を SH13a，廃棄後の生活面を SH13b と呼称し，述べていくこととする。

SH13a の床面の規模は東西 5.0m，南北 4.6m の隅丸方形である。 床面標高は約 106.55m で，残存する壁高は最大 71cm である。壁溝はほぼ全周しており，幅 13 ～ 29cm，残存する深さは 5 ～ 11cm である。

主柱穴は位置とその規模から P1 ～ P4 の 4 本が考えられる。各柱穴の規模は，P1 は底面形状が長径 33cm 短径 20cm の楕円形で，底面標高は 106.11m である。P2 は底面形状が直径 25cm の歪な円形で，底面標高 106.08m である。P3 は底面形状が長径 24cm 短径 17cm の長円形で，底面標高は 105.96m である。P4 は底面形状が直径 37cm の円形で，底面標高は 106.02m である。柱間距離は P1 － P2 間が 2.4m，P2 － P3・P4 － P1 間が 2.1m，P3 － P4 間が 2.3m である。

床面の中央からは長径 105cm 短径 55cm 深さ約 15cm の掘り込みを確認した。その形状や床面での位置，埋土に炭片を多く含むことから炉跡と考えられる。

SH13a からは甕（33）・台石（191）が出土している。本遺構の時期は出土土器の形態からⅢ－ 1 期に属すると考えられる。

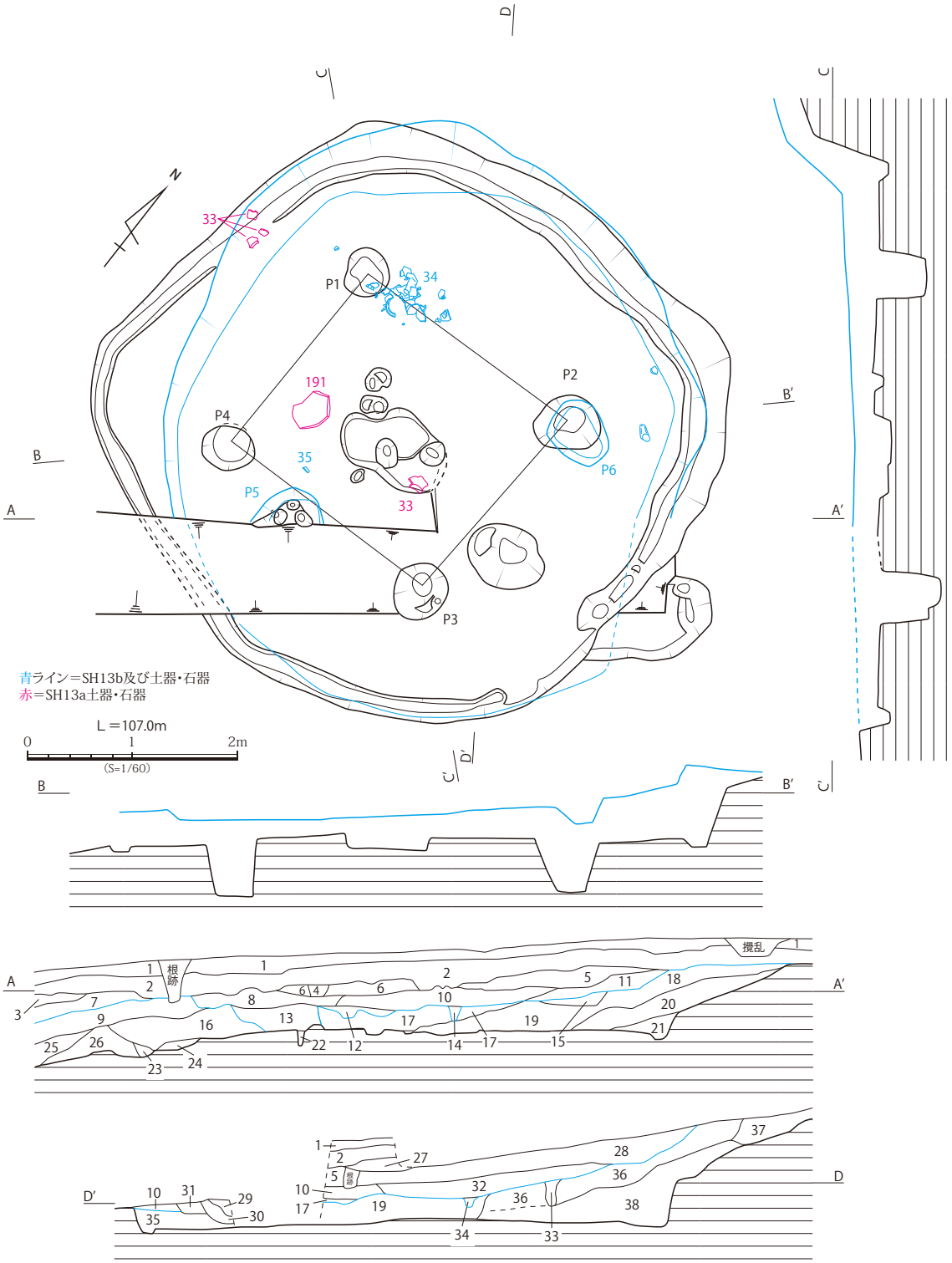
SH13b は SH13a の床面から約 15 ～ 50cm 上の埋土中に確認した堅緻な面である。遺存状態は悪いが，面上に土器などが位置すること，明確な範囲は確定できないが床面中央付近に炭化物片・焼土片が出土し炉跡と推定できることから住居跡とする。

南壁は流失しているが，床面は遺存しており，その規模は東西約 4.3m，南北約 5.0m の歪な円形である。 床面は北西側から南東へ緩やかに傾斜し，その標高は 107.18 ～ 106.44m で，残存する壁高は最大 51cm である。

床面からは主柱穴としてふさわしい深さ・形状をもつ柱穴は確認できなかったが，柱穴と考えられる P5・P6 を確認した。P5 はトレンチによりその南半を失っているが，残存部から底面形状は長径約 40cm の楕円形と想定でき，底面標高は 106.60m である。P6 は底面形状が長径 50cm 短径 35cm の楕円形で底面標高 106.71m である。柱間距離は 2.8m である。

本住居跡の床面はいずれも SH13a の内側に位置すること，床面が埋土の堆積方向へ緩やかに傾斜することから，本住居跡は SH13 廃棄後に窪地となった場所を利用したものと考えられる。

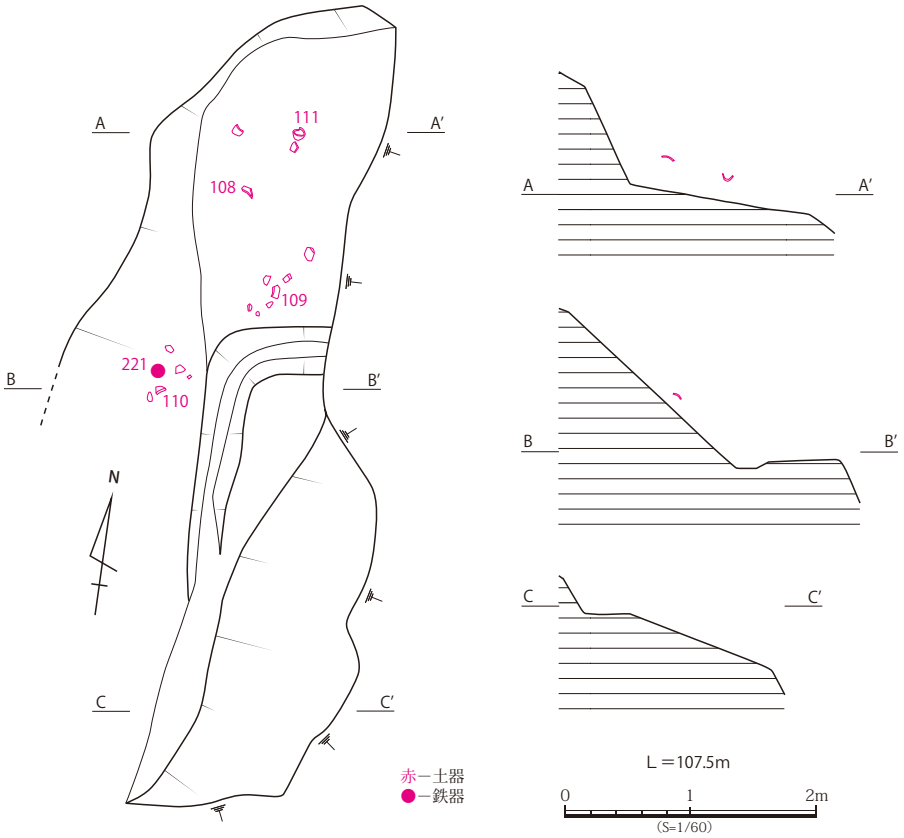
SH13b からは土器（34・35）が出土している。本遺構の時期は出土土器の形態からⅢ－ 2 期に



SH13土層説明

1 黄褐色(10YR5/8)くすむ砂質土 表土層
2 明黄褐色(10YR6/8)砂質土
3 明黄褐色(10YR6/6)砂質土
4 黄褐色(10YR5/8)砂質土
5 褐灰色(10YR4/1)砂質土 6層と同層
6 黒褐色(10YR3/1)砂質土 7層と同層
7 にぶい黄褐色(10YR6/3)砂質土
8 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土 炭片混じる
9 褐色(10YR4/4)砂質土
10 褐灰色(10YR4/1)土
11 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
12 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
13 黒色(10YR2/1)土 ～1cmの炭片5%混じる
14 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土
15 にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
16 明黄褐色(10YR6/8)砂質土 やや粘質
17 明黄褐色(10YR7/6)砂土
18 にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
19 黄橙色(10YR8/6)砂土
20 浅黄橙色(10YR8/4)砂土
21 浅黄褐色(10YR7/6)砂土
22 黒色(10YR2/1)土 16層よりやや明
23 黄褐色(9YR5/8)砂質土
24 橙色(7.5YR6/8)砂質土
25 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
26 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土 やや粘質
27 明黄褐色(10YR6/8)砂質土
28 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
29 にぶい黄色(2.5Y6/4)砂質土 きめ細かい
30 灰黄褐色(10YR6/2)砂質土
31 灰黄色(10YR6/2)砂質土 きめ細かくやや粘質
32 黄灰色(2.5Y4/1)砂質土 炭化物片わずかに含むやや粘質
33 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土
34 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土
35 黄橙色(10YR8/6)砂土
36 にぶい黄色(2.5Y6/4)砂質土
37 にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土
38 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土

第 36 図　トンガ坊城遺跡 SH13 実測図（S=1/60）



第 37 図　トンガ坊城遺跡 SX12 実測図（S=1/60）

属すると考えられる。

○ SX12（第 37 図）

SX12 は SH12 の北東約 7m，東側急斜面の中腹に掘り込まれた平坦面である。平坦面は確認範囲で南北約 6m 幅 1 ～ 1.5m の範囲で残存し，標高は約 107.5m である。平坦面の中央部には，南北約 2m，角度を 90 度変換し東西 0.9m，幅 30cm，深さ 4 ～ 11cm の溝を確認した。

さて本遺構の性格であるが，テラス状遺構として単独に位置するには，あまりにも急峻な斜面に位置し移動に困難なこと，本遺構の位置する標高が SX13 の位置する平坦面とほぼ同じ高さであることから，本来は SX13 の位置する平坦面と一連の平坦面であったものが，後世の削平などにより，分断されてしまったものと考えられる。

本遺構の埋土中からは土器（108 ～ 111）及び鉇（221）が出土している。本遺構の廃棄時の下限は，出土土器の形態から Ⅱ－２－②期に属すると考えられる。

○ SX13・SK11・SK12（第 38 ～ 40 図）

SX13 は SH13 の北東約 7m に位置するテラス状遺構である。東側は急斜面により流失し，平坦面の南側は ST1 ～ 3 により削平されている。平坦面としては後述する西側の SX14 にかけて続くものであるが，土坑やピットの集中する東側一帯を SX13 とする。

平坦面からは，その規模と配置から柱穴と考えられる P2 ～ P5 及び P6 ～ P9 の 4 本柱構造の 2

つの組み合わせを確認した。各柱穴の規模は，P2 は底面形状が長径 34cm 短径 28cm の楕円形で，底面標高は 106.57m である。P3 は底面形状が直径約 40cm の円形で，底面標高は 106.75m である。P4 は底面形状が長径 43cm 短径 33cm の楕円形で，底面標高は 106.55m である。P5 は ST1 により大半を削平されているが，底面形状が長径 18cm 短径 10cm の楕円形で，底面標高は 106.56m である。柱間距離はいずれも 2.0m である。P6 は底面形状が長径 28cm 短径 20cm の楕円形で，底面標高は 106.73m である。P7 は底面形状が長辺 35cm 短辺 28cm の方形で，底面標高は 106.68m である。P8 は底面形状が直径 28cm の円形で，底面標高は 106.65m である。P9 は ST1 や別ピットに削平を受けているが，現状から底面形状が長径 40cm 短径 24cm の楕円形と想定でき，底面標高は 106.79m である。柱間距離はいずれも 1.6 mである。炉跡などの住居跡に付属する設備が確認できないことから，掘立柱建物などの建物跡と考えられる。平坦面には他にも柱穴として妥当な規模・深さをもつピットが多数あるが，遺構としての組み合わせを特定することはできなかった。

本遺構の P1 内からは土器（112・113）が，埋土中から土器（114 ～ 118）が出土している。本遺構の時期は出土土器の形態からⅢ－ 1 期に属すると考えられる。

SK11 は SX13 の平端面の北東端に位置する土坑である。掘り方上面の平面形状は歪な円形となっているが，底面の平面形状はほぼ円形である。底面の規模は長径 85cm 短径 77cm で，掘り方の深さは最大 1.3m である。本土坑は，その規模・形状から貯蔵用と考えられる。

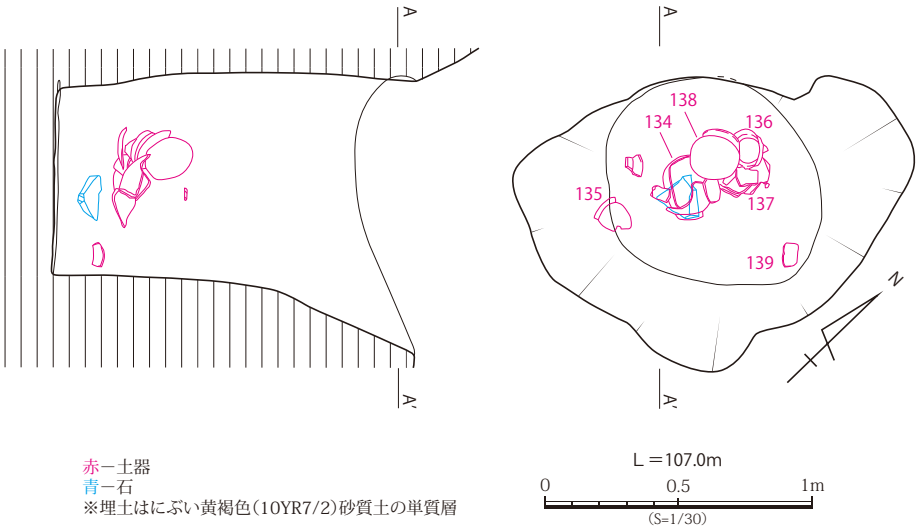
本土坑の底面から 10 ～ 50cm 上の埋土中から，土器（134 ～ 140）がまとまった状態で出土している。掘り方上面から 80cm を超える深さに位置しながら，いずれもほぼ完形の状態であり，祭祀などにより意図的に置かれたものと考えられる。出土土器は形態からⅡ－ 3 期及びⅢ－ 1 期に属すると考えられ，Ⅲ－ 1 期に廃棄されたものと考えられる。

SK12 は SX13 の平坦面の東側，SK11 の南西約 0.6m に位置する土坑である。掘り方上面の平面形状は長円形で，底面の平面形状はほぼ円形である。底面の規模は長径 171cm 短径 165cm で，掘り方の深さは最大 1.4m で東西方向がやや袋状を呈している。本土坑はその規模・形状から貯蔵用と考えられる。

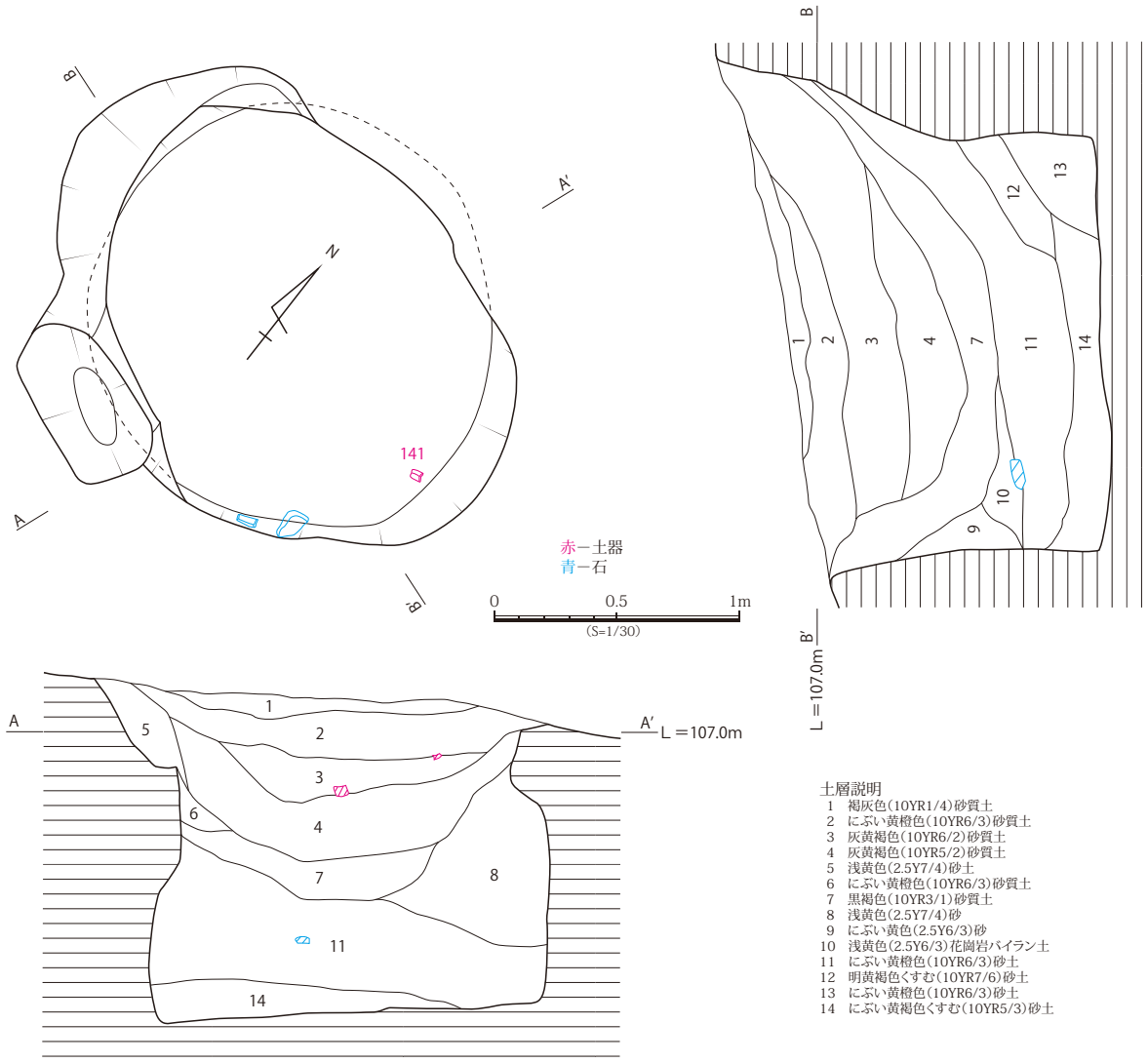
本土坑の埋土中からは土器（141 ～ 143）が，埋土（第 41 図第 1 層）中から鉄鏃（222）が出土している。本遺構の廃棄時の下限は出土土器の形態からⅢ－ 1 期に属すると考えられる。

ここで，それぞれの遺構の先後関係についてみると，SK12 の埋土（第 41 図第 12 層）から出土した土器（141）と接合する土器片が，SK11 の掘り方上面から出土していること，及び土器の形態から，SK11 → SK12 の順に廃棄されたと考えられる。なお，それぞれの土坑は SX13 に付随する施設と考えられる。

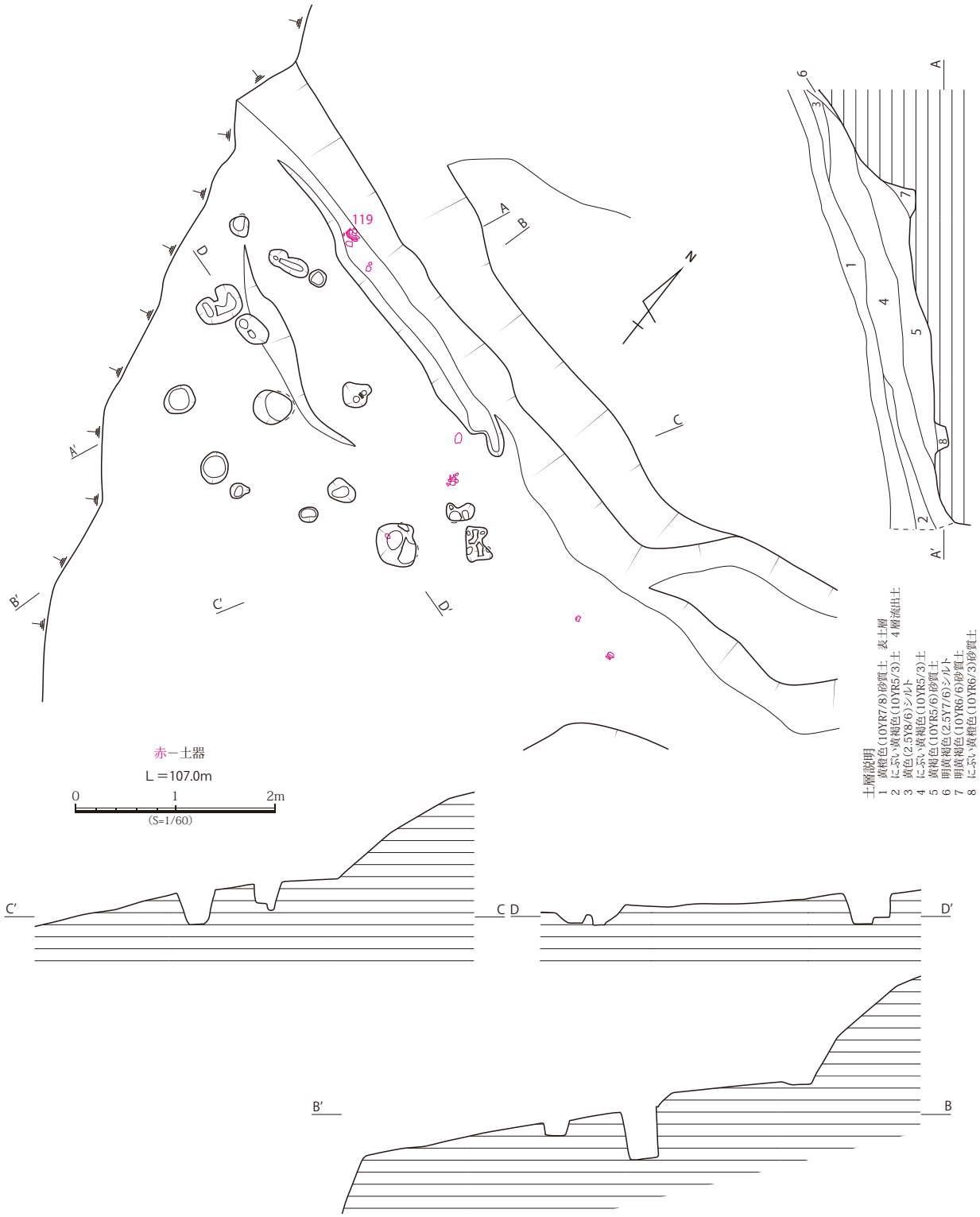
第 38 図　トンガ坊城遺跡 SX13 実測図（S=1/60）



第 39 図　トンガ坊城遺跡 SK11 実測図（S=1/30）



第 40 図　トンガ坊城遺跡 SK12 実測図（S=1/30）

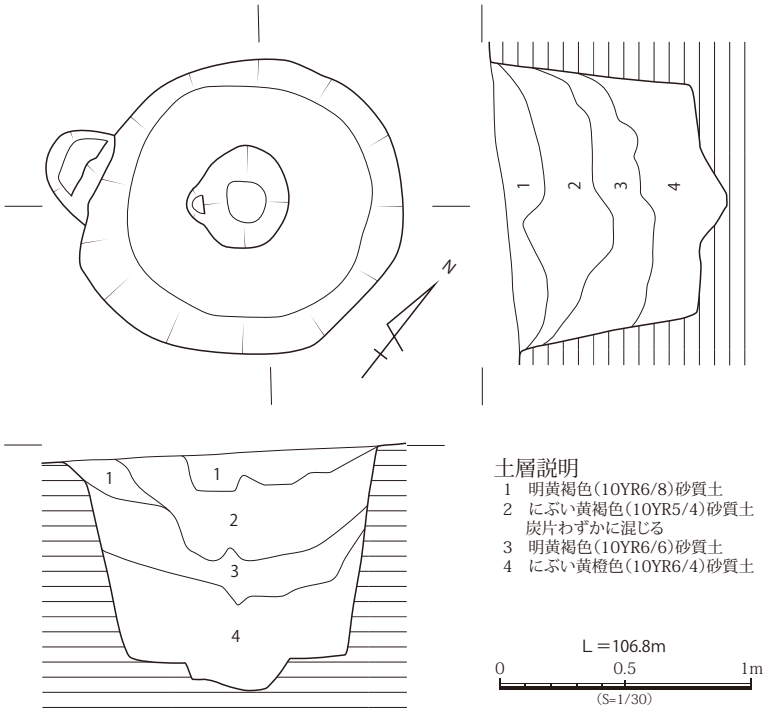


第 41 図　トンガ坊城遺跡 SX14 実測図（S=1/60）

○ SX14（第 41 図）

SX14 は SH13 の北西約 2m に位置するテラス状遺構である。西側は崖面のため流失している。遺構の明確な範囲は明らかではないが，溝やピットの集中する平坦面 6 の北西端一帯を遺構と想定した。

平坦面には複数の柱穴と考えられるピットを確認した。しかしながら，西側が流失しており残存



第 42 図　トンガ坊城遺跡 SK13 実測図（S=1/30）

状態が悪く，建物などを想定することはできなかった。また，平坦面の壁際は長さ 370cm 幅約 20 ～ 32cm 深さ 2 ～ 5cm の溝を確認した。主に柱穴と考えられるピットの位置する範囲に沿っていることから，竪穴住居跡の壁溝や建物に沿って掘り込まれた，排水を目的とした溝の可能性がある。

本遺構の溝内からは土器（119）が出土している。本遺構の時期は出土土器の形態からⅢ－ 1 期に属すると考えられる。

○ SK13（第 42 図）

SK13 は SH13 の南東約 2m に位置する土坑である。平面形状は円形で，底面の規模は直径約 95cm, 底面標高は 105.95m である。底面の中心部には直径約 40cm 深さ 13cm の掘りこみを持つ。なお，本遺構に伴う遺物は出土しておらず，その性格などは明らかではないが，形状から貯蔵穴と考えられる。その位置から，SH13 に付随する貯蔵穴の可能性がある。

⑥Ⅵ群の遺構

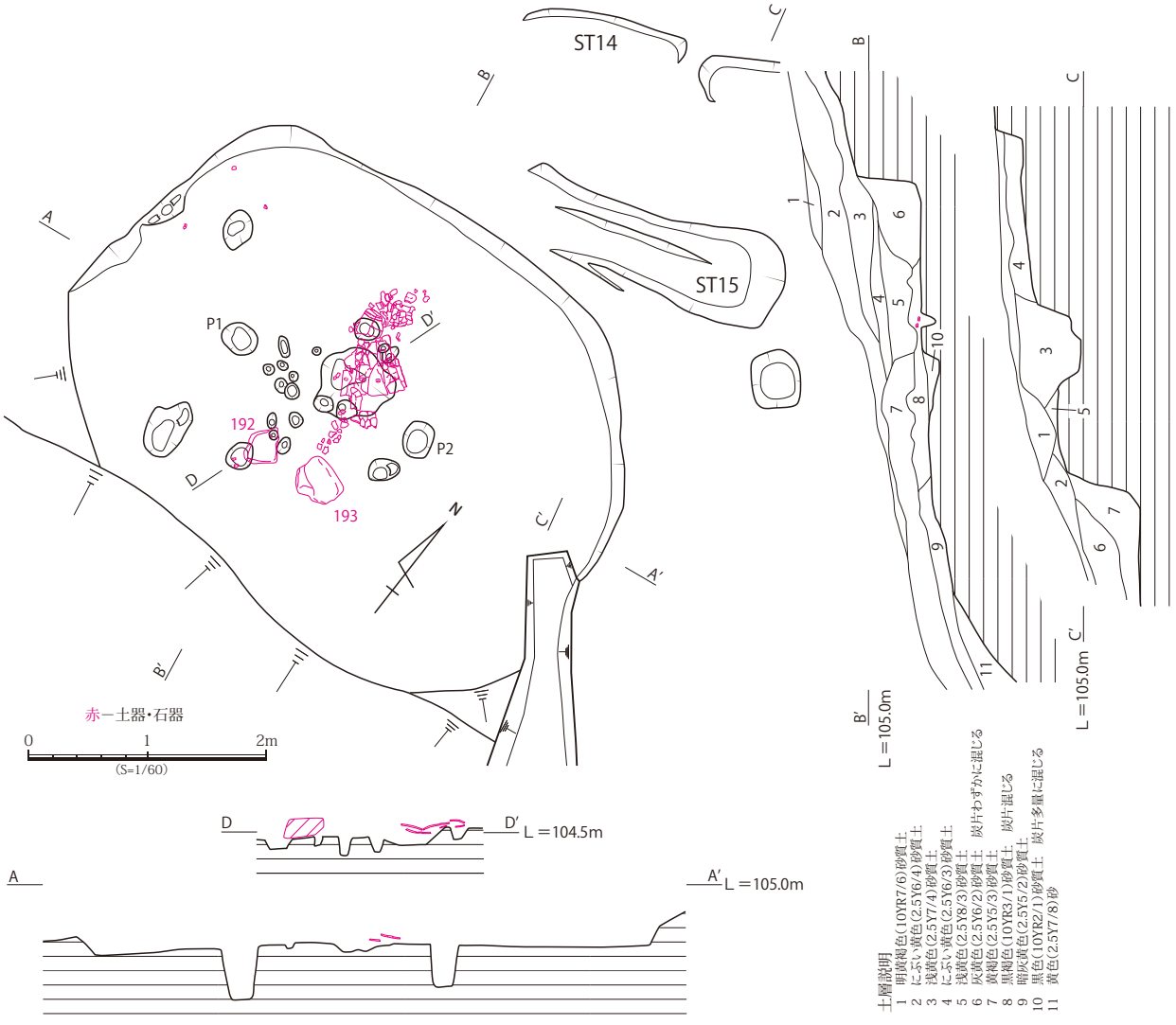
Ⅵ群は調査前の平坦面 6 の南半分に位置する遺構の一群である。前述したとおり，平坦面 6 は調査前には一つの段として認識できたが，土層及び地形観察によると，弥生時代には 2 段に分かれていたことが窺える。このうち下段は SX15 を中心とした面で，山城面は弥生時代の遺構面から約 0.5 m土を盛り造られている。南西部には SH14 が存在することから，本来は SH14 に伴い造成された面であると考えられ，SH14 の南側が流失していることから，少なくとも南西側はさらに平坦面が広がっていたことが想定できる。SX16・17 は SX15 との比高が約 1.5 mあるが，東から南

にかけての調査区外はすぐに崖面となっており，集落の時期にさらに平坦面が広がっていたかどうかは定かではない。ただし，現状でも調査区外下段との比高が約 10m もあることから，SX15 に付随して階段状に掘られた面として想定するのが妥当であろう。これらのことから，SH14，SX15 ～ 17 は一連の群として捉える。

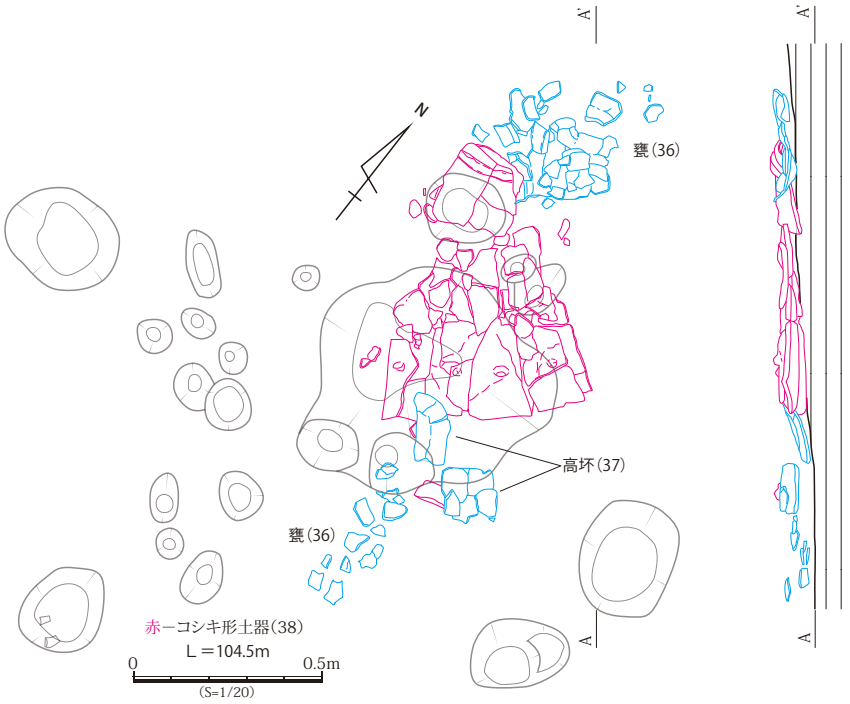
○ SH14（第 43・44 図）

調査区の南端部，SH13 の南東約 9m に位置する竪穴住居跡である。北壁及び東西壁の北半分とそれに伴う床面を確認したが，南側は急斜面となっており流失している。壁面は北壁約 3.2m 東西壁約 2.2m の範囲で残存し，床面は東西 4.5m 南北最大 3.5m の範囲で残存する。残存する床面形状から推測すると，床面の規模は長径約 4.5m 短径 3.4m の長方形と考えられる。床面標高は約 104.5m で，残存する壁高は最大 56cm である。

主柱穴は位置とその規模から P1・P2 の 2 本柱が考えられる。各柱穴の規模は，P1 は底面形状が一辺 15cm の方形で，底面標高は 104.04m である。P2 は底面形状が長径 20cm 短径 16cm の



第 43 図　トンガ坊城遺跡 SH14 実測図（S=1/60）



第 44 図　SH14 コシキ形土器出土状況実測図（S=1/20）

楕円形で，底面標高は 104.15m，P1 － P2 間の柱間距離は 1.7m である。

床面の P1 と P2 の間からは，直径約 60cm 深さ約 14cm の不整形な掘り込みを確認した。床面での位置，埋土に炭片を多く含むことから炉跡と考えられる。

本住居跡の炉跡の上部を中心にコシキ形土器（38）が出土した。コシキ形土器の広口部側には高坏（37）が，狭口部側及び高坏の南側に甕（36）が出土した。また，本住居跡からは前述したもののほかに，床面直上から台石（192・193）が，埋土中から土器（39・40）が出土している。出土した土器はその形態から Ⅲ－ 1 期に属すると考えられる。

○ SX15・SX16・SX17（第 45 図）

SX15 は調査区の南端部に位置するテラス状遺構である。西側は古墳により削平され，平坦面上は土壙墓（ST9 ～ 15）に切られており，平坦面は南に向けて緩やかに流失している。

平坦面には複数の柱穴と考えられるピットを確認した。流失や削平により遺存状態は良くないが，このうち P1 ～ P3 は規模及び位置関係から，本来は東南側に対になる柱穴をもつ建物の柱穴と考えられる。各柱穴の規模は，P1 は底面形状が直径 30cm の円形で底面標高 104.58m である。P2 は底面形状が直径 27cm の円形で底面標高 105.60m である。P3 は底面形状が長径 34cm 短径 30cm の長円形で底面標高 105.68m である。柱間距離は P1 － P2 間が 1.9m，P2 － P3 間が 2.2m である。

本遺構の埋土中からは土器（120）が出土している。

SX16 は SX15 の南に接して位置するテラス状遺構である。南端は調査範囲外のため未調査であ

り，さらに続くものと考えられる。平坦面は確認範囲で東西 10m 以上，幅 1 ～ 1.3m である。床面標高は約 103.5m で，残存する掘り込みの深さは約 1m である。

SX16 からは土器（121・122）が，埋土中からは土器（123 ～ 129）及び台石（200・201）が出土している。本遺構の時期は出土土器の形態からⅢ－ 1 期に属すると考えられる。

SX17 は調査範囲の最南端，SX16 の南に接して位置するテラス状遺構である。東側は調査範囲外のため未調査であるが，現地形はすぐに崖面となる。平坦面は確認範囲で東西 7m 南北は最大 42cm である。床面標高は約 102.8m で，残存する掘り込みの深さは 22cm である。

なお，本遺構からは遺物は出土しなかった。

ここで，ぞれぞれの遺構の先後関係についてみると，C － C’ 土層断面の観察から SX16・17 は同時期に営まれたことが想定できる。SX15 との先後関係は古墳及び土壙墓により削平されているため不明である。

★墳墓群

調査区の南端の平坦面からは，石棺墓 2 基，土壙墓 13 基を検出している。いずれも上部は山城などによる後世の地形改変により削平されている。墓群は尾根の先端部に集中して位置することから，尾根先端部が墓域として意識して造られた一連のものと考えられる。時期を判別できる出土物は無く，ST15 から刀子（223）が出土しているのみである。一般的に弥生時代の集団墓地については遺物の副葬がほとんど無いこと，ST4 が SH13 を切って造られていること，ST13 ～ 15 が古墳の盛り土の下に位置することから，集落廃絶後から古墳が築造されるまでの間（古墳時代前期から古墳時代中期）に造られたものと考えられる。

○ ST1（第 46 図）

ST1 は SX13 の平坦面上の北東に位置する。平面形状は北東隅が突出した隅丸台形で，主軸方位は N31°E，規模は検出面で長さ北辺 240cm 南辺 190cm 幅 100cm である。墓壙底面は長さ北辺 218cm 南辺 176cm 幅 90cm で，底面標高は 106.63m，深さは最大 41cm である。底面中央には長さ 105cm 幅 49cm 深さ 8cm の窪みをもつ。

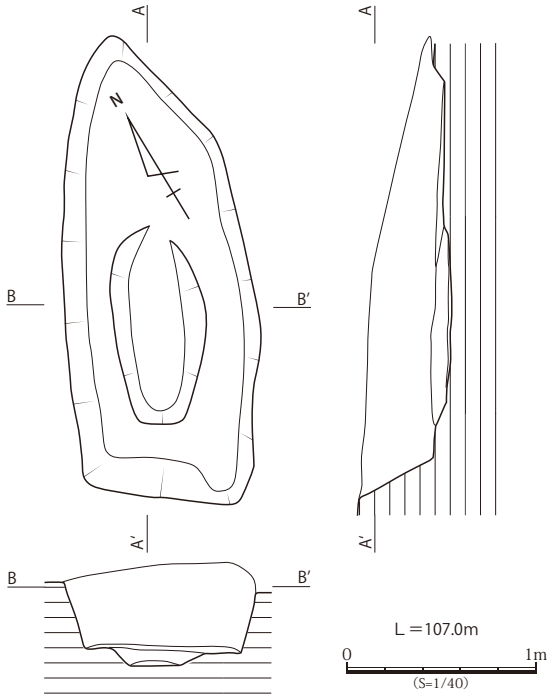
本遺構からは遺物は出土しなかった。

○ ST2（第 47 図）

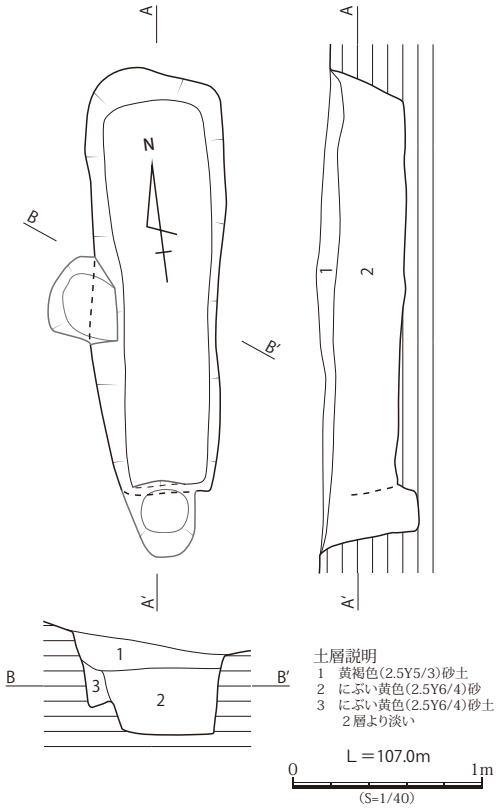
ST2 は SX13 の平坦面上の P3 と P4 の間，ST1 の西約 0.1m に位置する。平面形状は隅丸長方形で，主軸方位は N16°E，規模は検出面で長さ 216cm，幅は南小口で 49cm 北小口で 71cm である。墓壙底面は長さ 200cm 南小口 40cm 北小口 52cm で，底面標高は 106.74m，深さは最大で 48cm である。

本遺構からは遺物は出土しなかった。

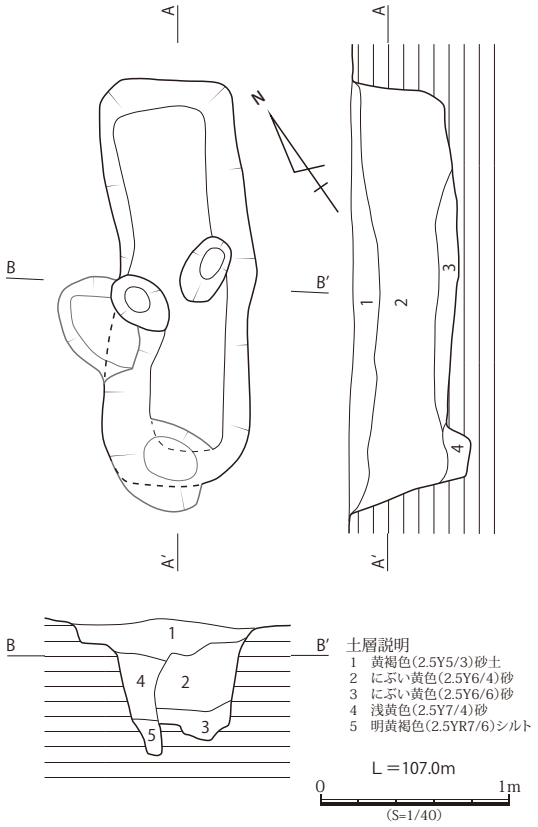
第 45 図　トンガ坊城遺跡 SX15・SX16・SX17 実測図（S=1/60）



第 46 図　ST1 実測図（S=1/40）



第 47 図　ST2 実測図（S=1/40）



第 48 図　ST3 実測図（S=1/40）

○ ST3（第 48 図）

ST3 は SX13 の平坦面上，ST2 の南約 0.5m に位置する。平面形状は隅丸長方形で，主軸方位は N31°E，規模は検出面で長さ 213cm 幅 72cm である。墓壙底面は長さ 181cm 幅 47cm で，底面標高は 106.62m，深さは最大で 58cm である。

本遺構からは遺物は出土しなかった。

○ ST4（第 49 図）

ST4 は SH13 の南東壁を切って造られた石棺墓である。トレンチにより北半分を失っているが，平面形状は残存状況から隅丸長方形と考えられる。主軸方位は N35°E，規模は検出面で長さ 295cm 幅は北小口で 75cm である。墓壙底面の標高は 106.65m である。据えられていた石棺材の大半は失われているが，北側小口の 2 石が残存し，墓壙底面の両小口には掘り込みを確認した。その規模は石材の位置する北側が長さ 32cm 幅 17cm 深さ約 4cm，南側が長さ 26cm 以上幅 22cm 深さ約 11cm である。検出状況から，小口側底面を掘り込んで石材を立て，側石を添える形式の石棺であったと考えられる。遺存していた石材や掘り込みの位置から推定すると，石棺の内寸は長さ 230cm 高さ 30cm 程度であろう。

本遺構からは遺物は出土しなかった。

○ ST5（第 50 図）

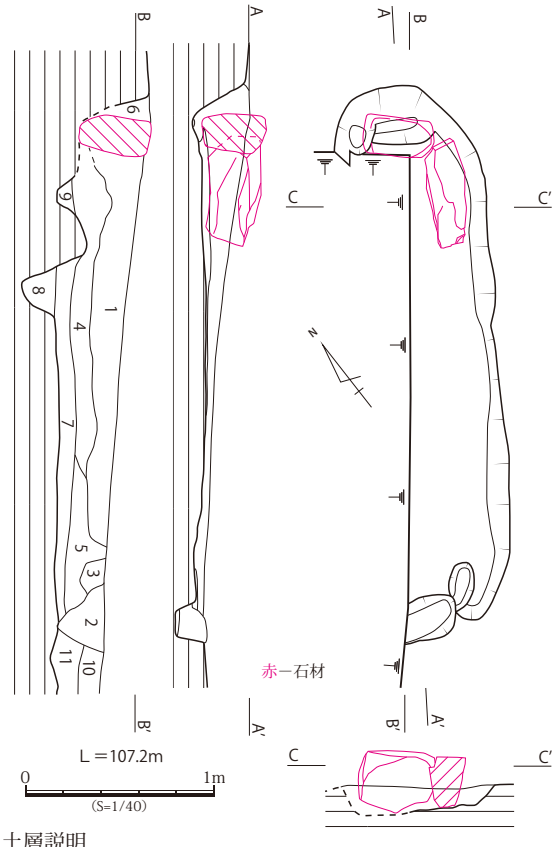
ST5 は ST1 の南東約 3m に位置する石棺墓である。後世の削平のため，掘り方上部と大半の石棺材は失われている。平面形状は隅丸長方形で，主軸方位は N35°E，規模は検出面で長さ 216cm 幅 75cm である。墓壙底面は長さ 176cm 幅 50cm で，底面標高は 106.61 ～ 106.70m，深さは最大で 28cm である。石材は南側小口の 2 石が残存し，墓壙底面の両小口に掘り込みを，西側側面と東側側面の一部に溝状の掘り込みを確認した。その規模は石材の位置する南側が長さ 75cm 幅 25cm 深さ約 30cm，北側は長さ 62cm 幅 18cm 深さ約 13cm，東西側面側は幅 10 ～ 15cm 深さ 2 ～ 4cm である。南北小口側の掘り込みが深く東西側面の掘り込みが浅いことから，小口側に石材を立て，側石を添えていく形式の石棺であったと考えられる。

本遺構からは遺物は出土しなかった。

○ ST6（第 51 図）

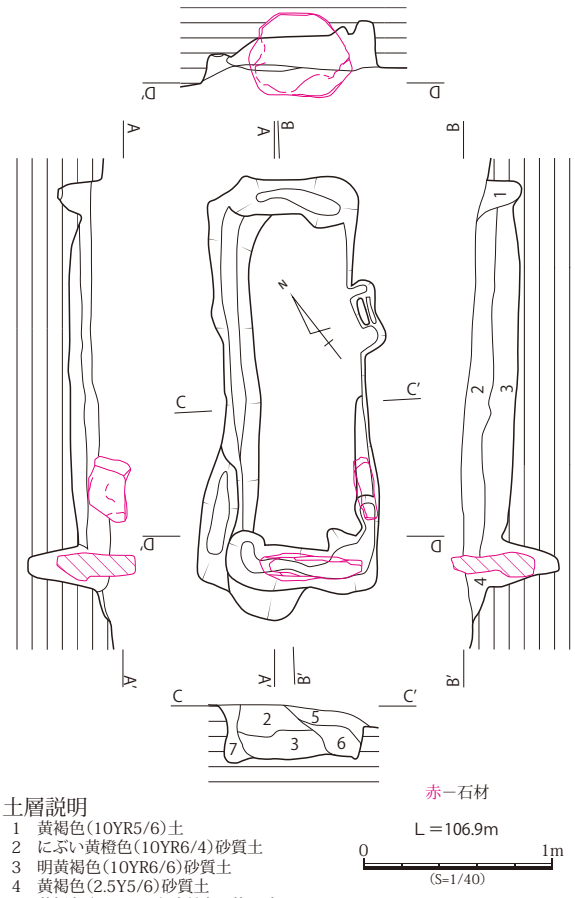
ST6 は ST5 の西約 1.5m に位置する。遺構覆土が浅く，残存状況は悪い。平面形状は隅丸長方形で，主軸方位は N38°E，規模は検出面で長さ 224cm 幅 65cm である。墓壙底面は南半分の遺存状態は良くないが，規模は長さ 209cm 幅約 50cm で，底面標高は 106.65m，深さは現状で約 20cm である。

本遺構からは遺物は出土しなかった。



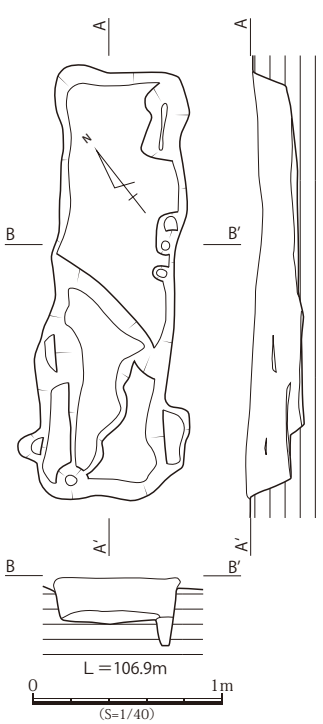
土層説明
1　黄褐色(10YR5/6)砂質土
2　褐色(10YR4/6)砂質土　抜石痕
3　1層に同じ
4　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
5　黄褐色(2.5Y5/3)砂質土
6　灰黄色(2.5Y6/2)砂質土
7　にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土　SH13埋土
8　浅黄色(2.5Y7/3)砂質土　SH13埋土
9　明黄褐色(10YR6/6)砂質土　SH13埋土
10　黄褐色(10YR5/6)砂質土
11　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土

第 49 図　ST4 実測図（S=1/40）

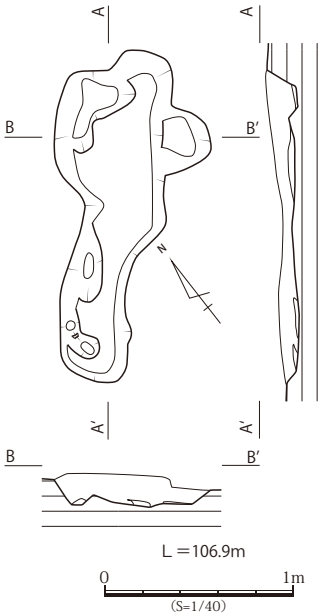


土層説明
1　黄褐色(10YR5/6)土
2　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
3　明黄褐色(10YR6/6)砂質土
4　黄褐色(2.5Y5/6)砂質土
5　黄褐色(10YR5/6)砂質土　抜石痕
6　明黄褐色(10YR7/6)砂質土　抜石痕
7　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土　抜石痕

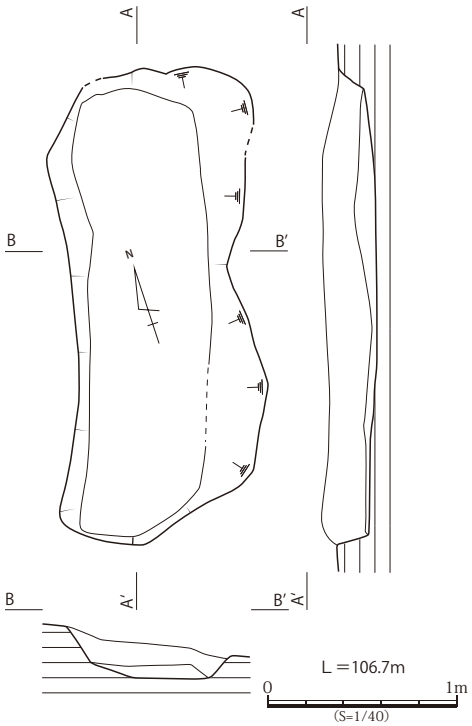
第 50 図　ST5 実測図（S=1/40）



第 51 図　ST6 実測図（S=1/40）



第 52 図　ST7 実測図（S=1/40）



第 53 図　ST8 実測図（S=1/40）

○ ST7（第 52 図）

ST7 は ST6 の西約 0.3m に位置する。遺構覆土が浅く，残存状況は悪い。残存部から推定できる平面形状は隅丸長方形で，主軸方位は N38° E，規模は検出面で長さ 176cm 幅約 35cm である。墓壙底面は長さ 160cm，幅は遺存状態のよい南小口側で 25cm，底面標高は 106.71m，深さは最大で 15cm である。

本遺構からは遺物は出土しなかった。

○ ST8（第 53 図）

ST8 は ST5 の南東約 1.1m に位置する。東側は根株があったため残存状態は良くない。残存部から推定できる平面形状は隅丸長方形で，主軸方位は N18°E，規模は検出面で長さ 252cm，幅は残存状態のよい中央部で 83cm である。墓壙底面は長さ 236cm，幅は南小口で 60cm 北小口で 66cm，底面標高は中央部で 106.35m，深さは最大で 24cm である。

本遺構からは遺物は出土しなかった。

○ ST9（第 54 図）

ST9 は SX15 の平坦面上の北隅に位置する。北東隅と南小口は削平されているが，残存部から推定できる平面形状は長円形で，主軸方位は N20°W，規模は検出面で長さ 236cm 以上，幅は南小口で 52cm 中央部で 60cm である。墓壙底面は南から北にかけて緩やかに傾斜し，長さ 230cm 幅は南小口で 33cm 中央部で 40cm で，底面標高は南小口で約 104.76m 北小口で 104.66m，深さは最大で約 10cm である。底面の短辺が北小口側に向けて広がっていることから，頭位は北側と考えられる。

本遺構からは遺物は出土しなかった。

○ ST10（第 55 図）

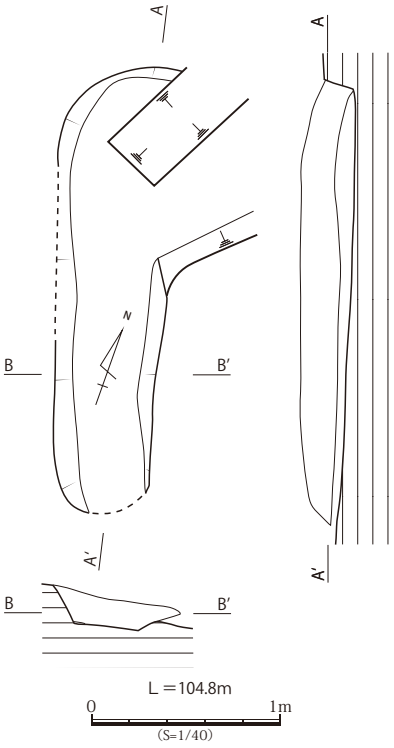
ST10 は SX15 の平坦面上，ST9 の南約 0.9m に位置する。平面形状は歪な隅丸長方形で，主軸方位は N11°W，規模は検出面で長さは最大 170cm 幅 60cm である。墓壙底面は北から南にかけて緩やかに傾斜し，長さは最大 152cm 幅 53cm で，底面標高は北小口で 105.90m，南小口で 105.8m，深さは最大 13cm である。なお，南西側に柱穴と考えられるピットを確認したが，掘り方検出時の切りあい関係から柱穴→ ST10 の順に造られたと考えられる。

本遺構からは遺物は出土しなかった。

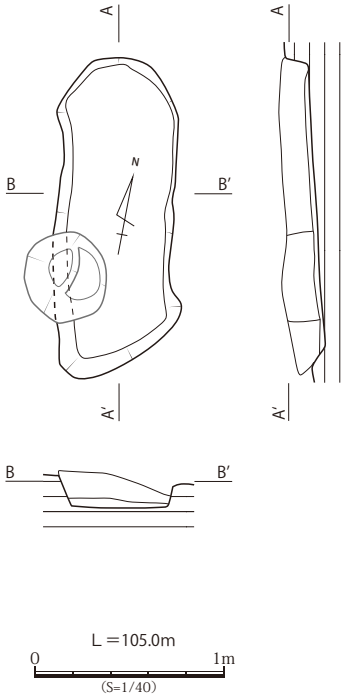
○ ST11（第 56 図）

ST11 は SX15 の平坦面上，ST10 の東約 0.3m に位置する。平面形状は隅丸長方形で，主軸方位は N17°W，規模は検出面で長さ 231cm 幅 130cm である。墓壙底面は長さ 210cm 幅 70cm で，底面標高は 104.29m，深さは最大 56cm である。

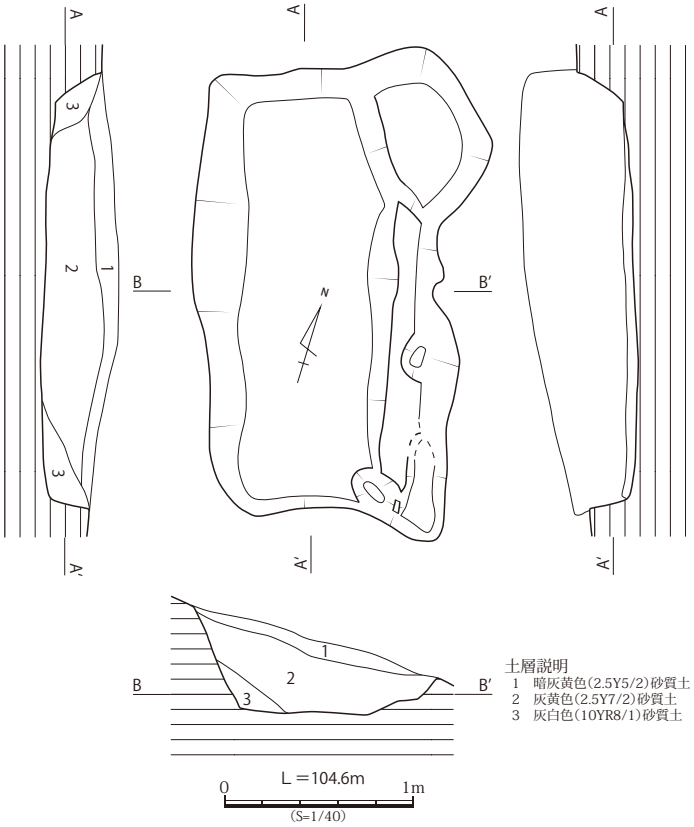
本遺構からは遺物は出土しなかった。



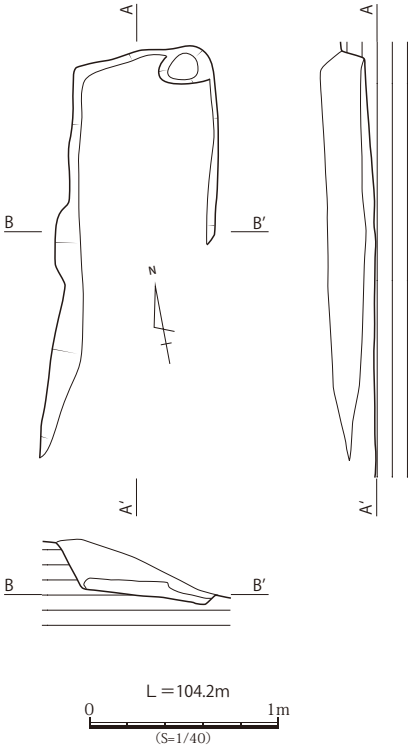
第 54 図　ST9 実測図（S=1/40）



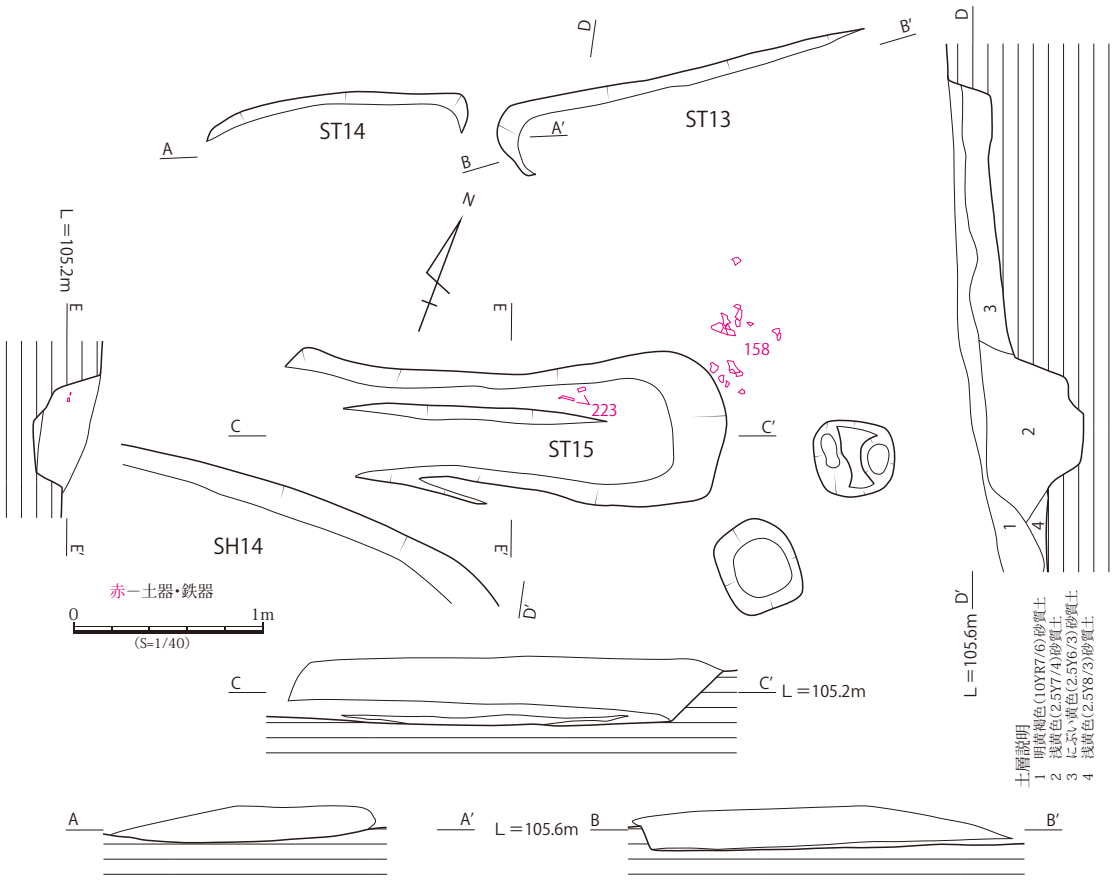
第 55 図　ST10 実測図（S=1/40）



第 56 図　ST11 実測図（S=1/40）



第 57 図　ST12 実測図（S=1/40）



第 58 図　ST13・ST14・ST15 実測図（S=1/40）

○ ST12（第 57 図）

ST12 は SX15 の平坦面上，ST11 の南約 1m に位置する。南小口と東壁の一部は流失している。残存部から推定できる平面形状は長方形で，主軸方位はＮ 11°Ｅ，規模は西辺で長さ 210cm 以上，幅は北小口で 75cm である。墓壙底面は西辺で長さ 200cm 以上，幅は北小口で 67cm，底面標高は約 104.2m，深さは最大で 16cm である。

本遺構からは遺物は出土しなかった。

○ ST13（第 58 図）

ST13 は SX15 の平坦面の西側，SH14 の北約 2m に位置する。上面の大部分は削平されており，北辺と西小口壁の一部が残存する。主軸方位は N56°E，規模は北辺で長さ 200cm 以上，幅は西小口で 40cm である。墓壙底面は北辺で長さ 190cm 以上，幅は西小口で 28cm，底面標高は約 105.5m，深さは最大で 10cm である。なお，土層断面の観察から ST13 は ST15 に先行する。

本遺構からは遺物は出土しなかった。

○ ST14（第 58 図）

ST14 は SX15 の平坦面の西側，ST13 の西約 0.2m に位置する。上面の大部分は削平されており，北辺と東小口壁の一部が残存する。西小口側で掘り方が南へと変換しつつあることから，長さは現

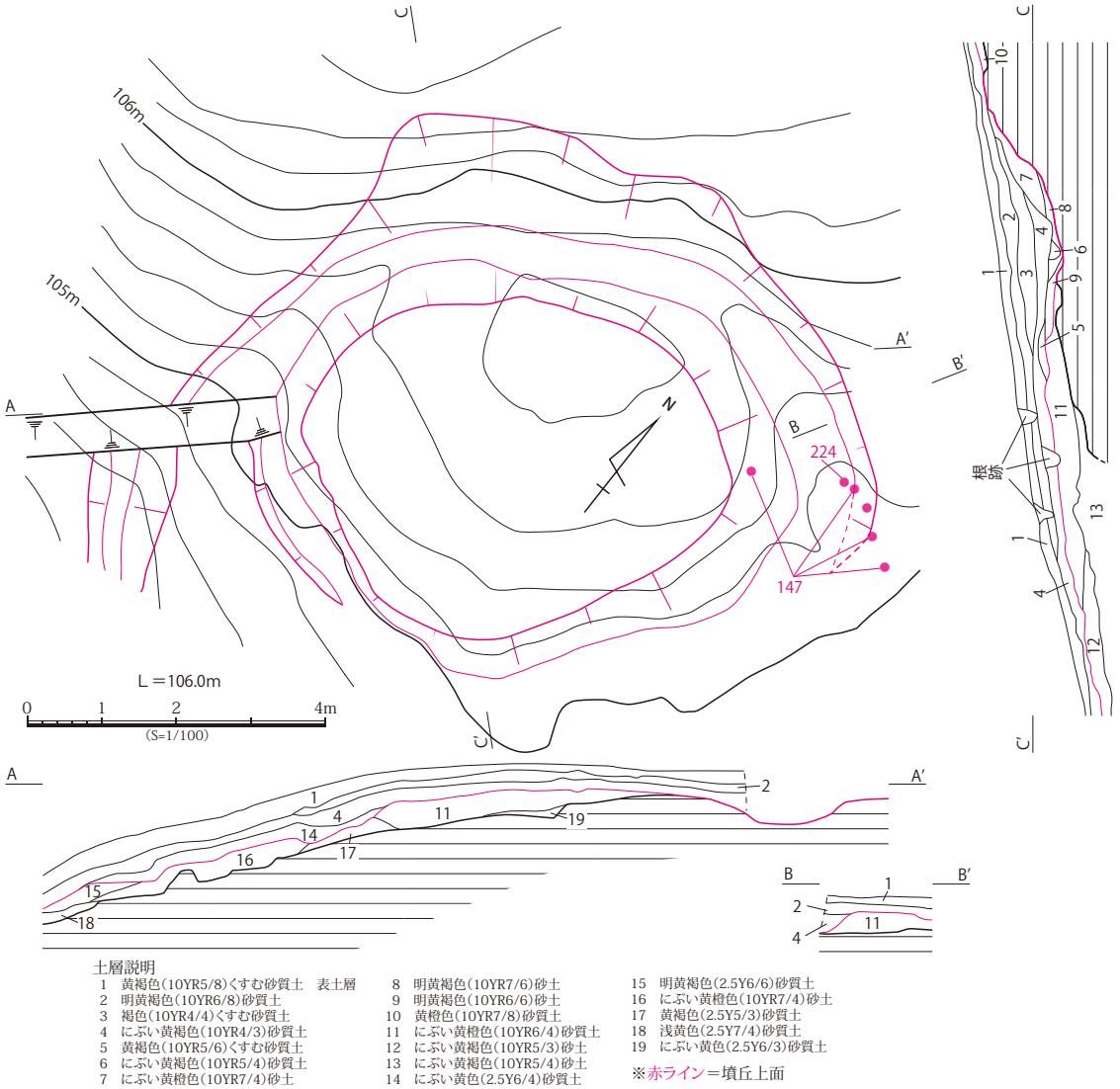
状とあまり変わらないものと考えられる。主軸方位は N66°E，規模は北辺で約 137cm である。墓壙底面は北辺で長さ 133cm 以上，底面標高は約 105.55m，深さは最大で 10cm である。規模から小児用の土壙墓と考えられる。

本遺構からは遺物は出土しなかった。

○ ST15（第 58 図）

ST15 は SX15 の平坦面上の西側，ST13 の南約 1m に位置する。西小口側は流失しているが，残存部から推定できる平面形状は隅丸長方形で，主軸方位は N69°E，規模は検出面で長さ 234cm，幅は北小口で 81cm 中央部で 58cm である。墓壙底面の規模は長さ 205cm 以上，幅は東小口側で 54cm で中央部で 43cm，底面標高は 105.02m である。底面中央部の北辺側には幅 10cm 底面標高約 105.10m の段を有している。

本遺構からは刀子（223）が出土した。また，本遺構の墓壙外北には土器（158）が出土しているが，本遺構に伴うものとは考えられない。



第 59 図　トンガ坊城古墳実測図（S=1/100）

○トンガ坊城古墳（第 59 図）

本古墳は調査区の南端に位置する。墳頂平坦面の標高は 105.9m で，水田面との比高は約 20m である。後世の地形改変のため，墳丘のほとんどは削平を受けており，墳丘がわずかに残っている状態と，尾根元側の周溝でその存在を確認した。周溝は幅 1.7 ～ 2.5m，深さは尾根元側で 1m，墳丘側で 0.3m である。墳丘の規模は南西－北東 6.9m，南東－北西 5.6m で，やや長円形を呈している。土層観察によると，墳丘は尾根元側の地山を削りだし周溝を造り，盛り土により形成されたものである。

墳丘のほとんどは削平されており，埋葬施設を確認することはできなかった。本古墳の周溝から土師器（147・148）及び鉄斧（224）が出土している。

本古墳の時期は，周溝内から出土した土器から 5 世紀前半頃と考えられる。また，墳墓群との関係は，墳丘下に ST13 ～ 15 が位置することから，異なる時期のものと考えられる。

（2）出土遺物

本遺跡の出土遺物としては，弥生土器・土師器・須恵器・鉄器・土製品などがある。遺構に伴わない遺物についても，本遺跡の存続時期外のものも含め特徴的なものを報告する。以下，各遺物について述べるが，個々の遺物の詳細については後掲する観察表を参照されたい。

○弥生時代後期土器～古式土師器（第 60 ～ 73 図）

本遺跡から出土した弥生土器について，時期を追って特徴的なものについて概観してみたい。

出土した土器のうち，後期の前半に属する土器（若島編年のⅠ～Ⅱ－２－①期[4]）は，当時期に属する遺構が少ないことにもよるがあまり出土していない。最も古い時期のものは，SX3 ピット内の埋土から出土した（48）で後期初頭（若島編年のⅠ期）に属すると考えられる。口縁端部は肥厚し３条の凹線が施され，肩部には貝殻腹縁部による刺突文が巡る。他にも同時期に属すると考えられる底部の破片が，斜面埋土から出土しており，本時期に属する遺構が存在していたものと考えられる。後期前葉（若島編年のⅡ－１期）に属するものは，甕形土器（1・132・151・152・154）等がある。口縁部の接合は屈曲部付近で行われており，内面には接合の際に余った屈曲点直下の粘土をヘラ削りした痕跡が見られる。端部は強くつまむことで肥厚するように見せている。肩部には貝殻腹縁部やヘラ状工具による刺突文が巡り，位置は屈曲部からわずかに下に施されている。（1・151）は口縁端部に２～３条の凹線が施されている。

後期中葉の土器のうちⅡ－２－①期の遺構は確認できなかったが，同時期の土器として甕形土器（65）があり，同時期にも遺構が存在していたものと考えられる。続くⅡ－２－②期に属する土器としては，鉢形土器（84・111）がある。鉢形土器（111）の底部は平底で，底部から内湾気味に器厚を減じながら立ち上がる。壺形土器（97）は，口縁が頸部から外反した後，直立気味に立ち上がり端部は丸く収める。形状から備後系のものと考えられる。後期後葉（若島編年のⅡ－２－③期）に属する土器は，甕形土器（58・63・117・133・149・153）は胴部最大径が胴部の中位付近に位置し，全体が丸みを帯びたプロポーションとなる。（153）は肩部にヘラ状工具による

刺突文が巡るが，この時期の他の土器は無文のものが多くなる。鉢形土器（71・146）の底部は平底で，直線的に立ち上がりを見せる。この時期から土器の出土数が増加しはじめる。

後期末葉（若島編年のⅡ－３期）以降になると出土する土器は急激に増加し，この時期と次のⅢ－１期の土器が使用された時期が遺跡の中心をなすものと考えられる。甕形土器（39・55・74・75・130・134）は口縁部が中位あたりから外に湾曲し，端部に向けて厚みが減るものが増える。内面の口縁部と体部の境目はヘラ削りによる鋭い稜をもつものが増え，調整の際の平坦面をもつものは無くなる。胴部最大径は中位付近に位置し，前時期よりもさらに丸みを帯びたプロポーションとなる。壺形土器（168）と器台（169）は斜面中からほぼ完形で近接して出土した。斜面中からの出土ではあるが同時期頃に使用されたものと考えられる。（168）は窪み底の平底をもち，胴部は球状を呈する。屈曲部直下にはヘラ条工具による刺突文が巡り，胴部外面にはヘラ削りをした痕跡が見られる。（169）は脚部表面には磨きが，台部上面にはナデが施され，脚内面や台部外面の見えることを意識していない部分はヘラ削りが施されている。（25・43）はコシキ形土器である。（25）は湾岸部に見られる橙色の胎土で，器厚は 2cm 程度と厚い。広口部直径が 50cm を超える大型の土器で，狭口部には貼付突帯をもち，広口部に半環状の貼付把手を横位に一対もつ。胴部は中位付近で外側へ広がりを見せ，広口部の端部は一定の厚みをもつ。こうした特徴からコシキ形土器の中でも比較的古い部類のものと考えられる。（43）は小型のコシキ形土器で，把手・突帯はもたないものと考えられる。

続く古墳時代初頭（若島編年のⅢ－１期）は出土する土器が最も多く，この時期に「山陰系」土器が出現する。甕形土器（33・41・57・135・141）の口縁部は端部に向けて厚みが減り，端部付近で外反するものが増える。胴部の器厚はほぼ均一のものとなり，薄くなる傾向にある。他の広島湾外域の同時期の甕の胴部はハケ目調整のものがほとんどであるが，本遺跡のこの時期の土器は緩やかな波状文を施すものが多くみられ，「山陰系」土器の影響を受けているものと思われる。（70）は大型の壺形土器の口縁端部である。直線的に外反する端部の上面に内径する立ち上がり部が付く。立ち上がりの部外面には櫛歯状工具によるきつい波状文が施される。（56・123）は比較的長い口縁部をもつ壺形土器である。甕形土器と同様に全体の器厚はほぼ均一で，薄く仕上げられている。底部はほぼ丸底で，肩部には緩やかな波状文が施されている。（22・38）はコシキ形土器である。（38）は湾岸部に見られる橙色の胎土で，器厚は 2cm 程度と厚い。突帯に窪みをもち，広口部には牛角状の貼付把手を７個もつ。胴部は狭口部から 1/3 程度で外側へ広がりを見せ，広口部の端部は一定の厚みをもつ。共伴する土器からⅢ－１期に属すると考えられるが，その特徴からⅢ－１期でも古い部類のものと考えられる。（22）は「ハ」の字状に広がる小型のコシキ形土器で，把手や突帯はもたない。広口部付近の端部で器厚を減じながら外反する。

甕形土器（26・36・53・112・136）は「山陰系」土器である。口縁部は緩やかに外湾しながら立ち上がり，端部は尖り気味に収める。胴部は倒卵形で，底部に平底の痕跡はほとんどない。これらの特徴をもつ甕は他にも多数出土しているが，胴部の器厚は極めて薄く，破片は出土するものの接合できないものが多い。肩部には緩やかな波状文や平行線が施されるものが多く，ほとんどにススが付着し被熱していることが分かる。また，口径は 15 ～ 17cm の中型のものと 23 ～ 25cm

の大型のものに分けられる。これらの土器は大木権現山式土器[5]の特徴を有し，Ⅲ－1期に並行するものと考えられる。

古墳時代前期（若島編年のⅢ－2期）になると土器の出土量は前時期に比べ減少する。甕形土器（76・77・120）は，前時期とほぼ同様の特徴をもつが，口縁部接合点付近の器厚が厚くならない。（120）においては長円形に近いプロポーションを呈すると考えられる。肩部には波状文や平行線が施される。

甕形土器（34・68・80・81・82）は「山陰系」土器である。口縁端部には明確な面をもち，胴部は丸みを帯びたものとなる。肩部にルーズな波状文や平行線が施される。低脚坏（12）は坏部が外方向に直線気味に延び，器高は低く扁平である。これらの土器は小谷式土器[6]の特徴を有し，Ⅲ－2期に並行するものと考えられる。コシキ形土器（10）は広口部直径が50cmを超える大型の土器である。胎土は他の「山陰系」土器と同じく精緻で，器厚は1cm前後と大型品にしては極めて薄い。把手は狭口部に横方向を一対，広口部に縦方向を一対もつ。共伴する土器から小谷式の時期に属するものと考えられる。

なお，前述したが，土器の時期をみると後期末葉（Ⅱ－3期）・古墳時代初頭（Ⅲ－1期）にかけての出土数が急激に増える。この時期に属する検出遺構数が多く，集落がこの間にもっとも繁栄したものと考えられる。特に古墳時代初頭（Ⅲ－1期）においては，「山陰系」土器が出現し，甕形土器においては8割近くの比率を占めることとなる。

○その他の土器（第73図）

須恵器（178～181）は調査区の北西側斜面から出土したものである。蓋（178）はつまみ部は欠損しているが接合痕が残る。坏（181）は高台をもち，底面にはヘラ記号をもつ。いずれも8世紀後葉から9世紀前半のものと考えられる。

○石器（第73～77図）

本遺跡の遺構に伴うものとしては，台石・磨石・砥石などの加工具や，管玉が出土している。また，遺構に伴わないものとしては，砥石・石鏃・石斧・黒曜石片が出土している。以下，特徴的なものについて概観してみたい。

・台石

本遺跡の遺構からは多数の台石が出土している。いずれも材質は花崗岩で一辺が30cm前後，厚みが10cm前後のものである。（196）は両面に被熱・炭化面が見られ，熱を用いたものを加工する台であった可能性がある。台石（200）は強い摩耗面が観察でき，砥石としても使用されたと考えられる。

・管玉（189）

SH9の床面直上から出土した。直径2.4mmと細く，また，穿孔方向は観察できない。

・鏃（204）

調査範囲の北東斜面裾から出土したものである。全長44.5mm幅23mmと比較的大きめの無茎

石鏃である。

・黒曜石（206）

調査区内の東斜面から出土したものである。調整痕は見受けられない。やや白味を帯びており，姫島産と考えられる。

○鉄器（第 77 ～ 78 図）

本遺跡の遺構にともなうものとしては，鉇・刀子・錐状鉄製品や鉄鏃が出土している。また，古墳の周溝からは鉄斧（224）が出土している。以下，特徴的なものについて概観してみたい。

・鉇

（216）は SH12 の床面上から出土し，ほぼ全形が残る。全長 18.6cm，刃部長 2.6cm 刃部幅 1.2cm で，刃部は鏑をもち，茎部は横断面が長方形で幅 1.0cm 厚さ 0.4cm である。茎部には木質が残存する。野島永氏の C2-b 類[7]に相当し，弥生時代後期後葉のものと考えられる。

・刀子

（223）は ST11 から出土している。刃部と柄部は分離した状態であるが，欠損は少ないものと思われる。柄部には木質が残っている。

・鉄斧（224）

無肩の袋状鉄斧である。袋部の横断面は楕円形で，折り返しの両端は接しない。川越哲志氏の分類のⅡａ型[8]に相当し古墳時代中期のものと考えられる。

（3）小結

集落の変遷及び構成について

トンガ坊城遺跡では集落跡に関する遺構として，竪穴住居跡 14 軒，テラス状遺構 18 か所，柱穴群 1 か所，土坑 13 基を確認した。このうち竪穴住居跡は建て替えや重複するものを含めると，少なくとも 18 軒以上になる。これらの遺構は出土遺物の特徴から，弥生時代後期前葉から古墳時代前期にわたって営まれていると想定できる。これらの遺構を出土遺物や土層観察・重複関係から想定できる時期別に分類してみたい。

・後期前葉（Ⅱ－ 1 期[9]） SH1
・後期中葉（Ⅱ－ 2 －②期） SX7c・SX12
・後期後葉（Ⅱ－ 2 －③期） SH6・SK10
・後期末葉（Ⅱ－ 3 期） SH7・SH9
・古墳時代初頭（Ⅲ－ 1 期） SH4b・SH12・SH13a・SH14・SX13・SX14・SX16・SX17
・古墳時代前期（Ⅲ－ 2 期） SH5b・SH13b

その他の遺構については明確な時期は決定できなかった。ただし，SH2・SH3・SH4a は SH4b に先行するため古墳時代初頭（Ⅲ－ 1 期）以前に，SK2 は出土土器の堆積状況から後期末葉（Ⅱ－ 3 期）以前に，SH5b は SH5a に先行するため古墳時代前期（Ⅲ－ 2 期）以前に，SH8 は SH6 に先行することから後期後葉（Ⅱ－ 2 －③期）以前に，SH10 は SH9 に先行し，出土土器の特徴

がⅡ－２－③期に相似する[10]ことからⅡ－２－③期に，SX7 はⅡ－２－①期からⅢ－１期までの土器が出土しておりⅡ－２期からⅢ－１期にかけての時期に相当するものと考えられる。これらの先後関係と各遺構の廃棄の下限を加味すると，下記のとおりとなる。

Ⅱ－１	Ⅱ－２－①	Ⅱ－２－②	Ⅱ－２－③	Ⅱ－３	Ⅲ－１	Ⅲ－２
SH1		SX7c	SH6	SH7	SH4b	SH5b
		SH10	SK10	SH9	SH12	SH13b
		SX12			SH13a	
					SH14	
					SX13	
					SX14	
					SX16・17	
		・・・SH8	・・・SH11	・・・SX8・9	・・・SK11・12	・・・SX1・2
		SX3・・・		・・・SH2・3	・・・SH5a	
			・・・SK1	・・・SH4a	・・・SX2	
				・・・SX12	・・・SX4	
			・・・SK2		・・・SX5	
					・・・SX7	

なお，Ⅱ－２－①期に属する遺構がないが，SX7 の埋土中からはⅡ－２－①期の土器も多数出土している。調査前の平坦面２東側や調査前の平坦面８南側など，山城などにより後世に削平されている個所もあり，同時期に属する遺構も存在しており，集落として継続していたと考えるのが妥当であろう。以上のことから，トンガ坊城遺跡の存続期間は弥生時代後期前葉から古墳時代前期にかけて継続的に営まれたものと考えられる[11]。このうち最も遺構の多い時期がⅡ－３期からⅢ－１期にかけてであり，出土する遺物においても埋土中のものも含め最も多いことから，集落はⅡ－３期を境として最盛期を迎えたと考えられる。なお，当遺跡の場合，「山陰系」土器についてはⅢ－１期に併行する時期のものが多く出土している。

遺構の配置状況としては，住居跡はほぼ尾根の中心上に，東西斜面の等高線に沿いにテラス状遺構が存在する形となる。現状の遺構配置では，山城による削平や後世の崩落等により，遺構の存在する面は階段状にバラバラに位置しているかのように見えるが，集落の最盛期には等高線に沿って馬蹄形状に造成された複数の平坦面上に遺構が存在していたものと考えられる。なお，調査区外北側には比較的広い面が続き，集落が北側へ続く可能性が高い[12]。

注

1）若島一則「広島湾沿岸における弥生時代後期土器等に関する一考察」『研究連絡誌Ⅰ』財団法人広島市文化財団　2002 年
　以下，後期土器編年は若島編年による。
2）同様の施設は他の遺跡でも確認されている。
　財団法人広島市文化財団『寺山遺跡』　1997 年
　財団法人広島市文化財団『長尾遺跡』　1999 年
3）2 に同じ。
4）1 に同じ。
5）『日本土器事典』　雄山閣　1996 年

6）5 に同じ。
7）野島永 『初期国家形成過程の鉄器文化』 雄山閣　2009 年
8）川越哲志 『弥生時代の鉄器文化』 雄山閣　1993 年
9）1 に同じ。
10）特徴からⅡ－ 2 期のいずれかの時期に属すると考えられ，破片のため特定はできない。個人的な印象ではⅡ－ 2 －③期の可能性が高い。
11）なお，斜面埋土からはⅠ期の特徴を持つ土器が数点見られることから，後期初頭から遺構が存在していた可能性がある。
12）調査区外北側の尾根鞍部には広い鞍部や，山城郭面と考えられる平坦面，古墳の可能性がある高まりなどがある。

第 1 表　トンガ坊城遺跡出土土器観察表

（[　]：復元値）

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
1	甕形土器	SH1a	口径　18.0 胴部最大径 22.5 器高　28.6	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は上下に肥厚し平らに収める。胴部は倒卵形を呈し，底部は平底でわずかに窪む。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ磨き，底部立ち上がりヘラ削り後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り 口縁端部に 3 条の凹線を施す。 肩部に貝殻腹縁部による刺突文巡る。	胎土：0.5 ～ 1mm の砂粒含む 焼成：良好 色調:にぶい褐色 (7.5YR5/4) 胴部下 2/3 スス付着。
2	鉢形土器	SH1b	—	口縁部は器厚を減じながら外方向に外反し，端部は平たく収める。胴部は底部に向けて急激に器厚が減じる。	外面：ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：1 ～ 3mm の砂粒・石英粒含む 焼成：良好 色調：明赤褐色 (5YR5/8)
3	壷形土器	SH1b	—	口縁部は外方向に外反しながら立ち上がり，端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り 肩部に貝殻腹縁部による刺突文巡る。	胎土：2 ～ 5mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：明黄褐色 (10YR6/6)
4	土器底部	SH1b	底径　[7.6]	土器の底部。底部は窪み底。	外面：ヨコナデ 内面：ヘラ削り後ナデ	胎土：2 ～ 5mm の砂粒含む 焼成：やや軟 色調：外面は橙色 (7.5YR6/6) 内面は橙色 (7.5YR6/8)
5	鉢形土器	SH1b 埋土	口径　[12.3] 器高　7.0	口縁端部は器厚減じながら丸く収める。底部は平底。	外面：口縁端部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁端部ヨコナデ，以下ヘラ削り，底部に指頭圧痕有り	胎土：2 ～ 5mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：明赤褐色 (5YR5/6)
6	甕形土器	SH4b	口径　[15.0]	口縁部は短く外に湾曲し，一段稜を成して外反気味に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 2mm の砂粒，金雲母含む 焼成：やや軟 色調：灰白色 (2.5Y8/2) 外面にスス付着。
7	甕形土器	SH4b	口径　[17.9]	口縁部は短く外に湾曲し，一段稜を成して外反気味に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 1mm の砂粒わずかに含む，精緻 焼成：やや軟 色調：灰白色 (2.5Y7/1) 内外面にスス付着。
8	甕形土器	SH4b 埋土	—	口縁部は短く外に湾曲し，一段稜を成して外反気味に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下荒れひどく不明 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ヘラ削り後ナデ，以下ヘラ削り	胎土：0.2mm ほどの黒い砂粒含む，精緻 焼成：良好 色調：淡黄色 (2.5Y8/4) 外面にスス付着。

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
9	コシキ形土器	SH4b 埋土	—	コシキ形土器の把手部。	—	胎土：1 ～ 2mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 (7.5YR7/6)
10	コシキ形土器	SH5	狭口部径 9.7 広口部径 32.9 器高 63.1	胴部は下部 1/3 からやや大きく広がる。狭口部は差し込み式の横方向の把手を一対もち，端部は丸く収める。広口部は差し込み式の縦方向の把手を一対もち，端部はやや平たく収める。	外面：中位付近ハケ目，他ナデ 内面：広口部ヨコナデ，狭口部ハケ目，体部ヘラ削り	胎土：2 ～ 7mm の石英・長石含む 焼成：やや軟 色調：にぶい黄橙色 (10YR7/4)
11	高坏	SH5 炉内	口径 25.5	坏部は中位で稜をつくり，口縁部は外湾する。坏部底面に枝などを刺した穴 1 か所ある。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ磨き 内面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ	胎土：0.2mm ほどの黒い砂粒わずかに含む，金雲母多く含む，精緻 焼成：良好 色調：灰白色 (2.5Y8/2) 坏部内面被熱のためか色調変化 (黄灰色 2.5Y5/1) 及び剥離する。
12	低脚坏	SH5	口径 20.8 脚端径 5.6 器高 6.8 脚高 1.4	坏部はわずかに内湾しながら外方向に広がる。口縁端部は丸く収める。脚部はわずかな柱部から「ハ」の字状に広がり，端部は丸く収める。	器表荒れ著しく不明。	胎土：1mm ほどの砂粒含む 焼成：軟 色調：灰白色 (2.5Y8/2)
13	土器底部	SH5	底径 [8.4]	甕形もしくは壷形土器の底部。底部は平底。	外面：ナデ 内面：ヘラ削り	胎土：2 ～ 5mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 (7.5YR6/6)
14	高坏	SH5 埋土	—	高坏の坏部	外面：ハケ目後ヘラ磨き 内面：荒れひどく不明 坏底面円盤部分に草木類の枝を刺した穴有り。	胎土：～ 1mm の砂粒含む，～ 0.2mm ほどの黒い砂粒わずかに含む，精緻 焼成：やや軟 色調：淡黄色 (2.5Y8/3)
15	高坏	SH5 埋土	—	外方向にわずかに内反しながら広がり，口縁部は上方へ角度を急にし，端部は丸く収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ	胎土：～ 1mm の砂粒含む，～ 0.2mm ほどの黒い砂粒わずかに含む，精緻 焼成：やや軟 色調：灰白色 (2.5Y7/1)
16	甕形土器	SH6	—	口縁部は短く外に湾曲し，一段鈍い稜を成して外反気味に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ヘラ削り後ヨコナデ	胎土：1 ～ 3mm の砂粒含む 焼成：やや軟 色調：橙色 (5YR6/8)
17	甕形土器	SH6	—	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たく収める。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土:1 ～ 4mm の砂粒含む，～ 0.2mm ほどの黒い砂粒多く含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/8)

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
18	甕形土器	SH7	口径 [11.0]	口縁部は外方向に外反し，端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，頸部ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 2mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/8)
19	甕形土器	SH9	口径 [14.0]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部はやや平たく収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：1 ～ 3mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/8) 頸部直下に貝殻腹縁部による刺突文巡る。外面にスス付着。
20	土玉	SH9	長径 3.4 短径 3.1 厚 3.1	土製の丸玉	—	胎土：2 ～ 5mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：橙色 (7.5YR6/6)
21	壺形土器	SH9 埋土	口径 [15.0]	口縁部は胴部から緩やかに外反し，端部内面からやや内傾する拡張部を造り出す。端部は丸く収める。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ヘラ削り後タテナデ，以下ヘラ削り	胎土：1 ～ 2mm の砂粒含む 焼成：軟 色調：淡黄色 (2.5Y8/3) 頸部にヘラ状工具による羽状の刺突文巡る。
22	コシキ形土器	SH9 流出土	狭口部径 13.5 広口部径 26.0 器高 24.1	体部は「ハ」の字状に広がる。狭口部端部は平らに，広口部端部はやや丸く収める。	外面：ヘラ削り後ナデ，口縁端部・底端部ナデ 内面：胴部ヘラ削り及び掻き取り，狭口部ナデ，底部から 1/5 ヘラ削り後ヨコナデ	胎土：3 ～ 5mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/8)
23	土器底部	SH9 流出土	底径 [9.2]	底部から胴部下位にかけて内湾気味に外上方に立ち上がる。底部は窪み底。	外面：ナデ 内面：ヘラ削り 底部は指頭によるてごね成形。	胎土：～ 3mm の石英・長石含む 焼成：普通 色調：明黄褐色 (10YR7/6)
24	甕形土器	SH10	—	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たく収める。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：1 ～ 5mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：黄橙色 (7.5YR7/8) 外面にスス付着。
25	コシキ形土器	SH10	狭口部径 9.0 広口部径 34.0 器高 55.2	胴部は中位からやや大きく広がる。狭口部は突帯を巡らし，端部は丸く収める。広口部は一対の貼り付け把手を持ち，端部は平らに収める。	外面：突帯～狭口部ヨコナデ，以下器表荒れ不明 内面：外面：突帯～狭口部ヨコナデ，胴部掻き取り，狭口部ヨコナデ	胎土：3 ～ 6mm の石英多く含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/8) 狭口部にスス多く付着。
26	甕形土器	SH12	口径 18.0 胴部最大径 23.3 器高 29.5	口縁部は短く外に湾曲し，一段突出した稜を成して外湾気味に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。胴部は倒卵形で，底部は丸底。	外面：頸部から上ヨコナデ，以下ハケ目 内面：頸部から上ヨコナデ，以下胴部 1/2 までヘラ削り後ナデ，以下底部までヘラ削り	胎土：1 ～ 2mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：淡黄色 (2.5Y8/3) 外面底部付近スス付着。内面底部付近に炭化皮膜付着。

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
27	甕形土器	SH12	口径 [14.8]	口縁部は短く外に湾曲し，一段稜を成して外反気味に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ヘラ削り後ナデ，以下ヘラ削り	胎土：1 ～ 2mm の砂粒，～ 0.2mm ほどの黒い砂粒，金雲母含む 焼成：軟 色調：浅黄色 (2.5Y8/4) 外面全体にスス付着。
28	甕形土器	SH12	—	口縁部器厚を減じながら外反し，端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部タテナデ	胎土：～ 2mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/8) 外面全体にスス付着。
29	甕形土器	SH12	口径 20.3	口縁部は短く外に湾曲し，一段稜を成して外反気味に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：1 ～ 2mm の砂粒，金雲母含む 焼成：やや軟 色調：灰黄色 (2.5Y7/2) 内面口縁端部にスス付着。
30	コシキ形土器	SH12	広口部径 [30.8]	体部は「ハ」の字状に広がる。広口部には縦方向に取手が一対付く。広口部端部は内向しながらも平たく収める。	外面：ハケ目 (荒れ著しい)，広口部端部ヨコナデ 内面：広口部ナデ，以上ヘラ削り 内面わずかにスス付着。	胎土：～ 1mm の石英粒多く含む 焼成：やや軟 色調：淡黄色 (2.5Y8/4)
31	コシキ形土器	SH12	—	大型のコシキ形土器狭口部の貼り付け突帯。	外面：ナデ 内面：ハケ目	胎土：3 ～ 5mm の砂粒，～ 0.2mm ほどの黒い砂粒，金雲母含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/8)
32	甕形土器	SH12 埋土	口径 17.6	口縁部は短く外に湾曲し，一段稜を成して外反気味に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ヘラ削り後ナデ，以下ヘラ削り	胎土：1 ～ 2mm の砂粒含む，～ 0.2mm ほどの黒い砂粒わずかに含む，金雲母多く含む 焼成：良好 色調：外面は浅黄色 (2.5Y7/6) 内面はにぶい黄橙色 (10YR7/3) 外面全体にスス付着。
33	甕形土器	SH13a	口径 [16.0]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たく収める。胴部は倒卵形を呈する。	外面：口縁部ナデ，口縁端部ヨコナデ，以下ハケ目 内面：口縁部ナデ，口縁端部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 1mm の長石，金雲母多く含む，精緻 焼成：良好 色調：明黄褐色 (10YR7/6) 肩部に波状から平行へ移る櫛描文わずかに残る。口縁端部及び外面胴部下 1/2 スス・吹きこぼれ付着
34	甕形土器	SH13b	口径 22.7	口縁部は短く外に湾曲し，一段鋭く稜を成して外反気味に立ち上がる複合口縁。口縁端部外側は丸く収めるが，内面は面をもつ。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ナデ，頸部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 1mm の砂粒含む，精緻 焼成：良好 色調：灰白色 (2.5Y8/2) 肩部に櫛歯状工具による 4 条の波状文を施す。

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
35	コシキ形土器	SH13b	—	中～大型のコシキ形土器の把手部。	—	胎土：1 ～ 5mm の石英・長石多く含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/8)
36	甕形土器	SH14	口径 14.8 胴部最大径 20.0	口縁部は短く外に湾曲し，一段鋭い稜を成して外湾気味に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。丸胴か？。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ハケ目 内面：口縁部～頸部ヨコナデ，以下ヘラ削り，胴部下 1/2 指頭圧痕有り。	胎土：～ 1mm の石英わずかに含む 焼成：良好 色調：浅黄色 (2.5Y8/4) 外面全面にスス・吹きこぼれ付着。内面胴部にスス付着。
37	高坏	SH14	—	坏部は緩やかに内反しながら広がる。	外面：磨き，坏接合部ハケ目 内面：ナデ 坏底面円盤部分に草木類の枝を刺した穴有り。	胎土：～ 1mm の砂粒含む，～ 0.2mm ほどの黒い砂粒含む，精緻 焼成：良好 色調：外面は浅黄色 (2.5Y7/4) 内面は灰白色 (2.5Y7/2) 外面は激しい二次被熱により，スス・黒変・赤変有り。
38	コシキ形土器	SH14	狭口部径 9.2 広口部径 32.8 器高 63.4	胴部は中位からやや大きく広がる。狭口部は突帯を巡らし，端部は平たく収める。広口部は貼付の牛角状突起が 7 個巡り，端部は平たく収める。	外面：突帯～狭口部ヨコナデ，以下上部 1/2 タテナデ，中位～牛角状突起までハケ後ナデ，以下広口部までハケ後ヨコナデ。 内面：狭口部・広口部ヨコナデ，体部ナデ	胎土：2 ～ 7mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：明赤褐色 (5YR5/8) 外面スス付着，内面わずかにスス付着。
39	甕形土器	SH14	口径 17.0	口縁部は「く」の字状に外反し，端部付近で水平方向にさらに外反する。口縁端部は少しつまみ上げつつ平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁端部ヨコナデ，口縁部ナデ，以下ヘラ削り 肩部にヘラ状工具による刺突文巡る。	胎土：2 ～ 5mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：外面は橙色 (7.5YR6/6) 内面は明黄褐色 (10YR7/6)
40	甕形土器	SH14	—	口縁部は短く外に湾曲し，一段やや下向きに稜を成し，外反気味に立ち上がる複合口縁。口縁端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，頸部沈線状のハケ目 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 1mm の砂粒わずかに含む 焼成：堅緻 色調：浅黄橙色 (10YR8/4)
41	甕形土器	SX1 埋土	口径 [14.6] 胴部最大径 [17.7]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部に向け器厚を減ずる。底部は焼成前に内外面からの穿孔有り，やや尖り底。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 1mm の石粒含む，精緻 焼成：良好 色調：外面は橙色 (5YR6/8) 内面は明黄褐色 (10YR7/6) 胴部下半にスス付着。
42	高坏	SX1 埋土	—	坏部は緩やかに内湾しながら外上方に広がる。口縁端部は丸く収める。坏部底面に枝などを刺した穴が 1 か所ある。	荒れ著しく不明	胎土：～ 1mm の石粒，～ 0.2mm の黒い砂粒含む，精緻 焼成：軟 色調：浅黄橙色 (10YR8/4) 外面にわずかにスス・赤変残る。

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
43	コシキ形土器	SX1 埋土	広口部径 [33.7]	体部は「ハ」の字状に広がる。両口部端部は平らに収める。	外面：両端部ヨコナデ，他ナデ 内面：両端部ヨコナデ，他ヘラ削り後ナデ，及び指頭圧痕	胎土：～ 6mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：外面は灰黄褐色 (10YR5/2)，内面は明赤褐色 (2.5YR5/6)
44	鼓形器台	SX1 埋土	口径 20.8 筒部径 11.1	受け部は逆「ハ」の字状に大きく開き，端部付近で折れ気味に開き，端部は丸く収める。	外面：受け部ナデ，筒部ヨコナデ 内面：受け端部ヨコナデ，以下ヘラ削り後ナデ	胎土：0.5 ～ 1mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：淡黄色 (2.5Y8/3)
45	甕形土器	SX2 埋土	口径 [14.4]	口縁部は短く外に湾曲し一段稜を成し，上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部外側は丸く収めるが，内面は面をもつ。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 1mm の砂粒含む，～ 0.2mm ほどの黒い砂粒及び金雲母多く含む，精緻 焼成：良好 色調：外面は浅黄色 (2.5Y8/4) 内面は灰白色 (2.5Y7/1)
46	坏	SX2 埋土	口径 [12.6]	高坏もしくは低脚坏の坏部。坏部は内湾しながら立ち上がり，口縁端部は丸く収める。	外面：ナデ 内面：ナデ	胎土：～ 0.2mm ほどの黒い砂粒含む，精緻 焼成：やや軟 色調：外面は灰黄色 (2.5Y7/2) 内面は浅黄色 (2.5Y7/3)
47	高坏	SX2 埋土	－	高坏の坏部。坏部は横方向に広がる。	外面：磨き 内面：不明 坏底面円盤部分に棒状のものが貫通した穴有り。	胎土：～ 0.2mm の黒い砂粒含む，金雲母含む，精緻 焼成：良 色調：外面はくすんだ淡黄色 (2.5Y8/4)，内面は浅黄橙色 (10YR8/4)
48	甕形土器	SX3 P8 内	口径 [15.6]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は肥厚し平たく収める。	外面：口縁部ナデ，頸部ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り 口縁端部は貝殻調整による平行線施す。肩部は貝殻腹縁部による刺突文巡る。	胎土：～ 3mm の石英・長石，金雲母含む 焼成：良好 色調：外面は橙色 (10YR6/8) 内面は明黄褐色 (10YR7/6) 頸部にスス付着。
49	土器底部	SX3 埋土	底径 2.6	土器の底部。底部はわずかに窪む平底。	外面：ヘラ削り後ナデ 内面：底部指ナデ，他ヘラ削り後ナデ	胎土：～ 5mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：橙色 (7.5YR7/6)
50	甕形土器	SX5	口径 13.0 胴部最大径 13.4	口縁部は「く」の字状に外反し，端部にむけて器厚を減じながら丸く収める。胴部は倒卵形を呈する。	外面：口縁部ナデ，肩部ヘラ磨き，以下被熱著しく不明 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ヘラ削り後ヨコナデ，以下ヘラ削り後ナデ	胎土：2 ～ 5mm の石粒多く含む 焼成：良好 (二次被熱著しい) 色調：橙色 (5YR 7 /8) 肩部以下被熱により剥離。

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
51	甕形土器	SX5 P1 内	口径 19.1 底径 9.5 器高 17.3	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は丸く収める。底部は粘土を表面にたすことで底面を大きくする。	外面：口縁部から頸部にかけてヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，体部ヘラ削り，底部ナデ	胎土：3 ～ 4mm の石粒多く含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/8) 外面肩部以下著しく被熱・剥離し，所々スス付着。
52	壷形土器	SX5 P5 内	口径 11.3	口縁部は上方に直線的に長く延び，端部は丸く収める。	外面：口縁部タテナデ，胴部ハケ目 内面：口縁部タテナデ，口縁接合部ナデ及び指頭圧痕，胴部ヘラ削り	胎土：～ 4mm の砂粒多く含む，～ 0.2mm の黒い砂粒多く含む 焼成：軟 色調：橙色 (7.5YR7/8)
53	甕形土器	SX5 埋土	口径 14.6 胴部最大径 [18.1]	口縁部は短く外に湾曲し，一段稜を成して外湾気味に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。胴部は倒卵形を呈する。	外面：頸部から上ヨコナデ，以下被熱著しく不明 内面：頸部から上ヨコナデ，以下ヘラ削り 肩部に貝殻もしくはヘラ状工具による平２条の波状平行線を施す。	胎土：～ 2mm の石英含む 焼成：良好 色調：灰白色 (2.5Y8/2) 頸部から下スス付着。
54	甕形土器	SX5 埋土	口径 17.2	口縁部は短く外に湾曲し一段稜を成し，上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 1mm の砂粒含む，～ 0.2mm ほどの黒い砂粒わずかに含む，精緻 焼成：良好 色調：灰白色 (2.5Y8/1)
55	甕形土器	SX5 埋土	口径 13.6 胴部最大径 [14.6]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は丸く収める。胴部は倒卵形を呈する。	外面：口縁部はヨコナデ，肩部はハケ目後ヨコナデ，以下ハケ目後ナデ	胎土：1 ～ 3mm の石粒多く含む 焼成：良好 色調：外面は橙色 (5YR6/8) 内面は橙色 (7.5YR7/6) 胴部下 1/2 スス付着。
56	甕形土器	SX5 埋土	口径 16.6 胴部最大径 13.9 器高 14.9	口縁部は「く」の字状に外反し，外上方に大きく伸びる。口縁端部は丸く収める。底部は丸底。	外面：頸部から上ヨコナデ，以下ハケ目 内面：頸部から上ヨコナデ，以下ヘラ削り 肩部に貝殻腹縁部による平行線を施す。	胎土：0.2 ～ 2mm の石粒含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR7/8) 胴部最大部以下スス付着。
57	甕形土器	SX5 埋土	口径 16.7	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たく収める。	外面：口縁部から頸部にかけてナデ，以下ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ以下ヘラ削り 外面肩部に貝殻腹縁部による平行線からつながる波状文を施す。肩部以下にスス付着。	胎土：白色長石多く含む，精緻 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色 (10YR7/6)
58	甕形土器	SX5 埋土	—	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部棒磨き，以下ヘラ削り	胎土：～ 2mm の砂粒含む，～ 0.2mm ほどの黒い砂粒含む 焼成：軟 色調：橙色 (2.5YR6/8)

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
59	甕形土器	SX5 埋土	—	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ナデ，以下ヘラ削り 接合箇所に貝殻腹縁部による刺突文巡る。	胎土：2 ～ 5mm の石英含む 焼成：やや軟 色調：橙色 (5YR6/6)
60	甕形土器	SX7	口径 [16.8] 胴部最大径 [17.9]	口縁部は「く」の字状に外反し，口縁端部はわずかにつまみ上げながら平らに収める。胴部はやや球状を呈する。	外面：口縁端部ヨコナデ，以下ハケ目後ナデ 内面：口縁部ハケ目後ナデ，口縁端部ヨコナデ，頸部以下ヘラ削り後ナデ	胎土：1.5 ～ 3mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 (7.5YR6/8) 外面口縁部及び胴部下半に吹きこぼれ付着。
61	甕形土器	SX7	口径 11.1 胴部最大径 [13.6]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部はわずかに下方につまむ。端部は平たく収める。胴部は肩部で器厚が最も薄くなり，垂直に下りる。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：1 ～ 4mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：外面はにぶい赤褐色 (5YR5/4)，内面は明褐色 (7.5YR5/6) 外面にスス付着
62	甕形土器	SX7	口径 [15.0]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部に向け器厚を減じる。端部は丸く収める。	外面：口縁部ヨコナデ，頸部ハケ後ナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ナデ，以下ヘラ削り後ナデ	胎土：1 ～ 7mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：外面は橙色 (5YR7/6) 内面は明黄褐色 (10YR7/6)
63	甕形土器	SX7	口径 [16.0]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 3mm の石英・長石含む，金雲母少し含む 焼成：良好 色調：外面は橙色 (5YR6/8) 内面は橙色 (7.5YR6/6) 外面にスス･吹きこぼれ付着。
64	甕形土器	SX7	—	口縁部は「く」の字状に外反する。端部は丸く収める。	外面：ハケ目後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 3mm の石英・長石含む 焼成：やや軟 色調：外面は橙色 (5YR6/6) 内面は橙色 (7.5YR6/6)
65	甕形土器	SX7	—	口縁部は「く」の字状に外反し，端部はやや肥厚し平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 5mm の石英・長石含む 焼成：良 色調：外面は橙色 (3YR6/8) 内面は橙色 (7.5YR6/6)
66	甕形土器	SX7	—	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たく収める。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ナデ，以下ヘラ削り 頸部に貝殻腹縁部による刺突文巡る。	胎土：～ 6mm の石英粒，～ 2mm の長石，～ 0.2mm ほどの黒い砂粒及び金雲母含む 焼成：良 色調：明赤褐色 (5YR5/8)

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
67	甕形土器	SX7	口 径 [16.1] 胴部最大径 [18.9]	口縁部は短く外に湾曲し，一段鈍い稜を成して外湾気味に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：頸部より上ヨコナデ，肩部はハケ目及び貝殻腹縁部口唇部による波状文が一段めぐる。 内面：頸部より上ナデ，以下ヘラ削り	胎土：0.5 ～ 1.5mm の砂粒含む，精緻 焼成：良好 色調：灰白色 (2.5Y8/2)
68	甕形土器	SX7	口径 [19.0]	口縁部は短く外に湾曲し一段稜を成し，上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部は面をもつ。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ナデ，以下ヘラ削り 肩部下に波状文施す。	胎土：～ 5mm の砂粒含む，～ 0.2mm ほどの黒い砂粒及び金雲母含む，精緻 焼成：良好 色調:外面は浅黄色 (2.5Y8/3) 内面は黄灰色 (2.5Y6/1) 外全面にスス付着。
69	甕形土器	SX7	—	口縁部は短く外に湾曲し一段にぶい稜を成し，上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部は外側にわずかにつまみ丸く収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ナデ，以下ヘラ削り後ナデ	胎土：～ 5mm の砂粒含む，～ 0.2mm ほどの黒い砂粒及び金雲母少し含む，精緻 焼成：良 色調：淡黄色 (2.5Y8/3)
70	壺形土器	SX7	口径 [19.9]	口縁部は外方向に外反し，端部内面から内傾する拡張部を造り出す。端部は平たく収める。	外面：拡張部ヨコナデ，以下ナデ 内面：拡張部ヨコナデ，以下ナデ 拡張部外面に波状文を２条施す。	胎土：～ 2mm の砂粒含む，精緻 焼成：良好 色調：浅黄橙色 (10YR8/4)
71	鉢形土器	SX7	口径 [10.8] 底径 [2.5] 器高 8.5	胴部はわずかに内反しながら立ち上がる。底部は平底。	外面：口縁端部ヨコナデ，以下ハケ目，底部付近ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，胴部上1/2 ハケ目，以下ナデ上げ	胎土：2 ～ 5mm の砂粒含む 焼成：軟 色調：橙色 (5YR6/8)
72	不明 (壷形土器?)	SX7	胴部最大径 [9.0] 底径 [4.7]	平底の底部から，胴部が器厚を減じながら内反しつつ立ち上がる。	外面：ナデ 内面：ナデ	胎土：～ 3mm の石英・長石含む 焼成：やや軟 色調：外面は明黄褐色 (10YR6/6)，内面は橙色 (5YR7/8)
73	土器底部	SX7	底径 [4.7]	鉢形土器の底部か。底部は平底。	外面：指頭圧痕 内面：指頭圧痕	胎土：～ 2mm の石英・長石含む 焼成：やや軟 色調：黄灰色 (2.5Y4/1) 底面に葉脈の圧痕有り。
74	甕形土器	SX7a 埋土	口径 [15.6]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：2 ～ 5mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/8) 外面全面にスス付着。
75	甕形土器	SX7a 埋土	口径 [13.5]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部はやや平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：2 ～ 5mm の石英・長石多く含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/8) 外面全面にスス・吹きこぼれ付着。

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
76	甕形土器	SX7a 埋土	口径　[17.3]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部はやや平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り 頸部から肩部にかけ櫛歯状工具による波状文及び波状文からつながる平行線を施す。	胎土：～ 1mm の砂粒少し含む，精緻 焼成：良好 色調：外面は橙色 (5YR6/6) 内面は橙色 (7.5YR6/6) 外面頸部以下にスス付着
77	甕形土器	SX7a 埋土	口径　[14.7]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は丸く収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ナデ，以下ヘラ削り 頸部から肩部にかけ櫛歯状工具による平行線を施す。	胎土：～ 1mm の砂粒わずかに含む，～ 0.2mm ほどの黒い砂粒及び金雲母含む，極精緻 焼成：良好 色調：橙色 (7.5Y6/6)
78	甕形土器	SX7 埋土	—	口縁部は「く」の字状に大きく外反する。端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，頸部ナデ 内面：口縁部ナデ，以下ヘラ削り 頸部にヘラ状工具による刺突文巡る。	胎土：～ 1mm の砂粒わずかに含む，～ 0.2mm ほどの黒い砂粒及び金雲母含む，極精緻 焼成：良好 色調：外面は橙色 (5YR7/6) 内面は明黄褐色 (10YR7/6)
79	甕形土器	SX7a 埋土	口径　[14.6]	口縁部は短く外に湾曲し一段稜を成し，上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ナデ，以下ヘラ削り 肩部上より櫛歯状工具による 6 条の平行線，貝殻腹縁部による刺突文，沈線状のハケ目施す。	胎土：～ 1mm の砂粒含む，精緻 焼成：良 色調:外面は浅黄色 (2.5Y7/4) 内面は浅黄橙色 (10YR8/3) 肩部より下スス付着。
80	甕形土器	SX7 埋土	口径　15.9	口縁部は短く外に湾曲し一段稜を成し，上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り 肩部上より櫛歯状工具による 9 条の平行線，貝殻腹縁部による刺突文，櫛歯状工具による 6 条の平行線施す。	胎土：精緻 焼成：やや軟 色調:外面は浅黄色 (2.5Y8/3) 内面は浅黄色 (2.5Y7/4) 外面全面にスス付着。
81	甕形土器	SX7a 埋土	口径　[17.3]	口縁部は短く外に湾曲し，やや下向きに一段稜を成し，上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部外側は丸く収めるが，内面は面をもつ。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 1mm の砂粒含む，精緻 焼成：良 色 調：灰白色 (2.5YR8/2) 外面全面にスス付着。口縁部に焼成前からの凹み有り。
82	甕形土器	SX7a 埋土	口径　[19.0]	口縁部は短く外に湾曲し一段稜を成し，上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部は面をもつ。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 1mm の砂粒含む，～ 0.2mm ほどの黒い砂粒及び金雲母含む，精緻 焼成：良好 色調：橙色 (5YR7/6)

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
83	甕形土器	SX7 埋土	口径 [25.2]	口縁部は短く外に湾曲し，一段稜を成して外湾気味に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：ヨコナデ，肩部に貝殻腹縁部による波状文わずかに残る。 内面：口縁部以下ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：0.5 ～ 1.5mm の砂粒含む 焼成：軟 色調：灰白色 (2.5Y8/2)
84	鉢形土器	SX7a 埋土	口径 [15.6] 底径 [6.8] 器高 11.0	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は丸く収める。胴部は内反しながら立ち上がる。底部は平底。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ハケ目，底部付近ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り後ナデ	胎土：3 ～ 5mm の砂粒多く含む 焼成：良 色調：外面は橙色 (5YR6/8) 内面は黄桃色 (7.5YR7/8)
85	高坏	SX7 埋土	口径 24.5	坏部は内湾気味に外上方に延び，口縁端部は平らに収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り後ナデ 内面：ナデ 坏部底面に枝などを刺した穴３か所あり，内１か所貫通する。	胎土：～ 1 mm の砂粒含む，精緻 焼成：やや軟 色調：灰白色 (2.5Y8/2)
86	高坏	SX7a 埋土	—	高坏の坏部。坏部は横方向に広がる。	外面：不明 内面：不明 坏底面円盤部分に棒状のものを刺した穴有り。	胎土：～ 0.2mm ほどの黒い砂粒含む 焼成：やや軟 色調：淡黄色 (2.5Y8/3)
87	低脚坏？	SX7a 埋土	口径 [20.4]	坏部は内湾しながら立ち上がり，口縁端部は丸く収める。	外面：不明 内面：ナデ	胎土：～ 1mm の砂粒含む，～ 0.2mm ほどの黒い砂粒多く含む 焼成：良 色調:外面は淡黄色 (2.5Y8/4) 内面は橙色 (5YR7/6)
88	注口土器（注口部）	SX7a 埋土	注口部径 1.0 注口部長 7.6	注口部内面上部は胴部に向けて器厚を減ずる。	器表荒れ著しく不明	胎土：～ 1mm の砂粒含む，精緻 焼成：やや軟 色調：灰白色 (2.5Y8/2)
89	土器底部	SX7 埋土	底径 4.5	底部は平底。	外面：ナデ 内面：ヘラ削り	胎土：2 ～ 7mm の石英・長石多く含む 焼成：良好 色調：明黄褐色 (10YR7/6)
90	土器底部	SX7a 埋土	底径 1.6	甕形土器の底部か。底部はわずかに平底を残す。	外面：ナデ 内面：不明	胎土：～ 3mm の石英・長石多く含む 焼成：良 色調：外面は明黄褐色 (10YR7/6)，内面は橙色 (5YR6/8) 外面にスス付着。
91	土器底部	SX7a 埋土	底径 [5.9]	底部は平底	外面：ナデ 内面：ナデ 外面底部に爪圧痕有り。	胎土：1 ～ 3mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：外面は明赤褐色 (5YR5/6)，内面は橙色 (7.5YR6/6)

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
92	土器底部	SX7a 埋土	底径 [6.3]	底部からほぼ垂直に胴部へと立ち上がる。底部は平底。	外面：ナデ 内面：ナデ	胎土：2 ～ 4mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：外面は褐色 (7.5Y4/3) 内面は黒褐色 (5YR3/1)
93	土器底部	SX7 埋土	底径 [5.6]	底部は平底。	外面：ナデ 内面：ハケ目	胎土：2 ～ 5mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：外面は橙色 (7.5YR6/6) 内面は橙色 (5YR6/6)
94	土器底部	SX7 流出土	底径 6.0	底部は平底。	外面：ナデ 内面：ナデ	胎土：1 ～ 3mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面は橙色 (2.5YR6/8) 内面は明赤褐色 (5YR5/6)
95	土器底部	SX7 流出土	底径 7.0	甕形土器の底部か。底部は平底。	外面：ハケ目，底付近に櫛歯状工具による平行線後ハケ目 内面：ヘラ削り，底部ナデ	胎土：2 ～ 5mm の石英・長石及び金雲母含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/6) 外面にスス付着
96	鉢形土器	SX8	—	口縁部は外反し，端部は平たく収める。	外面：口縁部タテナデ，以下ヨコナデ 内面：口縁部ハケ目，以下ヘラ削り	胎土：2 ～ 4mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/6) 外面全面にスス付着。
97	壷形土器	SX8	口径 [13.4]	頸部は胴部から外反し，口縁部は頸部から垂直に立ち上がる。端部は丸く収める。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部から頸部ヨコナデ，以下ヘラ削り 口縁部に 3 条の凹線を施す。口縁部外面及び口縁部から頸部内面にかけて赤色顔料残る。	胎土：～ 2mm の石英・長石少し含む，精緻 焼成：良好 色調：外面は橙色 (2.5YR6/8) 内面は赤色 (10YR4/8)
98	甕形土器	SX8	—	口縁部は「く」の字状に外反し，端部に向け器厚を減ずる。端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ナデ，頸部ヘラ削り後ナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 3mm の石英・長石含む 焼成：良 色調：外面は橙色 (5YR7/8) 内面は橙色 (5YR6/8)
99	鉢形土器	SX8 埋土	口径 [27.8]	坏部は内湾しながら立ち上がり，口縁端部でわずかに外傾し丸く収める。	外面：口縁端部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁端部ヨコナデ，以下ナデ	胎土：～ 1mm の石粒含む，～ 0.2mm ほどの黒い砂粒及び金雲母含む，精緻 焼成：良 色調：淡黄色 (2.5Y8/4) 外面坏部底に被熱による赤変有り。
100	甕形土器	SX9	口径 [21.9]	口縁部は短く外に湾曲し一段稜を成し，上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部外側は丸く収めるが，内面は面をもつ。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部タテナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 1mm の石粒含む，～ 0.2mm ほどの黒い砂粒及び金雲母少し含む 焼成：軟 色調：浅黄橙色 (10YR8/4)

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
101	甕形土器	SX9	—	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たく収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 1mm の砂粒少し含む，金雲母多く含む，精緻 焼成：良好 色調：橙色 (7.5YR6/6)
102	甕形土器	SX9	—	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ナデ，頸部ヘラ削り後ナデ，以下ヘラ削り	胎土：1 ～ 5mm の石英・長石含む，金雲母多く含む 焼成：良 色調：橙色 (5YR6/8)
103	甕形土器	SX9 埋土	口径 [10.0]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部はやや内傾しつつ丸く収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ナデ，以下ヘラ削り	胎土：2 ～ 5mm の石英・長石含む，金雲母含む 焼成：やや軟 色調：赤色 (10YR5/8)
104	甕形土器	SX9 埋土	—	口縁部は短く外に湾曲し一段稜を成し，上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 1mm の石粒含む 焼成：良 色調：浅黄橙色 (2.5Y8/4)
105	甕形土器	SX9 埋土	—	口縁部は短く外に湾曲し一段稜を成し，上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ヘラ削り後ナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 1mm の石粒含む，精緻 焼成：良好 色調：淡黄色 (2.5Y8/4)
106	高坏	SX9 埋土	脚端径 12.6 脚高 7.8	柱部は筒状を呈し，脚部は「ハ」の字状に広がる。脚端部は丸く収める。	外面：柱部ヘラ削り後ナデ，脚部ナデ 内面：柱部ナデ，脚部ヘラ削り後ナデ 坏部外面底部に指頭圧痕有り。	胎土：0.2mm ほどの黒い砂粒多く含む，精緻 焼成：良好 色調：淡黄色 (2.5Y8/4)
107	鼓形器台	SX9 埋土	筒部径 [11.4]	鼓形器台の筒部。受け部は逆「ハ」の字状に立ち上がる。	外面：ヨコナデ 内面：受け部ナデ，脚部ヘラ削り	胎土：～ 1mm の石粒含む 焼成：やや軟 色調：淡黄色 (2.5Y8/3)
108	甕形土器	SX12 埋土	口径 [14.7]	口縁部は「く」の字状に外反する。端部はわずかに内傾し，平たく収める。	外面：口縁部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ナデ，以下ヘラ削り 頸部直下にヘラ状工具による刺突文巡る。	胎土：～ 3mm の石英・長石含む 焼成：良 色調：橙色 (5YR6/8)
109	甕形土器	SX12 埋土	—	口縁部は「く」の字状に外反する。口縁中位でわずかに内傾し，端部は丸く収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ナデ，以下ヘラ削り 外面頸部にヨコナデに伴う爪条痕有り。	胎土：～ 4mm の石英・長石含む 焼成：良 色調：橙色 (5YR6/8) 外面にスス付着。
110	甕形土器	SX12 埋土	—	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下荒れのため不明 内面：口縁部ナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 3mm の石英・長石含む 焼成：良 色調：明赤褐色 (5YR5/8) 外面にスス付着。
111	碗形土器	SX12 埋土	口径 9.9 底径 3.7	底部から内湾しながら立ち上がり，端部は尖り気味に丸く収める。底部は平底。	外面：ナデ 内面：ナデ，所々に指頭圧痕有り	胎土：2 ～ 4mm の石英・長石多く含む 焼成：良 色調：橙色 (4YR5/8)

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
112	甕形土器	SX13P1	口径　22.8 胴部最大径31.2 器高　36.9	口縁部は短く外に湾曲し，一段突出した稜を成して外湾気味に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。胴部は倒卵形で，底部は丸底。	外面：頸部から上ヨコナデ，肩部ナデ，胴部中位ハケ目，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り 肩部上より櫛歯状工具による８条の平行線，ヘラ状工具による斜め方向の刻み目，櫛歯状工具による６条の平行線施す。	胎土：～ 1mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：淡黄色 (2.5Y8/3) 外面胴部下 1/2 スス付着。 内面胴部下 1/4 炭化皮膜付着。
113	鼓形器台	SX13P1	筒部径　[10.9]	鼓形器台の筒部。受け部は逆「ハ」の字状に立ち上がる。	外面：筒部ヨコナデ，他ナデ 内面：ナデ	胎土：～ 1mm の石粒含む，精緻 焼成：やや軟 色調：灰白色 (2.5Y8/2)
114	甕形土器	SX13 埋土	口径　[18.2]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は丸く収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ナデ，頸部から肩部ヘラ削り後ナデ，以下ヘラ削り	胎土：1 ～ 4mm の石英・長石含む 焼成：良 色調：外面は明赤褐色 (5YR5/8)，内面は橙色 (5YR6/8)
115	甕形土器	SX13 埋土	—	口縁部は「く」の字状に外反し，端部に向け器厚を減ずる。端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，肩部ハケ目後ナデ，以下ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 5mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/8) 外面にスス付着。
116	甕形土器	SX13 埋土	口径　[15.8]	口縁部は短く外に湾曲し一段稜を成し，上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 2mm の石英・長石含む，金雲母多く含む 焼成：良 色調：浅黄橙色 (10YR8/4) 外面口縁部にスス付着，赤変有り。
117	壷形土器	SX13 埋土	—	口縁部は直立気味に「く」の字状に外反し，端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ヨコナデ後指頭圧痕，以下ヘラ削り	胎土：～ 2mm の石英・長石含む，精緻 焼成：良好 色調：橙色 (7.5YR6/6)
118	土器底部	SX13 埋土	底径　3.3	土器の底部。底部は平底。	外面：ハケ目後磨き 内面：ヘラ削り	胎土：～ 3mm の石英含む 焼成：良好 色調：外面は褐灰色 (7.5YR4/1)，内面は橙色 (5YR6/6)
119	甕形土器	SX14	口径　[15.5]	口縁部は短く外に湾曲し一段にぶい稜を成し，上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：被熱・剥離のため不明 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 1.5mm の石英・長石含む 焼成：やや軟 色調：淡黄色 (2.5Y8/4) 外面にスス付着 。

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
120	甕形土器	SX15 埋土	口径　16.8	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は上方向にわずかに摘みながら丸く収める。	外面：口縁部ナデ，以下ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 1mm の砂粒含む，精緻 焼成：良好 色調:にぶい黄橙色(10YR7/4) 肩部に貝殻腹縁部もしくは櫛歯状工具による平行線及び波状文施す。頸部以下にスス付着。
121	甕形土器	SX16	—	口縁部はほぼ垂直に立ち上がり，端部付近で外方向に器厚を減じながら外反する。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 3mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調:にぶい褐色 (7.5YR5/4) 外面にスス付着
122	甕形土器	SX16	口径　16.1	口縁部は短く外に湾曲し一段鈍い稜を成し，上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	荒れ著しく不明	胎土：～ 2mm の石英・長石含む，～ 0.2mm ほどの黒い砂粒含む 焼成：やや軟 色調：浅黄色 (2.5Y8/3)
123	甕形土器	SX16 埋土	口径　15.9 胴部最大径 [14.9]	口縁部は「く」の字状に外反し，外上方に大きく伸びる。口縁端部は丸く収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ハケ目後ナデ 内面：口縁部ナデ，以下ヘラ削り 肩部に貝殻腹縁部による平行線，波状文を施す。	胎土：～ 1mm の石粒含む 焼成：良好 色調：明黄褐色 (9YR6/8) 外面全面にスス付着，胴部下 1/2 に吹きこぼれ付着。
124	甕形土器	SX16 埋土	口径　[13.8] 胴部最大径 [18.5]	口縁部は短く外に湾曲し一段にぶい稜を成し，上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：被熱・剥離のため不明 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り 肩部に櫛歯状工具による波状文を 2 段施す。	胎土：～ 1mm の石粒含む，金雲母多く含む，精緻 焼成：やや軟 色調：淡黄色 (2.5Y8/4) 外面にスス付着。
125	甕形土器	SX16 埋土	口径　16.0	口縁部は短く外に湾曲し一段稜を成し，上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：全面剥離 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 1mm の石粒含む，～ 0.2mm ほどの黒い砂粒及び金雲母含む 焼成：良 色調：淡黄色 (2.5Y8/6) 外面にスス付着。
126	甕形土器	SX16 埋土	—	口縁部は短く外に湾曲し一段稜を成し，上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り 肩部に櫛歯状工具による 5 条の波状文,中位に 4 条の平行線施す。	胎土：～ 0.5mm の石粒少し含む，金雲母多く含む，極精緻 焼成：良好 色調：淡黄色 (2.5Y8/3) 外面にスス付着。
127	甕形土器	SX16 埋土	—	口縁部は短く外に湾曲し一段稜を成し，上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部外側は丸く収めるが，内面は面をもつ。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 1mm の石粒少し含む，金雲母多く含む，精緻 焼成：良好 色調：灰白色 (2.5Y8/2) 外面にスス付着。

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
128	甕形土器	SX16 埋土	—	口縁部は「く」の字状に外反し，端部に向け器厚を減ずる。端部は丸く収める。	外面：口縁端部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 4mm の石英・長石及び金雲母含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/6)
129	低脚坏	SX16 埋土	口径　18.2	坏部は緩やかに内湾しながら外上方に広がる。口縁端部は平面を意識しつつもやや丸みを帯びる。	外面：口縁部ヨコナデ，坏中央付近ヘラ削り，坏底付近ヘラ削り後ナデ，脚接合部にハケ目 内面：口縁端部ヨコナデ，以下中位までヘラ磨き，以下ナデ 坏底面円盤部分に草木類の枝を刺した穴有り。	胎土：0.2mm ほどの黒い砂粒わずかに含む，金雲母多く含む，精緻 焼成：良好 色調：灰白色 (2.5Y8/ 3)
130	甕形土器	SK2	口径　[15.6]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：1 ～ 5mm の石英含む 焼成：良好 色調：明赤褐色 (5YR5/6) 外面にスス･吹きこぼれ付着。
131	甕形土器	SK10	口径　[14.3]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は上方に立ち上がる。端部は丸く収める。	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 5mm の石英，特に長石多く含む 焼成：良 色調：橙色 (5YR6/8) 外面にスス付着。
132	甕形土器	SK10	—	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は肥厚する。端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り 肩部にヘラ状工具による刻み目巡る。	胎土：～ 2mm の石英・長石含む 焼成：良 色調：橙色 (7.5YR7/6) 外面にスス付着。
133	甕形土器	SK10 埋土	—	口縁部は「く」の字状に外反する。端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部直下ナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 5mm の石英・長石含む 焼成：良 色調：明赤褐色 (2.5YR5/6) 外面にスス付着。
134	甕形土器	SK11	口径　[16.5] 胴部最大径 21.0 底径　6.1 器高　24.4	口縁部は「く」の字状に緩やかに外反し，端部は平らに収める。胴部は倒卵形を呈しつつも丸みを帯びる。底部はやや窪む平底。	外面：口縁部ヨコナデ，以下胴部 2/3 までヘラ削り後ナデ，以下 1/3 ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り，底部付近ナデ 外面肩部ヘラ削りによる擬凹線有り。	胎土：2 ～ 5mm の石粒含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/8) 肩部下 2/3 スス付着
135	甕形土器	SK11	口径　13.5 胴部最大径 13.1 器高　[16.6]	厚みを帯びた頸部から口縁部に向けて器厚を減じながら直線的に外上方に延び，端部は丸く収める。胴部の張りは弱く，底部は丸底と思われる。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：2 ～ 5mm の石英粒多く含む 焼成：良好 色調：橙色 (7.5YR7/8) 胴部下 1/2 スス付着。

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
136	甕形土器	SK11	口径　16.5 胴部最大径 21.0 器高　27.6	口縁部は短く外に湾曲し，一段鋭い稜を成して外湾気味に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。胴部は倒卵形を呈し，底部は丸みを帯びる。	外面：口縁部ヨコナデ，以下胴部 1/2 ハケ目，以下ハケ目後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り 外面肩部に貝殻腹縁部による波状文を 2 条施す。内面底部に指頭圧痕有り。	胎土：1mm 程の石英粒含む，0.2mm ほどの黒い砂粒・金雲母多く含む，精緻 焼成：良好 色調：淡黄色 (2.5Y8/4) 胴部下 1/2 スス付着。
137	甕形土器	SK11	口径　[15.8]	口縁部は短く外に湾曲し一段稜を成し，上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部外側は丸く収めるが，内面は面をもつ。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部タテナデ，以下ヘラ削り 外面肩部（全周の 1/2 もしくは 1/4）にヘラ描き文巡る。	胎土：～ 1mm の石粒含む，精緻 焼成：良好 色調：外面は淡黄色 (2.5Y8/4)，内面は浅黄橙色 (10YR8/4) 口縁部にわずかにスス付着。
138	壷形土器	SK11	口径　14.9 胴部最大径 17.6 器高　[16.2]	口縁部は短く外に湾曲し，一段稜を成して外湾気味に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。胴部はやや算盤玉形で，底部は丸底。	外面：口縁部～胴部 1/2 にかけてヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り後ナデ，底部付近指頭圧痕有り。	胎土：～ 1mm の砂粒，～ 0.2mm ほどの黒い砂粒含む 焼成：良好 色調：淡黄色 (2.5Y8/3)
139	低脚坏	SK11	口径　[8.5]	坏部は内湾しながらゆるやかに外方向に立ち上がる。端部は平たく収める。脚部は「ハ」の字状に外湾しながら広がる。	外面：坏部上 1/2 ナデ，坏部下 1/2 ヘラ磨き，脚接合部以下ナデ 内面：坏部ナデ磨き，脚部ナデ	胎土：～ 1.5mm の石英・長石・赤い石粒含む，金雲母多く含む 焼成：良好 色調：灰白色 (2.5Y7/1)
140	土器底部	SK11	底径　2.0	土器の底部。底部は平底。	外面：ナデ 内面：ヘラ削り後ナデ	胎土：～ 2mm の石英含む，～ 0.2mm ほどの黒い砂粒多く含む 焼成：良好 色調：外面は赤橙色 (10YR6/6) 内面は橙色 (2.5YR6/6) 外面著しく被熱。
141	甕形土器	SK12 埋土	口径　[13.7]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部付近でさらに外方向に傾く。端部は器厚を減じ丸く収める。	外面：口縁部ヨコナデ，頸部以下ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 2mm の石英・長石含む 焼成：良 色調：外面はにぶい赤褐色 (5YR5/4)，内面はにぶい褐色 (7.5YR5/4)
142	甕形土器	SK12 埋土	口径　[15.5]	口縁部は短く外に湾曲し一段稜を成し，上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部下半ナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 1mm の石粒含む，金雲母多く含む，精緻 焼成：良好 色調：外面は灰白色 (2.5Y8/2) 内面は浅黄色 (2.5Y8/4) 外面にスス付着。
143	壷形土器	SK12 埋土	—	口縁部は頸部から水平に外反し，端部内面から垂直に立ち上がる拡張部を造り出す。端部は丸く収める。	外面：拡張部ヨコナデ，以下ナデ 内面：拡張部ヨコナデ，頸部タテナデ	胎土：～ 1mm の石粒含む 焼成：良 色調：灰白色 (2.5Y7/1)

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
144	鼓形器台	柱穴群 P1	口径　[28.1]	受け部は逆「ハ」の字状に大きく開き，端部は丸く収める。	外面：回転ヨコナデ 内面：受け端部ヨコナデ，以下ヘラ削り後ナデ	胎土：～ 1mm の石英・長石含む，精緻 焼成：良好 色調：橙色 (2.5YR7/6)
145	鼓形器台	柱穴群 P1	—	脚部は「ハ」の字状に大きく開き，端部は丸く収める。	外面：回転ヨコナデ 内面：脚端部ヨコナデ，他荒れのため不明	胎土：～ 1mm の石英・長石含む 焼成：軟 色調：外面は橙色 (2.5YR7/ 8) 内面は浅黄色 (2.5Y8/4)
146	鉢形土器	柱穴群 埋土	口径　13.1 底径　4.2	体部から口縁部にかけて直線的に外上方に立ち上がり，端部はやや肥厚し丸く収める。底部は平底。	外面：口縁部ナデ，以下ナデ後磨き 内面：体部上 1/2 ヘラ削り，以下ナデ	胎土：2 ～ 4mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 (6YR6/8) 外面底部から胴部 1/2 に黒班有り。
147	小型壷形土器	古墳周溝	口径　6.1 器高　8.6	口縁はやや内傾気味に立ち上がり，端部は丸く収める。胴部はわずかに肩が張りながらも丸形を呈している。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，胴部指頭圧痕。	胎土：1 ～ 5mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 (7.5YR7/6)
148	壷形土器	古墳埋土	口径　[20.3]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は器厚を減じ丸く収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ磨き 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ナデ・指頭圧痕，以下ヘラ削り	胎土：～ 2mm の砂粒わずかに含む 焼成：良好 色調：橙色 (7.5YR7/6)
149	甕形土器	その他 埋土	口径　[9.6] 胴部最大径 [11.9]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部はわずかにつまみながら平たく収める。	外面：口縁～肩部ヨコナデ，以下ヘラ磨き 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 3mm の石英・長石含む 焼成：良 色調：橙色 (5YR7/8) 外面にスス付着。
150	甕形土器	その他 埋土	口径　[17.2]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部はやや平たく収める。	外面：口縁端部ヨコナデ，口縁部ハケ目，頸部ヨコナデ，以下ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り後ナデ	胎土：～ 4mm の石英・長石少し含む 焼成：良好 色調：外面は橙色 (5YR6/8) 内面は橙色 (7.5YR7/6)
151	甕形土器	その他 埋土	—	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は肥厚しつつ平らに収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り 肩部にヘラ状工具による刺突文巡る。	胎土：3 ～ 7mm の石英粒多く含む 焼成：やや軟 色調：明褐色 (5YR4/8)
152	鉢形土器	その他 埋土	—	口縁部は外上方に外湾し，端部はわずかに肥厚しつつ平らに収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下棒磨き 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：1mm 程度の長石含む 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色 (10YR7/4) 外面に黒班残る。
153	甕形土器	その他 埋土	—	口縁部は「く」の字状に外反する。端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ナデ，以下ヘラ削り 肩部にヘラ状工具による刺突文巡る。	胎土：～ 4mm の石英・長石含む，金雲母多く含む 焼成：良好 色調：にぶい褐色 (7.5YR5/3) 外面にスス付着。

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
154	甕形土器	その他 埋土	—	屈曲部の接合箇所を持ち，外湾しながら外上方へ延び，端部はわずかにつまみ上げ，平面に収める。	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り 接合箇所に貝殻腹縁部による刺突文巡る。	胎土：3～7mmの砂粒，金雲母含む 焼成：良好 色調：明褐色 (7.5YR5/6)
155	甕形土器	その他 埋土	—	屈曲部の接合箇所を持ち，外湾しながら外上方へ延び，端部はわずかにつまみ上げ，平面に収める。	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り 接合箇所に貝殻腹縁部による刺突文２条巡る。	胎土：2～7mmの砂粒含む 焼成：やや軟 色調：明赤褐色 (5YR5/8)
156	甕形土器	その他 埋土	口径　[18.0]	口縁部は短く外に湾曲し，一段稜を成して外湾気味に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～1mmの砂粒含む，～0.2mmほどの黒い砂粒多く含む 焼成：やや軟 色調：灰白色 (2.5Y8/2)
157	甕形土器	その他 埋土	口径　[14.9]	口縁部は短く外に湾曲し一段稜を成し，外上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部は鋭く丸く収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ナデ，以下ヘラ削り	胎土:～2mmの石英･長石･赤い石粒含む 焼成：軟 色調：淡黄色 (2.5Y8/3)
158	甕形土器	その他 埋土	口径　[16.4]	口縁部は短く外に湾曲し一段やや下向きに稜を成し，上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部外側は丸く収めるが，内面は面をもつ。	外面：口縁～頸部ヨコナデ，以下ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ナデ，以下ヘラ削り	胎土：～1mmの石粒及び金雲母含む，精緻 焼成：良好 色調：淡黄色 (2.5Y8/4) 外面口縁部にスス付着。
159	甕形土器	その他 埋土	—	口縁部は短く外に湾曲し一段稜を成し，上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	剥離のため不明	胎土：～1mmの石粒含む 焼成：軟 色調：灰白色 (2.5Y8/2)
160	壷形土器	その他 埋土	口径　13.7	口縁部は胴部から緩やかに外反し，端部内面から内傾する拡張部を造り出す。端部は平たく収める。	外面：口縁拡張部ヨコナデ，頸部ハケ目 内面：口縁拡張部ヨコナデ，頸部タテナデ，以下ヘラ削り	胎土:～3mmの石英･長石，～0.2mmほどの黒い砂粒含む 焼成：軟 色調：灰白色 (2.5Y8/2)
161	壷形土器	その他 埋土	—	口縁部は胴部から緩やかに外反し，端部内面から内傾する拡張部を造り出す。端部は丸く収める。	外面：口縁拡張部ヨコナデ，頸部ハケ目 内面：口縁拡張部ヨコナデ，頸部タテナデ，以下ヘラ削り	胎土：～0.5mmの砂粒含む 焼成：良好 色調：浅黄橙色 (10YR8/3)
162	壷形土器	その他 埋土	口径　9.1	口縁部は胴部から緩やかに外反し，端部内面から内傾する拡張部を造り出す。端部は丸く収める。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部タテナデ，以下ヘラ削り 口縁拡張部に貝殻腹縁部による刺突文巡る。	胎土：～3mmの砂粒少し含む 焼成：良 色調:外面は橙色 (7.5YR6/8) 内面は明黄褐色 (10YR6/6)
163	壷形土器	その他 埋土	—	口縁部は胴部から緩やかに外反し，端部内面から内傾する拡張部を造り出す。端部は平たく収める。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ヘラ削り後ナデ，以下ヘラ削り 口縁拡張部にヘラ状工具による波状文施す。頸部直下にヘラ状工具による刻み目巡る。	胎土：～7mmの石英・長石含む 焼成：良好 色調：明赤褐色 (2.5YR5/8)

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
164	鉢形土器	その他 埋土	口径 [8.3]	胴部は内湾しながら上方へ延び，胴部中位で内傾気味に立ち上がる。端部は丸く収める。	外面：口縁端部ナデ後ハケ目，以下ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ，胴部中位に指頭圧痕有り。	胎土：～ 2mm の石英・長石少し含む 焼成：良好 色調：赤褐色 (2.5YR4/8)
165	土器底部	その他 埋土	底径 [8.0]	甕形もしくは壷形土器の底部。底部は平底。	外面：ナデ 内面：ヘラ削り後ナデ，指頭圧痕	胎土：0.5 ～ 1mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：淡黄色 (2.5Y8/3)
166	土器底部	その他 埋土	底径 [8.8]	土器の底部。底部は窪み底。	外面：ナデ 内面：ヘラ削り後ナデ	胎土：～ 5mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：外面は橙色 (5YR6/6) 内面は暗灰色 (N3/)
167	土器底部	その他 埋土	底径 3.7	土器の底部。底部は平底。	外面：ナデ 内面：ヘラ削り及び指頭圧痕	胎土：～ 1mm の石粒・金雲母含む 焼成：良好 色調：外面は橙色 (5YR6/6) 内面は黄灰色 (2.5Y5/1)
168	壷形土器	その他 埋土	口径 10.2 胴部最大径 18.1 底径 4.4 器高 21.9	口縁部は「く」の字状に屈曲し，直立気味に外反する。口縁端部は平らに収める。胴部は球状を呈する。底部は窪み底。	外面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り後ナデ，底部荒れる 内面：口縁部ナデ，頸部ヘラ削り後ナデ，胴部ヘラ削り 頸部粘土接合部上にヘラ状工具による刺突文をめぐらす。口縁端部に爪痕跡有り。	胎土：0.5 ～ 3mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 (7.5YR7/8) 外面底部から 1/4 に黒斑残る。
169	器台	その他 埋土	口径 10.9 脚端径 16.1 器高 10.8	台部はわずかに窪むがほぼ平面で，口縁端部は平らに収める。直立した裾端部からわずかに内湾気味に柱部にむかう。脚中央部付近の厚みは薄い。	外面：台部ナデ，柱部ヘラ削り，脚部磨き，脚端部ナデ 内面：台部ナデ，脚部ヘラ削り後，脚端部ナデ	胎土：0.5 ～ 2 mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：暗灰黄色 (2.5Y5/2)
170	高坏	その他 埋土	脚端径 [11.3] 脚高 [6.9]	脚部は「ハ」の字状にゆるやかに広がり，端部でわずかに内湾し，端部は丸く収める。	外面：柱部から脚部 1/2 はヘラ磨き，以下タテナデ 内面：坏部ヘラ削り後ハケ目，柱部から脚部 1/2 はナデ及び指頭圧痕，脚端部ヨコナデ	胎土：～ 2mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/8)
171	坏	その他 埋土	口径 [17.2]	高坏もしくは低脚坏の坏部。坏部は内湾しながら立ち上がり，口縁端部は丸く収める。	外面：ヨコナデ及びハケ目 内面：口縁端部ヨコナデ，以下ヘラ削り後ナデ	胎土：1 ～ 3mm の石英含む 焼成：良好 色調：外面は橙色 (5YR6/6) 内面は橙色 (7.5YR7/6) 外面に黒斑残る。
172	注口土器 （注口部）	その他 埋土	注口部径 1.2 注口部長 7.6	注口部内面は端部に向けて器厚を減ずる。	器表荒れ著しく不明。	胎土：～ 0.5mm の砂粒含む 焼成：やや軟 色調：淡黄色 (2.5Y8/3)

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
173	鼓形器台	その他 埋土	口径　24.1 底径　21.2 筒部径　10.3	受け部は逆「ハ」の字状に大きく開き，端部は丸く収める。脚部は「ハ」の字状に大きく開き，端部は丸く収める。	外面：ヨコナデ 内面：受け部ヘラ削り後ナデ，脚部ヘラ削り，脚端部ヨコナデ	胎土：～ 1mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：灰白色 (2.5Y7/1)
174	コシキ形土器	その他 埋土	—	狭口部の貼り付け突帯。	外面：ヨコナデ 内面：ヘラ削り	胎土：3 ～ 5mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/6)
175	コシキ形土器	その他 埋土	—	小型のコシキ形土器狭口部の把手部。	外面：ナデ 内面：ナデ	胎土：～ 1mm の石英含む，金雲母多く含む 焼成：良好 色調：橙色 (7.5YR7/6)
176	コシキ形土器	その他 埋土	—	小型のコシキ形土器狭口部の貼り付け突帯。	外面：ナデ 内面：ナデ	胎土：～ 1mm の石英含む，金雲母多く含む 焼成：良好 色調：橙色 (7.5YR7/6)
177	コシキ形土器	その他 埋土	狭口部径　[9.8] 広口部径　29.0 器高　[52.8]	狭口部で段を持ち，広口部に向け直線的に広がる。狭口部は差し込み式の横方向の把手を一対もち，端部は丸く収める。広口部は差し込み式の縦方向の把手を一対もち，端部は平たく収める。	外面：広口部ナデ後ハケ，他荒れ著しく不明 内面：広口部端部ヨコナデ，把手部までハケ後ナデ，狭口部ヨコナデ，他ヘラ削り	胎土：～ 2mm の砂粒含む，～ 0.2mm ほどの黒い砂粒含む 焼成：軟 色調：淡黄色 (2.5Y8/3)
178	坏蓋	その他 埋土	口径　[15.0]	浅い天井部から延びた口縁部を内湾気味に下方に拡張する。中央部につまみ部の痕跡残る。	ロクロ回転によるナデ，外面天井部はヘラ切り	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰白色 (N7/)
179	坏蓋	その他 埋土	口径　[15.0]	浅い天井部から延びた口縁部をわずかに下方に拡張する。	ロクロ回転によるナデ，外面天井部はヘラ切り	胎土：～ 0.5mm の長石含む，精緻 焼成：良好 色調:外面は浅黄色 (5Y7/3) 内面は灰白色 (N7/)
180	坏身	その他 埋土	口径　[13.2]	口縁部は外上方に直線的に延び，端部はとがり気味に丸く収める。	ロクロ回転によるナデ	胎土：～ 1mm の石英・長石わずかに含む，精緻 焼成：やや軟 色調：外面は灰色 (N5/) 内面は灰白色 (5Y8/1)
181	坏身	その他 埋土	口径　[12.9] 高台径　[8.5] 器高　[3.9]	胴部中位でわずかに外湾した後，口縁部は外上方に直線的に延び，端部は丸く収める。底部には貼り付け高台がつく。	ロクロ回転によるナデ 底部にヘラ記号あり。	胎土：精緻 焼成：良好 色調：灰色 (N6/)

第２表　トンガ坊城遺跡出土石器観察表

（[　]：復元値）

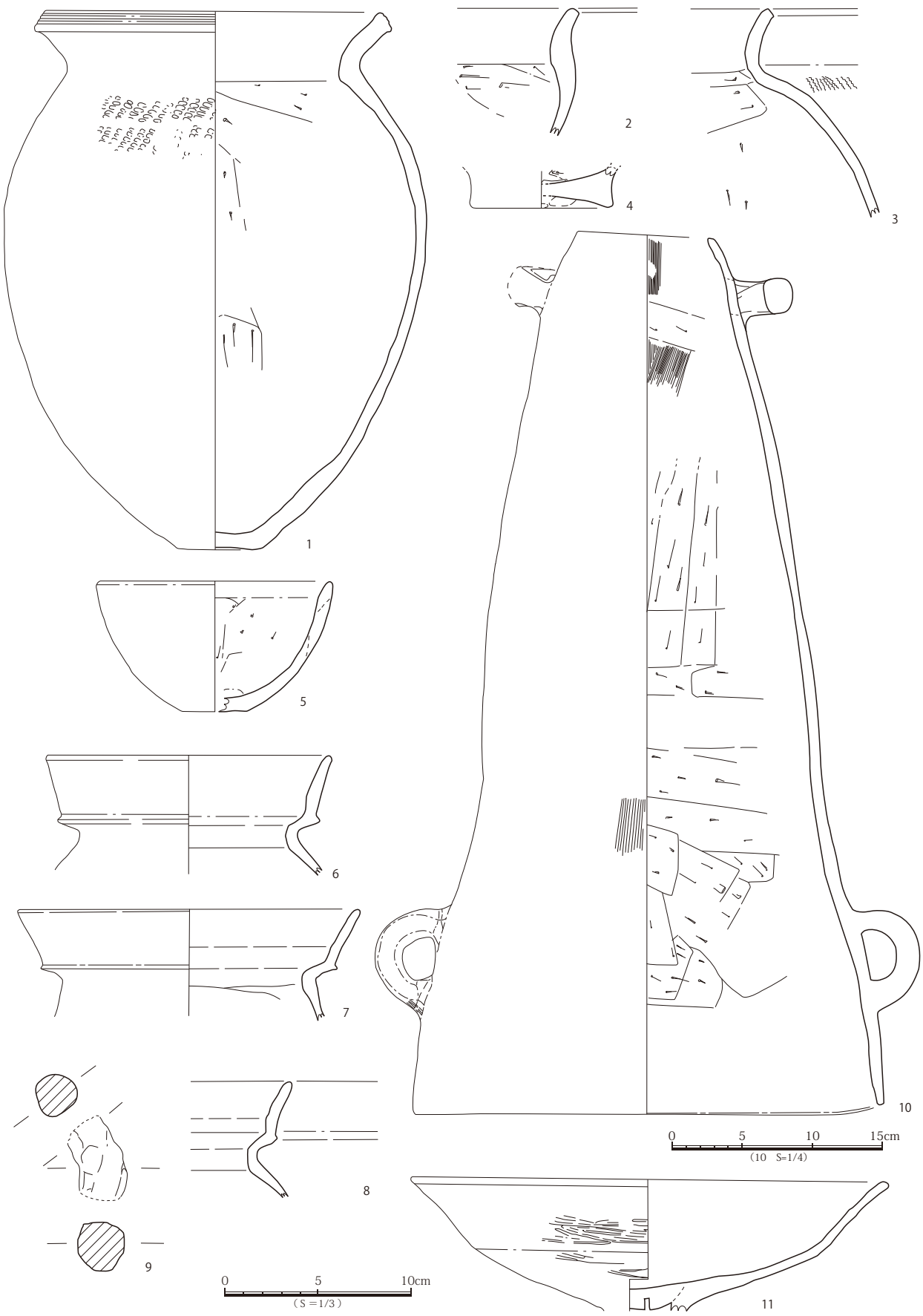
番号	種別	出土位置	計測数値				備考
			長　さ（cm）	幅（cm）	厚　さ（cm）	重　量	
182	磨石	SH1a	4.7	4.2	3.6	98.9g	材質：花崗岩
183	磨石	SH1b	9.5	5.2	24.5	186.2g	材質：砂岩
184	台石	SH4b	24.5	22.1	8.0	8.0kg	材質：花崗岩
185	砥石	SH4b	16.5	9.1	5.4	982.5g	使用面：2　材質：砂岩
186	台石	SH5 床面直上	27.7	25.0	11.3	13.8kg	材質：流紋岩
187	台石	SH5 床面直上	35.6	28.1	11.5	20.2kg	材質：花崗岩
188	砥石	SH5 埋土	21.5	9.7	6.8	2.1kg	使用面：3　材質：砂岩
189	管玉	SH9	1.1	0.24	0.2	0.1g	材質：緑色チャート
190	砥石	SH12 掘り方外	14.1	5.9	4.9	497.4g	使用面：3　材質：砂岩
191	台石	SH13a 床面直上	35.0	34.6	8.7	17.2kg	材質：花崗岩
192	台石	SH14 床面直上	29.4	29.1	15.1	18.6kg	材質：花崗岩
193	台石	SH14	40.2	34.1	7.6	15.0kg	材質：花崗岩
194	砥石	SX2	11.6	3.5	2.8	136.8g	使用面：4　材質：流紋岩（砂岩？）
195	台石	SX3 埋土	24.3	24.4	11.1	13.2kg	被熱面有り　材質：花崗岩
196	台石	SX3 埋土	30.7	28.2	7.7	10.0kg	両面中央に被熱・炭化面有り。 材質：花崗岩
197	砥石	SX8 埋土	8.8	5.1	2.4	159.4g	使用面：2　材質：泥岩
198	磨石？	SX11	9.3	6.2	2.6	211.7g	材質：花崗岩
199	台石	SX11	14.2	12.4	3.5	999.6g	材質：砂岩
200	台石	SX16	27.0	13.8	12.1	8.2kg	砥石としても使用　材質：流紋岩
201	台石	SX16	39.7	23.1	11.3	16.3kg	材質：花崗岩
202	砥石	その他埋土	7.5	4.0	1.9	77.2g	使用面：5　材質：砂岩
203	砥石	その他埋土	4.9	4.0	3.1	69.9g	使用面：4　材質：花崗岩
204	鏃	その他埋土	4.5	[2.3]	4.5	3.8g	材質：頁岩
205	斧	その他埋土	8.5	4.1	2.0	67.9g	磨製片刃石斧破片　チャート
206	石片	その他埋土	4.1	3.8	1.3	19.9g	材質：黒曜石（姫島産）

第３表　トンガ坊城遺跡出土鉄器観察表

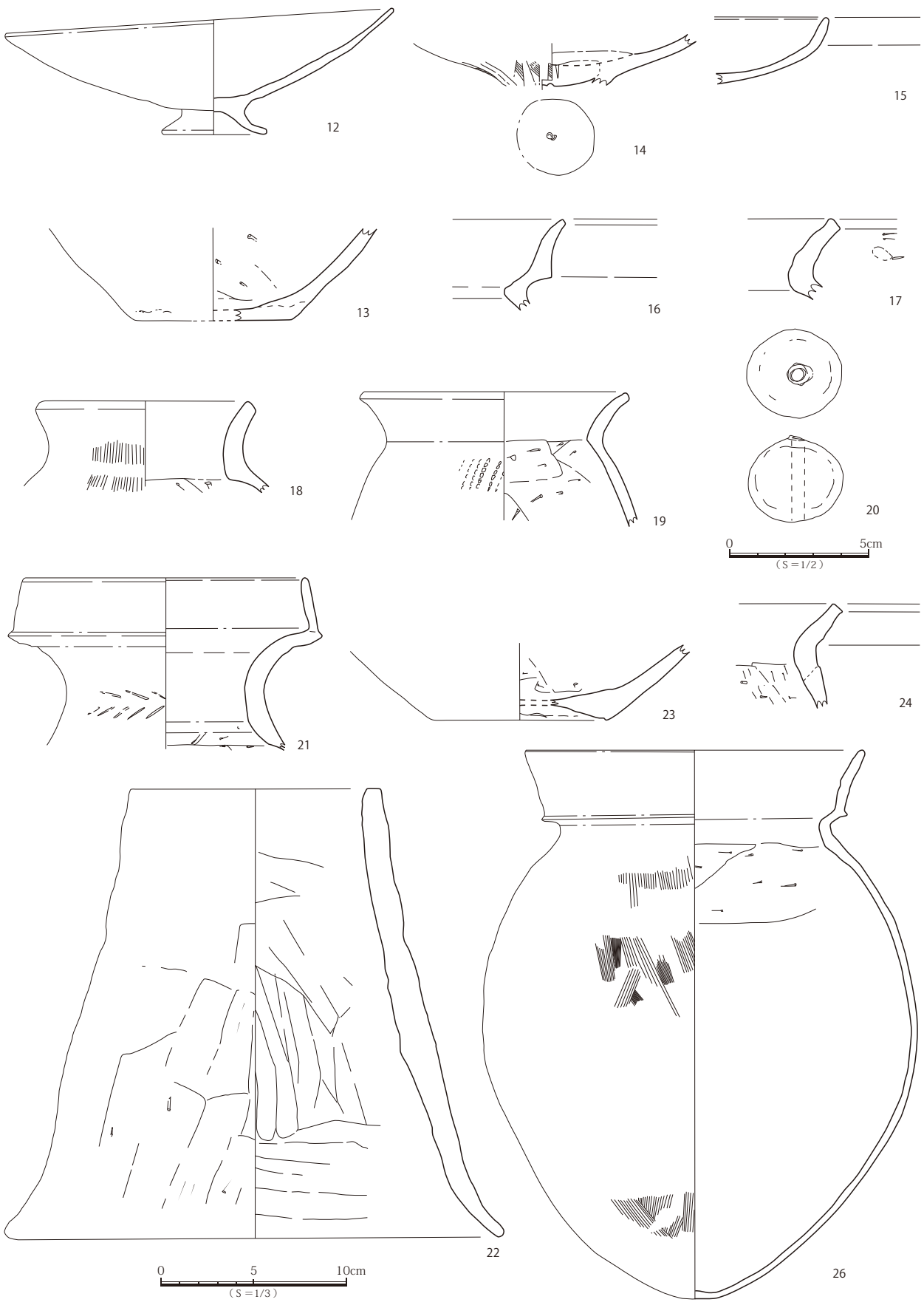
（(　)：残存値）

番号	種別	出土位置	計測数値（cm）				備考
			部位	長さ	幅	厚さ	
207	ヤリガンナ	SH1	全長	(8.9)	－	－	
			刃部	1.5	1.35	0.25	
			茎部	(7.4)	1.1	0.3	
208	刀子	SH5	－	3.7	1.1	0.2	
209	刀子	SH5	－	(4.9)	0.9	0.2	木質残存
210	ヤリガンナ	SH5	－	5.0	0.7	0.3	木質残存
211	ヤリガンナ	SH5	茎部	10.1	1.1	0.5	鑿の可能性有
212	鉄鏃	SH5	－	3.7	2.0	0.25	無茎鏃

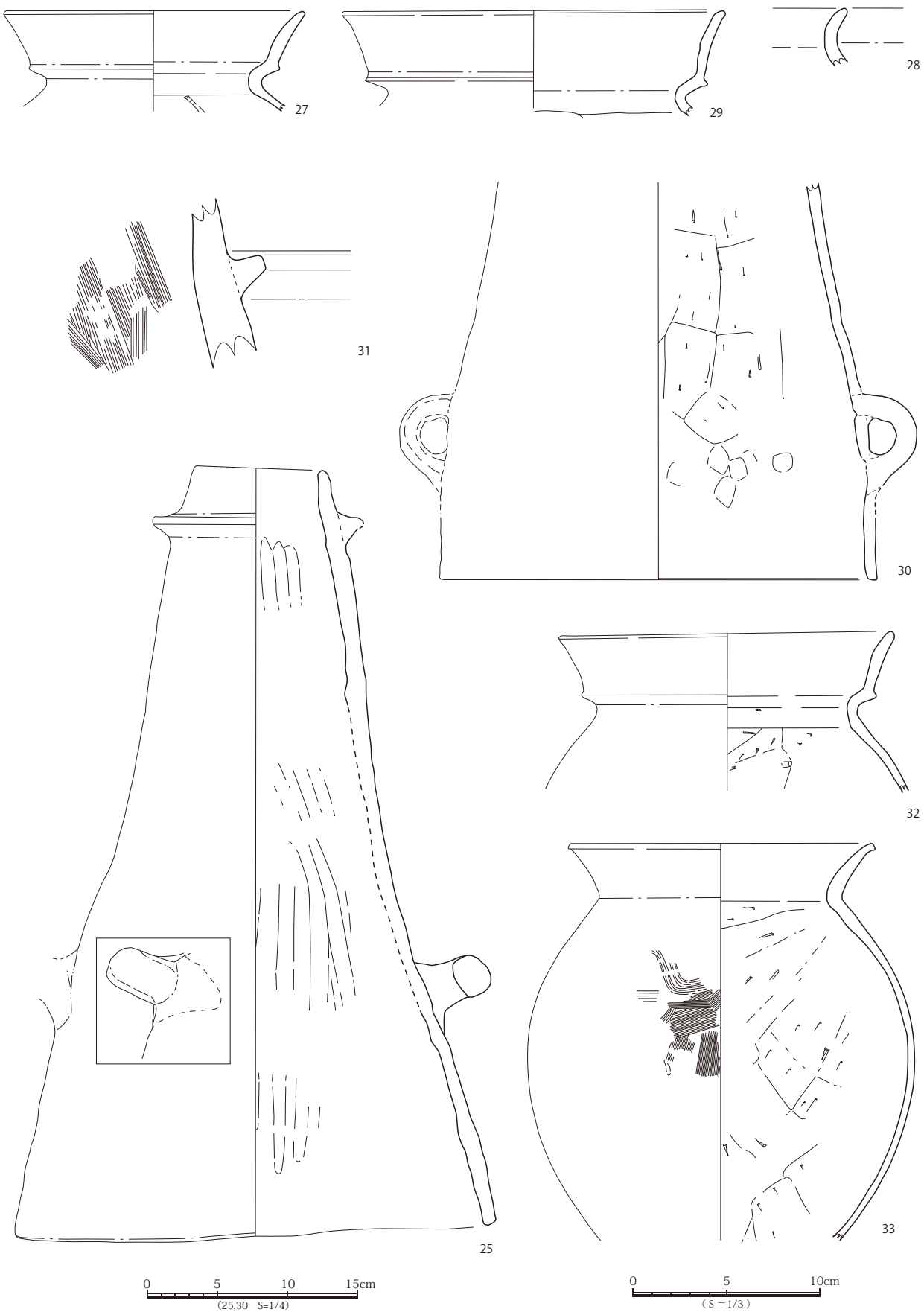
番号	種別	出土位置	計測数値（cm）				備考
			部位	長さ	幅	厚さ	
213	錐状鉄製品	SH5	全長	(3.8)	—	—	鑿の可能性有
			刃部	2.5	0.5	0.4	
			茎部	(1.3)	0.4	0.3	
214	錐状鉄製品	SH5	—	(3.0)	0.7	0.3	鑿の可能性有
215	楔形鉄製品	SH11 埋土	—	2.9	1.35	0.4	頭部打圧形成
216	ヤリガンナ	SH12	全長	18.6	—	—	茎部木質残存
			刃部	2.6	1.2	0.25	
			茎部	16.0	1.0	0.2	
217	刀子	SH12	—	(5.2)	1.0	0.2	
218	鉄鏃？	SX5	茎部	(4.1)	0.6	0.3	
219	鉄鏃	SX8	—	1.2	2.0	0.2	無茎鏃
220	ヤリガンナ	SX8 埋土	全長	(3.7)	—	—	
			刃部	2.7	1.1	0.25	
			茎部	(1.0)	0.9	0.2	
221	ヤリガンナ	SX12	—	(5.6)	0.7	0.3	
222	鉄鏃	SK12 埋土	—	2.8	1.5	0.15	無茎鏃
223	刀子	ST11	全長	(12.2)	—	—	柄部木質残存
			刃部	8.0	1.9	0.3	
			茎部	4.0	1.4	0.4	
224	袋状鉄斧	古墳周溝	全長	13.1	—	—	
			刃部	6.0	5.6	0.2 ～ 0.5	
			袋部	6.5	4.4	0.8	
225	ヤリガンナ	その他埋土	全長	(5.7)	—	—	
			刃部	2.5	1.1	0.2	
			茎部	(3.2)	0.9	0.25	
226	鉄鏃	その他埋土	—	3.5	1.4	0.2	
227	鉄鏃	その他埋土	—	2.5	1.2	0.25	
228	鉄板	その他埋土	—	8.5	3.8	0.8	



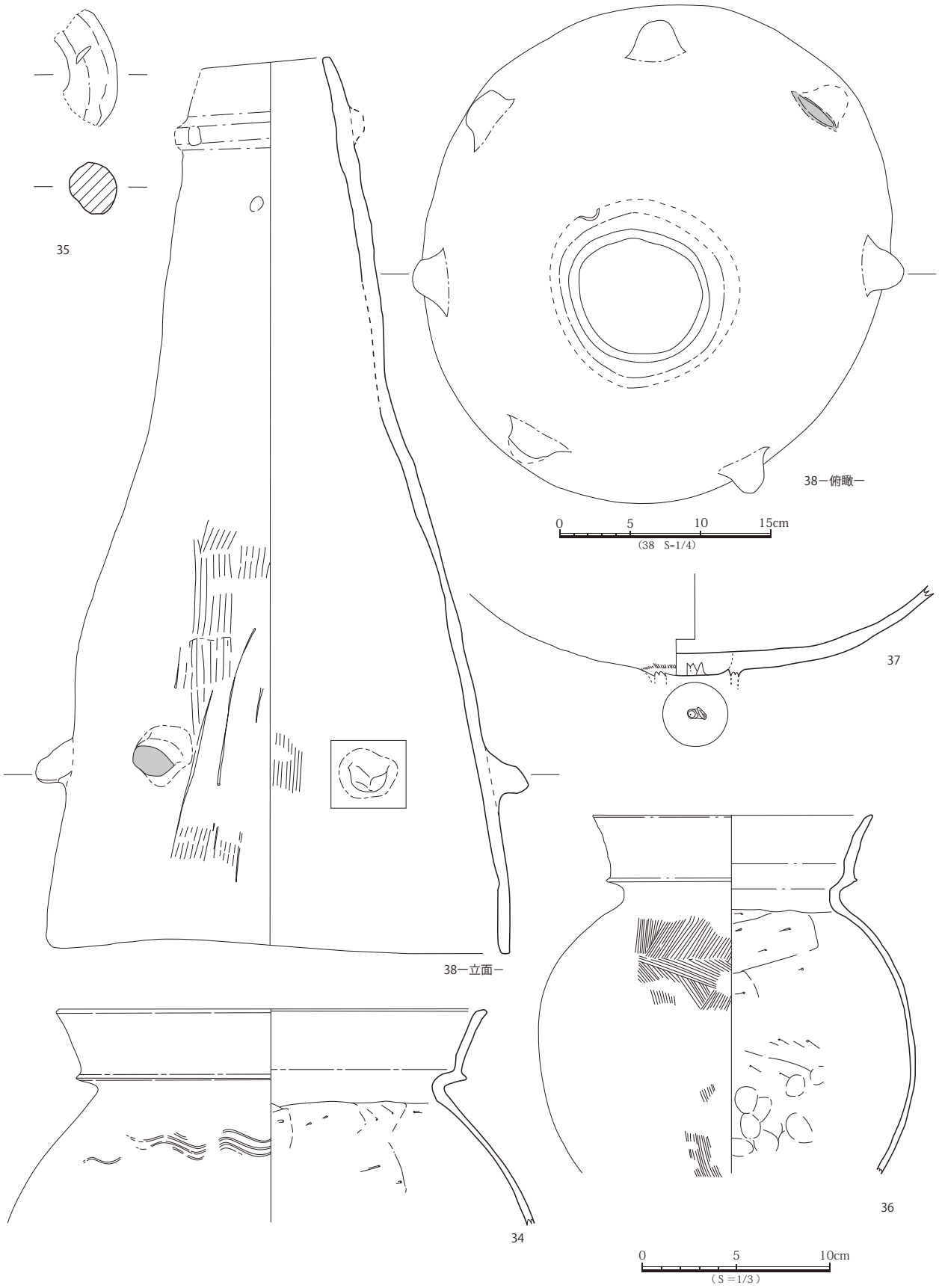
第 60 図　出土遺物実測図（1）（S=1/3，10 は S=1/4）



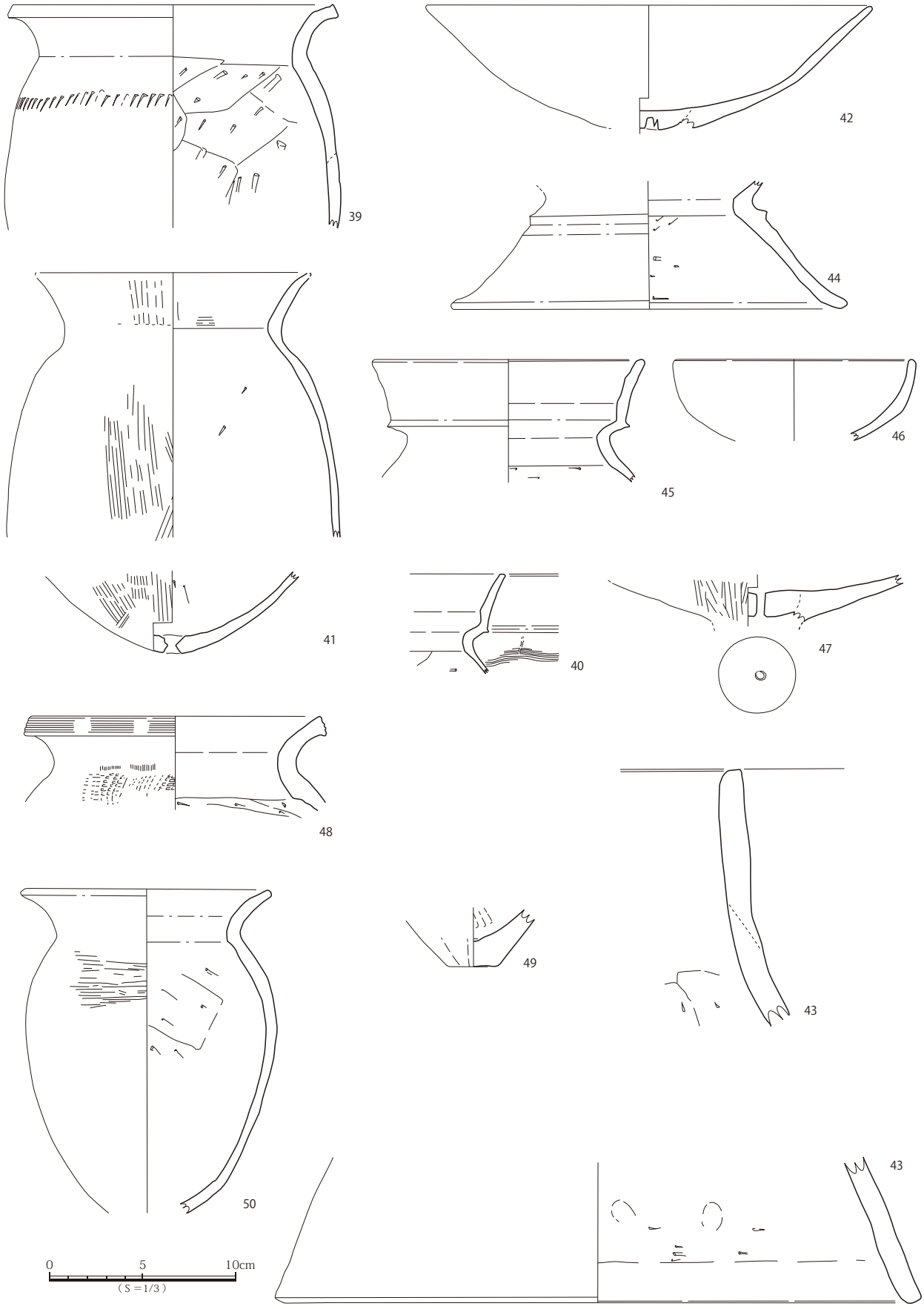
第 61 図　出土遺物実測図（2）（S=1/3，20 は S=1/3）



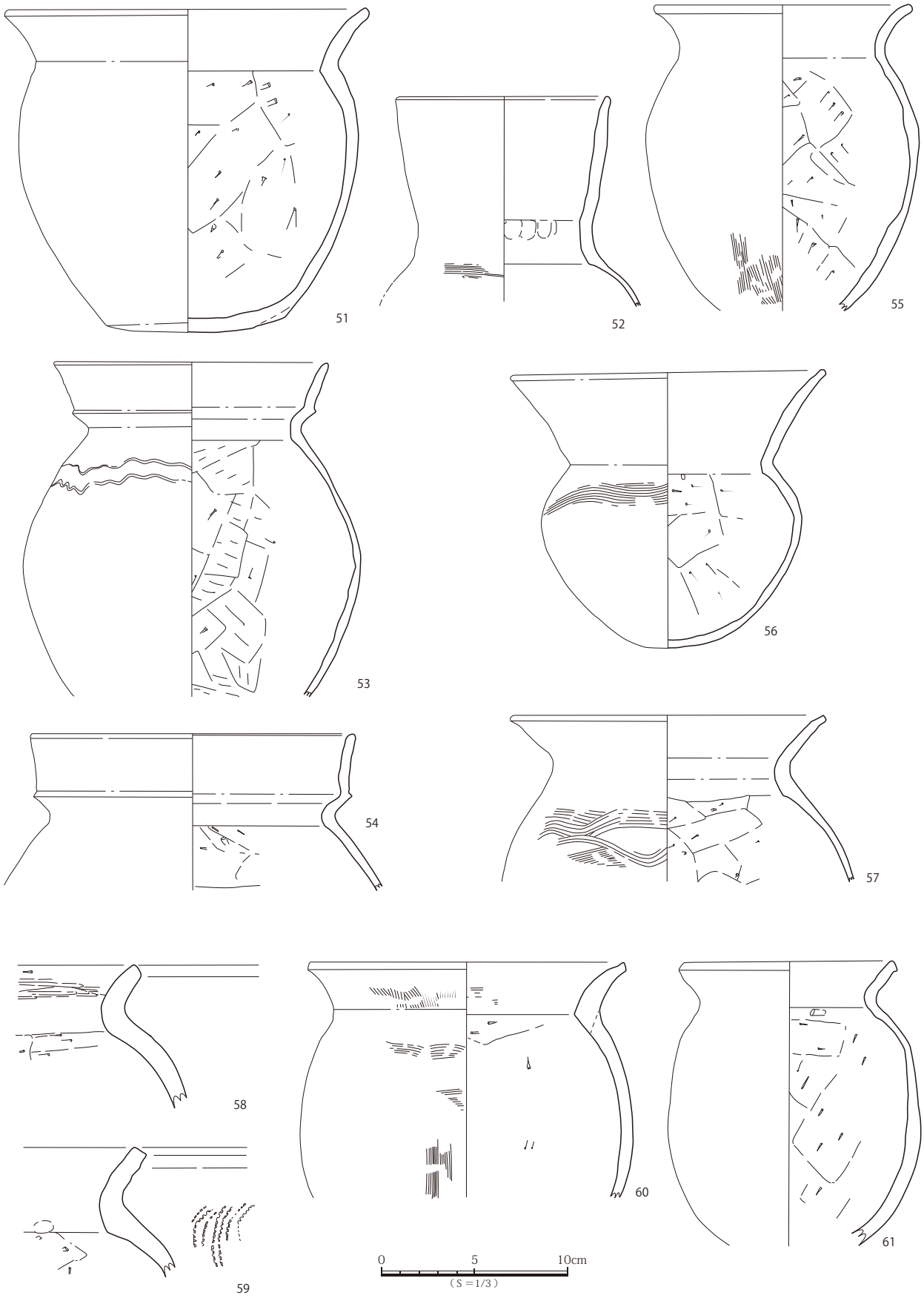
第 62 図　出土遺物実測図（3）（S=1/3，25・30 は S=1/4）



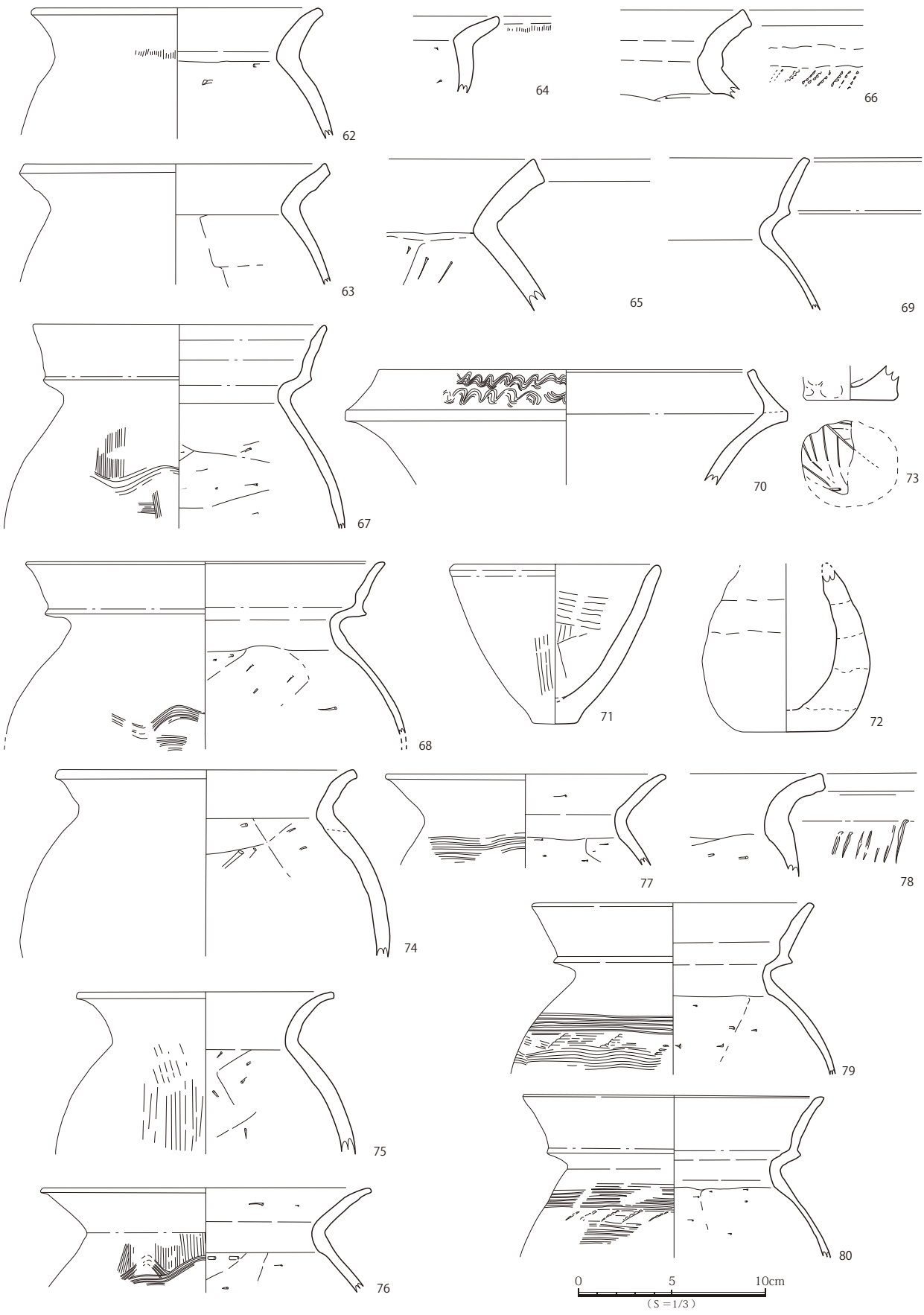
第 63 図　出土遺物実測図（4）（S=1/3，38 は S=1/4）



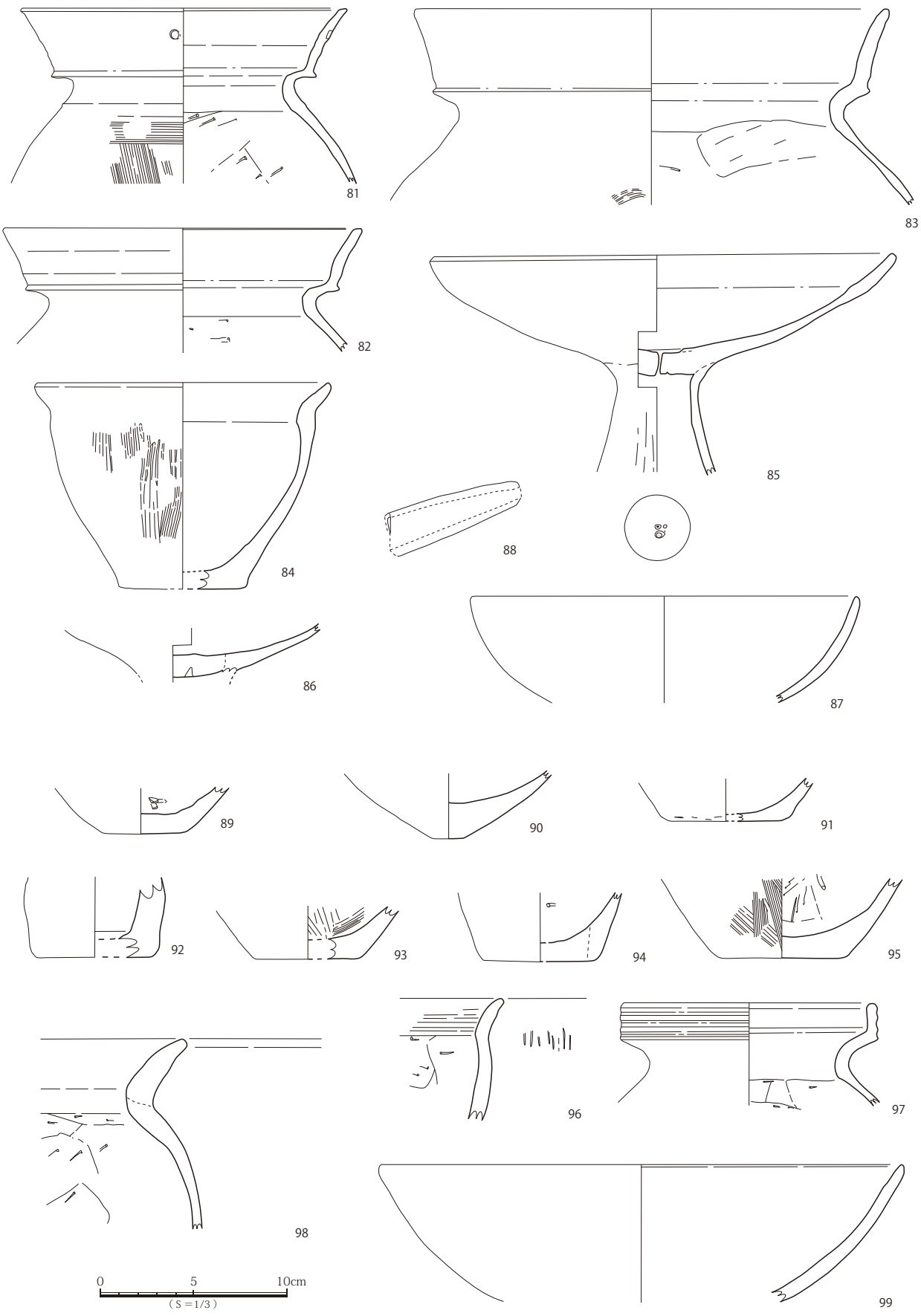
第 64 図　出土遺物実測図（5）（S=1/3）



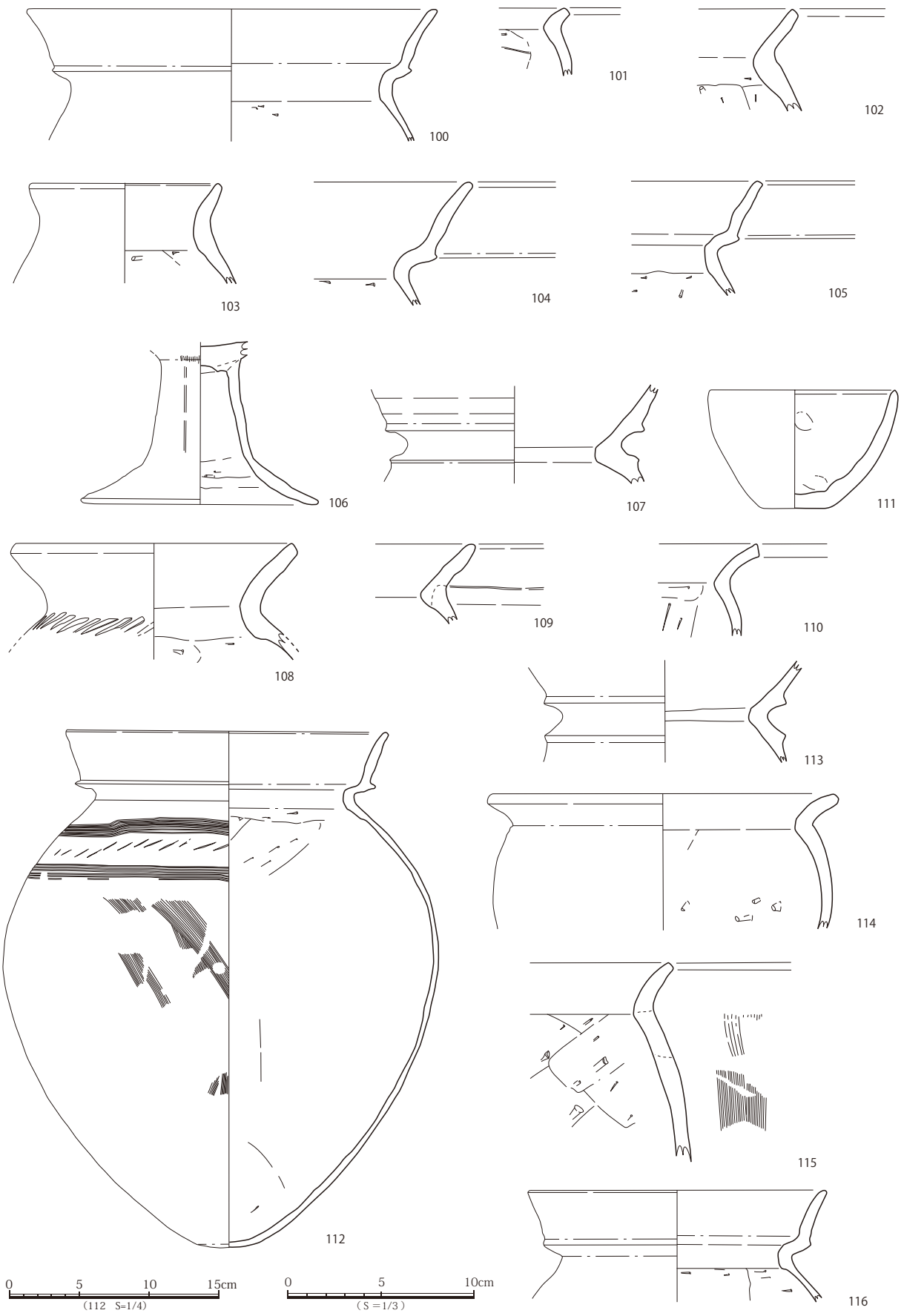
第 65 図　出土遺物実測図（6）（S=1/3）



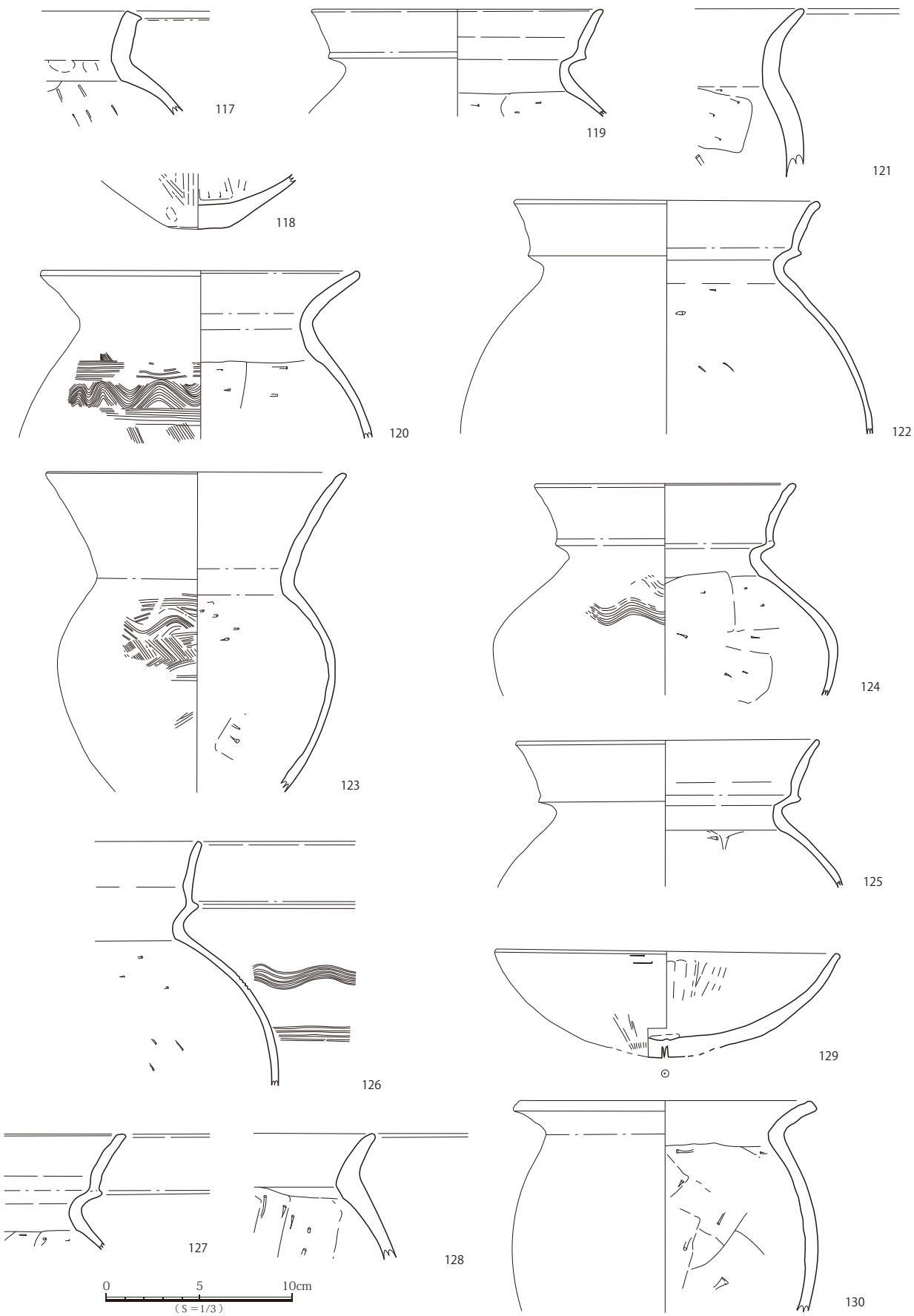
第 66 図　出土遺物実測図（7）（S=1/3）



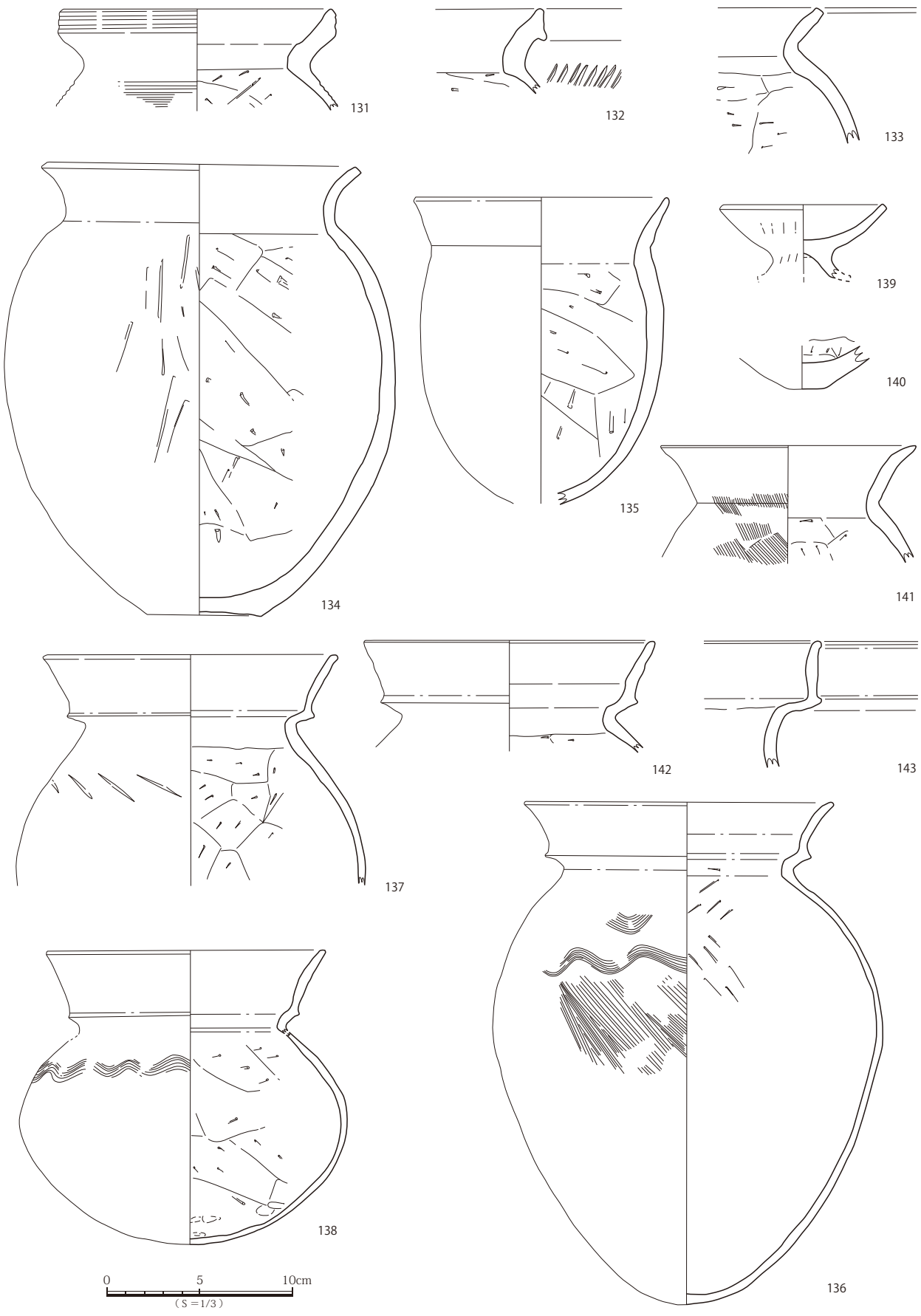
第 67 図　出土遺物実測図（8）（S=1/3）



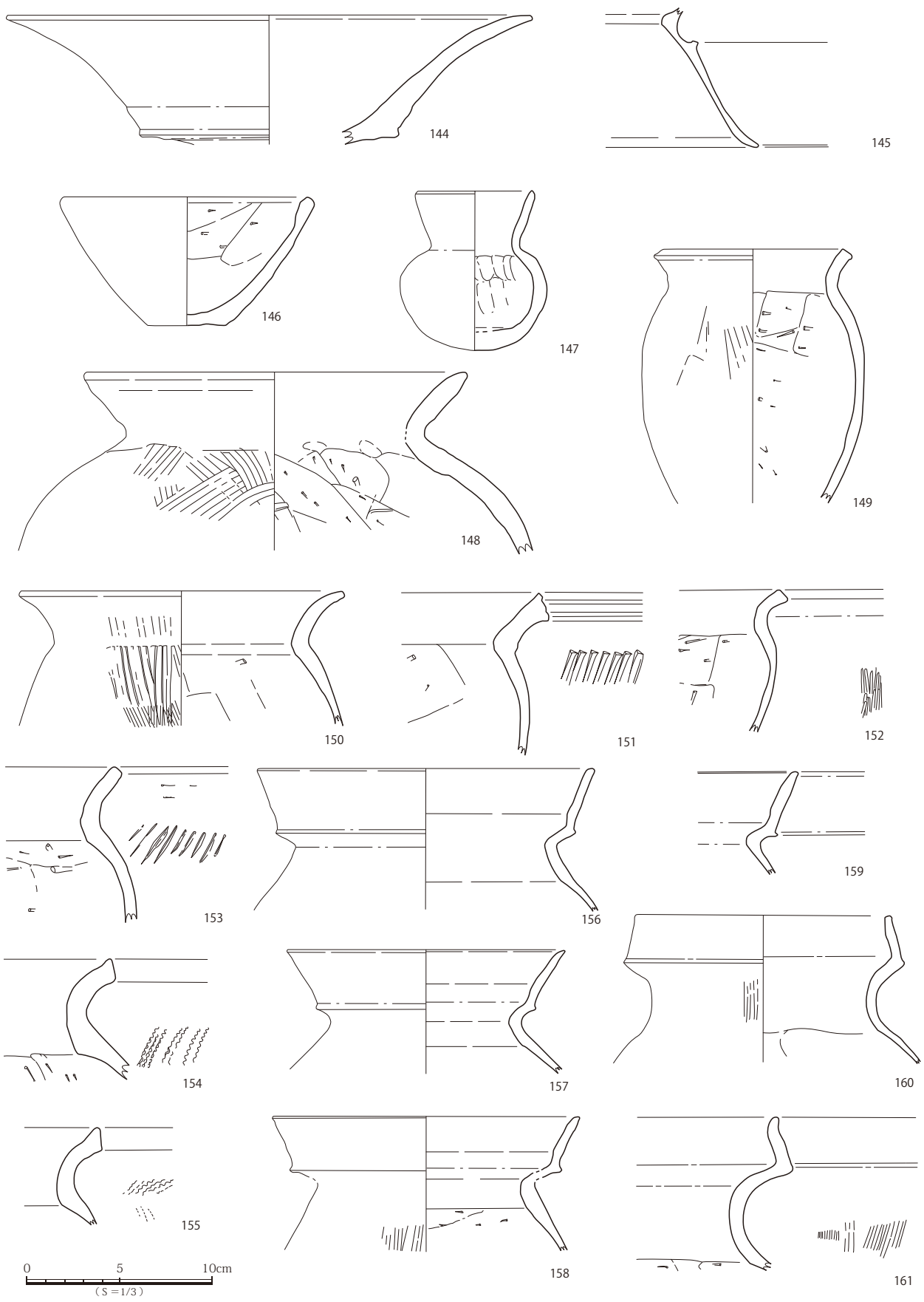
第 68 図　出土遺物実測図（9）（112 は S=1/4，他は S=1/3）



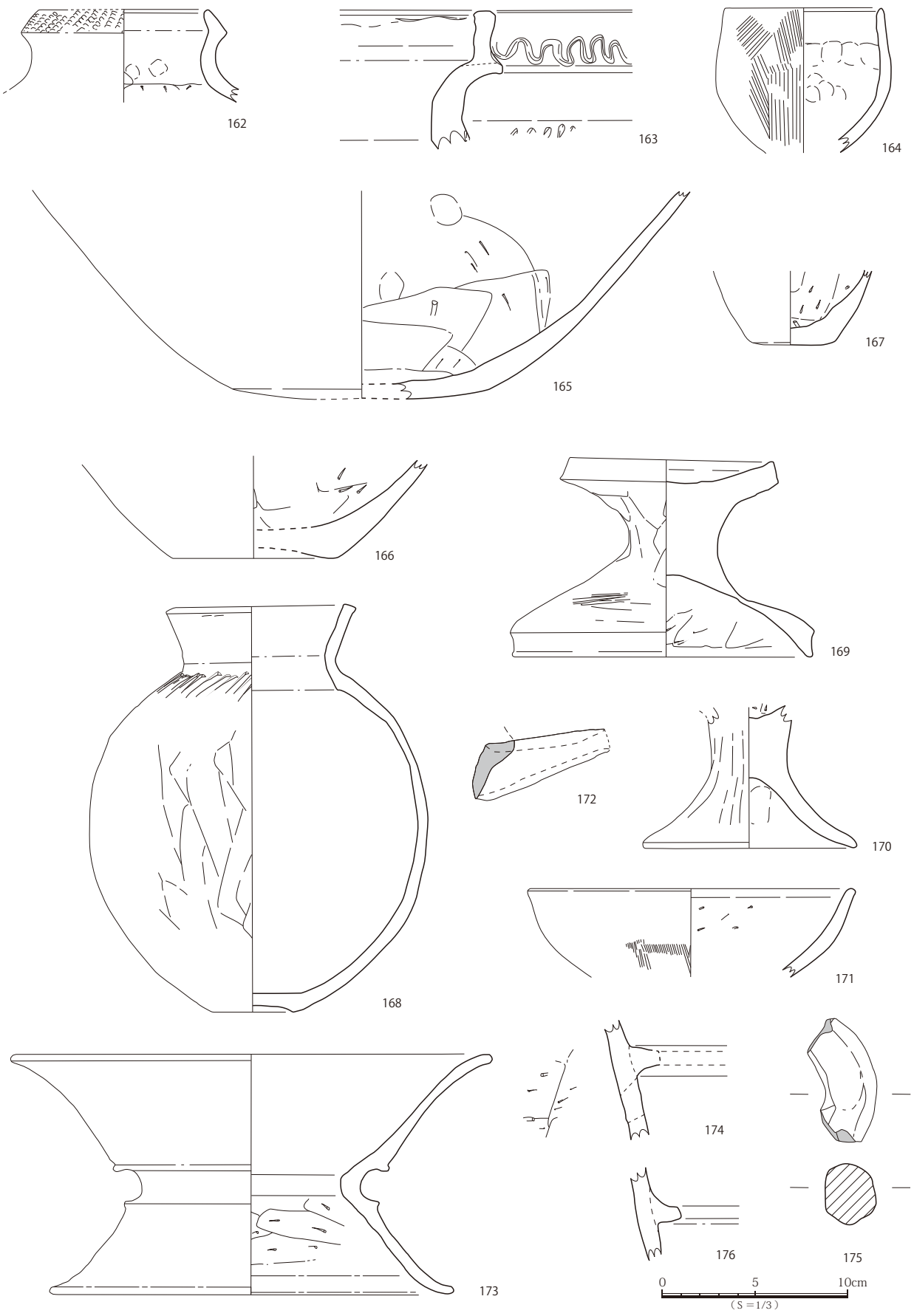
第 69 図　出土遺物実測図（10）（S=1/3）



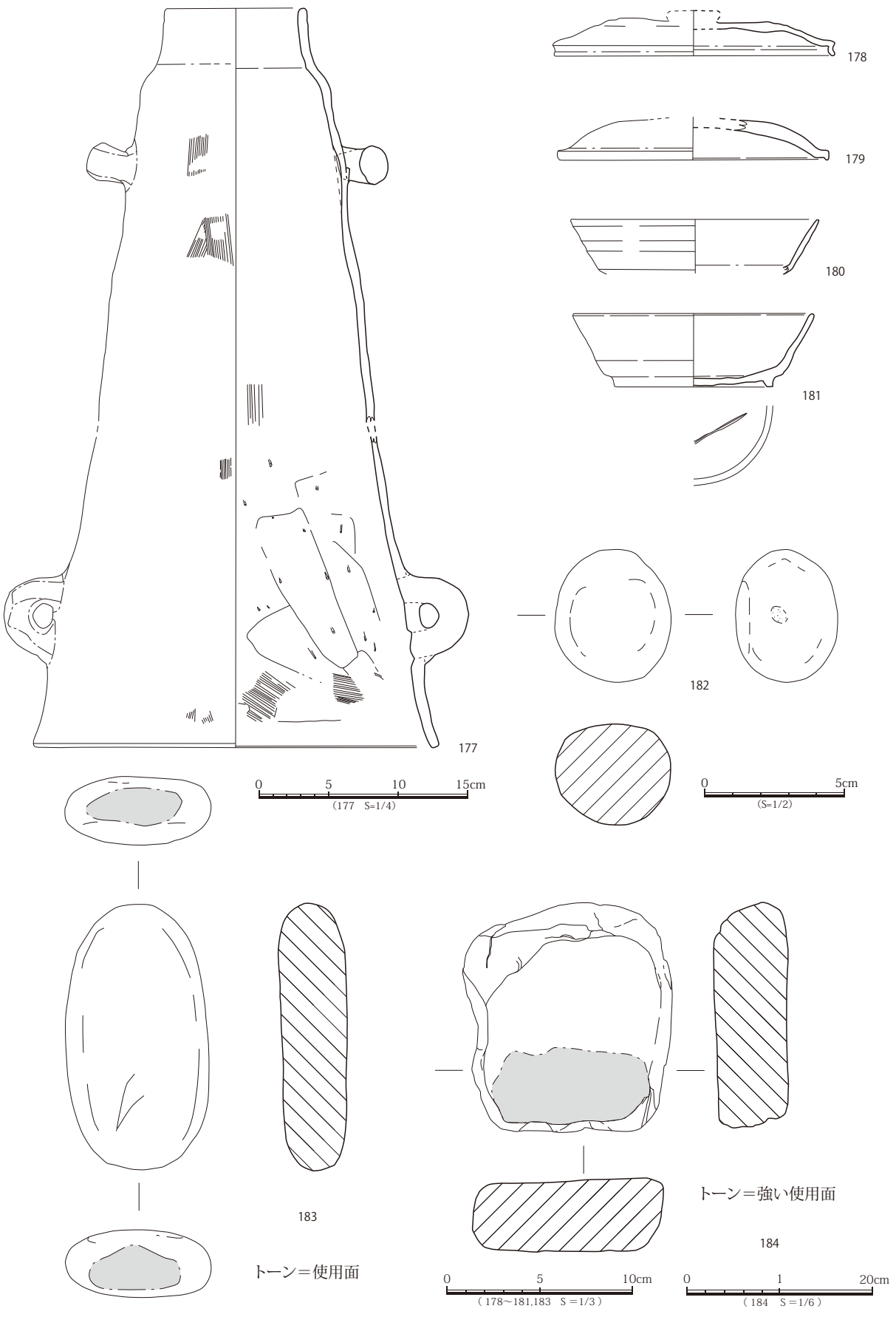
第 70 図　出土遺物実測図（11）（S=1/3）



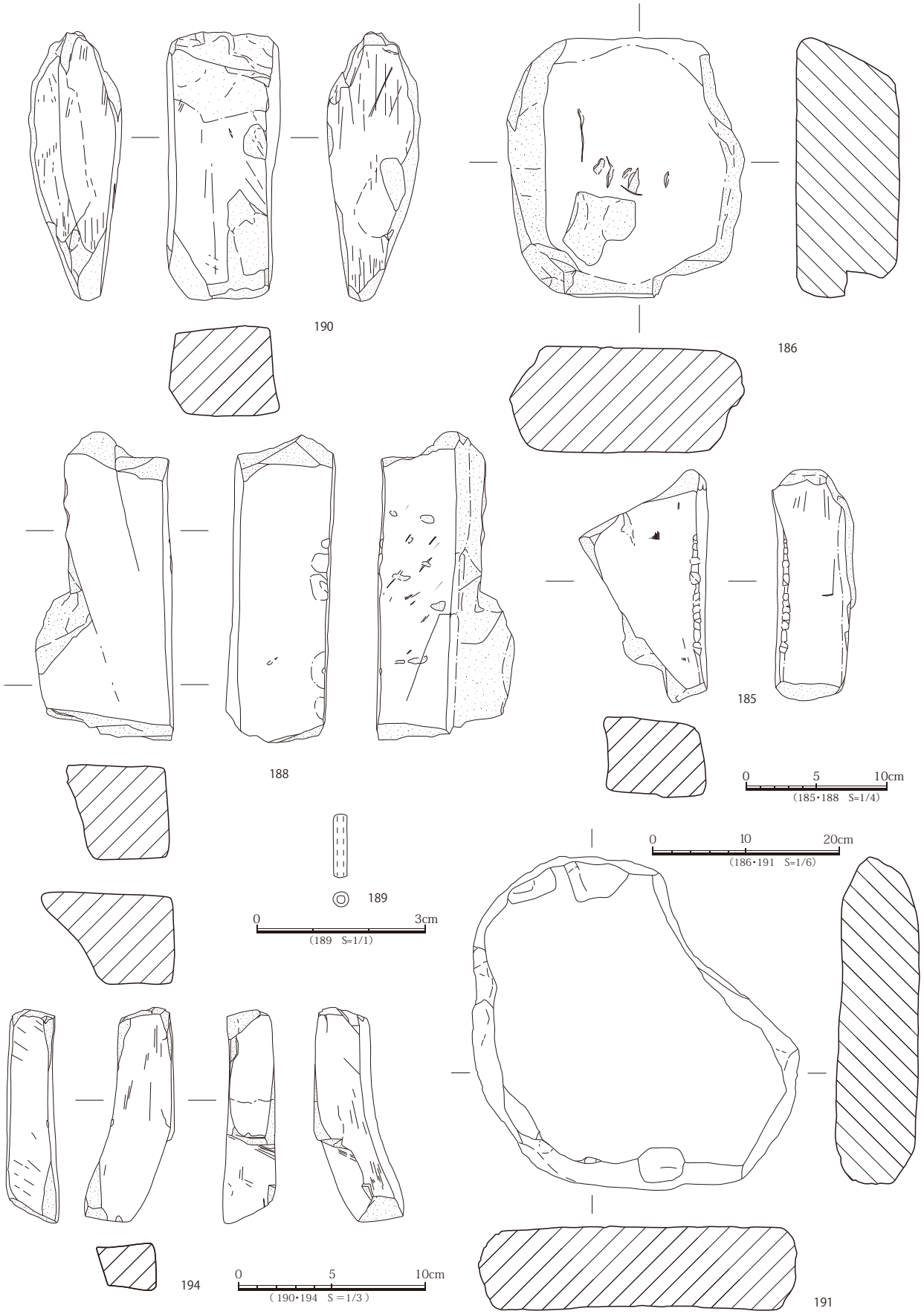
第 71 図　出土遺物実測図（12）（S=1/3）



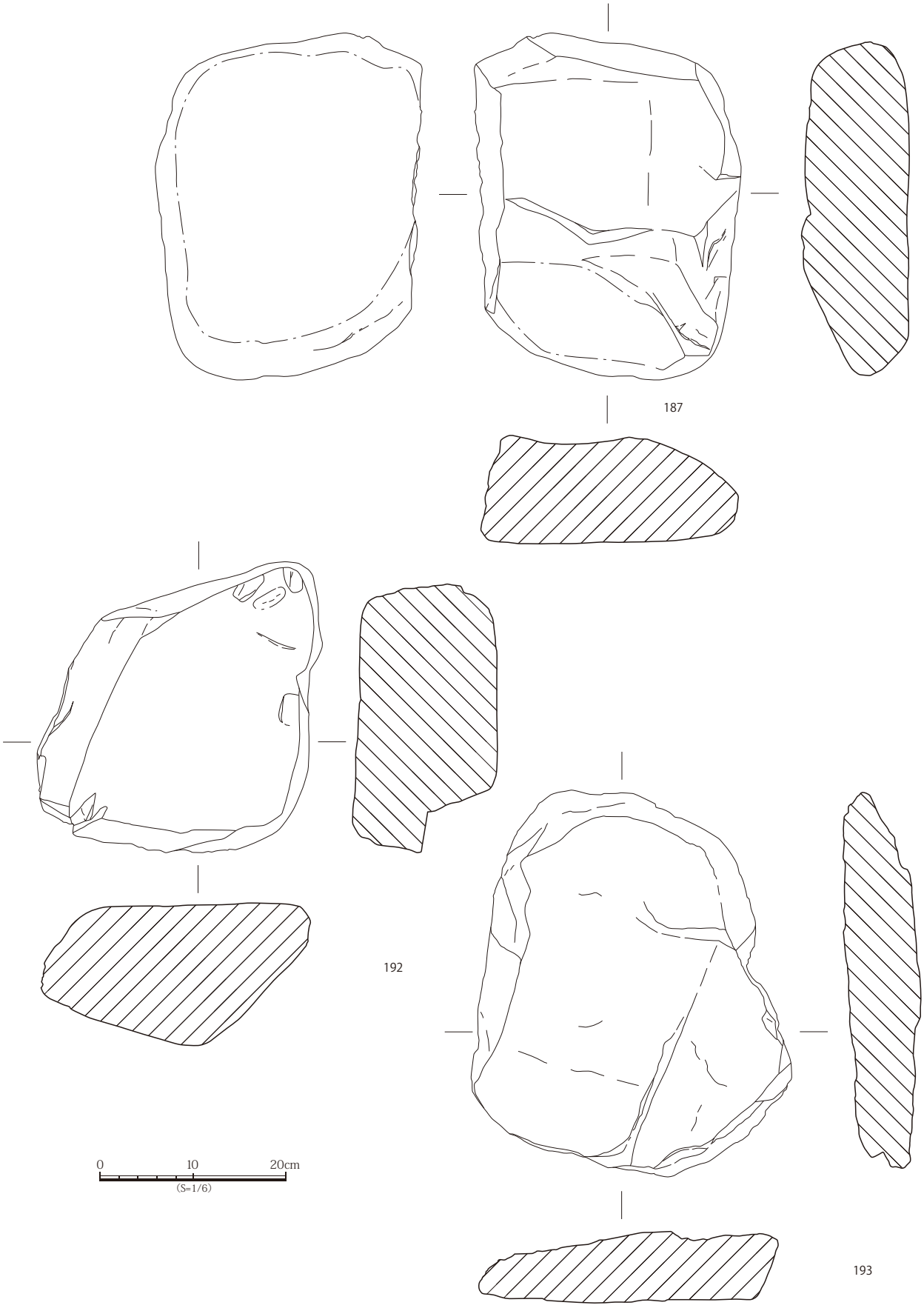
第 72 図　出土遺物実測図（13）（S=1/3）



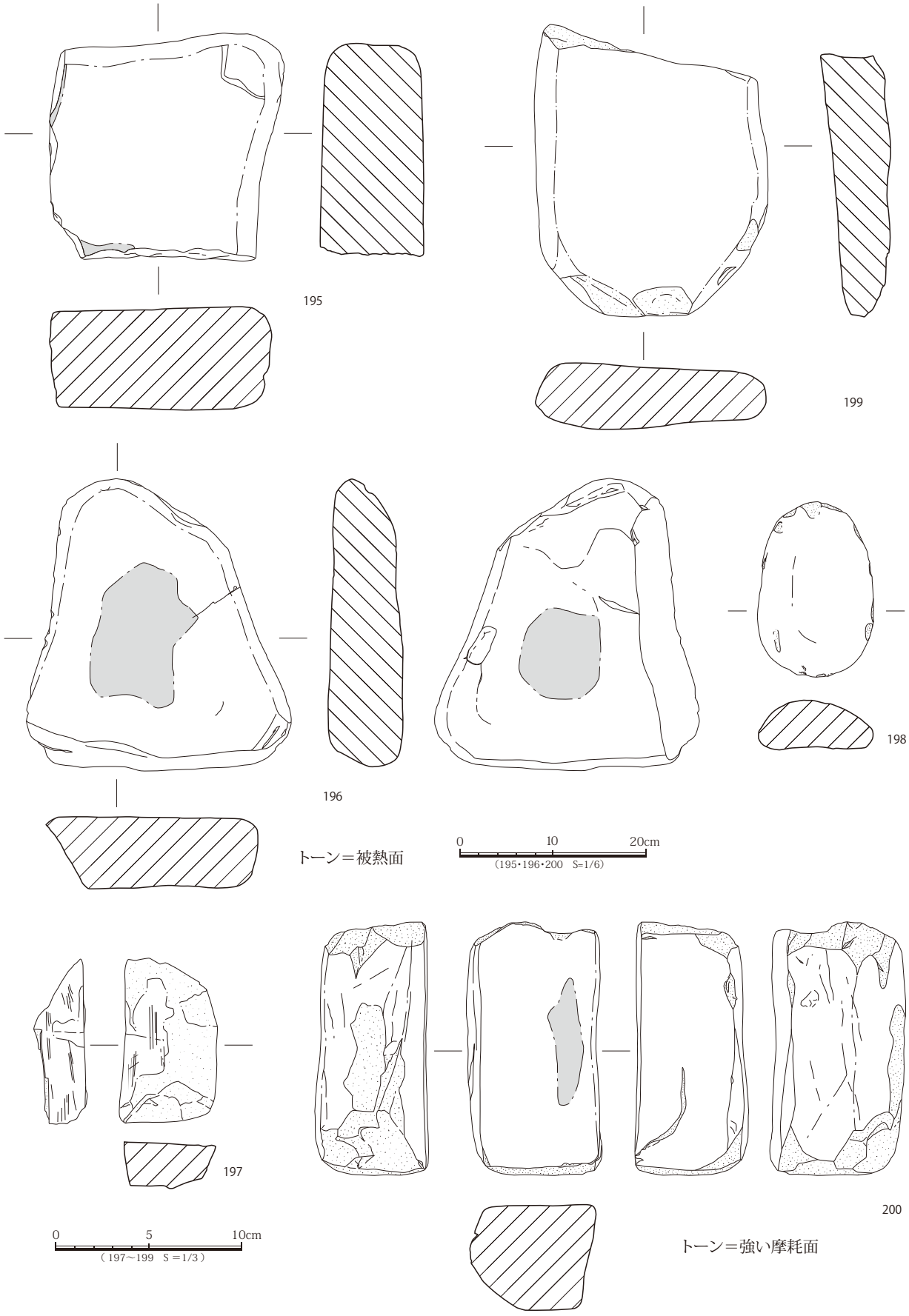
第 73 図　出土遺物実測図（14）（177 は S=1/4，184 は S=1/6，182 は S=1/2，他は S=1/3）



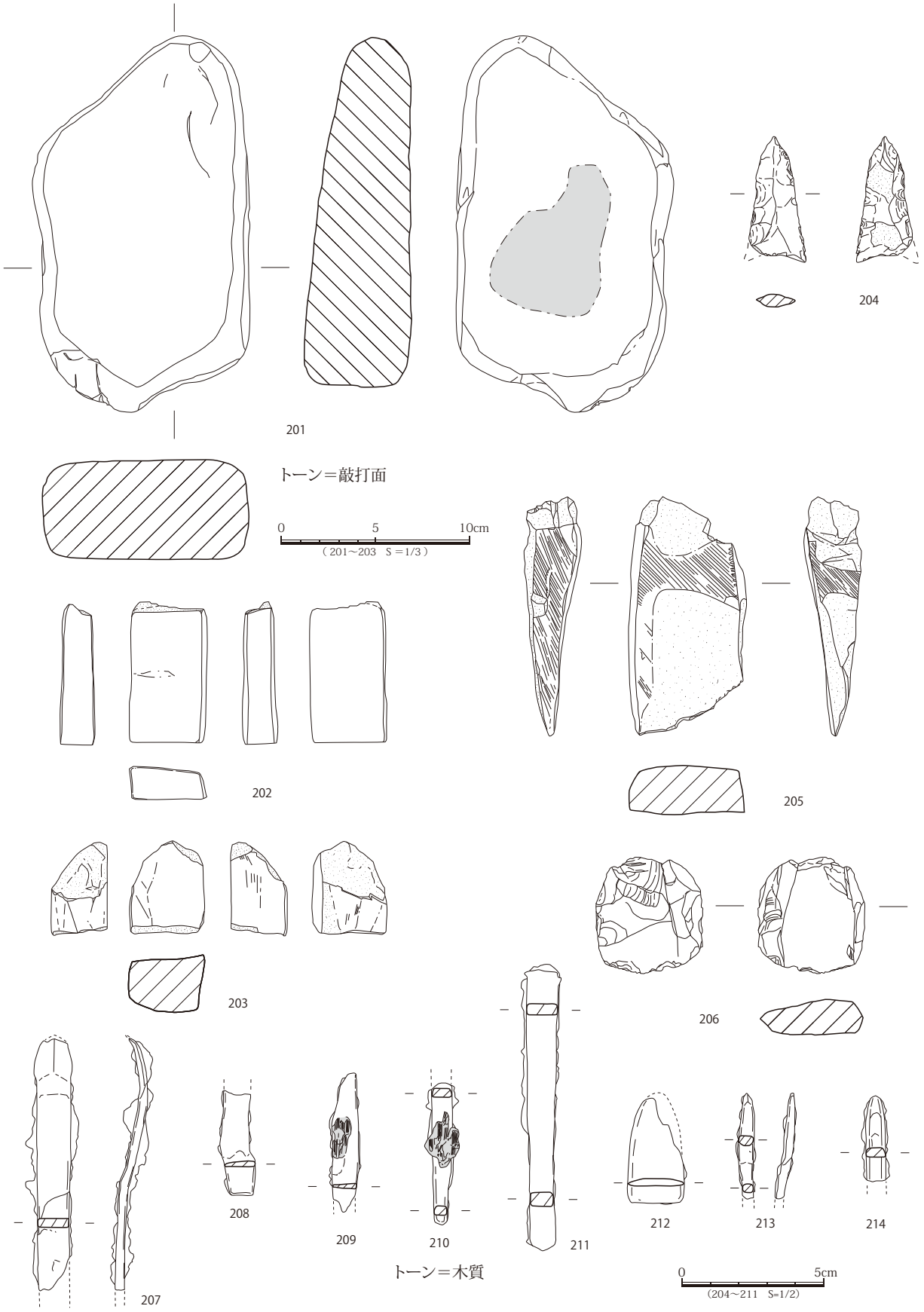
第 74 図　出土遺物実測図（15）（185・188 は S=1/4,186・191 は S=1/6,189 は S=1/1, 他は S=1/3）



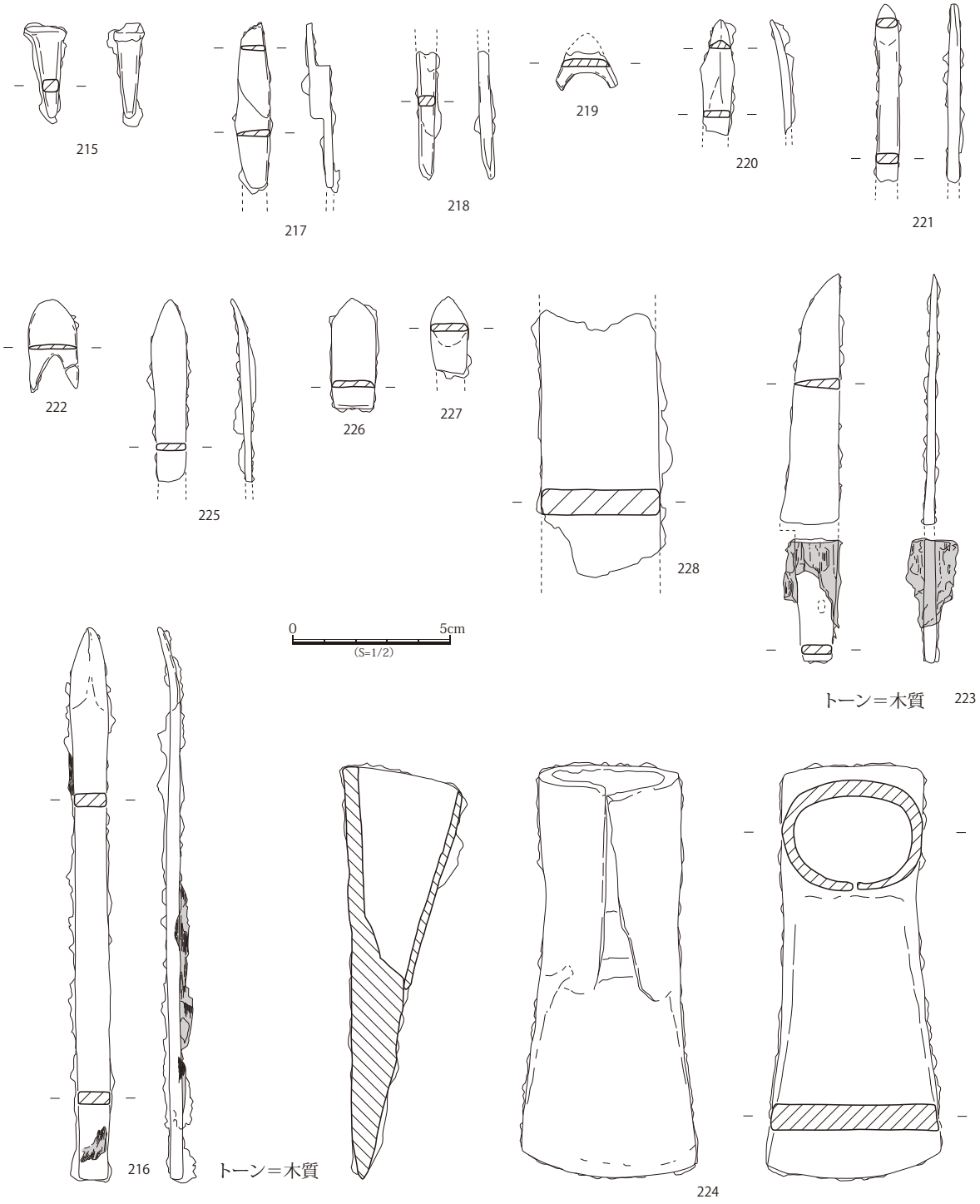
第 75 図　出土遺物実測図（16）（S=1/6）



第 76 図　出土遺物実測図（17）（195・196・200 は S=1/6，他は S=1/3）



第 77 図　出土遺物実測図（18）（204 ～ 211 は S=1/2, 他は S=1/3）



第 78 図　出土遺物実測図（19）（S=1/2）

4. 中世以降

(1) トンガ坊城跡

本城跡は調査前には既に階段状の地形を呈しており，郭と考えられる主要な 10 か所の平坦面と小平坦面が，斜面に竪堀状の落ち込み数か所が確認できた（第 79 図）。調査区外の北側にも平坦面が続いており[1)]，本城跡の範囲は北側に続くものと考えられる。調査区内南側の平坦面 9 は畑として使用されていた時期があり，近年までテレビアンテナや電柱などの設備が設置されていた。調査は工程上，尾根筋上の平坦面から実施し，次に西側斜面を，最後に東側斜面の調査を行った。

調査の結果，平坦面 11 か所[2)]，小平坦面 4 か所，通路状遺構 1 か所，階段状遺構 1 か所を確認した。遺物としては土師質土器・備前焼・青磁などの陶磁器類・銭貨などが出土した。

なお，調査前には東側斜面に複数の帯状の段や小平坦面が存在したが，崩れにより生成されたものと確認できた。また，調査区南西斜面は土取りにより崩落したものと確認できた。

○第 1 平坦面

第 1 平坦面は調査区北側の尾根筋上に位置し，調査区付近での主要な郭である。規模は長さ 33 m，幅約 10 mで尾根先に向け幅がすぼまり，標高は 117.2 ～ 118.4 mである。尾根元側の第 10 平坦面との比高差は約 1.4m，第 11 平坦面との比高差は約 0.6 mである。

平坦面の北側からは多数の柱穴と考えられるピットを検出したが，遺構面までの埋土は 20cm 以下と浅く，前述した集落跡の柱穴群と重複するため，それぞれの時期の想定や，柱穴などの組み合わせを想定することはできなかった。

○第 2 平坦面

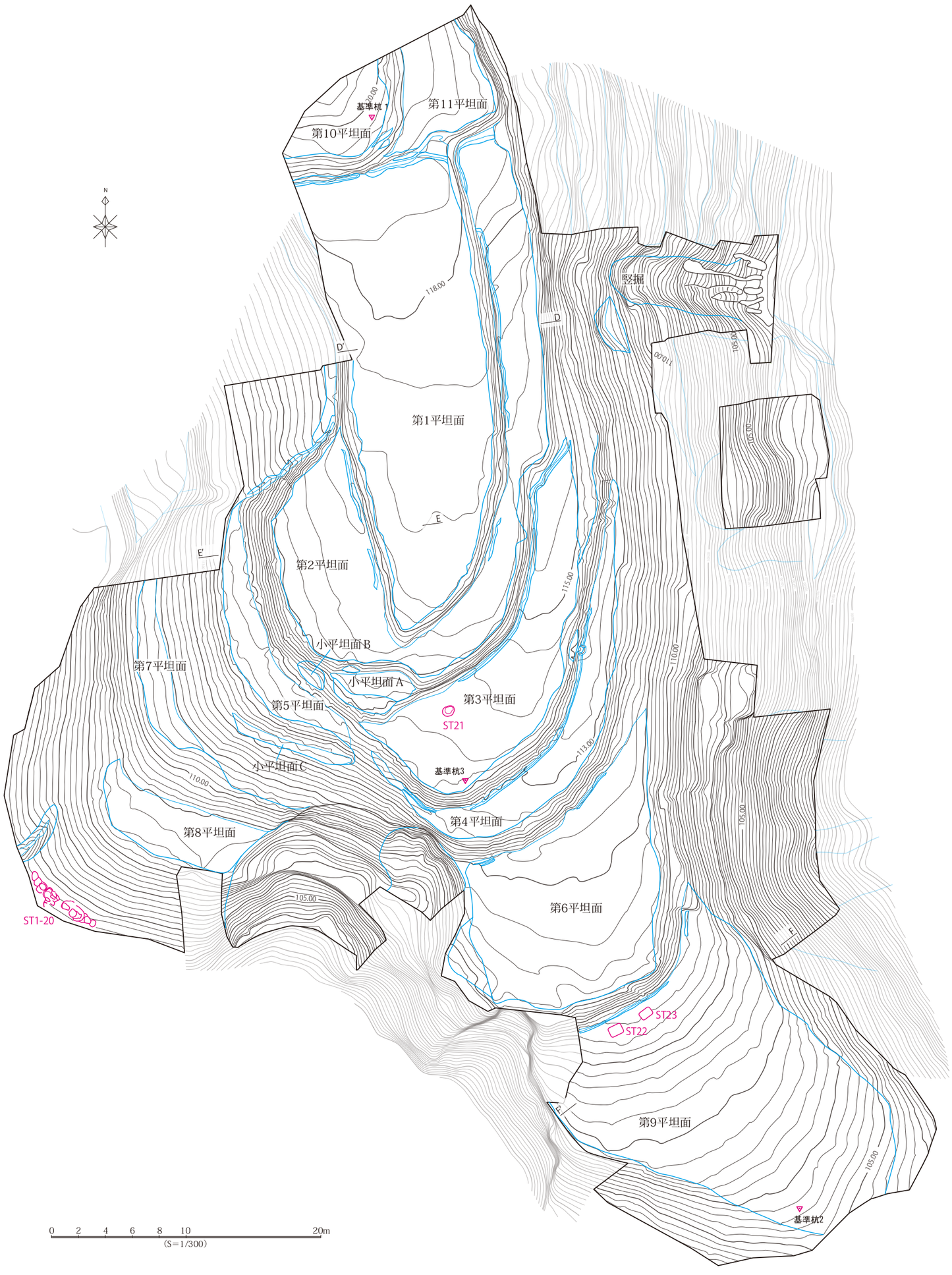
第 2 平坦面は第 1 平坦面の南西半から東へとかけてめぐる郭である。平坦面は西側・中央・東側に三分割できる。規模は西部が広く，中央部と東部は帯状の平坦面となる。西側平坦面と中央平坦面の間には小平坦面 A がある。

西側平坦面は規模が長さ約 16 m幅約 7m の台形状である。標高は約 116.5m で，第 1 平坦面との比高差は約 0.6 mである。平坦面の尾根元側には幅 50 ～ 60cm 深さ 6 ～ 10cm の溝を断続的に検出した。なお，西側平坦面の整地土の下面には，集落跡の SX6 が位置する。

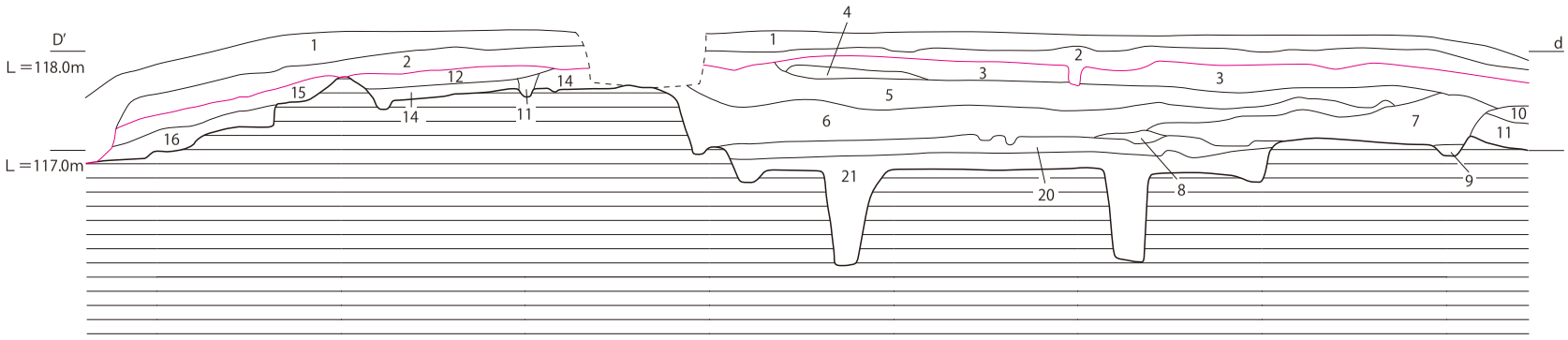
中央平坦面は長さ 16.5 m，幅は北東部で 1.4m，南西部で 3.3 mの帯状である。標高は約 116.4m で，第 1 平坦面との比高差は約 0.8 mである。

東側平坦面は規模が長さ約 24m，幅約 3m の帯状である。標高は 116.2 ～ 117.5m で，第 1 平坦面との比高差は北端で約 0.5m，南端で約 1m である。平坦面の尾根元側には幅 50 ～ 60cm 深さ 5 ～ 10cm の溝を検出した。土層観察などによると，平坦面の北側 2/3 は地山を削りだして造成されているが，南端は盛り土を行うことで造り出している。

以上のとおり，第 2 平坦面は地山形成及び盛り土により形成されており，城に伴い造成された

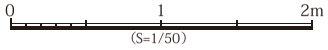


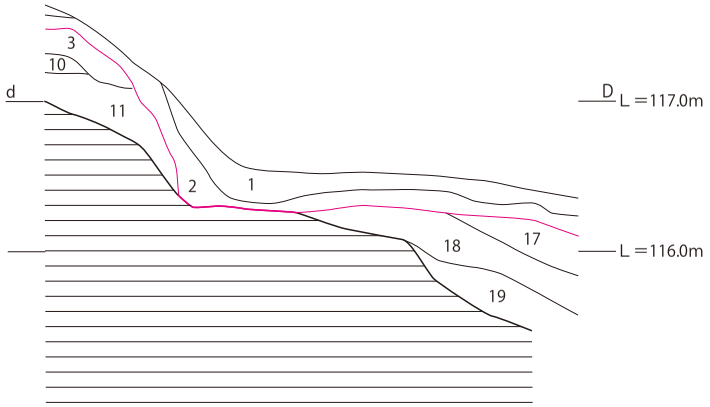
第 79 図　トンガ坊城跡・墓群遺構配置図（S=1/300）



土層説明

1　明黄褐色(2.5Y7/6)砂質土　表土層
2　明黄褐色(10YR6/6)砂質土
3　褐灰色(10YR4/1)砂質土
4　明黄褐色(10YR6/8)砂質土
5　明黄褐色(10YR7/6)くすむ砂質土
6　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土
7　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
8　褐灰色(10YR4/1)砂質土　炭片わずかに混じる
9　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
10　灰黄褐色(10YR5/2)砂質土
11　灰黄褐色(10YR7/8)砂質土
12　褐灰色(10YR4/1)砂質土
13　灰黄褐色(10YR5/2)砂質土
14　にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土
15　明褐色(10YR5/6)くすむ粘質土
16　明褐色(10YR5/6)くすむ粘質土　15層より明
17　褐色(10YR4/6)砂質土
18　褐色(10YR4/6)砂質土　粘質強い
19　明黄褐色(9YR6/8)砂土
20　明黄褐色(10YR7/6)砂質土　貼床土
21　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
※赤ライン＝山城面





第 80 図　トンガ坊城跡 D － D′ 土層断面図（S=1/50）

面と考えられる。

○小平坦面 A・B

小平坦面 A は西側平坦面と中央平坦面の間の下方に位置する。規模は長さ 6m 幅 1.5 ～ 2m の半月状である。標高は約 115.4m で，第 2 平坦面との比高差は約 0.6 mである。

小平坦面 B は小平坦面の西側下方に位置する。規模は長さ 2.5m，幅が最大 0.8m である。標高は約 114.4m で，小平坦面 A との比高差は約 0.5m である。

平坦面 A・B は第２・３・５平坦面それぞれをつなぐ役割をもっていたものと考えられる。

○第 3 平坦面

第 3 平坦面は第 2 平坦面中央部と小平坦面 A を取り巻くように位置する郭である。幅は尾根中央部で 5 ～ 7.5m あるが，東側は帯状になり幅は約 3m である。平坦面は北から南にかけて緩やかに傾斜し，標高は約 114.2 ～ 115.2m，第 2 平坦面中央部との比高差は約 1.2m である。

なお，地形は集落跡の地形と大差なく，集落跡の地形を踏襲し利用したものと考えられる。

○第 4 平坦面

第 4 平坦面は第 3 平坦面の縁辺部を取り巻くように位置する郭である。幅は東斜面側で約 1.5m，尾根中央部で約 3m である。平坦面は北から南にかけて緩やかに傾斜し，標高は 112.8 ～ 113.2m，第 3 平坦面との比高差は中央部で約 1m である。土層観察によると，東斜面側は斜面を削りだして造られているが，平坦面の尾根中央部付近は，第 3 平坦面を削りだし第 6 平坦面側に盛り土を行い造りだされており，城に伴い造成された面と考えられる。平坦面の尾根元側には幅 50 ～ 60cm 深さ 6 ～ 10cm の溝が断続的に検出されている。

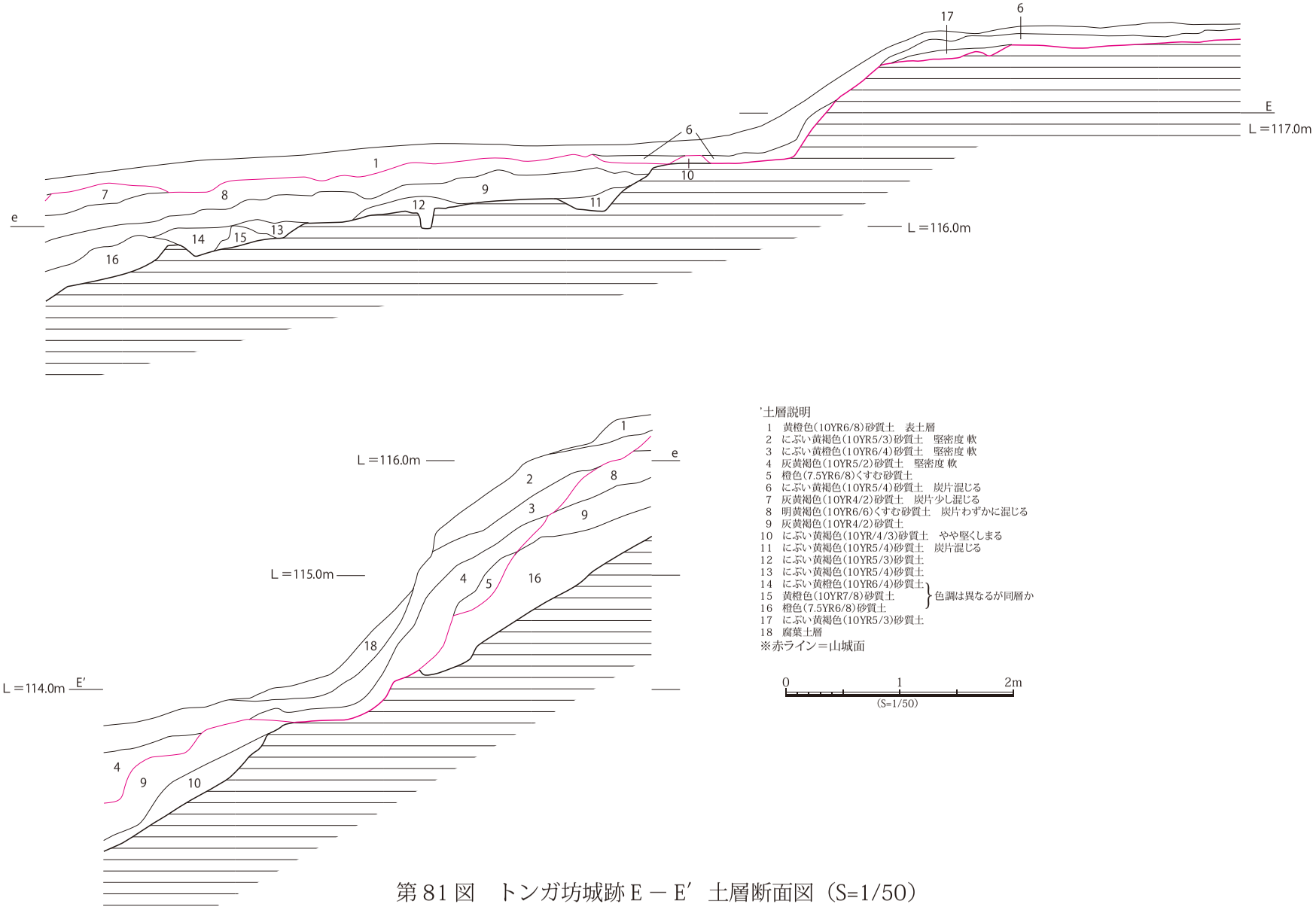
なお，第 4 平坦面の西側から第 5 平坦面に向けて，幅約 50cm の通路状の平坦面が延びている。位置と形状から本来は第 5 平坦面へとつながっていた通路として機能していたと考えられる。

○階段状遺構（第 82 図）

階段状遺構は第 3 平坦面と第 4 平坦面の間の東側斜面に位置する。斜面中に堅緻に締まった 2 段の面を確認した。下段は堅緻に締まった奥行き 34cm 幅 42cm，第 4 平坦面からの高さ約 30cm の台形状の段で，上段は地山を掘り込んだ奥行き 40cm 幅 238cm，下段からの高さ約 20cm，第 3 平坦面までの高さ約 40cm の柳葉状の段である。本遺構が位置する場所の第 3 平坦面と第 4 平坦面の比高差は約 1.2m であり，郭間をつなぐ階段として使用されたと考えられる。

○第 5 平坦面・小平坦面 C

第 5 平坦面は第 2 平坦面の西側に取り巻くように位置する郭である。規模は長さ約 20m，幅は中央部で最大 2.8m の帯状に巡る。標高は約 113.6m，第 2 平坦面との比高差は約 2.2m である。土層観察によると，地山を削りだし斜面側に盛り土を行い造りだされており，城に伴い造成された



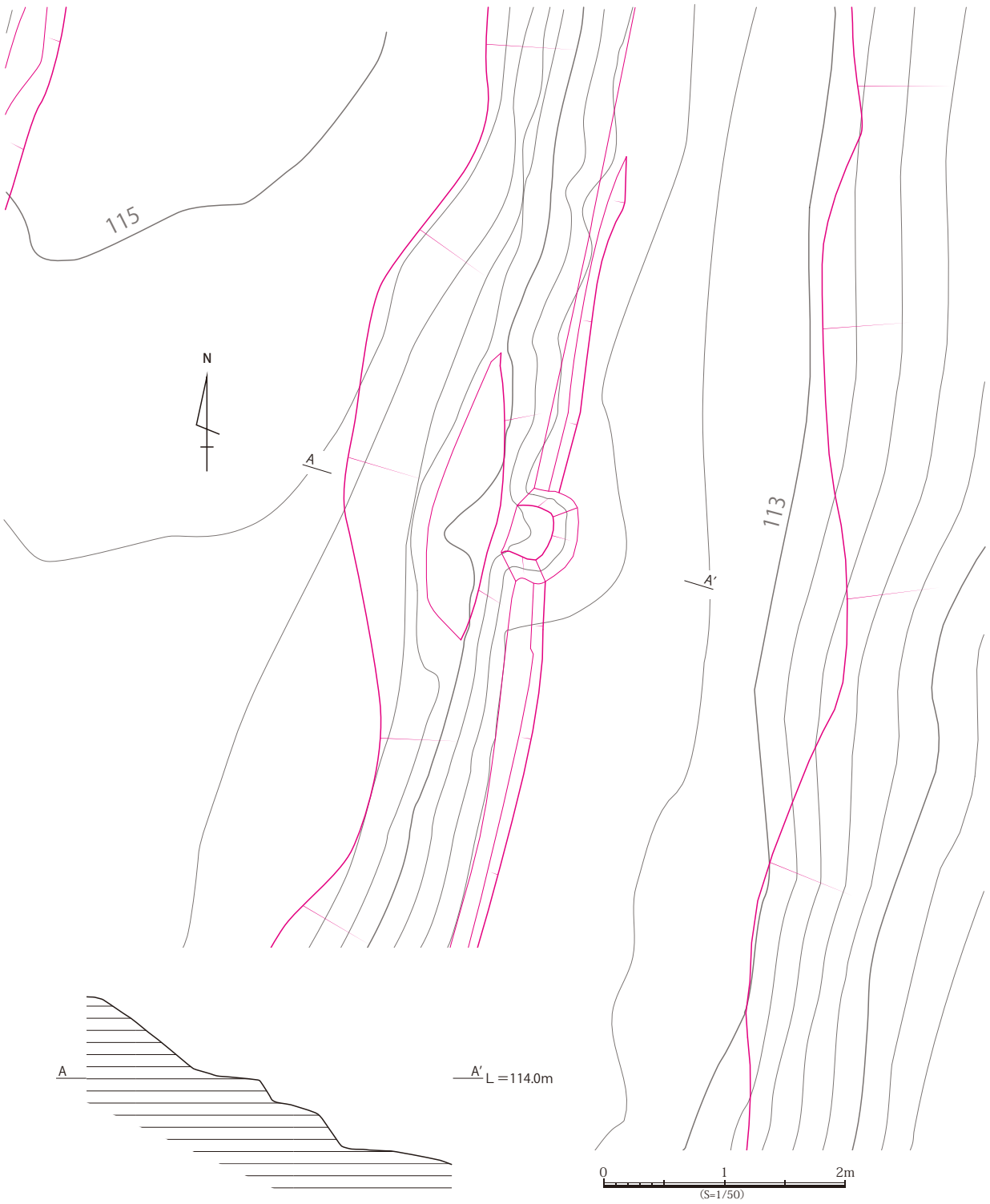
'土層説明

1　黄橙色(10YR6/8)砂質土　表土層
2　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土　堅密度 軟
3　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土　堅密度 軟
4　灰黄褐色(10YR5/2)砂質土　堅密度 軟
5　橙色(7.5YR6/8)くすむ砂質土
6　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土　炭片混じる
7　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土　炭片少し混じる
8　明黄褐色(10YR6/6)くすむ砂質土　炭片わずかに混じる
9　灰黄褐色(10YR4/2)砂質土
10　にぶい黄褐色(10YR/4/3)砂質土　やや堅くしまる
11　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土　炭片混じる
12　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
13　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
14　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
15　黄橙色(10YR7/8)砂質土　} 色調は異なるが同層か
16　橙色(7.5YR6/8)砂質土
17　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
18　腐葉土層

※赤ライン＝山城面

0　1　2m
(S=1/50)

第 81 図　トンガ坊城跡 E － E′ 土層断面図（S=1/50）



第 82 図　トンガ坊城跡階段状遺構実測図（S=1/50）

面と考えられる。

小平坦面Cは第5平坦面南側下方に位置する。規模は長さ9.5 m幅0.6～0.9 mの帯状である。標高は約112.3 mで，第5平坦面との比高差は約80cmである。位置から第5平坦面に伴うものと考えられるが，性格は不明である。

○第6平坦面

第6平坦面は第4平坦面と第9平坦面の間に位置する郭である。西側は後世の土取りにより崩落している。規模は長さ約12m幅約15mの方形である。標高は約114.8mで，第4平坦面との比高差は1.2～1.4mである。遺構面までの埋土は20cm以下と浅く，地山面が郭面と考えられ，尾根元側を除き集落跡遺構面とほぼ重複する。平坦面の尾根元側には幅50～60cm深さ6～10cmの溝が部分的に検出されている。

○第7平坦面

第7平坦面は第5平坦面の西側に位置する郭である。規模は長さ12.5m幅約2mの帯状である。標高は約110.6mで，第5平坦面との比高差は約2.6 m，小平坦面Cとの比高差は約1.2mである。

なお，平坦面は北側へと続くが，地形観察では北に1 m以内で終結するものと想定できる。

○第8平坦面

第8平坦面は西側斜面に位置する郭である。規模は長さ約12 m，幅約4 mで，南東部は後世の土取りにより大きく崩落している。標高は約108.8 mである。尾根元側の第7平坦面との比高差は約1.4m，第9平坦面との比高差は約0.6 mである。

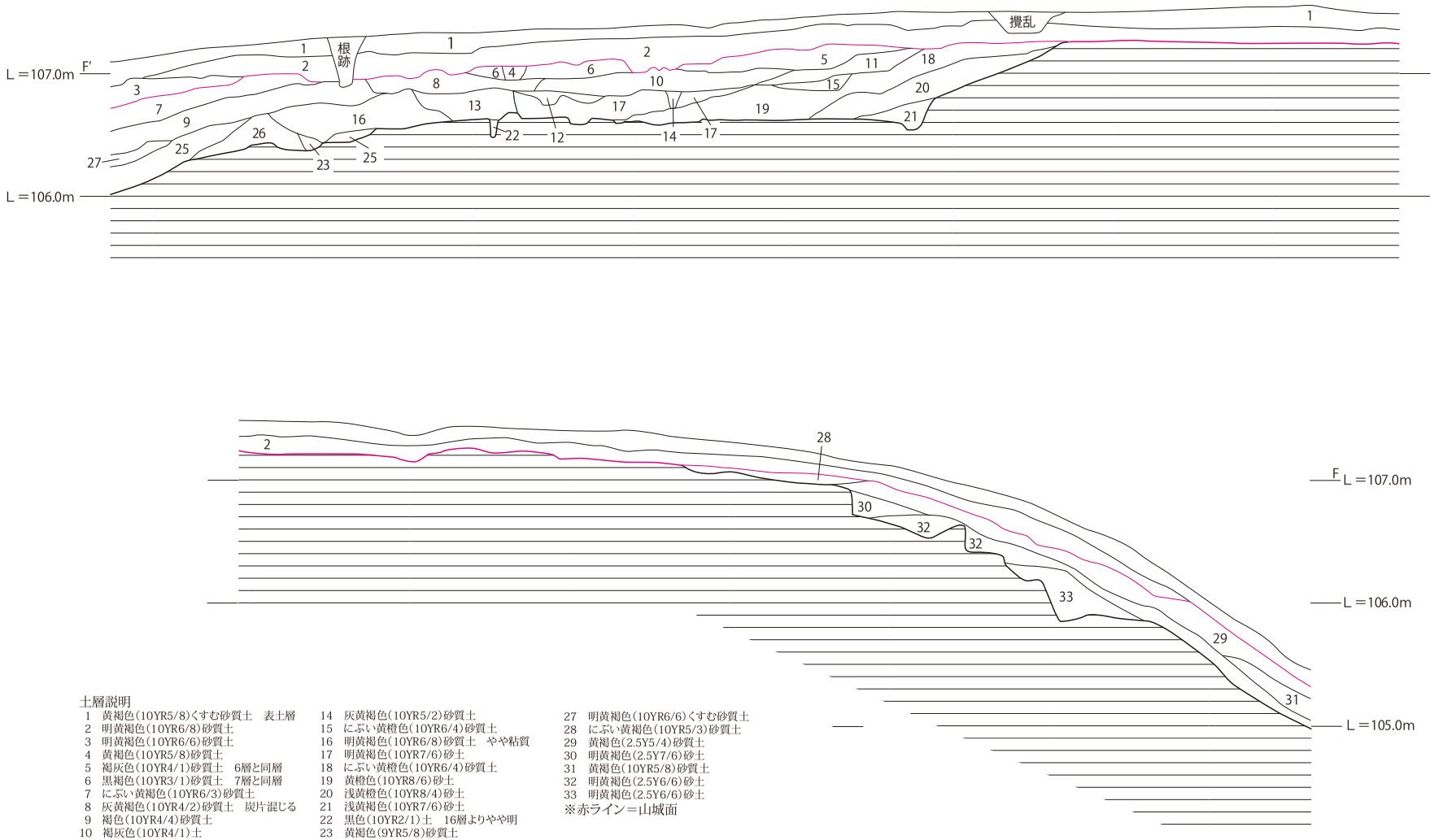
なお，地形は集落跡の地形と大差なく，集落跡の地形を踏襲し利用したものと考えられる。

○第9平坦面

第9平坦面は調査区の南端に位置する郭である。南側は急峻な崖面となる。規模は長さ22 m，幅は13～18 mで，標高は105.6～109.8 mで南へ向けて緩やかに傾斜する。第6平坦面との比高差は約1.5mで，調査区外南側の平坦面との比高差は約8 mである。土層観察によると，尾根元側から3 mほどは斜面を削りだし，以降南側は整地土層により郭面が造成されている。平坦面中央部付近は埋土が浅く，下面に存在する石棺を破壊して整地し[3)]，古墳の位置する南側は盛り土で整地している。以上のことから，本平坦面は城に伴い造成された面と考えられる。

○第10平坦面

第10平坦面は調査区の北端に位置し，平坦面は調査区外の北側へと続く。規模は長さ6 m以上，幅10 m程度で，標高は約120.0 mである。この平坦面は調査区外へと続くが，地形観察では尾根上の中心部に位置し，北へと大きく広がるものと想定できる。



土層説明

1 黄褐色(10YR5/8)くすむ砂質土　表土層
2 明黄褐色(10YR6/8)砂質土
3 明黄褐色(10YR6/6)砂質土
4 黄褐色(10YR5/8)砂質土
5 褐灰色(10YR4/1)砂質土　6層と同層
6 黒褐色(10YR3/1)砂質土　7層と同層
7 にぶい黄褐色(10YR6/3)砂質土
8 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土　炭片混じる
9 褐色(10YR4/4)砂質土
10 褐灰色(10YR4/1)土
11 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
12 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
13 黒色(10YR2/1)土　～1cmの炭片5%混じる
14 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土
15 にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
16 明黄褐色(10YR6/8)砂質土　やや粘質
17 明黄褐色(10YR7/6)砂土
18 にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
19 黄橙色(10YR8/6)砂土
20 浅黄橙色(10YR8/4)砂土
21 浅黄褐色(10YR7/6)砂土
22 黒色(10YR2/1)土　16層よりやや明
23 黄褐色(9YR5/8)砂質土
24 橙色(7.5YR6/8)砂質土
25 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
26 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土　やや粘質
27 明黄褐色(10YR6/6)くすむ砂質土
28 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
29 黄褐色(2.5Y5/4)砂質土
30 明黄褐色(2.5Y7/6)砂土
31 黄褐色(10YR5/8)砂質土
32 明黄褐色(2.5Y6/6)砂土
33 明黄褐色(2.5Y6/6)砂土
※赤ライン＝山城面

0　1　2m
(S=1/50)

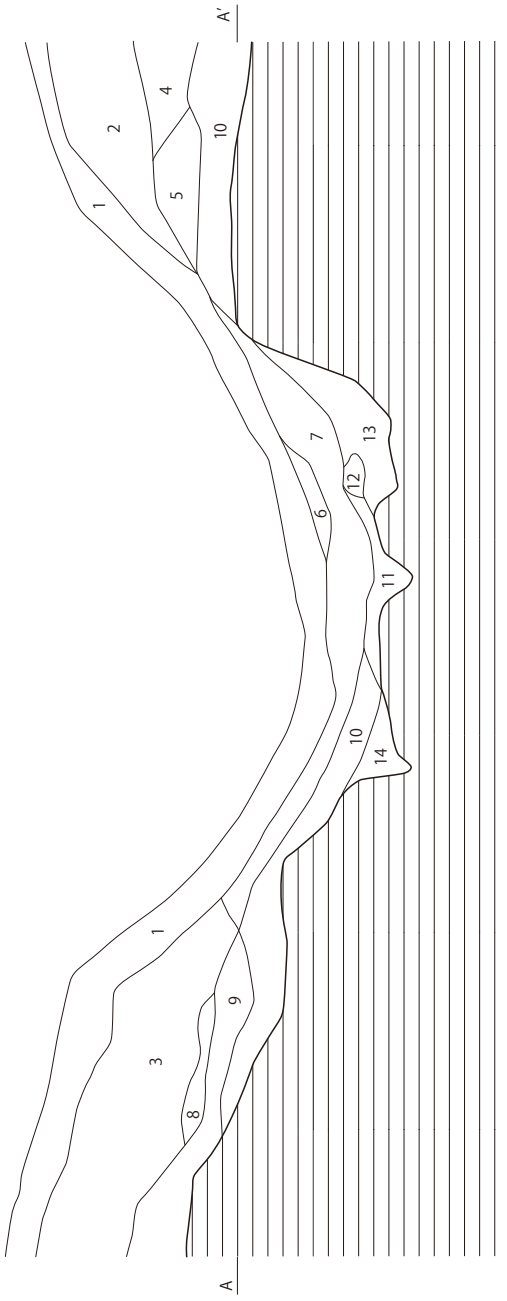
第 83 図　トンガ坊城跡 F － F′ 土層断面図（S=1/50）

○第 11 平坦面

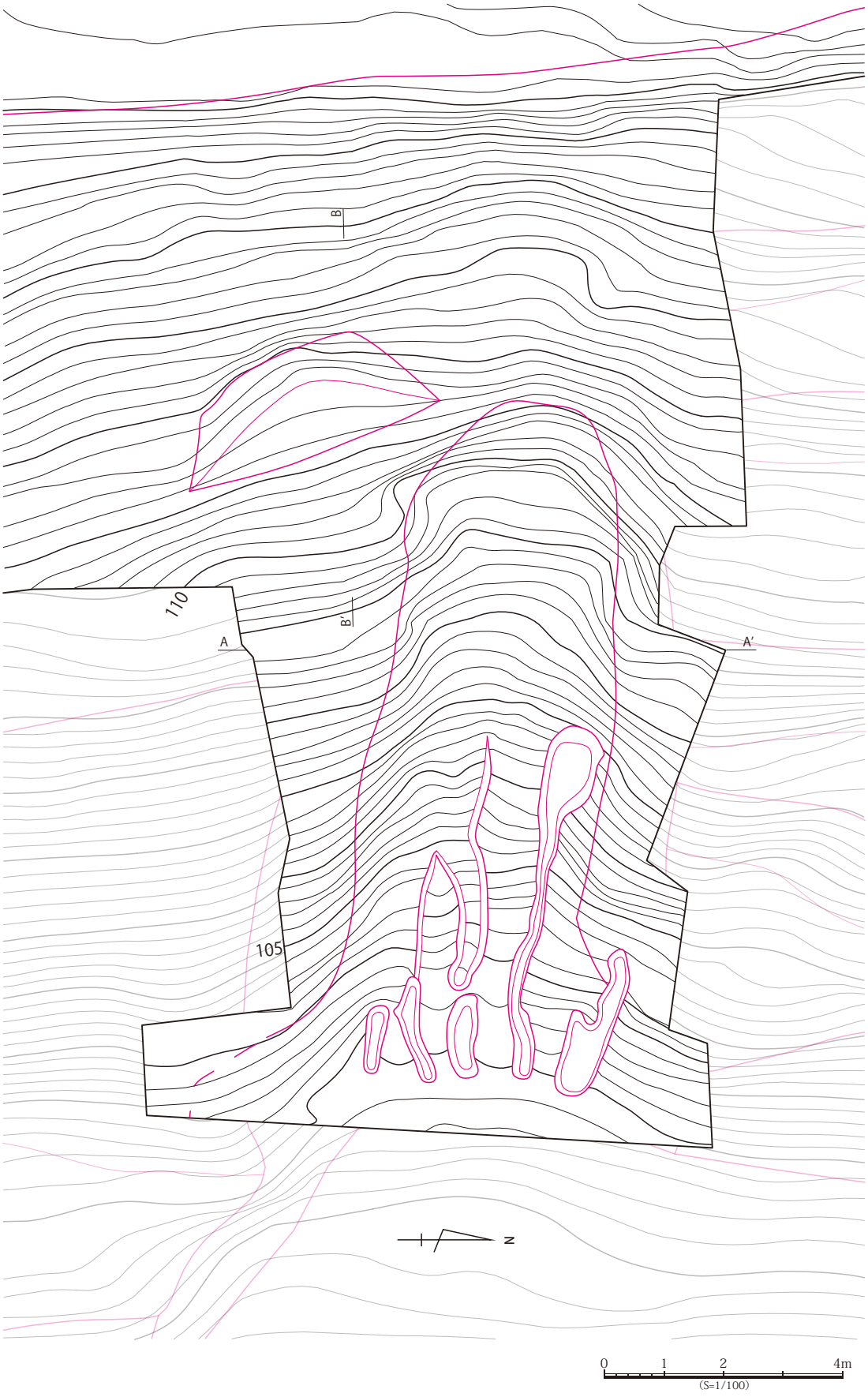
第 11 平坦面は調査区の北端に位置し，平坦面は調査区外の北側へと続く。規模は長さ 7.5 m以上，幅約 6 mで，標高は 118.4 ～ 118.9 mである。第 10 平坦面との比高差は約 0.6 mである。この平坦面は調査区外へと続くが，地形観察では北に 3 m以内で終結するものと想定できる。なお，北東直下の調査区外斜面には竪堀状の落ち込みがある。

○竪堀（第 84・85・86 図）

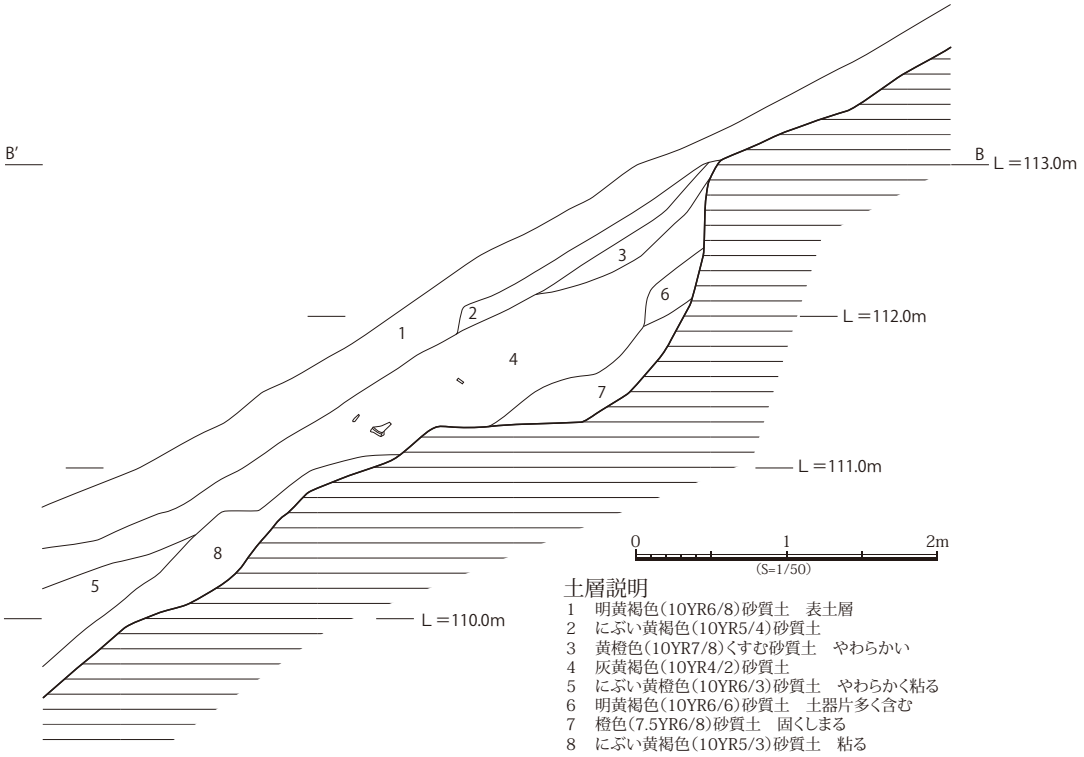
本遺構は東側斜面の北端に位置する。規模は幅 3.5 ～ 3.7m 深さは約 2m で断面は U 字型を呈する。底部は水が流れ削れたことによる溝が複数残っており，一定の期間竪堀として機能していたことがわかる。また竪堀の南西上手には，長さ 4.4m 幅 1.2m の半月状の平坦面を確認した。埋土の



第 84 図　トンガ坊城跡竪堀状遺構 A － A′ 土層断面図（S=1/50）



第 85 図　トンガ坊城跡竪堀状遺構実測図（S=1/100）



第 86 図　トンガ坊城跡竪堀状遺構 B － B′ 土層断面図（S=1/50）

状況から城跡に伴うものと考えられ，竪堀の上手で防御するための施設と考えられる。

なお，調査区内で確認できた竪堀は 1 基であるが，調査区外北に同様の竪堀状の落ち込みがある。また，本遺構の南側は崩落が著しく現状では不明であるが，竪堀が存在していた可能性がある[4)]。

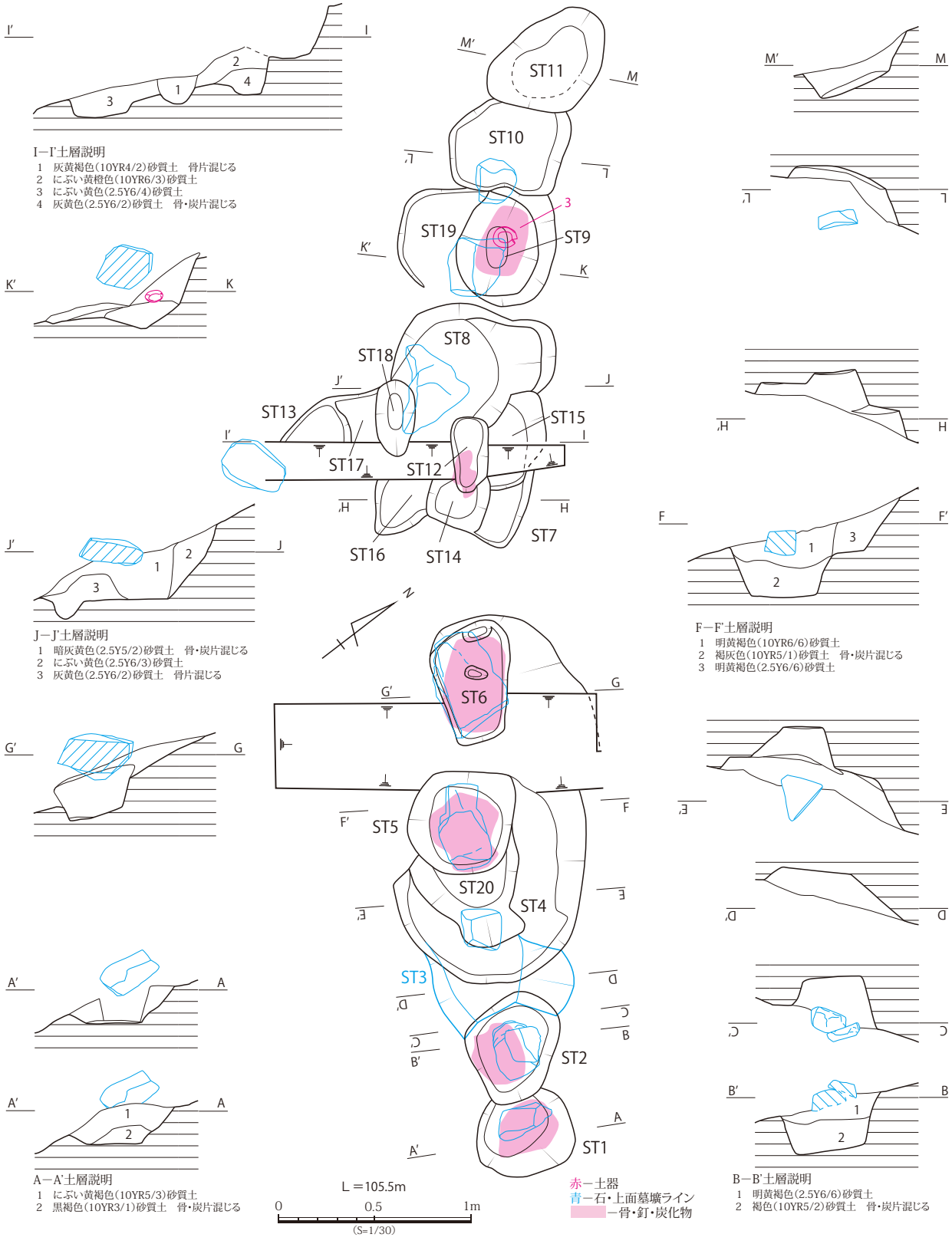
（2）その他の時期の遺構（墓）

調査区内からは複数の墓壙を検出している。西側斜面の西端には火葬墓群（ST 1 ～ 20）を，第 3 平坦面からは ST21 が，第 9 平坦面の尾根元からは ST22・23 が検出されている。なお，山城跡第 9 平坦面の南半には火葬墓と考えられる人骨や炭片・釘片を含む直径 50 ～ 80cm 深さ 20cm 以内の土坑を複数確認した。腐葉土層直下から確認できることや，丸釘を含むことから近代以降の一定期間に墓域として使用されていたものと考えられる。

○火葬墓群（ST 1 ～ 20・第 87 図）

ST1 ～ 20 は西側斜面の調査区西端に位置する。尾根元から西へと下る斜面は本墓群が位置する付近で幅 1 ～ 2m 程度の間で比較的緩い斜面となり，その後急斜面に戻る。地表には調査前から墓標石と考えられる石が露出しており，墓群の西側においても流出したと思われる石が確認できた。墓壙は斜面中に位置することから，いずれも西側が流失しており，依存状態はよくない。

墓壙個々の計測値については墓群計測表を参照していただきたいが，墓壙はいずれも直径 50cm 以内の小規模な楕円形のものがほとんどである。ST1 ～ 13 の墓壙内からは人骨片・炭片・角釘が出土し，特に ST1・2・5・6・9 からは多量の骨片・角釘が出土した。その規模と検出状況から，



第 87 図　火葬墓群（ST1 － 20）実測図（S=1/30）

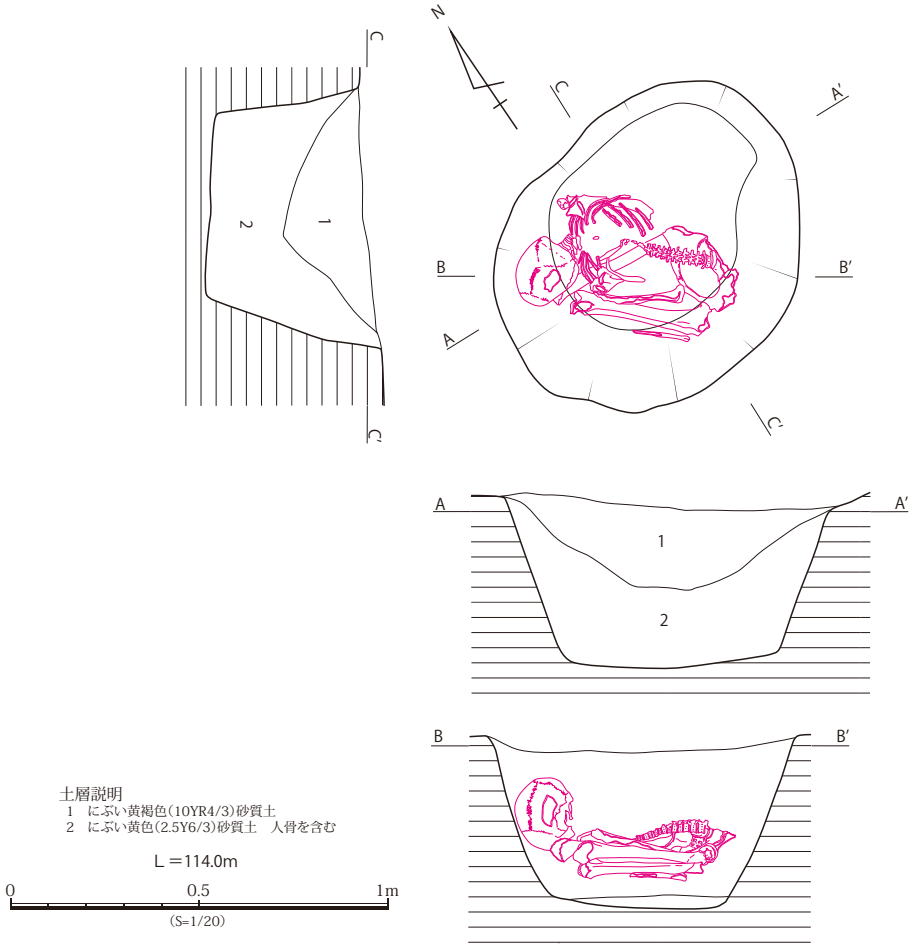
別地にて火葬したものを埋葬した火葬墓と考えられる。また，ST9 の骨検出面の上には，土師質皿が出土した。皿は被熱しておらず，骨片などを埋納する際に置かれたものと考えられる。

本墓群の時期であるが，放射線炭素年代測定では[5] ST5 が 19 世紀中頃，ST9 が 19 世紀前半の結果が出ている。墓壙は複数切りあうことから，近世後半以前から一定期間墓所として使用されていたものと考えられる。

○ ST21（第 88 図）

ST21 は第 3 平坦面，集落跡 SH9 の床面上に重複して位置する。平坦面の尾根元側で水が溜まる場所に位置し，付近に巨木の根があるなど覆土の状態は不明瞭で，郭面検出時には掘り方を確認することはできなかった。SH9 の検出時に内部から人骨が出土したことから墓壙と判断した。規模は掘り方上面で長辺 93cm 短辺 72cm の楕円形である。墓壙底面は長辺 63cm 短辺 47cm の楕円形で，底面標高は 113.58m，検出時の深さは最大で 48cm である。掘り方上面は確認できなかったが，少なくとも表土付近から掘られていたものと思われ，その場合，表土からの深さは約 1.2 m である。土層観察では木棺などの痕跡は確認できず，掘り方と人骨の間に空間がほとんどないことから，墓壙内への直葬と考えられる。

出土した人骨は下肢を正座の状態にして，上半身が前に倒れた座葬の状態で検出された。遺存状



第 88 図　ST21 実測図（S=1/30）

態は良好でほぼ全身の骨が残っていた。人骨は壮年（21 ～ 40 歳）女性のもので，推定身長は約 150cm である。また，墓壙内からは，直径 5.8mm の無色透明のガラス小玉が 1 点，直径 4.0 ～ 4.3mm の無色透明のガラス小玉が 57 点，直径 4.0 ～ 4.3mm の緑色透明のガラス小玉が 89 点が出土した。

本墓壙の時期は，人骨の放射線炭素年代測定および形質的特長から近世末と考えられる。

○ ST22（第 89 図）

ST22 は第 9 平坦面の尾根元側に位置する。規模は掘り方上面で長辺 156cm 短辺 100cm の長方形である。墓壙底面は長辺 107cm 短辺 60cm で，底面標高は 107.74m，深さは最大で 89cm である。その規模から木棺や木桶などを用いた土葬墓と考えられる。

墓壙埋土中の北側壁面付近からは，把手金具（31 ～ 33）・鉄釘（28 ～ 30）を，底面からは 1cm × 3cm 程の骨片が出土した。出土した骨片の放射線炭素年代測定を行った結果から，本墓壙の時期は江戸時代後期以降のものと考えられる[6]。

○ ST23（第 90 図）

ST23 は ST22 の 1m 東に位置する。掘り方の西側は崩れているが，規模は掘り方上面で長辺は推定 128cm 短辺 66cm の長円形である。墓壙底面は長辺 73cm 短辺 58cm で，底面標高は 107.72m，深さは最大で 92cm である。

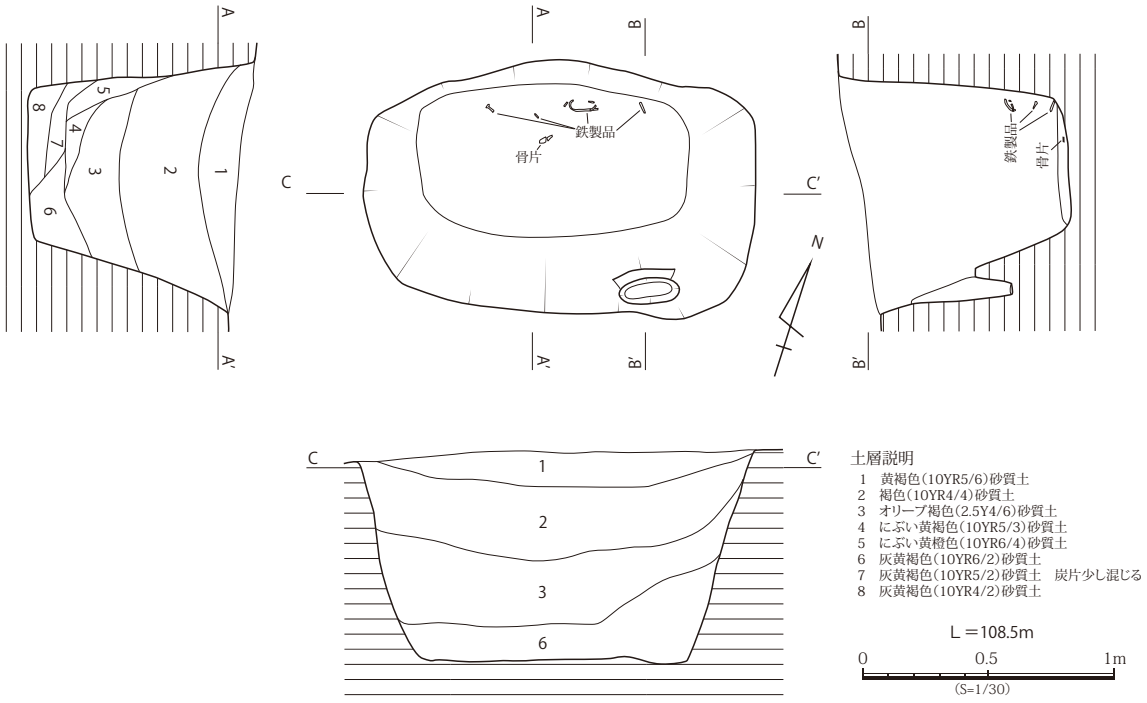
墓壙内からは遺物は出土しなかったが，形状や ST22 との位置関係から，ST22 と同時期頃の木棺などを用いた土葬墓と考えられる。

（3）遺物（第 91 図）

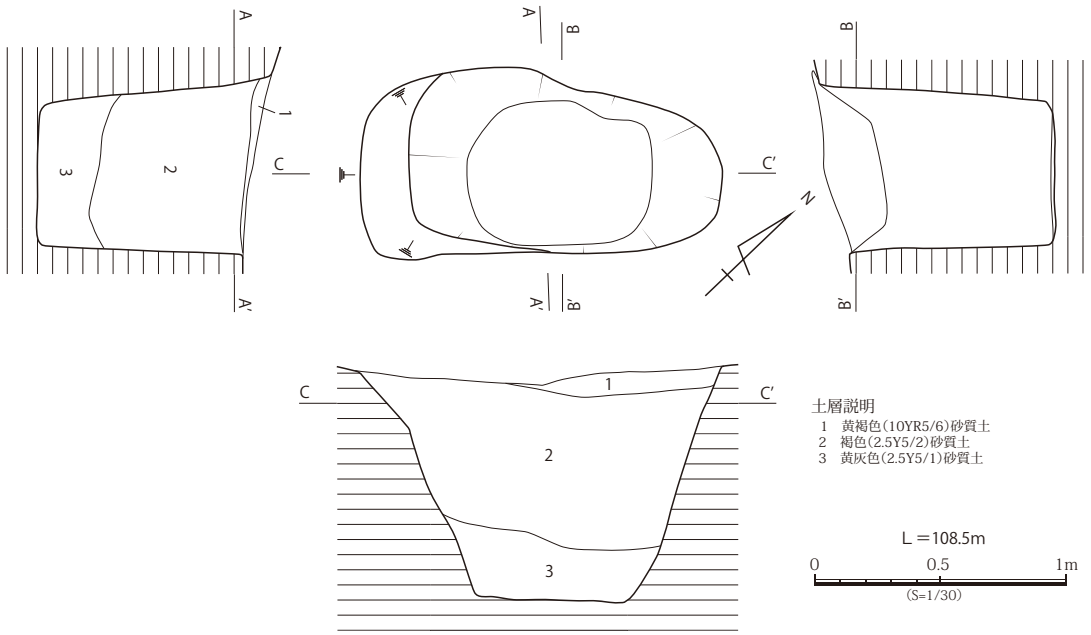
山城跡に伴う遺物としては，平坦面や斜面から，土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器・鉄釘・鉄滓・銭貨などが出土している。しかしながら，遺物のほとんどが細片かつ少量であり，時期の特定できるものや図示できるものはほとんどない。

（1）は第 4 平坦面の埋土から出土した，備前焼の擂鉢の口縁部の破片である。断面はにぶい赤褐色を呈し，特徴からⅤ期（16 世紀）に属すると考えられる[7]。（2）は第 1 平坦面の埋土から出土した内耳土器の口縁部の破片である。形状から鍋型と考えられる。わずかながら，口縁の内側に貼り付けた内耳が残り，上方から縦に穿孔し貫通する穴を持つ。時期については不明である。平坦面埋土や斜面の山城造成面上からは銅銭が出土している。（4）は開元通寶（唐・初鋳 621 年）で鋳上がり状態は良い。（5・6）は元豊通寶（北宋・初鋳 1078 年）で，やや白味を帯びた緑銅色である。（7）は依存状態が悪く，銭名は「祐」もしくは「禄」と思われる[8]。（8）は鉄銭である。表面は磨耗のせいか無文銭かどうかは判別できない。また，埋土中からは鉄滓が数点出土している。

墓跡に伴う遺物としては，ST9 から出土した土師質皿（3）が出土している。手づくね成形で，外面には指頭圧痕が多く，内面の口縁部の立ち上がり部には成形の際の爪あとがまわる。墓壙内から出土した人骨の年代測定から江戸時代初頭以降のものと考えられる。また，鉄釘が多数出土しており，依存状態の良いものを一部図示する（第 91 図 9 ～ 30）。身部はいずれも断面が長方形を呈し，



第 89 図　ST22 実測図（S=1/30）



第 90 図　ST23 実測図（S=1/30）

頭部は叩いて平らにしたものを折り曲げて成形されている。ひとつの墓壙から 30 点以上は出土しており，木棺に使用した物と考えられる。（31 ～ 33）は把手金具である。いずれも ST22 から出土しており，少なくとも 1 対の把手が存在していたものと考えられる。

ST21 からはガラス小玉が 147 点出土している。直径 5.8mm の透明の大型のものが 1 点（34），直径 4.0 ～ 4.3mm の無色透明の小型のものが 57 点，直径 4.0 ～ 4.3mm の緑色透明のものが 89 点である。全てを紐でつなげれば長さが約 34 ㎝になり，数珠などに使用されたものと思われる。

（4）小結

トンガ坊城跡について

トンガ坊城跡は調査前から山城跡として周知されてきた。しかしながら古文書などの文献への記載は皆無である。その名があらわれるのは，文化 10 年（1813 年）に厚狭鴨ノ庄の熊谷家家臣，児玉泰之進・井上源兵衛・槍持ち 1 名が熊谷氏菩提所に代参した際の記録である「安芸国安芸郡三入庄覚書」である。「一，下町屋に古城七ケ所有之左に記之，～中略～一，とんが坊山に城壱ケ所～以下略～」と記載があり[9]，この時期には城跡として認識されていたようである。本城跡の城主については熊谷氏老臣細迫氏という説がある[10]。

今回の発掘調査では，郭と考えられる平坦面 11 か所や竪堀などを確認した。しかしながら，平坦面上の多くは後世まで使用され，また，集落跡とも重複する面もあり，城に伴う建物などの明確な遺構は確認できず，また遺物も少量でかつ破片であった。前述したとおり，調査区外の尾根元側には平坦面が続き，調査区外南から西にかけても平坦面が広がる。全体を考慮しても，調査区内の平坦面 1・6・9 が，地形的にも眺望的にもよく，主たる郭として機能していたものと考えられる。

本調査では明らかに人工的な地形改変が見られ，少量ながらも陶磁器片や銅銭類が出土している。土層観察や地形観察によると，城に伴い造成された面としては第 2 平坦面中央部・東部，第 4・5・7・9 平坦面で，基本的な地形は弥生時代の集落跡の地形を元に形作られたものである。地形的な面からみれば東から南西部にかけては急な斜面や崖面で，竪堀と考えられる落ち込みも存在し，防備の面も十分であるが，西北側斜面は比較的緩い斜面で防御施設も確認できない。上根峠側（伊勢ヶ坪城側）を意識して造られたものとも考えられ，西側の尾根下の平地に本拠地を置いていたものと想像できる。服部英雄氏は鎌倉時代末期における熊谷一族惣領熊谷直経の所領を山倉川の谷間周辺の「五郎丸」（トンガ坊城跡の尾根南側）付近の限られた地域であるとしており[11]，比較的早い時期から熊谷氏や庶子の城として存在していた可能性がある。また，平坦面の埋土から陶磁器片や輸入陶磁器片などが出土しているが，少量でかつ破片であり，城跡の時期を特定できるものではないが，16 世紀前半頃の遺物がみられることから，少なくとも 16 世紀前半には城として機能していたと考えられる。

一方，「芸藩通史」や「文政 2 年高宮郡国郡志御用につき下調べ書き出し帳」にはその名を見ることは出来ない。同時期頃の「安芸国安芸郡三入庄覚書」は地元民からの聞き取りであり，その頃にはすでに城の存在を知るものが少なかったとも想像できる。今回の山城跡の調査範囲は部分的なものであり，調査区の北側及び南側に広がるものと考えられ，全体の様相が分かってから，その性

格を再検討する必要がある。

注

1．調査区外北側の東斜面には，竪堀状の落ち込みが数か所確認できる。尾根元側には堀切とも想定できる尾根を分断する堀込みがある。
2．平坦面は郭と考えられるが，調査区外の平坦面とあわせ主郭から番号をふるべきであり，本報告書では便宜上「平坦面」として報告し，今後の名称付けに対応するものとする。
3．抜き取った石材と考えられる石が，第 9 平坦面の東斜面の山城面上に存在した。
4．東側斜面は崩落や地すべりが著しく現状では不明であるが，第 6 平坦面の東側など等高線に痕跡が窺える場所もある。
5．人骨が被熱しておりコラーゲン抽出が行えず，人骨付着の炭片から測定を行った。ST6・12 の測定結果は 50 ± 28・22 ± 30 の結果が出ているが，埋土は浅く根の進入も多数あったことから，異資料が混入したものと思われる。
6．測定結果では modern（1800 ～ 1950 年）の測定結果が出ている。住民からの聞き取りでは，この地域では少なくとも大正時代にはすでに土葬は行われていないことから，江戸時代後期から明治時代にかけてのものと推測できる。
7．間壁忠彦『考古学ライブラリー 60　備前焼』ニュー・サイエンス社　1991 年
8．字体から元祐通寶（北宋・初鋳 1086 年）の可能性がある。
9．原書の所在は不明で，下記の書の写真及び読み下しを参考にした。
栗田義一『安芸三入庄熊谷氏』1990 年
10．崎田欣也・崎田欣二「可部地方における中世城郭の実態」『芸備』第 8 集　芸備友の会　1979 年
なお，トンガ坊城跡の東側には細迫の小字名が残る。
11．服部英雄氏は鎌倉時代末期における熊谷一族惣領熊谷直経の所領を山倉川の谷間周辺の「五郎丸」（トンガ坊城跡の尾根南側）付近の限られた地域であるとしている。
服部英雄『歴史を読み解く－さまざまな史料と視覚－』青出版株式会社　2003 年

第 4 表　トンガ坊城遺跡近世墓出土鉄器観察表

（(　)：残存値）

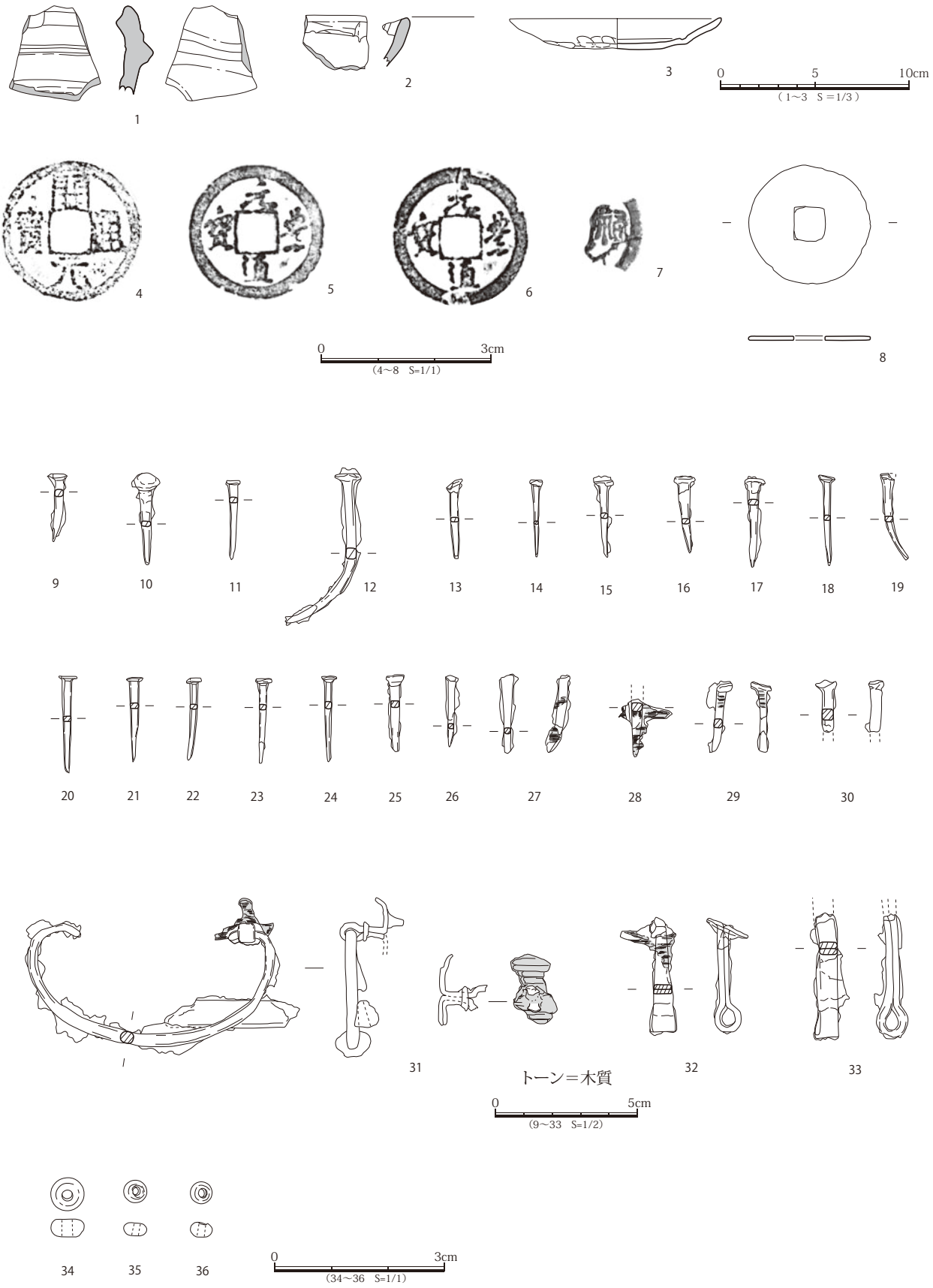
番号	種別	出土位置	計測数値（cm）				備考
			部位	長さ	幅	厚さ	
9	鉄釘	ST2	全長	2.4	0.3	0.25	頭部折り返し
			頭部		0.7		
10	鉄釘	ST2	全長	3.25	0.35	0.2	頭部折り返し
			頭部		0.9		
11	鉄釘	ST2	全長	2.8	0.3	0.2	頭部折り返し
			頭部		0.5		
12	鉄釘	ST5	全長	6.2	0.4	0.4	頭部打圧成形
			頭部		0.95		
13	鉄釘	ST5	全長	2.8	0.3	0.15	頭部折り返し
			頭部		0.55		
14	鉄釘	ST5	全長	2.2	0.2	0.1	頭部折り返し
			頭部		0.45		

番号	種別	出土位置	計測数値（cm）				備考
			部位	長さ	幅	厚さ	
15	鉄釘	ST5	全長	2.7	0.25	0.2	頭部折り返し
			頭部		0.65		
16	鉄釘	ST5	全長	2.7	0.3	0.2	頭部折り返し
			頭部		0.75		
17	鉄釘	ST5	全長	3.15	0.2	0.2	頭部折り返し
			頭部		0.7		
18	鉄釘	ST6	全長	3.2	0.2	0.2	頭部折り返し
			頭部		0.6		
19	鉄釘	ST6	全長	3.3	0.3	0.2	頭部折り返し
			頭部		0.5		
20	鉄釘	ST6	全長	3.4	3.0	0.2	頭部折り返し
			頭部		0.6		
21	鉄釘	ST6	全長	3.0	0.3	0.2	頭部折り返し
			頭部		0.55		
22	鉄釘	ST6	全長	2.9	0.25	0.2	頭部折り返し
			頭部		0.5		
23	鉄釘	ST6	全長	3.0	0.25	0.2	頭部折り返し
			頭部		0.6		
24	鉄釘	ST6	全長	3.0	0.25	0.25	頭部折り返し
			頭部		0.5		
25	鉄釘	ST8	全長	2.7	0.3	0.25	頭部折り返し
			頭部		0.6		
26	鉄釘	ST8	全長	2.5	0.2	0.2	頭部折り返し
			頭部		0.4		
27	鉄釘	ST22	全長	2.75	0.2	0.3	打圧変形，木質残存
			頭部	0.2	0.5	0.4	
28	鉄釘	ST22		2.0	0.4	0.4	木質残存
29	鉄釘	ST22	全長	2.5	0.25	0.3	打圧変形，木質残存
			頭部	0.3	0.7	0.5	
30	鉄釘	ST22	全長	(1.8)	0.4	0.4	打圧変形
			頭部	0.3	0.8	0.55	
31	環状金具	ST22	全長	15.6			留金部に木質残存
			輪金部	4.5	8.7	0.3 ～ 0.4	
			留金部	(6.0)	0.3	0.1 ～ 0.2	
32	留金具	ST22		(9.0)	0.3 ～ 0.8	0.15	木質残存
33	留金具	ST22		(9.0)	0.7	0.2	木質残存

第５表　トンガ坊城遺跡近世墓墓壙計測表

（[　]：復元値）

遺構名	計測数値（cm）			備考
	長辺	短辺	深さ	
ST1	35	28	18	墓標石有り。ST2 に切られる。
ST2	38	35	19	墓標石有り。ST3 に切られる。
ST3	42	[33]	23	
ST4	[102]	76	26	墓標石有り。ST3・5・20 に切られる。
ST5	39	37	22	墓標石有り。
ST6	56	35	23	墓標石有り。高低差 10cm の底面。
ST7	69	[22]	15	ST5・14・15 に切られる。
ST8	[63]	46	40	墓標石有り。ST5・12・18 に切られる。
ST9	20	10	35	墓標石有り。土師皿出土。ST10 と切り合う。
ST10	48	[43]	18	墓標石有り。ST11 に切られる。
ST11	42	30	21	高低差 15cm の底面。
ST12	35	15	20	
ST13	[30]	[20]	15	
ST14	20	[19]	21	ST12 に切られる。
ST15	[42]	20	25	ST2・14 に切られる。
ST16	[24]	[23]	6	ST14 に切られる。
ST17	[22]	[20]	9	ST13・18 に切られる。
ST18	19	8	20	ST9・10 と切り合う。
ST19	[40]	[49]	30	ST9 の掘り方の可能性有り。
ST20	[40]	[38]	[13]	ST5 に切られる。
ST21	63	47	48	人骨・ガラス小玉出土
ST22	107	60	89	人骨・環状金具出土
ST23	73	58	92	



第 91 図　出土遺物実測図（1 ～ 3 は S=1/3，4 ～ 8，34 ～ 36 は S=1/1，9 ～ 33 は S=1/2）

Ⅳ　坊主山遺跡

1．調査の概要

本遺跡は，備前坊山（789.4m）から南に延びる山脚から派生した尾根筋の先端部に位置する。尾根筋は先端部でわずかに隆起していることから，坊主山古墳として周知されていた。

広島市教育委員会による事前の試掘調査により，墓壙と考えられる複数の掘り込みや弥生土器片を確認した。前述した通り，当地が坊主山古墳として周知されていたことから，弥生時代の墳墓群と古墳が重複していることを想定し調査を開始した。

調査の結果，弥生時代中期～後期にかけてのものと考えられる石棺墓 1 基，土壙墓 39 基，土坑 1 基を確認した。遺構に伴う土器等の遺物は出土しなかったが，石棺墓内から人骨が，埋土中から弥生土器片が数点出土した。

2．地形と基本層序（第 92・93 図）

本遺跡は南北へ伸びる尾根の先端部，標高 116 ～ 118m の尾根上に位置している。尾根筋は標高 150 ～ 130m の地点で幅 20 ～ 60m の平坦面となり，標高 130 ～ 120m の地点で急斜面になった後，標高 110m 付近で緩やかな鞍部となり先端部で再び高まっている。遺跡は先端部の高まり付近に位置し，尾根筋は周辺の水田面へと急激に下がる急斜面となる。尾根のふもとには水田面が広がり，西に位置するトンガ坊城遺跡との間の谷間には専隆寺川が流れる。調査範囲には，杉・檜などの山林が広がっていた。

調査にあたり，尾根筋に沿った南北方向，尾根筋に直交する東西方向，尾根頂上部から放射状の方向の各所にトレンチを設定し，土層観察を行った。設定したトレンチのうち，尾根筋中央に沿う A － A’ 土層，尾根を横断する B － B’ 土層を基本土層として示す。

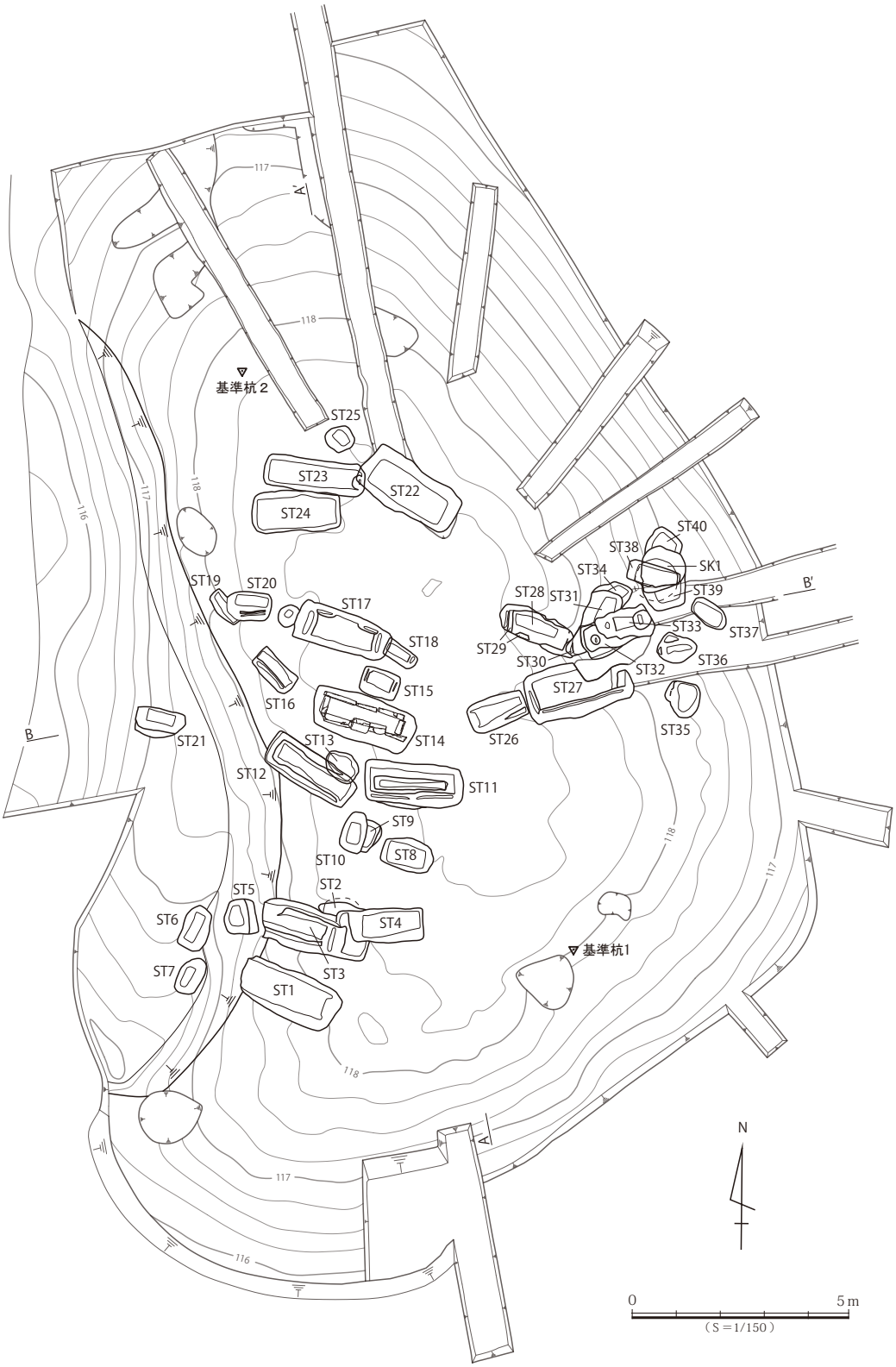
本遺跡の位置する尾根は，地盤が風化した花崗岩（地山）で形成される。堆積する土は基本的に花崗岩バイラン土が主な成分となっているため，土質は砂分の多い砂質土で形成される。遺構は基本的に地山を掘り込んで造られており，尾根上に位置するため遺構面までの埋土は約 20 ～ 30cm と浅い。第 1・2 層は遺構面上に堆積した表土層で，遺構面は第 2 層より下層に形成される。表土が浅いながらも，墓標石と考えられる石材が遺構埋土から第 2 層にかけて確認できた。このことから，遺構面まではあまり攪乱をうけておらず，後世の利用・地形改変等は少ないものと考えられる。調査区の東・南側斜面は自然に傾斜しており，西側斜面は標高 117 mの等高線に沿う形で，幅約 1m・高さ約 0.5m の規模で崩れている。

なお，本調査においても古墳を築造する際の盛土や掘り込みなどの地形整形の痕跡は認められず，古墳は存在しなかったと考えられる。

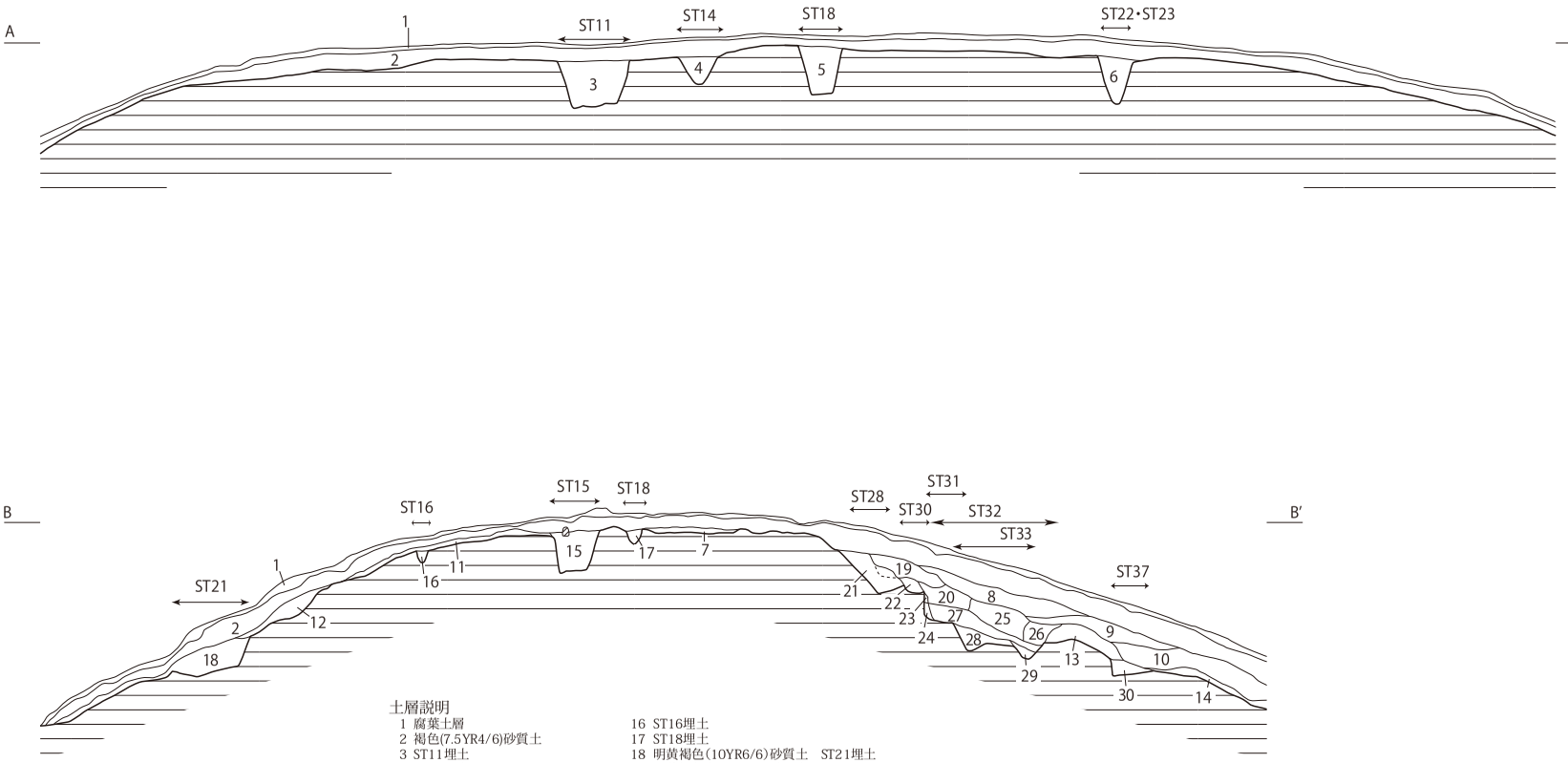
3．遺構

○ ST1（第 94 図）

ST1 は調査区の南西部，標高 117.5 ～ 118.0m にかけての緩斜面に位置する。墓壙は西側が斜



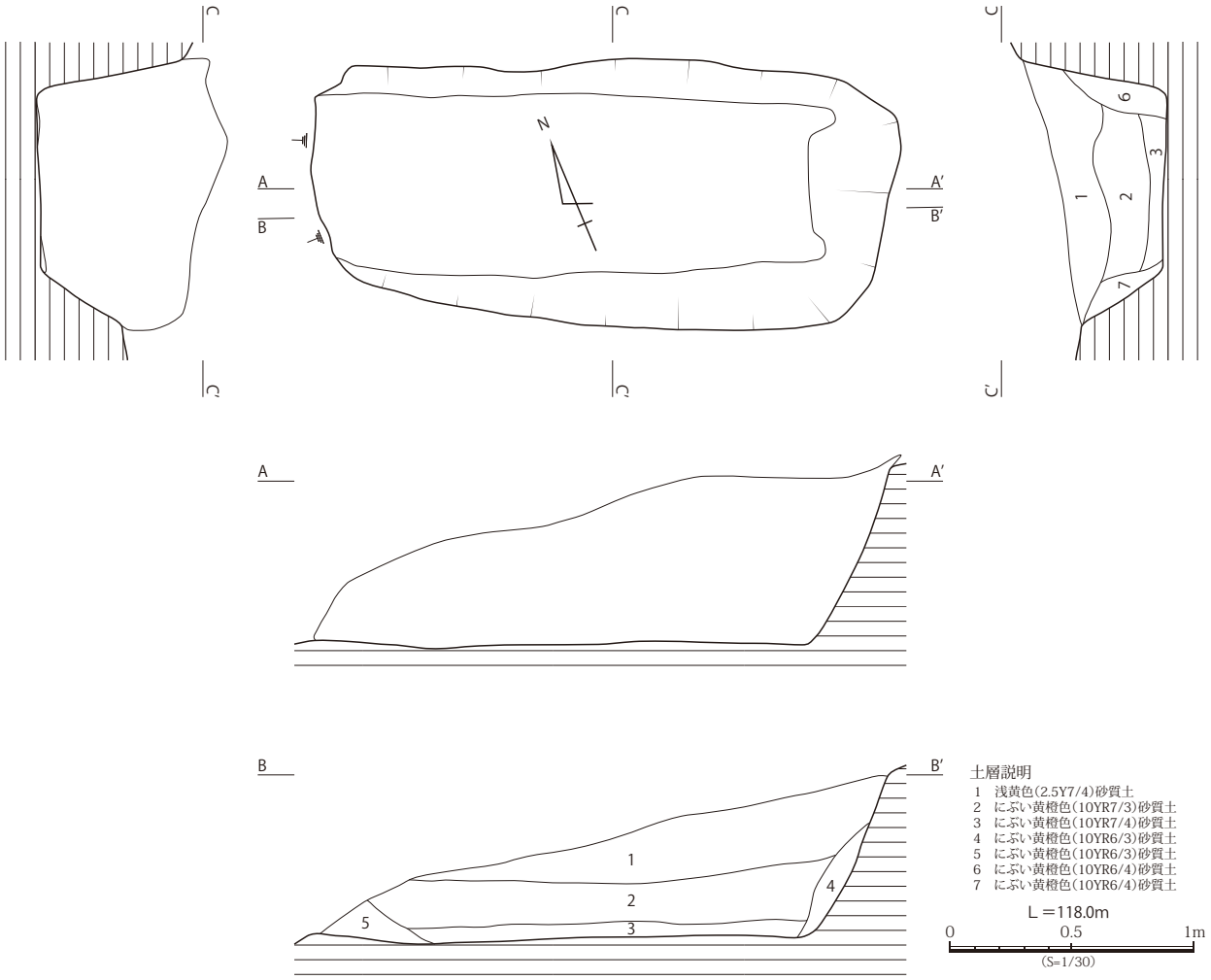
第 92 図　坊主山遺跡遺構配置図（S=1/150）



土層説明

1 腐葉土層
2 褐色(7.5YR4/6)砂質土
3 ST11埋土
4 ST14埋土
5 ST18埋土
6 ST22・ST23埋土
7 黄褐色(10YR5/6)砂質土
8 明褐色(7.5YR5/6)砂質土
9 黄褐色(10YR5/6)砂質土
10 明褐色(7.5YR5/8)砂質土
11 黄褐色(10YR5/8)砂質土
12 褐色(7.5YR4/4)砂質土
13 にぶい黄橙色(10YR7/2)砂質土
14 にぶい黄橙色(10YR7/4)砂質土
15 ST15埋土
16 ST16埋土
17 ST18埋土
18 明黄褐色(10YR6/6)砂質土　ST21埋土
19 明黄褐色(10YR6/6)砂質土
20 にぶい褐色(7.5YR5/4)砂質土　ST31埋土
21 ST28埋土
22 明黄褐色(10YR6/8)砂質土　ST30埋土
23 明黄褐色(10YR6/6)砂質土　ST32埋土
24 黄褐色(10YR5/8)砂質土　ST32埋土
25 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
26 明褐色(7.5YR5/6)砂質土　カーボン含む
27 明褐色(7.5YR5/8)砂質土　ST32埋土
28 明赤褐色(5YR5/6)砂質土　ST33埋土
29 橙色(7.5YR6/6)砂質土　ST33埋土
30 明黄褐色(10YR6/6)砂質土　ST37埋土

第 93 図　坊主山遺跡基本層序（S=1/100）



第 94 図　坊主山遺跡 ST1 実測図（S=1/30）

面により流失しているが，残存状況から底面形状は長方形と考えられる。主軸は N67°W である。規模は墓壙底面が現状で長辺 203cm 以上，短辺は中央部で 73cm，両小口側は約 65cm，底面標高は 117.34m，深さは最大 77cm である。東側小口の壁面の両端には，幅 10cm 程度の掘り込みを確認した。この掘り込みは側板を据えるためのものと考えられ，本墓壙は小口壁を掘り込んで側板を固定するタイプの木棺墓であったと考えられる。土層観察によると，第 4・5・6・7 層が木棺の裏込め土と考えられ，推定される木棺の規模は長さ 148cm 幅 57cm 程度である。頭位は底面形状において西側に広がりをみせることから，西の可能性がある[1)]。

○ ST2・ST3・ST4（第 96 図）

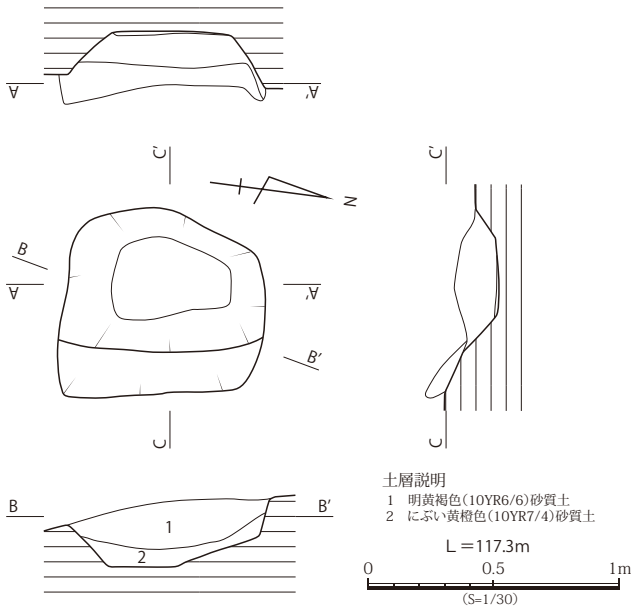
ST2 は ST1 の北約 1.5m に位置する。墓壙は南側の大半を ST3・4 によって切られており，北壁とそれに伴う底面の一部が残存する。墓壙底面の規模は，現状で長辺 90cm 短辺 41cm 以上，底面標高は約 117.8m，深さは最大 45cm である。残存部の北側は底面形状が丸みを帯びており，壁面も内傾していることから袋状土抗の可能性も考えられる。

ST3 は北東側で ST2 を切り，ST4 に切られて位置する。墓壙は西側が斜面により流失しているが，残存状況から底面形状は長方形と考えられ，主軸は N73°W である。墓壙は二重土壙になっており，墓壙底面の規模は，一次壙が現状で長辺 250cm 以上，短辺は中央部で 73cm，両小口側で約 62cm，標高は 117.53m，深さは最大 54cm である。二次壙は一次壙底面を浅く掘り窪められたもので，上端で長さ 200cm 以上最大幅 57cm，底面で長さ 147cm 以上，最大幅 33cm である。二次壙底面の標高は 117.44m で，一次壙からの深さは約 7cm，掘り方からの深さは最大 79cm である。二次壙は木棺を据えるためのものと考えられる。底面の東小口壁際から約 70cm 付近からは，長辺 55cm 短辺 10cm 外側底面からの深さ約 12cm の掘り込みを確認した。この掘り込みは壁面付近には位置していないが，小口板を据えるための溝の可能性がある。土層観察によると，第 13 ～ 15 層は木棺の裏込め土と考えられ，推定される木棺の規模は長さ 90 ～ 180cm 幅 50cm 程度である。

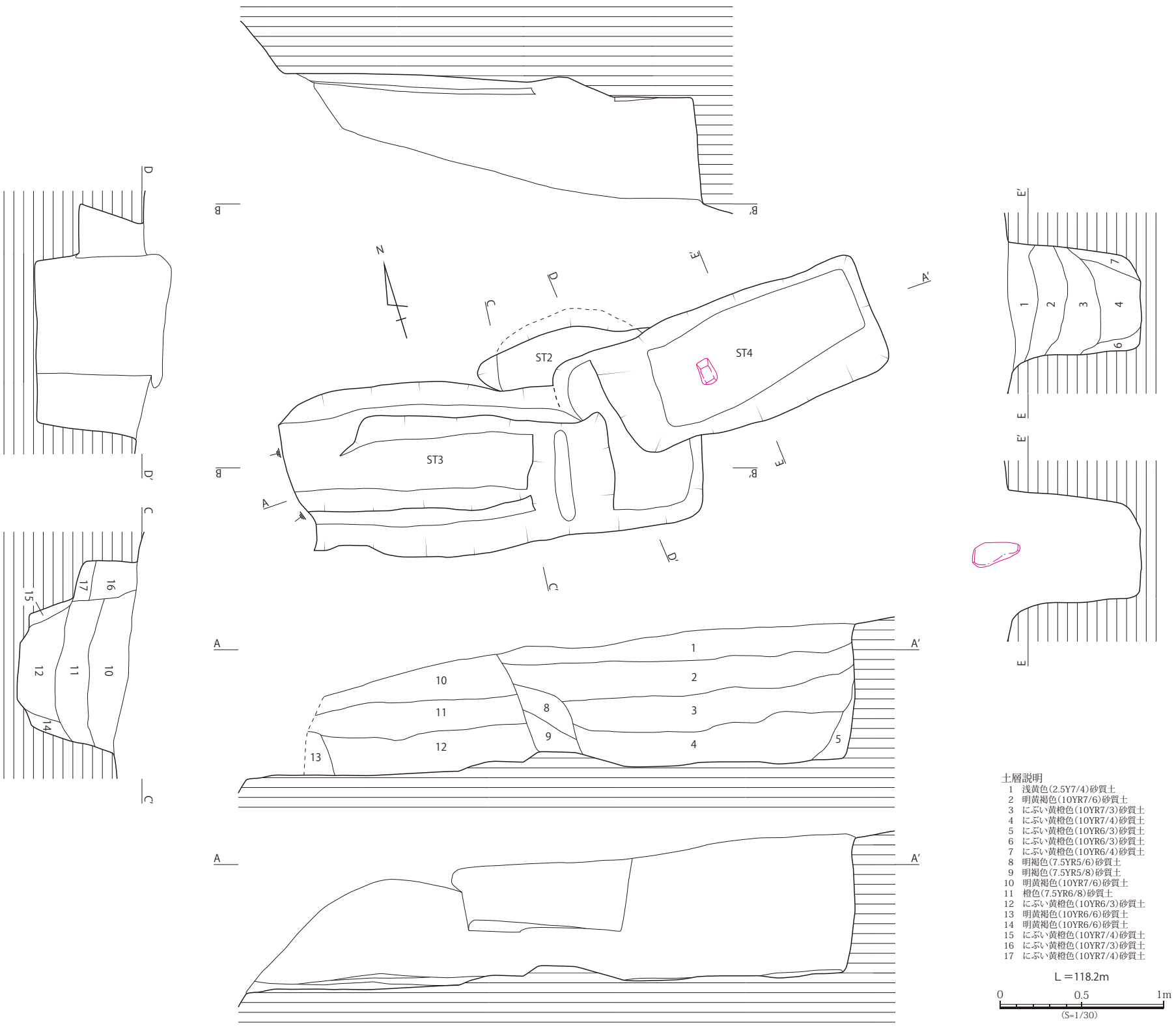
ST4 は ST2 の南側及び ST3 の北東部を切って位置する。底面形状は長方形で，主軸は N98°W である。墓壙底面は西小口側で段を持ち，墓壙底面の規模は一段目で長辺 183cm，標高は 117.58m，深さは最大 80cm である。2 段目は長辺 133cm，短辺は西側 48cm 東側 39cm，2 段目の底面標高は 117.5m，外側底面からの深さは 9cm である。土層観察によると，第 5 ～ 9 層は木棺の裏込め土と考えられ，推定される木棺の規模は長さ 140cm 幅 40cm 程度である。頭位は 2 段目の底面形状において西側が広いことから，西と考えられる。

本遺構の埋土中には，墓標石と考えられる長辺 8cm 短辺 5cm 高さ 20cm の細長い礫を確認した。

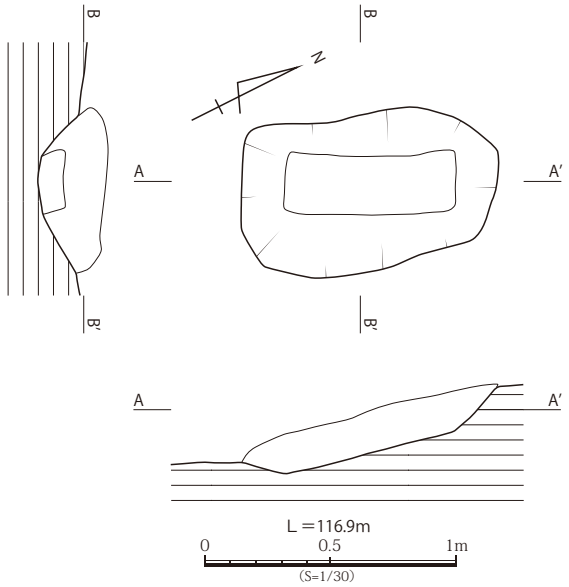
ここで，それぞれの墓壙の先後関係についてみると，土層観察及び遺構の切り合い関係から，ST2 → ST3 → ST4 の順に造られたと考えられる。



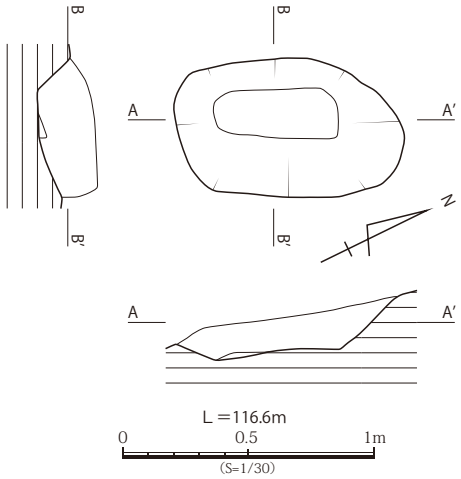
第 95 図　坊主山遺跡 ST5 実測図（S=1/30）



第 96 図　坊主山遺跡 ST2・ST3・ST4 実測図（S=1/30）



第 97 図　坊主山遺跡 ST6 実測図



第 98 図坊主山遺跡 ST7 実測図

○ ST5（第 95 図）

ST5 は ST3 の西 0.2m の斜面に位置する。底面形状は歪な長方形で，主軸は N8°W である。規模は墓壙底面が長辺 47cm，短辺は南側で 28cm 北側で 14cm，底面標高は 117.09m，深さは最大 26cm である。本墓壙はその規模から小児用と考えられる。

○ ST6（第 97 図）

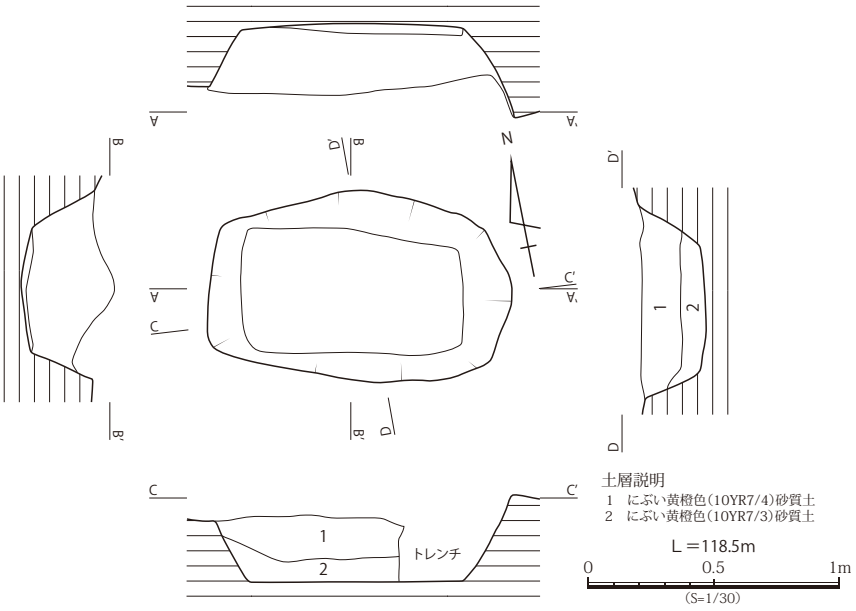
ST6 は ST5 の西 0.3m の斜面に位置する。底面形状は長方形で，主軸は N27°E である。規模は墓壙底面が長辺 67cm 短辺 24cm，底面標高は北側で 116.81m 南側で 116.65m，深さは最大 19cm である。頭位は北側の底面が高いことから北と考えられ，本墓壙はその規模から小児用であったと考えられる。

○ ST7（第 98 図）

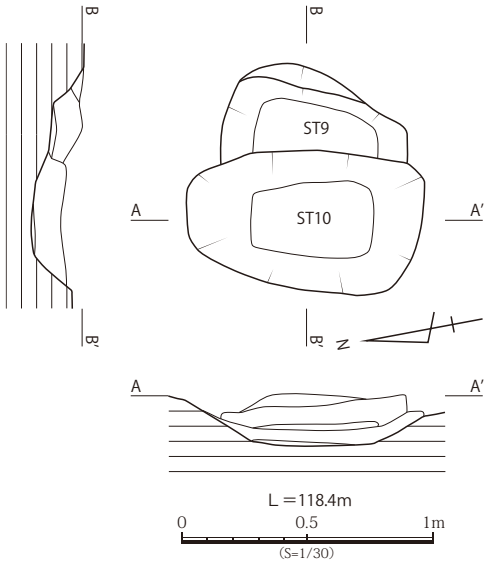
ST7 は ST6 の南 0.2m の斜面に位置する。底面形状は長方形で，主軸は N26°E である。規模は墓壙底面が長辺 50cm，短辺は北側で 20cm 南側で 17cm，底面標高は約 116.48m，深さは最大 21cm である。頭位は底面が北側に広がることから北と考えられ，本墓壙はその規模から小児用であったと考えられる。

○ ST8（第 99 図）

ST8 は ST4 の北 0.8m に位置する。底面形状は長方形で，主軸は N79°W である。規模は墓壙底面が長辺 88cm，短辺は西側で 49cm 東側で 38cm，底面標高は 118.15m，深さは最大 55cm である。頭位は底面が西に広がることから西と考えられる。本墓壙はその規模から小児用であったと考えられる。



第 99 図　坊主山遺跡 ST8 実測図（S=1/30）



第 100 図 坊主山遺跡 ST9・ST10 実測図（S=1/30）

○ ST9・ST10（第 100 図）

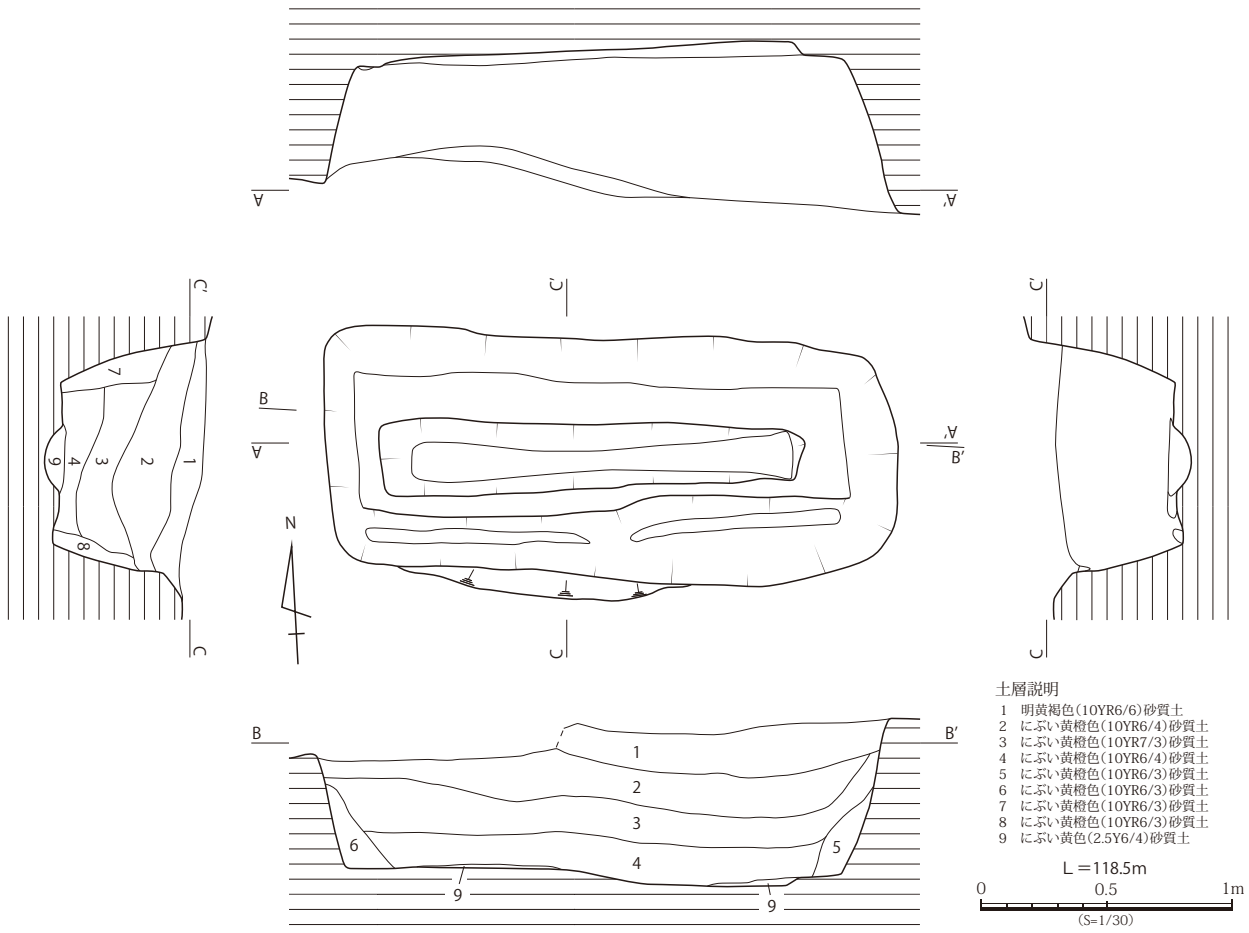
ST9 は ST8 の西 0.3m に位置し，墓壙の西側は ST10 に切られている。残存状況から底面形状は長方形と考えられ，主軸は N20°E である。規模は墓壙底面が現状で長辺 50cm 短辺 23cm 以上，底面標高は 118.27m，深さは現状で最大 14cm である。本墓壙はその規模から小児用であったと考えられる。

ST10 は ST9 の西半分を切って位置する。底面形状は長方形で，主軸は N170°W である。規模は墓壙底面が長辺 49cm，短辺は南側で 30cm 北側で 20cm，底面標高は 118.20m，深さは最大 18cm である。本墓壙はその規模から小児用であったと考えられる。

ここで，それぞれの墓壙の先後関係についてみると，ST10 の埋土中に ST9 の底面が確認できず ST9 を切っていることから，ST9 → ST10 の順に造られたと考えられる。

○ ST11（第 101 図）

ST11 は ST8 の北約 0.8m に位置する。底面形状は長方形で，主軸は N87°W である。墓壙は二重土壙になっており，墓壙底面の規模は，一次壙が長辺 193cm，短辺は西側で 55cm 東側で

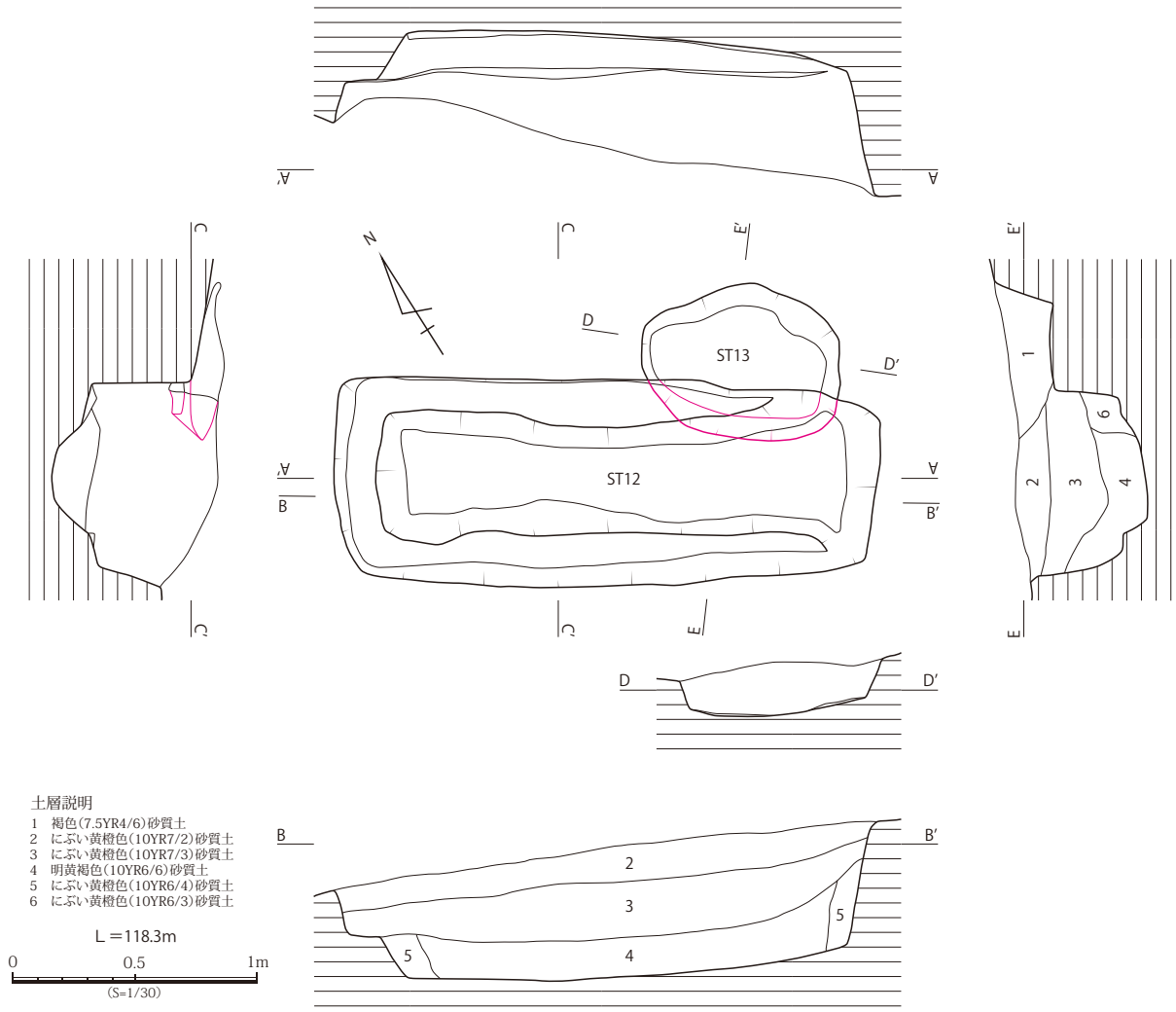


第 101 図　坊主山遺跡 ST11 実測図（S=1/30）

43cm，底面標高は 117.96m，深さは最大 61cm である。二次壙は一次壙底面を浅く掘り窪められたもので，上端で長さ 169cm，幅は東 20cm 西 31cm，底面は長さ 150cm，最大幅 18cm である。二次壙底面の標高は 117.92m で，一次壙からの深さは約 5cm，掘り方からの深さは最大 65cm である。二次壙は木棺を据えるためのものと考えられる。底面の南側壁面に沿って，幅 12cm 深さ約 3cm の掘り込みを確認した。この掘り込みは木棺の側板を据えるための溝と考えられる。また，土層観察において第 5 ～ 8 層は木棺の裏込め土と考えられ，推定される木棺の規模は長さ 165cm 幅 55cm である。頭位は一次壙の底面形状において西側が広いことから，西と考えられる。

○ ST12・ST13（第 102 図）

ST12 は ST11 の西 0.2m に位置し，北東側で ST13 に切られている。底面形状は長方形で，主軸は N58°W である。墓壙は二重墓壙となっており，一次壙の底面は「匚」の字状に広がる。墓壙底面の規模は，一次壙が長辺 195cm，短辺は西側で 77cm 東側で 63cm，底面標高は約 117.9m，深さは最大 52cm である。二次壙底面の規模は長さ 179cm，幅は西側で 34cm 東側で 48cm，一次壙からの深さは約 16cm である。土層観察によると，第 5・6 層は木棺の裏込め土と考えられ，推定される木棺の規模は長さ 158cm 幅 35cm である。頭位は一次壙の底面形状において西側が広いことから，西と考えられる。



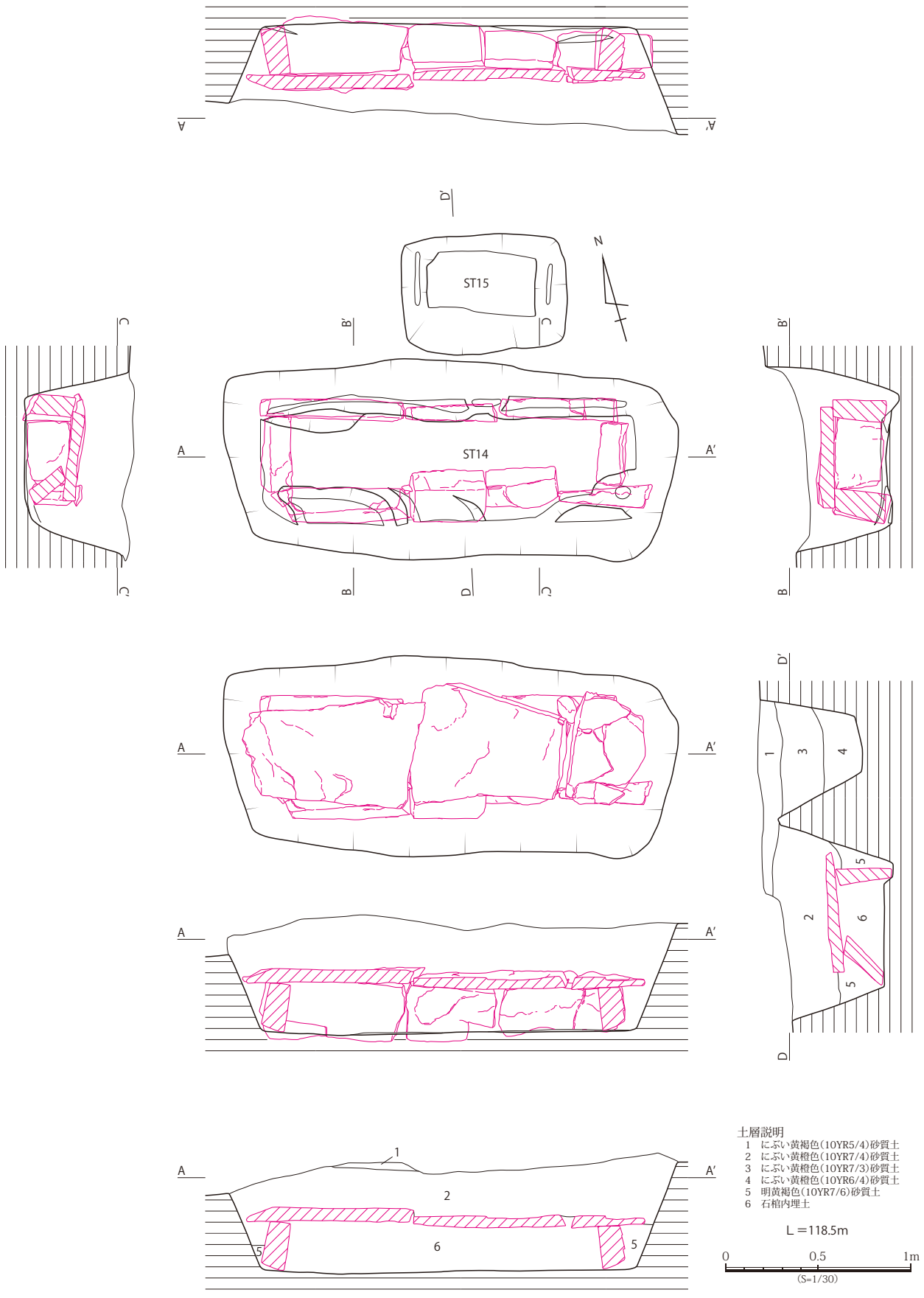
第 102 図　坊主山遺跡 ST12・ST13 実測図（S=1/30）

ST13 は南側で ST12 を切って位置する。底面形状は中央が膨らんだ長方形で，主軸は N50° W である。規模は墓壙底面が現状で長辺 72cm，短辺は東側で 34cm 中央で 46cm 西側で 25cm，底面標高は 118.19cm，深さは最大 24cm である。本墓壙はその規模から小児用であったと考えられる。

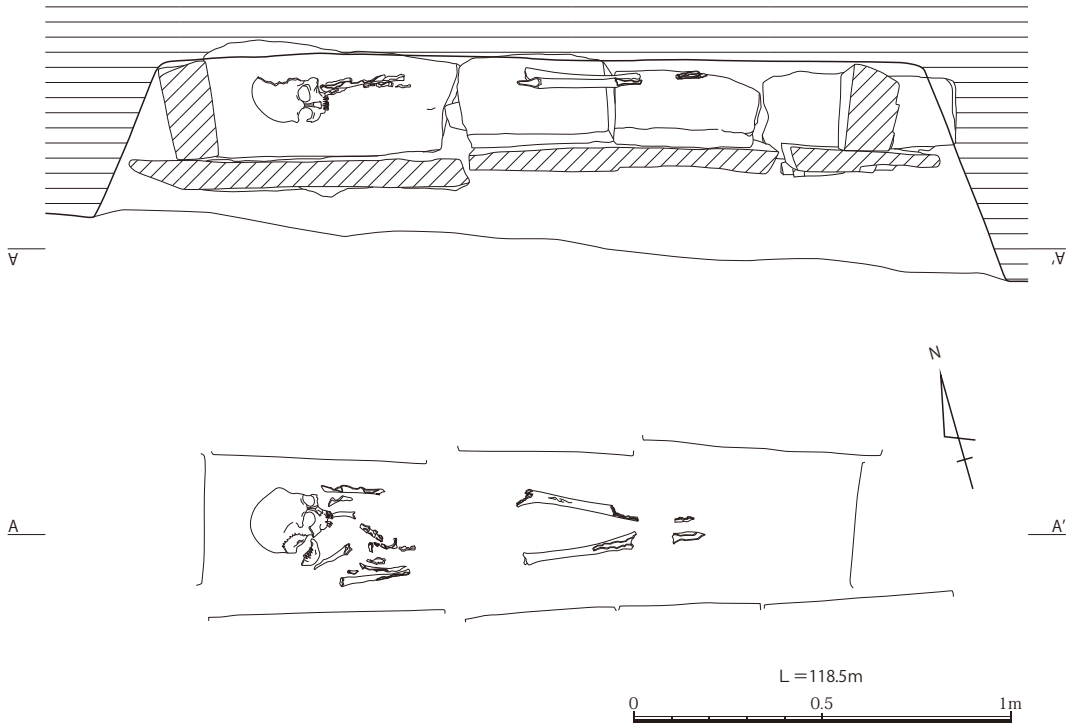
ここで，それぞれの墓壙の先後関係についてみると，土層観察により ST12 → ST13 の順に造られたと考えられる。

○ ST14（第 103・104 図）

ST14 は調査区の中央部，ST11 の北 0.2m に位置する石棺墓である。石棺内には，頭を西側に向けた人骨が遺存していた。底面形状は長方形で主軸は N74°W である。規模は墓壙底面が長辺 202cm，短辺は西側で 44cm 東側で 42cm，底面標高は 118.00m，深さは最大 64cm である。南北の底面壁際には石材を据えるための幅約 13cm 深さ約 5cm までの溝が掘り込まれている。



第 103 図　坊主山遺跡 ST14 実測図（S=1/30）



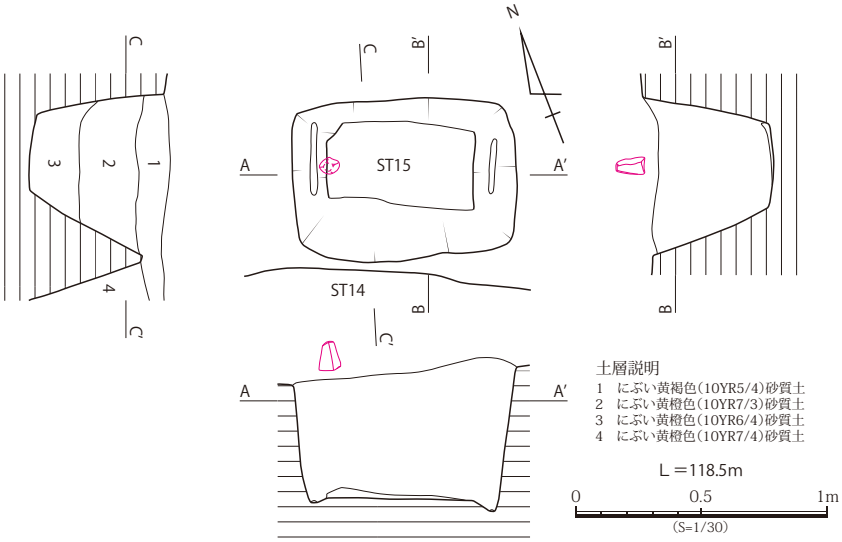
第 104 図　ST14 人骨出土状況実測図（S=1/20）

石棺は小口壁を側壁で挟む形の構造で，内側の規模は長さ 172cm，幅は西側で 43cm 東側で 38cm である。小口壁に用いられた石材は，西側が高さ 26cm 幅 41cm 厚さ 13cm，東側が高さ 23cm 幅 34cm 厚さ 13cm で，西側に大型の石材が用いられている。側壁は北側が 3 石，南側が 4 石によって構成され，南側中央部の石材は内側に倒れている。用いられている石材は，概ね高さ 20 ～ 30cm 厚さ 10cm 前後で，幅は南北両壁とも西側の 1 石が 65 ～ 70cm と大きく，他は 30 ～ 50 ㎝台のものを用いている。なお，前述のように，石材の下に溝が掘り込まれており，その深さを石毎に変えることによって石材上端の高さをそろえている。

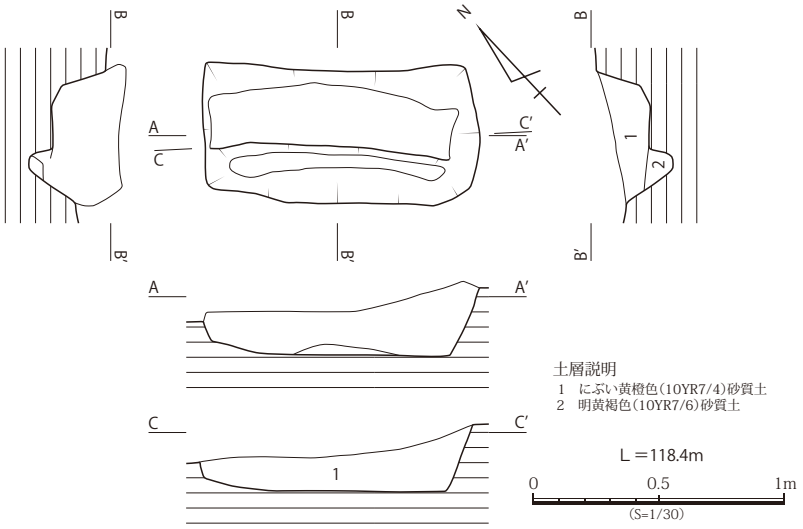
この石棺を覆う蓋石は 3 枚で，石材は西側の 2 枚が大きく，西端が長辺 98cm 短辺 57cm 厚さ 7cm，中央が長辺 84cm 短辺 65cm 厚さ 5cm，東端が長辺 52cm 短辺 42cm 厚さ 5cm である。東側の小型の蓋石の隙間を補うように 10 ～ 20cm 大の石が用いられているが，粘土等による目張りは見られなかった。

出土した人骨は，頭を西に向けた仰臥伸展状態で安置され，頭骨，鎖骨，上腕骨の胸部より上と，大腿骨等が遺存していた。蓋石の隙間下には人骨は遺存していないことから，蓋石の隙間より棺内に水が浸入し，保存状態を悪化させたものと考えられる。人骨は老年（60 歳以上）男性のもので，身長は 160cm 以下と推定されている。

なお，出土人骨の 14C 炭素年代測定（AMS 年代測定）を行った結果，暦年代が BC90 ～ AD80 年の値が得られた。本石棺墓の時期は年代測定の結果から，弥生時代中期後半頃のものと考えられる。



第 105 図　坊主山遺跡 ST15 実測図（S=1/30）



第 106 図　坊主山遺跡 ST16 実測図（S=1/30）

○ ST15（第 105 図）

ST15 は ST14 の北に接して位置する。底面形状は長方形で，主軸は N69°W である。規模は墓壙底面が長辺 57cm 短辺 30cm，底面標高は 118.11m，深さは最大 57cm である。東西両小口の底面には，長さ 22 ～ 29cm 幅 2cm 深さ約 5cm の掘り込みを確認した。この掘り込みは規模から小口板を据えるための溝と考えられ，本遺構は木棺墓であったと考えられる。なお，本遺構の埋土中からは，墓標石と考えられる一辺 5cm 高さ 10cm の角礫を検出した。本墓壙はその規模から小児用であったと考えられる。

○ ST16（第 106 図）

ST16 は ST14 の西 0.5m に位置する。底面形状は長方形で，主軸は N47°W である。規模は墓壙底面が長辺 99cm 短辺 25cm，底面標高は 118.16m，深さは最大 29cm である。底面の西側には，長さ 86cm 幅 4 ～ 10cm 底面からの深さ約 10cm の掘り込みを確認した。この掘り込みは側板を据えるための溝と考えられ，本遺構は木棺墓であったと考えられる。本墓壙はその規模から小児用であったと考えられる。

○ ST17・ST18（第 107 図）

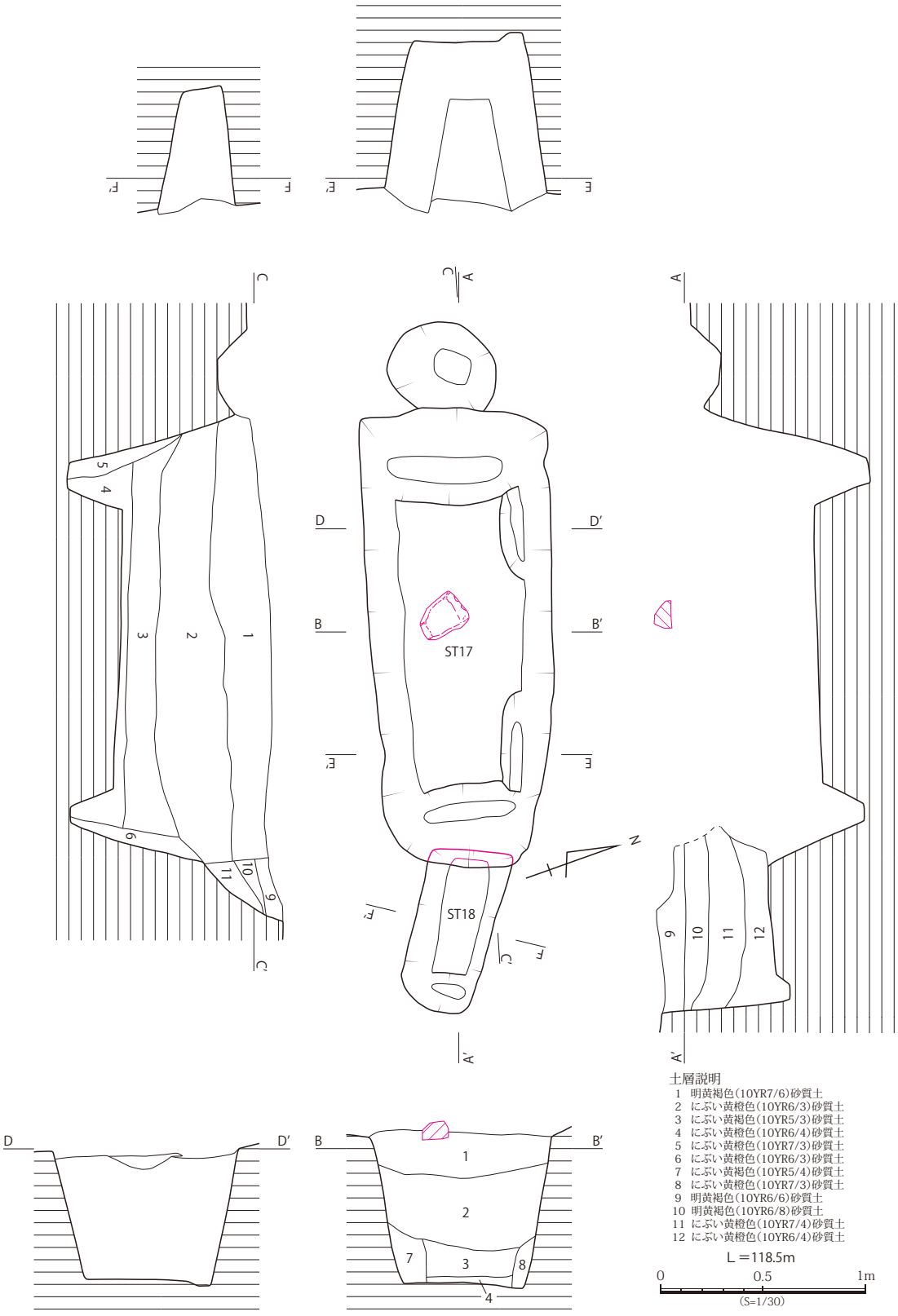
ST17 は ST15 の北 0.2m にあり，墓壙東側を ST18 に切られて位置する。底面形状は長方形で主軸は N70°W である。規模は墓壙底面が長辺 135cm，短辺は西側が 52cm 中央部が 58cm 東側が 38cm，底面標高は約 117.85 m，深さは最大 72cm である。底面の東西両小口及び北壁に沿って掘り込みを確認した。西小口側の規模は，長さ 56cm 幅 12cm，底面からの深さ約 27cm，東小口側は長さ 45cm 幅 8cm，底面からの深さ約 21cm である。北側底面の掘り込みの規模は，西側が長さ 36cm 幅 6cm，底面からの深さ約 1cm，東側は長さ 33cm 幅 6cm，底面からの深さ約 3cm である。前者は棺材を据えるための溝，後者は棺材を据えた痕跡と考えられる。掘り込みの両小口側が深いことから，小口板を立てた後，側板を挟み込む構造であったと考えられる。土層観察によると，第 5 ～ 8 層が側板の裏込め土と考えられ，推定される木棺の規模は長さ 176cm 幅 42cm である。頭位は底面形状において西側が広いことから，西と考えられる。なお，本遺構の埋土中からは，墓標石と考えられる長辺 23cm 短辺 18cm 厚さ 8cm の河原石を検出した。

ST18 は ST17 の墓壙東側を切って位置する。底面形状は長方形で主軸は N57°W である。規模は墓壙底面が長辺 56cm 短辺 20cm，底面標高は西側で 118.10m 東側で 118.05m，深さは最大 57cm である。底面の東側に長さ 16cm 幅 6cm，底面からの深さ約 6cm の掘り込みを確認した。この掘り込みは規模から小口板を据えるための溝と考えられ，本遺構は木棺墓であったと考えられる。頭位は底面の西側が高いこと，底面が西側に広がることから西と考えられる。本墓壙はその規模から小児用であったと考えられる。

ここで，それぞれの墓壙の先後関係についてみると，土層観察により ST17 → ST18 の順に造られたと考えられる。

○ ST19・ST20（第 108 図）

ST19 は ST17 の西約 1m に位置する。墓壙は東側を ST20 により切られ，斜面に位置しており残存状態は悪い。残存部から底面形状は長方形と推定され主軸は N141°E である。規模は墓壙底面が現状で長辺 75cm，短辺は中央で 18cm 北側で 13cm，底面標高は南側で 118.07m 北側で 117.89m，深さは現状で最大 16cm である。頭位は底面の南側が高いこと，底面が南に広がっていることから，南の可能性が高い。本墓壙はその規模から小児用であったと考えられる。



第 107 図　坊主山遺跡 ST17・ST18 実測図（S=1/30）

ST20 は ST19 の東側を切って位置し，西壁を斜面で流失している。底面形状は長方形で，主軸は N84°W である。規模は墓壙底面が現状で長辺 74cm 短辺 24cm，底面標高は 118.04m，深さは現状で最大 37cm である。底面の南側には，長さ 55cm 幅 4cm 深さ約 4cm の掘り込みを確認した。この掘り込みは木棺の側板を据えるための溝と考えられる。本墓壙はその規模から小児用であったと考えられる。

ここで，それぞれの墓壙の先後関係についてみると，ST20 の埋土中に ST19 の底面が確認できなかったことから ST19 → ST20 の順に造られたと考えられる。

○ ST21（第 109 図）

ST21 は調査区の西側斜面，ST12 の西 2m に位置し，西壁を斜面により流失している。底面形状は長方形で，主軸は N102°E である。規模は墓壙底面が長辺 64cm 短辺 25cm，底面標高は東側で 116.84m 西側で 116.64m，深さは最大 48cm である。頭位は底面の東側が高いことから，東と考えられる。本墓壙はその規模から小児用であったと考えられる。

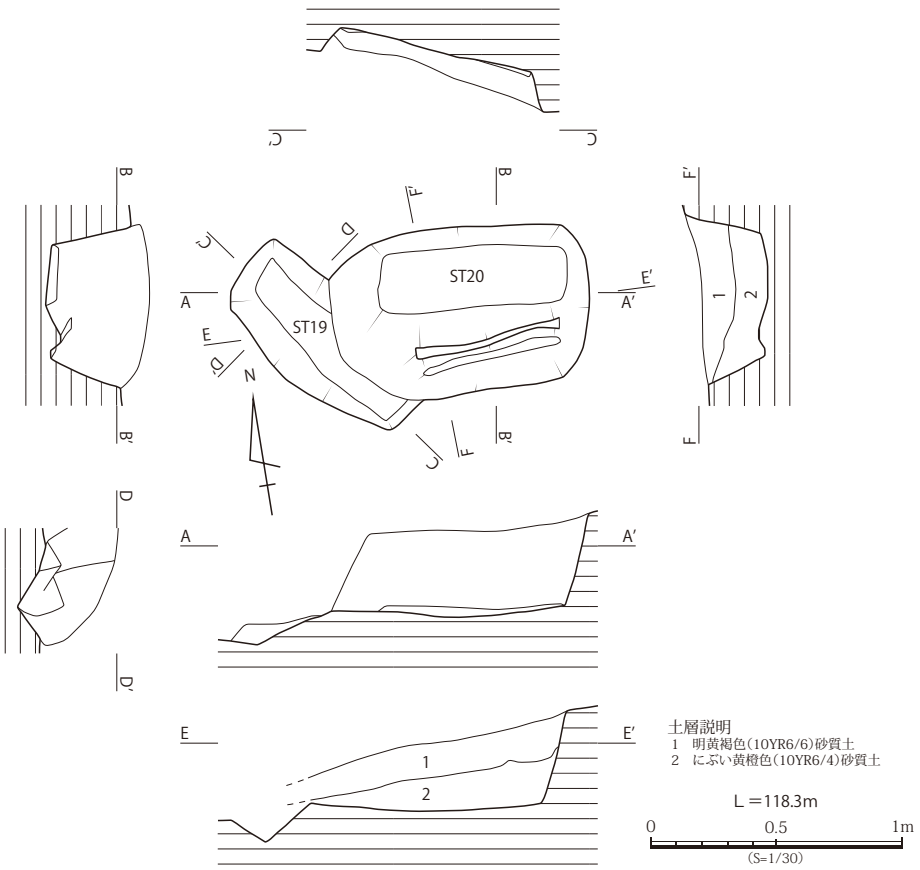
○ ST22・ST23・ST24（第 110・111 図）

ST22 は ST17 の北約 2.6m に位置し，西側で ST23 を切っている。底面形状は長方形で主軸は N62°W である。規模は墓壙底面が長辺 189cm 短辺は西側で 63cm 中央で 71 東側で 61cm，底面標高は 117.94m，深さは最大 77cm である。土層観察によると第 5 ～ 7 層は木棺の裏込め土と考えられ，推定される木棺の規模は長さ 172cm 幅 45cm である。頭位は底面形状において西側が広いことから，西と考えられる。

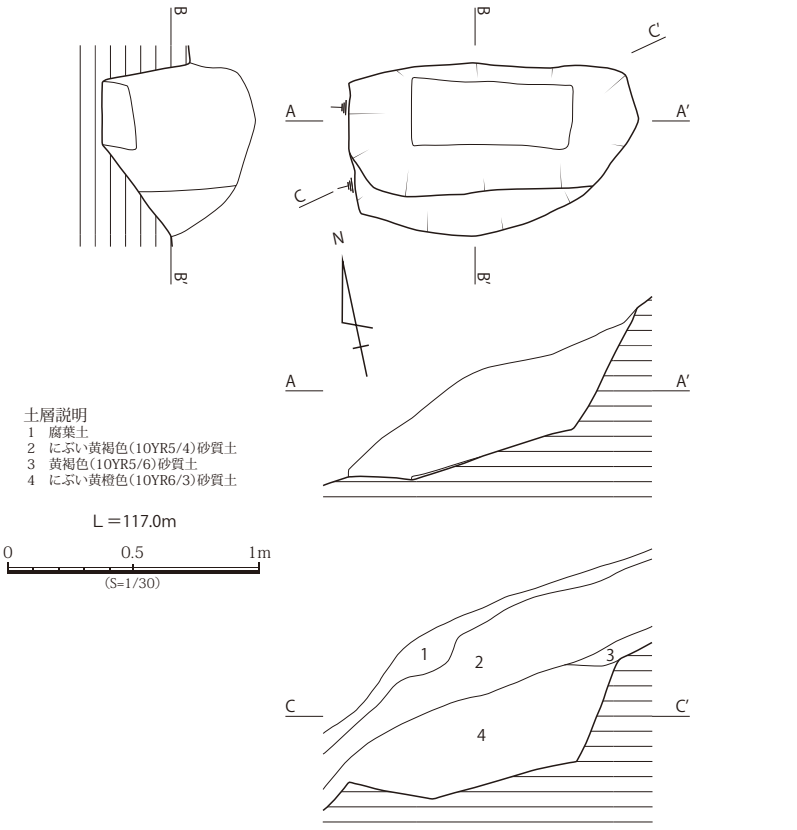
ST23 は墓壙の東端を ST22 に，南側を ST24 に切られて位置する。底面形状は長方形で，主軸は N82°W である。規模は墓壙底面が長辺 212cm，短辺は西側で 49cm 東側で 44cm，底面標高は 117.94m，深さは最大 74cm である。底面の東側に長さ 12cm 幅 3cm 底面からの深さ約 13cm の掘り込みを確認した。この掘り込みは小口板を据えるための溝と考えられる。土層観察において第 12 ～ 14・16 層は木棺の裏込め土と考えられ，推定される木棺の規模は長さ 180cm 幅 36cm である。頭位は底面形状において西側が広いことから，西と考えられる。

ST24 は ST23 の南側を切って位置する。底面形状は長方形で主軸は N91°W である。規模は墓壙底面が長辺 181cm，短辺は西側で 70cm 東側で 59cm，底面標高は 117.88m，深さは最大 64cm である。土層観察において第 4 ～ 7 層が木棺の裏込め土と考えられ，推定される木棺の規模は長さ 162cm 幅 44cm である。頭位は底面形状において西側が広いことから，西と考えられる。

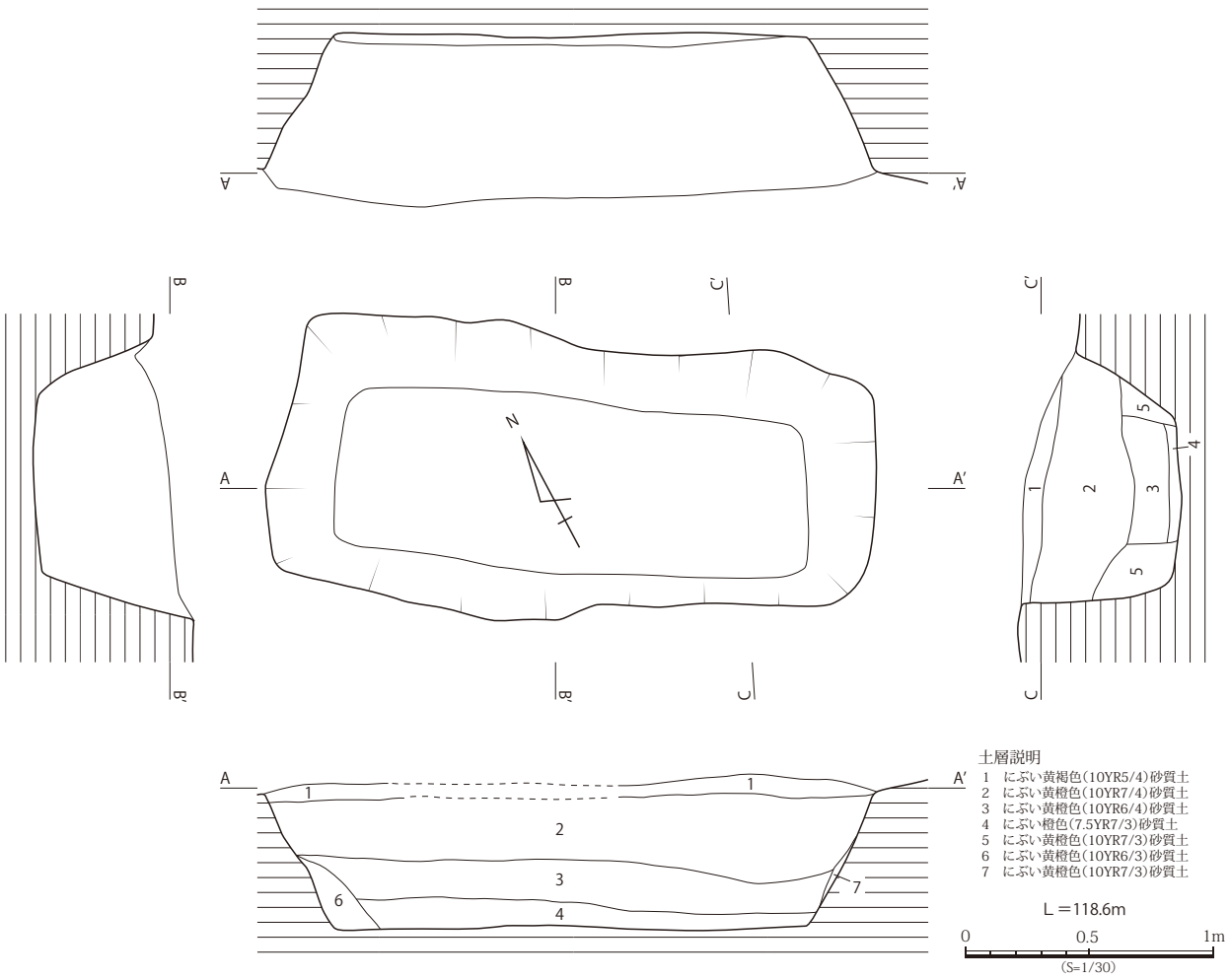
ここで，それぞれの墓壙の先後関係についてみると，土層観察及び ST23 の埋土中に ST22 の掘り方及び底面を確認したことから ST23 → ST22・24 の順に造られたと考えられる。なお，ST22



第 108 図　坊主山遺跡 ST19・ST20 実測図（S=1/30）



第 109 図　坊主山遺跡 ST21 実測図（S=1/30）



第 110 図　坊主山遺跡 ST22 実測図（S=1/30）

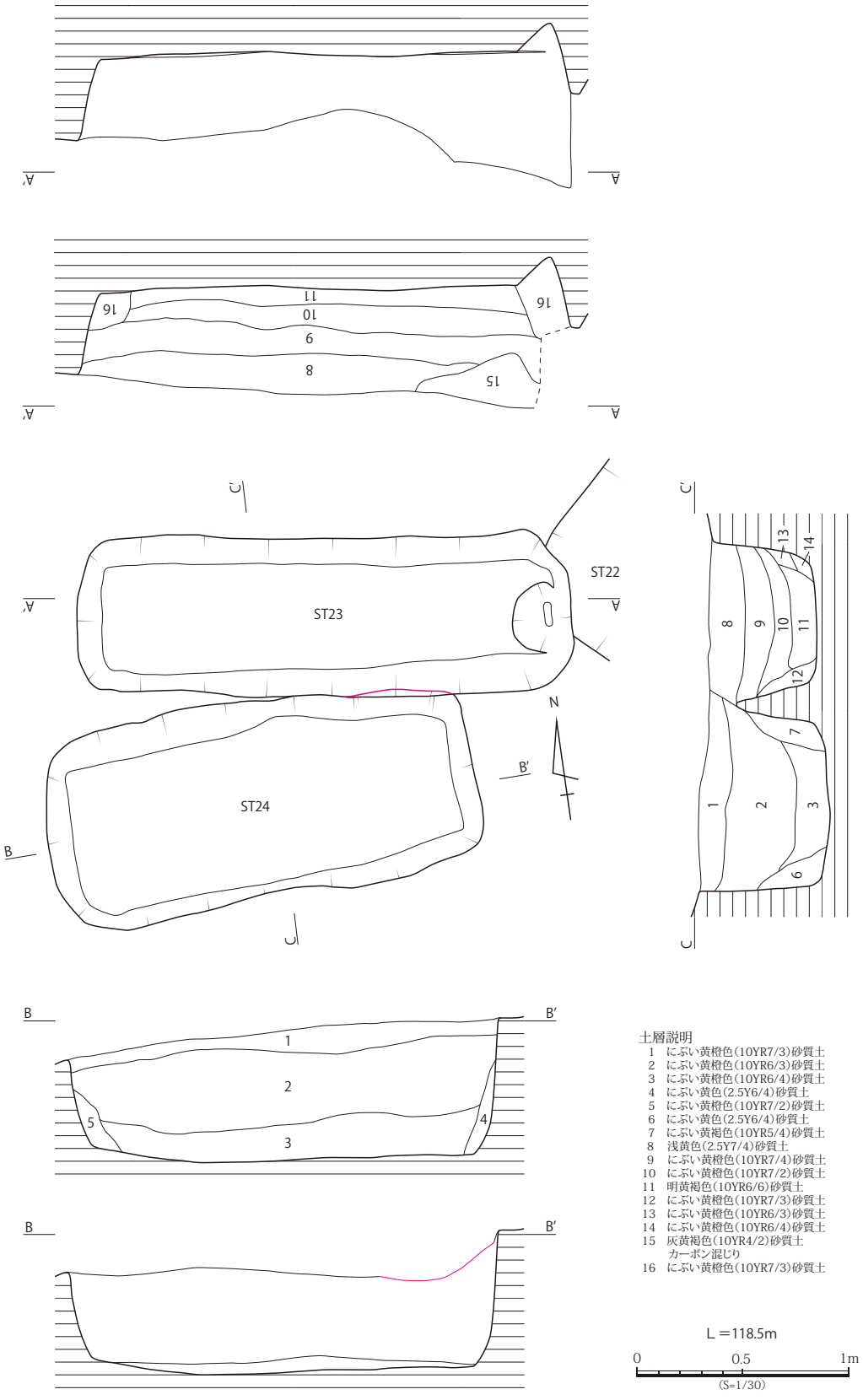
と ST24 の先後関係については明らかにできなかった。

○ ST25（第 112 図）

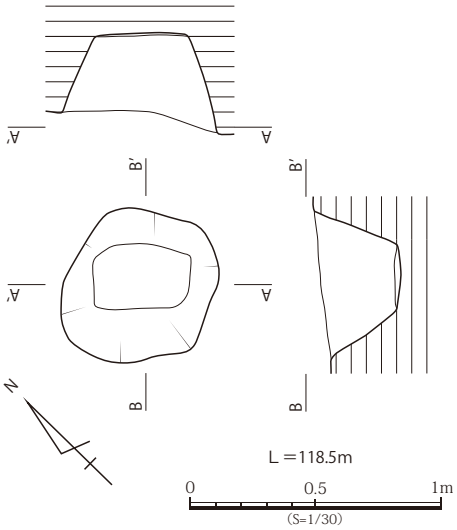
ST25 は ST23 の北 0.2m に位置する。底面形状は長方形で主軸は N44°W である。規模は墓壙底面が長辺 38cm 短辺 25cm，底面標高は 118.14m，深さは最大 38cm である。本墓壙はその規模から小児用であったと考えられる。

○ ST26（第 113 図）

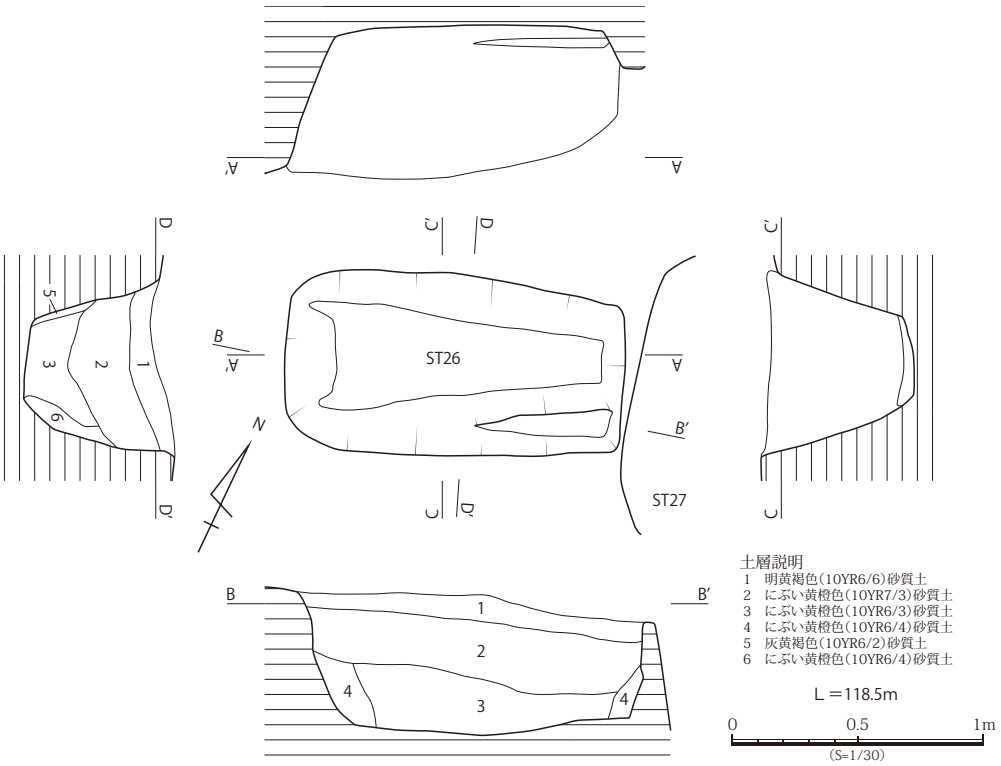
ST26 は ST14 の東 1.2m に位置する。底面形状は西に広がる長方形で主軸は N115°W である。規模は墓壙底面が長辺 105cm 短辺は西側で 43cm 東側で 17cm，底面標高は 117.99m，深さは最大で 61cm である。西側小口の壁面の両端には，幅 5cm 程度の掘り込みを確認した。この掘り込みは側板を据えるためのものと考えられ，本墓壙は小口壁を掘り込んで側板を固定するタイプの木棺墓であったと考えられる。土層観察によると，第 4 ～ 6 層が側板の裏込め土と考えられ，推定される木棺の規模は長さ 72cm 幅 29cm である。頭位は底面形状において西側が広いことから，西と考えられる。本墓壙はその規模から小児用であったと考えられる。



第 111 図　坊主山遺跡 ST23・ST24 実測図（S=1/30）



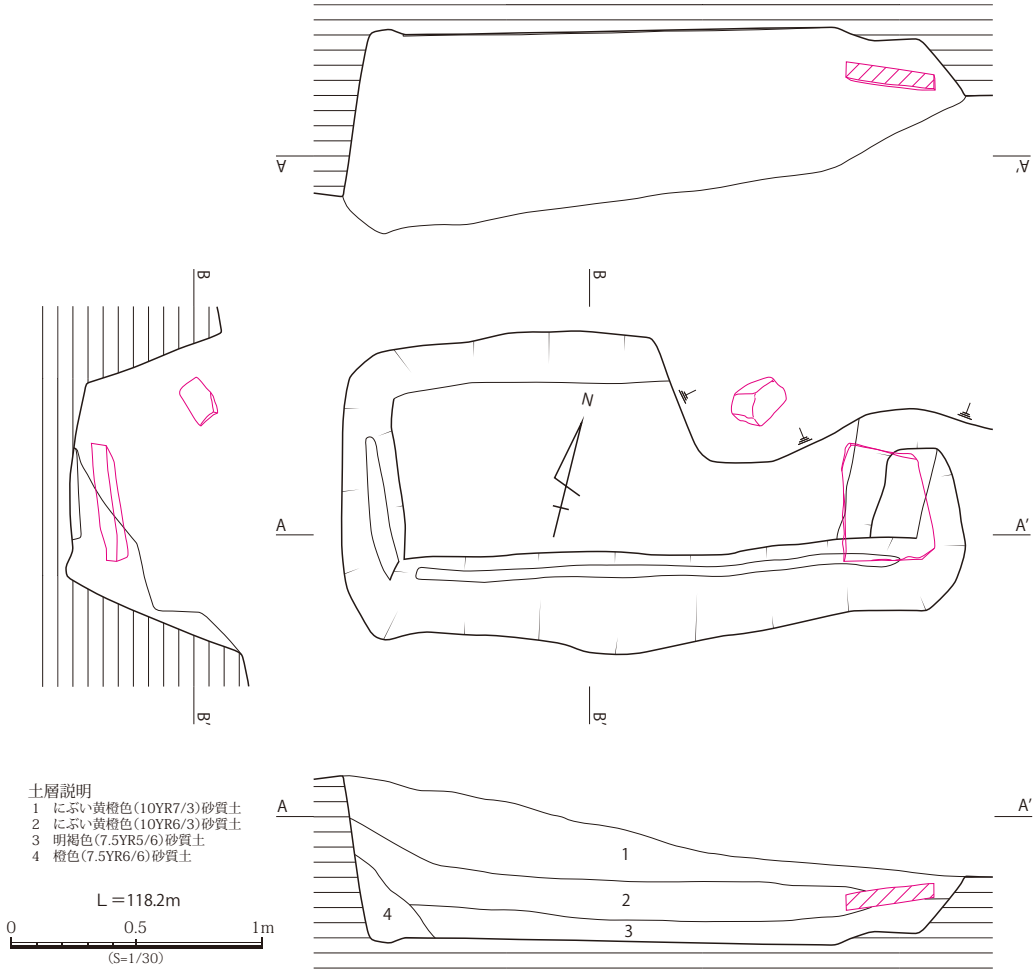
第 112 図　坊主山遺跡 ST25 実測図（S=1/30）



第 113 図　坊主山遺跡 ST26 実測図（S=1/30）

○ ST27（第 114 図）

ST27 は ST26 の東に接して位置する。墓壙は北東側が流失しているが，残存部から推定できる底面形状は長方形で，主軸は N104°W である。墓壙底面は東小口側で段を持ち，規模は上段を含めると長辺 215cm，標高は 117.74m，上段までの深さは最大 22cm である。下段は長辺 185cm 短辺 68cm，深さは最大 75cm で，上段からの深さは約 5cm である。西側小口と南側の底面で，幅 4 ～ 7cm，底面からの深さ約 4 ～ 11cm の掘り込みを確認した。この掘り込みは小口板や側板



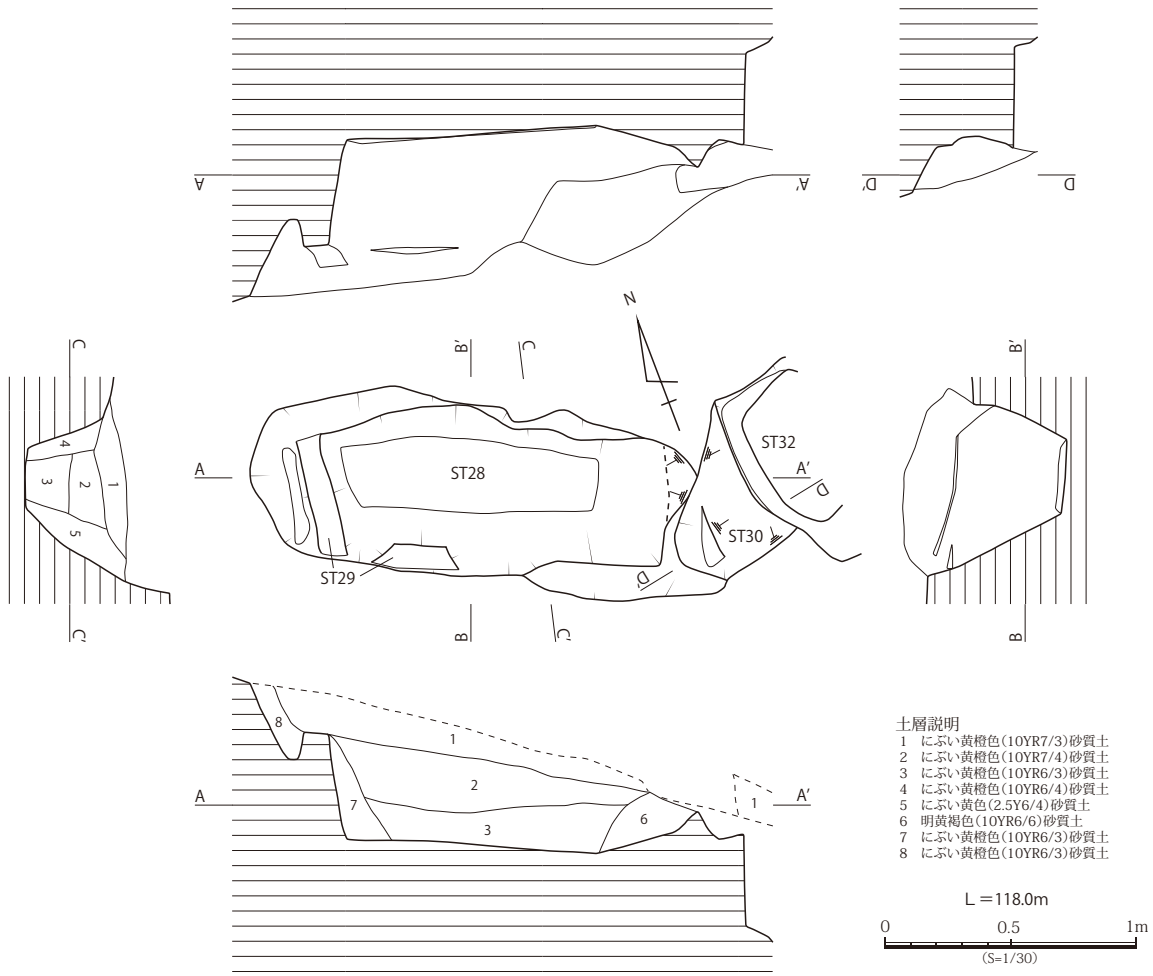
第 114 図　坊主山遺跡 ST27 実測図（S=1/30）

を据えるための溝と考えられる。土層観察によると，第 4 層は木棺小口板の裏込め土と考えられ，推定される木棺の規模は長さ 160cm である。

東小口の底面からは，長辺 48cm 短辺 36cm 厚さ 7cm の板石を検出した。この石は倒れた状態ではあるが，底面より高い位置で検出されたことから，元は木棺の小口板を抑えるための石が，木棺の腐朽によって倒れ込んだものと推測される。また，本遺構の埋土中には，墓標石と考えられる長辺 22cm 短辺 18cm の礫を確認した。

○ ST28・ST29・ST30（第 115 図）

ST28 は ST27 の北 0.2m に位置し，ST29 にほぼ重複して削平して造られている。底面形状は長方形で主軸は N69°W である。規模は墓壙底面が長辺 101cm，短辺は西側で 25cm 東側で 20cm，底面標高は 117.85m，深さは最大で 58cm である。土層観察において第 4 ～ 7 層は木棺の裏込め土と考えられ，推定される木棺の規模は，長さ 85cm 幅 23cm である。頭位は底面形状において西側がやや広く，底面が高いことから西と考えられる。本墓壙はその規模から小児用であったと考えられる。



第 115 図　坊主山遺跡 ST28・ST29・ST30 実測図（S=1/30）

ST29 は ST28 に墓壙の大半を削平されて位置し，西側小口部分と南側の底面の一部が残存するのみである。墓壙底面の規模は，現状で長辺 65cm 以上，短辺 46cm，底面標高は 118.30m，深さは現状で最大 21cm である。西側小口に幅 4cm 底面からの深さ約 10cm の掘り込みを確認した。この掘り込みは小口板を据えるための溝であったと考えられる。土層観察によると，第 8 層が木棺の裏込め土と考えられ，本墓壙は木棺墓であったと考えられる。

ST30 は西側で ST28 に東側を ST32 に切られて位置する。墓壙は底面の大半を ST28 と ST32 によって切られているため，西側の掘り方がわずかに残存するだけで遺存状態は悪い。その規模及び平面形状等の状況は判別できなかった。

ここで，それぞれの墓壙の先後関係についてみると，土層観察によれば ST29 は ST28 の上面に造られた後に流失しており，ST30 の埋土に ST29 の流失埋土が堆積することから，ST28 → ST29・30 の順に造られたと考えられる。なお ST29・30 の先後関係は不明である。

○ ST31・ST32・ST33・ST34（第 116 図）

ST31 は ST30 の北東に接して位置する。墓壙の南側は ST32・33 に削平され，残存部は ST34 を削平して造られている。残存部から推定できる底面形状は長方形で，主軸は N159°W である。規模は墓壙底面が現状で長辺 66cm 以上，短辺は北側で 25cm 中央で 35cm，底面は南から北に向けて緩やかに傾斜し，標高は南で 117.48m 北で 117.36m，深さは最大 51cm である。本墓壙は残存部の規模・形状から小児用であったと考えられ，消失部はそれほど南へとのびなかったものと考えられる。頭位は底面形状において南側が広く底面がやや高いことから，南と考えられる。

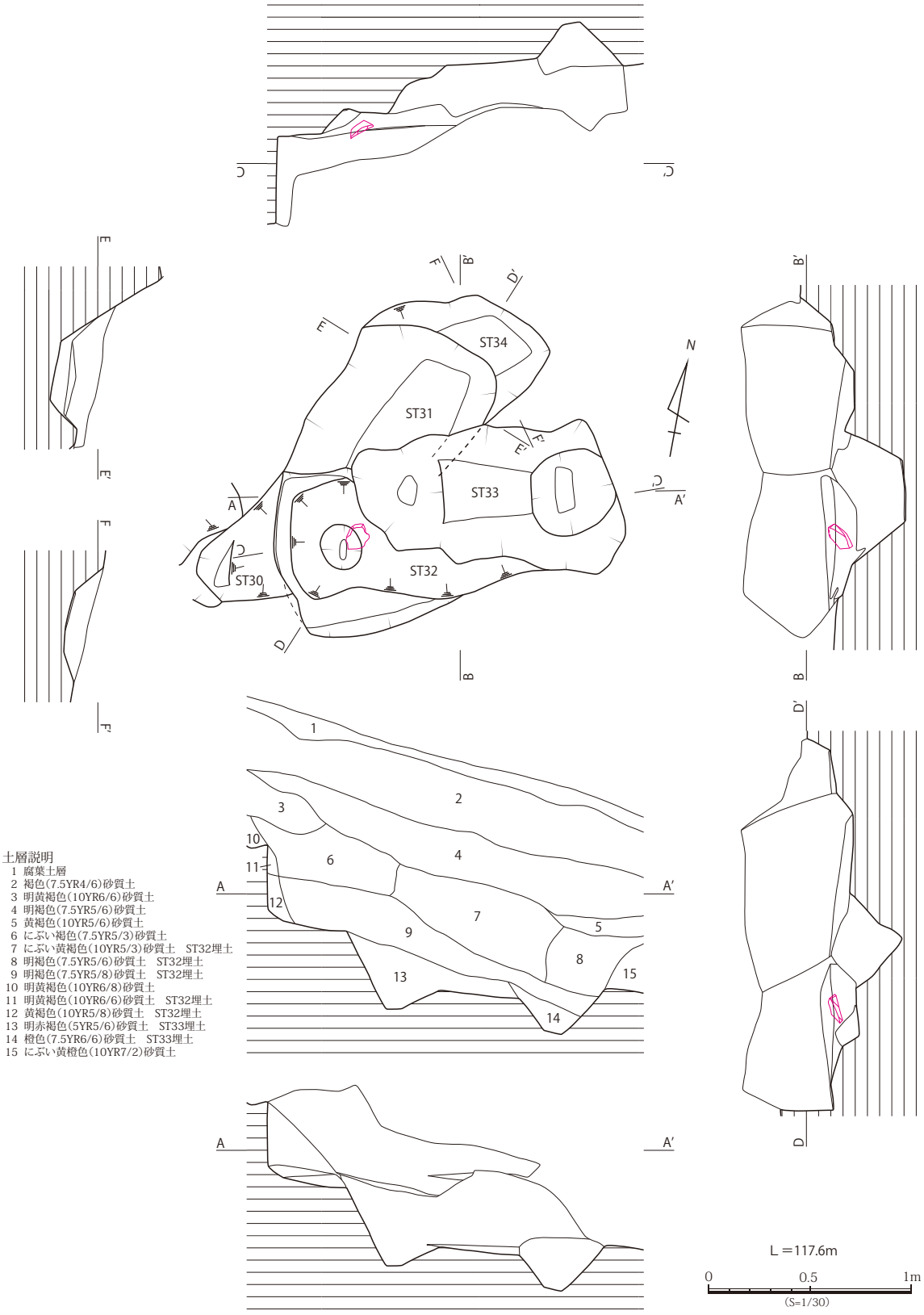
ST32 は北側を ST31 に切られ，西側と東側で ST30 と ST33 をそれぞれ切って位置する。複数の墓壙と重複し，かつ東側が流失しているため遺存状態は悪い。残存部から推定できる底面形状は長方形で，主軸は N101°W である。規模は墓壙底面が現状で長辺 72cm 以上，短辺 75cm，底面標高は 117.45m，深さは現状で最大 43cm である。底面形状の幅の大きさから成人用の墓壙と考えられ，当遺跡の他の同規模の墓壙との比較から，底面の長辺は 180cm 前後であったと推定できる。土層観察によると，第 11・12 層は木棺の裏込め土と考えられ，本墓壙は木棺墓であったと考えられる。

本遺構の埋土中の床面から約 8cm の高さで，長辺 12cm 短辺 10cm 厚さ約 3cm の角礫を検出した。この礫は墓標石の可能性が考えられ，底面からの高さがさほどないことから木棺の腐朽後落ち込んだものと推測される。

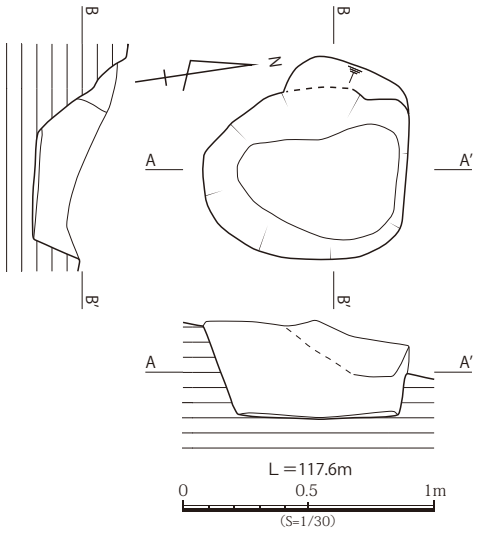
ST33 は西側を ST31・32 と重複して位置し，遺存状態は悪い。底面形状は長方形で，主軸は N102°W である。規模は墓壙底面が長辺 45cm，短辺は西側で 31cm 東側で 20cm，底面標高は 117.12m，深さは最大 37cm である。底面の両小口からは，掘り込みを確認した。規模は西側が長辺 15cm 短辺 10cm，底面からの深さ約 9cm で，東側が長辺 22cm 短辺 10cm，底面からの深さ約 18cm である。これらの掘り込みは小口板を据えるための溝と考えられる。頭位は底面形状において西側が広いことから西側と考えられる。本墓壙はその規模から小児用であったと考えられる。

ST34 は南側を ST31 に切られて位置する。残存部から推定できる底面形状は長方形で，主軸は N54°E である。規模は墓壙底面が現状で長辺 32cm 以上，短辺は北側で 27cm 中央で 32cm，底面標高は 117.45m，深さは最大 23cm である。本墓壙は残存部の規模・形状から小児用であったと考えられ，消失部はそれほど南へとのびなかったものと考えられる。頭位は底面形状において西へ広がりを見せることから，西側と考えられる。

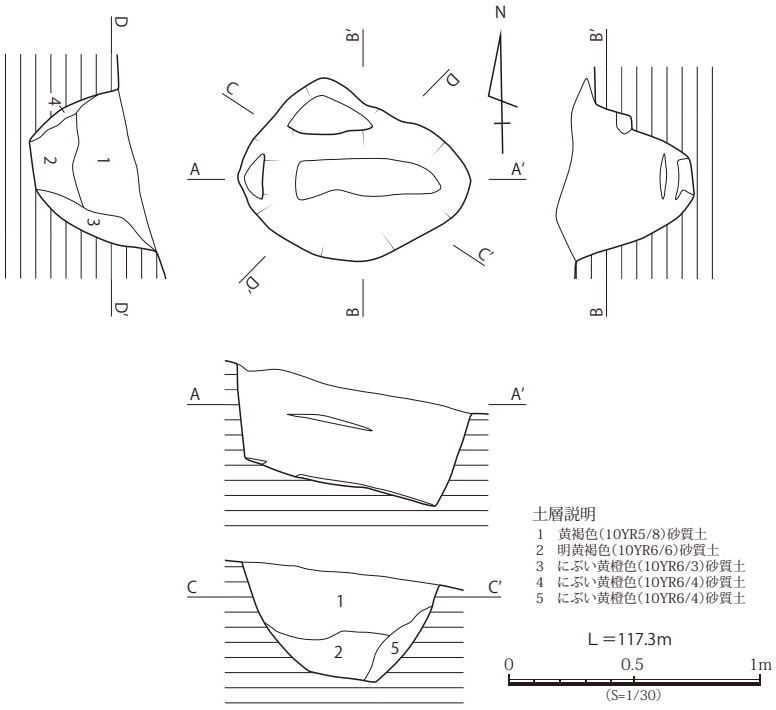
ここで，それぞれの墓壙の先後関係についてみるが，土層観察によると ST32 は ST33 の上面に造られた後に流失している。さらに第 6 層が ST31 の埋土と考えられることから，ST33 → ST32 → ST31 の順に造られたと考えられる。また，切り合い関係から ST34 → ST31 の順に造られたことが分かる。なお，ST32・33 と ST34 の先後関係は不明である。



第 116 図　坊主山遺跡 ST31・ST32・ST33・ST34 実測図（S=1/30）



第 117 図　坊主山遺跡 ST35 実測図（S=1/30）



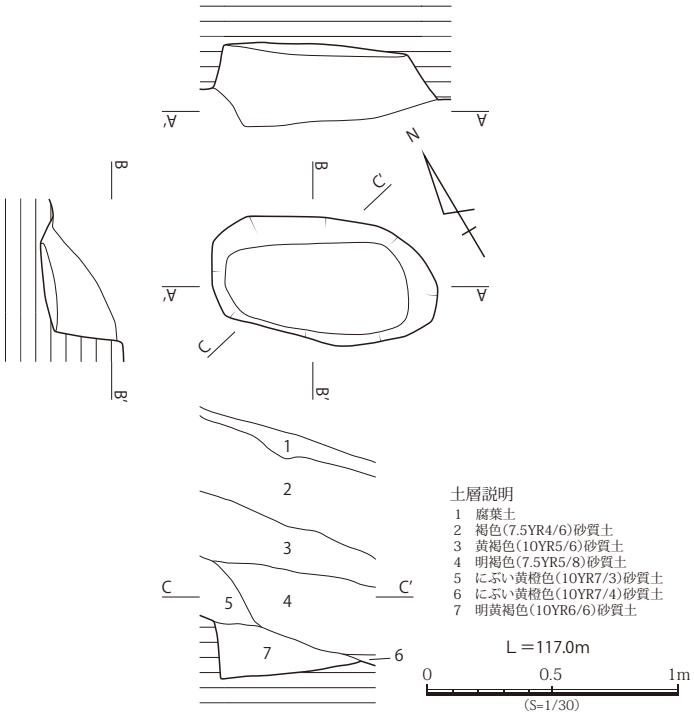
第 118 図　坊主山遺跡 ST36 実測図（S=1/30）

○ ST35（第 117 図）

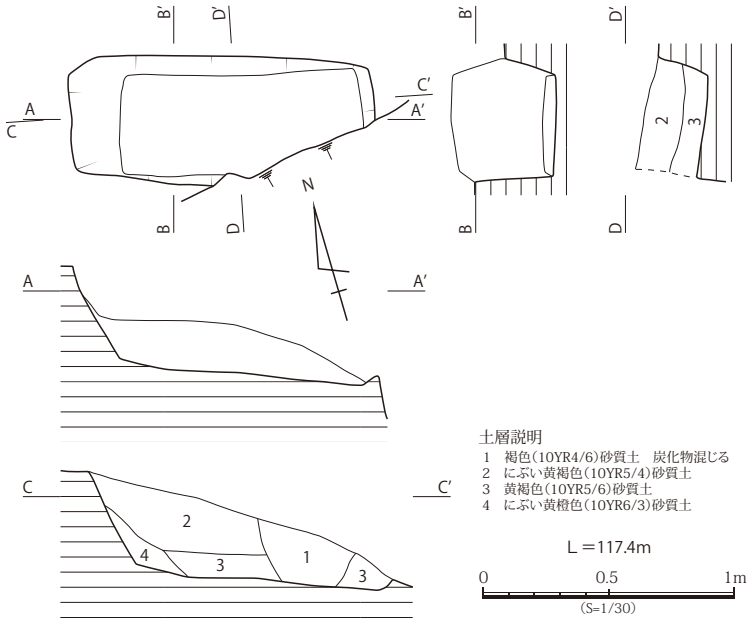
ST35 は ST27 の東約 0.7m に位置する。底面形状は歪な長円形で，主軸は N8°E である。規模は墓壙底面が長辺 64cm 短辺は最大 36cm，底面標高は 117.42m，深さは現状で最大 37cm である。本墓壙はその規模から小児用であったと考えられる。

○ ST36（第 118 図）

ST36 は ST35 の北 0.4m に位置する。底面形状は長方形で主軸は N89°W である。規模は墓壙底面が長辺 58cm 短辺 15cm，底面標高は西側で 117.01m 東側で 116.89m，深さは最大 37cm で

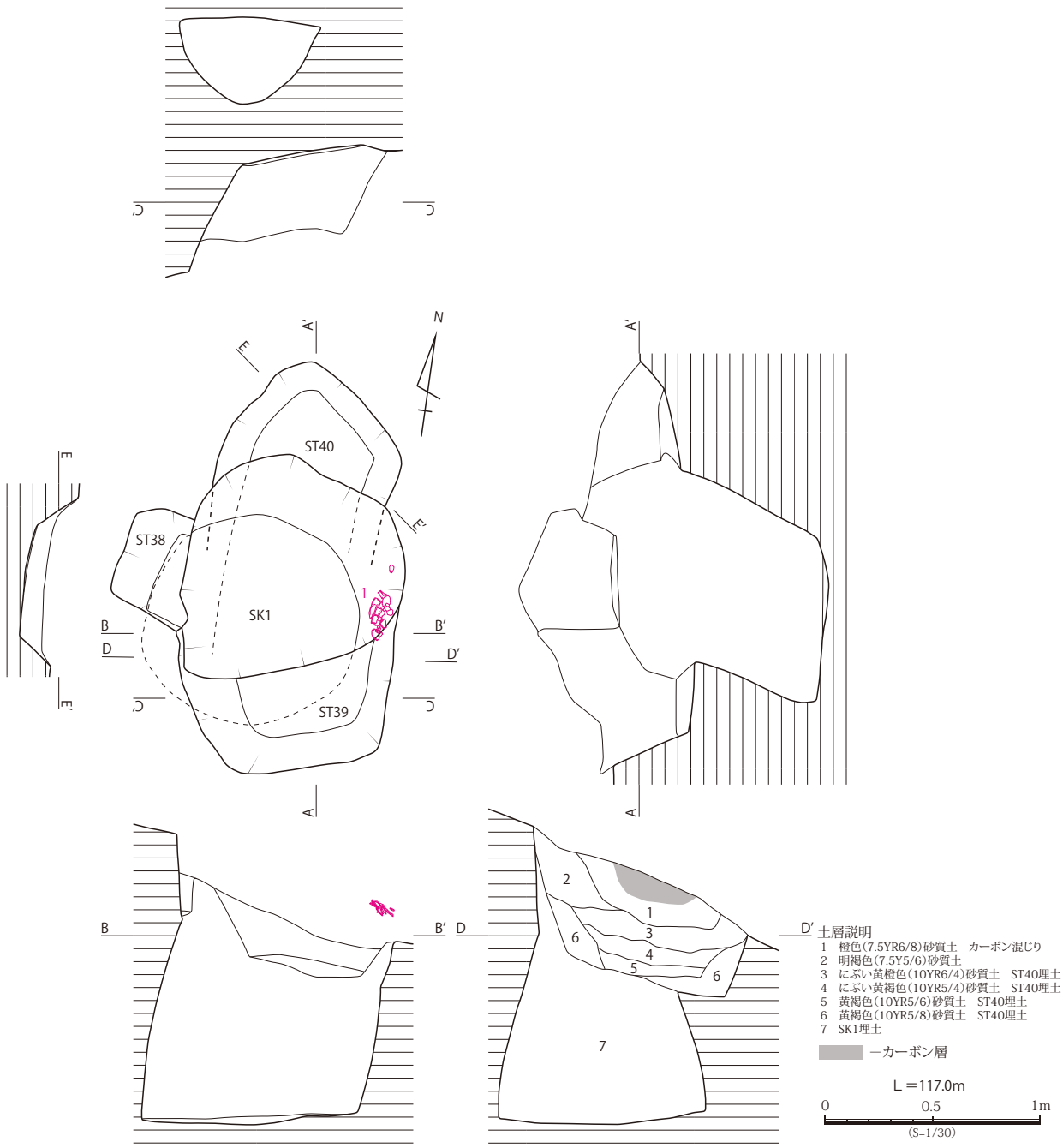


第 119 図　坊主山遺跡 ST37 実測図（S=1/30）



第 120 図　坊主山遺跡 ST38 実測図（S=1/30）

ある。北側壁面の中腹に長さ 34cm 最大幅約 15cm の半月状の段を，西側壁の床面付近に長さ 17cm 最大幅 7cm の半月状の段を確認した。土層観察によると，第 3 ～ 5 層は木棺の裏込め土と考えられ，推定される木棺の規模は，幅 15cm である。頭位は底面形状において東端がすぼまることと，西側の底面が高いことから西の可能性が高い。本墓壙はその規模から小児用であったと考えられる。



第 121 図　坊主山遺跡 ST39・ST40・SK1 実測図（S=1/30）

○ ST37（第 119 図）

ST37 は ST33 の東 1m に位置する。底面形状は長方形で主軸は N121°E である。規模は墓壙底面が長辺 72cm，短辺は東側で 34cm 西側で 27cm，底面標高は 116.75m，深さは最大 31cm である。頭位は床面形状において東側に広がりを見せることから，東の可能性が高い。本墓壙はその規模から小児用であったと考えられる。

○ ST38・ST39・ST40・SK1（第 120・121 図）

ST38 は ST34 の北約 0.2m にあり，東側で ST39・40・SK1 を切って位置する。墓壙は長方形で

主軸は N73°W である。規模は墓壙底面が長辺 96cm 短辺 40cm，底面標高は西側で 117.13m 東側で 117.03m，深さは最大 36cm である。頭位は底面の西側が高いことから，西と考えられる。本墓壙はその規模から小児用であったと考えられる。

ST39 は ST38 の南に切られて位置し，SK1 を削平して造られている。底面形状は長方形と推測され主軸は N107°W である。規模は墓壙底面が現状で長辺 62cm 短辺 39cm 以上，底面標高は西側で 116.83m 東側で 116.73m，深さは現状で最大 53cm である。土層観察によると，第 6 層は木棺の裏込め土及び棺床土と考えられ，推定される木棺の規模は長さ 45cm である。頭位は床面の西側が高いことから，西と考えられる。

なお，ST39 の東側の掘り方上面付近で弥生土器片（1）が出土した。

ST40 は ST38 の北東に位置し，SK1 を削平して造られている。底面形状は長方形と推測される。主軸は N37°E である。規模は墓壙底面が現状で長辺 54cm 短辺 45cm 以上，底面標高は西側で 116.89m 東側で 116.81m，深さは現状で最大 30cm である。なお，頭位は不明である。

SK1 は ST38 ～ 40 に切られて位置する。掘り方上面は長径 103cm 短径 100cm の歪な円形で，底面は直径 93cm の円形で，底面標高 116.15cm，深さは 137cm で南側にむけて袋状を呈する。本土坑は，その規模・形状から貯蔵穴と考えられる。

ここで，それぞれの遺構の先後関係についてみると，ST38 の底面はそれぞれの埋土中に造られており一番新しいことが分かる。土層観察によれば SK1 → ST39 の順に造られている。以上のことから SK1 → ST39 → ST38 の順に造られたと考えられる。なお ST40 と他の遺構との先後関係は堆積の状況が悪く確認できなかった。なお，ST39 と ST40 については掘り方のライン形状からそれぞれ別の遺構としている。しかしながら，SK1 と重複し掘り方の残存状況が悪いため，ST39・40 が南北に軸を持つ一連の墓壙としてそれぞれの小口部が残存している可能性もある。

4．出土遺物（第 122 図）

本遺跡からは，弥生土器片がわずかながら出土しており，器形のわかるものとして，ST39 から甕形土器（1）が，また，遺跡内埋土中から甕形土器（2）が出土している。（1）は甕形土器の口縁部で，口縁部屈曲部から口縁端部に至る器厚はほとんど変わらず，端部直下を強くつまみ肥厚しているように見せている。端部には 2 条の凹線を施している。これらの特徴を有するものは後期前葉のものと考えられる（若島編年のⅡ－ 1 期[2)]）。（2）は調査区内の斜面埋土中から出土したものである。胴部のみであるが，胴部最大径を 2/3 より低い位置に持ち，それ以下も緩く内湾するカーブを描く。外面の肩部から上は右斜め上と平行に向くタタキ目を施しており，後期中葉から後葉にかけてのものと考えられる。

5．小結

坊主山遺跡からは，石棺墓 1 基・土壙墓 39 基からなる墳墓群及び土抗 1 基を確認した。このうち，石棺墓からは人骨が出土している。墓壙は尾根の先端部の地形が再び隆起する頂部周辺に造られている。北側は尾根幅が狭まった後，傾斜がきつくなるため，調査範囲の北側に墓域が広がっていたとは考えにくい。また，調査範囲周辺の斜面は，周囲の水田面等へ向け急激に落ちる急斜面となっている。以上のことから，本墳墓群の墓域は調査範囲内に収まるものと考えられる。

本遺跡からは墓壙を 40 基確認しているが，その規模から 2 種に大別することが可能である。1 つは掘り方の長さが 200 ～ 250cm 前後，幅が 90 ～ 120cm 前後の大型のもの，もう一つは掘り方の長さが 120cm 以下，幅が 70cm 以下の小型のものである。ST14（石棺）を除く大型の墓壙の多くからは土層中に木棺の痕跡が確認された。木棺の規模は長さ 150 ～ 180cm 前後，幅 40 ～ 60cm 前後であり，その規模は被葬者の体格を表していると考えられる。一方，小型のものはその大きさゆえに痕跡が残りにくかったのか，土層中に木棺の痕跡が認められるものは ST36・39 の 2 基（ST36 ＝幅 15cm，ST39 ＝長さ 45cm）のみである。しかし，墓壙底面に木棺の側板や小口板を据えたと考えられる溝をもつ墓壙（ST15・16・18・20・33）があることから，小型のものも基本的には木棺を収めていた可能性が高いものと考えられる。ここで，上記の 2 種に大別できない ST26・28 に着目したい。ST26 は掘り方が長さ 153cm 幅 73cm，ST28 は長さ 134cm 幅 68cm と，掘り方の規模のみでは中間の規模をもつ。いずれも墓壙の土層中には木棺の痕跡が確認されており，その規模は ST26 で長さ 72cm 幅 29cm，ST28 で長さ 85cm 幅 23cm で，その規模から被葬者の年齢は幼児と考えられる。このため，ST26・28 より小さい掘り方をもつ小型の墓壙の被葬者は，その規模から乳幼児と想定でき，確認された 40 基の墓壙のうち大型の墓壙以外の 28 基は乳幼児用の墓となる。

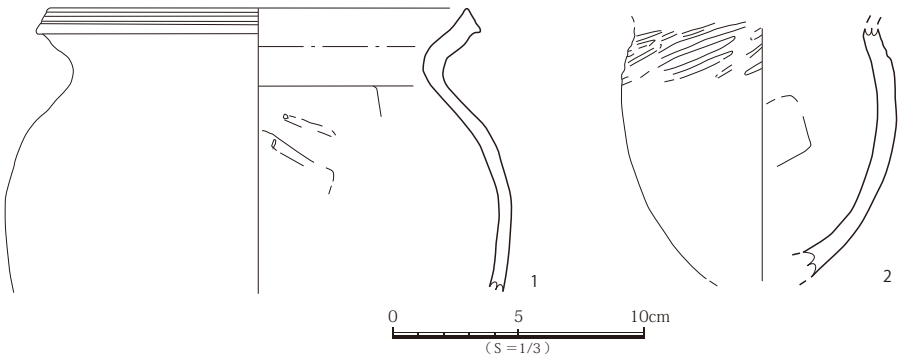
次に，墓壙の位置関係からみると，ST1 ～ 7・ST8 ～ 21・ST22 ～ 25・ST26 ～ 40 の 4 群に分けることができる。小型の墓壙はそれぞれの墓群の大型の墓壙に付随するかのように造られており，大人とその子供という家族・親族関係が表れていることも想定できる。また，ST14 は墓群の中で唯一の石棺墓であり，墓域の中央部に位置すること，弥生人としてはかなりの高齢であることなどから[3)]，集団の中でも指導者的な立場など特別な役割を持っていた人物であった可能性が考えられる。また，可部地域周辺の墳墓群でも弥生時代中期を中心とした比較的古い時期の墳墓群が石棺墓群であることを合わせ考えると，ST14 の築造をもって当墳墓群が形成される契機となったものと考えておきたい。

さて，本墓群の築造時期であるが，ST14 の人骨を年代測定した結果，2000±40B.P. という年代値が出ており，弥生時代中期後半から後期初頭に属するものと考えられる。ST14 を除く墓壙は土壙墓（木棺墓）で，規模の違いはあるが，構造上大きな差異はみられず，墓壙に伴う遺物は出土していない。これまでの広島湾岸域の発掘調査成果による弥生時代の墳墓群の特徴として，①集落を臨む丘陵上に存在する。②集落とは隔絶された状態で存在する。③どの墓も相互に造り方や立地にほとんど差がない状態で発見されるなどが挙げられており[4)]，本遺跡も同様の様相を持つ。仮に

ST14 の築造を当墳墓群形成の契機と捉えた場合，埋土中ではあるが弥生時代後期前葉や後期後葉頃の特徴を持つ土器が出土していることから，本遺跡は弥生時代中期後半ないしは後期初頭から後期後半にかけて造られたものと考えられる。

注

1）遺体を寝かせた場合最も広くなるのが肩の部分であることから，便宜上墓壙の頭位は幅の広い方の小口とする。
2）若島一則「広島湾沿岸における弥生時代後期土器等に関する一考察」『研究連絡誌Ⅰ』 財団法人広島市文化財団　2002 年
3）四肢骨が細くきゃしゃな体つきであり，肉体労働向きの体躯とはいいがたい。
4）幸田淳「井口の歴史のあけぼの」『井口村史』 1992 年



第 122 図　出土遺物実測図（S=1/3）

第６表　坊主山遺跡出土土器観察表

（[　]：復元値）

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
1	甕形土器	ST39	口径　[16.6] 胴部最大径 [20.1]	口縁部は外湾しながら外上方に延び，端部は肥厚し平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り 口縁端部に２条の凹線施す。	胎土：1 ～ 2mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調:にぶい黄橙色(10YR7/4) 外面にスス付着。
2	甕形土器	その他 埋土	胴部最大径 [10.9]	胴部は倒卵形を呈し，底部に向けやや厚みをもつ。	外面：頸部～肩部タタキ目，以下ナデ 内面：頸部ヨコナデ，以下ヘラ削り後ナデ	胎土：～ 1mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調:にぶい橙色 (5YR6/4) 外面にスス付着。

第７表　坊主山遺跡墓壙等計測表

（～：以上）

遺構名	検出面（cm）		底面（cm）			底面標高(m)	主軸方位	木棺痕跡（cm）		備　考
	長辺	短辺	長辺	短辺	深さ			長さ	幅	
ST1	240 ～	109	203 ～	西 66 中 73 東 63	77	117.34	N67° W	148	57	西側流失。東側小口壁に溝
ST2	－	－	90	41 ～	45	117.79	－	－	－	ST3・ST4 と重複。袋状土坑の可能性有。
ST3	260 ～	106	外 250 ～ 内 147 ～	外：東西 62 中 73 内：東 32 西 20	54	外 117.53 内 117.44	N73° W	90 ～ 180	50	ST2・4 と重複。西側流失。二重土壙。底面東側に溝。
ST4	199	80	外 183 内 133	内：西 48 東 39	89	117.50	N98° W	140	40	ST2・ST3 と重複。底面が二段。墓標石。
ST5	80	53	47	南 28 北 14	26	117.09	N8° W	－	－	
ST6	101	62	67	24	19	北 116.81 南 116.65	N27° E	－	－	
ST7	88	55	50	北 20 南 17	21	北 116.48 南 116.45	N26° E	－	－	
ST8	120	75	88	西 49 東 38	55	118.15	N79° W	－	－	
ST9	75	37 ～	50	23 ～	14	118.27	N20° E	－	－	ST10 と重複。
ST10	93	56	49	南 30 北 20	18	118.20	N170° W	－	－	ST9 と重複。
ST11	227	98	193	西 60 東 48	62	117.96	N87° W	165	55	底面南側に掘り込み。底面中央に掘り込み。
ST12	223	85	外 195 内 179	外：西 77 東 63 内：西 34 中 26 東 45	52	外 117.90 内 117.72	N58° W	158	35	ST13 と重複。二重土壙。
ST13	82	64	72	東 34 中 46 西 25	24	118.19	N50° W	－	－	ST12 と重複。
ST14	244	107	202	西 44 中 53 東 42	64	118.00	N74° W	－	－	石棺墓。人骨出土。
ST15	89	64	57	30	57	118.11	N69° W	－	－	東西両側の底面に溝。墓標石。
ST16	110	53	99	25	29	118.16	N47° W	－	－	底面南側に溝。
ST17	222	89	135	西 52 中 58 東 38	72	117.85	N70° W	176	42	ST18 と重複。底面両小口及び北側に溝。墓標石。
ST18	81	38	56	20	57	西 118.10 東 118.05	N57° W	－	－	ST17 と重複。底面東側小口に溝。
ST19	87	39	75	北 13 中 18	16	南 118.07 北 117.89	N141° E	－	－	ST20 と重複。
ST20	103	68	74	24	37	118.04	N84° W	－	－	ST19 と重複。底面南側に掘り込み。

遺構名	検出面（cm）		底面（cm）			底面標高(m)	主軸方位	木棺痕跡（cm）		備　考
	長辺	短辺	長辺	短辺	深さ			長さ	幅	
ST21	114	51	64	25	48	東 116.84 西 116.64	N102° E	—	—	
ST22	245	120	189	西 63 中 71 東 61	77	117.94	N62° W	172	45	ST23 と重複。
ST23	232	75	212	西 49 東 44	74	117.94	N82° W	180	36	ST22・24 と重複。底面東側小口に溝。
ST24	203	94	181	西 70 東 59	64	117.88	N91° W	162	44	ST23 と重複。
ST25	61	61	38	25	38	118.14	N44° W	—	—	
ST26	153	73	105	西 43 東 17	61	118.00	N115° W	72	29	底面西側に溝。
ST27	247	126	上 215 下 185	68	75	上 117.74 下 117.69	N104° W	160	—	底面に西側小口及び南側に溝。東側小口上に板石。墓標石。
ST28	134	68	101	西 25 東 20	58	117.85	N69° W	85	23	ST29・30 と重複。
ST29	177	73	65 ～	46	21	118.30	—	—	—	ST28 と重複。底面西側に溝。
ST30	—	—	—	—	—	117.88	—	—	—	ST28・32 と重複。
ST31	95 ～ 147	72	66 ～	北 25 中 35	51	南 117.48 北 117.36	N159° W	—	—	ST32 ～ 34 と重複。
ST32	87 ～	85 ～	72 ～	75	43	117.45	N101° W	—	—	ST30・31・33 と重複。墓標石。
ST33	127	65	45	西 31 東 20	37	117.12	N102° W	—	—	ST31・32 と重複。底面両小口に溝。
ST34	48 ～	57	32 ～	北 27 中 32	23	117.45	N54° E	—	—	ST31 と重複。
ST35	81	65	64	北 44 南 22	37	117.42	N8° E	—	—	
ST36	92	71	58	15	37	西 117.01 東 116.89	N89° W	—	15	北側壁に平坦面。
ST37	89	50	72	東 34 西 27	31	116.75	N121° E	—	—	
ST38	120	51	96	40	36	西 117.13 東 117.03	N73° W	—	—	ST39・40・SK1 と重複。
ST39	100	70 ～	62	39 ～	53	西 116.83 東 116.73	N107° W	45	—	ST38・40・SK1 と重複。東側掘り方上面で弥生土器片出土。
ST40	77	66 ～	54	45 ～	30	西 116.89 東 116.81	N37° E	—	—	ST38・39・SK1 と重複。
SK1	103	100	93	93	137	116.15	—	—	—	ST38 ～ 40 と重複。袋状土坑。

V　柳遺跡

1．調査の概要

本遺跡は備前坊山（標高 789.4m）から南へと延びる山脚から派生した尾根筋の先端部に位置する。調査区の北半分は，調査時まで墓地として使用されており，調査前からかなりの削平を受けていることが想定できた。広島市教育委員会による墓地を除いた地点の事前の試掘調査により，竪穴住居跡と考えられる遺構や弥生土器片を確認し，弥生時代の集落として調査を開始した。本調査時には，撤去した墓地部分にトレンチを入れた結果，下面からも住居跡が残っていることが確認できた。墓地部分は墓石等の撤去時にコンクリート片や礫が重機により非常に堅く踏みしめられた状態であり，手作業での掘削が困難なため，墓地整地土を重機により掘削を行った。

調査の結果，竪穴住居跡 13 軒（SH1 ～ 13），掘立柱建物跡 1 軒（SB1），テラス状遺構 6 か所（SX1 ～ 6），土坑 10 基（SK1 ～ 10）を確認した。遺物は弥生土器・土師器・鉄器・石器などが出土した。

2．地形と基本層序（第 123 ～ 125 図）

本遺跡は南東に延びる尾根の先端部，標高 127 ～ 132m の尾根状に位置する。尾根筋鞍部には幅 10 ～ 20 mの比較的広い平坦面が 200 m以上南東へと続き，先端から 50 mほどの地点（調査区の中央部付近）で南へと向きを変える。調査区の北半分は墓地として使用され，また，南側の主要な尾根鞍部も植林などで削平された状態であった。周辺地形の観察により，尾根はもともと調査区の北端から SH9 付近にかけて標高を下げた後，基準杭 3 付近にかけてピークを戻し，南へと下っていったと考えられる。

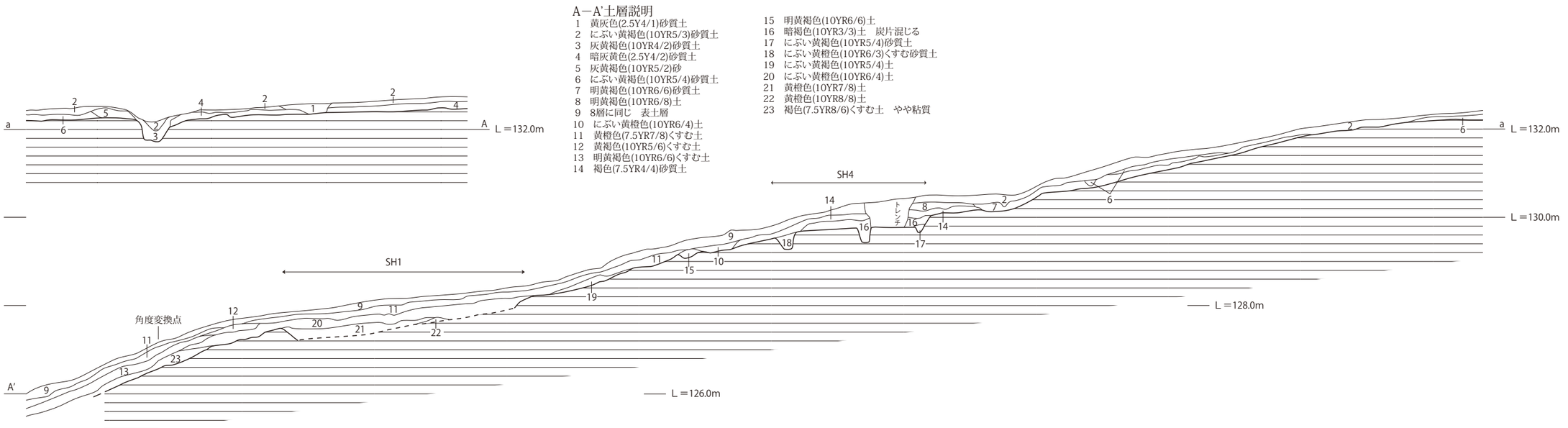
調査にあたり，尾根筋及びこれに直交する形で調査区の各所にトレンチを設定し，土層観察を行った。設定したトレンチのうち，尾根筋中央の A － A’ 土層，尾根を横断する B － B’・C － C’ を基本土層として示す。なお，墓地部分に関しては，墓地及び墓地撤去時の攪乱により，遺構の掘り方直上まで攪乱を受けている状態であった。

遺跡の位置する尾根は，地盤が風化した花崗岩（地山）で形成される。堆積する土は基本的に花崗岩バイラン土が主な成分となっているため，土質は砂分の多い砂質土が大半を占める。第 123 図 C － C’ ラインの西端付近や SH3 付近の地山は，結晶化した地山が筋状に延びた脈が走っており，岩盤質の強いものとなっている。

尾根鞍部の覆土は 20cm 前後と全体的に薄く，出土遺物を含む包含層はあまり存在しない。一方，尾根の斜面は 1 m程度の覆土をもち，調査区中央部の西側斜面では 2 m以上の深さをもつ。また，尾根の西側斜面には多くの土器片を含む遺物包含層があり，調査区外へと続く状況が見受けられた。堆積状況から，尾根鞍部を削平した際に流出したものと思われる。

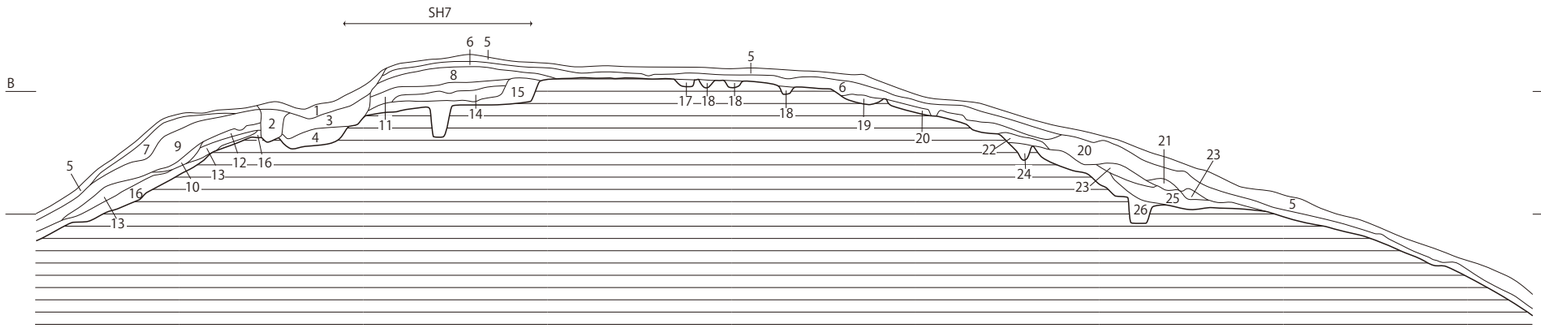
遺構は基本的に地山を掘り込んで造られている。なお，調査区の北端付近は遺構が存在しないが，周辺地形の観察から，元地形からかなりの削平を受けているため，消失したためと考えられる。

第 123 図　柳遺跡遺構配置図（S=1/250）



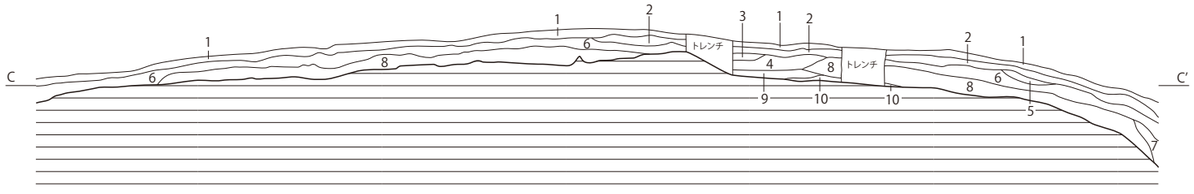
A－A'土層説明

1 黄灰色(2.5Y4/1)砂質土
2 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
3 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土
4 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土
5 灰黄褐色(10YR5/2)砂
6 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
7 明黄褐色(10YR6/6)砂質土
8 明黄褐色(10YR6/8)土
9 8層に同じ　表土層
10 にぶい黄橙色(10YR6/4)土
11 黄橙色(7.5YR7/8)くすむ土
12 黄褐色(10YR5/6)くすむ土
13 明黄褐色(10YR6/6)くすむ土
14 褐色(7.5YR4/4)砂質土
15 明黄褐色(10YR6/6)土
16 暗褐色(10YR3/3)土　炭片混じる
17 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
18 にぶい黄橙色(10YR6/3)くすむ砂質土
19 にぶい黄褐色(10YR5/4)土
20 にぶい黄橙色(10YR6/4)土
21 黄橙色(10YR7/8)土
22 黄橙色(10YR8/8)土
23 褐色(7.5YR8/6)くすむ土　やや粘質



B－B'土層説明

1 にぶい黄褐色(10YR5/2)土
2 黄橙色(10YR7/8)土
3 にぶい黄褐色(10YR4/3)土
4 灰黄褐色(10YR4/2)土
5 にぶい黄褐色(10YR5/3)土　表土層
6 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
7 にぶい黄褐色(10YR5/3)土　5層より明
8 灰黄褐色(10YR5/2)土　やや黒ずむ
9 灰黄褐色(10YR4/2)土　黒ずんだ層
10 褐灰色(10YR4/1)土　SX1埋土
11 明黄褐色(10YR6/6)くすむ土
12 明黄褐色(10YR6/8)土
13 明黄褐色(10YR6/8)土　12層よりやや暗
14 にぶい黄褐色(10YR5/3)くすむ土
15 にぶい黄橙色(10YR7/3)砂質土
16 黄橙色(10YR7/8)砂質土
17 灰黄色(2.5Y7/2)砂
18 淡黄色(2.5Y8/4)砂
19 浅黄色(2.5Y7/4)砂質土
20 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土
21 灰黄褐色(10YR6/2)砂質土
22 淡黄色(2.5Y8/4)砂
23 明黄褐色(10YR6/6)くすむ砂質土
24 淡黄色(2.5Y8/3)花崗岩バイラン土
25 にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
26 明黄褐色(2.5Y7/6)砂

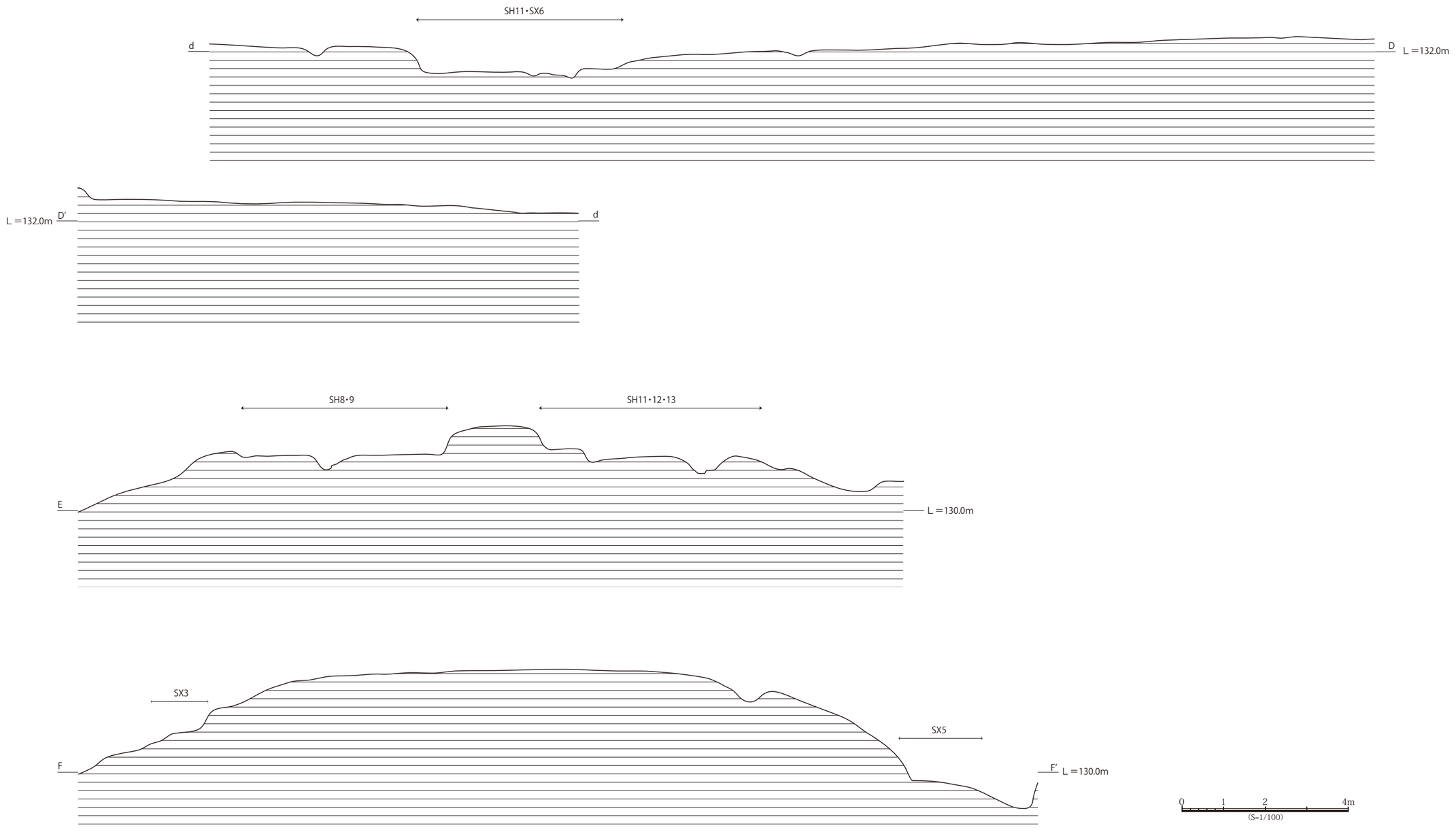


C－C'土層説明

1 明黄褐色(10YR6/8)土、表土層
2 黄橙色(7.5YR7/8)くすむ土
3 灰黄褐色(7.5YR6/2)土
4 灰黄褐色(7.5YR5/2)土
5 黄橙色(10YR8/8)くすむ土
6 にぶい黄褐色(10YR5/4)土
7 明黄褐色(10YR7/6)くすむ砂質土
8 明黄褐色(10YR7/6)くすむ砂質土　7層より明
9 にぶい黄橙色(10YR7/4)砂質土
10 にぶい黄橙色(10YR7/4)砂質土　花崗岩バイラン土

0　1　2　4m
(S=1/100)

第 124 図　柳遺跡基本層序（S=1/100）



第 125 図　柳遺跡断面図（S=1/100）

３．遺構

○ SH1（第 127 図）

SH1 は調査区の南端，標高 127m 付近に位置する竪穴住居跡である。北壁は斜面を掘り込んでおり，床面に至るまでに傾斜が 1 回変換する。これは傾斜面に住居を造る際に，斜面側の掘り込みが深くなり崩れやすくなるため，崩れを防止するための施設と考えられる。平面形状は円形で，床面の規模は東西 5.6m 南北 5.3m で，床面標高は約 126.9 m，壁高は最大 120cm である。壁溝はほぼ全周しており，幅 10 ～ 20cm，残存する深さは 4 ～ 9cm である。

主柱穴はその位置と規模から，P1 ～ P4 の 4 本柱構造と考えられる。各柱穴の規模は，P1 は底面形状が直径 20cm の円形で，底面標高は 126.33m である。P2 は底面形状が直径 23cm の円形で，底面標高は 126.54m である。P3 は底面形状が直径 21cm の円形で，底面標高は 126.49m である。P4 は底面形状が長径 25cm 短径 19cm の楕円形で，底面標高は 126.51m である。柱間距離は P1 － P2・P3 － P4 間が 2.4m，P2 － P3 間が 2.5m，P4 － P1 間が 2.6m である。なお，P3 では土層観察により，直径約 12cm の柱穴痕を確認した。

床面の中央部からは，長辺 120cm 短辺 86cm 深さ約 8cm の長方形の掘り込みに，長辺 67cm 短辺 58cm 深さ約 10cm の方形の段を持つ掘り込みを確認した。その形状や床面での位置，埋土に炭片を多く含むことから炉跡と考えられる。また，炉跡の北側の床面を中心に，底面径 3 ～ 5cm，深さ 4 ～ 10cm の小ピット群を確認した。なお，床面には焼土面も広がっている。

本住居跡からは土器（1 ～ 4）及び鉄器（112 ～ 114）が出土している。本遺構の時期は，出土土器の形態からⅢ－ 1 期に属すると考えられる。

○ SH2・SH3（第 126 図）

SH2 は SH1 の北約 7 m，標高約 129 m付近に位置する竪穴住居跡である。南西部の 1/4 を SH3 により削平されている。平面形状は長方形で，床面の規模は東西 2.4 m南北 3.3 mで，床面標高は約 128.0m，壁高は最大で 40cm である。

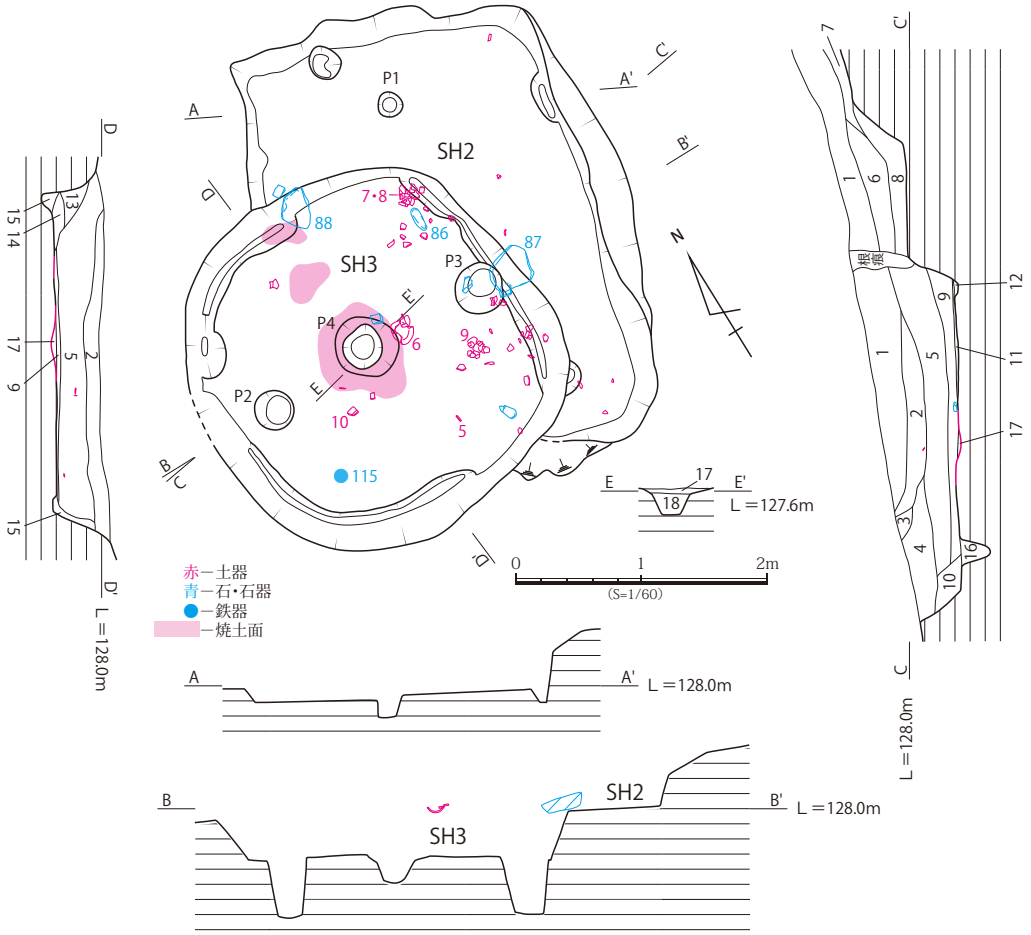
主柱穴はその位置と規模から，P1 及び SH3 により削平されたと想定される柱穴との 2 本柱構造と考えられる。P1 の規模は底面形状が直径 11cm の円形で，底面標高は 127.75m である。

本住居跡からは弥生土器片が出土しているが，細片のため図示するに至らなかった。

SH3 は SH2 の南西側を切って位置する竪穴住居跡である。平面形状は隅丸方形で，床面の規模は東西 2.3 m南北 2.4 mで，床面標高は約 127.6m，壁高は最大 48cm である。壁溝は北側と南側の一部を除いて残存しており，幅約 15cm，残存する深さは 3 ～ 5cm である。

主柱穴はその位置と規模から，P2・P3 の 2 本柱構造と考えられる。各柱穴の規模は，P2 は底面形状が長径 23cm 短径 18cm の楕円形で，底面標高は 127.14m である。P2 は底面形状が長径 23cm 短径 20cm の楕円形で，底面標高は 127.16m である。柱間距離は 1.9m である。

床面の中央部からは，直径約 50cm 深さ約 22cm の掘り込みを確認した。その形状や床面での



土層説明

1　明黄褐色(10YR6/6)土　やや粘質
2　にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土
3　明黄褐色(10YR7/6)くすむ土
4　灰黄褐色(10YR6/2)砂質土
5　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
6　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
7　にぶい黄橙色(10YR7/4)砂
8　にぶい黄橙色(10YR7/4)砂質土
9　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
10　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
11　明黄褐色(7.5YR5/6)砂質土　粘質強い
12　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
13　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
14　黄橙色(10YR5/6)砂質土
15　にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土
16　花崗岩礫層
17　褐色(10YR4/4)砂質土　焼土混じる
18　浅黄橙(10YR8/3)砂

第 126 図　柳遺跡 SH2・SH3 実測図（S=1/60）

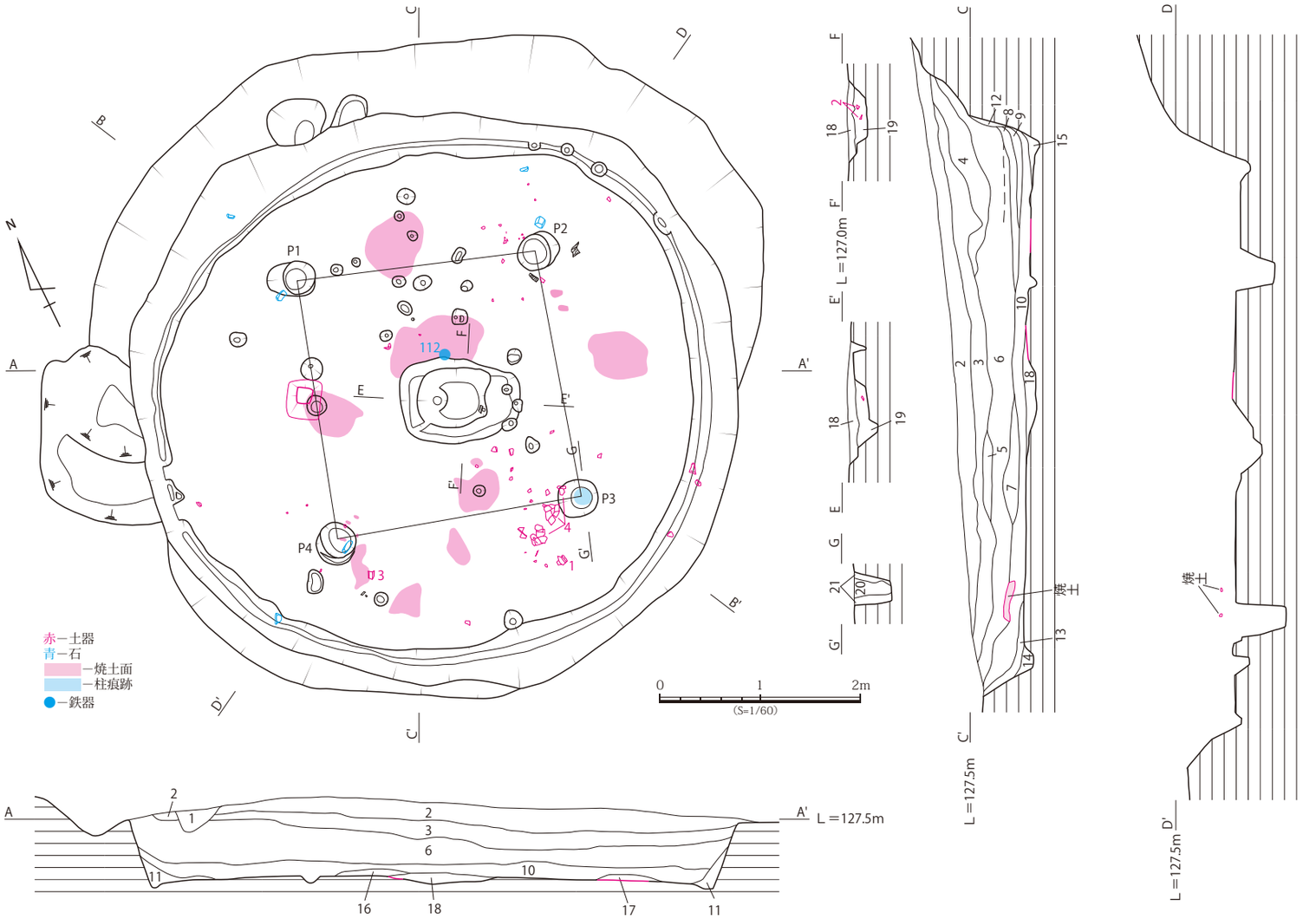
位置，掘り込みが被熱して赤変していることから炉跡と考えられる。

本住居跡からは土器（5）・鉄器（115）が出土している。また，埋土中からは土器（6 ～ 10）及び石器（86 ～ 88）が出土している。本遺構の時期は出土土器の形態からⅡ－ 2 －②期に属すると考えられる。

ここで，それぞれの遺構の先後関係についてみると，C － C ‘土層の観察と遺構の切り合い関係から，SH2 → SH3 の順に営まれたことが考えられる。

○ SH4（第 128 図）

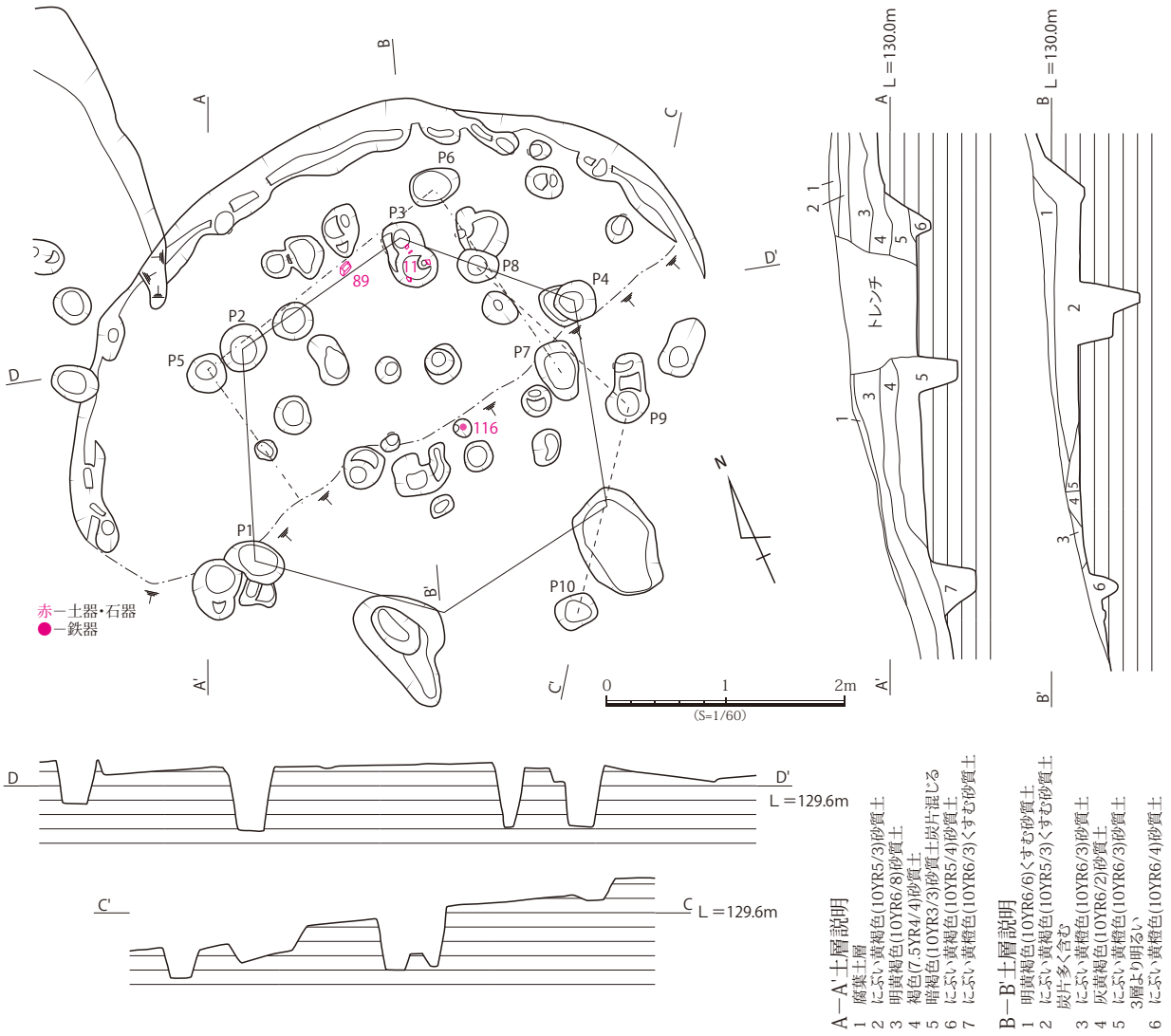
SH4 は SH1 の北約 7 m，標高 130m 付近に位置する竪穴住居跡である。南西側は緩やかに傾斜し流失している。残存部から推測できる平面形状は円形で，床面の規模は直径 6.3 m程度と想定できる。残存する床面標高は約 129.8 mで，残存する壁高は最大 38cm である。壁溝は残存する壁



土層説明

1　黄褐色(10YR5/6)土　根跡
2　黄橙色(10YR7/8)土
3　明黄褐色(10YR7/6)砂質土
4　明黄褐色(10YR7/6)砂質土　3層より淡
5　にぶい黄橙色(10YR7/4)くすむ砂質土
6　にぶい黄橙色(10YR7/4)砂質土
7　にぶい黄橙色(10YR7/3)砂質土
8　にぶい黄橙色(10YR7/3)砂質土　上面に粘土層
9　にぶい黄橙色(10YR7/3)砂質土　上面に粘土層
10　にぶい黄橙色(10YR7/3)砂質土　炭片混じる　上面に粘土層
11　にぶい黄橙色(10YR7/3)砂質土　炭片混じる　10層より暗
12　黄褐色(10YR5/8)砂質土　やや粘質
13　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土　砂分多いが粘質
14　にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土　砂分多いが粘質
15　にぶい黄橙色(10YR7/3)砂質土　10層より淡
16　にぶい赤褐色(5YR5/4)砂質土　焼土混じる
17　褐灰色(10YR5/1)砂質土　炭片多く含む
18　暗黄褐色(10YR7/6)砂質土　炭片わずかに混じる
19　黄灰色(10YR5/1)砂質土　炭化物片混じる
20　黄褐色(10YR5/3)くすむ砂質土　柱痕跡
21　明黄褐色(10YR7/6)くすむ砂質土　固く締まる

第 127 図　柳遺跡 SH1 実測図（S=1/60）

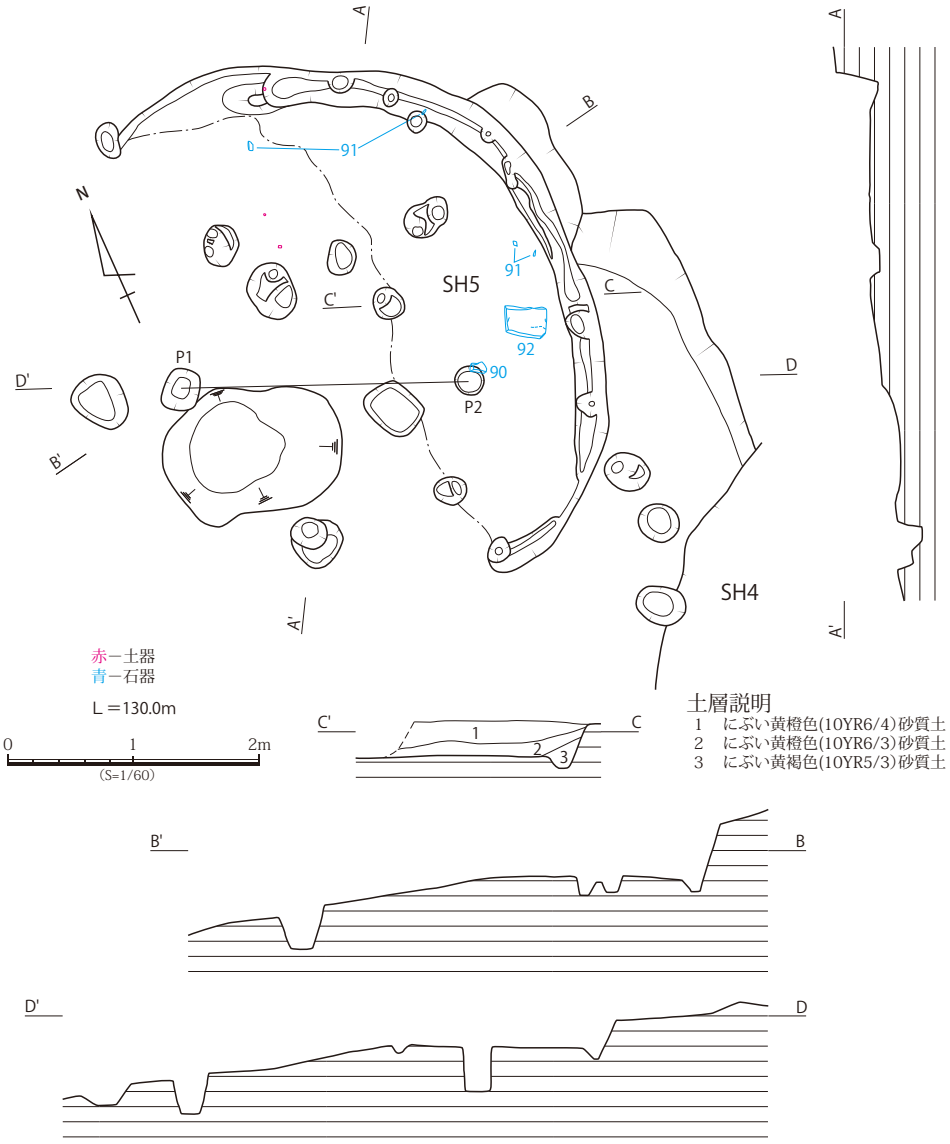


第 128 図　柳遺跡 SH4 実測図（S=1/60）

に沿って確認し，幅 14 ～ 18cm，残存する深さは 3 ～ 18cm である。

床面には柱穴と考えられるピットが多数ある。主柱穴の特定は困難ではあるが，P1 ～ P4 及び床面流失により失われたと想定される 2 本との 6 本柱構造が想定できる。各柱穴の規模は，P1 は底面形状が長径 43cm 短径 24cm の楕円形で，底面標高は 129.23m である。P2 は底面形状が直径 23cm の円形で，底面標高は 129.24m である。P3 は底面形状が直径 15cm の円形で，底面標高は 129.26m である。P4 は底面形状が直径約 19cm の円形で，底面標高は 129.22m である。柱間距離は P1 ― P2 間が 1.8 m，P2 ― P3 間が 1.6m，P3 ― P4 間が 1.5m である。

また，本住居跡は柱穴の数から複数回建て替えが行われたことが想定できる。底面標高が 129.5 m付近の P5 ～ P7 の組み合わせ，底面標高が 129.1m 付近の P8 ～ P10 の組み合わせが想定できる。各柱穴の規模は，P5 は底面形状が直径 15cm の円形で，底面標高は 129.43m である。P6 は底面形状が長径 31cm 短径 24cm の楕円形で，底面標高は 129.41m である。P7 は底面形状が長径 30cm 短径 23cm の楕円形で，底面標高は 129.41m である。P8 は底面形状が直径 16cm の円形で，底面標高は 129.18 mである。P9 は底面形状が直径 19cm の円形で，底面形状が 129.12m である。



第 129 図　柳遺跡 SH5 実測図（S=1/60）

P10 は底面形状が長径 21cm 短径 18cm の楕円形で，底面標高は 129.06m である。

本住居跡からは土器（11）・砥石（89）及び鉈（116）が出土している。また，埋土中からは土器 (15) が出土している。本遺構の時期は出土土器の形態からⅡ－３期に属すると考えられる。

○ SH5（第 129 図）

SH5 は SH4 の西約 1m，標高 130 m付近に位置する竪穴住居跡である。東壁と北壁及びそれに伴う東西 1.4m 南北 3.8m 程度の床面が残存するが，他は流失している。残存する平面形状から推測できる平面形状は円形で，床面の規模は直径 4.0 m程度と想定できる。残存する床面標高は約 129.8 mで，残存する壁高は最大 52cm である。壁溝は残存する壁に沿って確認し，幅 16 ～ 20cm，残存する深さは約 10cm である。

主柱穴はその位置と規模から，P1・P2 の 2 本柱構造と考えられる。各柱穴の規模は，P1 は底

面形状が直径 17cm の円形で，底面標高は 129.40m である。P2 は底面形状が長辺 16cm 短辺 13cm の隅丸方形で，底面標高は 129.22m である。柱間距離は 2.2 mである。床面には他にもピットがあるが，深さが浅いものや不整形で，主柱穴としては妥当ではない。

本住居跡からは砥石（90・91）及び台石（92）が出土している。また，弥生土器片が出土しているが細片のため時期を特定するに至らなかった。

なお，SH4・5 の間には平坦面が存在する。壁溝が存在しないため，住居に伴う平坦面や先行するテラス状遺構の可能性がある。平坦面の標高は約 130.0 mで，遺物などは出土していない。

○ SH6・SB1（第 130 図）

SH6 は SH4 の北東約 5m，標高 129.5 m付近に位置する竪穴住居跡である。南西壁から北東壁とそれに伴う床面を確認したが，南東部は斜面により流失している。残存する平面形状から推測できる平面形状は円形もしくは六角形で，床面の規模は直径 5.9 m程度と想定できる。残存する床面標高は約 129.4 mで，残存する壁高は最大 56cm である。壁溝は西壁と北壁の一部に沿って確認し，幅 11 ～ 24cm，残存する深さは 3 ～ 5cm である。

本住居跡の床面からは柱穴と考えられる複数のピットを確認した。後述するベッド状遺構と柱穴の切り合い関係から，一回の建て替えが行われている。以下，建て替え前の住居を SH6a，建て替え後の住居を SH6b と呼称し述べることとする。

SH6b の主柱穴は，P1 ～ P6 の 6 本柱構造と考えられる。各柱穴の規模は，P1 は底面形状が直径 19cm の円形で，底面標高は 128.79m である。P2 は底面形状が直径 24cm の円形で，底面標高は 128.99m である。P3 は底面形状が直径 20cm の円形で，底面標高は 128.79m である。P4 は掘り方上面が直径 35cm の円形，底面形状が長径 27cm 短径 4cm の長円形で，底面標高は 129.00m である。P5 は底面形状が長径 38cm 短径 24cm の楕円形で，底面標高は 128.72m である。P6 は底面形状が長径 24cm 短径 20cm の円形で，底面標高は 128.78m である。柱間距離は P1 － P2・P2 － P3・P4 － P5・P5 － P6 間が約 2.0m，P3 － P4 間が 2.6m，P6 － P1 間が 2.3m である。

SH6a の主柱穴は，P3・P5・P7 ～ P10 の 6 本柱構造と考えられる。各柱穴の規模は，P7 は底面形状が長径 28cm 短径 23cm の楕円形で，底面標高は 128.78m である。P8 は底面形状が直径 19cm の円形で，底面標高は 128.78m である。P9 は底面形状が直径 12cm の円形で，底面標高は 128.95m である。P10 は底面形状が直径 8cm の円形で，底面標高は 128.89m である。柱間距離は P8 － P9・P3 － P9・P10 － P5・P5 － P7 間が 2.2m，P7 － P8 間が 2.5m，P3 － P10 間が 2.4m である。

床面の中央部から，長辺 57cm 短辺 51cm 深さ約 12cm の歪な方形の掘り込みを確認した。その形状や床面での位置，掘り方が被熱し赤変していることや，埋土に炭片を多く含むことから炉跡と考えられる。

本遺構の西壁の床面に沿って，幅 70 ～ 80cm 高さ約 16cm の段状の盛り土を確認した。土質は灰黄褐色砂質土からなり，上面には粘質土が広がり，生活面として使用されたと考えられ，位置・

形状からベッド状遺構と考えられる。なお，SH6a の柱穴である P8 をベッド状遺構の下層で検出したことから，SH6a 構築時にはベッド状遺構は無く，SH6b 構築時にベッド状遺構が造られたと考えられる。

本住居跡からは土器（13 ～ 15）・台石（93・94）及び鉄鏃（117）が，埋土中からは土器（16 ～ 18）・石器（95 ～ 97）及び鉄器（118 ～ 121）が出土している。本遺構の時期は出土土器の形態から I 期に属すると考えられる。

SB1 は SH6 の北側に切り合って位置する建物跡である。主柱穴は P11 ～ P15 と P16 ～ P18 のいずれかの 6 本柱構造と考えられる。柱穴の規模は，底面標高は 129.30 ～ 129.40m とほぼ一定している。P11 は掘り方上面が直径 35cm の円形，底面形状が長径 25cm 短径 15cm の楕円形である。P12 は底面形状が直径 21cm の円形，P13 は底面形状が直径 25cm の円形，P14 は底面形状が直径 38cm の円形，P15 は長径 45cm 短径 25cm の楕円形，P16 は底面形状が長径 19cm 短径 11cm の長円形，P17 は直径 10cm の円形，P18 は長径 24cm 短径 18cm の楕円形である。桁行きの柱間距離は約 180 ～ 200cm，梁行きの柱間距離は 195 ～ 220cm である。柱穴の配置から，棟方向は N54.5°E と推定され，桁行き約 370cm 梁行き約 200cm の 1 間 ×2 間の掘立柱建物跡と考えられる。

本遺構からは遺物は出土していない。

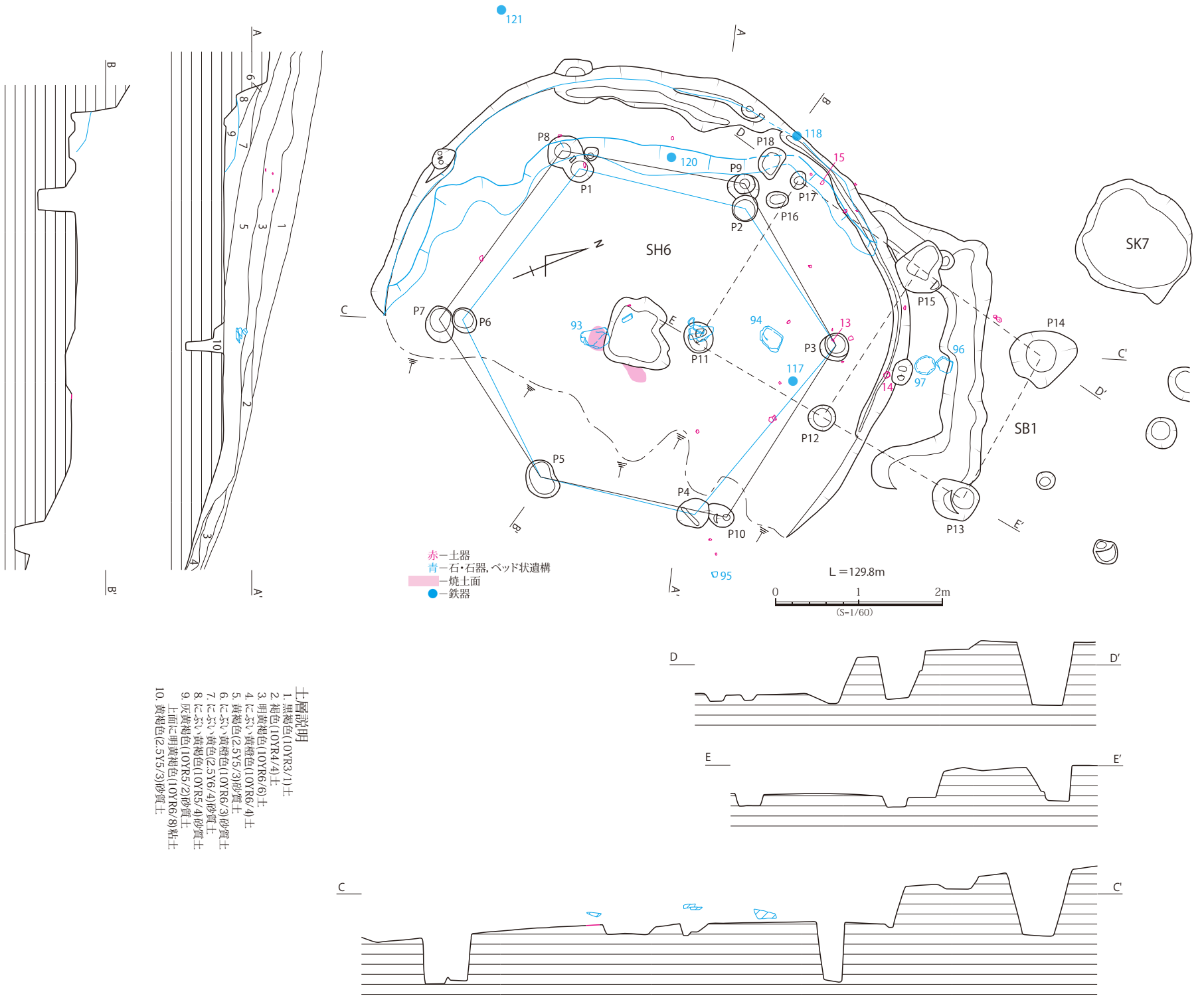
ここで，それぞれの遺構の先後関係についてみると，SH6 の掘り下げ中に SB1 の柱穴が確認できず，SH6 に切られていることから，SB1 → SH6a → SH6b の順に造られたものと考えられる。なお，SH6 の北側掘り方外，SB1 の P13 ～ P15 付近にかけて幅約 50cm 深さ 5 ～ 10cm の溝を確認した。SH6 により切られ部分的にしか残っておらず全体の形状は不明ではあるが，SH2 のような小型の方形の住居跡の可能性がある。この場合，切り合いから SB1 に先行するものと考えられる。

○ SH7（第 131 図）

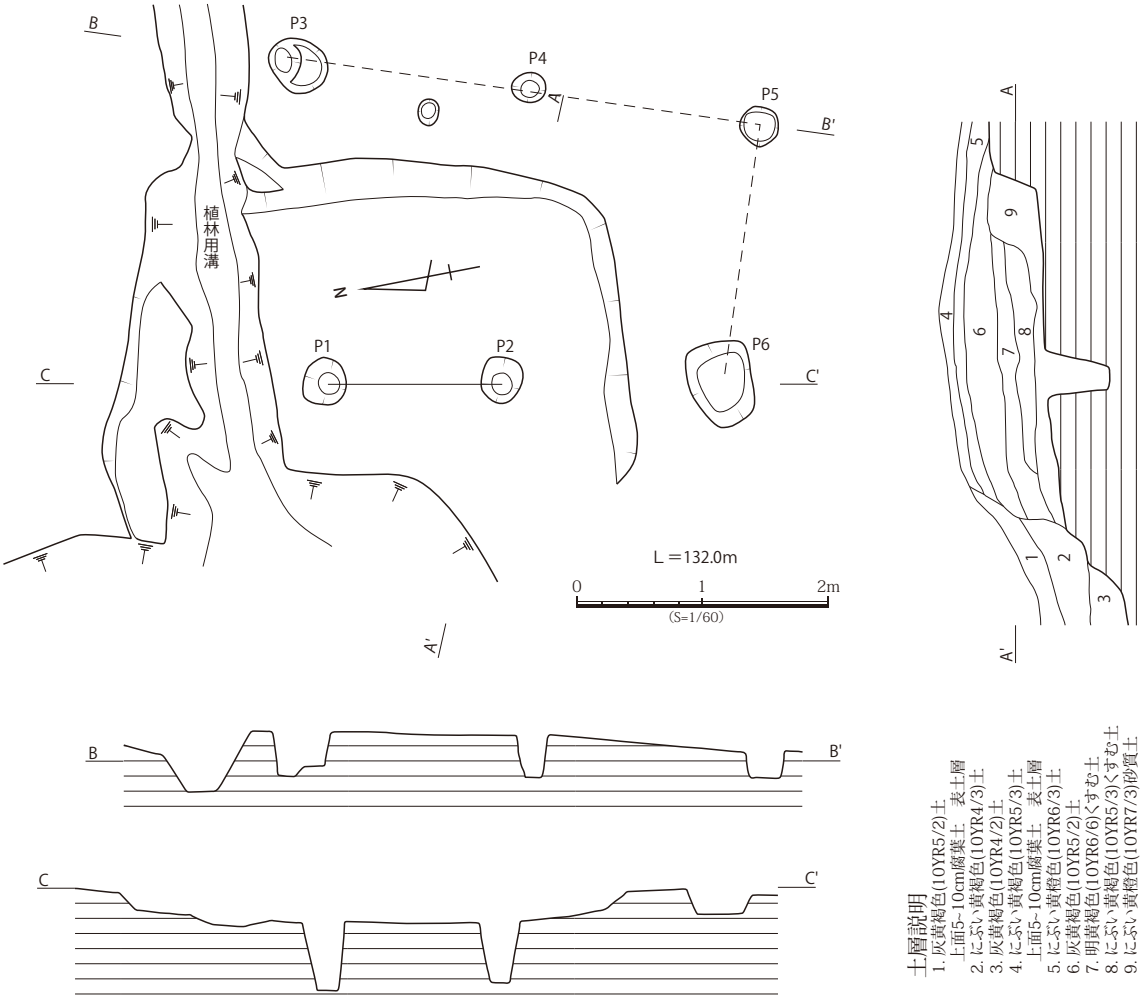
SH7 は SH6 の北西約 7 m，標高 132 m付近に位置する竪穴住居跡である。東壁と南壁とそれに伴う床面を確認したが。北壁は植林・墓地区画溝により削平を受け，西壁は斜面により流失している。残存部から推測できる平面形状は隅丸方形もしくは隅丸長方形で，床面の規模は一辺 3 m程度，もしくは東西 3 m南北 3.7m 程度と想定できる。残存する床面標高は約 131.8m で，残存する壁高は最大 35cm である。

主柱穴はその位置と規模から，P1・P2 の 2 本柱構造と考えられる。各柱穴の規模は，いずれも底面形状が直径 17cm の円形で，底面標高は P1 が 131.19m，P2 が 131.26m で，柱間距離は 1.4m である。本遺構からは遺物は出土しなかった。

なお，本遺構の掘り方外東側に，底面標高がいずれも 131.87 mの南北に軸方向を持つ P3 ～ P5 を確認した。各柱穴の規模は，P3 は底面形状が長径 20cm 短径 12cm の円形で，長さ 31cm 幅 15cm 標高 131.96m の半月状の 段を持つ。P4 は底面形状が直径 14cm の円形で，P5 は直径



第 130 図　柳遺跡 SH6・SB1 実測図（S=1/60）



第 131 図　柳遺跡 SH7 実測図（S=1/60）

23cm の円形である。P6 と SH7 部分に対になる柱穴列をもつ掘立柱建物跡の可能性がある。

○ SH8・SH9・SH10（第 132・133 図）

SH8 は調査区の北西側，標高 132m 付近に位置する竪穴住居跡である。西壁の一部とそれに伴う床面が南北約 5 m，幅 20 ～ 55cm 程度で残るが，東側の大半は SH9 により削平され，西側も斜面により流失している。残存部から推測できる平面形状は円形で，床面の規模は直径 5m 程度と想定できる。残存する床面標高は約 131.50m で，残存する壁高は最大 30cm である。壁溝は壁に沿って残存し，幅約 20cm，残存する深さは 4 ～ 12cm である。

主柱穴は，その位置と規模から，P1 ～ P6 の 6 本柱構造と考えられる。各柱穴の規模は，P1 は底面形状が直径 16cm の円形で，底面標高は 131.08m である。P2 は底面形状が直径 18cm の円形で，底面標高は 131.03m である。P3 は底面形状が直径 17cm の円形で，底面標高は 131.13m である。P4 は底面形状が直径 20cm の円形で，底面標高は 131.12m である。P5 は底面形状が直径 14cm の円形で，底面標高は 131.22m である。P6 は底面形状が長辺 18cm 短辺 15cm の歪な方形で，底面標高は 131.20m である。柱間距離は P1 － P2 間が約 2.4m，P2 － P3 間が約 2.2m，

P3 － P4 間が 2.3m，P4 － P5 間が約 2.6 m，P5 － P6 間が約 1.9m，P6 － P1 間が約 2.1m である。

SH8 埋土中から弥生土器片が出土したが，いずれも細片でその時期は不明である。

SH9 は SH8 の東側の床面を切って造られた竪穴住居跡である。平面形状は長円形で，床面の規模は東西 4.5m 南北 5.2m で，床面標高は約 131.4 m，壁高は最大 66cm である。壁溝はほぼ全周しており，幅 12 ～ 24cm，残存する深さは 4 ～ 9cm である。また，床面の南西部の壁溝外に，長さ 2.5m 幅最大 45cm の範囲で平坦面を確認した。平坦面の標高は，SH9 床面とほぼ同レベルであり，土層観察及び検出状況から SH9 の拡張床面と考えられる。

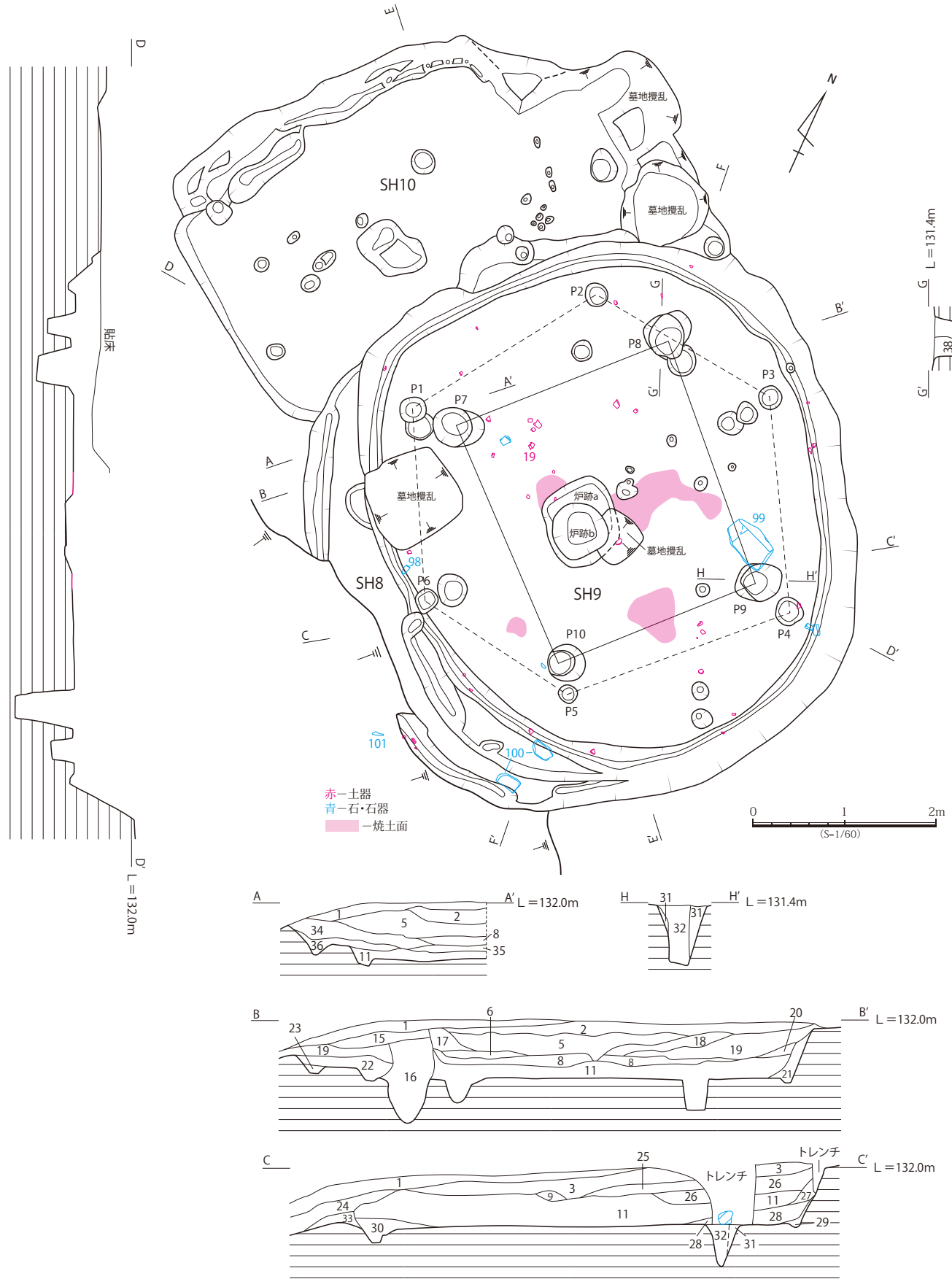
主柱穴はその位置と規模から，P7 ～ P10 の 4 本柱構造と考えられる。各柱穴の規模は，P7 は底面形状が長径 29cm 短径 24cm の楕円形で，底面標高は 130.98m である。P8 は底面形状が長径 31cm 短径 24cm の楕円形で，底面標高は 130.85m である。P9 は底面形状が直径 24cm の円形で，底面標高は 130.73m である。P10 は底面形状が直径 24cm の円形で，底面標高は 130.74m である。柱間距離は P7 － P8 間が 2.5m，P8 － P9・P10 － P7 間が 2.8m，P9 － P10 間が 2.3m である。

床面の中央部からは，方形と円形の掘り込みを確認した。その形状や床面での位置，掘り方が被熱していることや，埋土に炭片を多く含むことから炉跡と考えられる。以下，北西側の掘り込みを炉跡 a，南東側の掘り込みを炉跡 b と呼称し述べてゆくこととする。炉跡 a は，炉跡 b と近現代の墓壙に南側を削平されている。残存部から推定できる平面形状は方形で，掘り方の規模は一辺 60cm，床面からの深さは約 8cm である。炉跡 b は平面形状が円形で，掘り方の規模は直径 60cm 床面からの深さ約 30cm である。検出状況から炉跡 a →炉跡 b の順番に造られていると考えられ，炉跡 a が SH9 拡張前に，炉跡 b が SH9 拡張後に属するものと想定できる。

本住居跡からは土器（19）・石器（98・99）及び鉄製鋤先（122）が出土している。埋土中からは土器（20）・台石（100）及び鉈（123）が出土している。本遺構の時期は出土土器の形態からⅢ－ 1 期に属すると考えられる。なお，本住居跡に伴うものではないが，住居跡外から削器（101）が出土している。

SH10 は SH9 の北西に接して位置する竪穴住居跡である。床面までの埋土は浅く，墓地による攪乱や墓地撤去時の重機走行による攪乱により，遺存状態は著しく悪い。埋土のほとんどは攪乱を受けている状態であった。しかしながら，SH9 埋土中に貼り床と考えられる堅緻な層（第 132 図第 8 層）と掘り方を確認した。SH10 の床面と貼り床面は同レベルであるが，壁面と埋土中の掘り方の形状は一致せず，複数の住居が存在していたと考えられる。これら複数の住居を便宜上，南西壁を基準とする SH10a，北西壁を基準とする SH10b，SH9 埋土中の掘り方を基準とする SH10c と呼称し，述べることとする。

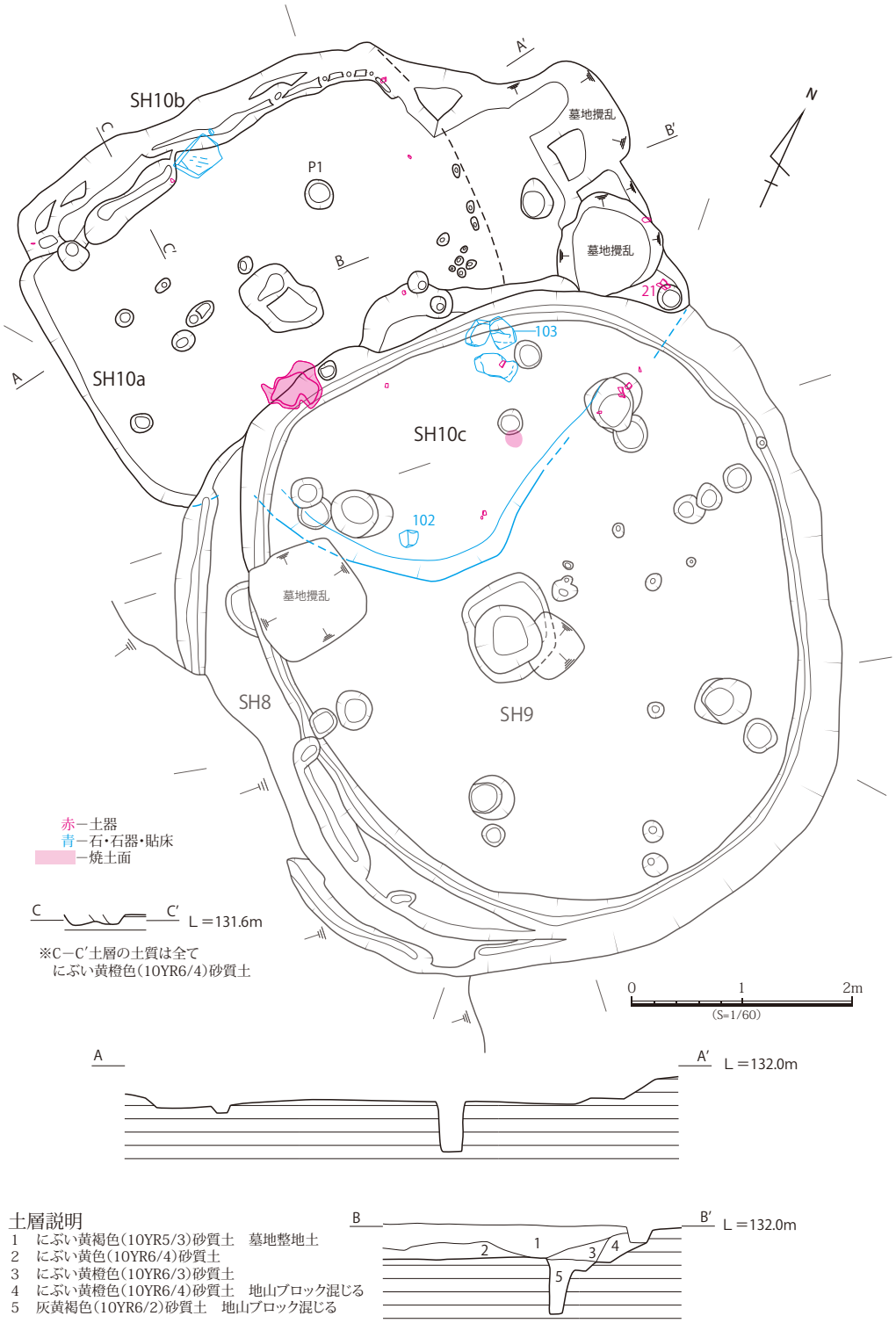
SH10a は南西壁が 2.7 mの規模で残存し，壁面の両端は 90°に近い角度で北東へと屈曲して残存する。床面の規模は一辺 2.5 mで，残存部から推定できる平面形状は隅丸方形もしくは隅丸長方形である。残存する壁高は最大 10cm で，壁溝は確認できなかった。



土層説明

1 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土　墓地整地土
2 黄褐色(10YR4/3)砂質土　墓地整地土
3 浅黄色(10YR7/3)砂質土　耕作層
4 にぶい黄色(10YR6/4)砂質土
5 暗灰黄色(10YR5/2)砂質土　炭片・土器片混じる
6 黄褐色(10YR5/3)砂質土
7 にぶい黄色(10YR6/3)砂質土
8 浅黄色(10YR8/4)花崗岩バイラン土　堅くしまる　貼床層
9 暗灰黄色(10YR5/2)砂質土
10 灰黄色(10YR6/2)砂質土
11 暗灰黄色(2.5YR5/2)砂質土
浅黄色(10YR7/3)砂質土ブロック20%混じる
12 暗灰黄色(2.5YR5/2)砂質土
13 暗灰黄色(2.5YR5/2)砂質土　炭片わずかに混じる
14 褐灰色(10YR4/1)砂質土　炭片・焼土片混じる
15 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土　墓封土
16 にぶい黄橙色(10YR6/1)粘質土　墓埋土
17 黄褐色(10YR5/8)くすむ砂質土
18 灰黄褐色(10YR5/2)
19 灰黄褐色(10YR5/2)18層より暗
20 灰黄褐色(9YR5/2)砂質土
21 褐灰色(10YR6/1)砂質土
22 灰黄褐色(10YR5/2)19層より明
23 褐灰色(10YR5/1)砂質土
24 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土
25 褐灰色(10YR5/1)砂質土
26 褐灰色(10YR5/1)砂質土　25層より明
27 褐灰色(10YR5/1)砂質土　26層より明
28 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土
29 褐灰色(10YR4/1)砂質土
30 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土
31 浅黄色(2.5Y7/4)砂質土　堅緻
32 にぶい黄色(2.5Y6/3)砂質土　炭片混じる、柱痕跡
33 にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土　キメ細かい
34 褐灰色(10YR5/1)砂質土
35 褐灰色(10YR6/1)砂質土　8層と11層の混入層
36 褐灰色(10YR5/1)砂質土　34層より暗
37 灰黄色(2.5Y6/2)砂質土　非常に堅緻
38 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土　炭片混じる　柱痕跡

第 132 図　柳遺跡 SH8・SH9 実測図（S=1/60）



第 133 図　柳遺跡 SH10 実測図（S=1/60）

SH10b は北西壁が 3.6 m，北東壁が約 1m の規模で残存し，北西壁の両端は 90° に近い角度で南東へと屈曲する形で残存する。残存部から推定できる平面形状は隅丸方形もしくは隅丸長方形である。残存する壁高は最大 25cm で，壁溝は壁に沿って残存し，幅約 20cm，残存する深さは 4 ～ 6cm である。

SH10c は東端の屈曲部の一部と，SH9 の埋土中に床面と壁面の一部が残存する住居跡である。

貼床は 10 ～ 14cm の厚さで堅く締まった花崗岩バイラン土からなる。貼り床部南東辺の長さは約 3.4 mで，残存部から推定できる平面形状は隅丸方形と考えられる。

重なり合う部分のそれぞれの住居の境界は明らかにはできないが，床面の標高は約 131.6m である。床面からは主柱穴と考えられる規模を持つ P1 を確認した。P1 の規模は，底面形状が直径 19cm の円形で，底面標高は 131.23m である。床面からは他にも底面形状が直径 3 ～ 20cm 深さ 3 ～ 12cm の小規模なピットを確認したが，柱穴とするには不適当である。また，床面からは長辺約 70cm 短辺約 50cm の掘り込みを確認した。底面形状は長径 20cm 短径 17cm 床面からの深さ 20cm の楕円形で，一辺約 30cm 床面からの深さ約 8cm の不整形な段を持つ。その形状や床面での位置から，SH10a もしくは SH10b に伴う炉跡と考えられる。また，炉跡の約 40cm 南の床面からは長辺約 50cm 短辺約 30cm 高さ約 10cm の不整形な焼土塊を確認した。

本遺構は前述したように複数の住居跡が重複しているが，遺存状態が著しく悪いためそれぞれの遺構の先後関係を明確にするのは困難であるが，わずかに残る C － C’ 土層の観察から，SH10b → SH10a の順に営まれたことが想定でき，SH9 埋土中に SH10a の立ち上がりが見受けられなかったことから，SH10a → SH10c の順に営まれた可能性がある。以上のことから SH10b → SH10a → SH10c の順に営まれたと想定できる。

本遺構からは土器（21）及び石器（102・103）が出土している。出土物はそれぞれ SH10c に伴うものと考えられ，SH10c は出土土器の形態からⅢ期に属するものと考えられる。

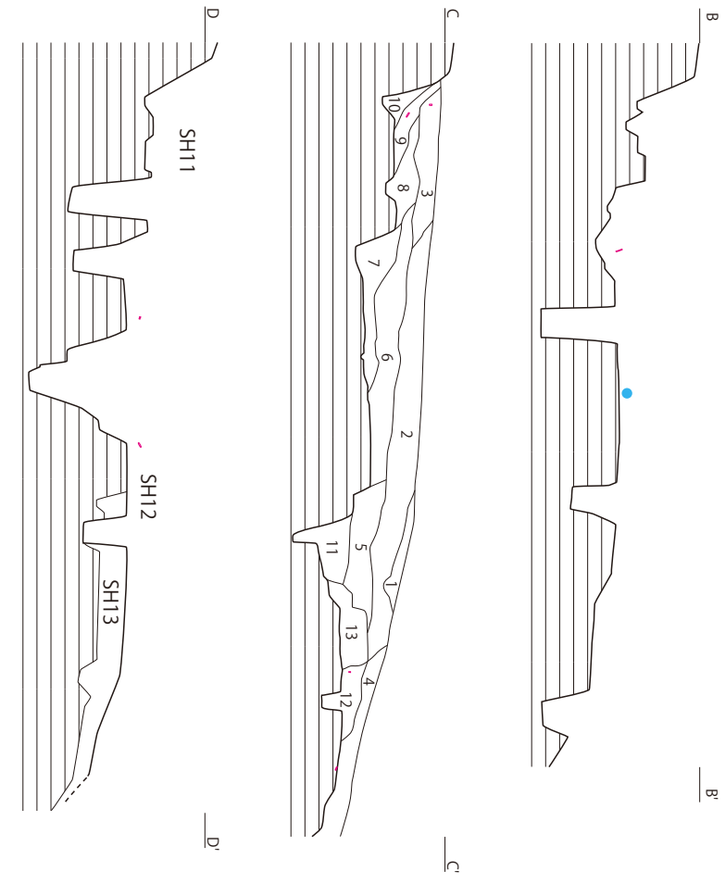
ここで，それぞれの遺構の先後関係についてみると，土層の観察と遺構の切り合い関係，出土土器の時期から，SH10b → SH10a → SH8 → SH9 → SH10c の順に営まれたと考えられる。

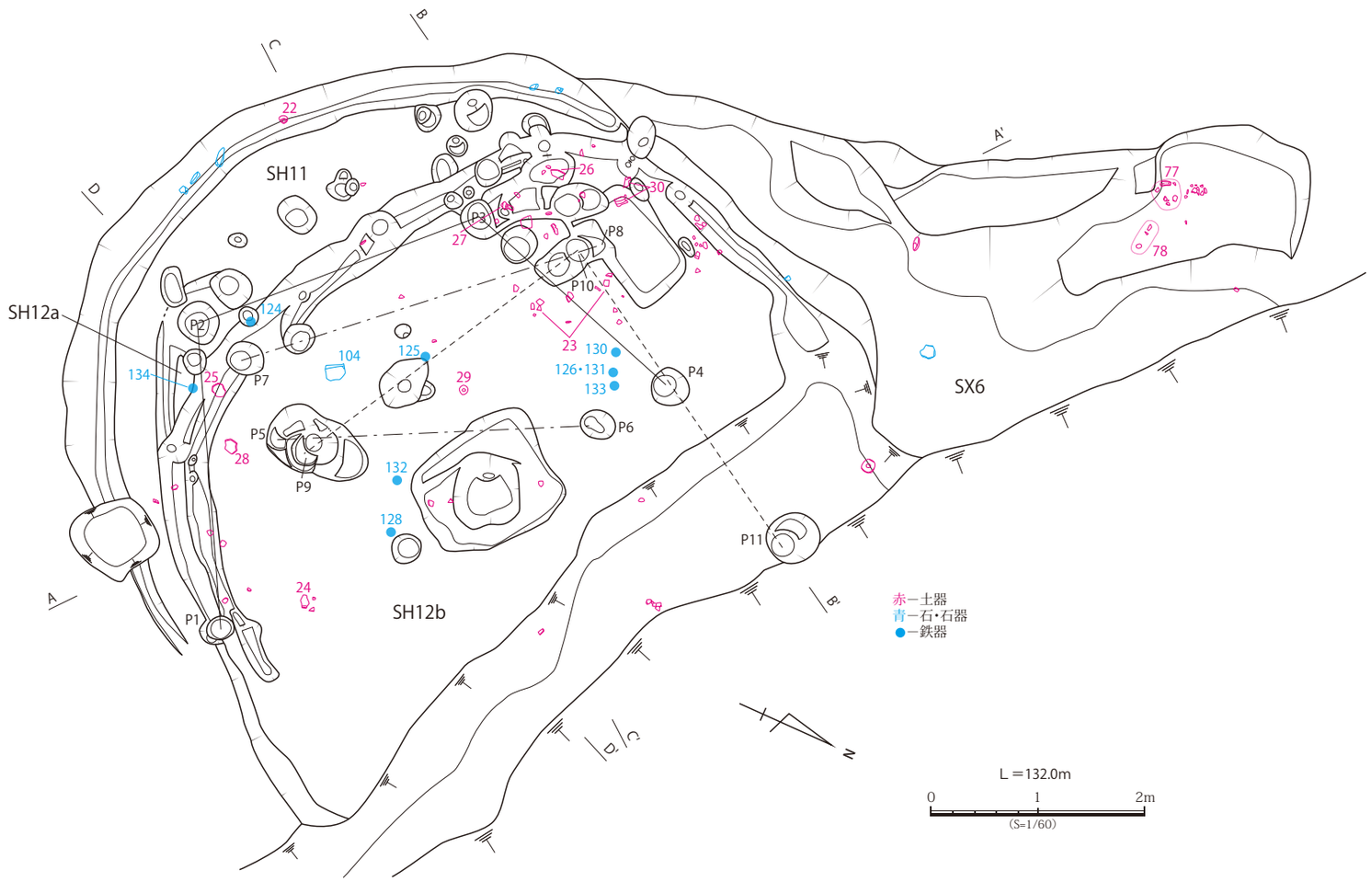
○ SH11・SH12・SH13・SX6（第 134・135 図）

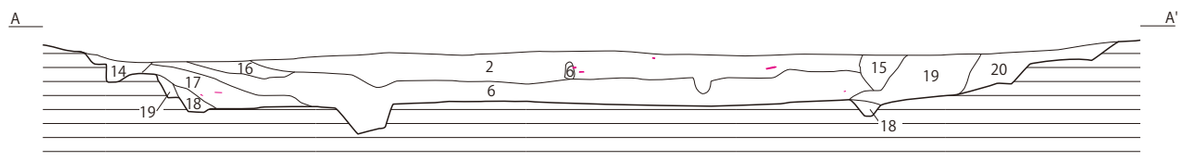
SH11 は SH9 の東約２mに位置する竪穴住居跡である。南壁の一部とそれに伴う床面が東西約 6.1 m，幅 15 ～ 105cm 程度で三日月状に残存するが，北側の大半は SH12 により削平されている。残存部から推測できる平面形状は円形で，床面の規模は直径 6.1m 程度と想定できる。残存する床面標高は約 131.6m で，残存する壁高は最大 58cm である。壁溝は壁に沿って残存し，幅 17 ～ 22cm，残存する深さは 5 ～ 10cm である。

主柱穴は，その位置と規模から，P1 ～ P4 及び削平部分の 5 本ないし 6 本柱構造と考えられる。各柱穴の規模は，P1 は底面形状が直径 17cm の円形で，底面標高は 131.00m である。P2 は底面形状が直径 22cm の円形で，底面標高は 130.85m である。P3 は底面形状が長径 24cm 短径 20cm の楕円形で，底面標高は 130.91m である。P4 は底面形状が直径 20cm の円形で，底面標高は 130.90m である。柱間距離は P1 － P2 間が 2.8m，P2 － P3 間が 2.9m，P3 － P4 間が 2.3m である。

本遺構からは土器（22）及び鉈（124）が出土している。本遺構の時期は出土土器の形態からⅡ－２－②期に属すると考えられる。







土層説明

1　にぶい黄色(2.5Y6/3)土
2　にぶい黄褐色(10YR5/4)土
3　灰黄褐色(10YR4/2)土　黄色土混じる　炭片・土器片含む
4　にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土
5　暗灰黄色(2.5Y5/2)土　炭片含む
6　にぶい黄褐色(10YR5/3)土
7　黄褐色(2.5Y5/3)土　炭片含む
8　灰黄褐色(10YR4/2)土　炭片含む
9　灰黄褐色(10YR5/2)砂質土　炭片・土器片含む
10　にぶい黄褐色(10YR5/3)土
11　褐灰色(10YR5/1)土
12　にぶい黄橙色(10YR5/4)砂質土　炭片含む
13　にぶい黄色(2.5Y6/4)砂質土　貼床層
14　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土　墓埋土
15　にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土
16　にぶい黄橙色(10YR6/3)土
17　灰黄褐色(10YR6/2)土
18　にぶい黄橙色(10YR6/3)土
19　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
20　にぶい黄褐色(10YR5/3)土

第 134 図　柳遺跡 SH11・SH12・SX6 実測図（S=1/60）

SH12 は SH11 の東側に床面を切って位置する竪穴住居跡である。西・南壁とそれに伴う床面が残存するが，北東部は後世の地形改変により削平されている。また，本遺構の南東壁溝の外側に，東西約 3 m南北約 0.5 mの逆 L 字状の掘り方を確認した。壁面に沿って幅 12cm 深さ約 8cm の溝が残存している個所もあり，先行する住居跡と考えられる。便宜上，前者を SH12b，先行する住居を SH12a と呼称し述べることとする。

SH12a は，残存部から推測できる平面形状は方形もしくは長方形である。わずかに残る床面標高は約 131.5m で，SH11 床面との比高差は約 10cm である。主柱穴はその位置と規模から，P5・P6 の 2 本柱構造，もしくは P7・P8 及び削平部分 2 か所の 4 本柱構造と考えられる。各柱穴の規模は，P5 は底面形状が長さ 18cm 幅約 10cm 半月状に残存し，底面標高は 130.92m である。P6 は底面形状が長径 20cm 短径 12cm の楕円形で，底面標高は 131.02m である。P7 は底面形状が直径 18cm の円形で，底面標高は 130.87m である。P8 は底面形状が長さ 20cm 幅 12cm の半月状に残存し，底面標高は 130.87 mである。柱間距離は P5 － P6 間が 2.9m，P7 － P8 間が 3.5m である。

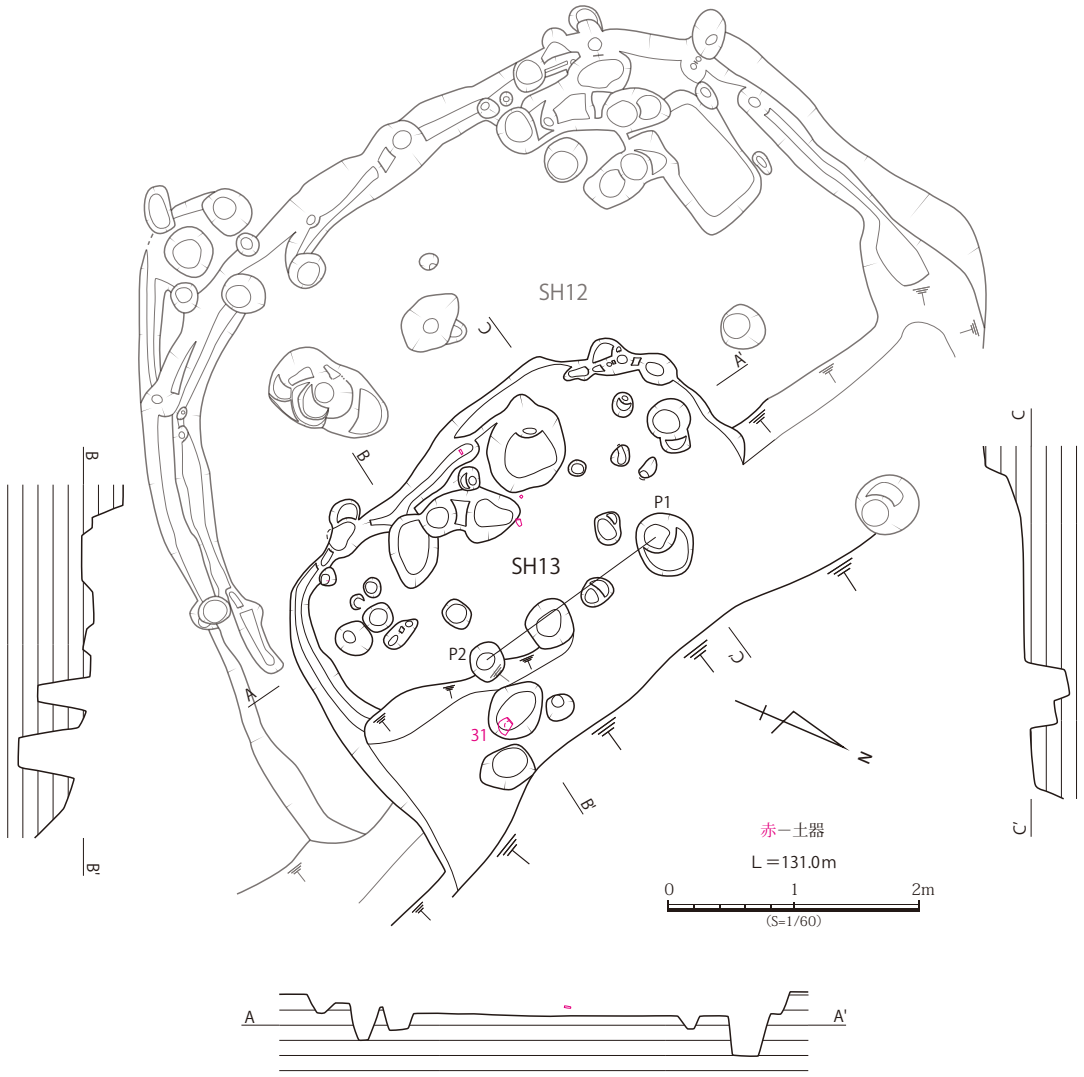
SH12b は，残存部から推測できる平面形状は隅丸方形で，床面の規模は一辺 6.1m 程度と想定できる。床面標高は約 131.3 mで，残存する壁高は最大 56cm，SH11 床面との比高差は約 30cm である。壁溝は壁に沿って残存し，幅 9 ～ 19cm，残存する深さは約 3cm である。

主柱穴は，その位置と規模から P9 ～ P11 及び削平部分の 4 本柱構造と考えられる。各柱穴の規模は，P9 は底面形状が長さ 21cm 幅 13cm の半月形で，底面標高は 130.61m である。P10 は底面形状が長径 25cm 短径 18cm の楕円形で，底面標高は 130.64m である。P11 は底面形状が直径 20cm の円形で，底面標高は 130.65m である。柱間距離は P9 － P10 間が 3.2m，P10 － P11 間が 3.3m である。

床面の中央部からは，長辺 127cm 短辺 107cm 深さ約 15cm の長方形の掘り込みに，長辺 65cm 短辺 60cm 深さ約 24cm の方形の段を持つ掘り込みを確認した。その形状や床面での位置，埋土に炭片を含むことから炉跡と考えられる。土層観察及びそれぞれの軸方向が異なることから，これらの炉跡は別時期にそれぞれ使用されたものと考えられ，外側の炉跡が SH12b に，内側の炉跡が SH12a に伴うものと考えられる。また。床面の北西隅には長辺 108cm 短辺 63cm 深さ約 30cm の長方形の掘り込みを確認した。その形状及び床面での位置から，SH12b に伴う住居内土坑と考えられる。

本遺構からは土器（23 ～ 26）・台石（104）及び鉄鏃（125）が，また，埋土中からは土器（27 ～ 30）及び鉄器（126 ～ 134）が出土している。本遺構の時期は出土土器の形態からⅢ－ 2 期に属すると考えられる。

SH13 は SH12 の東側床面の下層に位置する竪穴住居跡である。南壁と東西壁の一部及びそれに伴う床面を確認したが，北側は後世の地形改変により削平されている。残存部から推測できる平面形状は隅丸方形もしくは隅丸長方形で，床面の規模は一辺 3.5 m程度，もしくは南東－北西 3.5 m 南西－北東 3.0m 程度と想定できる。残存する床面標高は約 131.1m で，残存する壁高は最大

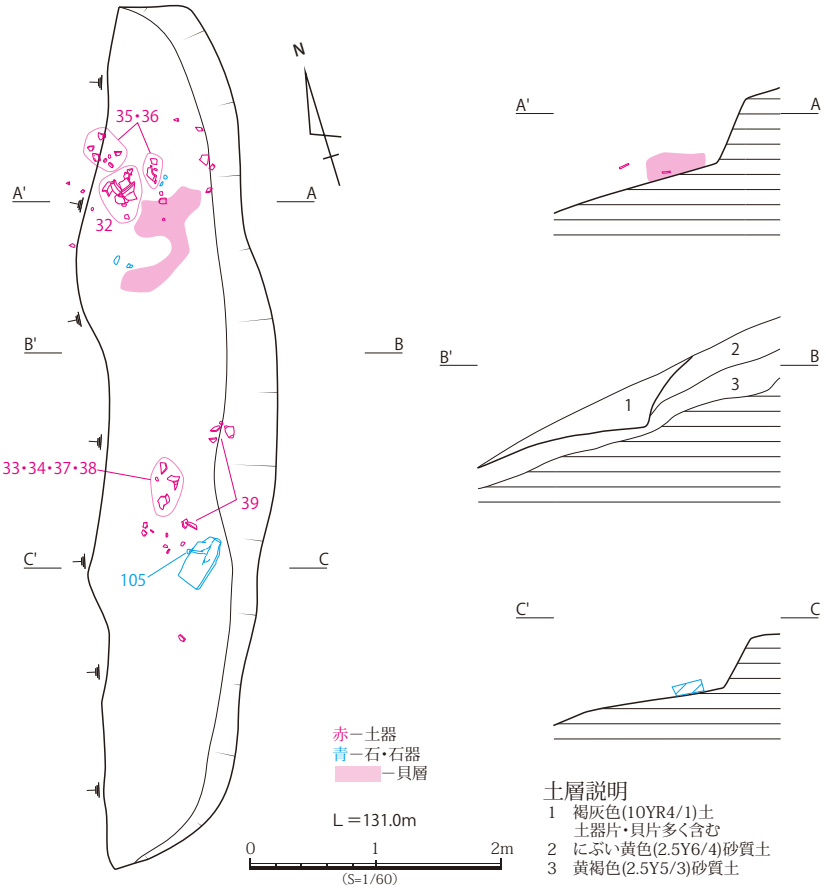


第 135 図　柳遺跡 SH13 実測図（S=1/60）

20cm である。壁溝は南壁と西壁の一部に残存し，幅 14 ～ 18cm，残存する深さは約 6cm である。床面には複数のピットが存在するが，主柱穴はその位置と規模から，P1・P2 の 2 本柱構造と考えられる。各柱穴の規模は，P1 は底面形状が一辺 18cm の隅丸方形で，底面標高は 130.69m である。P2 は底面形状が長径 15cm 短径 11cm の楕円形で，底面標高は 130.64cm である。柱間距離は 1.7m である。

本遺構からは土器（31）が出土している。本遺構の時期は出土土器の形態からⅢ－ 1 期に属すると考えられる。

SX6 は SH11・12 の北西に切られて位置する，標高約 132.0m の等高線に並行して掘り込まれ，平坦面が形成されるテラス状遺構である。平坦面は南北約 6.0 mの範囲で，複数の段状に残存し，東側は後世の地形改変により削平されている。その位置関係や土層観察から，SH11 ～ 13 に付随する平坦面と考えられる。



第 136 図　柳遺跡 SX1 実測図（S=1/60）

本遺構からは土器（77・78）が，埋土中からは土器（79・80）が出土している。本遺構の時期は出土土器の形態からⅡ－２－②期及びⅢ－１期に属すると考えられる。

ここで，それぞれの遺構の先後関係についてみると，土層の観察と遺構の切り合い関係，出土土器の時期から，SH11 → SH13 → SH12 の順に営まれたことが想定でき，A － A’ 土層の観察から SX6 の一部が SH12 に付随する平坦面として同時期に使用されたことが分かる。また，出土土器の時期から SX6 と SH11 が同時期に使用されたと考えられる。

○ SX1（第 136 図）

SX1 は SH7 の西約 3m に位置する，標高約 130.2m の等高線に並行して掘り込まれ，平坦面が形成されるテラス状遺構である。平坦面は確認範囲で南北約 6.8m 幅 0.8 ～ 1.2m の範囲で残存する。掘り込みの深さは最大 56cm で，平坦面は東から西へと緩やかに傾斜し，標高は北東端で約 130.6m，南東端で約 130.4m である。

本遺構の平坦面直上から埋土中にかけて多数の土器及び貝層を確認した。出土範囲は北群と南群の２か所に分かれている。北群は埋土中からも特に多数の土器が出土しており，貝層が長さ約 80cm 幅約 40cm 厚さ 10 ～ 20cm の範囲で堆積していた。貝はカキが主体でわずかにアサリ・ハ

マグリ・カガミガイなどの２枚貝を含む。カキは殻長 8cm 程度の小ぶりのものが殆どである。検出状況から，いずれも遺構廃棄時に投棄されたものと考えられる。

本遺構の床面から直上の埋土（第１層）にかけて土器（32 ～ 39）及び石器（105）が，また，その他埋土中からは土器（40 ～ 43）が出土している。出土した土器は形態からⅠ期，Ⅱ－１期，Ⅱ－２－②・③期の特徴をもち，本遺構廃棄時の下限はⅡ－２－③期に属するものと考えられる。

○ SX2（第 137 図）

SX2 は SX1 の北約 3m に位置する，標高約 131.5m の等高線に並行して掘り込まれ，平坦面が形成されるテラス状遺構である。平坦面は確認範囲で南北約 4.7m 幅最大 1.2m の範囲で残存する。掘り込みの深さは最大 57cm で，平坦面の標高は約 131.1 mである。

本遺構の平坦面から 10 ～ 17cm 上の直上埋土中からは土器（44 ～ 46）が出土している。出土した土器は形態からⅠ期，Ⅱ－２－②期の特徴を持ち，本遺構の廃棄時の下限はⅡ－２－②期に属すると考えられる。

○ SX3（第 138 図）

SX3 は SX2 の北約 1m に位置する，標高 131.5m の等高線に並行して掘り込まれ，平坦面が形成されるテラス状遺構である。平坦面は確認範囲で南北約 4.7m 幅 0.5 ～ 1.2 mの範囲で残存する。掘り込みの深さは最大 50cm で，平坦面の標高は約 131.0m である。平坦面の西には，南北２段の小平坦面が位置する。規模は確認範囲で，北小平坦面が南北約 3.0m 幅 0.3 ～ 0.6m，平坦面の標高は約 130.6m で，南小平坦面が南北 1.9 ～ 2.2m 幅 0.3 ～ 0.4 m，平坦面の標高は約 130.8m である。

本遺構の平坦面直上から埋土中にかけて多数の土器を確認した。検出状況から遺構廃棄時に投棄されたものと考えられる。

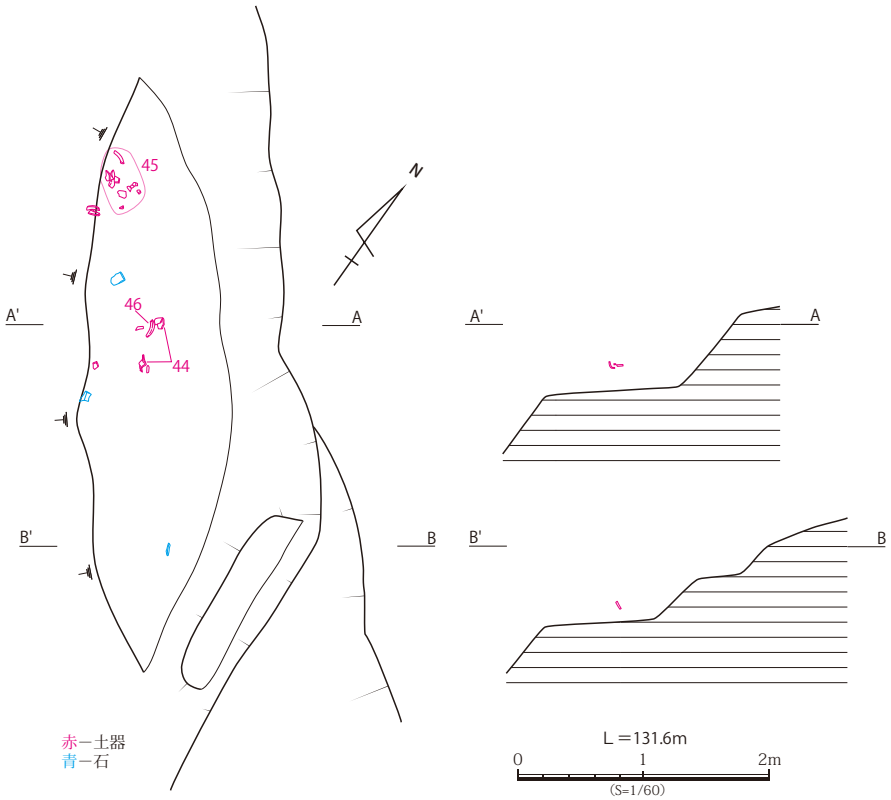
本遺構の床面から直上の埋土（第９層）にかけて土器（47 ～ 55）が，また，埋土中からは土器（56 ～ 69）及び砥石（106）が出土している。出土土器の形態から本遺構廃棄時の下限はⅡ－２－③期に属するものと考えられる。

○ SX4・SX5（第 139 図）

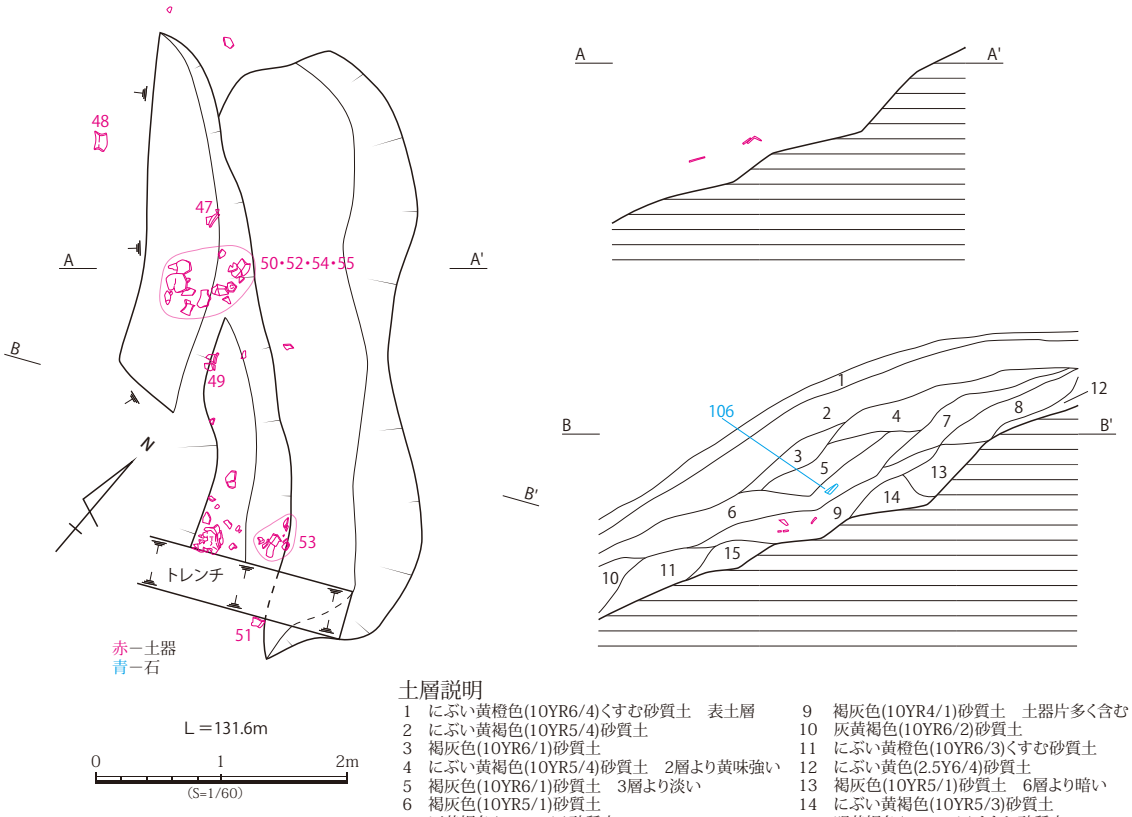
SX4 は SH6 の北約９mに位置する，標高約 130.3 mの等高線に並行して掘り込まれ，平坦面が形成されるテラス状遺構である。北側は SX5 により削平を受けている。平坦面は確認範囲で南北約 5.1m 幅 0.3 ～ 0.7m の範囲で残存する。掘り込みの深さは最大 43cm で，平坦面は北から南へと緩やかに傾斜し，標高は北端で約 130.4m，南端で 130.2m である。

本遺構からは遺物は出土していない。

SX5 は SX4 の北に接して位置する，標高約 130.3 mの等高線に並行して掘り込まれ，平坦面が形成されるテラス状遺構である。平坦面は確認範囲で南北約 8.8m 幅 0.5 ～ 1.6m の範囲で残存する。



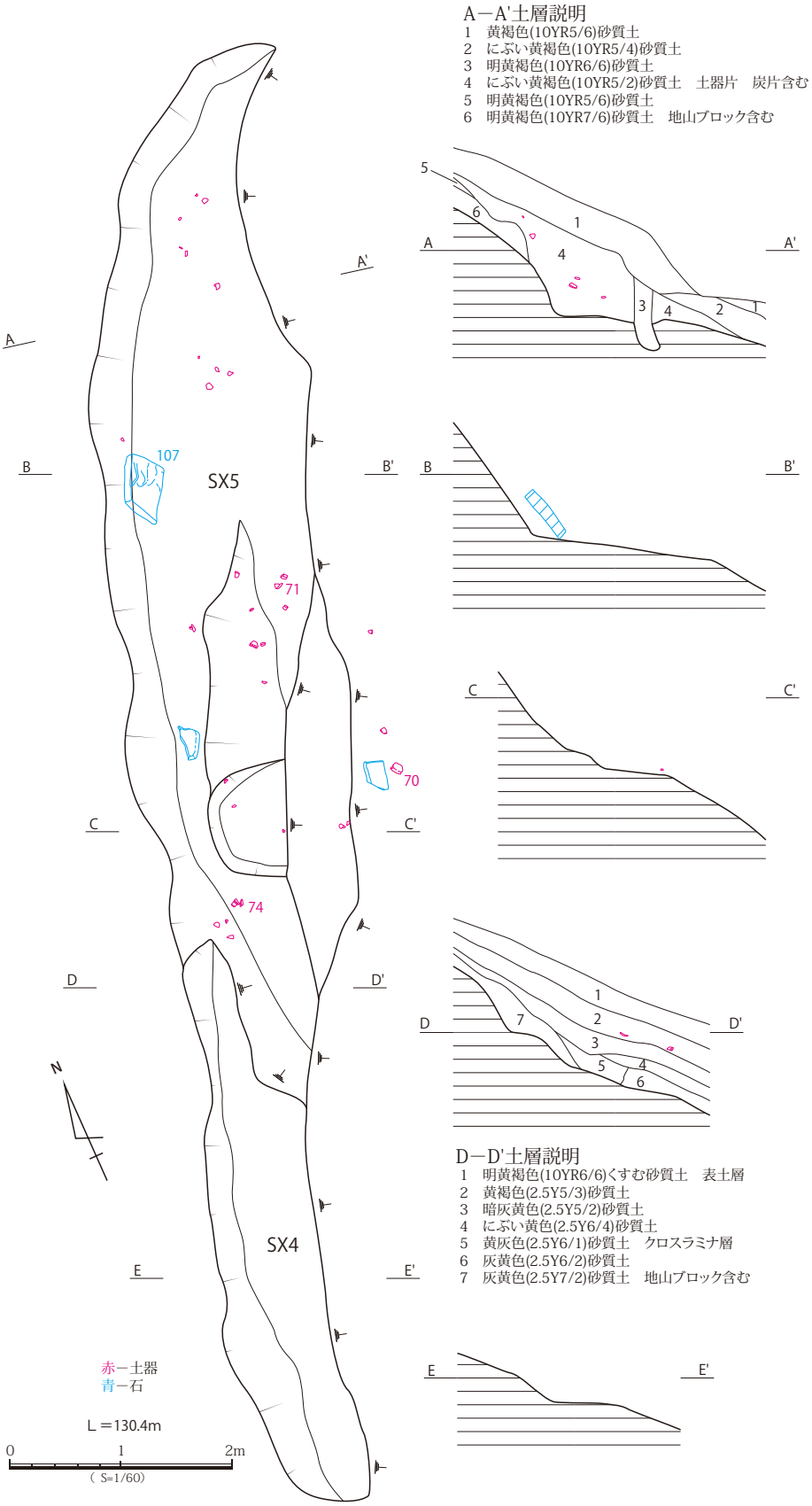
第 137 図　柳遺跡 SX2 実測図（S=1/60）



土層説明

1　にぶい黄橙色(10YR6/4)くすむ砂質土　表土層
2　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
3　褐灰色(10YR6/1)砂質土
4　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土　2層より黄味強い
5　褐灰色(10YR6/1)砂質土　3層より淡い
6　褐灰色(10YR5/1)砂質土
7　灰黄褐色(10YR5/2)砂質土
8　灰黄褐色(10YR5/2)砂質土　7層より暗い
9　褐灰色(10YR4/1)砂質土　土器片多く含む
10　灰黄褐色(10YR6/2)砂質土
11　にぶい黄橙色(10YR6/3)くすむ砂質土
12　にぶい黄色(2.5Y6/4)砂質土
13　褐灰色(10YR5/1)砂質土　6層より暗い
14　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
15　明黄褐色(10YR6/6)くすむ砂質土

第 138 図　柳遺跡 SX3 実測図（S=1/60）



第 139 図　柳遺跡 SX4・SX5 実測図（S=1/60）

掘り込みの深さは最大 52cm で，平坦面の標高は約 129.8m である。平坦面の南側には，東西 70cm 南北 105cm 深さ約 12cm の掘り込みを確認した。

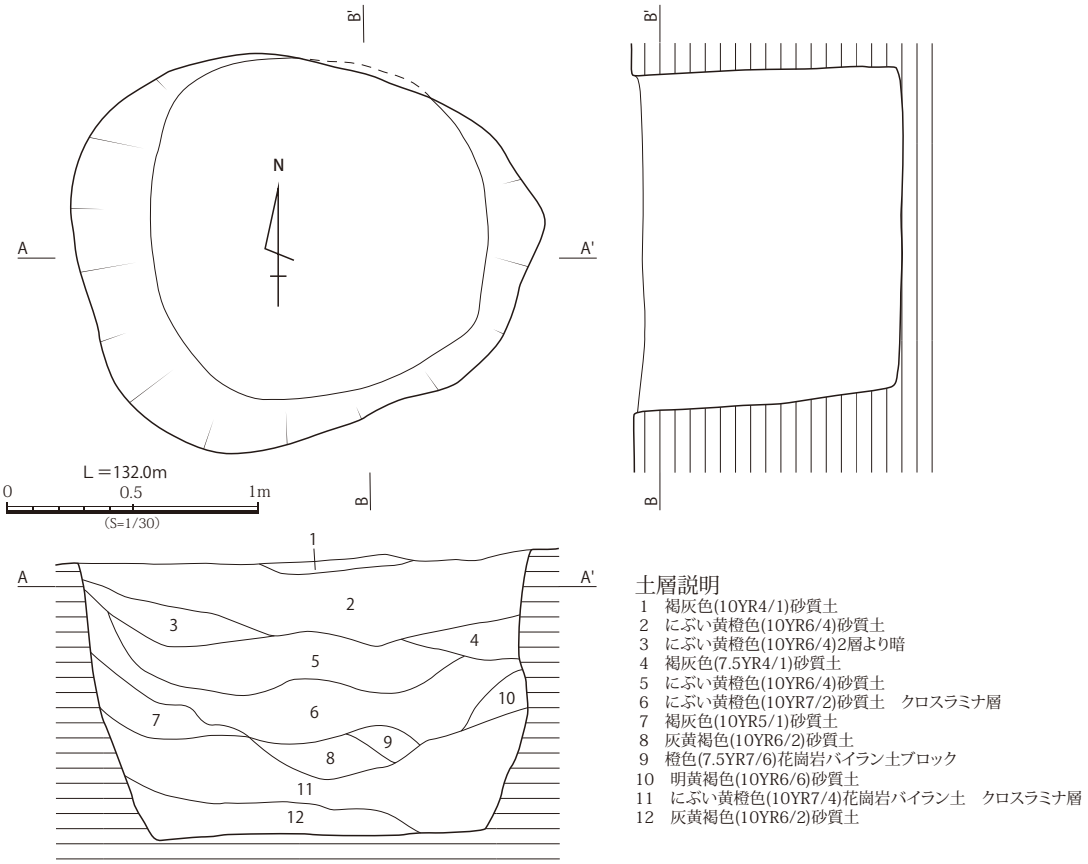
本遺構からは土器（70・71）及び台石（107）が，また，埋土中からは土器（72 ～ 76）が出土している。本遺構の時期は出土土器の形態からⅡ－ 1 期に属するものと考えられる。

ここで，それぞれの遺構の先後関係についてみると，土層観察及び切り合いから SX4 → SX5 の順に造られたものと考えられる。

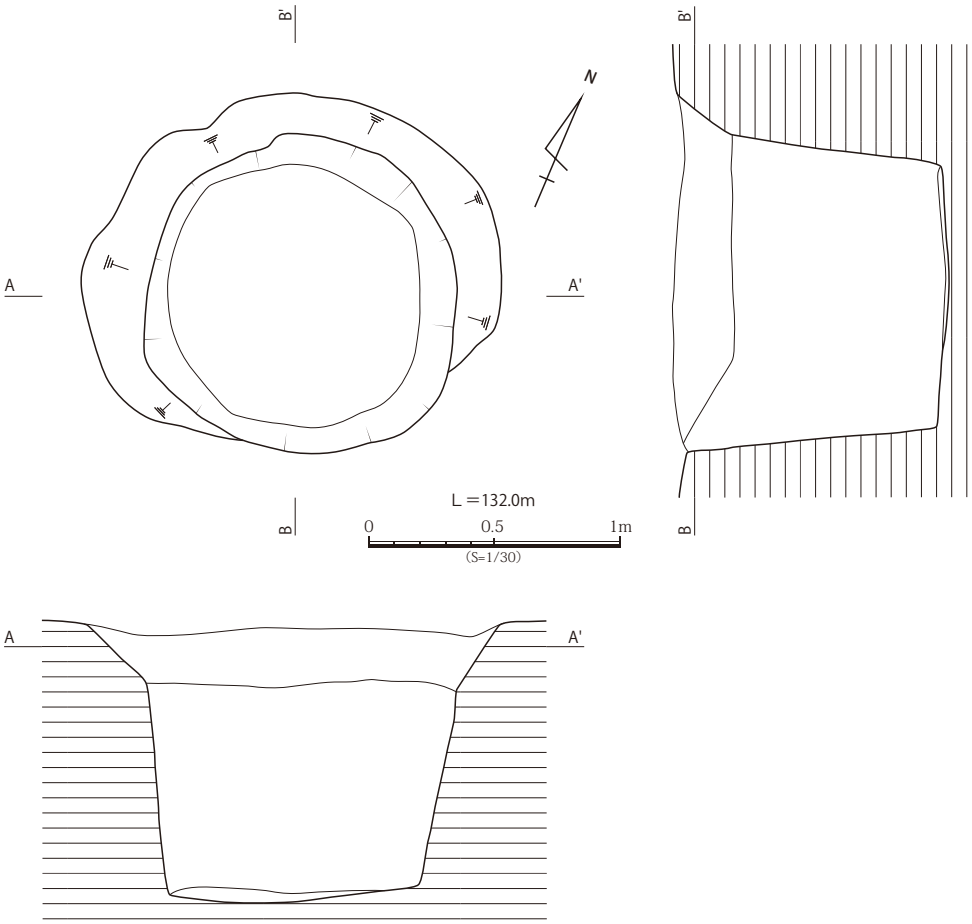
○ SK1（第 140 図）

SK1 は SH10 の北約 9 mに位置する土坑である。平面形状は楕円形で，底面の規模は直径約 134cm の円形で，底面標高は約 131.0m である。掘り方の深さは最大 113cm であるが，本土坑の上面は削平されているため，さらに深かったものと考えられる。本土坑は，その規模・形状から貯蔵穴と考えられる。

本土坑の埋土中からは弥生土器片が出土しているが，細片のため図示するに至らなかった。



第 140 図　柳遺跡 SK1 実測図（S=1/30）



第 141 図　柳遺跡 SK2 実測図（S=1/30）

○ SK2（第 141 図）

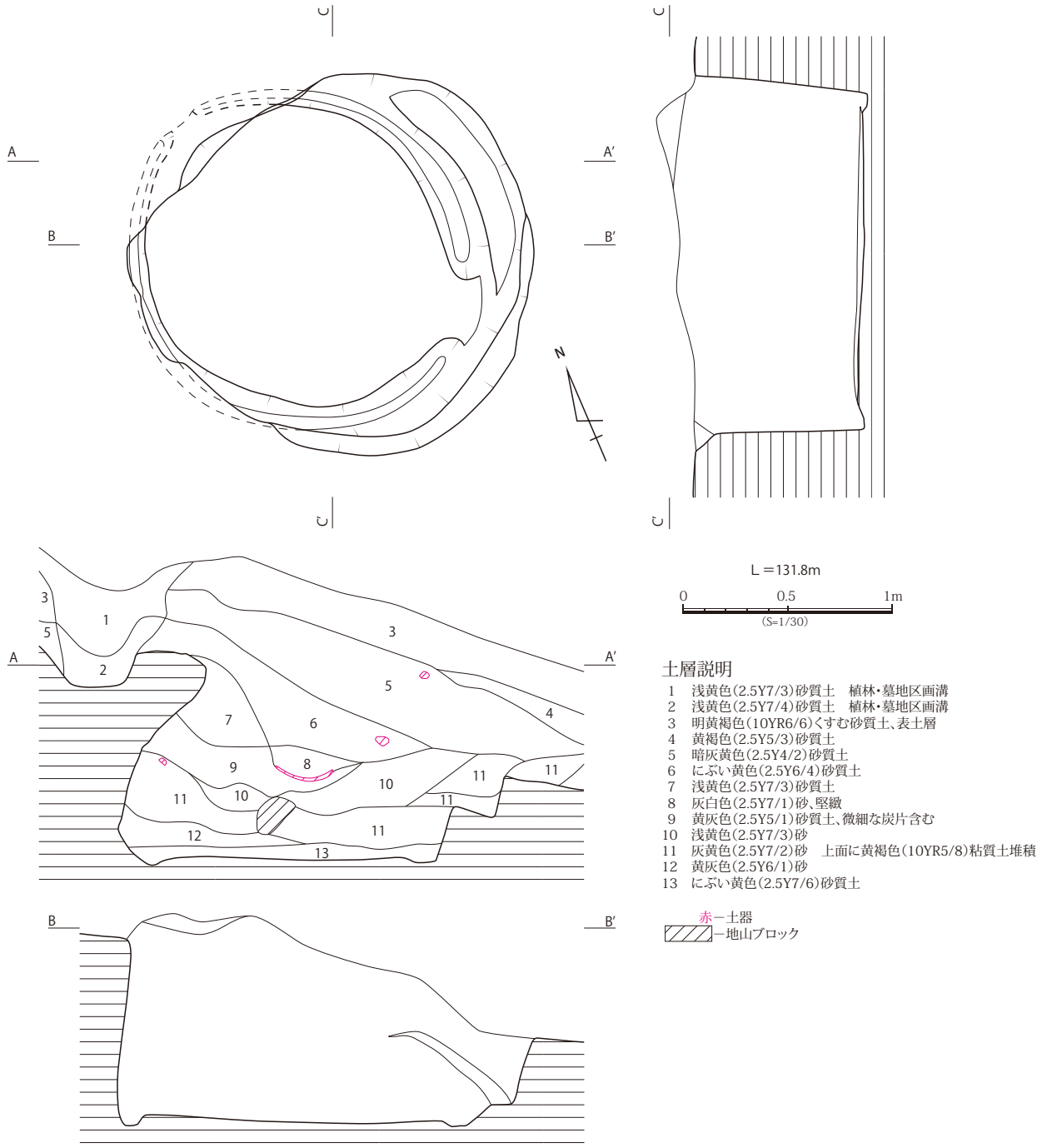
SK2 は SH11 の南約 0.8m に位置する土坑である。掘り方上面は攪乱を受けているが，残存部から想定できる平面形状は円形である。底面の規模は直径約 102cm の円形で，底面標高は約 131.0 mである。掘り方の深さは約 110cm であるが，本土坑の上面は削平されているため，さらに深かったものと考えられる。本土坑は，その規模・形状から貯蔵穴と考えられ，その位置から SH9 や SH12・13 に付随する施設と想定できる。

本土坑の埋土中からは台石（108）及び楔形鉄製品（135）が出土している。

○ SK3（第 142 図）

SK3 は SX4 の西約 2 mに位置する土坑である。掘り方の東側は斜面のため流失し，残存する西側は袋状を呈する。平面形状は歪な円形で，底面の規模は東西 137cm 南北 150cm の長円形で，底面標高は約 130.9 mである。底面の壁際にほぼ全周する形で溝を確認した。規模は幅 9 ～ 15cm，残存する深さは 3 ～ 5cm である。本土坑は，その規模・形状から貯蔵用と考えられる。

本土坑の埋土中からは弥生土器片や弥生土器甕の胴部破片が出土しているが，その形態や時期を確定できるものは無かった。



第 142 図　柳遺跡 SK3 実測図（S=1/30）

○ SK4・SK5（第 144 図）

SK4 は SX4 の南約 1.5m に位置する土坑である。平面形状は長方形で，底面の規模は長辺 137cm 短辺 115cm の長方形で，底面標高は約 128.2 mである。本土坑は，その規模・形状から貯蔵用と考えられる。

本土坑の底面直上の埋土（A － A′ 土層第 10 層）からは土器（81・82）が出土している。本遺構の廃棄時の下限は出土土器の形態からⅡ－ 1 期に属すると考えられる。

SK5 は SK4 の西に接して位置する土坑である。平面形状は楕円形で，西側は袋状を呈する。底

面の規模は長径 123cm 短径 100cm の長円形で，底面標高は約 129.2m である。本土坑は，その規模・形状から貯蔵穴と考えられる。

本遺構からは遺物は出土していない。

ここで，それぞれの遺構の先後関係についてみると，SK4 埋土中に SK5 の掘り方を確認したことから，SK4 → SK5 の順に造られたものと考えられる。

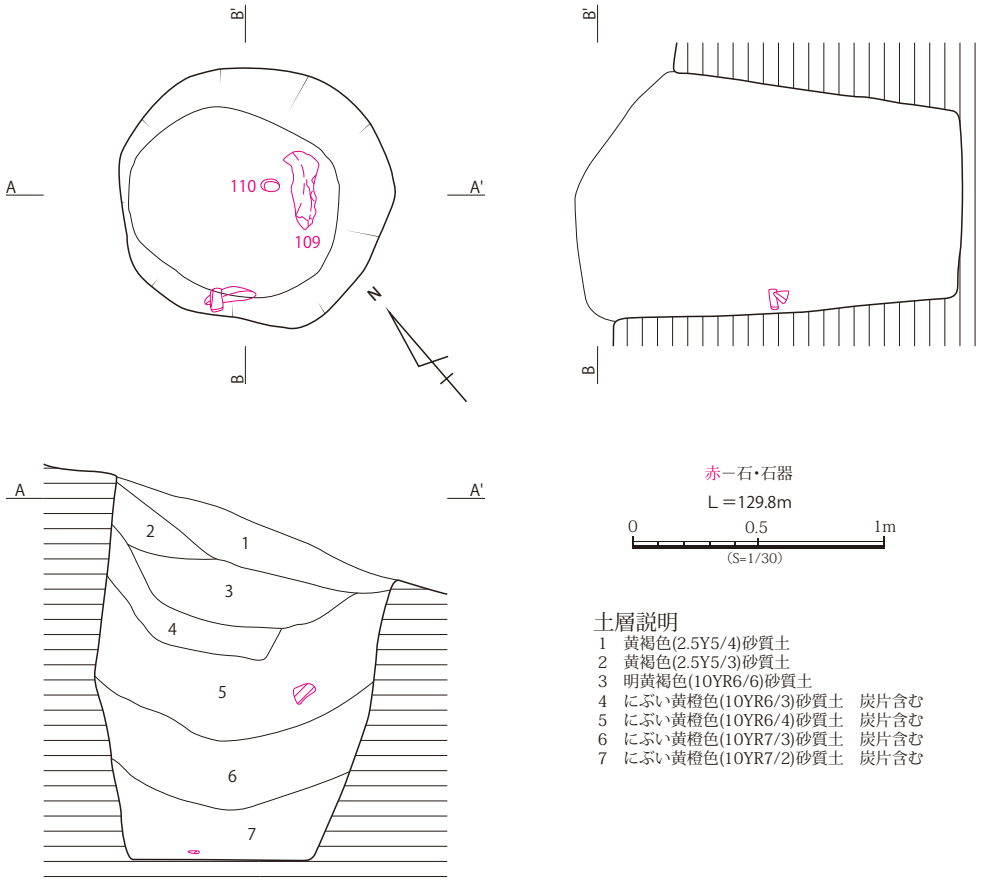
○ SK6（第 143 図）

SK6 は SK5 の南約 0.8 mに位置する土坑である。平面形状は円形で，底面の規模は長径 84cm 短径 70cm の円形で，底面標高は約 128.4m である。本土坑は，その規模・形状から貯蔵穴と考えられる。

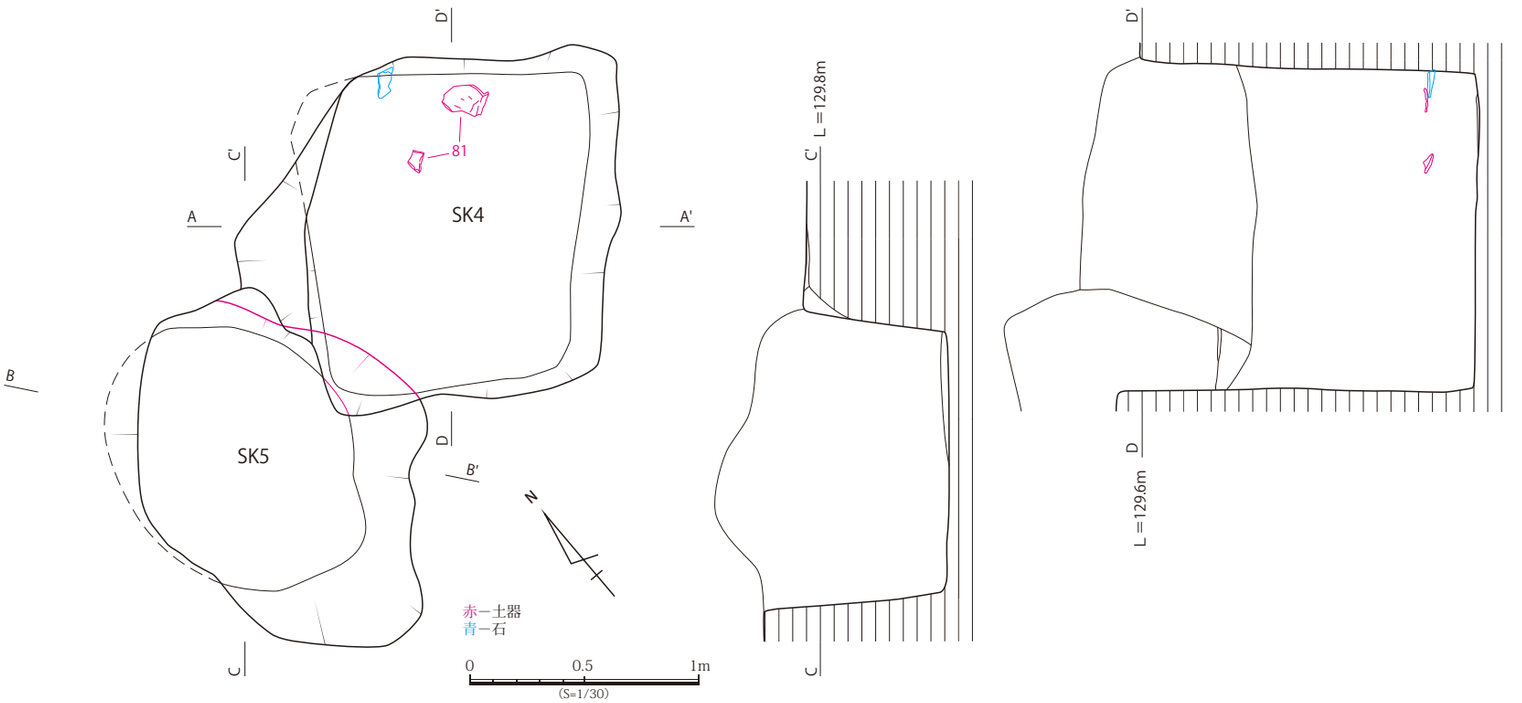
本遺構の埋土中からは石器（109・110）が出土している。

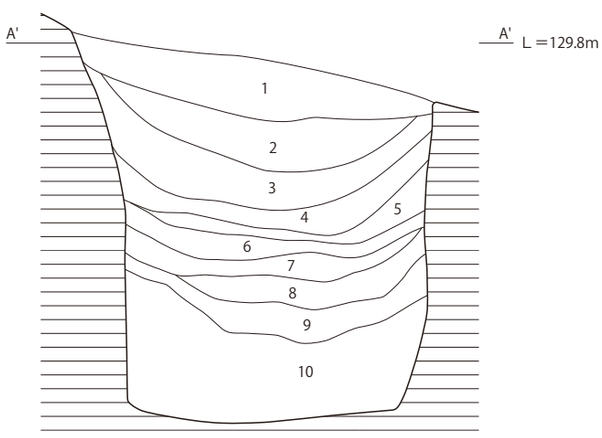
○ SK7（第 145 図）

SK7 は SH6 の北約 2 mに位置する土坑である。平面形状は歪な円形で，西側は袋状を呈する。底面の規模は長径 130cm 短径 119cm の楕円形，底面標高は約 130.0m である。本土坑は，その



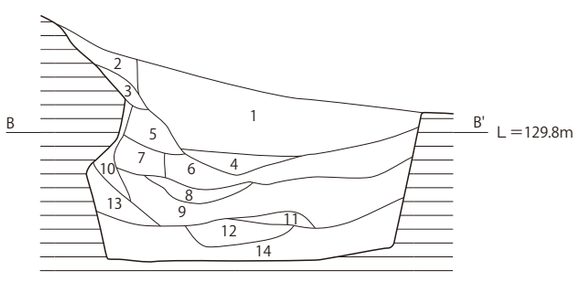
第 143 図　柳遺跡 SK6 実測図（S=1/30）





A－A'土層説明

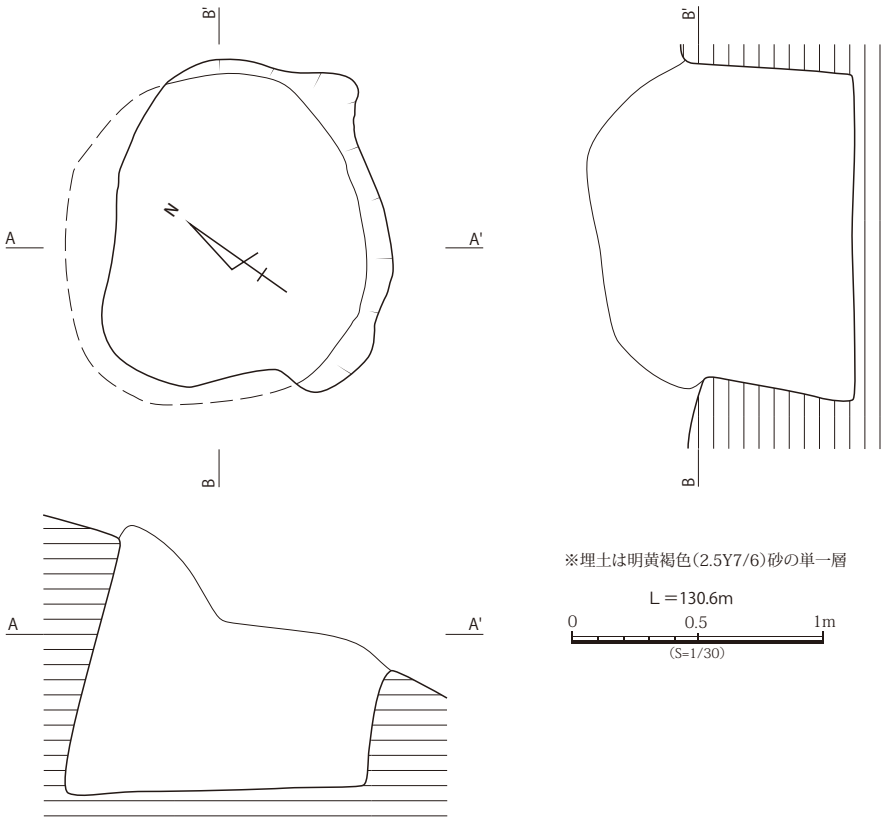
1　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
2　にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土
3　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土　1層より暗
4　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
5　にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土
6　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土　炭片含む
7　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
8　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
9　にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土
10　灰黄褐色(10YR6/2)砂質土



B－B'土層説明

1　褐色(10YR4/4)砂質土
2　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
3　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
4　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
5　黄褐色(10YR5/6)砂質土
6　にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
7　黄褐色(10YR5/6)砂質土　5層より明
8　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
9　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
10　にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
11　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
12　にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土
13　にぶい黄橙色(10YR6/3)砂質土
14　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土

第 144 図　柳遺跡 SK4・SK5 実測図（S=1/30）



第 145 図　柳遺跡 SK7 実測図（S=1/30）

規模・形状から貯蔵穴と考えられ，その位置から SH6 に付随する施設と想定できる。

本遺構の埋土からは磨石（111）が出土している。

○ SK8（第 146 図）

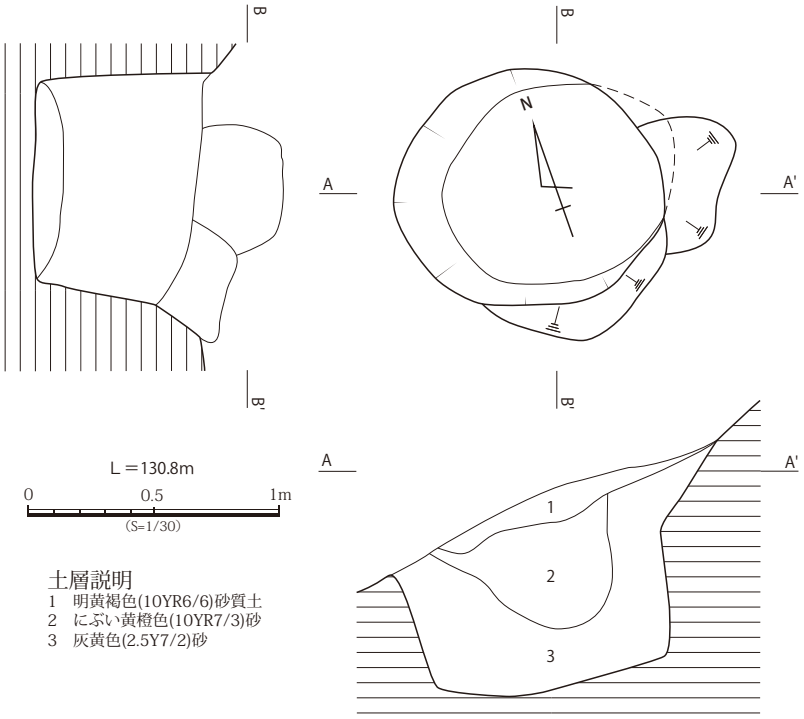
SK8 は SX1 の下層に位置する土坑である。平面形状は円形で，底面の規模は直径約 90cm の円形で，底面標高は約 129.9 mである。本土坑は，その規模・形状から貯蔵穴と考えられる。

本遺構からは遺物は出土していない。

○ SK9（第 147 図）

SK9 は SX1 の下層，SK8 の南約 1.2 mに位置する土坑である。平面形状は方形で，東側は袋状を呈する。底面の規模は直径約 90cm の円形で，底面標高は約 128.5m である。床面から約 50cm 上の北西側の壁面には，長さ 60cm 幅 15 ～ 30cm の平坦面が位置する。土坑の深さが 1.9m 近くあるため，足場としての性格を持っていたと考えられる。本土坑は，その規模・形状から貯蔵穴と考えられる。

本遺構の埋土中からは土器（83 ～ 85）が出土している。本遺構の廃棄時の下限は出土土器の形態からⅡ－２－①期に属すると考えられる。



第 146 図　柳遺跡 SK8 実測図（S=1/30）

○ SK10（第 148 図）

SK10 は SK9 の南約 0.4 mに位置する土坑である。土坑は 2 段階に掘り込まれており，上面の平面形状は長径 82cm 短径 66cm の長円形で，2 段目の掘り方は 1 辺 45cm の隅丸方形である。2 段目の掘り方に沿って長さ 34cm 幅約 7cm の三日月状の段を有する。底面形状は 1 辺 35cm の方形で，底面標高は約 129.8m である。本土坑の性格は不明である。

本遺構からは遺物は出土していない。

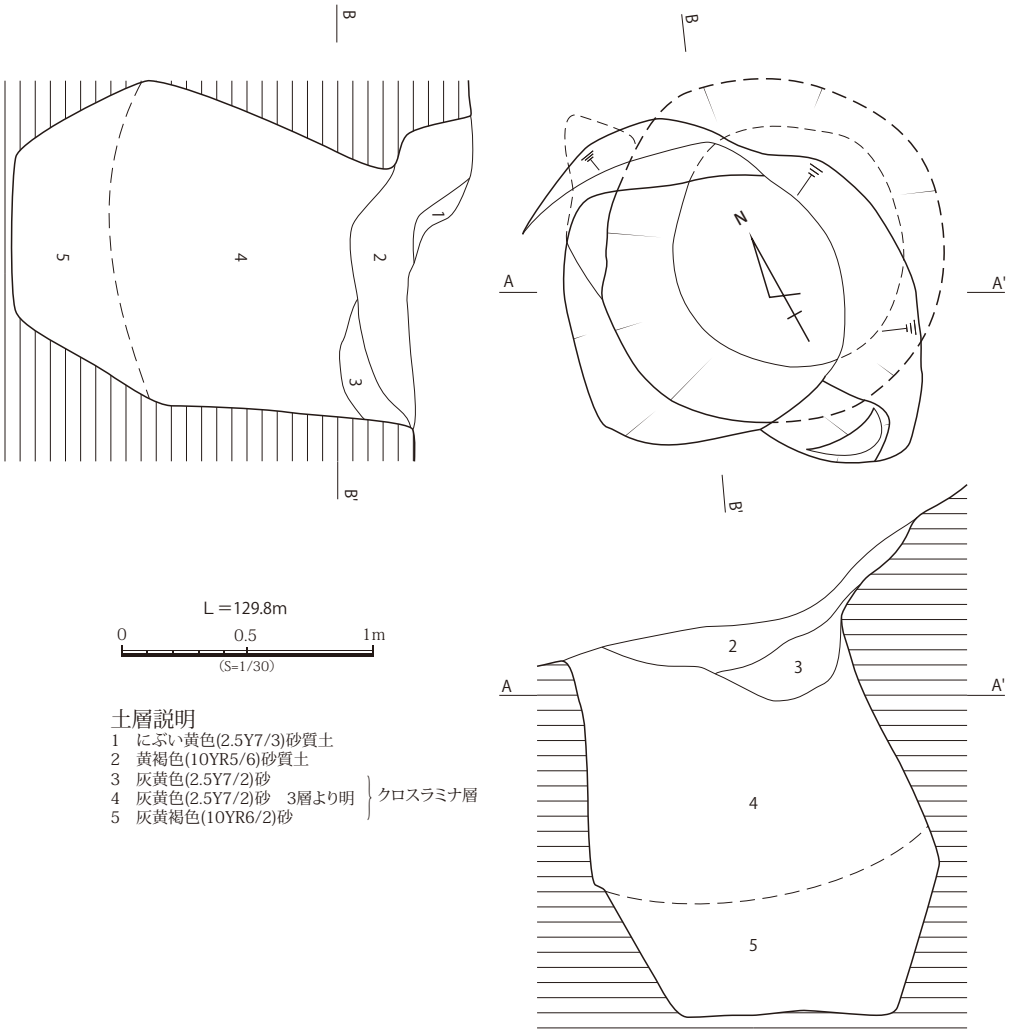
4．出土遺物

本遺跡の出土遺物としては，土器・石器・鉄器・土製品などがある。以下，各遺物について述べるが，個々の遺物の詳細については，後掲する観察表を参照されたい。

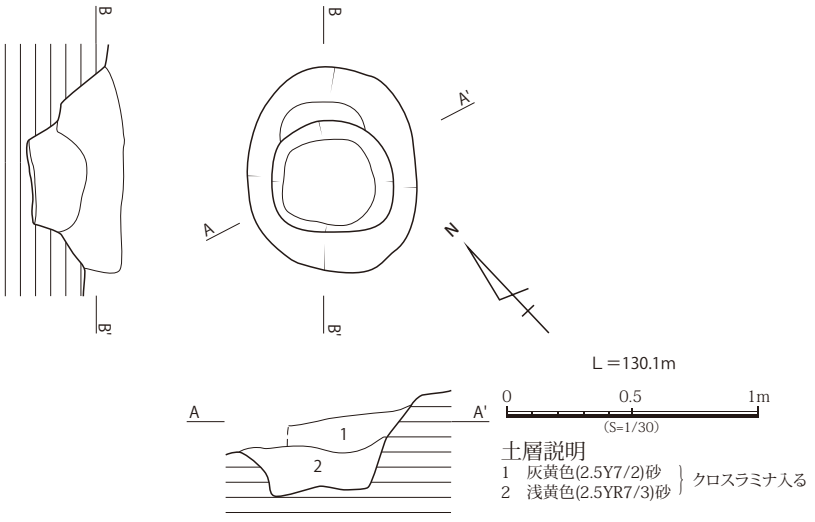
○弥生土器（第 149 ～ 154 図）

本遺跡から出土した弥生土器について，時期を追って特徴的なものについて概観してみたい。

甕形土器（32・33）・壺形土器（48・49）の口縁部は「く」の字状に強く外反し，端部の厚みは口縁部屈曲点周辺に比べ肥厚する。口縁部は屈曲点の下で厚みが大きくなり，内面は肩部付近でヘラ削りが行われるなど，口縁部の接合が屈曲点より下部で行われていることを示している。（32・33・48）は肩部に貝殻腹縁部よる刺突文が巡っている。甕形土器（13・60）は口縁端部を上方に拡張し平坦に仕上げ，3 条の凹線が施されている。肩部の外面には強い波状文が施されている。壺形土器（38）の口縁端部は頸部に比べ肥厚し，口縁端部は平坦である。接合は肩部付近で行われ



第 147 図　柳遺跡 SK9 実測図（S=1/30）



第 148 図　柳遺跡 SK10 実測図（S=1/30）

ており，接合部にかなりの粘土を使用していることが観察できる。これらの特徴を有するものは後期初頭のものと考えられる（若島編年のⅠ期[1]）。

甕形土器（34・45・61・71・81）の口縁部の接合は屈曲点近くで行われており，内面には接合の際に余った屈曲点直下の粘土をヘラ削りした痕跡が見られる。口縁部屈曲点から口縁端部に至る器厚はほとんど変化しないが，（45・61・71・81）は口縁端部付近を強くつまむことで肥厚するように見せている。肩部には貝殻腹縁部やヘラ状工具による刺突文が巡る。これらの特徴を有するものは後期前葉のものと考えられる（若島編年のⅡ－１期）。

甕形土器（47）は口縁部屈曲点から口縁端部に至る器厚は一定の厚みをもち，端部の下をごくわずかにつまむ。端部には緩い２条の凹線が部分的に巡り，屈曲点直下には櫛歯状工具による不定形な波状文が施されている。壺形土器（83）は口縁部屈曲点から口縁端部に至る器厚は一定の厚みをもち，短部は平坦である。肩部には貝殻腹縁部による刺突文が巡る。これらの特徴を有するものは後期中葉のものと考えられる（若島編年のⅡ－２－①期）。

甕形土器（36・41・44・56）は口縁部屈曲点から口縁端部に至る器厚はそれほど変化しない。口縁部の接合は屈曲点近くで行われており，口縁部が外上方へ直線的に延びる。内面には接合の際に余った屈曲点直下の粘土をヘラ削りした痕跡や，口縁部と胴部の境に接合部分を調整した際の平坦面が確認できる。胴部最大径は前時期より低くなり，2/3 より低い位置にもち，全体は丸みを帯びたプロポーションとなる。肩部には貝殻腹縁部やヘラ状工具による刺突文が巡る。鉢形土器（6・42・58）は口縁部屈曲点から口縁端部に至るまでに厚みが若干減じており，端部は僅かに平らにおさめている。胴部から底部にかけては緩やかなカーブを描き，底部は平底である。（58）の胴部には幅６～ 7mm の紐状の圧痕が残る。碗形土器（54）は口縁端部は丸く収め，胴部は緩やかな株を描き，底部は平底である。これらの特徴を有するものは後期中葉のものと考えられる（若島編年のⅡ－２－②期）。

甕形土器（7・40）は胴部最大径が前時期よりさらに下がった胴部中位付近に位置し，全体が丸みを帯びたプロポーションとなる。（7）は底部は平底であるが，外面の丸底化が進み底部はわずかなものとなる。（40）は肩部に貝殻腹縁部による刺突文が巡る。鉢形土器（55）は胴部は底部から胴部中位にかけて直線気味に立ち上がり，中位付近で丸みを帯びて内湾し最大径をもつ。これらの特徴を有するものは後期後葉のものと考えられる（若島編年のⅡ－２－③期）。

後期末葉（若島編年のⅡ－３期）になると土器の出土量は減少する。甕形土器（24）は口縁部が中位あたりから外に湾曲し，端部に向けて厚みが減る。内面の口縁部と体部の境目はヘラ削りにより鋭い稜をもつ。胴部最大径は中位付近になり，倒卵形の器形と考えられる。壺形土器（11）は口縁部が端部手前で外に湾曲し，端部の厚みは減る。頸部には櫛歯状工具による波状文が施されている。鉢形土器（76）は口縁部は一定の厚みをもち，端部は丸みを帯びる。底部は丸底である。高坏（4）は坏部の 1/3 付近に稜をもち，口縁部へかけて外湾し，端部は丸みを帯びる。（68）は器台の口縁端部と考えられ，類似のものが佐伯区倉重向山遺跡[2]で出土している。端部にはヘラ描きによる斜格子文が，内外面は丁寧な磨きが施されている。

続く古墳時代初頭（若島編年のⅢ－１期）には在地系の土器の出土は極端に少なくなる。高坏（80）

は坏部は前時期に比べ浅く低い位置に稜をもち，口縁部は大きく外湾し，端部は尖り気味に収める。

鉢形土器（31）は底部から内湾しながら胴部がのび，口縁端部は尖り気味に収められ，畿内系の土器と考えられる。甕形土器（23）は「く」の字状に外反する口縁をもち，口縁端部は内につまみあげ平たく収める。器厚は体部全体がほぼ均一で，前時期に比べ明らかに薄く仕上げられている。本土器の胎土は比較的精緻で，外面の肩部付近には沈線状の平行ハケ目を施している。いわゆる在地のものではなく，山陰で出土する「く字口縁甕」と思われる[3]。甕形土器（1 ～ 3・9・16・19）は「山陰系」土器である。口縁部は緩やかに外湾しながら立ち上がり，端部は丸く収めている。口縁径は 10 ～ 12cm とほぼ均一である。胴部の器厚は極めて薄く，破片は出土するものの接合できない状況のものが多い。壺形土器（75）の胴部最大径は肩部付近にあり，胴部は倒卵形を呈するものと考えられる。肩部には波長の緩い波状文が施される。内面の底部から 1/3 付近には指頭圧痕がみられる。壺形土器（20）の口縁部は外湾した後，わずかに内傾気味に上方向へ立ち上がり，短部は丸く収める。鼓形器台（30）の筒高は短く，器高は低い。口縁部は端部付近で外反する。これらの土器は大木権現山式土器[4]の特徴を示し，Ⅲ－ 1 期に併行するものと考えられる。

続く古墳時代前期（若島編年のⅢ－ 2 期）になると土器の出土量は前時期に比べ減少する。高坏（27）の脚部は中部から屈折し，残存部からは「ハ」の字状に開く。高坏（26）は坏部に稜は無く，内湾しながら立ち上がり口縁端部は外湾する。

甕形土器（10・59・73・74）は「山陰系」土器である。口縁端部は明瞭な平坦面が形成され，（59・73）の胴部は球形化が進んでいる。これらの土器は小谷式土器[5]の特徴を示し，古墳時代前期のものと考えられる（Ⅲ－ 2 期併行）。

なお，土器の時期をみると後期中葉（Ⅱ－ 2 －②期）・後期後葉（Ⅱ－ 2 －③期）・古墳時代初頭（Ⅲ－ 1 期）の出土量が多い。後期中葉（Ⅱ－ 2 －②期）・古墳時代初頭（Ⅲ－ 1 期）については検出遺構数も多く，これを表すものと考えられる。後期後葉（Ⅱ－ 2 －③期）の土器が比較的多く出土しているのは，墓地などにより削平された場所に住居跡などの遺構が存在していたことを表しているものと考えられる。また，比較的急な斜面である調査範囲外の西側斜面には，多数の土器片が露頭していた。これは削平された平坦面に遺構があり，削平の際に流出したものと想像できる。なお，弥生時代後期末葉（Ⅱ－ 3 期）までの出土土器は，広島湾岸域の赤味を帯びた厚手の土器のみであったが，古墳時代初頭（Ⅲ－ 1 期）を境に「山陰系」土器が出現し，以降殆どを占めることとなる[6]。

○石器（第 155 ～ 159 図）

本遺跡の遺構に伴うものとしては，台石・磨石・砥石・石錘などが出土している。また，遺構に伴わないものとしては，スクレイパーが出土している。以下，特徴的なものについて概観してみたい。

・台石

本遺跡の遺構からは多数の台石が出土している。（92）は長辺の両端に沿う形で強い使用面をもつ。（100）は 2 つに割れ出土した。使用面の片側には，被熱などにより赤変した面がある。（103）

は強い摩耗面が観察でき，砥石としても使用されたと考えられる。

・磨石（86・111）

SH3 から出土した（86）は扁平な棒状を呈しており，長辺の端部には使用痕跡が見られる。SK7 埋土から出土した（111）は扁平な長円形を呈しており，長円形の長径の両端部に使用痕跡が見られる。

・石錘 (105・110)

SX1 から出土した（105）はほぼ球形を呈しており，一か所のみ切り込みをいれ，紐などの固定面としている。SK6 から出土した（110）は扁平な長円形を呈しており，長円形の長径の両端部には紐などを固定した痕跡が残る。

・削器（101）

SH9 外の西斜面から出土したもので遺構に伴うものではない。基部側の 2/3 程は欠損している。横長部の縁部に調整を行い，刃部を作成している。

○鉄器（第 159・160 図）

・鉄鏃

本遺跡からは多数の鉄鏃が出土している。形状は柳葉式鉄鏃・三角鏃などがあり，柳葉式鉄鏃の茎部と考えられるものも出土している。SH1 から出土した（112）は無茎の三角鏃である。SH12 埋土から出土した（126）は方頭斧箭形式鏃である。頭部長と頭部幅はほぼ同じ長さで，全長は 7cm 以上の大型品で，川越哲志氏の分類の B3b 型に相当する[7]。（127）は無茎三角形式鏃で，刃部は全長の約 1/3 で明確な変換点をもつ。先端側はほぼ直線状に外反し，基部側はやや裾広がりに延び，基部は「V」字状に切れ込む。川越氏の分類の A1b 型に相当する。

・鉇

本遺跡からは多数の鉇が出土している。（116・123・128）は刃部に鏑をもち，刃部の断面形状は三角形である。（130）は鏑をもたない刃部である。(120・124) は鉇の茎部と考えられる。

・鉄斧（115）

SH3 から出土したもので，袋状鉄斧の袋状部の片側のみが残存したものと考えられる。推定できる復元袋部幅は 2cm 程度で，ミニチュア製品と考えられる。

・鋤（鍬）先（122）

SH9 から出土したもので，残存する長さは最大 1.8cm，折り返しの幅は 2.9cm，厚みは最大 0.2cm で，ミニチュア製品の鋤（鍬）先の折り返し部が残存したものと考えられる。

・楔形鉄製品（129・134・135）

本遺跡からは長三角形状の楔形の鉄製品が出土している。いずれも断面は長方形で，基部は打圧変形を受けている。

4. 小結

集落の変遷及び構成について

柳遺跡では竪穴住居跡 13 軒，掘立柱建物跡 1 軒，テラス状遺構 6 か所，土坑 10 基を確認した。このうち竪穴住居跡は，建て替えや重複するものを含めると少なくとも 18 軒以上になる。これらの遺構は，出土遺物の特徴から，弥生時代後期初頭から古墳時代前期にわたり営まれていると想定できる。これらの遺構を出土遺物や土層観察・重複関係から想定できる時期別に分類してみたい。

・後期初頭（Ⅰ期[8]） SH6
・後期前葉（Ⅱ－ 1 期） SX5・SK4
・後期中葉（Ⅱ－ 2 －①期） SK9
・後期中葉（Ⅱ－ 2 －②期） SH3・SH11・SX2・SX6
・後期後葉（Ⅱ－ 2 －③期） SX1・SX3
・後期末葉（Ⅱ－ 3 期）SH4
・古墳時代初頭（Ⅲ－ 1 期）SH1・SH9・SH13・SX6
・古墳時代前期（Ⅲ－ 2 期）SH12

その他の遺構については明確な時期決定はできなかった。ただし，SH2 は SH3 に先行するため，後期中葉（Ⅱ－ 2 －②期）以前に，SH10b・SH10a・SH8 は SH9 に先行するため古墳時代初頭（Ⅲ－ 1 期）以前に，SH10c は SH9 より新しいため古墳時代初頭（Ⅲ－ 1 期）以降に，SB1 は SH6 に先行するため後期初頭（Ⅰ期）以前に，SX4 は SX5 に先行するため後期前葉（Ⅱ－ 1 期）以前に，SK5 は SK4 より新しいため後期前葉（Ⅱ－ 1 期）以降に，SK8 は SX1 に先行するため後期後葉（Ⅱ－ 2 －③期）以前のものとなる。これらの先後関係を加味すると，下記のとおりとなる。

Ⅰ期	Ⅱ－ 1	Ⅱ－ 2 －①	Ⅱ－ 2 －②	Ⅱ－ 2 －③	Ⅱ－ 3	Ⅲ－ 1	Ⅲ－ 2
SH6	SX5		SH3		SH4	SH1	SH12
			SH11			SH9	
			SX6			SH13	
						SX6	
・・・SB1	・・・SX4	・・・SK9	・・・SH2	・・・SX1	・・・	SH8	
	・・・SK4		・・・SX2	・・・SX3	・・・	SH10b・a	
	SK5・・・			・・・SK8		SH10c	・・・

本遺跡中最も広い平坦面である尾根鞍部のほとんどは後世に削平されているが，該当時期のテラス状遺構や土坑などの遺構が存在することから，削平部にそれぞれの時期の住居跡が存在したと考えるのが妥当である。また，調査区外北側にも遺構が存在すると思われる。以上のことと，時期が明確でない住居跡の存在を考慮すると，本集落は弥生時代後期初頭から，同時期に 1 ～ 2 軒程度の住居が安定的に営まれていたものが，弥生時代終末から古墳時代初期のどこかの時点で大規模なものになり，古墳時代前期に廃棄されるに至ったものと考えられる。

注

1）若島一則「広島湾沿岸における弥生時代後期土器等に関する一考察」『研究連絡誌Ⅰ』財団法人広島市文化財団　2002年
　以下，後期土器編年は若島編年による。
2）財団法人広島市歴史科学教育事業団『倉重向山遺跡発掘調査報告』 1991年
3）中川寧「山陰地域－出雲－」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター　2006年
4）『日本土器事典』 雄山閣　1996年
5）4に同じ。
6）SH12においてⅡ－3期の特徴をもつ土器（24）とⅢ－1期の特徴をもつ土器（23・26）が遺構について出土しているが，墓地などで攪乱が激しいため，後時期のⅢ－1期を遺構の時期とした。このため，土器（24）がⅢ－1期に入る可能性もある。
7）川越哲志 『弥生時代の鉄器文化』 雄山閣　1993年
8）1に同じ。

第８表　柳遺跡出土土器観察表

（[　]：復元値）

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
1	甕形土器	SH1	口径　[16.3]	口縁部は短く外に湾曲し，一段稜を成して上方に立ちあがる複合口縁。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り 外面頸部直下に櫛歯状工具による波状文巡る。	胎土：～ 1mm の砂粒及び金雲母含む，精緻 焼成：やや軟 色調：灰白色 (2.5Y8/2) 外面にスス付着。
2	甕形土器	SH1 炉内	口径　[16.0]	口縁部は短く外に湾曲し，一段稜を成して上方に立ちあがる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 1mm の砂粒及び金雲母含む，精緻 焼成：やや軟 色調：灰白色 (5Y7/1) 外面にスス付着。
3	甕形土器	SH1	－	口縁部は短く外に湾曲し，一段稜を成して外反気味に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 1mm の砂粒及び金雲母含む，精緻 焼成：やや軟 色調：灰白色 (2.5Y8/1) 外面にスス付着。
4	高坏	SH1	口径　25.7	口縁部は外湾しながら外上方に延び，端部は丸く収める。	外面：口縁部ヨコナデ，脚接合付近はハケ目	胎土：1 ～ 3mm の石英・長石多く含む 焼成：良好 色調：橙色 (5Y6/8) 口縁端部にスス付着。
5	甕形土器	SH3	－	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ナデ，以下ヘラ削り	胎土：1 ～ 3mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色 (10YR7/3) 外面胴部下半にスス付着。
6	甕形土器	SH3 埋土	口径　15.3 胴部最大径 13.7 器高　14.8 底径　4.0	口縁部は外湾気味に外上方に延び，端部はやや平らに収める。底部は平底である。	外面：口縁部ヨコナデ，以下胴部中位までハケ目，胴部下半ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：1 ～ 6mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：明黄褐色 (10YR7/6)
7	甕形土器	SH3 埋土	口径　13.5 胴部最大径 13.1 器高　15.0	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は面をもつ。胴部は倒卵形を呈し，底部は丸底だがわずかに面が残る。	外面:口縁部ヨコナデ，以下ナデ。 内面：口縁部ナデ及び部分的に磨く，以下ヘラ削り 口縁端部に一条の沈線が巡る。	胎土：2 ～ 6mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：明黄褐色 (2.5Y6/6)
8	鉢形土器	SH3 埋土	口径　13.5	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たく収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，以下ヘラ削り	胎土：2 ～ 4mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調:にぶい橙色(7.5YR6/4)
9	甕形土器	SH3 埋土	口径　[18.0]	口縁部は短く外に湾曲し，一段鈍い稜を成して上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 1mm の石英・長石，金雲母含む 焼成：良好 色調：灰白色 (2.5Y8/2)

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
10	甕形土器	SH3 埋土	－	口縁部は短く外に湾曲し，一段鋭く稜を成して外反気味に立ち上がる複合口縁。口縁端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ	胎土：0.2mm ほどの黒い砂粒・金雲母多く含む 、極精緻 焼成：良好 色調：黄橙色 (10YR 8/6)
11	壺形土器	SH4 P3 内	口径 [12.4]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ナデ，頸部ヘラ削り後ナデ，以下ヘラ削り 外面頸部直下に櫛歯状工具によるきつい波状文巡る。	胎土：1 ～ 4mm の石英・長石含む，金雲母多く含む 焼成：良好 色調：橙色 (7.5YR6/8)
12	甕形土器	SH4 埋土	－	口縁部は外上方に外湾しながら延び，端部は下方にやや肥厚し，平らに収める。	外面 : 口縁部ヨコナデ，以下ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ	胎土：1 ～ 7mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：明赤褐色 (5YR5/6) 外面にスス付着。
13	甕形土器	SH6 P3 内	－	口縁部は「く」の字状に外湾し，端部は上方に拡張する。	外面：ヨコナデ，肩部以下ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ，頸部タテナデ，以下ヘラ削り 口縁端部には 3 ～ 4 条の凹線がめぐる。外面頸部には櫛歯状工具によるきつい波状文が巡る。	胎土：1 ～ 3mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR 6/8) 外面にスス付着。
14	甕形土器	SH6	底径 5.8	底部平底。	外面：ハケ目 内面：ヘラ削り	胎土：1 ～ 3mm の砂粒含む 焼成：普通 色調：橙色 (5YR 6/8) 外面にスス付着。
15	鉢形土器 （ミニチュア）	SH6 ベッド内	口径 5.2 底径 1.7	口縁部は底部から外方向に直線的に延びる。底部は窪み底。	手づくね土器	胎土：2 ～ 4mm の石英・長石含む 焼成：軟 色調：橙色 (5YR6/8)
16	甕形土器	SH6 埋土	口径 [15.6]	口縁部は短く外に湾曲し，一段鋭く稜を成して器厚を減じながら外反気味に立ち上がる複合口縁。口縁端部は内につまみ丸く収める。	外面 : 口縁部ヨコナデ，以下ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ヘラ削り後ナデ，以下ヘラ削り 外面肩部に櫛歯状工具による 7 条の波状文巡る。	胎土：1 ～ 3mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：浅黄色 (2.5Y8/4) 外面にスス付着。
17	甕形土器	SH6 埋土	－	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ヘラ削り後ナデ，以下ヘラ削り 外面頸部直下に平行線及び緩い波状文巡る。	胎土：～ 2mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：浅黄色 (2.5Y7/4) 外面にスス付着。
18	鉢形土器 （ミニチュア）	SH6 埋土	口径 4.5 底径 1.7	平底の底部から内湾気味に立ち上がり端部は丸く収める。	手づくね土器	胎土：1 ～ 2mm の砂粒含む 焼成：軟 色調：浅黄色 (2.5Y8/4)

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
19	甕形土器	SH9	－	口縁部は短く外に湾曲し，一段稜を成して外反気味に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 1mm の砂粒含む，精緻 焼成：良好 色調：黄灰色 (2.5Y4/1)
20	壷形土器	SH9 埋土	－	口縁部は外湾し，上方に立ち上がる。口縁端部は丸く収める。	外面：ヨコナデ 内面：口縁～頸部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 1mm の砂粒含む 焼成：やや軟 色調：黄灰色 (2.5Y6/1)
21	壷形土器	SH10	口径 [12.8]	口縁部は短く外湾し，上方に立ち上がる。口縁端部は丸く収める。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 1mm の砂粒含む 焼成：やや軟 色調：淡黄色 (2.5Y8/3)
22	鉢形土器	SH11	口径 7.9 底径 4.6	平底の底部から外上方に直線的に体部が延び，端部は平たく収める。	手づくね土器 内面：口縁部ナデ，以下ヘラ削り 口縁端部下に爪形文巡る。	胎土：1 ～ 3mm の石英・長石含む 焼成：普通 色調：明赤褐色 (5YR5/6) 内面にスス付着。
23	甕形土器	SH12	口径 15.3 胴部最大径 [18.8]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は内にわずかにつまみ平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，肩部上平行ハケ目，以下ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：１mm 程の砂粒多く含む 焼成：軟 色調：黄橙色 (10YR8/6) 外面胴部下半にスス付着。
24	甕形土器	SH12	－	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：1 ～ 3mm の石英・長石含む 焼成：普通 色調：明赤褐色 (2.5YR5/8) 外面にスス付着。
25	鉢形土器	SH12	底径 4.0	わずかな凹底の底部から体部が外上方に延びる。	外面：ナデ及びハケ目 内面：ナデ？	胎土：～ 2mm の砂粒含む 焼成：普通 色調：橙色 (2 .5YR6/8)
26	低脚坏	SH12 P 内	口径 [25.7]	体部は内湾気味に立ち上がり，口縁付近は器厚を減じながら外湾する。端部は丸く収める。	外面：ナデ，体部中位は棒磨き 内面：ナデ	胎土：1mm 程の石英・長石多く含む 焼成：軟 色調：浅黄色 (2.5Y8/4)
27	高坏	SH12 埋土	－	「ハ」の字状に広がる高杯の脚部。	荒れ著しく不明	胎土：～ 1mm の砂粒含む，精緻 焼成：やや軟 色調：橙色 (5YR7/8)
28	低脚坏	SH12 埋土	底径 [7.0]	脚部は「ハ」の字状に大きく広がる。	荒れ著しく不明	胎土：1 ～ 3mm の石英・長石含む 焼成：軟 色調：浅黄色 (2.5Y8/3)
29	低脚坏	SH12 埋土	底径 7.5	脚部は「ハ」の字状に大きく広がり，端部は丸く収める。	荒れ著しく不明	胎土：1mm 程の石英・長石多く含む 焼成：軟 色調：浅黄色 (2.5Y8/4)

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
30	鼓形器台	SH12 埋土	口径 [16.7] 筒部径 [6.9] 底径 [14.1]	受け部は逆「ハ」の字状に大きく開き，端部は丸く収める。脚部は「ハ」の字状に大きく開き，端部は丸く収める。	外面：ヨコナデ 内面：受け部はナデ，脚部ヘラ削り，脚端部ナデ	胎土：1 ～ 2mm の石英・長石含む 焼成：やや軟 色調：明黄褐色 (10YR7/6)
31	碗形土器	SH13	口径 [14.2] 器高 5.5	底部から内湾気味に胴部がのび，口縁端部は尖り気味に収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り後ナデ	胎土：～ 1mm の石英・長石含む，精緻 焼成：やや軟 色調：淡黄色 (2.5Y8/4)
32	甕形土器	SX1	口径 21.1	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ハケ目 内面：口縁部ナデ，頸部ハケ目後ナデ，以下ヘラ削り 外面肩部に貝殻腹縁部による刺突文が 2 条巡る。	胎土：～ 1mm の石英・長石，金雲母含む 焼成：良好 色調：明黄褐色 (10YR6/6) 外面にスス付着。
33	甕形土器	SX1	口径 21.5	口縁部は「く」の字上に外湾し，端部は平たく収める。	外面：口縁端部ヨコナデ，口縁部ヨコナデ一部ハケ押さえ，以下ヘラナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部直下ヘラ削り後ナデ，以下ヘラ削り 肩部に貝殻腹縁部による刺突文巡る。	胎土：1 ～ 3mm の石英・長石含む，金雲母含む 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色 (10YR7/4) 外面にスス付着。
34	甕形土器	SX1	口径 17.3	口縁部は「く」の字上に外湾し，端部は上方に肥厚し平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り後ハケ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り 肩部にヘラ状工具による刺突文巡る。	胎土：1 ～ 3mm の石英・長石含む，金雲母多く含む 焼成：良好 色調：明黄褐色 (10YR6/6) 外面にスス付着。
35	甕形土器	SX1	—	口縁部は短く外湾し，端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部指頭圧痕，以下ヘラ削り 肩部に貝殻腹縁部による刺突文巡る。	胎土：1 ～ 2mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/8) 外面にスス付着。
36	甕形土器	SX1	—	口縁部は「く」の字上に外湾し，端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部タテナデ，以下ヘラ削り 肩部にヘラ状工具による刺突文巡る。	胎土：～ 0.5mm の砂粒含む，精緻 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色 (10YR6/4) 外面にスス付着。
37	甕形土器	SX1	—	口縁部は「く」の字上に外湾し，端部は平たく収める。	外面：ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り 頸部にヘラ状工具による刺突文巡る。	胎土：1 ～ 2mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：黄橙色 (7.5YR7/8) 外面にスス付着。

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
38	壷形土器	SX1	口径 [8.9] 頸部 [8.2] 胴部最大径 [13.2]	口縁部は緩やかに外湾し，端部はわずかに肥厚し，平たく収める。	外面：口縁～頸部ヨコナデ，以下ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ，頸部タテナデ，以下ヘラ削り	胎土：1 ～ 2mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：明赤褐色 (2.5YR5/8)
39	土器底部	SX1	底径 5.3	胴部は内湾気味に立ちあがる。底部は平底。	外面：胴部ハケ目，底部ナデ 内面：ヘラ削り	胎土：1 ～ 2mm の砂粒少し含む 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色 (10YR6/4) 外面にスス付着。
40	甕形土器	SX1 埋土	口径 10.0 胴部最大径 13.6	口縁部は「く」の字上に外湾し，端部は肥厚し平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下胴部 1/2 までナデ，以下棒磨き 肩部に貝殻腹縁部による刺突文巡る。	胎土：2 ～ 5mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：明黄褐色 (10YR7/6) 外面にスス付着。
41	甕形土器	SX1 埋土	口径 [12.8]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部はやや平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部ヘラ削り後ナデ，以下ヘラ削り 頸部にヘラ状工具による刺突文巡る。刺突文下にヘラ状工具による平行線施す。胴部に指なでによる凹み有り。	胎土：1 ～ 2mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：明赤褐色 (5YR5/6) 外面にスス付着。
42	鉢形土器	SX1 埋土	口径 [14.4] 底径 [7.6]	口縁部は短く外湾し，端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ハケ目 内面：ナデ	胎土：1 ～ 2mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：褐灰色 (10YR4/1) 外面にスス付着。
43	鉢形土器	SX1 埋土	底径 8.1	底部は凹み底。	外面：ナデ 内面：不明	胎土：～ 2mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：橙色 (7.5YR7/6) 外面にスス付着。
44	甕形土器	SX2	口径 18.1 胴部最大径 22.1	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下荒れ著しく不明 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り 肩部に貝殻腹縁部による刺突文巡る。	胎土：～ 2mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：にぶい浅黄色 (2.5Y7/3) 外面にスス・吹きこぼれ付着。
45	甕形土器	SX2	口径 18.8 胴部最大径 19.0	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は上下に肥厚しつつ平たく収める。	外面：口縁部～肩部ヨコナデ，以下剥離著しく不明 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り 頸部にヘラ状工具による刺突文巡る。	胎土：～ 1mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色 (10YR6/4) 外面にスス付着。

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
46	甕形土器	SX2	口径 [19.9]	口縁部は「く」の字状に外湾し，端部は上下に拡張する。	外面：磨耗著しく不明 内面：口縁部ナデ，以下ヘラ削り 口縁端部に 4 条の凹線，肩部に貝殻腹縁部による刺突文巡る。	胎土：1 ～ 2mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：黄橙色 (7.5YR7/8)
47	甕形土器	SX3	口径 20.6 底径 6.1	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たく収める。	外面：口縁部ハケ目後ナデ，肩部ナデ，以下ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り 口縁端部には緩い 2 条の凹線が部分的に巡る。肩部に櫛歯状工具による波状文施す。	胎土：～ 2mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：にぶい橙色 (7.5YR6/4) 外面にスス付着。
48	壺形土器	SX3	口径 [12.8]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ナデ，頸部タテナデ，以下ヘラ削り 頸部に貝殻腹縁部による刺突文巡る。	胎土：1 ～ 2mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：明赤褐色 (2.5YR5/8) 外面にスス付着。
49	壺形土器	SX3	口径 [12.5]	口縁部は「く」の字状に外湾し，端部は上方に拡張する。	外面：口縁～頸部ヨコナデ，以下ハケ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部タテナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 2mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：明赤褐色 (5YR5/6) 外面にスス付着。
50	甕形土器	SX3	口径 16.6	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ一部ハケ目，以下ハケ目 内面：口縁部ナデ，以下ヘラ削り	胎土：2 ～ 3mm の石英・長石含む，比較的精緻 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/8) 外面にスス付着。
51	甕形土器	SX3	－	口縁部は「く」の字上に外湾し，端部は平たく収める。	外面：口縁部～肩部ヨコナデ，以下ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：1 ～ 3mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/8) 外面にスス付着。
52	壺形土器	SX3	口径 [13.0] 頸部 [10.2]	口縁部は緩やかに外湾し，端部は丸みを帯びつつも平たく収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：3 ～ 5mm の石英・長石多く含む 焼成：やや軟 色調：橙色 (5YR6/8)
53	鉢形土器	SX3	口径 15.8 胴部最大径 [15.2]	口縁部は外上方に直線的に立ち上がり，端部は平たく収める。胴部の張りは弱い。	外面：荒れ著しく不明 内面：口縁部ナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 2mm の石英・長石含む，比較的精緻 焼成：やや軟 色調：橙色 (5YR6/8) 外面にスス付着。
54	碗形土器	SX3	口径 [9.6] 器高 9.7 底径 [3.2]	凹み底の底部から斜め上方に内湾気味に立ち上がり，端部はやや尖り気味に丸く収める。	外面：ナデ 内面：口縁端部ナデ，以下胴部中位までヘラ削り後ナデ，以下ヘラ削り	胎土：1 ～ 3mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/8)

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
55	鉢形土器	SX3	－	口縁部は外湾気味に外上方に延び，端部は平らに収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ナデ，以下ヘラ削り	胎土：2 ～ 5mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：にぶい橙色 (5YR6/8)
56	甕形土器	SX3 埋土	口径　[18.0] 胴部最大径 [21.9]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平たく収める。	外面：口縁部～胴部中位までヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ナデ，以下ヘラ削り 外面肩部にヘラ状工具による刺突文巡る。	胎土：2 ～ 7mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：橙色 (7.5YR6/8) 外面にスス付着。
57	甕形土器	SX3 埋土	口径　16.2	口縁部は「く」の字状に外湾し，端部は上下に拡張する。	外面：口縁部ナデ，以下ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り 口縁端部に 3 条の凹線を施す。頸部下に貝殻腹縁部による刺突文巡る。	胎土：2 ～ 3mm の石英・長石少し含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/8) 外面にスス付着。
58	鉢形土器	SX3 埋土	口径　14.9 底径　5.5 器高　12.8	平底の底部から斜め上方に内湾気味に立ち上がり，口縁付近で外湾する。端部は丸く収める。	外面：ナデ，底部接合部に指頭圧痕 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り後ナデ	胎土：1 ～ 2mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：橙色 (2.5YR6/8) 外面に紐状の圧痕有。外面にスス付着。
59	甕形土器	SX3 埋土	口径　[15.3]	口縁部は短く外に湾曲し，一段稜を成して外反気味に立ち上がる複合口縁。口縁端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り 肩部にハケによる波状文及び平行線施す。	胎土：～ 1mm の砂粒含む，金雲母含む 焼成：良好 色調：淡黄色 (2.5Y8/4) 外面にスス付着。
60	甕形土器	SX3 埋土	－	口縁部は「く」の字状に外湾し，端部は上方に拡張する。	外面：口縁部ナデ，以下ハケ目 内面：口縁部ナデ，以下ヘラ削り 口縁端部に 3 条の凹線，肩部に櫛歯状工具によるきつい波状文巡る。	胎土：1 ～ 3mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：浅黄色 (2.5Y7/4) 外面にスス付着。
61	甕形土器	SX3 埋土	－	口縁部は「く」の字状に外湾し，端部は上下に拡張する。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ナデ，以下ヘラ削り 肩部にヘラ状工具による刺突文巡る。	胎土：～ 3mm の石英・長石含む 焼成：やや軟 色調：にぶい黄橙色 (10YR7/4) 外面にスス付着。
62	甕形土器	SX3 埋土	－	口縁部は外湾気味に立ち上がり，端部付近で外方向に屈曲する。端部は平たく収める。	外面：口縁端部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ナデ，以下ヘラ削り	胎土：2 ～ 6mm の石英・長石多く含む 焼成：普通 色調：明黄褐色 (10YR6/6) 外面にスス付着。

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
63	甕形土器	SX3 埋土	－	口縁部は「く」の字状に外湾し，端部は平たく収める。	外面：口縁端部ヨコナデ，口縁部～肩部ナデ，以下ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 3mm の石英・長石含む 焼成：普通 色調：にぶい黄橙色 (10YR7/4) 外面胴部にスス付着，内面口縁端部にスス付着。
64	甕形土器	SX3 埋土	－	口縁部は外方向に大きく開き，端部で上方に外湾気味に拡張する。	外面：拡張部ナデ，他荒れ著しく不明 内面：口縁部ナデ，以下ヘラ削り 外面頸部直下に貝殻腹縁部による刺突文巡る。	胎土：～ 1mm の長石・赤い石粒含む 焼成：やや軟 色調：浅黄色 (2.5Y8/3) 外面拡張部に吹きこぼれ，胴部にスス付着。
65	壷形土器	SX3 埋土	口径 13.0	頸部は直線的に延び，口縁部は外湾しながら外上方へ延びる。端部は上方に拡張し平たく収める。	外面：荒れ著しく不明 内面：口縁部～頸部ナデ，以下ヘラ削り	胎土：1 ～ 3mm の石英・長石含む 焼成：やや軟 色調：橙色 (5Y5/8)
66	壷形土器	SX3 埋土	－	口縁部は外湾気味に外上方に延び，端部内面から内傾拡張部を造りだす。	外面：口縁部棒磨き 内面：口縁部ハケ目，拡張部ナデ 口縁端部に 5 点の列点文巡る。 拡張部に波状文巡る。	胎土：～ 1mm の砂粒含む，精緻 焼成：良好 色調：明赤褐色 (5Y5/6) 外面口縁部にスス付着。
67	鉢形土器	SX3 埋土	－	胴部は内湾気味に立ち上がり，端部は丸く収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り後ナデ	胎土：1 ～ 3mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：明赤褐色 (5YR5/6)
68	器台	SX3 埋土	－	口縁端部は粘土を貼り付け上下に拡張する。	外面：棒磨き 内面：棒磨き 拡張部にヘラ描きの斜格子文巡る。	胎土：～ 1mm の石英・長石含む，精緻 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/6)
69	甕形土器	SX3 埋土	底径 4.5	平底の底部。	外面：ナデ 内面：ヘラ削り	胎土：～ 5mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：明赤褐色 (2.5YR5/8) 外面にスス付着，内面に著しくスス付着。
70	甕形土器	SX5	－	口縁部は「く」の字上に外湾し，端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り 肩部に貝殻腹縁部による刺突文巡る。	胎土：～ 1mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/8)
71	甕形土器	SX5	－	口縁部は緩やかに外湾し，端部はわずかに肥厚し平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ナデ，以下ヘラ削り	胎土：2 ～ 3mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/8) 外面にスス付着。

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
72	壷形土器	SX5 埋土	口径 [20.4]	口縁部は「く」の字上に外湾し，端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ナデ，以下ヘラ削り	胎土：2 ～ 5mm の石英・長石多く含む 焼成：やや軟 色調：黄橙色 (7.5YR7/8)
73	甕形土器	SX5 埋土	—	口縁部は短く外に湾曲し，一段稜を成して外上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り 肩部に貝殻腹縁部もしくは櫛歯状工具による波状文・ヘラ状工具による刺突文巡る。	胎土：～ 1mm の砂粒・金雲母含む 焼成：良好 色調：灰白色 (2.5Y8/2)
74	甕形土器	SX5 埋土	—	口縁部は短く外に湾曲し，一段鋭い稜を成して外上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部は平たく収める。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：～ 1mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：淡黄色 (2.5Y8/3) 外面にスス付着。
75	壷形土器	SX5 埋土	口径 16.7 胴部最大径 26.3	口縁部は外に湾曲し，一段稜を成して外上方に立ち上がる複合口縁。端部は平たく収める。	外面：口縁部～頸部ヨコナデ，以下ハケ目 内面：口縁部～頸部ヨコナデ以下ヘラ削り，胴部下 1/3 に指頭圧痕 外面肩部に櫛歯状工具による緩やかな波状文施す。	胎土：～ 1mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：淡黄色 (2.5Y8/4)
76	鉢形土器	SX5 埋土	口径 12.3 器高 8.0	尖り気味の底部から斜め上方に内湾気味に立ち上がり，端部は丸く収める。	外面：口縁端部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁端部ヨコナデ，以下ナデ	胎土：1 ～ 5mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：にぶい橙色 (7.5YR6/4)
77	甕形土器	SX6	—	口縁部は「く」の字上に外湾し，端部は上方に肥厚し平たく収める。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部タテナデ，以下ヘラ削り 肩部に爪などによる羽状文巡る。	胎土：1 ～ 2mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：橙色 (7.5YR7/6) 外面にスス付着。
78	土器底部	SX6	—	底部はわずかに残る。	外面：ナデ，指頭圧痕多数あり 内面：荒れ著しく不明	胎土：2 ～ 4mm の石英・長石多く含む 焼成：良好 色調：明赤褐色 (5YR5/8)
79	壷形土器	SX6 埋土	口径 [16.9]	口縁部は外湾し，一段稜を成して外上方に立ち上がる複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，頸部に指頭圧痕，以下ヘラ削り	胎土：～ 1mm の砂粒含む 焼成：軟 色調：浅黄橙色 (7.5YR8/6)
80	高坏	SX6 埋土	口径 [21.6]	口縁部は器厚を減じつつ緩やかに外湾し，端部は丸く収める。	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	胎土：～ 1mm の砂粒含む 焼成：軟 色調：灰白色 (5Y7/2)
81	甕形土器	SK4	口径 [15.7] 胴部最大径 [17.1]	口縁部は「く」の字上に外湾し，端部は平たく収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部ナデ，頸部ヘラ削り後ナデ，以下ヘラ削り 肩部に貝殻腹縁部による刺突文巡る。	胎土：1 ～ 3mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/8) 外面にスス付着。

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
82	甕形土器	SK4 埋土	口径 [11.7] 底径 [2.9]	口縁部は器厚を減じながら外湾し，端部は平たく収める。底部は凹み底。	外面：口縁～肩部ヨコナデ，以下ハケ目 内面：口縁部ヨコナデ，以下ヘラ削り	胎土：1 ～ 3mm の石英・長石含む 焼成：良好 色調：にぶい黄色 (2.5Y6/3) 外面にスス付着。
83	壷形土器	SK9 埋土	口径 7.8	口縁部は緩やかに外湾し，端部は平らに収める。	外面：口縁部ヨコナデ，以下ナデ 内面：口縁部タテナデ，頸部ヘラ削り後ナデ，以下ヘラ削り 肩部に貝殻腹縁部による刺突文巡る。	胎土：1 ～ 2mm の石英・長石含む，金雲母多く含む 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色 (10YR6/4)
84	土器底部	SK9 埋土	底径 3.7	底部は平底。	外面：ナデ 内面：ヘラ削り	胎土：～ 1mm の砂粒含む 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色 (10YR6/4)
85	土器底部	SK9 埋土	底径 5.4	平底の底部から胴部が内湾気味に立ち上がる。	外面：ナデ 内面：ヘラ削り後ナデ	胎土：～ 1mm の石粒含む 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色 (10YR6/4)

第 9 表　柳遺跡出土石器観察表

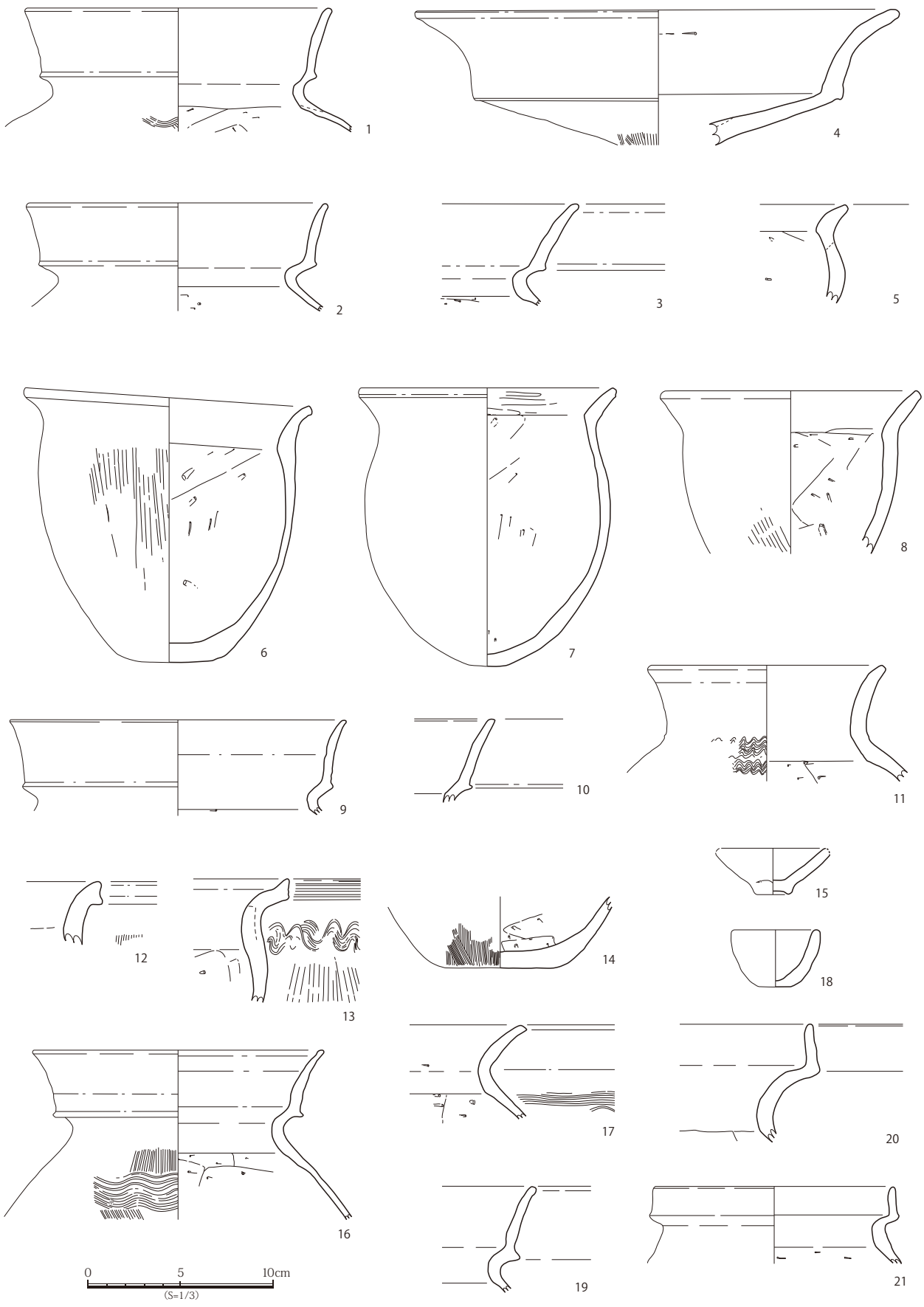
番号	種別	出 土 位 置	計測数値				備考
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重　量	
86	磨石	SH3 埋土	19.1	6.5	4.8	876.9g	材質：砂岩
87	台石	SH3 埋土	32.9	31.7	11.0	18.6kg	材質：花崗岩
88	台石	SH3 埋土	29.8	26.2	8.3	11.4kg	材質：花崗岩
89	砥石	SH4	10.0	10.6	7.9	1.2kg	使用面：1　材質：安山岩 + 花崗岩
90	砥石	SH5	12.5	7.8	2.3	330.8g	使用面：1　材質：頁岩
91	砥石	SH5	13.1	4.2	1.4	117.0g	使用面：3　材質：頁岩
92	台石	SH5	32.0	24.8	10.2	15.0kg	材質：斑岩
93	台石	SH6	33.5	24.5	11.4	14.3kg	材質：花崗岩
94	台石	SH6	26.8	25.3	6.6	7.2kg	材質：花崗岩
95	砥石	SH6 外	6.1	5.4	1.7	99.4g	使用面：1　材質：チャート
96	砥石	SH6 外	20.5	14.3	4.7	2.6kg	使用面：1　材質：花崗岩
97	台石	SH6 外	23.5	21.9	7.5	6.2kg	材質：花崗岩
98	砥石	SH9	11.1	5.7	1.9	233.9g	使用面：1　材質：砂岩
99	台石	SH9	55.4	33.9	16.5	57.8kg	材質：花崗岩
100	台石	SH9 埋土	25.2	25.2	8.0	9.6kg	材質：花崗岩
101	削器	SH9 外	12.3	4.0	～ 0.9	36.0g	刃部：1　材質：頁岩
102	砥石	SH10	14.5	9.6	8.8	1.5 kg	使用面：1　材質：砂岩
103	台石	SH10	25.7	19.2	10.1	6.7kg	材質：砂岩　砥石としても使用か？
104	台石	SH12	17.8	13.9	4.7	2.3kg	材質：安山岩
105	石錘	SX1	3.7	3.9	3.2	62.7g	材質：花崗岩
106	砥石	SX3 埋土	7.7	5.5	2.5	172.7g	材質：砂岩　使用面：2
107	台石	SX5	48.7	51.5	12.2	47.9kg	材質：花崗岩

番号	種別	出 土 位 置	計測数値				備考
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量	
108	台石	SK2 埋土	37.3	26.6	8.4	14.5kg	材質：花崗岩
109	砥石	SK6	33.0	11.3	34 ～ 81	3.6kg	使用面：2　材質：流紋岩
110	石錘	SK6	7.4	5.1	1.8	97.0g	材質：砂岩？
111	磨石	SK7 埋土	12.7	9.0	4.3	825.2g	材質：花崗岩

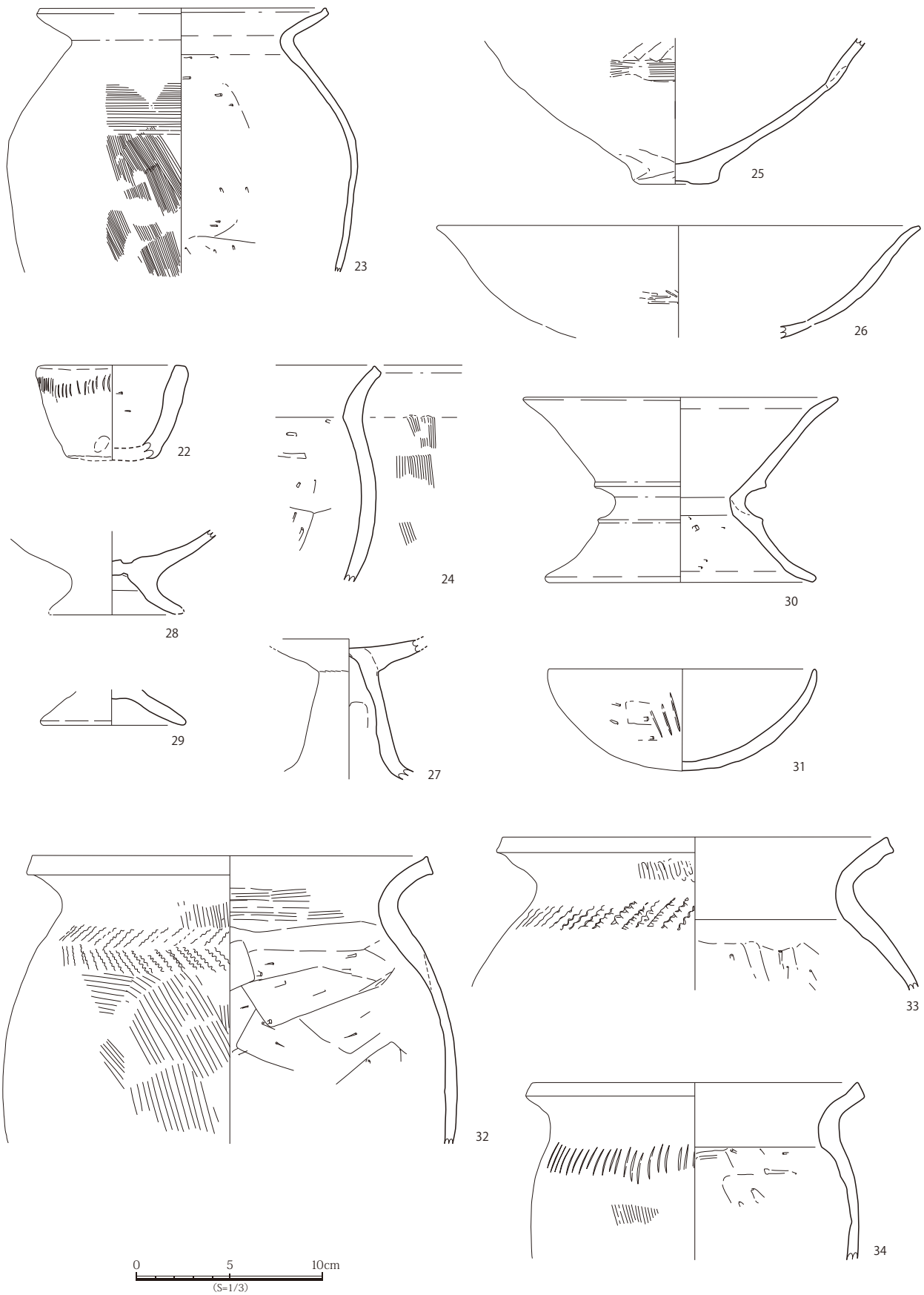
第 10 表　柳遺跡出土鉄器観察表

（(　)：残存値）

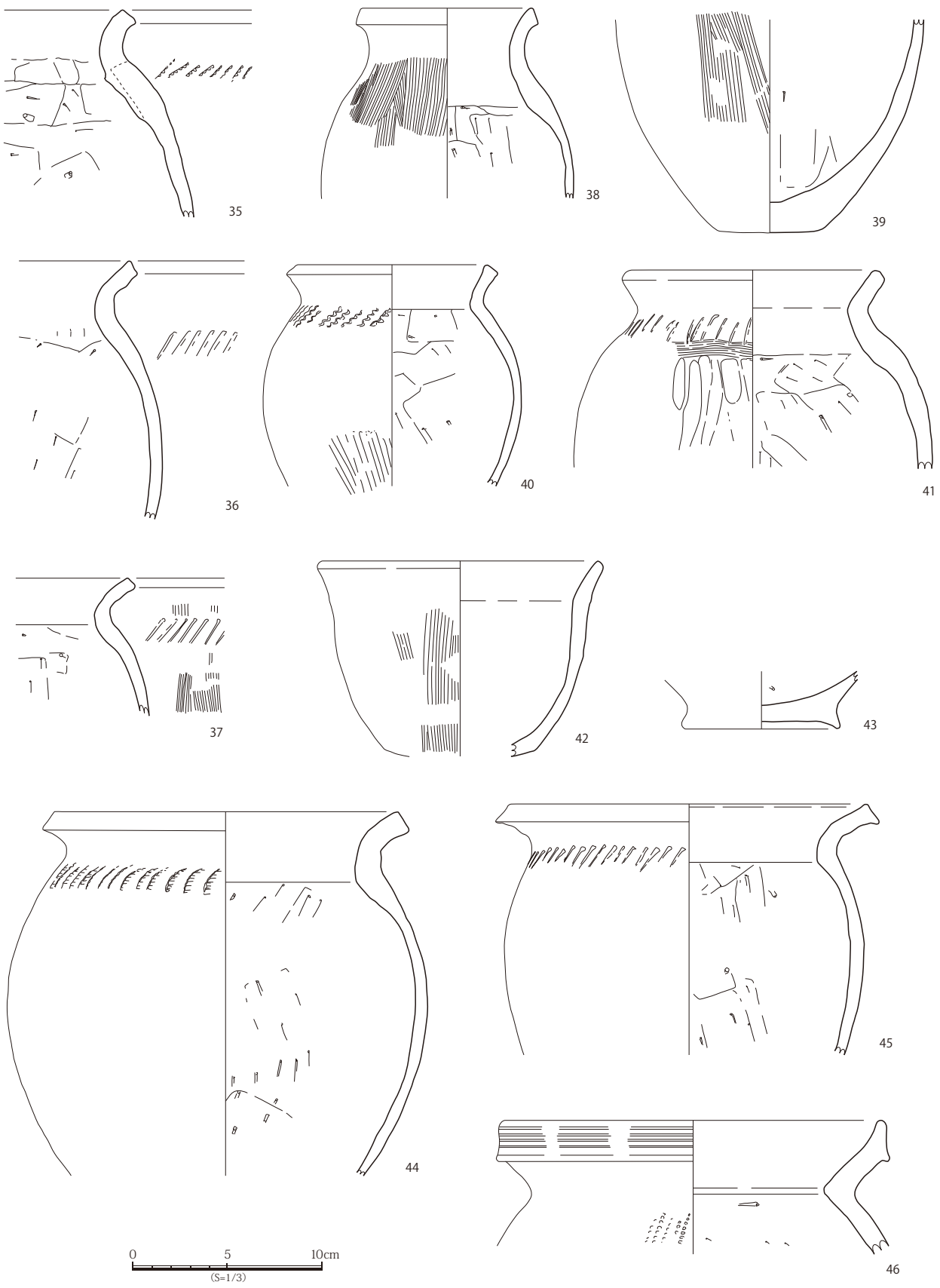
番号	種別	出土位置	計測数値（cm）				備考
			部位	長さ	幅	厚さ	
112	不明鉄製品	SH1 埋土	全長	2.4	1.65	0.1	
113	釘鏃？	SH1 埋土	全長	(3.05)	0.55	0.4	鉄鏃茎部？
114	釘鏃？	SH1 埋土	全長	(2.5)	0.4	0.35	鉄鏃茎部？
115	鉄斧	SH3	全長	3.8	－	－	ミニチュア
			1	3.1	1.7	0.2	
			2	1.6	1.1	(0.2)	
116	鉇	SH4	全長	7.15	1.1	0.3	
117	鉄鏃	SH6	全長	4.8	－	－	
			刃部	2.1	1.2	0.2	
			茎部	2.7	0.5	0.3	
118	鉄鏃？	SH6 埋土	全長	(1.95)	0.5	0.3	鉄鏃茎部？
119	鉄鏃	SH6 埋土	全長	2.5	1.9	0.2	無茎五角形鏃？
120	鉇	SH6 埋土	全長	5.4	1.05	0.4	
121	鉄剣	SH6 外	全長	(7.9)	2.1	0.5	目釘孔なし。茎付近の部位か。
122	鋤（鍬）先	SH9	全長	(1.8)	2.9	0.1	ミニチュア
123	鉇	SH9 埋土	全長	(3.1)	1.0	0.3	刃部
124	鉇	SH11P 内	全長	(7.5)	0.7	0.4	
125	鉄鏃	SH12	全長	(2.5)	－	－	茎部に縦方向の木質付着
			刃部	(1.0)	0.8	0.2	
			茎部	(1.5)	0.5	0.4	
126	鉄鏃	SH12 埋土	全長	(7.6)	－	－	
			刃部	4.4	3.4	0.3	
			茎部	(3.2)	0.8	0.45	
127	鉄鏃	SH12 埋土	全長	3.4	2.9	0.35	無茎三角鏃
128	鉇	SH12 埋土	全長	(2.4)	1.0	0.3	刃部
129	楔形鉄製品	SH12 埋土	全長	5.15	1.6	0.5	
130	刀子状鉄製品	SH12 埋土	全長	(4.2)	1.1	0.3	
131	釘状鉄製品	SH12 埋土	全長	5.3	0.5	0.4	
132	不明鉄製品	SH12 埋土	全長	3.3	1.2	0.5	
133	不明鉄製品	SH12 埋土	全長	3.3	0.9	0.2	
134	楔形鉄製品	SH12 埋土	全長	3.3	1.2	0.5	
135	楔形鉄製品	SK2 埋土	全長	4.4	1.6	0.7	



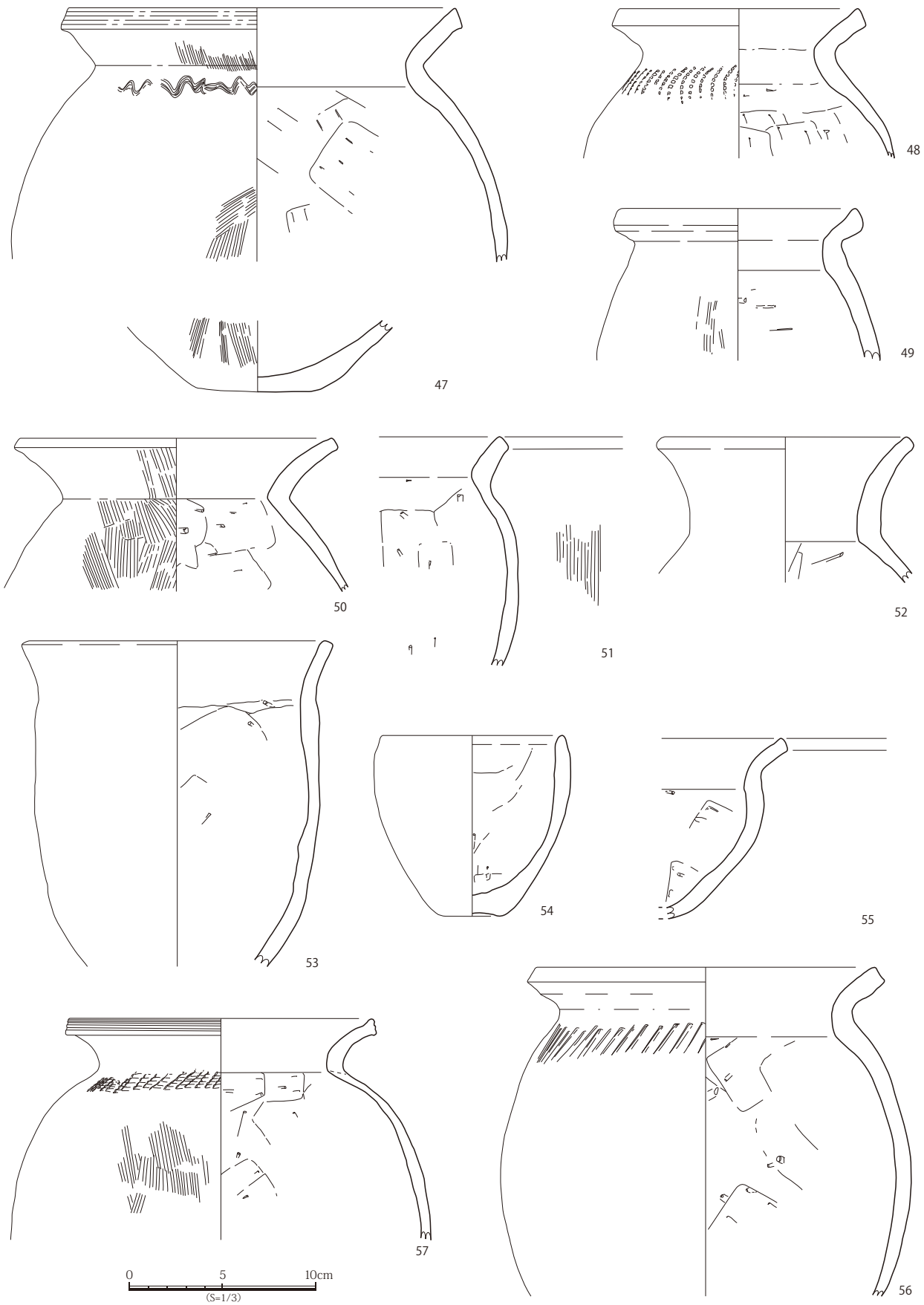
第 149 図　出土遺物実測図（1）（S=1/3）



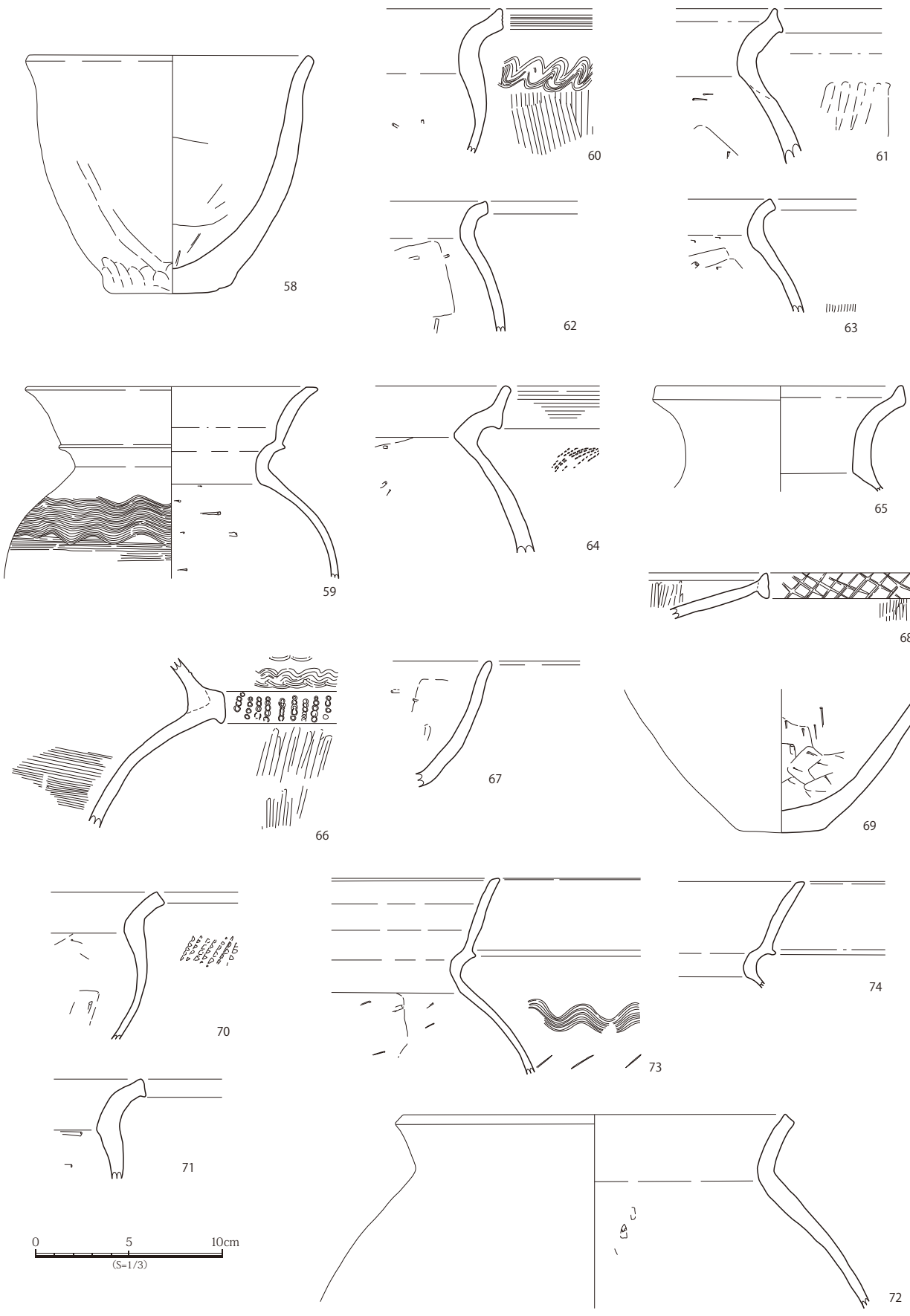
第 150 図　出土遺物実測図（2）（S=1/3）



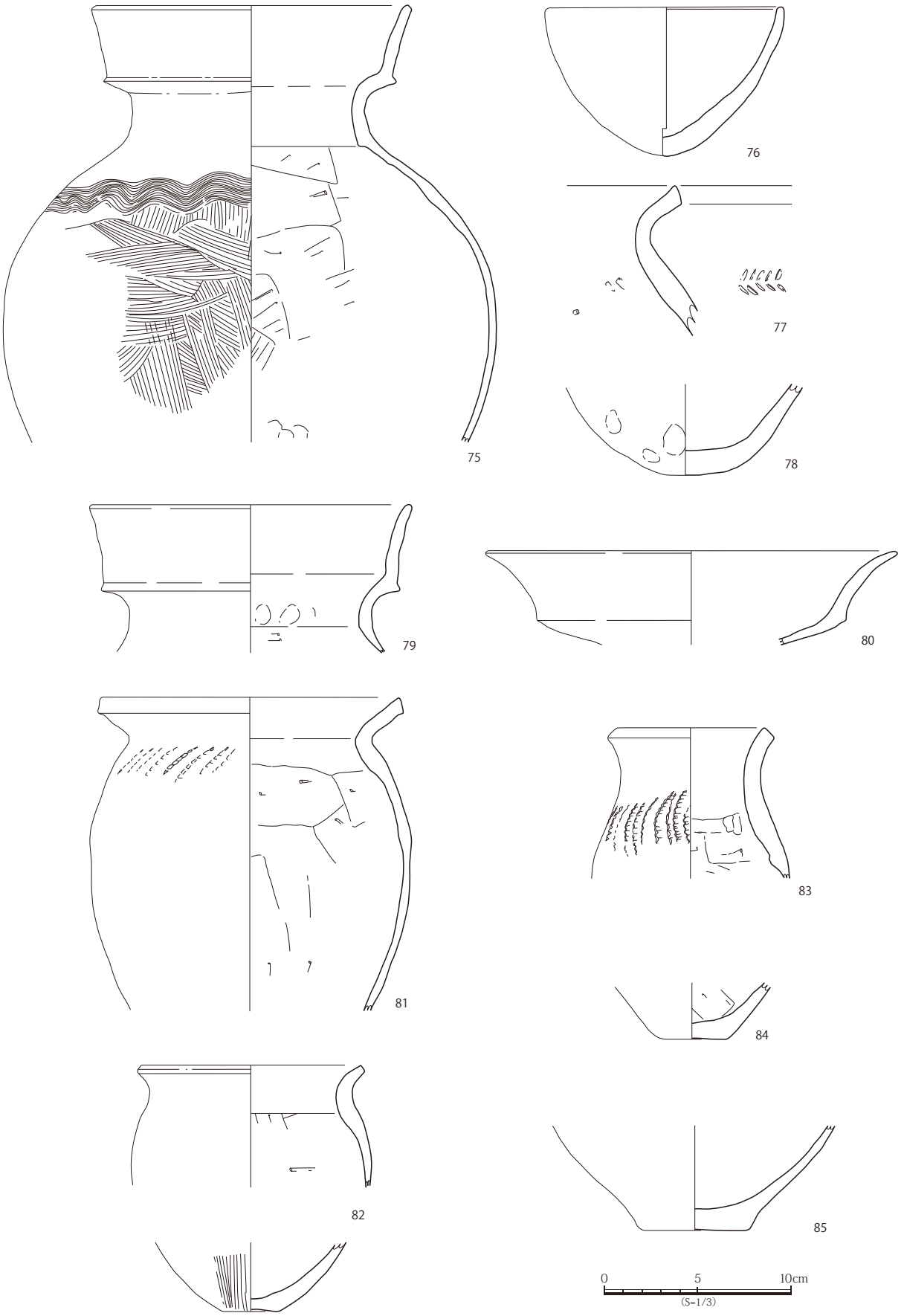
第 151 図　出土遺物実測図（3）（S=1/3）



第 152 図　出土遺物実測図（4）（S=1/3）

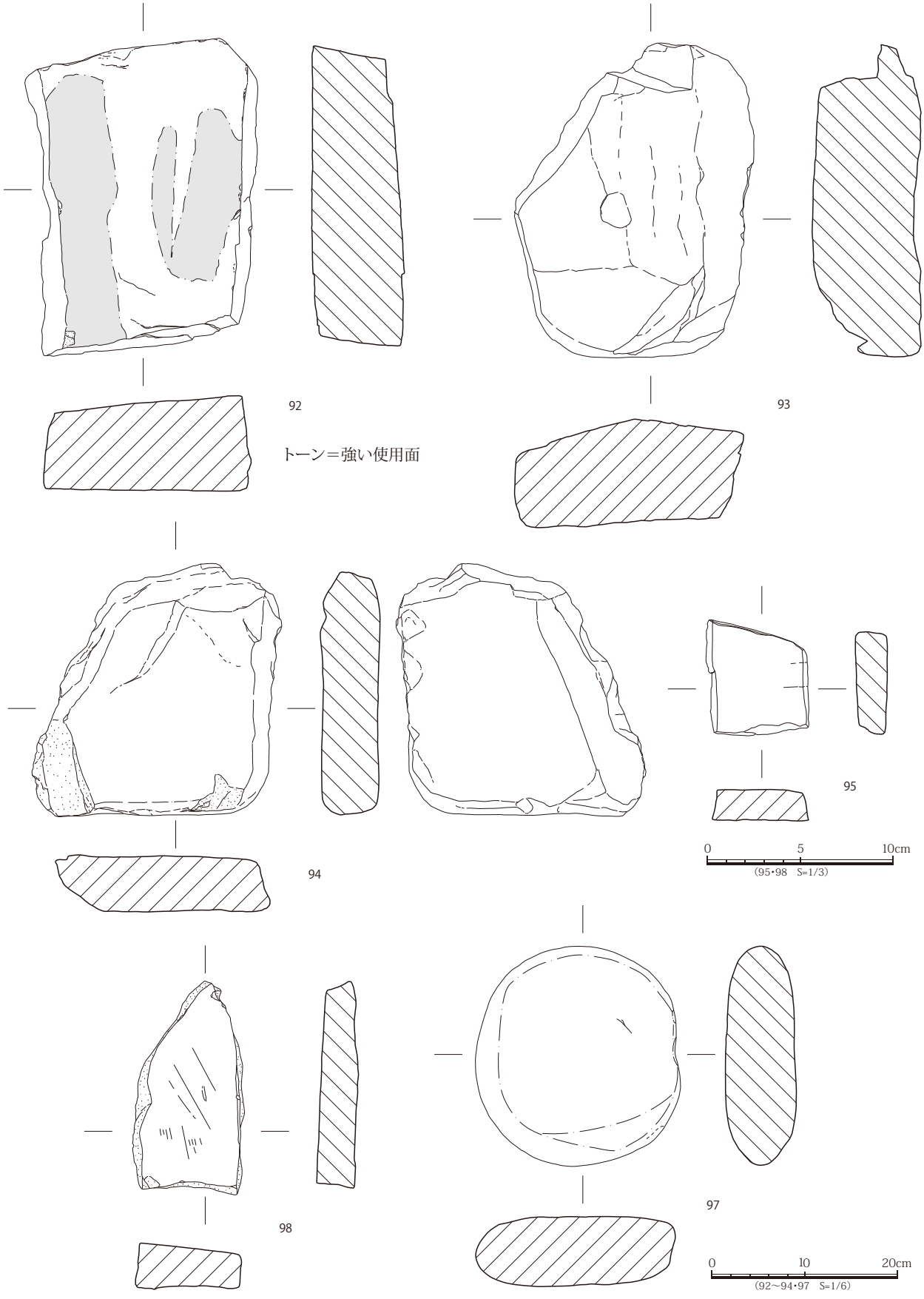


第 153 図　出土遺物実測図（5）（S=1/3）

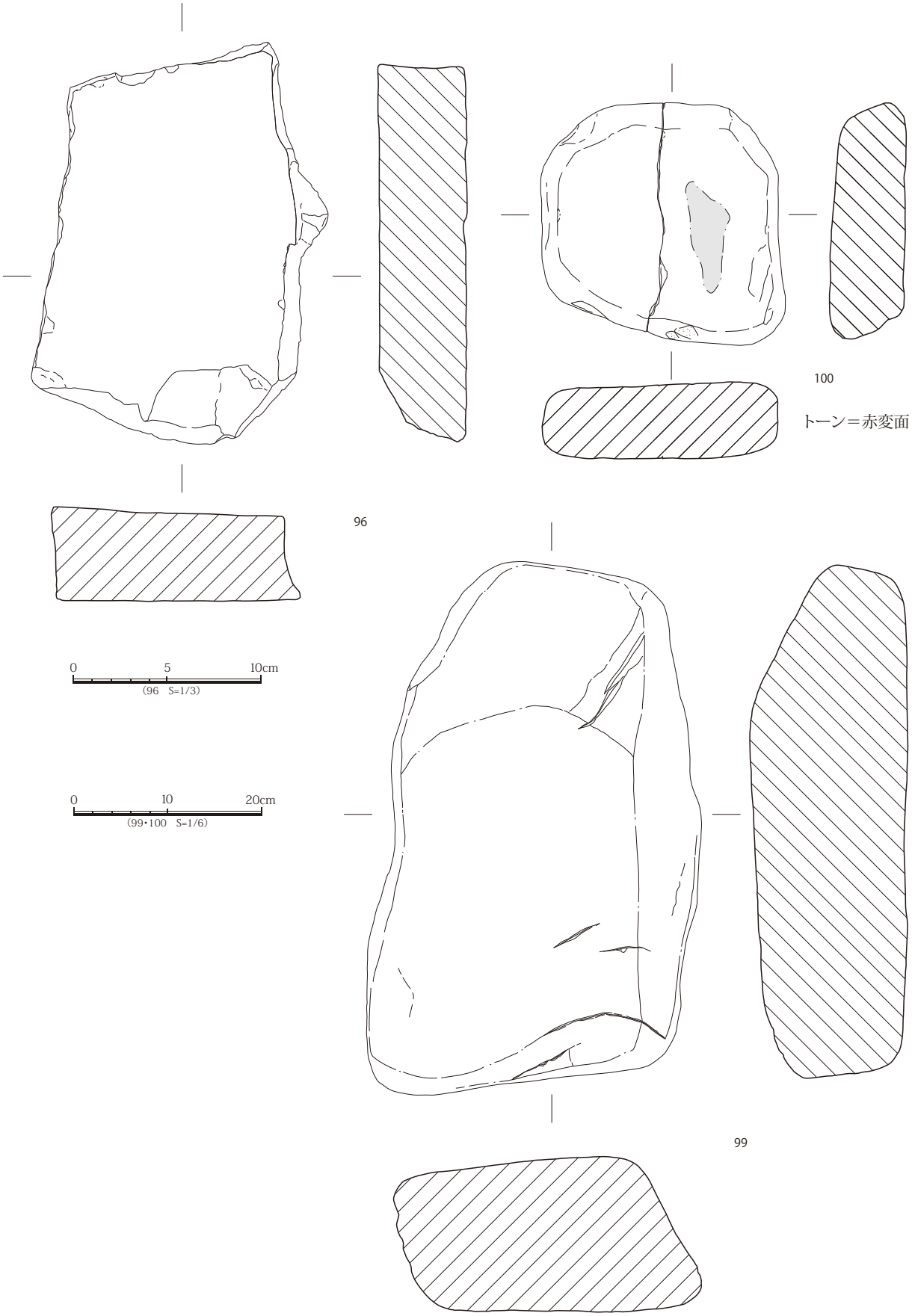


第 154 図　出土遺物実測図（6）（S=1/3）

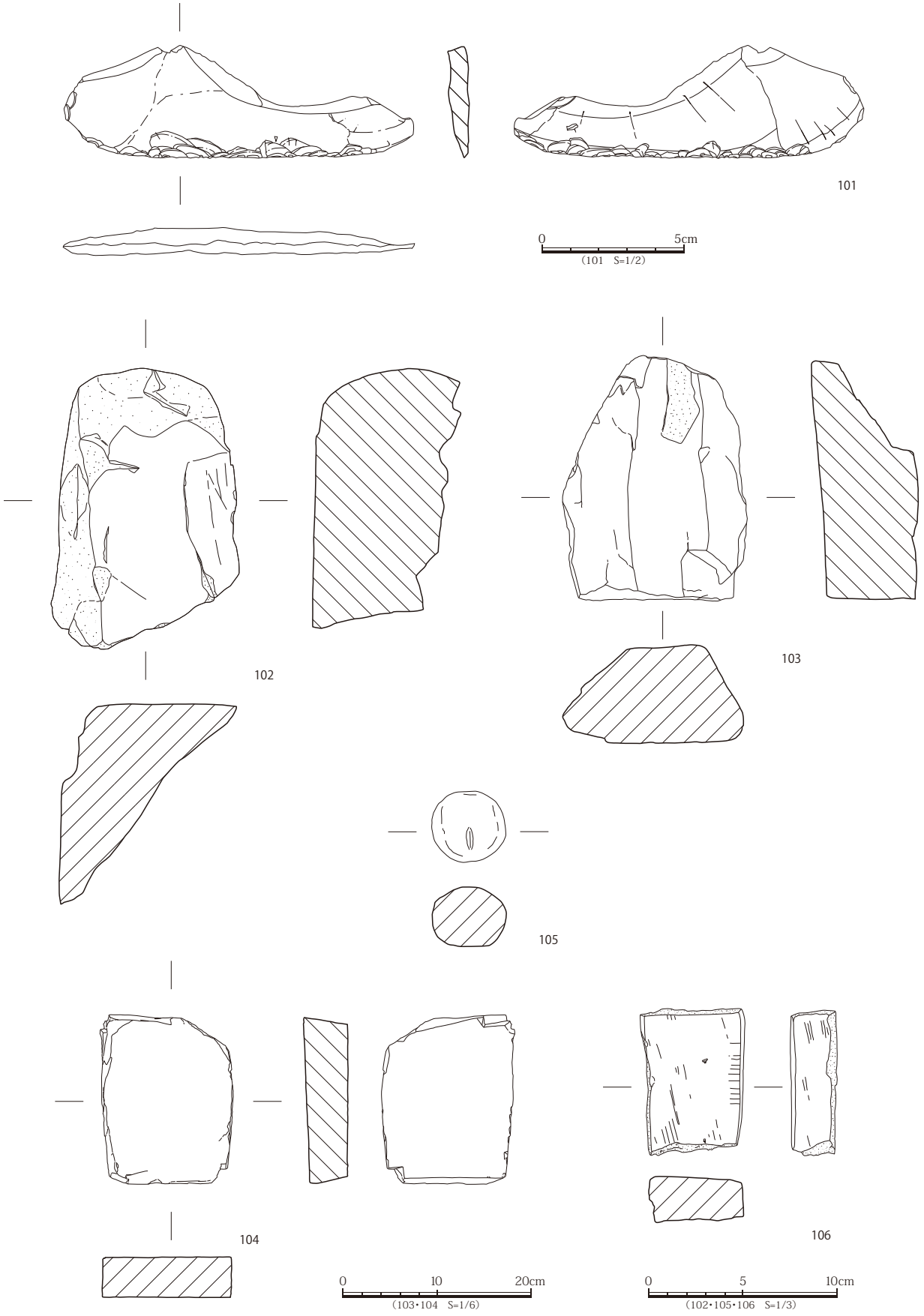
第 155 図　出土遺物実測図（7）（87・88 は S=1/6，他は S=1/3）



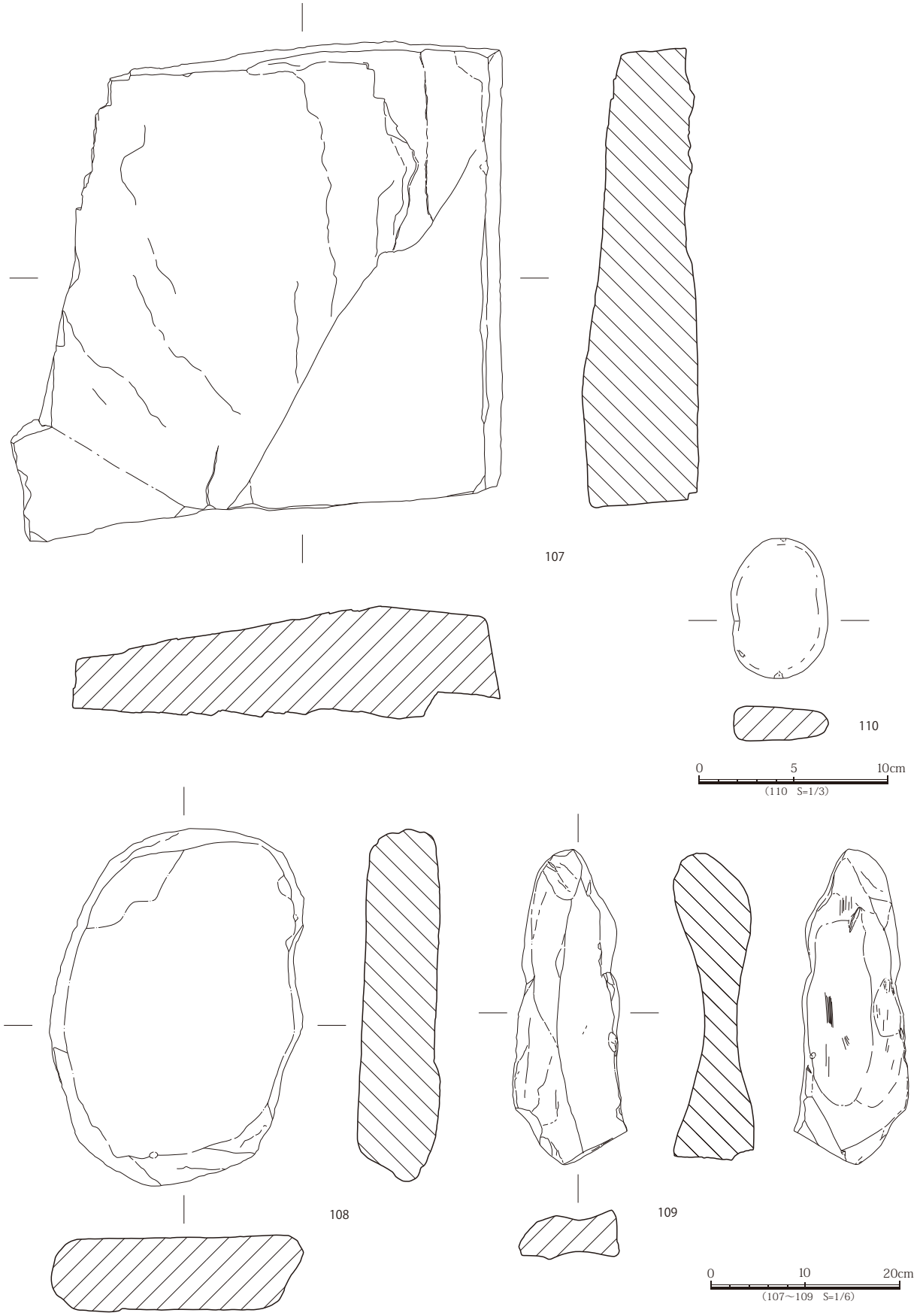
第 156 図　出土遺物実測図（8）（95・98 は S=1/3，他は S=1/6）



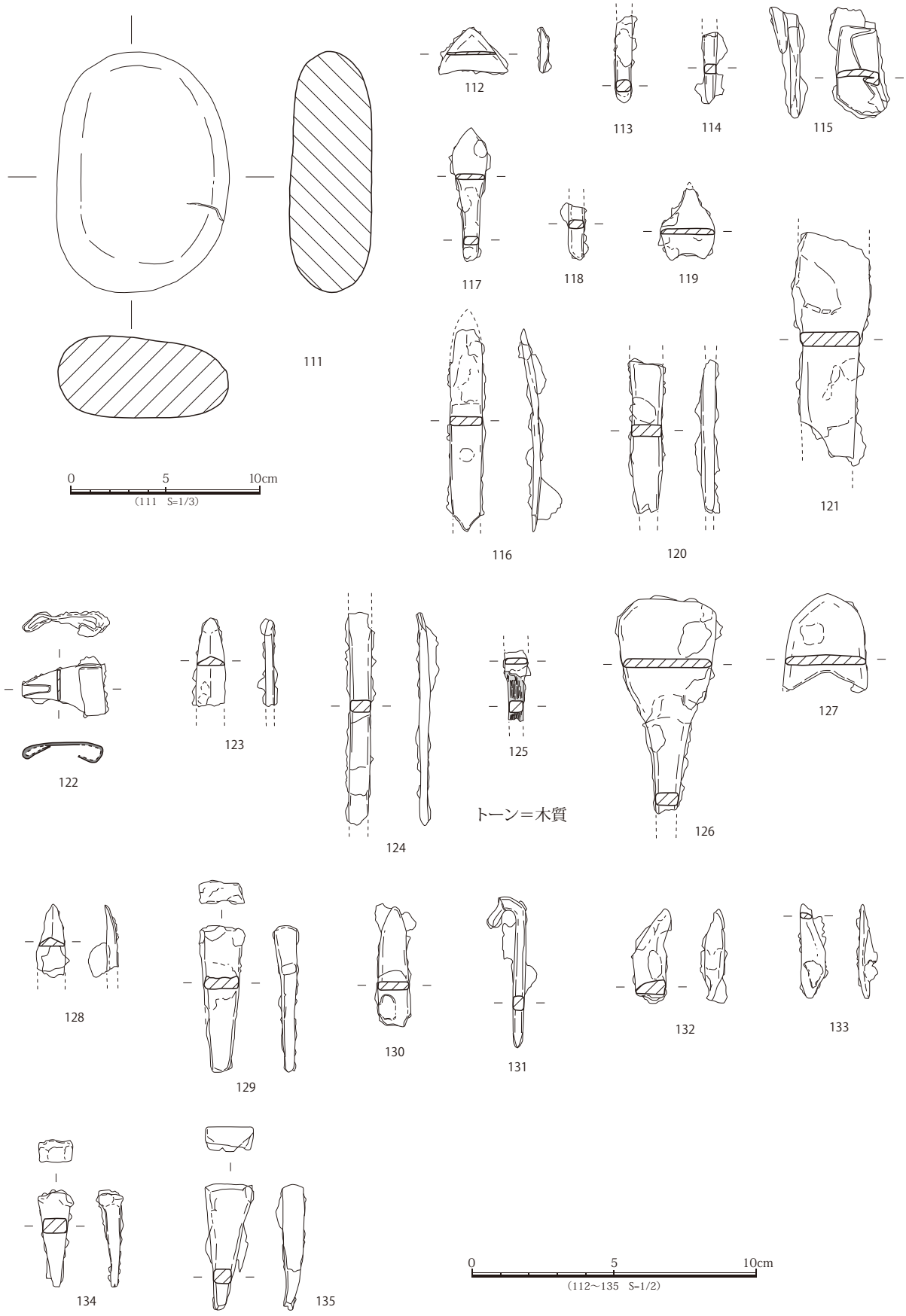
第 157 図　出土遺物実測図（9）（96 は S=1/3，99・100 は S=1/6）



第 158 図　出土遺物実測図（10）（101 は S=1/2，103・104 は S=1/6，他は S=1/3）



第 159 図　出土遺物実測図（11）（107 ～ 109 は S=1/6，110 は S=1/3）



第 160 図　出土遺物実測図（12）（111 は S=1/3，他は S=1/2）

Ⅵ　琴平遺跡

1．調査の概要

本遺跡は，備前坊山（789.4m）から南に連なる峰から派生した尾根の先端上に位置する。遺跡の位置する尾根には，調査前には社（琴毘羅社）があった。地元住民からの聞き取りによると，大正時代にこの社が建築された際，境内地として尾根が削平され，尾根上に露頭した石材を使用して社の基礎や境内地の石垣が築かれたと伝えられている。また，その際に約 30cm の鉄刀が出土したと伝えられている[1)]。これらのことから，この地は琴平古墳と認知されていた。

調査前には，尾根が既に社の境内地として削平されており，石棺の石材と考えられる板石が礎石等に利用されていた。広島市教育委員会による事前の試掘調査で，調査区にトレンチを設定し掘り下げを行い，各トレンチで墓壙と見られる掘り込みを検出したことから，弥生時代の墳墓群が存在する可能性が高いことを確認した。

調査の結果，弥生時代のものと考えられる土壙墓 21 基を確認し，古墳の存在は確認することができなかった。遺構に伴う土器などの遺物は出土しなかったが，墓壙内から人骨片が，表土から弥生土器片と須恵器片が数点出土した。

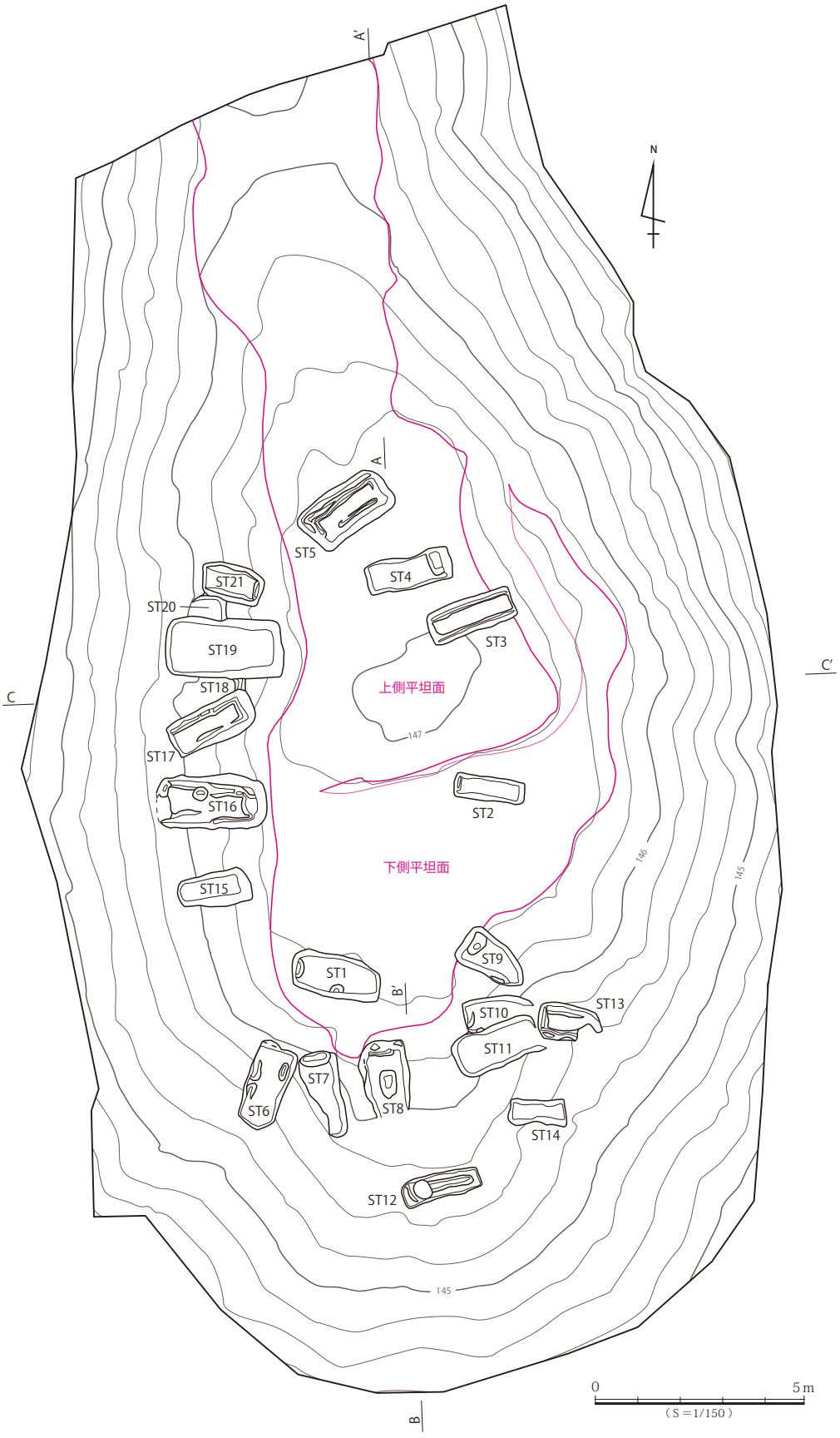
2．基本層序（第 161・162 図）

本遺跡は南北へ伸びる尾根の先端部，標高 144 ～ 147m の細長い尾根上に位置している。尾根は付近の水田面に向けて急激に下るが，遺跡の位置する場所で一旦起伏を戻し，緩やかな鞍部となった後再び急傾斜となる。遺跡中央にあたる尾根頂上付近は，調査前は社と境内地として長さ南北約 15m，幅約 7 ～ 8m にわたって削平・利用されていた。削平場所は社の建つ平坦面（以下上側平坦面と呼称する）と 1 段低い社前の平坦面（以下下側平坦面と呼称する）からなり，上側平坦面と下側平坦面との比高は約 18cm である。また，石棺の石材と考えられる板石などの多くの石が，社の基礎や境内地の境界の石垣として使用されていた。

本遺跡では，尾根筋に沿って南北方向・尾根筋に直交する東西方向及び，尾根頂上部から放射状にトレンチを数か所設定し，土層観察を行った。その内，遺跡の堆積状況を最も良く表している A － A’，B － B’，C － C’ を基本土層として示す。

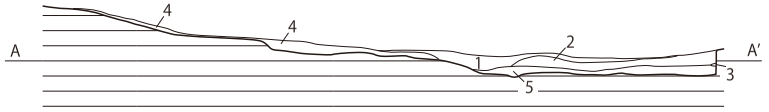
遺跡の位置する尾根は，地盤が風化した花崗岩（地山）で形成される。堆積する土は基本的に花崗岩バイラン土が主な成分となっているため，土質は砂分の多い砂質土である。前述した通り，尾根の中央部一帯は社境内地として削平されているため，地山が露出している。B － B’ 土層第 2・3 層，C － C’ 土層第 3・4 層は境内の整地層であり，B － B’ 土層第 2 層，C － C’ 土層第 3 層には石材が巡り，境内地の境界となっている。遺構は全て地山を掘って造られている。

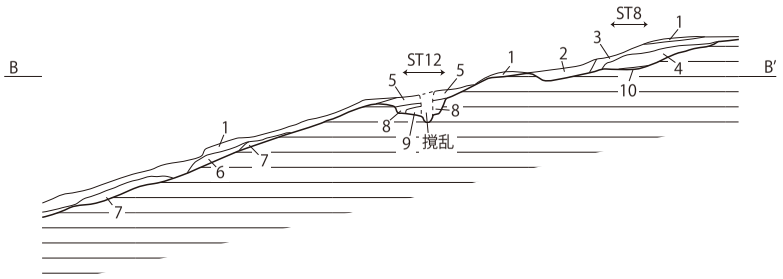
なお，本調査においても古墳を築造する際の盛土や掘り込みなどの地形整形の痕跡は認められず，古墳の存在は確認できなかった。



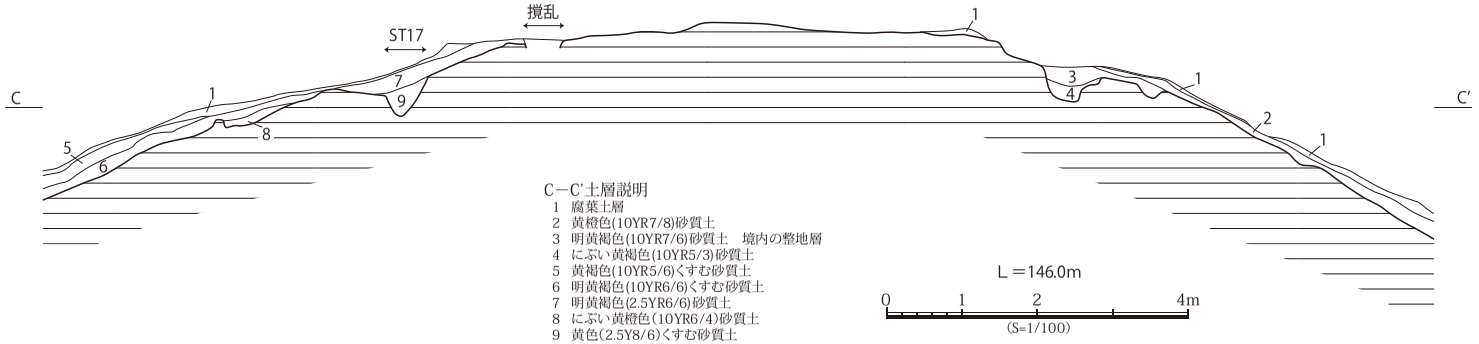
第 161 図　琴平遺跡遺構配置図（S=1/150）

A－A'土層説明
1 腐葉土層
2 明黄褐色(10YR7/6)砂質土　緻密度少
3 明黄褐色(10YR6/6)砂質土　緻密度少
4 明黄褐色(10YR6/6)砂質土
5 黄褐色(10YR5/6)砂質土





B－B'土層説明
1 腐葉土層
2 浅黄色(2.5Y7/4)砂質土　境内の石垣層
3 くすんだ黄色(2.5Y7/8)砂質土　境内の整地層
4 黄灰色(2.5Y5/1)砂質土
5 にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
6 明黄褐色(10YR6/6)くすむ砂質土
7 黄橙色(10YR7/8)くすむ砂質土
8 明黄褐色(10YR7/6)砂質土
9 橙色(2.5YR6/8)砂質土
10 明黄褐色(10YR7/6)くすむ砂質土



C－C'土層説明
1 腐葉土層
2 黄橙色(10YR7/8)砂質土
3 明黄褐色(10YR7/6)砂質土　境内の整地層
4 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
5 黄褐色(10YR5/6)くすむ砂質土
6 明黄褐色(10YR6/6)くすむ砂質土
7 明黄褐色(2.5YR6/6)砂質土
8 にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質土
9 黄色(2.5Y8/6)くすむ砂質土

第 162 図　琴平遺跡基本層序（S=1/100）

3．遺構

○ ST1（第 163 図）

ST1 は，下側平坦面の南端に位置する。床面形状は中央付近が膨らんだ長方形で，主軸は N82°W である。規模は墓壙床面で長辺 193cm 短辺は西側 56cm 中央部 79cm 東側 42cm，床面標高は 146.08m，深さは現状で最大 36cm である。床面の西小口側に長辺 56cm 短辺 18cm，床面からの深さ 7cm の掘り込みを確認した。この掘り込みは，石材を据えるための溝と考えられる。土層観察では，後世の抜石によるものと見られる撹乱があり，その際に取り残されたものと思われる角礫を床面から 5cm ～ 12cm 上で検出した。以上のことから，本遺構は本来石棺墓であったものが，後世に石材が抜き取られ撹乱されたものと考えられる。頭位は床面形状において西側が広いことから，西側と考えられる[2)]。

○ ST2（第 164 図）

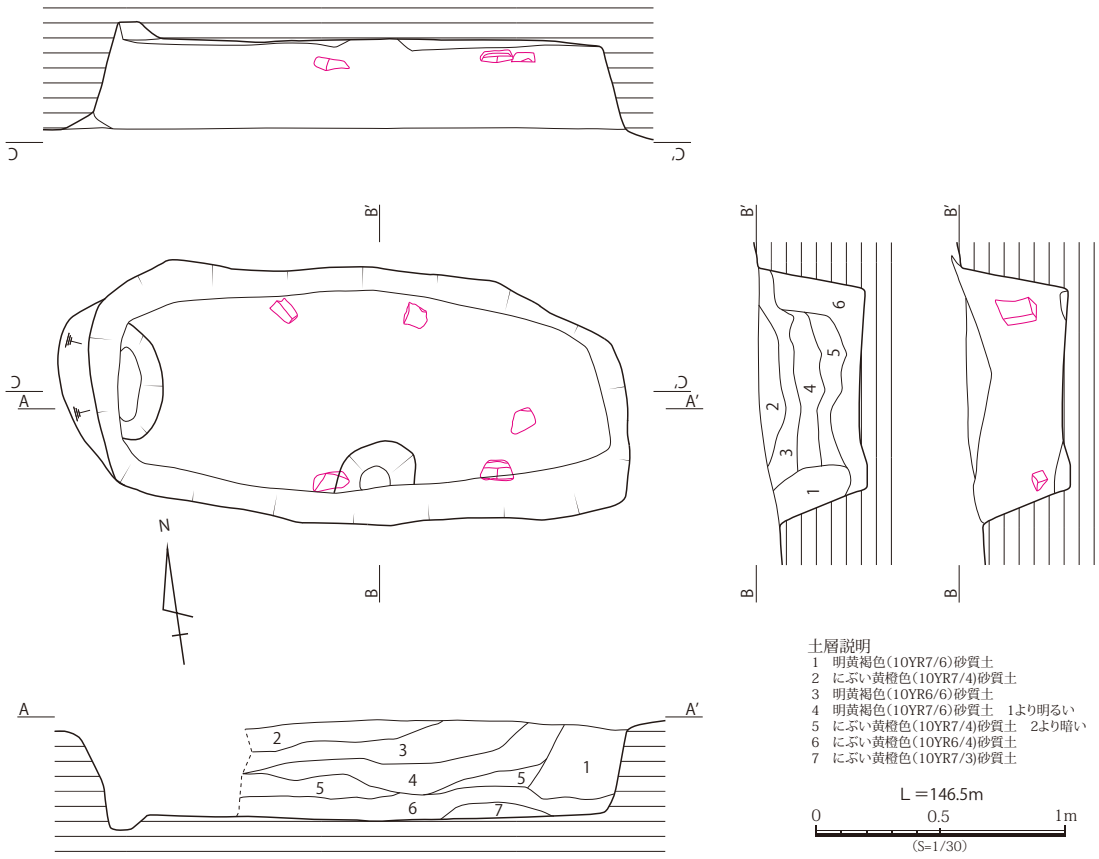
ST2 は下側平坦面の北端，ST1 から北東約 5m に位置する。床面形状は長方形で，主軸は N81°W である。規模は墓壙床面が長辺 147cm 短辺 35cm，床面標高は約 146.34m，深さは現状で最大 32cm である。床面の西小口側に長辺 35cm 短辺 10cm，床面からの深さ約 3cm の掘り込みを確認した。この掘り込みは小口板を据えるための溝と考えられる[3)]。西側の床面直上から約 10cm 上にかけて，長辺 59cm 短辺 39cm の方形状に広がる赤色に変色した層を確認した。科学分析の結果，赤色顔料は酸化第二鉄（ベンガラ）であった。また，墓壙壁面と赤色顔料との間約 4cm では赤変が及ばない範囲があり，木棺の痕跡と考えられる。以上のことから，本遺構は木棺墓であったと考えられる。頭位は赤色顔料を検出したことから，西側と考えられる[4)]。

○ ST3（第 165 図）

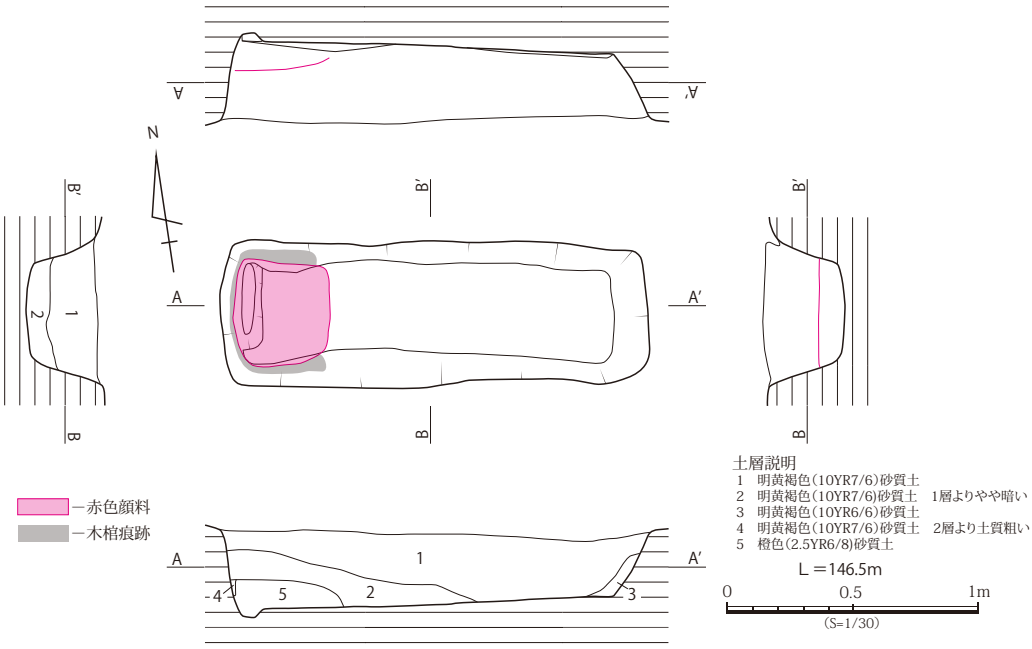
ST3 は上側平坦面の東端，ST2 から北に約 3m の距離に位置する。床面形状は長方形で，主軸は N110°W である。規模は墓壙床面が長辺 190cm 短辺 57cm，床面標高は約 146.68m，深さは現状で最大 32cm である。床面の南北両側に長さ 193 ～ 195cm 幅 7 ～ 17cm，床面からの深さ約 4cm の掘り込みを確認した。この掘り込みは側板を据えるための溝と考えられる[5)]。また，本遺構を掘削中に墓壙壁面から 7 ～ 10cm の幅で墓壙壁面の内側を巡るように木棺の痕跡を確認した。以上のことから，本遺構は木棺墓であったと考えられる。西側の床面直上から約 10cm 上にかけて，直径 39cm の円形状に広がる赤色に変色した層を確認した。科学分析の結果，赤色顔料は酸化第二鉄（ベンガラ）であった。頭位は赤色顔料を検出したことから，西側と考えられる。

○ ST4（第 166 図）

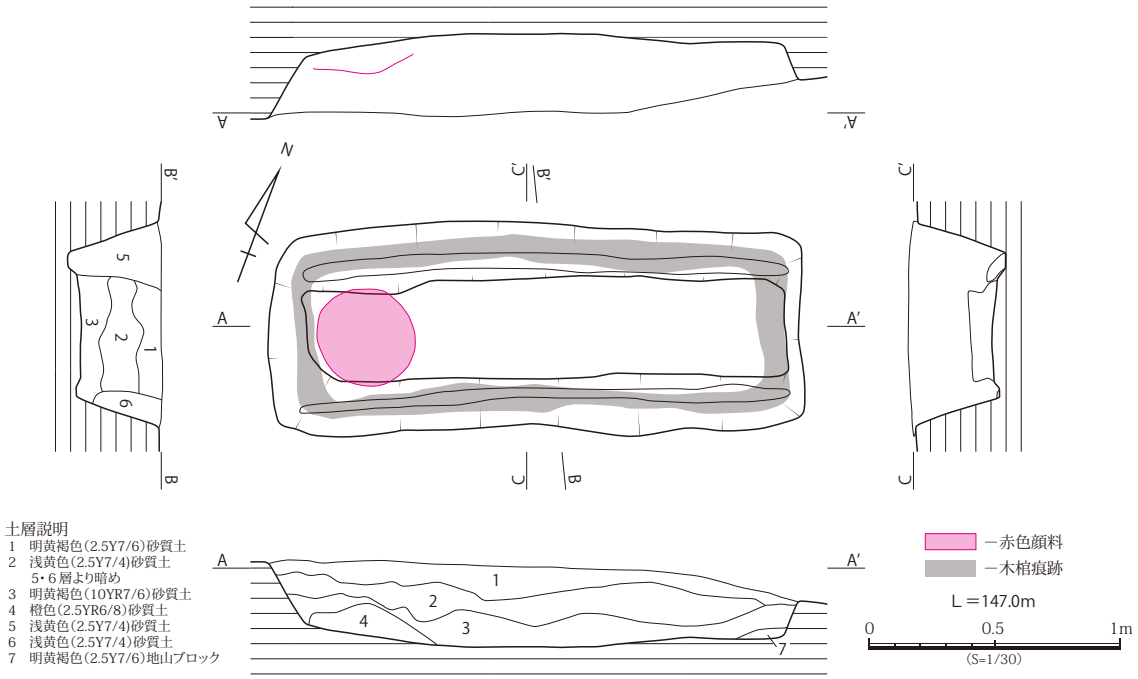
ST4 は上側平坦面の中央北寄り，ST3 より約 1m 北西に位置する。床面形状は長方形で，主軸は N105°W である。規模は墓壙床面が長辺 172cm 短辺は中央部で 62cm，床面標高は約 146.7m，深さは現状で最大 24cm である。土層観察では第 3・4 層は木棺の裏込め土と考えられ，本遺構は



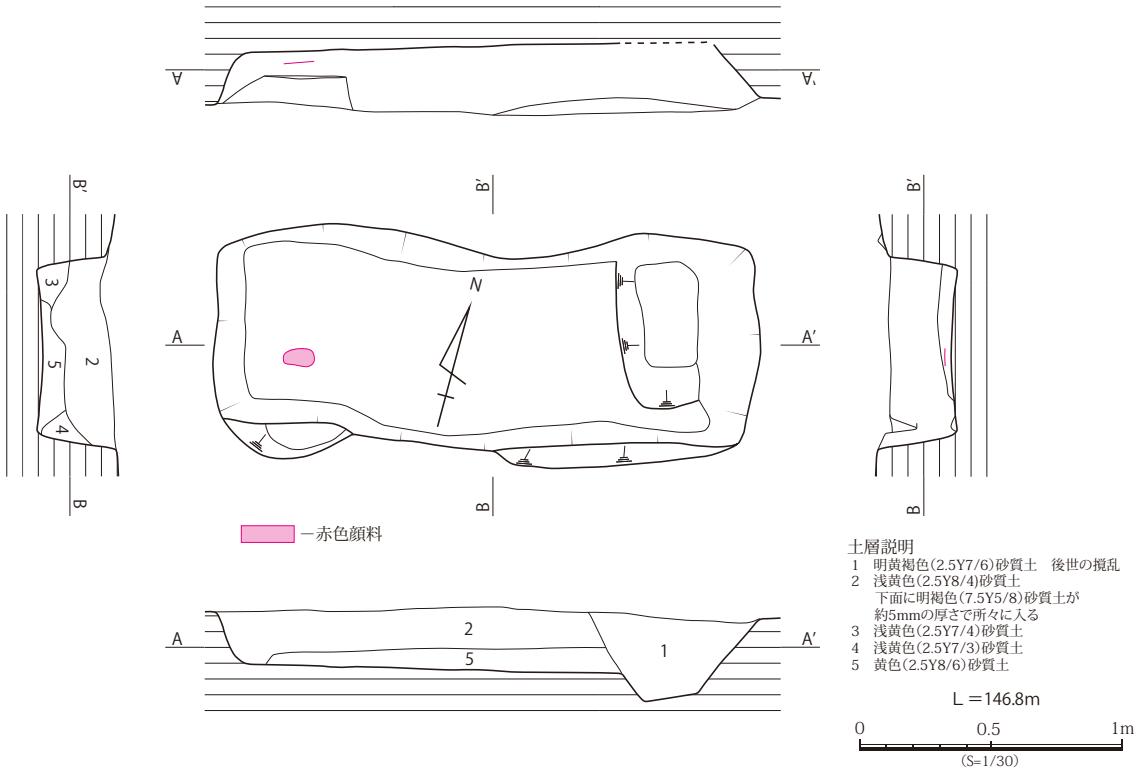
第 163 図　琴平遺跡 ST1 実測図（S ＝ 1/30）



第 164 図　琴平遺跡 ST2 実測図（S=1/30）



第 165 図　琴平遺跡 ST3 実測図（S ＝ 1/30）

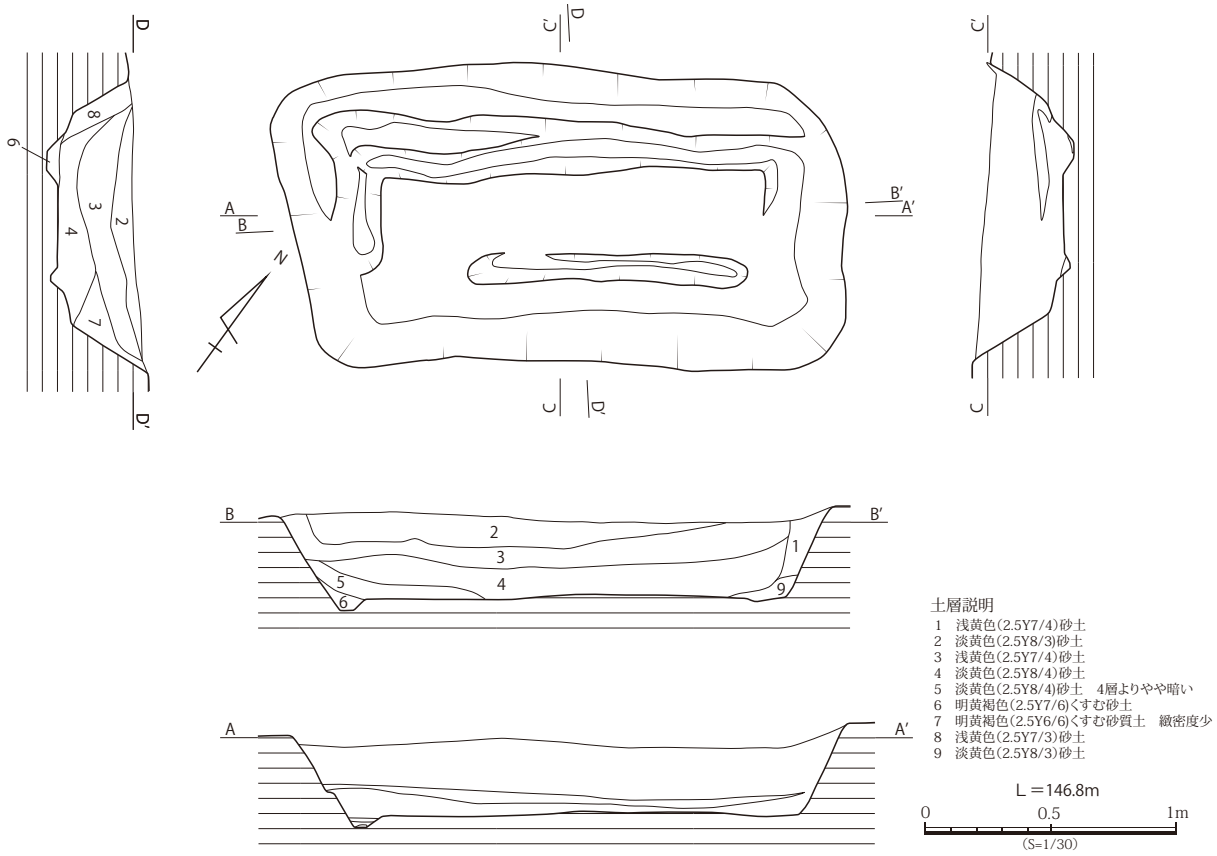


第 166 図　琴平遺跡 ST4 実測図（S=1/30）

木棺墓であったと考えられる。西側の床面から約 4cm 上で，長辺 12cm 短辺 7cm の楕円形状に広がる赤色に変色した層を確認した。科学分析の結果，赤色顔料は酸化第二鉄（ベンガラ）であった。頭位は赤色顔料を検出したことから，西側と考えられる。

○ ST5（第 167 図）

ST5 は上側平坦面の北側，ST4 より約 1m 北に位置する。床面形状は長方形で，主軸は N126° W である。墓壙は二重土壙になっており，規模は外側床面が長辺 198cm 短辺 84cm，床面標高は 146.49m，深さは現状で最大 37cm である。内側床面の規模は長辺 152cm 短辺 32cm で，外側床面からの深さは約 6cm である。床面の西小口側に長辺 52cm 短辺 13cm，床面からの深さ約 4cm の掘り込みと，床面の南北両側に幅 10 ～ 22cm，床面からの深さ約 4cm の掘り込みを確認した。これらの掘り込みは石材を据えるための溝と考えられる。土層観察では第 1 ～ 3・7・8 層で抜石によるものと考えられる撹乱を確認した。以上のことから，本遺構は石棺墓であったと考えられる。なお，頭位については不明であるが，周囲の墓壙（ST3・4）が西側を頭位としていることから，西側の可能性が高い。



第 167 図　琴平遺跡 ST5 実測図（S ＝ 1/30）

○ ST6（第 168 図）

ST6 は調査区域の南側斜面，ST1 の南西約 1.5m に位置する。床面形状は長方形で，主軸は N27°E である。規模は墓壙床面が長辺 185cm 短辺 82cm，床面標高は 145.40m，深さは現状で最大 50cm である。床面の東西に長さ 39 ～ 51cm 幅 11 ～ 22cm，床面からの深さ約 4cm の掘り込みを確認した。これらの掘り込みは石材を据えるための溝と考えられるが，石材は確認できなかった。頭位は床面形状において北側が南側より広いことから，北側と考えられる。

○ ST7（第 169 図）

ST7 は ST6 の東に接して位置する。墓壙は西側が流失しており，正確な形状は確認できなかったが，残存状況から床面形状は長方形と推測される。主軸は N12°W である。規模は墓壙床面が長辺 195cm 短辺 62cm 以上，床面標高は 145.86m，深さは現状で最大 37cm である。床面の北小口側に長辺 74cm 短辺 33cm，床面からの深さ約 19cm の掘り込みを確認した。この掘り込みは小口石を据えるための溝と考えられるが[6]，石材は確認できなかった。頭位については不明であるが，周囲の墓壙（ST6・8）が北側を頭位としていることから，北側の可能性が高い。

○ ST8（第 170・171 図）

ST8 は ST7 の東約 0.5m に位置する。墓壙は南端が流失しており，北側も境内の石垣により攪乱を受けている。床面形状は長方形で，主軸は N10°W である。規模は墓壙床面の長辺が 142cm 以上，短辺は北側で 80cm 南側で 68cm，床面標高は 145.90m，深さは現状で最大 38cm である。床面の北小口側に長辺 62cm 短辺 12cm，床面からの深さ約 3cm の掘り込みを確認した。この掘り込みは石材を据えるための溝と考えられる。土層観察では第 2 層は抜石による撹乱層と考えられる。以上のことから，本遺構は石棺墓であったと考えられる。また，床面中央に長辺 62cm 短辺 39cm，床面からの深さ約 6cm の掘り込みを確認したが，用途については不明である。

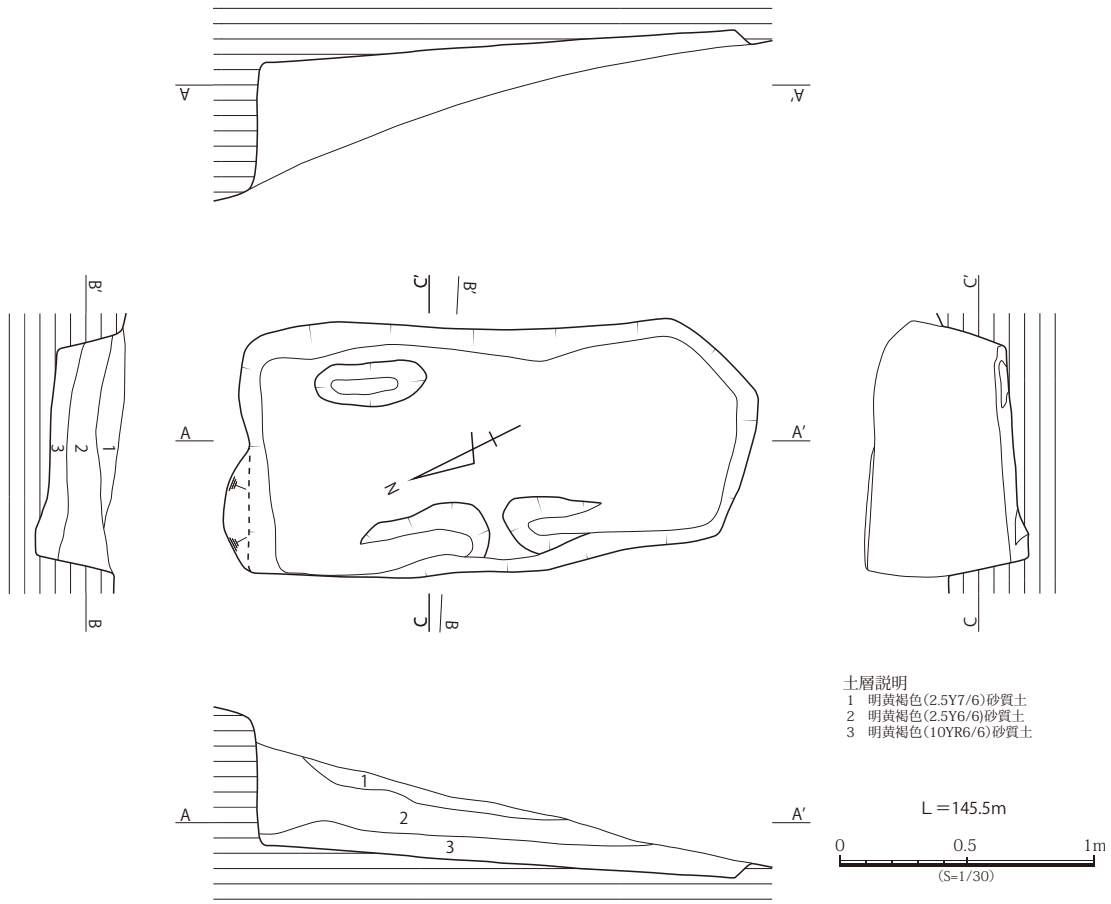
なお，床面の北側で，床面から約 8cm の高さで人骨片（頭骨片及び歯）が出土した。鑑定の結果，人骨は男性の可能性が高い。頭位は人骨の出土した位置から，北側と考えられる。

○ ST9（第 172 図）

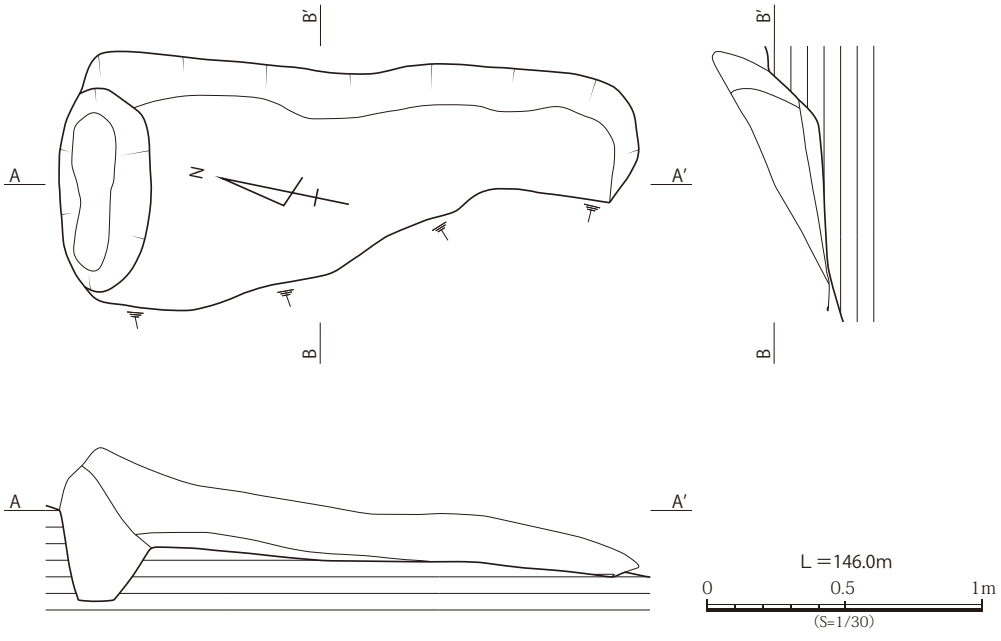
ST9 は調査区域の南東側斜面，ST1 の東約 1.9m に位置する。床面形状は細長い三角形で，主軸は N54°W である。規模は墓壙床面が長辺 145cm 短辺は西側で 75cm 中央部で 60cm，床面標高は 146.10m，深さは現状で最大 39cm である。木棺の痕跡や石材は確認できなかった。頭位は床面形状において西側が広いことから，西側と考えられる。

○ ST10・ST11（第 173 図）

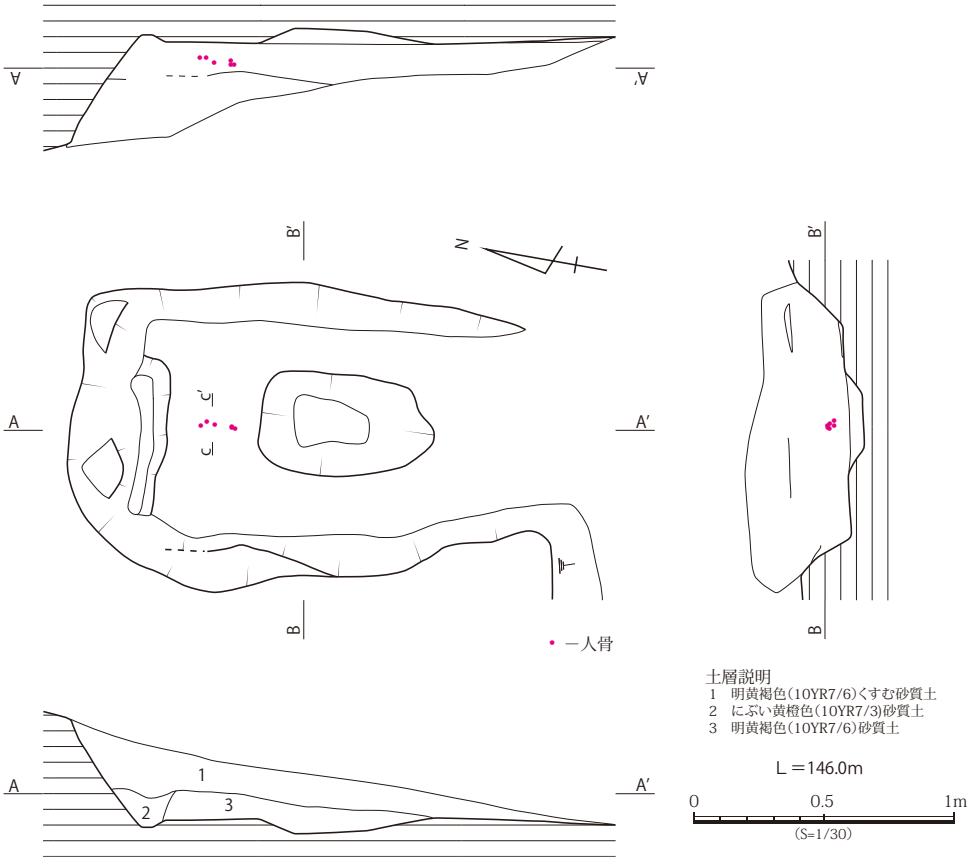
ST10 は調査区域の南東側斜面，ST9 の南約 0.3m に位置する。墓壙は南側が ST11 に切られ，東側は流失している。残存状況から床面形状は長方形であったと推測され，主軸は N101°W である。規模は墓壙床面が長辺 161cm 以上短辺は西側で 61cm，床面標高は 145.83m，深さは現状で最大



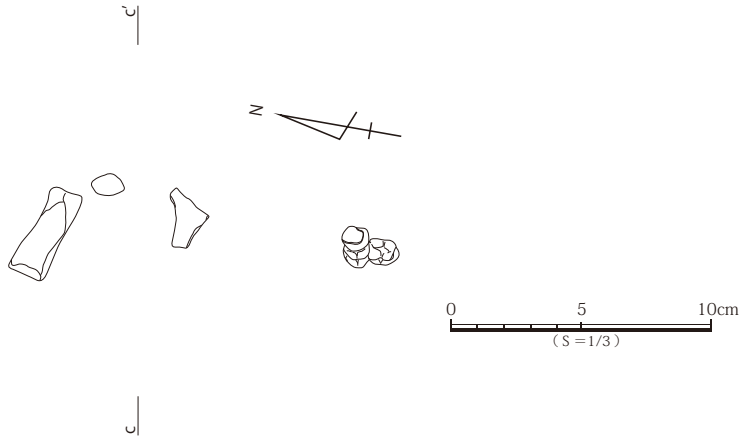
第 168 図　琴平遺跡 ST6 実測図（S ＝ 1/30）



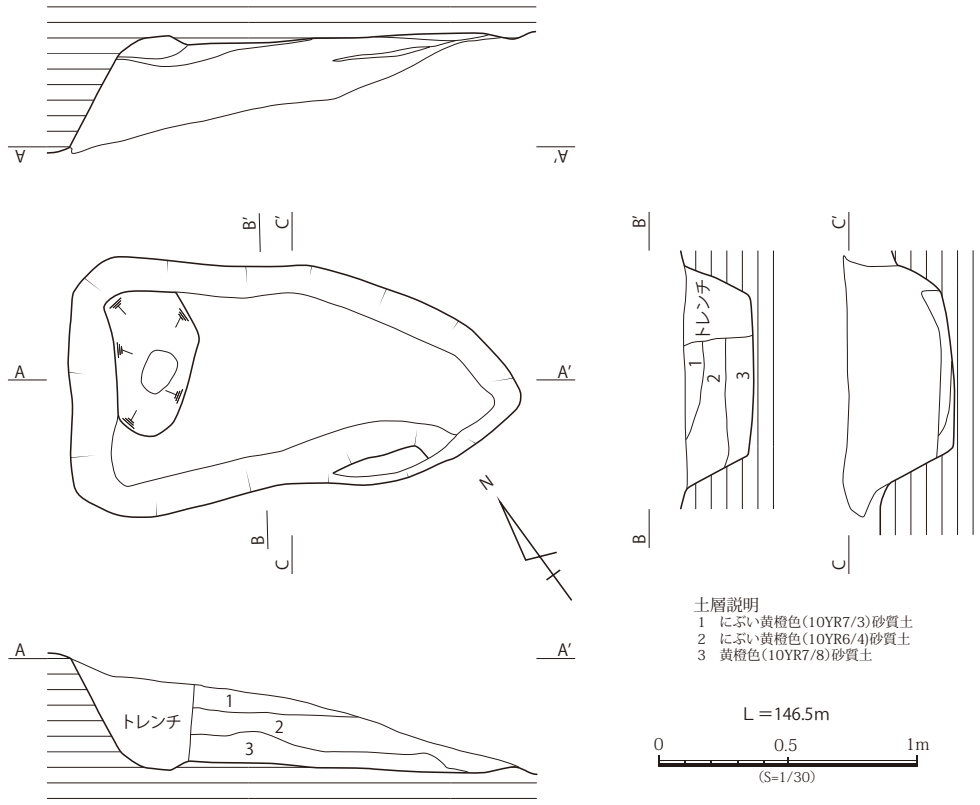
第 169 図　琴平遺跡 ST7 実測図（S=1/30）



第 170 図　琴平遺跡 ST8 実測図（S ＝ 1/30）



第 171 図　ST8 人骨出土状況実測図（S=1/3）



第 172 図　琴平遺跡 ST9 実測図（S ＝ 1/30）

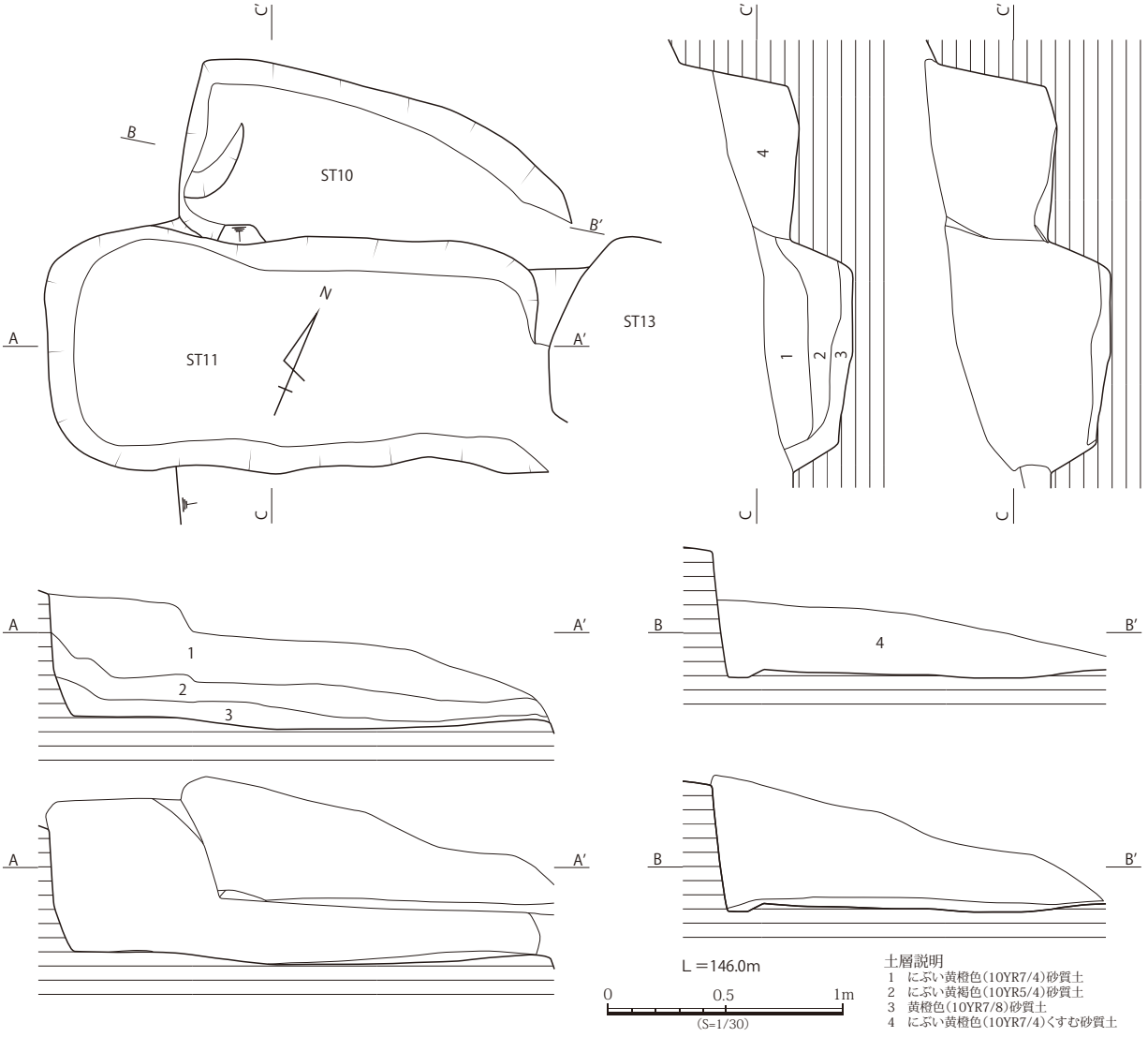
51cm である。床面の西小口側に長辺 31cm 短辺 16cm，床面からの深さ約 3cm の掘り込みを確認した。この掘り込みは木材や石材を据えるための溝と考えられる。木棺の痕跡や石材は確認できなかった。頭位については不明であるが，周囲の墓壙（ST9・11・13）が頭位を西側にとっていることから，西側の可能性が高い。

ST11 は調査区域の南東側斜面に位置し，北側で ST10 を切って位置する。床面形状は長方形で，主軸は N113°W である。規模は墓壙床面が長辺 193cm 短辺 73cm，床面標高は 145.64m，深さは現状で最大 52cm である。木棺の痕跡や石材は確認できなかった。頭位は床面形状において西側が広いことから，西側と考えられる。

なお，ST10 と ST11 の先後関係であるが，土層観察により ST10 → ST11 の順に造られたと考えられる。

○ ST12（第 174 図）

ST12 は調査区域の南側斜面，ST8 から南に約 1.6m に位置する。床面形状は長方形で，主軸は N105°W である。規模は墓壙床面が長辺 180cm 短辺 49cm，床面標高は 145.42m，深さは現状で最大 19cm である。墓壙の西側は直径約 30cm の範囲で後世の撹乱を受けている。床面の内側に

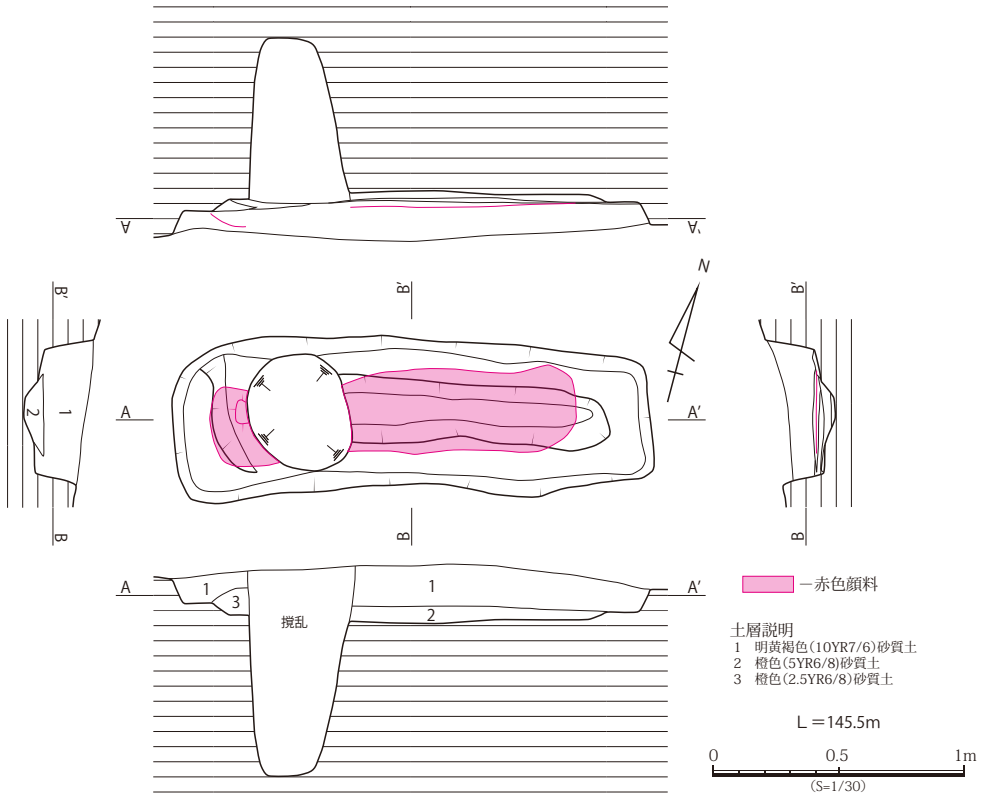


第 173 図　琴平遺跡 ST10・ST11 実測図（S ＝ 1/30）

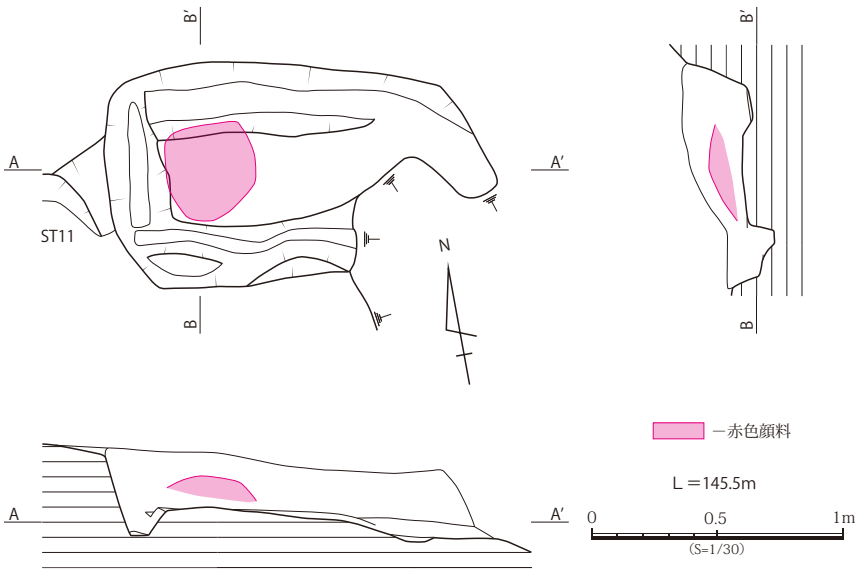
は長辺 109cm 短辺 25cm，床面からの深さ約 6cm の断面が浅い U 字状の掘り込みを確認した。この掘り込みはその形状から木棺を安定させるためのものと推定され，本遺構は木棺墓であったと考えられる。床面の直上から約 11cm 上にかけて，長辺 145cm 短辺 34cm の長方形状に広がる赤色に変色した層を確認した。科学分析の結果，赤色顔料は酸化第二鉄（ベンガラ）であった。頭位は床面形状において西側が広いこと，第 3 層の赤色顔料の検出位置が高く頭部と考えられることから，西側と考えられる。

○ ST13（第 175 図）

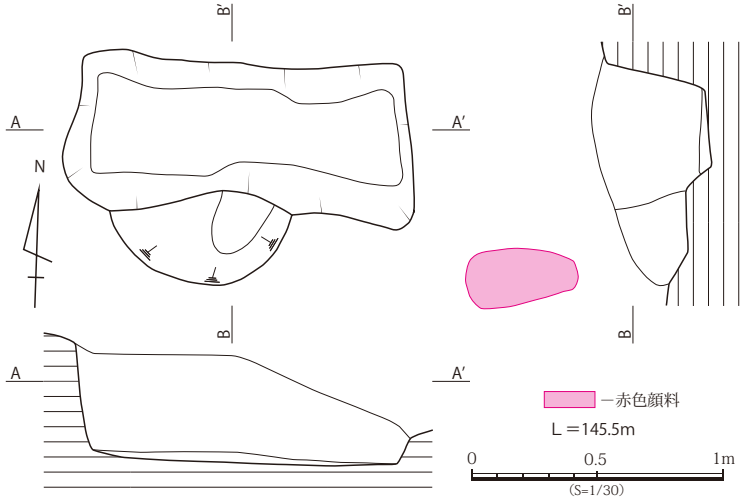
ST13 は調査区域の南東側斜面，ST10・11 の東に接して位置する。墓壙は東側が流失しているが，残存状況から床面形状は長方形と考えられる。主軸は N79°W である。規模は墓壙床面の長辺が 146cm 以上短辺は西側で 60cm，床面標高は 145.55m，深さは現状で最大 30cm である。床面の西小口側に長辺 50cm 短辺 7cm，床面からの深さ約 9cm の掘り込みと，床面の南北両側に幅 4 ～



第 174 図　琴平遺跡 ST12 実測図（S ＝ 1/30）



第 175 図　琴平遺跡 ST13 実測図（S=1/30）



第 176 図　琴平遺跡 ST14 実測図（S ＝ 1/30）

13cm，床面からの深さ約 10cm の掘り込みを確認した。これらの掘り込みは木材や石材を据えるための溝と考えられる。木棺の痕跡や石材は確認できなかった。西側の床面直上から約 12cm 上にかけて，長辺 40cm 短辺 36cm の方形状に広がる赤色に変色した層を確認した。科学分析の結果，赤色顔料は酸化第二鉄（ベンガラ）であった。頭位は赤色顔料を検出していることから，西側と考えられる。

○ ST14（第 176 図）

ST14 は調査区域の南東側斜面，ST11 の南約 0.9m に位置する。床面形状は長方形で，主軸は N92°W である。規模は墓壙床面で長辺 121cm 短辺 29cm，床面標高は約 145.19m，深さは現状で最大 48cm である。木棺の痕跡や石材は確認できなかった。頭位は床面形状において西側が広いことから，西側と考えられる。

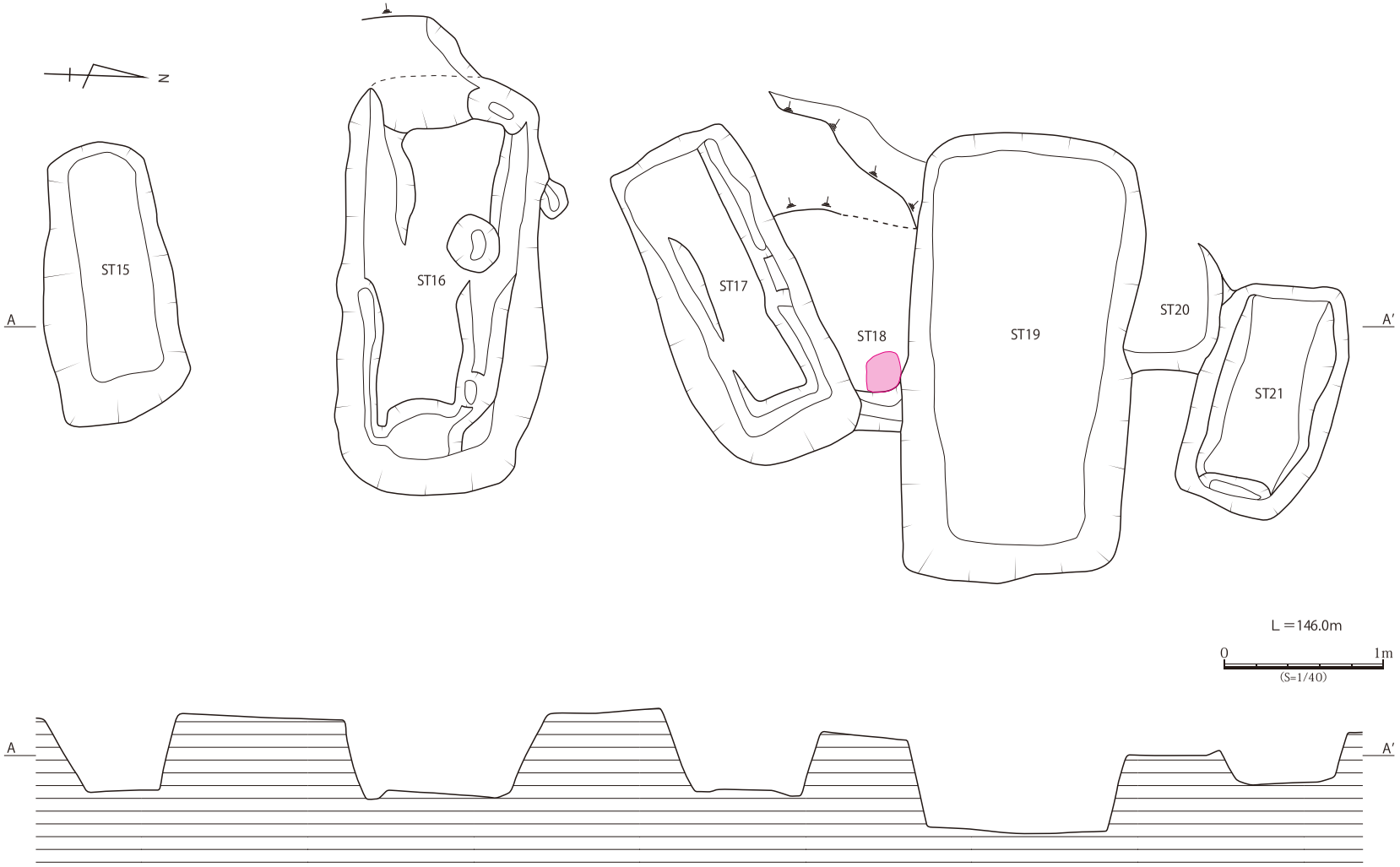
なお，墓壙外の南東約 30cm の位置に長辺 45cm 短辺 28cm の楕円形状に広がる赤色顔料で赤変したと考えられる面を確認した[7)]。ST14 の床面は赤変していないため，もう一基墓壙が存在していた可能性がある。

○ ST15（第 178 図）

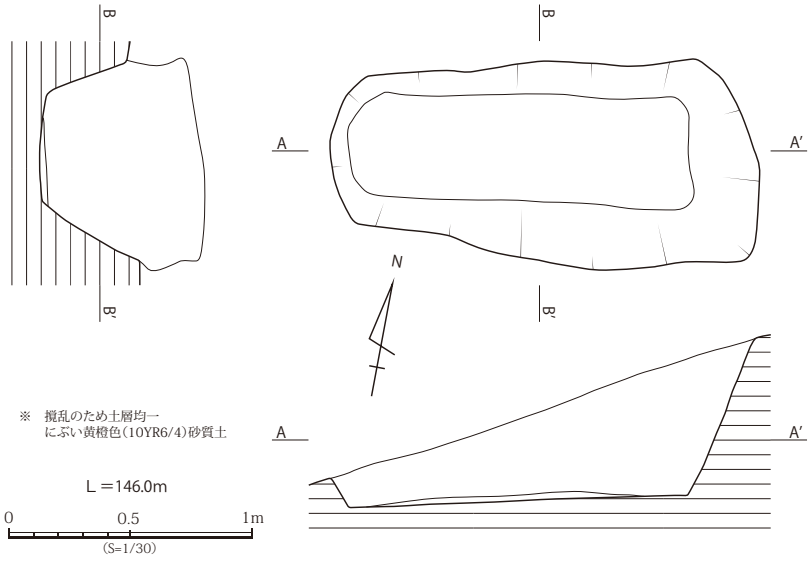
ST15 は調査区域の西側斜面，ST1 の北西約 1.7m に位置する。床面形状は長方形で，主軸は N 101°Wである。その規模は墓壙床面が長辺 139cm 短辺 44cm，床面標高は 145.77m，深さは現状で最大 65cm である。土層観察では埋土全面で後世の攪乱を受けており，本遺構が石棺墓であるか木棺墓であるかは不明である。しかし，全体で撹乱を受けていることは抜石が行われた可能性が高く，石棺墓の可能性がある。なお，頭位については不明である。

○ ST16（第 179 図）

調査区域の西側斜面，ST15 の北約 1m に位置する。墓壙は西側の一部を流失している。床面形



第 177 図　琴平遺跡西側斜面遺構断面図（S=1/40）



第 178 図　琴平遺跡 ST15 実測図（S ＝ 1/30）

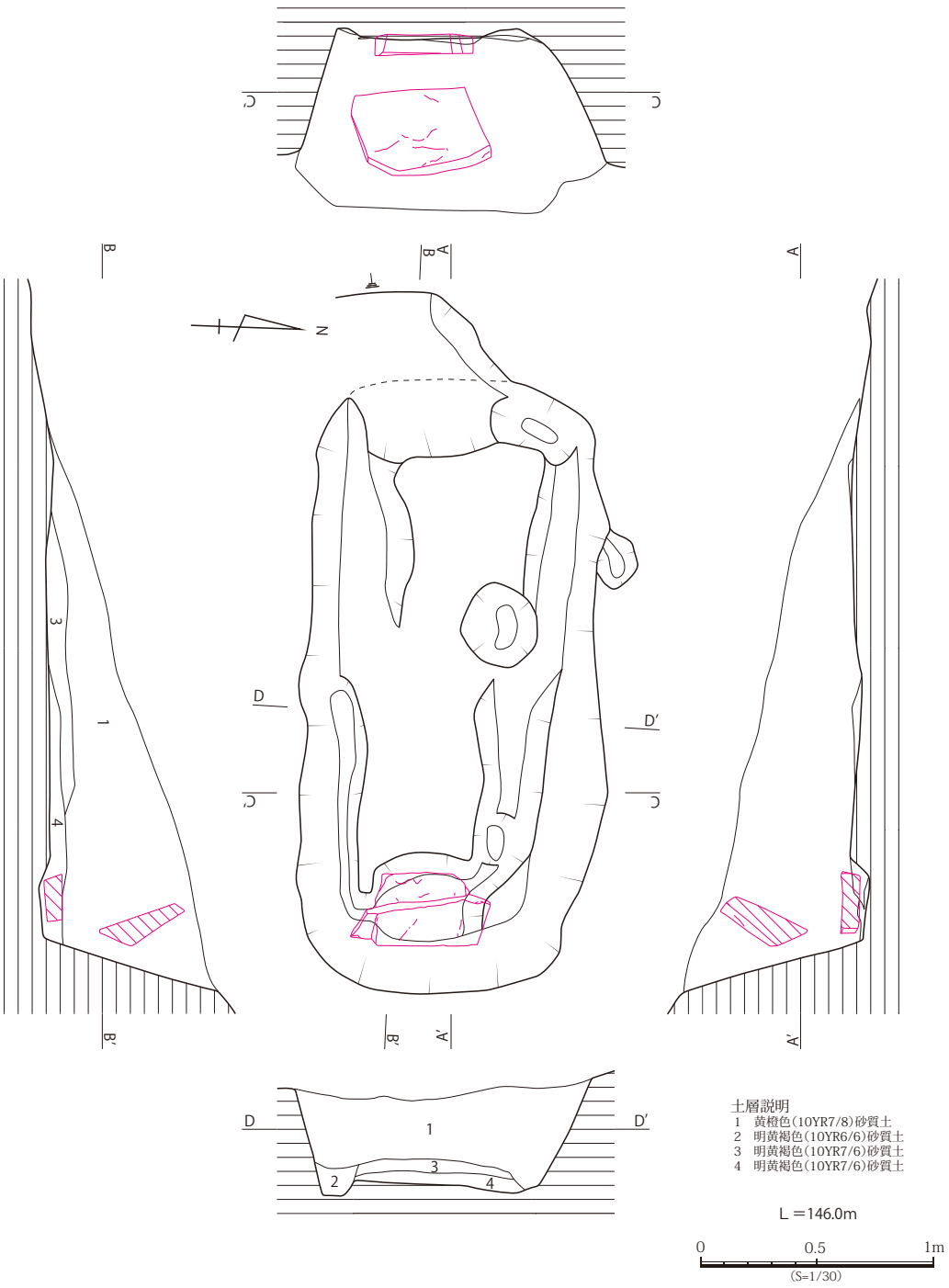
状は長方形で，主軸はＮ 92°Ｗである。規模は墓壙床面で長辺が推定 212cm，短辺は西側 102cm 東側 80cm，床面標高は 145.78m，深さは現状で最大 77cm である。床面の南北と東側には幅 4 ～ 36cm，床面からの深さ約 4cm の掘り込みを確認した。これらの掘り込みは石棺の石材を据えるための溝と考えられる。墓壙内の東側埋土（第 1 層）中からは，石棺の石材と考えられる石を確認した。土層観察では第 1・2 層は撹乱を受けており，抜石が行われた際に取り残した石と考えられる。また，東側床面直上で長辺 40cm 短辺 13cm 厚さ約 5cm の板状の石を確認した。この石は床面の掘り込みに据えられていることから原位置を保っているものと考えられる[8)]。以上のことから，本遺構は石棺墓であったと考えられる。頭位は床面形状において西側が広いことから，西側と考えられる[9)]。

○ ST17・ST18（第 180 図）

ST17 は調査区域の西側斜面，ST16 の北約 0.4m に位置し，墓壙の北側で ST18 を切っている。床面形状は長方形で，主軸は N116°W である。規模は墓壙床面で長辺 161cm 短辺 33cm，床面標高は 145.80m，深さは現状で最大 66cm である。

床面の西側を除く壁際に沿って幅 5 ～ 13cm，床面からの深さ約 5cm の掘り込みを確認した。この掘り込みは石棺の石材を据えるための溝と考えられる。土層観察では全ての層で撹乱を受けており，後世に抜石が行われたものと考えられる。以上のことから，本遺構は石棺墓であったと考えられる。なお，頭位については不明である。

ST18 は ST17 と ST19 との間に位置する。墓壙の南北を ST17・19 によって切られており，斜面に造られているために流失が著しく，墓壙の東壁と床面の一部のみが残存する。その規模及び平面形状などの状況は判別できなかったが，床面には長辺 25cm 短辺 22cm の方形の範囲でわずか

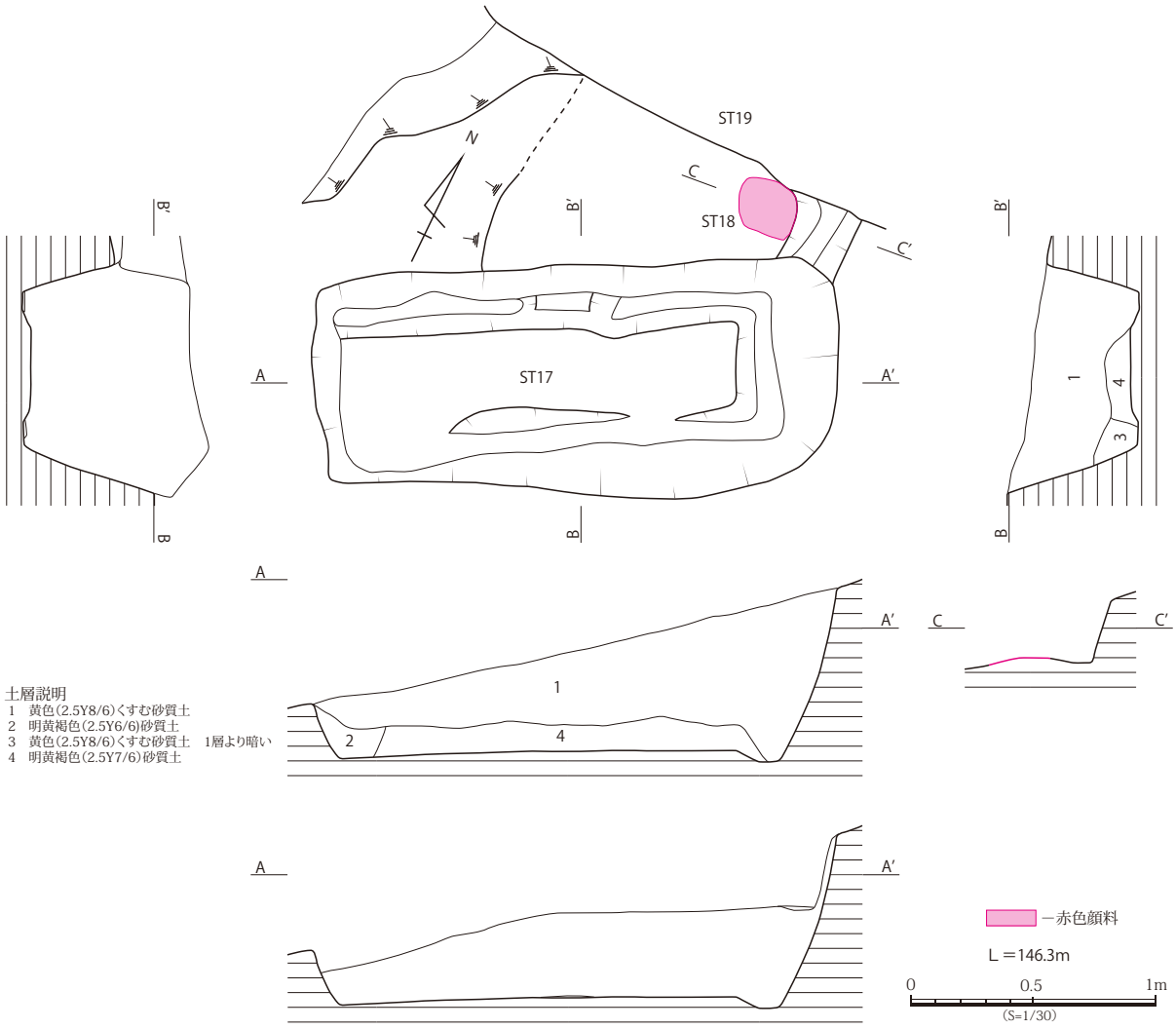


第 179 図　琴平遺跡 ST16 実測図（S ＝ 1/30）

に赤色顔料による赤変する場所を確認した[10]。以上のことから，頭位は東側であると考えられる。

○ ST19（第 181 図）

ST19 は調査区域の西側斜面，北側で ST20 と南側で ST18 を切って位置している。床面形状は長方形で，主軸は N87°W である。規模は墓壙床面で長辺 244cm 短辺は西側で 120cm 東側で 86cm, 床面標高は 145.51m, 深さは現状で最大 113cm である。木棺の痕跡や石材は確認できなかったが，墓壙床面の短辺が 80cm を超える他の遺構が石棺墓と考えられることから，本遺構も石棺墓



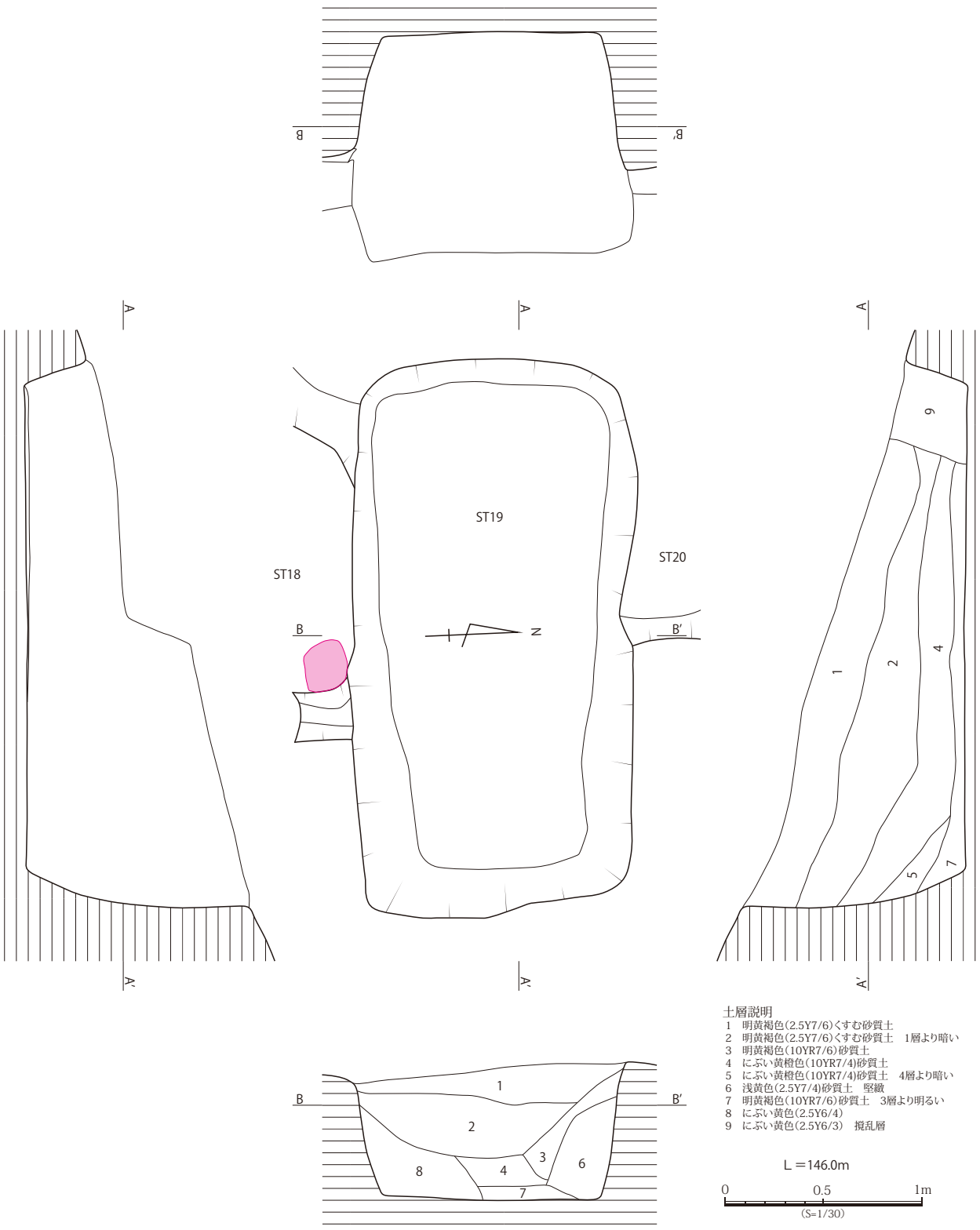
第 180 図　琴平遺跡 ST17・ST18 実測図（S ＝ 1/30）

であった可能性が高い。頭位は床面形状において西側が広いことから，西側と考えられる。

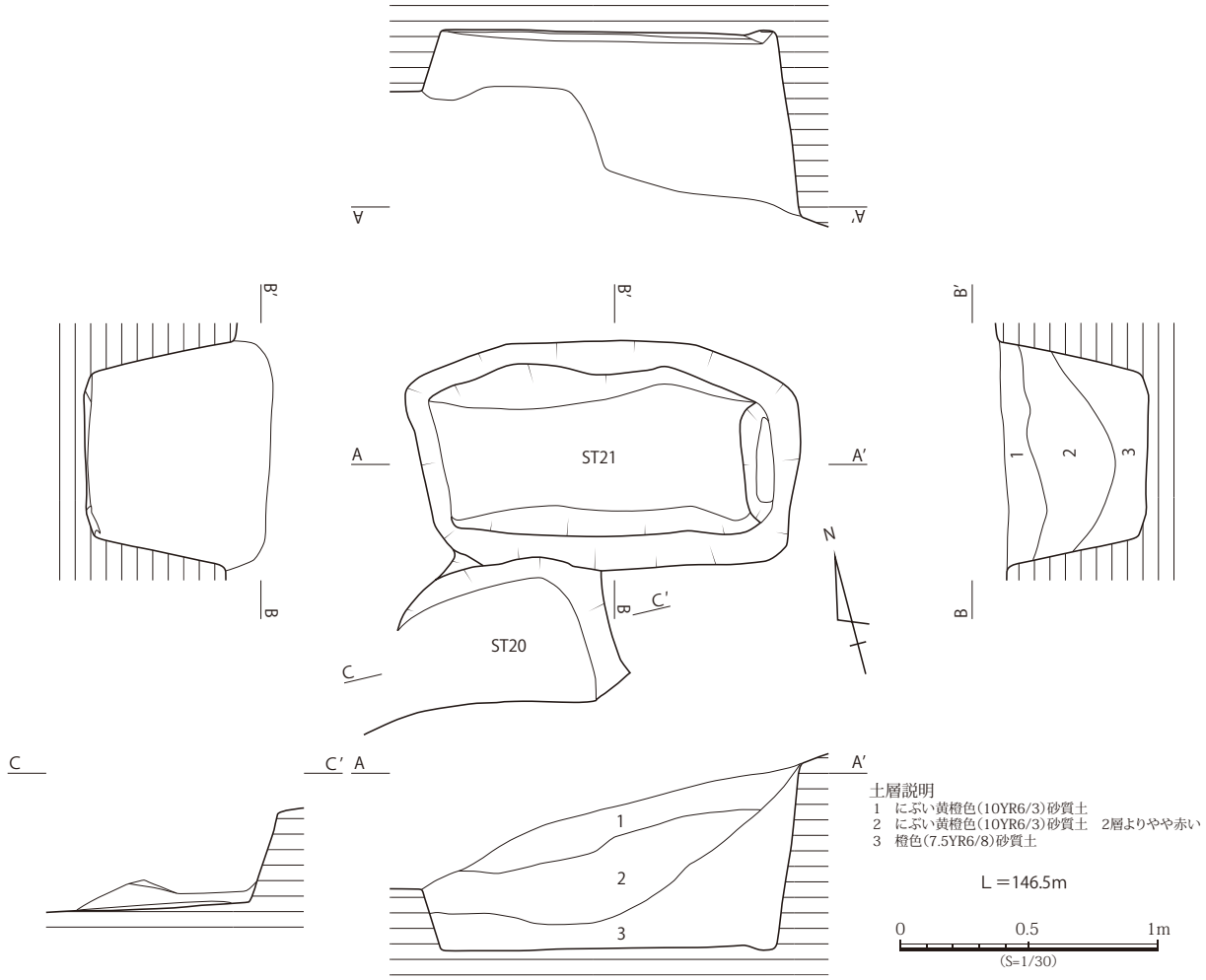
○ ST20・ST21（第 182 図）

ST20 は南側を ST19 に切られ，北側は ST21 と切り合って位置する。遺存状態は悪く，墓壙床面は現状で長辺 67cm 短辺 53cm とそれに伴う壁面が残存するのみである。床面標高は 145.99m，深さは現状で最大 38cm である。木棺の痕跡や石材は確認できなかった。

ST21 は調査区域の西側斜面，ST20 と切り合って位置する。床面形状は長方形で，主軸は N76° W である。規模は墓壙床面で長辺 128cm 短辺 44cm，床面標高は 145.83m，深さは現状で最大 68cm である。床面の東小口側に長辺 47cm 短辺 11cm，床面からの深さ約 2cm の掘り込みを確認した。この掘り込みは木材や石材を据えるための溝と考えられる。木棺の痕跡や石材は確認できなかった。頭位については不明であるが，周囲の墓壙（ST16・19）が頭位を西側にとっていることから，西側の可能性が高い。



第 181 図　琴平遺跡 ST19 実測図（S ＝ 1/30）



第 182 図　琴平遺跡 ST20・ST21 実測図（S ＝ 1/30）

4．出土遺物（第 183 図）

遺物は，表土中から弥生土器片 4 点と，須恵器片 1 点が出土した。弥生土器は椀形土器や甕形土器の口縁部や底部で，その特徴から弥生時代後期に属するものと考えられる[11]。須恵器は坏身の底部で，その特徴から 8 ～ 9 世紀頃のものと考えられる[12]。いずれも小片であり，遺構に伴うものでは無いため，遺跡の時代を特定する事はできなかった。

5．小結

琴平遺跡からは，石棺墓や土壙墓 21 基からなる墳墓群を確認した。調査区の大半は後世の社の構築により，攪乱や削平を受けているものが多く遺存状態は良くなかった。墓壙は付近の水田面へと急激に下る尾根のわずかな鞍部に造られており，調査区外は急峻な斜面となっていることから，墓域は調査区域内に収まるものと考えられる。

前述した通り，遺跡は社の構築時に，出てきた石材を境内の石垣や社の土台として使用したと伝

えられていた。調査前に確認した石垣や土台に使用されていた石は，石棺に使用されるのに適した板石が多く，量も相当量が使われていた。発掘調査において，このことを示すかのように墓壙の大半は抜きとり等により攪乱を受けていることが確認され，石棺墓として形を残しているものはなかった。墓壙内施設が石棺であったと考えられるものは攪乱を受けているものと考えられ，このうち石棺と断定できるものはST1・5・16の3基のみであった。一方，ST2・3・4・12の4基からは木棺の痕跡が確認できた。ここで，現状で確実に石棺墓と考えられる墓壙と木棺墓と考えられる墓壙の掘り方の形状を比較すると，石棺墓と考えられる墓壙は短辺の長さが100cm以上と幅広の形状を呈しているのに対し，木棺墓と考えられる墓壙は短辺が60～80cmと狭く細長い形状をとる。これは棺材が石の場合厚みがあるため，埋葬空間を確保するために掘り方を木棺に比べ広く掘る必要があったためと考えられる。こうした掘り方の長辺と短辺の比率（長辺/短辺）を求めると，比率が2.5～2.9のグループと，2.0前後のグループに分けることができ[13]，前者が木棺墓に，後者が石棺墓にあてはめることができる。また，木棺墓と考えられるこれらの墓壙から赤色顔料が検出されていることから，同様に赤色顔料を有するST13・18も木棺墓であった可能性がある。以上のことと検出時の状況から，本遺跡での木棺・石棺を比定すると次のとおりとなる。

木棺墓（6基）－ ST2・3・4・12・13・18

石棺墓（11基）－ ST1・5・6・7・8・9・11・15・16・17・19

不明（4基）－ ST10・14・20・21

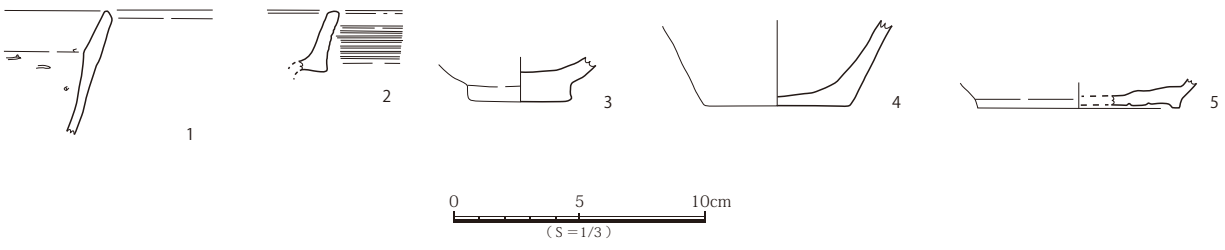
調査により検出した墓壙は狭い鞍部に集中して位置するが，調査区の中心付近には墓壙が存在しない空間がある。墓壙はこの空間を取り巻く形で位置する。この空間に存在した墓壙が社構築時に削平されたことも考えられるが，地形上もっとも削平が著しいと考えられるST2においても深さは30cm以上残存していることから，その可能性は低い。墓壙は互いに切り合うものは少なく，以前に造られた墓壙を意識して造られており，何らかの空間的規制が働いたものと考えられ，中心の空間は祭祀等に使用される広場等の目的をもっていたと想定できる。

次に墓壙の軸方向を見てみると，21基の墓壙のうち，主軸不明の2基（ST18・20）を除くと，主軸を東西方向にとる墓壙が16基と大半を占める。一方ST6～8の3基のみが他と異なり主軸を南北方向にとる。これは墓壙を造る際に出自による軸方向の規制があり，ST6～8の3基の被葬者は，東西方向に主軸を持つ集団とは別の出自であった可能性が考えられる[14]。

さて，本墓群の築造時期であるが，墓壙に伴う遺物が出土せず，わずかに表土中から弥生時代後期の特徴をもつ土器片及び8～9世紀の特徴を持つ須恵器片が出ているのみで，明確にはしがたい。墓壙は石棺墓・木棺墓の違いはあるが，構造上大きな差異は見られず，ほぼ切り合い関係も見られなかった。これまでの広島湾岸域の発掘調査成果による弥生時代の墳墓群の特徴として，①集落を臨む丘陵上に存在する。②集落とは隔絶された状態で存在する。③どの墓も相互に造り方や立地にほとんど差がない状態で発見されるなどが挙げられており[15]，本遺跡も同様の様相を持つ。以上のことと，可部地域周辺部の墳墓群では弥生時代中期を中心とした比較的古い時期の墳墓群が石棺墓群であることから[16]，坊主山遺跡と同様に弥生時代中期後半ないしは後期初頭から後期後半にかけて築造された集団墓と考えるのが妥当であろう。

注

1）鉄刀は現地に穴を掘り埋められたそうであるが，今回の調査では該当場所で微細な鉄片しか確認できなかった。なお，市内近隣の遺跡からの出土例では，鉄刀は概ね 50cm 以上のものが殆どである事から，鉄刀ではなく，梨ヶ谷遺跡や中小田古墳で出土しているような鉄剣であった可能性がある。
財団法人広島市歴史科学教育事業団『梨ヶ谷遺跡発掘調査報告』1998 年
財団法人広島市文化財団『史跡中小田古墳群遺構状況確認調査報告』2004 年
2）遺体を寝かせた場合最も広くなるのが肩の部分であることから，便宜上墓壙の頭位は幅の広い方の小口とする。
3）床面の溝の状況から小口板を据えた後，側板と一方の小口板を立てたものと考えられる。
4）赤色顔料は頭胸部に施される例が多いことから，本遺跡では赤色顔料を検出した側を頭位とする。
市毛勲『朱の考古学』雄山閣 1975 年
5）側板で小口板を挟むタイプの組み合わせ式木棺であったと考えられる。
6）隣接する ST6 と同規模で，ST6 が石棺墓と考えられることと，掘り込みの規模が大きいことから石棺墓と考えられる。
7）赤色顔料の成分は確認できなかったが，他の墓壙の場合と同じく酸化第二鉄（ベンガラ）と考えられる。
8）この石は寝かせた状態で床面の掘り込みに据えられていることから，枕石であった可能性がある。
9）床面直上の石が枕石であるなら，頭位は東側と考えられる。
10）7 に同じ。
11）若島一則「広島湾岸沿岸における弥生時代後期土器等に関する一考察」『研究連絡誌Ⅰ』財団法人広島市文化財団 2002 年
12）向田裕始「広島県（瀬戸内中部Ⅰ）の 8 世紀の土器」「広島県（瀬戸内中部Ⅰ）の 9・10 世紀の土器」『日本土器辞典』 雄山閣　1996 年
13）小児墓と考えられる小規模なものは除く。
14）都出比呂志「墳墓」『岩波講座日本考古学 4　集落と祭祀』岩波書店　1986 年
15）幸田淳「井口の歴史のあけぼの」『井口村史』 1992 年
16）Ⅱ章でのべた本遺跡から約 2km 南の可部町下町屋に位置する丸子山遺跡（弥生時代中期から後期）や，南西約 3.5km の可部町綾ヶ谷に位置する番谷遺跡（弥生時代後期初頭），北東約 9km の白木町志路に位置する佐久良遺跡（弥生時代中期後半）などの石棺墓を中心とした墳墓群がある。



第 183 図　出土遺物実測図（S=1/3）

第 11 表　琴平遺跡墓壙計測表

（[　]：推定値）

遺構名	検出面（cm）		底面（cm）			底面標高(m)	主軸方位	備　　考
	長辺	短辺	長辺	短辺	深さ			
ST1	217	104	193	79	36	146.08	N 82° W	西側に小口穴。土層に抜石による撹乱。埋土から角礫を検出。
ST2	171	59	147	35	32	146.34	N 81° W	西側に小口穴。頭位に赤色顔料。
ST3	212	83	190	57	32	146.68	N 110° W	南北両側の床面に掘り込み。頭位に赤色顔料。
ST4	209	83	172	62	24	146.70	N 105° W	頭位付近に赤色顔料。
ST5 (内側)	216	118	198 (152)	84 (32)	37	146.49	N 126° W	二重土壙。土層に抜石による撹乱。西側に小口穴。南北両側の床面に石材設置痕。
ST6	204	100	185	82	50	145.40	N 27° E	東西両側の床面に石材設置痕。
ST7	209	94 ～	195	62 ～	37	145.86	N 12° W	北側に小口穴。
ST8	176 ～	118	142 ～	北 80 南 68	38	145.90	N 10° W	北側に小口穴。中央部に掘り込み。床面より人骨片出土。
ST9	175	101	145	西 75 中 60	39	146.10	N 54° W	
ST10	168 ～	77	161 ～	西 61	51	145.83	N 101° W	西側に小口穴。南側で ST11 と重複。
ST11	208	103	193	73	52	145.64	N 113° W	北側で ST10 と重複。
ST12	191	66	180	49	19	145.42	N 105° W	木棺の設置痕。床面に赤色顔料。
ST13	157 ～	90	146 ～	西 60	30	145.55	N 79° W	西側に小口穴。南北の床面に掘り込み。頭位に赤色顔料。
ST14	141	64	121	29	48	145.19	N 92° W	
ST15	176	83	139	44	65	145.77	N 101° W	
ST16	262	132	[212]	東 80 西 102	77	145.78	N 92° W	東側小口に石材残る。南北両側の床面に石材設置痕。
ST17	214	97	161	33	66	145.80	N 116° W	土層に抜石による撹乱。東側小口と南北両側の床面に石材設置痕。北側で ST18 を切っている。
ST18	—	—	—	—	—	146.18	—	北側を ST19 により，南側を ST17 によって切られている。規模，形状とも不明瞭。赤色顔料の痕跡。
ST19	282	147	244	東 86 西 120	113	145.51	N 87° W	北側で ST20 を，南側で ST18 を切っている。
ST20	—	—	—	—	38	145.99	—	北側を ST21 により，南側を ST19 によって切られている。規模，形状とも不明瞭。
ST21	153	89	128	44	68	145.83	N 76° W	東側に小口穴。南西側で ST20 を切っている。

第 12 表　琴平遺跡出土土器観察表

（[　]：復元値）

番号	器種	出土位置	寸法（cm）	器形	成形・調整	備考
1	鉢形土器	表土	—	口縁端部は平らに収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ヨコナデ，胴部ヘラ 削り	胎土：1 ～ 2mm 大の石 英・長石含む。 焼成：良好 色調：橙色 (5YR6/8)
2	甕形土器	表土	—	二重口縁の口縁部。口縁端部内面はやや平らに収める。	外面：ナデ 内面：ナデ 口縁部に櫛歯状工具による 8 条の凹線。	胎土：1 ～ 3mm 大の石英・長石含む。 焼成：良好 色調：にぶい赤褐色 (5YR4/4)
3	土器底部	表土	底径　[4.1]	椀形土器の底部か。底部は平底。	外面：ヨコナデ 内面：ヘラ削り	胎土：1 ～ 3mm 大の石英・長石含む。 焼成：良好 色調：橙色 (10YR6/6)
4	土器底部	表土	底径　[5.8]	土器の底部。底部は平底。	外面：ナデ 内面：ヘラ削り	胎土：1 ～ 2mm 大の石英・長石含む。 焼成：良好 色調：橙色 (7.5YR7/6)
5	坏	表土	高台径　[8.0]	坏の高台部。	外面：ロクロ回転によるナデ 内面：ロクロ回転によるナデ 高台内側に回転ヘラ切り痕。	胎土：精緻 焼成：堅緻 色調：灰色 (7.5Y6/1)

Ⅶ　まとめ

Ⅶ　ま　と　め

これまで，三入・大林地区や可部地区を含む太田川・三篠川流域よりも北側の地域では，弥生時代の本格的な集落跡の調査は行われておらず，また，弥生時代の墳墓群の調査例も少なく，その様相は推測の域を超えるに至らなかった。今回の可部バイパス建設工事の事業地内では安佐北区上町屋所在のトンガ坊城遺跡，安佐北区大林町所在の坊主山遺跡・柳遺跡・琴平遺跡の合計 4 遺跡の発掘調査を実施し，本地域の弥生時代後期から古墳時代前期にかけての様相の一端が明らかとなった。トンガ坊城遺跡からは弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡と古墳時代前期から中期にかけての墳墓群・古墳時代中期の古墳・中世山城跡及び近世墓群が，坊主山遺跡からは弥生時代中期後半から後期にかけての墳墓群が，柳遺跡からは弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡が，琴平遺跡からは弥生時代後期の墳墓群がそれぞれ確認された。今回調査された 4 遺跡の中から，集落跡及び墳墓群について若干の検討を行いたい。

1.「在地系」土器と「山陰系」土器の並行関係について

トンガ坊城遺跡では「在地系」土器[1)]と，これまで「山陰系」土器[2)]と総称して取り扱ってきた土器が同じ遺構面から出土しており，両者は同時期に使用されていたことが分かる。このことから，これらの土器の併行関係をトンガ坊城遺跡の出土例から見てみたい。

トンガ坊城遺跡の SK11 からは一括投棄された状態で，「在地系」土器と「山陰系」土器が出土している。「山陰系」土器はいずれも大木権現山式土器[3)]の特徴を持ち，「在地系」土器の甕（第 70 図 135）はⅢ－ 1 期の特徴をもつ。甕（第 70 図 134）はⅡ－ 3 期の特徴を持つが，土坑の廃棄に伴うもので前時期の土器を投棄したと考えれば，併行関係は一致する。SX16 からもⅢ－ 1 期の「在地系」土器と，大木権現山式土器の特徴を持つ「山陰系」土器が出土しており，その併行関係は一致する。これまで，「在地系」土器と「山陰系」土器の併行関係は，「在地系」土器のⅡ－ 3 期を鍵尾式土器[4)]に，Ⅲ－ 1 期を大木権現山式土器に，Ⅲ－ 2 期を小谷式土器[5)]に併行するという考え方が示されてきた[6)]。以上のことから，本遺跡の成果は従来からの「在地系」土器と「山陰系」土器の併行関係を裏付ける一例となる。

2. 集落跡について

今回の可部バイパス建設工事の事業地内では，集落跡として弥生時代後期から古墳時代前葉にかけての集落跡であるトンガ坊城遺跡と柳遺跡を確認した。トンガ坊城遺跡からは竪穴住居跡 14 軒，テラス状遺構 18 か所，柱穴群 1 か所，土坑 13 基を確認し，柳遺跡からは竪穴住居跡 13 軒，掘立柱建物跡 1 軒，テラス状遺構 6 か所，土坑 10 基を確認している。両遺跡とも竪穴住居跡は重複等を考慮すると 18 軒以上は想定でき，存続期間の上限は弥生時代後期初頭（Ⅰ期）あたりにあり，下限は古墳時代前期（Ⅲ－ 2 期）にまでおよぶ。以下に両遺跡の各時期の遺構関係の表を再掲するが，両遺跡とも古墳時代初頭（Ⅲ－ 1 期）頃に出土土器や遺構数の面からも集落が急に拡大していることがわかる。

・トンガ坊城遺跡

Ⅰ期	Ⅱ－1	Ⅱ－2－①	Ⅱ－2－②	Ⅱ－2－③	Ⅱ－3	Ⅲ－1	Ⅲ－2
	SH1		SX7c	SH6	SH7	SH4b	SH5b
			SH10	SK10	SH9	SH12	SH13b
			SX12			SH13a	
						SH14	
						SX13	
						SX14	
						SX16・17	
			・・・SH8	・・・SH11	・・・SX8・9	・・・SK11・12	・・・SX1・2
			SX3・・・		・・・SH2・3	・・・SH5a	
				・・・SK1	・・・SH4a	・・・SX2	
					・・・SX12	・・・SX4	
				・・・SK2		・・・SX5	
						・・・SX7	

・柳遺跡

Ⅰ期	Ⅱ－1	Ⅱ－2－①	Ⅱ－2－②	Ⅱ－2－③	Ⅱ－3	Ⅲ－1	Ⅲ－2
SH6	SX5		SH3		SH4	SH1	SH12
			SH11			SH9	
			SX6			SH13	
						SX6	
・・・SB1	・・・SX4	・・・SK9	・・・SH2	・・・SX1	・・・SH8		
	・・・SK4		・・・SX2	・・・SX3	・・・SH10b・a		
	SK5・・・			・・・SK8		SH10c	・・・

これまで，広島市内の太田川流域・八幡川・石内川流域・瀬野川流域といった広島湾岸域の弥生時代後期を中心とした時期の集落をみると，① 10 数軒以上の住居跡からなり，弥生時代中期末葉もしくは後期の早い時期から古墳時代初頭まで長期間存続するもの，② 1 ～数軒程度の住居跡からなり，短期間のみ存続するものの 2 種に大別できる。このうち，①の特徴をもつものを主要な河川の小支流ごとにある拠点的な大規模集落に，②の特徴をもつものを分村的な小規模集落ととらえてきた[7]。これにあてはめて両遺跡を見ると，遺構数・存続期間共に①の特徴を持つ大規模集落とみなすことができよう。

次に両遺跡の古墳時代初頭頃の集落の急激な拡大化についてみる。ここで，②の特徴をもつ集落跡に着目すると，集落跡の大半は古墳時代初頭頃のものである。さらに，そのなかには古墳時代初頭前後の短期間に複数の住居跡で構成される集落が出現することが確認されてきている[8]。つまり，古墳時代初頭前後の時期に住居や集落が増加したことがわかり，両遺跡の集落の拡大化はこうした状況の反映と捉えられる[9]。

次に出土土器の面から両遺跡に共通する特徴をあげると，「山陰系」土器の出土量の多さがあげられる。これまで，太田川下流域では「山陰系」土器が出土しても 1 遺跡数点程度がほとんどであったが，両遺跡ともその出土量は群を抜いて多い。

太田川下流域の「山陰系」土器の出現時期を見てみると，全域を概観すればⅡ－3 期（鍵尾Ⅱ

式併行）に併行する前後の時期のものが散見されるようになり，その後増加するとはいえ他の土器との比率からいえば1割にも満たない遺跡が大半である。また，これらの土器を含む太田川下流域で出土した「山陰系」土器の大部分が，特に胎土の点で「在地系」土器と明らかに異なっており，供給地点がどこであるのかについては疑問が残る。

それに対してトンガ坊城遺跡では，それまでの時期に比べて土器の出土量が急激に増加するⅡ－3期は太田川下流域の他の地域と同じ様相を示しているのが，古墳時代初頭（Ⅲ－1期）になると「山陰系」土器が多量に出土するようになる。特に，甕形土器の「山陰系」土器の占める割合をみると，Ⅲ－1期では8割近くを「山陰系」土器が占めることとなる。続くⅢ－2期には土器全体の出土数は減少するが，甕形土器の出土比率は7割近くを「山陰系」土器が占めている。一方，柳遺跡ではⅢ－1・2期を通して「山陰系」土器のみの出土となる。さらに，可部地区で平成19年から21年にかけて調査された上ヶ原遺跡[10]をみると，「山陰系」土器の占める割合はⅢ－1期に高くなり，甕形土器についてみると「山陰系」土器の割合は3割程度であることがわかっている。これらの「山陰系」土器の供給地点については，搬入土器として考えるには多量に出土しており遠隔地からの搬入は想定し難いことから，その供給地点については今後一考する必要がある。なお，産地は確認できていないが，三入地域は「山陰系」土器に使用された淡水成粘土がとれる地質条件にあり，在地製作は可能と考えられる。

以上のことをまとめると以下のとおりとなる。

①トンガ坊城遺跡・柳遺跡とも弥生時代後期初頭頃から継続的に営まれた，いわば太田川下流域の一般的な大規模集落である。

②両遺跡とも，Ⅲ－1期に集落が急激に拡大している。

③集落の拡大傾向はⅡ－3期にトンガ坊城遺跡で顕在化し，その後のⅢ－1期に顕著となる。柳遺跡はⅢ－1期に遅れて拡大化の傾向を示す。

④両遺跡とも，Ⅲ－1期からⅢ－2期の時期に，特に甕形土器を中心に「山陰系」土器の使用される割合が圧倒的に高くなっている。

これらの変化が何を表すものかは，周辺の遺跡の調査も緒についたばかりであり，両遺跡のみに限られた状況なのか否かは明確にはできない。

次に両遺跡の地理的な位置づけに注目したい。すなわち，遺跡の位置する三入地域は山陰へと抜ける交通の要衝であり，太田川や根の谷川を利用して広島湾沿岸部へと向かうことのできる山間部との境目である。付近には，貝製腕輪が出土した弥生時代中期の墳墓群である丸子山遺跡があり，内海を利用した北部九州との関わりが見られるなど，内海と山陰地方とを結ぶ地点であったと考えてもよいであろう。特に，トンガ坊城遺跡や柳遺跡の「山陰系」土器の主な時期である大木権現山式土器の時期にあたる「山陰系」土器は，中国地方山間部から近畿・北部九州・北陸地方まで幅広く出土しており，当時期が山陰地方からの人的・物的交流が盛んになる時期と考えられている。

両遺跡で確認された『Ⅲ－1期での「山陰系」土器の増加』＝『「山陰系」土器を使用する新しい文化の受容』は，前述した時期に相応するものであり，本地域が山陰の文化が流入する起点・交流の拠点となっていたということを示しているものと考えられる。また，両遺跡においてⅢ－1

期に集落が拡大したことは，それぞれの地域の政治的要因というよりも，経済的活動に基づいた物資の交流が盛んになったことがその要因にあると考えたい。

3. 墳墓群について

墳墓群としては，トンガ坊城遺跡では石棺墓 2 基・土壙墓 13 基を，坊主山遺跡では石棺墓 1 基・土壙墓 39 基（うち 21 基は木棺痕跡を確認）を，琴平遺跡では石棺墓と土壙墓 21 基（うち 11 基が石棺墓，6 基が木棺墓と推定）が確認された。トンガ坊城遺跡の墳墓群は集落廃絶後に造られたものである。弥生時代の墳墓群である坊主山遺跡・琴平遺跡については，集落からは離れた近隣の尾根に造られており，集落からは隔絶した空間といえよう。また，埋葬施設に違いはありながらも，規模や配置に大きな格差を示す状態はみられず，副葬品もほとんどないことから，集団墓地としての特色を備えているといえよう。ただし，坊主山遺跡の ST14 においては，墓域の中心に位置し，墓域唯一の石棺墓であることから，身分や格差がないながらも被葬者は集団の中で特別な存在であったことが窺える。

これまでの広島湾沿岸域の弥生時代の墳墓群の調査では，沿岸部では土壙墓を主体とし，当地区を含む内陸部では石棺墓を主体とする傾向があることが挙げられてきた[11]。これは墳墓群の調査例が少なく，同じ根の谷川流域の丸子山遺跡や番谷遺跡[12]，安佐北区白木町志路の佐久良遺跡[13]で石棺墓が主体となっていることから推し量られたものである。しかしながら，今回の調査により土壙墓を主体とする坊主山遺跡や少なくとも 3 割が土壙墓の琴平遺跡が存在することや，太田川・三篠川よりも北側に位置する安佐北区安佐町飯室の恵下遺跡[14]では，弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土壙墓 53 基・石棺墓 4 基と土壙墓が中心であることから，単に地域差ではなく時期差によるものなど従前の考えを再考する必要がある。

また，今回の調査では隣接する尾根に同時期頃の集落跡と墳墓群が交互に確認されたことから，その集落の住民の墓地としての関連性が窺える。周辺の遺跡の調査をしていないなか一概には言えないが[15]，その住居数・規模との対比からトンガ坊城遺跡と坊主山遺跡・柳遺跡と琴平遺跡の組み合わせと捉えられなくもない。

4. トンガ坊城遺跡出土のコシキ形土器に関する考察

トンガ坊城遺跡からは，円筒形で両側が開口した器形をし，一対もしくは二対の半環状の把手を体部に持つ「コシキ形土器」もしくは「甑形土器」（以下コシキ形土器と呼ぶ。）と呼称される土器が多数出土している。これまで，この種の土器については様々な研究が行われ，その天地の向きや性格（甑説・仮器説・煙突説など）には諸説が論じられてきたが，出土数が限られるため，その性格を解明するに至っていない。

本遺跡からは，遺構に伴う形で 8 点，埋土中から 5 点の計 13 点のコシキ形土器が出土している[16]。時期の明らかなものは , 共伴する遺物からほとんどが古墳時代初頭（Ⅲ－ 1 期）に属し，（10）のみが古墳時代前期（Ⅲ－ 2 期）に属する。本遺跡から出土したものを含め，これまで広島湾沿岸部で出土したものは，円筒形で一方は広く（広口部）一方は狭く（狭口部）作られていることや，

弥生時代後期末葉から古墳時代前期の時期にかけて出土するという共通点はあるが，その形や把手・突帯の位置・有無など同じ形状をしたものは一つもない。

前述したとおり，本遺跡から出土したものもいずれも形状は異なるが，その胎土から 2 種類に分けることが可能である。一つは「在地系」土器と同様の赤褐色でやや粗めの胎土を持つもの，もう一つは「山陰系」土器と同様に精緻で白色気味の胎土をもつものである。

前者の胎土を持つものには（25・28）がある。（25）の器厚は 2cm 前後で，体部は広口部から内傾しながら立ち上がり，体部の中位で角度を上方に変えて延びる。広口部に貼り付けによる半環状把手を横方向に，狭口部には貼り付けによる突帯を持つ。（38）は器厚は 1.5 ～ 2cm で，体部の角度変換部は中位よりやや上目になるが，（25）と同様に角度を変換し立ち上がる。広口部には貼り付けによる牛角状突起を 7 個持ち，狭口部には貼り付けによる突帯をもつなど，他に類例をみない形状を呈している。（25・28）とも把手部の形状の違いはあるが，把手・突帯は貼り付けによるものであり，体部の中央付近で「ハ」の字状に角度が変換している。また，他にも①の胎土を持つものには，把手をもたない小型の（22）や破片の（9・31・35・43・176）がある。

後者の胎土を持つものには（10・30・177）がある。（10）は，器厚は 0.8 ～ 1.3cm と大型品でありながら非常に薄い[17]。体部はほぼ直線気味に内傾しながら立ち上がる。広口部には差し込みによる半環状把手を縦方向に，狭口部は横方向に持つ。（177）は狭口部がすぼまるが，他は（10）と同様の作りを呈する。（30）も広口部のみの残存ではあるが同様の特徴を持つ。

これまで広島湾沿岸域で出土したコシキ形土器はその胎土と同様に前者の特徴を持っており，言い換えれば広島湾沿岸タイプともいえる。また，後者の特徴を持つものは，県北や山陰地方に類似する形状が出土しており県北・山陰地方タイプともいえる。以上のことをまとめると，トンガ坊城遺跡で出土したコシキ形土器は，以下の 2 系統に分けることができる。

① 広島湾沿岸（太田川流域）タイプ
- 「在地系」と同様の赤褐色でやや粗めの胎土を持つ
- 器厚は 2cm 前後と厚めである。
- 把手，突帯は貼り付けである。突帯，把手を持たないものもある。
- 体部の中位付近で「ハ」の字状に広がる。小型のものは器形が「ハ」の字状に広がる

② 県北・山陰地方タイプ
- 「山陰系」土器と同様の白色気味で，精緻な胎土をもつ。
- 器厚は 1cm 前後と薄めである。
- 把手は差し込み式である。
- 体部は広口部から狭口部にかけて直線気味に延びる。

また，これまでに広島湾沿岸域で出土したもので，狭口部に半環状の把手をもつものは，本遺跡の近隣である可部地区の上ヶ原遺跡以外では出土しておらず，狭口部には把手を持つものは県北・山陰地方タイプの特徴ともいえる。

次に出土状況から設置時（使用時）の状態を復元してみる。コシキ形土器（10）は，SH5 の炉跡の上で広口部を下にし，ほぼ立った状態で出土した。検出時の状態は，狭口部は炉跡の中心部に，

広口部は炉跡の中心部より北東側に位置し，南西側に傾く形で出土している。広口部の片側は炉壁に接し，もう一方は炉の中央付近で炉跡から浮いた状態で，現状のままでは非常に不安定な状態である。本土器には広口部と狭口部に半環状の把手がついており，これに紐をとおして吊り下げて使用したならば安定し状態で使用することができ，本土器は吊り下げられた状態であった可能性が極めて高い。この場合，非常に薄手の器厚でありながらもほぼ完形で，炉壁に接する部分もそれほど大きくは破損していなことから，あまり高い位置から落下はしていないものと考えられ，あたかも，把手部と並行する P1•P2（第 13 図）を軸として吊り下げられ，南西部の把手の紐が切れ（はずれ），北東部の把手側の紐は固定されたまま落下したかのようにみえる。また，広口部の下からは被熱した高坏の坏部が接触して出土しており，坏部の被熱状況を考慮すれば，これらの状況は使用時の状態を示しているものと想定できる。つまり SH5 での検出状況からは，高坏の坏部が炉内に据えられ，コシキ形土器がその真上のそれほど高くない位置に吊り下げられていたものと想定できる。

SH14 においても，炉跡の上部を中心にコシキ形土器（38）が出土している。出土状態はコシキ形土器の広口部側には高坏（37）が，狭口部側及び高坏の南側に甕（36）が出土している。いずれも土圧により押しつぶされ個体ごとにまとまって出土しており，狭口部側の甕（36）の破損状態が比較的広がり，若干広口部側にも位置することから，甕は高い位置から転倒したこと，つまり転倒前のコシキ形土器は広口部を下にした状態で高坏が下部に位置し，甕を狭口部に乗せた状態であったと考えられる。

ここで炉跡内から確認された高坏に注目すると，2 か所ともその坏部のみがコシキ形土器の広口部側に位置しており，その脚部接合部を含む外面は直接被熱している。また，尾根の西側斜面の埋土中からは，高坏の坏部のみが図示した以外にも多数出土している。そのほとんどの外面が赤変しており，坏部の下が直接被熱していることが窺える。これはコシキ形土器と共伴した高坏と同様の被熱状態である[18]。置田雅昭氏はこの種のコシキ形土器について，民俗例から「麻蒸し」などの植物繊維をとるための蒸し器としての用途の可能性をあげており[19]，本遺跡での検出例と似通った使用状況となり興味深い。本遺跡の高坏の出土状況や被熱状況からは，高坏が「麻蒸し」の鍋と同様な役割で，コシキ形土器の下で湯を沸騰させるような用途で使用された転用品とも考えることができる。

一方，SH10 の壁際の床面でもコシキ形土器（35）が出土している。SH10 は焼失住居であるが，遺物が殆ど出土していないことから廃棄に伴う「焼失廃屋」と考えられる[20]。コシキ形土器（35）の下面には炭化物が殆どないことから，焼失前から本土器が置かれていたと考えられ，本来の使用場所から外した保管状態であったか，住居の廃棄に伴い外した状態であった可能性が考えられる[21]。

トンガ坊城遺跡においてはコシキ形土器が出土した住居跡は 5 軒あるが，それらが集落内の他の住居跡と特に際立った形態を持つものではない。また，コシキ形土器自体も広口部を下にして炉の上で吊られて使用されたと推定できる出土状態から，仮器などではなく実用品として使われていたことが推定できる。また，トンガ坊城遺跡では多数出土したコシキ形土器が，隣接し同時期でかつ「山陰系」土器が同様に多量に出土する集落跡である柳遺跡からは出土していない事実は，コシキ形土器の用途に起因するものと考えられ，必ずしも日常生活に必要なものではなく，特定の集落

で何らかのものを生産・加工するような性格の作業に使用されていた可能性が考えられる。

注

1）広島湾沿岸で一般的に出土する，赤褐色系の胎土で，甕では「く」の字口縁を持つ土器。
2）広島湾沿岸で出土する，白色から淡黄色系の精緻な胎土で器壁の薄い二重口縁をもつ山陰地方に系譜的な初源をもつと考えられる土器。
3）高下洋一「大木権現山式土器」『日本土器事典』 雄山閣　1996 年
4）入倉徳裕「鍵尾式土器」『日本土器事典』 雄山閣　1996 年
5）入倉徳裕「小谷式土器」『日本土器事典』 雄山閣　1996 年
6）若島一則「広島湾沿岸における弥生時代後期土器等に関する一考察」『研究連絡誌Ⅰ』財団法人広島市文化財団　2002 年
7）財団法人広島市文化財団『鯛之迫遺跡』 2001 年
8）Ⅲ－ 1 期に複数の住居跡を持つ大町七九谷 B 地点遺跡や上深川北遺跡などがある。
財団法人広島市文化財団『大町七九谷遺跡群』 1999 年
財団法人広島市歴史科学教育事業団『上深川北遺跡』 1991 年
9）毘沙門台東遺跡や大明地遺跡でもこのような状況を反映したかの特徴がみられる。毘沙門台東遺跡ではⅡ期のある時期に集落が拡大化し，Ⅲ－ 1 期まで集落の最盛期を迎えている。また，大明地遺跡ではⅢ－ 1 期に相当する時期（報告書中では古墳時代前期）に多数の住居跡を持つ集落が再出現している。
広島市教育委員会『毘沙門台東遺跡発掘調査報告』 1990 年
財団法人広島県埋蔵文化財センター「大明地遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』1987 年
10）財団法人広島市未来都市創造財団『上ヶ原遺跡・上ヶ原第 34 号古墳』 2011 年
11）財団法人広島市歴史科学教育事業団『番谷遺跡発掘調査報告』 1997 年
財団法人広島市文化財団『成岡 B 地点遺跡』 2001 年
12）11 に同じ。
13）広島市教育委員会『佐久良遺跡発掘調査報告』 1984 年
14）広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財センター「恵下遺跡発掘調査概報」 1980 年
15）坊主山遺跡の位置する尾根元や，琴平遺跡の東隣の尾根には集落が存在する可能性がある幅の広い尾根がある。
16）斜面埋土からは他にもコシキ形土器の破片と考えられる土器片が複数出土している。
17）風化していることもあるが，実測中に少し持つだけで割れるほど薄く仕上げている。
18）直接被熱し，耐久性が無くなるため，多数の坏部を使用したのではないかと思われる。
19）置田雅昭「山陰型甑土師器の天地」『古事』天理大学考古学・民俗学研究室紀要第 11 冊　2007 年
20）桐生直彦「遺物出土状態からみた竪穴住居の廃絶」『住まいの考古学－住居の廃絶をめぐって』
山梨県考古学協会 1996 年度研究集会資料集　1996 年
21）迫田山遺跡では「広口部を下にした屹立状態で出土」し，SH10 の出土状態と似た形で出土している。ここでは，「煙出し」の存在の可能性や，被熱痕跡から，「使用場所」であった可能性を上げている。

Ⅷ　自然科学的分析

広島市トンガ坊城遺跡出土の近世人骨

松下孝幸[1]・松下真実[2]

【キーワード】：広島県，近世人骨，土壙墓，坐葬，女性，超短頭型，低・広顔，高身長

はじめに

広島市安佐北区可部町上町屋に所在するトンガ坊城跡の発掘調査が可部バイパス建設に伴っておこなわれ，2006 年 (平成 18 年) に埋葬遺構から保存良好な人骨 1 体が出土した。本遺跡は弥生時代の集落跡であるが，埋葬姿勢が坐位であったことから，所属時代を確定させるために放射性炭素年代測定（AMS）による年代測定をおこなったところ，19 世紀後半から現代に属するという結果を得た。人骨の形質的特徴を考慮して，本人骨は幕末から明治初頭に生存していた人物と推定され，生年は近世末 (幕末) ころと思われるので，本人骨を近世人骨として取り扱うことにした。

筆者らが調査に携わったり報告書を書いた広島県内での近世人骨については，広島市の大明地遺跡 (松下，1987) と巣取遺跡 (松下，1997b)，東広島市の石佛遺跡 (松下･他，1990)，古市遺跡 (松下・他，1992)，西本３・４号遺跡 (松下，1999a)，鴻巣東遺跡 (松下，1998b)，三次市帰海寺谷遺跡 (松下，1997a)，庄原市一の谷第 7 号古墓 (松下，1998a)，府中市門田 A 遺跡・東槙山第 1 号古墳南斜面 (松下，1999b)，三良坂町油免遺跡 (松下，2003a)，同町大谷遺跡 (松下，2003b) ぐらいしかない。そのうち，大明地遺跡と巣取遺跡から出土したのは火葬骨であった。

北九州では城下町であったということもあり，近世墓の発掘調査が積極的におこなわれてきた。発掘調査に伴い，近世人骨の出土量も増え，当時の都市部に住む人びとや武家層の形質的特徴が明らかになっている。また，長崎県，山口県，愛媛県でも近世人骨が出土し，地域差や階層差についてもある程度言及できるような状況になってきた。しかし,広島県での近世人骨の出土量は少なく，研究が進んでいない。このような現状を考えれば，本例はきわめて貴重な資料といえる。保存状態は良好であったので，人類学的観察や計測をおこない，周辺地域の例と比較をおこなったので，その結果を報告しておきたい。

資　料

表 1　出土人骨一覧（Table 1. List of skeletons）

人骨番号	性別	年齢	埋葬姿勢	顔の向き	推定身長値
ST-21	女性	壮年	坐位	西	150.06cm

今回の調査で出土した人骨は 1 体のみである (ST-21)。埋葬遺構は土壙墓で，埋葬姿勢は坐位である。後述している所見からこの人骨は壮年の女性人骨である。なお，年齢区分は表２に示すとおりである。

1　Takayuki　MATSUSHITA　2　Masami　MATSUSHITA
The Doigahama Site Anthropological Museum〔土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム〕

図１　　遺跡の位置

（Fig.1　Location of the Tongabojo site, Hiroshima City, Hiroshima Prefecture）

本人骨の所属時代は，AMS 年代測定によって 19 世紀後半から現代という数値が得られたが，前述しているように人骨の形質的特徴を考慮して，近世人骨とした。

計測方法は，Martin-Saller(1957) によったが，脛骨の横径はオリビエの方法で計測し，鼻根部については鈴木 (1963) と松下ら (1983) の方法で計測した。

人骨の整理・復元・計測値の計算などは，磯部美恵子，松下玲子が担当した。

表２　年齢区分（Table2. Division of age）

	年齢区分	年	齢
未成人	乳児	1 歳未満	
	幼児	1 歳～ 5 歳	（第一大臼歯萌出直前まで）
	小児	6 歳～ 15 歳	（第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで）
	成年	16 歳～ 20 歳	（蝶後頭軟骨結合癒合まで）
成人	壮年	21 歳～ 39 歳	（40 歳未満）
	熟年	40 歳～ 59 歳	（60 歳未満）
	老年	60 歳以上	

注）成年という用語については土井ヶ浜遺跡第 14 次発掘調査報告書（1996）を参照されたい。

所　見

１．埋葬姿勢

埋葬遺構は土壙墓である。埋葬姿勢は坐位で，顔の向きは西である。膝関節を折りたたみ，下肢を正坐の状態にして，上半身をやや右に寄せながら前に倒した状態で人骨が検出された。従って，上半身はうつぶせ状態である。墓坑の形状はほぼ円形で深さはやや深い。木棺の痕跡はないので，土坑への直葬と思われる。土壙墓なので墓坑内には空間が存在していなかったはずであるから，腐敗の途中に上半身が前に倒れたとは思えない。墓坑内に正坐させ，上半身を前倒しにして，埋土を充填したものと思われる。人骨の保存状態は地山が花崗岩のバイランであるにもかかわらず，良好である。

２．人骨所見

人骨の残存部は図２に示すとおりである。また，各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

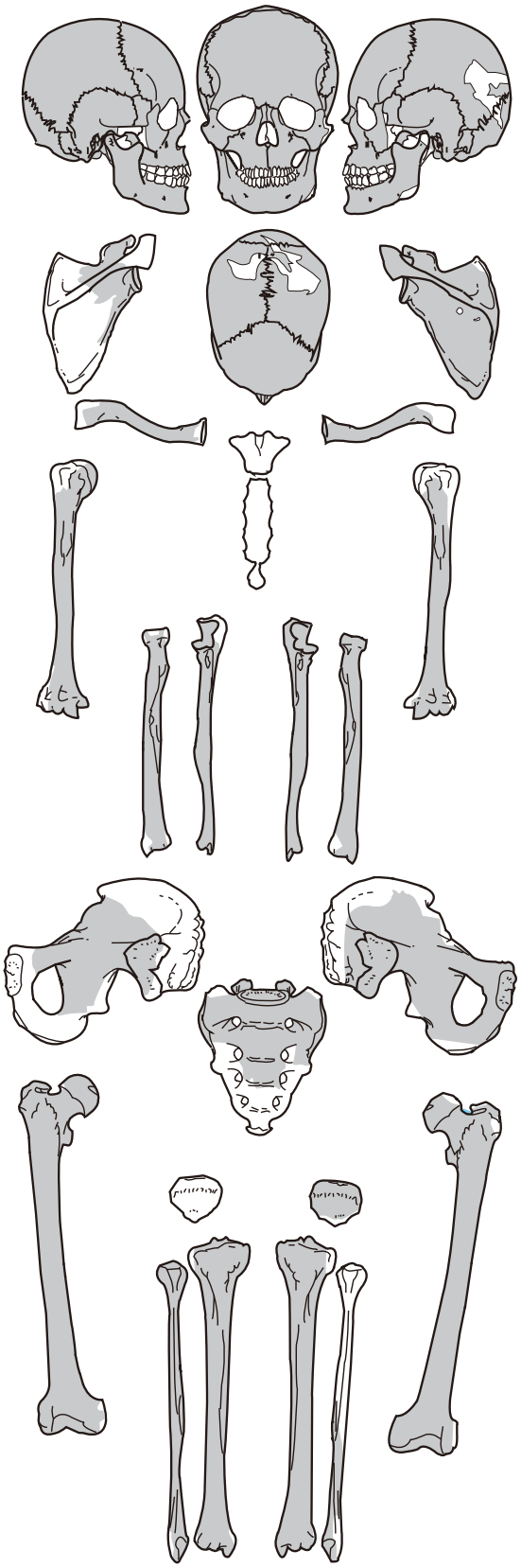
ST-21 号人骨 (女性，壮年）

１．頭蓋

(1) 脳頭蓋

左側頭頂骨の一部を欠損している。また，両側の頭頂骨の後頭部は外板を失っているが，ほぼ完全である。外後頭隆起の発達はみられない。乳様突起も小さい。外耳道は両側とも観察できたが，骨腫は左右とも認められない。縫合は，三主縫合のうち矢状縫合とラムダ縫合は内外両板が開離しており，冠状縫合も両側部分を除いて，内外両板は開離している。冠状縫合の両側部分は内外両板とも癒合している。

脳頭蓋の計測値は，頭蓋最大長が 159mm，頭蓋最大幅は 150mm，バジオン・ブレグマ高は 134mm である。頭蓋長幅示数は 94.34，頭蓋長高示数は 84.28，頭蓋幅高示数は 89.33 となり，



トンガ坊城遺跡出土人骨・ST-21（女性・壮年）

図 2 人骨残存図（アミかけ部分）

（Fig.2 Regions of preservasion of the skeleton. Shaded areas are preserved.）

頭型は超短頭型，高頭型，平頭型 (ultrabrachy-,hypsi-,tapeinokran) に属している。また，頭蓋水平周は 487mm，横弧長は 322mm，正中矢状弧長は (346)mm である。

(2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋は完全である。前頭結節の発達は良好である。眉上弓にはわずかに隆起がみられる程度である。鼻根部はやや広く扁平で，鼻骨の隆起はきわめて弱い。鼻骨は左右を合わせた形が二等辺三角形を呈している。また，一見すると歯槽性突顎が強いようにみえるが，耳眼水平面に対する角度 (歯槽側面角) は小さくはならない。

顔面頭蓋の計測値は，顔長が 84mm，中顔幅は 96mm，顔高は 99mm，上顔高は 57mm であるが，頬骨弓幅は計測できない。顔示数は 103.13(Ｖ)，上顔示数は 59.38(Ｖ) となり，顔面には著しい低・広顔傾向が認められる。

眼窩幅は 43mm(右)，眼窩高は 33mm(右)，33mm(左) で，眼窩示数は 76.74(右) となり，右側は mesokonch(中眼窩) に属している。

鼻幅は 26mm，鼻高は 44mm で，鼻示数は 59.09 となり，過低鼻 (hyperchamaerrhin) に属している。

鼻根部の計測値は，前眼窩間幅が 17mm，鼻根横弧長は 19mm，鼻根彎曲示数は 89.47 となり，鼻根部は扁平である。鼻骨最小幅は 4mm で，前頭突起水平傾斜角は 105 度を示し，前頭突起の向きは前額方向で，鼻頬骨角は 151 度である。

側面角は，全側面角が 92 度，鼻側面角が 93 度，歯槽側面角は 82 度で，歯槽性突顎の傾向は認められない。

下顎骨は左側の関節突起を欠損している以外はほぼ完全である。下顎体の高径は低く，下顎枝は細く，下顎切痕は浅い。また，動揺下顎である。

２．歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと，次のとおりである。

８ ７ ６ ５ ４ ３ ２ １	１ ２ ３ ４ ５ ６ ７ ／
▽ ７ ６ ５ ４ ３ ２ １	１ ２ ３ ４ ５ ６ ７ ▽

〔●: 歯槽閉鎖　○: 歯槽開存　／: 不明　▽: 先天性欠損，番号は歯種〕

〔1: 中切歯，２: 側切歯，３: 犬歯，４: 第一小臼歯，５: 第二小臼歯，６: 第一大臼歯，７: 第二大臼歯，８: 第三大臼歯〕

咬耗度は Broca の 1 (咬耗がエナメル質のみ) ～２度 (咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ) である。また，歯の咬合形式は鋏状咬合である。

３.四肢骨

(1) 上肢骨

肩甲骨，鎖骨，上腕骨，橈骨，尺骨が残存していた。

①鎖骨

長さは短くて，細い。

②上腕骨

長さは短いが，三角筋粗面の発達は良好で，骨体は扁平である。計測値は，中央最大径が

21mm(右)，中央最小径は 15mm(右)，14mm(左) で，骨体断面示数は 71.43(右) となり，骨体は扁平である。骨体最小周は 56mm(右)，中央周は 59mm(右) で，骨体は女性としては太い。

③橈骨

長さは短く，細いが，骨間縁の発達は良好である。左側には橈骨遠位端骨折 (Colles 骨折) が認められる。

④尺骨

尺骨も短く，細いが，骨間縁の発達は良好である。

(2) 下肢骨

寛骨，大腿骨，脛骨および腓骨が残存していた。

①寛骨

両側とも腸骨翼を欠損している。径はあまり大きくはない。大坐骨切痕の角度と恥骨下角は大きい。また，女性特有の耳状面前溝が認められる。

②大腿骨

左右ともほぼ完全である。長さはやや長い。また，粗線の発達も悪いが，骨体上部は扁平である。計測値は，最大長が 397mm(左)，骨体中央周は 83mm(右)，84mm(左) で，長厚示数は 21.37(左) となり，骨体はやや頑丈である。骨体中央矢状径は 23mm(右)，25mm(左)，横径は 30mm(右)，28mm(左) で，骨体中央断面示数は 76.67(右)，89.29(左) となり，粗線や骨体両側面の後方への発達はきわめて悪く，骨体中央部の断面型は横広の楕円形である。また，骨体上横径は 33mm(右)，33mm(左)，骨体上矢状径は 22mm(右)，23mm(左）で，上骨体断面示数は 66.67(右)，69.70(左) となり，骨体上部はきわめて扁平である。

③脛骨

両側ともほぼ完全である。長さは短く，骨体も細い。前縁はＳ字状のカーブを描いており，鈍縁である。ヒラメ筋線の発達も悪い。骨体の断面形は，右側はヘリチカのＶ型，左側はⅡ型を呈している。

計測値は，脛骨最大長が 319mm(右)，314mm(左)，骨体周は 68mm(右)，73mm(左)，最小周は 64mm(右)，67mm(左) で，骨体は細い。中央最大径は 23mm(右)，26mm(左)，中央横径は 19mm(右)，20mm(左) で，中央断面示数は 82.61(右)，76.92(左) となり，骨体には扁平性は認められない。

④腓骨

骨体は細く，扁平であるが，稜の発達はよくない。

4．推定身長値

大腿骨最大長から，Pearson および藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると，それぞれ 150.06cm(Pearson，左)，150.34cm(藤井，左) となり，女性としては高身長である。

5．性別・年齢

前頭結節がよく発達しており，大坐骨切痕の角度や恥骨下角が大きいことから，性別を女性と推定した。年齢は，三主縫合の大部分が内外両板とも開離していることから，壮年と思われる。

考　察

広島県では頭蓋の計測ができる近世の女性骨は存在しない。山県郡豊平町戸谷牛尾原（うしおばら）で 1985 年 (昭和 60 年) に国道 433 号線の改良工事中に頭蓋などが出土した。共伴遺物が存在しないので，時期が明確ではないが，人骨の形質的特徴から近世もしくは近代に属する人骨と推測されるので，この人骨を広島県内の比較資料として使用した。

1．頭蓋

(1) 脳頭蓋

表 3 は女性の脳頭蓋の計測値比較表である。頭蓋長幅示数で頭型をみてみることにする。トンガ坊城は 94.34 で，この示数値は表 3 では最大値となり，頭型は超短頭型である。現代人でもこれほどの短頭型は珍しく，広島市にこれほどの短頭型を示す近世人がいたことは注目に値する。超短頭型といえば，南西諸島の弥生時代から古墳時代にかけての人びとにみられる特徴である。特に有名なのが種子島の広田人であろう。かれらの頭蓋長幅示数は 90.9(15 例) である。あまりにも強い短頭性を示すことから人工頭蓋変形が疑われることもある。しかし，今回広島市の近世人にも同じような特徴がみられ，人工頭蓋変形の形跡がないことから，広田人についても人工頭蓋変形は否定してもよさそうである。

表3　脳頭蓋計測値（女性、mm）(Table 3. Comparison of female calvarial measurements and indices)

		トンガ坊城 近世人 広島県 広島市 （松下・他）	牛尾原 近世人 広島県 豊平町 （松下）	開善寺 近世人 福岡県 北九州市 （松下）		京　町 近世人 福岡県 北九州市 （松下）		生往寺 近世人 福岡県 北九州市 （松下）		宗玄寺 近世人 福岡県 北九州市 （松下）		上清水 近世人 福岡県 北九州市 （松下・他）		天福寺 近世人 福岡県 福岡市 （中橋）		大河浜 近世人 山口県 下関市 （松下）		白　浜 近世人 長崎県 福江市 （松下）	
		ST-21	Y-1	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	頭蓋最大長	159	172	6	172.33	24	172.08	14	174.00	35	172.71	7	176.57	38	174.7	3	185.67	12	178.83
8.	頭蓋最大幅	150	142	5	136.20	24	132.33	14	137.21	36	136.50	8	131.50	38	133.5	3	133.67	11	128.73
17.	バジオン-ブレグマ高	134	132	2	132.00	10	134.70	10	134.60	27	136.33	5	128.00	35	132.7	3	140.67	11	130.91
8/1	頭蓋長幅示数	94.34	82.56	5	78.71	22	77.10	14	78.98	33	79.40	4	73.50	38	76.5	3	71.99	11	72.24
17/1	頭蓋長高示数	84.28	76.74	2	77.43	10	77.79	10	77.68	25	78.48	4	74.53	35	76.1	3	75.76	11	73.43
17/8	頭蓋幅高示数	89.33	92.96	2	102.34	8	100.60	10	99.22	27	99.61	3	97.73	35	99.4	3	105.32	11	101.73
1+8+17/3	頭蓋モズルス	147.67	148.67	2	143.83	8	147.08	10	148.00	25	149.07	3	144.00		–	3	153.33	11	145.97
23.	頭蓋水平周	487	500	4	496.25	11	496.91	13	500.23	32	498.97	1	493	36	497.4	3	525.00	10	496.30
24.	横弧長	322	312	4	308.75	15	301.20	13	313.54	34	309.03	3	295.00	35	303.0	3	302.67	11	294.91
25.	正中矢状弧長	(346)	340	2	359.50	8	357.13	8	366.00	25	364.48	2	352.00	34	364.2	3	385.33	11	364.45

(2) 顔面頭蓋

表 4 は女性の脳頭蓋の計測値比較表である。まず，顔の幅をみてみよう。トンガ坊城の頬骨弓幅は計測できなかったが，中顔幅は 96mm で，牛尾原，大河浜に次いで大きい。顔高は 99mm で，表 4 では最小値を示し，顔の高さはかなり低い。上顔高は 57mm しかなく，この計測値も表 4 では最小値である。顔面のプロポーションを表す顔示数 (V) と上顔示数 (V) は，前者が 103.13，後者が 59.38 で，前者は表 4 では最小値となり，後者は牛尾原に次いで小さく，顔面は強い「低・広顔」である。また，眼窩示数は 76.74 となり，牛尾原に一致し，この示数値は表 4 では最小値を示し，鼻示数は 59.09 と大きく，表 4 では最大値となる。歯槽側面角は 82 度と大きく，この角度は表 4 では最大値となり，歯槽性突顎の傾向は認められない。

表 5 は女性の鼻根部の計測値比較表である。鼻根彎曲示数は 89.47 で，表 5 では最大値となり，鼻根部はかなり扁平である。また，前頭突起水平傾斜角は 105 度で，この角度は開善寺に次いで大きく，前頭突起の向きは全額方向を示し，トンガ坊城は鼻根部が扁平であることがわかる。

表4 顔面頭蓋(女性、㎜、度)(Table 4. Comparison of female facial measurements and indices)

		トンガ坊城 近世人 広島県 広島市 (松下・他)	牛尾原 近世人 広島県 豊平町 (松下)	開善寺 近世人 福岡県 北九州市 (松下)		京 町 近世人 福岡県 北九州市 (松下)		生往寺 近世人 福岡県 北九州市 (松下)		宗玄寺 近世人 福岡県 北九州市 (松下)		上清水 近世人 福岡県 北九州市 (松下・他)		天福寺 近世人 福岡県 福岡市 (中橋)		大河浜 近世人 山口県 下関市 (松下)		白 浜 近世人 長崎県 福江市 (松下)	
		ST-21	Y-1	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
40.	顔長	84	99	2	88.00	6	95.83	6	92.50	13	93.92	6	94.33	20	95.1	3	97.33	9	97.78
45.	頬骨弓幅	−	136	2	126.50	1	132.00	7	127.57	16	125.19		−	30	126.5	3	130.67	8	〔125.63〕
46.	中顔幅	96	108	2	90.00	10	94.50	9	91.33	21	93.00	4	90.50	25	95.5	3	100.67	10	〔93.00〕
47.	顔高	99	115	1	115	6	121.17	3	116.00	15	116.07	4	109.25	15	115.9	2	114.50	9	114.78
48.	上顔高	57	61	2	64.50	13	68.15	5	65.40	15	65.73	6	61.33	22	68.8	3	66.33	10	(65.20)
47/45	顔示数(K)	−	84.56	1	95.83	1	98.48	2	94.69	8	94.67		−	15	91.1	2	87.41	7	〔92.80〕
48/45	上顔示数(K)	−	44.85	1	51.67	1	57.58	4	52.29	10	53.47		−	22	54.3	3	50.76	8	52.64
47/46	顔示数(V)	103.13	106.48	1	127.78	4	123.50	3	124.81	12	126.75	4	120.90	15	120.9	2	112.45	9	〔122.41〕
48/46	上顔示数(V)	59.38	56.48	2	71.67	10	71.89	5	71.48	13	72.02	4	67.98	22	71.8	3	65.94	10	〔70.61〕
40+45+47/3	顔面モズルス	−	116.67	1	107.00	1	118.00	2	110.50	7	110.57		−		−	2	115.00	6	〔114.67〕
50.	前眼窩間幅	17	15	1	14	15	16.53	10	16.60	27	16.00	7	15.71		−	3	18.00	10	17.30
44.	両眼窩幅	−	98	1	93	10	92.30	10	92.90	23	93.96	4	93.25		−	3	97.33	9	93.22
50/44	眼窩間示数	−	15.31	1	15.05	10	18.19	10	17.89	23	16.93	4	17.93		−	3	18.48	9	18.22
51.	眼窩幅(左)	43 (右)	43	2	40.50	13	40.38	9	41.11	27	41.74	6	41.00	30	40.5	3	42.33	9	40.67
52.	眼窩高(左)	33 (右)	33	3	33.67	10	34.50	9	35.00	27	35.22	6	32.33	30	34.3	3	34.33	7	34.43
52/51	眼窩示数(左)	76.74 (右)	76.74	2	81.50	10	84.57	9	85.15	26	84.31	6	78.87	29	84.8	3	81.10	7	84.59
54.	鼻幅	26	26	2	22.00	15	24.53	8	24.25	26	24.46	5	25.60	26	25.3	3	25.33	10	24.30
55.	鼻高	44	52	2	49.00	14	51.07	8	50.00	26	50.19	6	45.83	28	49.9	3	52.00	9	49.22
54/55	鼻示数	59.09	50.00	2	45.15	14	48.34	8	48.55	26	48.84	5	55.78	26	51.0	3	45.71	9	49.55
72.	全側面角	92	83	2	87.50	10	85.90	5	87.20	17	83.47	6	84.17	18	82.5	3	81.33	8	83.38
73.	鼻側面角	93	90	2	89.50	10	90.30	8	89.25	24	87.04	6	89.00		−	3	84.67	8	87.13
74.	歯槽側面角	82	57	2	80.00	10	73.70	5	75.80	16	72.63	6	68.83	17	65.0	3	68.00	8	71.75

表5 鼻根部(女性、㎜、度)(Table 5. Comparison of female nasal root measurements and indices)

		トンガ坊城 近世人 広島県 広島市 (松下・他)	牛尾原 近世人 広島県 豊平町 (松下)	開善寺 近世人 福岡県 北九州市 (松下)		京 町 近世人 福岡県 北九州市 (松下)		生往寺 近世人 福岡県 北九州市 (松下)		宗玄寺 近世人 福岡県 北九州市 (松下)		上清水 近世人 福岡県 北九州市 (松下・他)		大河浜 近世人 山口県 下関市 (松下)		白 浜 近世人 長崎県 福江市 (松下)	
		ST-21	Y-1	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
50.	前眼窩間幅	17	15	1	14	15	16.53	10	16.60	26	16.12	7	15.71	3	18.00	10	17.30
50A.	鼻根横弧長	19	18	1	17	13	18.85	10	19.50	25	19.20	7	17.71	3	21.00	9	19.56
50/50A	鼻根彎曲示数	89.47	83.33	1	82.35	13	87.26	10	85.97	24	84.69	7	88.97	3	85.63	9	88.70
57.	鼻骨最小幅	4	9		−	13	7.08	10	7.30	24	7.29	8	7.50	3	8.33	9	8.56
44.	両眼窩幅	−	98	1	93	10	92.30	10	92.90	24	94.21	4	93.25	3	97.33	9	93.22
50/44	眼窩間示数	−	15.31	1	15.05	10	18.19	10	17.89	24	17.01	4	17.93	3	18.48	9	18.22
a.	前頭突起上幅(右)	12	8	1	13	14	9.07	11	9.45	26	9.23	7	8.86	3	9.67	9	9.44
	(左)	11	9	1	12	14	9.64	10	8.80	26	12.65	7	9.00	3	10.33	9	8.44
b.	前頭突起水平傾斜角	105	79	1	114	7	93.14	10	92.80	23	88.48	6	87.17		−	7	82.43
c.	G−N投影距離	5	2	2	2.00	7	1.86	10	1.20	25	1.28	6	1.17		−	9	2.00
d.	鼻根角	−	−		−	5	145.00	8	148.13	14	144.79	3	149.33	3	151.00	6	138.00
e.	G−R距離	−	−		−	5	32.40	8	33.38	13	35.08	3	28.67	3	31.00	5	33.60
f.	垂線高	−	−		−	5	4.80	8	4.38	13	4.54	3	3.33	3	3.33	5	3.82
f/e	鼻根陥凹示数	−	−		−	5	14.91	8	13.22	13	13.01	3	11.73	3	10.77	5	11.40
77.	鼻頬骨角	151	151	3	137.67	9	146.33	10	145.50	22	147.32		−		−	9	145.67
Fa	fmo間距離	91	96	3	90.67	9	91.67	10	92.50		−		−		−		−
Fh	垂線高	12	12	3	14.00	9	12.89	10	13.60		−		−		−		−
Fh/Fa	顔面扁平示数	13.19	12.50	3	15.44	9	14.06	10	14.72	22	13.98		−		−	9	15.03

2.四肢骨

①上腕骨

表6は女性上腕骨の計測値比較表である。トンガ坊城の中央周は59mmで，やや大きく，表6では大河浜，上清水に次いで大きい。骨体断面示数は71.43で，上清水，大河浜に次いで小さいが，上清水，大河浜，白浜と大差なく，骨体は扁平である。

表6 上腕骨計測値(女性、右、㎜)(Table 6. Comparison of measurements snd indices of female right humeri)

		トンガ坊城 近世人 広島県 広島市 (松下・他)	大 谷 近世人 広島県 三良坂町 (松下)	開善寺 近世人 福岡県 北九州市 (松下)		京 町 近世人 福岡県 北九州市 (松下)		生往寺 近世人 福岡県 北九州市 (松下)		宗玄寺 近世人 福岡県 北九州市 (松下)		上清水 近世人 福岡県 北九州市 (松下・他)		大河浜 近世人 山口県 下関市 (松下)		白 浜 近世人 長崎県 福江市 (松下)	
		ST-21	SK-97	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	上腕骨最大長	−	−	1	242	5	268.20	9	260.26	12	269.83	1	262	3	295.00	6	281.33
5.	中央最大径	21	19	7	18.57	46	19.43	17	19.76	44	19.80	14	20.93	3	22.00	11	20.64
6.	中央最小径	15	14	7	13.86	46	14.65	17	15.18	44	14.66	14	14.71	3	15.67	11	14.73
7.	骨体最小周	56	52	7	50.43	37	53.62	16	54.50	36	54.47	8	55.50	3	60.00	11	55.27
7(a).	中央周	59	56	7	53.86	46	56.65	17	58.12	44	57.64	14	60.07	3	64.33	12	58.75
6/5	骨体断面示数	71.43	79.68	7	74.81	6	75.71	17	77.09	44	74.27	14	70.49	3	71.31	11	71.52
7/1	長厚示数	−	−	1	19.01	5	19.87	9	20.34	9	20.20	1	16.41	3	20.38	6	20.20

②大腿骨

表7は女性大腿骨の計測値比較表である。トンガ坊城の最大長は397mmで，表7では大河浜に次いで大きく，長さは長い。骨体中央周は84mmと大きく，表7では大河浜に次いで大きい。骨体中央断面示数は89.29と小さく，表7では上清水に次いで小さく，粗線の発達や柱状性は認め

られない。上骨体断面示数は 69.70 と小さく，表 7 では大谷，大河浜に次いで小さく，骨体上部はかなり扁平である。

表7 大腿骨計測値(女性、右、mm)(Table 7. Comparison of measurements and indices of female right femora)

		トンガ坊城 近世人 広島県 広島市 (松下・他)	大 谷 近世人 広島県 三良坂町 (松下)	西本3・4号 近世人 広島県 東広島市 (松下)	開善寺 近世人 福岡県 北九州市 (松下)		京 町 近世人 福岡県 北九州市 (松下)		生往寺 近世人 福岡県 北九州市 (松下)		宗玄寺 近世人 福岡県 北九州市 (松下)		上清水 近世人 福岡県 北九州市 (松下・他)		大河浜 近世人 山口県 下関市 (松下)		白 浜 近世人 長崎県 福江市 (松下)	
		ST-21	SK-83	KB22	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	最大長	397 (左)	−	−	2	370.00	6	367.17	4	360.50	15	370.93	3	371.67	2	403.50	7	386.29
2.	自然位全長	393 (左)	−	−	2	366.00	5	368.80	4	356.00	14	367.64	1	362	2	394.50	7	383.14
6.	骨体中央矢状径	25 (左)	24 (左)	24	8	22.75	87	23.13	16	23.06	49	23.22	17	22.24	3	26.67	13	24.77
7.	骨体中央横径	28 (左)	26 (左)	22	8	22.63	87	23.52	17	23.71	49	23.86	17	25.76	3	28.00	13	22.77
8.	骨体中央周	84 (左)	78 (左)	72	8	71.50	87	73.48	16	73.44	49	74.18	17	76.88	3	86.67	13	75.00
9.	骨体上横径	33 (左)	31	25	9	26.33	73	27.86	17	27.88	51	27.88	17	29.59	3	34.67	12	28.50
10.	骨体上矢状径	23 (左)	20	21	9	20.33	73	21.03	17	20.53	50	21.36	17	20.76	3	23.67	12	21.83
8/2	長厚示数	21.37 (左)	−	−	2	20.09	5	19.61	4	20.67	6	20.54	1	19.89	2	21.70	7	19.90
6/7	骨体中央断面示数	89.29 (左)	92.31 (左)	109.09	8	100.90	87	98.85	16	98.17	49	97.57	17	86.56	3	95.28	13	108.99
10/9	上骨体断面示数	69.70 (左)	64.52	84.00	9	78.25	73	75.67	17	73.81	50	77.34	17	70.42	3	68.46	12	76.74

③脛骨

表 8 は女性脛骨の計測値比較表である。トンガ坊城の最大長は 319mm で長く，表 8 では大河浜に次いで長い。骨体周は 68mm で，表 8 では西本，大河浜，白浜，上清水よりは小さいが，開善寺，生往寺，宗玄寺よりは大きく，京町に近い。中央断面示数は 82.61 と大きく，表 8 では最大値となり，骨体は扁平ではない。

表8 脛骨(女性、右、mm)(Table 8. Comparison of measurements and indices female right tibiae)

		トンガ坊城 近世人 広島県 広島市 (松下・他)	西本3・4号 近世人 広島県 東広島市 (松下)	開善寺 近世人 福岡県 北九州市 (松下)		京 町 近世人 福岡県 北九州市 (松下)		生往寺 近世人 福岡県 北九州市 (松下)		宗玄寺 近世人 福岡県 北九州市 (松下)		上清水 近世人 福岡県 北九州市 (松下・他)		大河浜 近世人 山口県 下関市 (松下)		白 浜 近世人 長崎県 福江市 (松下)	
		ST-21	KB22	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1.	脛骨全長	−	−	2	287.00 (左)	2	297.50	5	293.20	9	305.67	1	280	3	319.67	7	303.00
1a.	脛骨最大長	319	−	2	291.00 (左)	1	291	6	303.83	11	312.55	3	306.33	3	325.00	7	309.57
8.	中央最大径	23	25	8	22.25	37	24.35	13	23.62	34	24.03	12	24.50	3	28.00	12	26.17
8a.	栄養孔位最大径	27	28	6	25.83	23	27.52	11	27.27	32	27.81	11	28.55	2	31.00	11	29.27
9.	中央横径	19	20	8	16.63	37	17.97	14	17.43	34	17.67	12	18.42	3	21.33	12	19.67
9a.	栄養孔位横径	23	23	6	18.67	23	19.96	12	19.92	32	19.53	11	20.36	2	23.00	11	21.73
10.	骨体周	68	73	8	62.75	37	67.35	13	65.69	34	66.65	12	69.25	3	78.67	12	72.83
10a.	栄養孔位周	79	82	6	71.83	23	75.70	11	74.27	32	75.38	11	79.09	2	87.00	11	79.82
10b.	最小周	64	−	8	58.25	32	61.50	12	58.92	34	61.12	8	63.88	3	71.67	12	66.67
9/8	中央断面示数	82.61	80.00	8	75.28	37	74.13	13	73.43	34	70.49	12	75.19	3	76.04	12	75.61
9a/8a	栄養孔位断面示数	85.19	82.14	6	72.49	23	72.98	11	72.32	32	70.49	11	71.59	2	74.06	11	74.32
10b/1	長厚示数	−	−	2	19.52 (左)	2	19.80	5	20.57	8	20.11	1	21.79	3	22.46	7	22.17

3．推定身長値

表 9 は女性の推定身長値の比較表である。トンガ坊城の大腿骨からの推定身長値は 150.06cm(Pearson) で，表 9 では，大河浜の 156.74cm(Pearson) に次いで身長が高い。

表9 推定身長値(女性、cm)(Table 9. Comparison of estimated male statures)-体数での値(左右あるものは右を使用)

		トンガ坊城 近世人 広島県 広島市 (松下・他)	開善寺 近世人 福岡県 北九州市 (松下)		京 町 近世人 福岡県 北九州市 (松下)		生往寺 近世人 福岡県 北九州市 (松下)		宗玄寺 近世人 福岡県 北九州市 (松下)		上清水 近世人 福岡県 北九州市 (松下・他)		天福寺 近世人 福岡県 福岡市 (中橋)		大河浜 近世人 山口県 下関市 (松下)		白 浜 近世人 長崎県 福江市 (松下)	
		ST-21	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
Pearsonの式	上腕骨	−	1	138.12	6	145.65	12	144.36	17	145.72	1	143.63		−	3	153.51	8	147.62
	橈骨	−	5	144.68	5	150.15	9	147.01	21	146.95		−		−	2	152.17	9	149.20
	大腿骨	150.06	2	144.81	10	145.82	8	144.66	19	145.22	3	145.13	20	146.5	4	156.74	10	148.12
	脛骨	−	2	142.28	4	145.10	6	144.47	13	146.22	1	140.63		−	3	152.88	7	146.04
藤井の式	上腕骨	−	1	138.90	6	145.48	12	144.41	17	145.58	1	143.66		−	3	153.13	8	147.19
	橈骨	−	5	142.52	5	147.71	9	144.53	21	144.77		−		−	2	149.70	9	146.65
	大腿骨	150.34	2	143.93	10	145.19	8	143.86	19	144.43	3	144.30		−	4	154.01	10	147.82
	脛骨	147.23	2	141.82	4	145.49	7	145.01	13	144.72	3	145.26		−	3	153.12	7	145.98

要　約

広島市安佐北区可部町上町屋に所在するトンガ坊城遺跡の発掘調査が 2006 年 (平成 18 年) におこなわれ，保存良好な人骨が 1 体出土した。保存状態は良好で人類学的観察や計測ができた。その結果は次のように要約することができる。

1．1 基の土壙墓から 1 体の人骨が出土した。埋葬姿勢は坐位である。また下肢は正坐していた。

2．本例は壮年の女性骨で，この人骨は AMS 年代測定から，近世に属する人骨と思われる。

3．脳頭蓋の計測値は，頭蓋最大長 159mm，頭蓋最大幅 150mm，バジオン・ブレグマ高 134mm で， 頭蓋長幅示数 94.34，頭蓋長高示数 84.28，頭蓋幅高示数 89.33 となり，頭型は超短頭型，高頭型，平頭型 (ultrabrachy-,hypsi-,tapeinokran) に属している。

4．顔面頭蓋の計測値は，顔長 84mm，中顔幅 96mm，顔高 99mm，上顔高 57mm で，顔示数 103.13(Ⅴ)， 上顔示数 59.38(Ⅴ) となり，顔面には著しい低・広顔傾向が認められる。

5．眼窩示数は 76.74(右) となり，右側眼窩は中眼窩に，鼻示数は 59.09 となり，過低鼻に属している。

6．鼻根部は扁平で，歯槽性突顎の傾向はみられない。

7．上腕骨は太くて扁平である。大腿骨は長く，骨体は太いが，粗線の発達は悪く，柱状性は認められない。また，骨体上部は扁平である。脛骨も長く，骨体はやや大きいが，扁平性はみられない。

8．大腿骨からの推定身長値は 150.06cm(Pearson) で，近世人としては高身長である。

9．橈骨遠位端骨折 (Colles 骨折) が左側に認められた。

10．トンガ坊城近世人は超短頭型で，顔面は著しく低・広顔で，顔が小さい。これらの特徴は広田人 (弥生～古墳) に酷似している。四肢骨は長く，骨体も太い。女性としては身長が高く，四肢骨の特徴は山口県下関市の大河浜人に近いものがある。大河浜人と同じように手足をよく使っていたものと思われる。

謝辞

≪擱筆するにあたり，本研究と発表の機会を与えていただいた財団法人広島市未来都市創造財団の皆様に感謝致します。≫

≪参考文献≫

1．Martin-Saller，1957：Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1.Gustav Fisher Verlag，Stuttugart：429-597.

2．松下孝幸・他，1983：山口県豊浦郡豊北町土井ケ浜遺跡出土の人骨。土井ケ浜遺跡第 7 次発掘調査概報 (豊北町埋蔵文化財調査報告 2)：19-30.

3．松下孝幸，1987：広島市大明地遺跡出土の火葬骨。山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 55 集)：312-314.

4．松下孝幸・他，1990：広島県東広島市石佛遺跡出土の中・近世人骨，山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 84 集)：292-296.

5．松下孝幸・他，1992：東広島市古市遺跡出土の近世人骨。西城第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ (東広島市教育委員会文化財調査報告書第 21 集)：105-126.

6．松下孝幸，1997a：広島県三次市帰海寺谷遺跡出土の近世人骨。県営ほ場整備事業 (川西東部・南部地区) に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 157 集)：131-135.

7．松下孝幸，1997b：広島市巣取遺跡出土の近世火葬骨。広島市安佐南区高取北三丁目所在巣取遺跡発掘報告 ((財) 広島市歴史科学教育事業団調査報告書第 21 集)：17-20.

8．松下孝幸，1998a：広島県庄原市一の谷第 7 号古墓出土の近世人骨。一の谷第 6 ・ 7 号古墳 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 170 集)：47-50.

9．松下孝幸，1998b：広島県東広島市鴻巣東 1 号遺跡出土の近世幼児骨。鴻巣東 1 号遺跡発掘調査報告書：161-163.

10. 松下孝幸，1999a：広島県東広島市西本３・４号遺跡出土の近世人骨。西本３・４号遺跡 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 175 集)：123-139.
11. 松下孝幸，1999b：広島県府中市門田 A 遺跡・東槙山第 1 号古墳南斜面出土の人骨。門田 A 遺跡・東槙山第 1・4 号古墳 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 183 集)：103-112.
12. 松下孝幸，2003a：広島県双三郡三良坂町油免遺跡出土の近世人骨。灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (Ⅳ)- 湯免遺跡の調査 -(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 202 集)：494-500.
13. 松下孝幸，2003b：広島県三良坂町大谷遺跡出土の近世人骨。灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (Ⅵ)- 大谷遺跡の調査 -(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 204 集)：289-313.
14. 鈴木 尚，1963：日本人の骨。岩波書店，東京。

表10 脳頭蓋(㎜)(Calvaria)

		トンガ坊城 ST-21 女性
1.	頭蓋最大長	159
8.	頭蓋最大幅	150
17.	バジオン・ブレグマ高	134
8/1	頭蓋長幅示数	94.34
17/1	頭蓋長高示数	84.28
17/8	頭蓋幅高示数	89.33
1+8+17/3	頭蓋モズルス	147.67
5.	頭蓋底長	93
9.	最小前頭幅	91
10.	最大前頭幅	118
11.	両耳幅	129
12.	最大後頭幅	111
13.	乳突幅	102
7.	大後頭孔長	33
16.	大後頭孔幅	30
16/7	大後頭示数	90.91
23.	頭蓋水平周	487
24.	横弧長	322
25.	正中矢状弧長	(346)
26.	正中矢状前頭弧長	125
27.	正中矢状頭頂弧長	−
28.	正中矢状後頭弧長	−
29.	正中矢状前頭弦長	108
30.	正中矢状頭頂弦長	−
31.	正中矢状後頭弦長	−
29/26	矢状前頭示数	86.40
30/27	矢状頭頂示数	−
31/28	矢状後頭示数	−

表11 顔面頭蓋(㎜、度)(Facial skeleton)

		トンガ坊城 ST-21 女性
40.	顔長	84
41.	側顔長	69(右)
42.	下顔長	98
43.	上顔幅	−
45.	頬骨弓幅	−
46.	中顔幅	96
47.	顔高	99
48.	上顔高	57
47/45	顔示数(K)	−
48/45	上顔示数(K)	−
47/46	顔示数(V)	103.13
48/46	上顔示数(V)	59.38
40+45+47/3	顔面モズルス	−
50.	前眼窩間幅	17
44.	両眼窩幅	−
50/44	眼窩間示数	−
51.	眼窩幅(右)	43
	(左)	−
52.	眼窩高(右)	33
	(左)	33
52/51	眼窩示数(右)	76.74
	(左)	−
54.	鼻幅	26
55.	鼻高	44
54/55	鼻示数	59.09
55(1).	梨状口高	−
56.	鼻骨長	−
57.	鼻骨最小幅	4
57(1).	鼻骨最大幅	−
60.	上顎歯槽長	46
61.	上顎歯槽幅	59
62.	口蓋長	39
63.	口蓋幅	36
64.	口蓋高	9
61/60	上顎歯槽示数	128.26
63/62	口蓋示数	92.31
64/63	口蓋高示数	24.32
72.	全側面角	92
73.	鼻側面角	93
74.	歯槽側面角	82

表12 鼻根部(㎜、度)(Nasal root)

		トンガ坊城 ST-21 女性
50.	前眼窩間幅	17
50A.	鼻根横弧長	19
50/50A	鼻根彎曲示数	89.47
57.	鼻骨最小幅	4
44.	両眼窩幅	−
50/44	眼窩間示数	−
a.	前頭突起上幅(右)	12
	(左)	11
b.	前頭突起水平傾斜角	105
c.	G−N投影距離	5
d.	鼻根角	−
e.	G−R距離	−
f.	垂線高	−
f/e	鼻根陥凹示数	−
77.	鼻頬骨角	151
Fa	fmo間距離	91
Fh	垂線高	12
Fh/Fa	顔面扁平示数	13.19

表13 下顎骨(㎜、度)(Mandibula)

		トンガ坊城 ST-21 女性
65	下顎関節突起幅	−
65(1).	下顎筋突起幅	−
66	下顎角幅	−
67	前下顎幅	46
68	下顎長	−
68(1).	下顎長	−
69	オトガイ高	28
69(1).	下顎体高(右)	27
	(左)	27
69(2).	下顎体高(右)	26
	(左)	26
70	枝高(右)	56
	(左)	−
70(1).	前枝高(右)	55
	(左)	−
70(2).	最小枝高(右)	47
	(左)	48
70(3).	下顎切痕高(右)	13
	(左)	−
71(1).	下顎切痕幅(右)	31
	(左)	−
71	枝幅(右)	29
	(左)	−
71a.	最小枝幅(右)	29
	(左)	−
79	下顎枝角(右)	132
	(左)	−
66/65	下顎幅示数	−
68/65	幅長示数	−
68(1)/65	幅長示数(右)	−
69(2)/69	下顎高示数(右)	92.86
	(左)	92.86
71/70	下顎枝示数(右)	51.79
	(左)	−
71a/70(2)	下顎枝示数(右)	61.70
	(左)	−
70(3)/71(1)	下顎切痕示数(右)	41.94
	(左)	−

表14 肩甲骨(mm)(Scapula)

		トンガ坊城 ST-21 女性 (右)
12.	関節窩長	34
13.	関節窩幅	–
14.	関節窩深	–
13/12	関節窩長幅示数	–
14/12	関節窩彎曲示数	–

表15 鎖骨(mm)(Clavicula)

		トンガ坊城 ST-21 女性
1.	鎖骨最大長(右)	–
	(左)	–
2a	骨体彎曲高(右)	–
	(左)	–
2(1)	肩峰端彎曲高(右)	–
	(左)	–
4.	中央垂直径(右)	11
	(左)	10
5.	中央矢状径(右)	11
	(左)	11
6.	中央周(右)	34
	(左)	33
6/1	長厚示数(右)	–
	(左)	–
2a/1	彎曲示数(右)	–
	(左)	–
4/5	鎖骨断面示数(右)	100.00
	(左)	90.91
2(1)/1	肩峰端彎曲示数(右)	–
	(左)	–

表16 上腕骨(mm)(Humerus)

		トンガ坊城 ST-21 女性
1.	上腕骨最大長(右)	–
	(左)	–
2.	上腕骨全長(右)	–
	(左)	–
3.	上端幅(右)	–
	(左)	–
3(1).	横上径(右)	–
	(左)	–
4.	下端幅(右)	–
	(左)	–
5.	中央最大径(右)	21
	(左)	–
6.	中央最小径(右)	15
	(左)	14
7.	骨体最小周(右)	56
	(左)	–
7(a).	中央周(右)	59
	(左)	–
8.	頭周(右)	–
	(左)	–
9.	頭最大横径(右)	–
	(左)	–
10.	頭最大矢状径(右)	–
	(左)	–
11.	滑車幅(右)	19
	(左)	19
12.	小頭幅(右)	–
	(左)	–
12(a).	滑車幅および小頭幅(右)	–
	(左)	–
13.	滑車深(右)	–
	(左)	–
14.	肘頭窩幅(右)	–
	(左)	–
15.	肘頭窩深(右)	–
	(左)	–
6/5	骨体断面示数(右)	71.43
	(左)	–
7/1	長厚示数(右)	–
	(左)	–

表17 橈骨(mm)(Radius)

		トンガ坊城 ST-21 女性
1.	最大長(右)	–
	(左)	–
1b.	平行長(右)	–
	(左)	–
2.	機能長(右)	188
	(左)	–
3.	最小周(右)	38
	(左)	37
4.	骨体横径(右)	16
	(左)	15
4a.	骨体中央横径(右)	15
	(左)	14
4(1).	小頭横径(右)	–
	(左)	–
4(2).	頚横径(右)	–
	(左)	14
5.	骨体矢状径(右)	11
	(左)	11
5a.	骨体中央矢状径(右)	11
	(左)	11
5(1).	小頭矢状径(右)	–
	(左)	–
5(2).	頚矢状径(右)	–
	(左)	16
5(3).	小頭周(右)	–
	(左)	–
5(4).	頚周(右)	–
	(左)	49
5(5).	骨体中央周(右)	41
	(左)	41
5(6).	骨下端幅(右)	–
	(左)	–
3/2	長厚示数(右)	14.89
	(左)	–
5/4	骨体断面示数(右)	68.57
	(左)	73.33
5a/4a	中央断面示数(右)	73.33
	(左)	78.57

表18 尺骨(mm)(Ulna)

		トンガ坊城 ST-21 女性
1.	最大長(右)	–
	(左)	–
2.	機能長(右)	194
	(左)	193
2(1).	肘頭尺骨頭長(右)	–
	(左)	–
3.	最小周(右)	35
	(左)	35
6.	肘頭幅(右)	–
	(左)	–
6(1).	上幅(右)	28
	(左)	–
7.	肘頭深(右)	–
	(左)	20
8.	肘頭高(右)	–
	(左)	18
11.	尺骨矢状径(右)	11
	(左)	11
12.	尺骨横径(右)	14
	(左)	14
S	中央最小径(右)	11
	(左)	11
L	中央最大径(右)	14
	(左)	15
C	中央周(右)	42
	(左)	41
3/2	長厚示数(右)	18.04
	(左)	18.13
11/12	骨体断面示数(右)	78.57
	(左)	78.57
S/L	中央断面示数(右)	78.57
	(左)	73.33

表19 大腿骨(mm)(Femur)

		トンガ坊城 ST-21 女性
1.	最大長(右)	–
	(左)	397
2.	自然位全長(右)	–
	(左)	393
3.	最大転子長(右)	–
	(左)	381
4.	自然位転子長(右)	–
	(左)	367
6.	骨体中央矢状径(右)	23
	(左)	25
7.	骨体中央横径(右)	30
	(左)	28
8.	骨体中央周(右)	83
	(左)	84
9.	骨体上横径(右)	33
	(左)	33
10.	骨体上矢状径(右)	22
	(左)	23
15.	頚垂直径(右)	30
	(左)	31
16.	頚矢状径(右)	22
	(左)	23
17.	頚周(右)	87
	(左)	87
18.	頭垂直径(右)	43
	(左)	–
19.	頭横径(右)	43
	(左)	43
20.	頭周(右)	137
	(左)	–
21.	上顆幅(右)	–
	(左)	–
8/2	長厚示数(右)	–
	(左)	21.37
6/7	骨体中央断面示数(右)	76.67
	(左)	89.29
10/9	上骨体断面示数(右)	66.67
	(左)	69.70

表20 脛骨(mm)(Tibia)

		トンガ坊城 ST-21 女性
1.	脛骨全長(右)	–
	(左)	–
1a.	脛骨最大長(右)	319
	(左)	314
1b.	脛骨長(右)	304
	(左)	305
2.	顆距間距離(右)	295
	(左)	290
3.	最大上端幅(右)	–
	(左)	–
3a.	上内関節面幅(右)	33
	(左)	30
3b.	上外関節面幅(右)	–
	(左)	–
4a.	上内関節面深(右)	–
	(左)	–
4b.	上外関節面深(右)	–
	(左)	–
6.	最大下端幅(右)	–
	(左)	48
7.	下端矢状径(右)	33
	(左)	34
8.	中央最大径(右)	23
	(左)	26
8a.	栄養孔位最大径(右)	27
	(左)	30
9.	中央横径(右)	19
	(左)	20
9a.	栄養孔位横径(右)	23
	(左)	22
10.	骨体周(右)	68
	(左)	73
10a.	栄養孔位周(右)	79
	(左)	84
10b.	最小周(右)	64
	(左)	67
9/8.	中央断面示数(右)	81.61
	(左)	76.92
9a/8a	栄養孔位断面示数(右)	85.19
	(左)	73.33
10b/1	長厚示数(右)	–
	(左)	–

表21 腓骨(mm)(Fibula)

		トンガ坊城 ST-21 女性 (右)
1.	最大長(右)	–
2.	中央最大径(右)	13
3.	中央最小径(右)	9
4.	中央周(右)	37
4a.	最小周(右)	35
4b.	頚横径(右)	12
4c.	頚矢状径(右)	10
4(1).	上端幅(右)	–
4(1a).	上端矢状幅(右)	–
4(2).	下端幅(右)	–
4(2a).	下端矢状幅(右)	24
3/2	中央断面示数(右)	69.23
4a/1	長厚示数(右)	–

表22 膝蓋骨(mm)(Patella)

	トンガ坊城 ST-21 女性 (左)
1. 最大高	–
2. 最大幅	–
3. 最大厚	19
4. 関節面高	–
5. 内関節面幅	–
6. 外関節面幅	22
1/2 膝蓋骨高幅示数	–

表23 推定身長値(cm)(Stature)

		トンガ坊城 ST-21 女性
Pearsonの式	上腕骨(右)	–
	(左)	–
	橈骨 (右)	–
	(左)	–
	大腿骨(右)	–
	(左)	150.06
	脛骨 (右)	–
	(左)	–
藤井の式	上腕骨(右)	–
	(左)	–
	橈骨 (右)	–
	(左)	–
	大腿骨(右)	–
	(左)	150.34
	脛骨 (右)	148.05
	(左)	147.23

表24 中央周の比

		トンガ坊城 ST-21 女性
橈骨/尺骨	(右)	97.26
	(左)	100.00
橈骨/上腕骨	(右)	69.49
	(左)	–
鎖骨/上腕骨	(右)	57.63
	(左)	–
上腕骨/大腿骨	(右)	71.08
	(左)	–
上腕骨/脛骨	(右)	86.76
	(左)	–
脛骨/大腿骨	(右)	81.93
	(左)	86.90
腓骨/脛骨	(右)	54.41
	(左)	–

表25 形態小変異(Non-metoric crania variants)

	トンガ坊城 ST-21 女性 右	左
1. Medial palatine canal(内側口蓋管)	−	−
2. Pterygospinous foramen(翼棘孔)	−	−
3. Hypoglossal canal bridging(舌下神経管ニ分)	+	−
4. Clinoid bridging(床状突起間骨橋)	−	−
5. Condylar canal absent(顆間欠如)	−	−
6. Tympanic dehiscence,Foramen of Huschke(＞1mm)(フシュケ孔、鼓室骨裂孔)	−	−
7. Jugular foramen bridging	−	−
8. Precondylar tubercle	−	−
9. Supra-orbital foramen(incl.frontal foramen)(眼窩上孔)	−	−
10. Accesory infraorbital foramen(副眼窩下孔)	−	−
11. Zygo-facial foramen absent	/	/
12. Aural exostosis(外耳道骨腫)	−	−
13. Metopism(前頭縫合)	−	
14. Os incae(インカ骨)	/	
15. Ossicle at the lambda(ラムダ小骨)	/	
16. Parietal notch bone(頭頂切痕骨)	+	−
17. Transverse zygomatic suture(＞5mm)	/	/
18. Asterionic ossicle	−	+
19. Occipitomastoid ossicle	+	−
20. Epipteric ossicle	−	−
21. Frontotemporal articulation	−	−
22. Biasterionic suture(＞10mm)	−	−
23. Mylohyoid bridging(顎舌骨筋神経溝骨橋)	+	+
24. Accessory mental foramen(副オトガイ孔)	−	−
25. Mandibular torus(下顎隆起)	−	+
26. 滑車上孔(上腕骨)	−	−

トンガ坊城遺跡住居跡出土炭化材の樹種同定

藤根　久・佐々木由香（パレオ・ラボ）

1. はじめに

トンガ坊城遺跡は，広島市安佐北区可部町字上町屋地内に所在する遺跡である。調査では，弥生時代後期～古墳時代前期にかけての集落跡や古墳，中世の城跡などが確認された。

ここでは，第 10 号焼失住居跡（SH10）から検出された炭化材について樹種同定を行った。

2. 試料と方法

第 10 号焼失住居跡（SH10）から検出された建築材と考えられる炭化材 57 点である（表 1, 図 1）。各試料は実体顕微鏡で観察し，クリは一部の試料を除いて同定した。その他の針葉樹とクリと同定できない環孔材は，3 方向（横断面・接線断面・放射断面）の断面を直径 1 cm の真鍮製試料台に両面テープで固定し，金蒸着した。これらの試料は，走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-5900LV 型）を用いて観察と同定を行った。

3. 結果および考察

樹種を同定した結果，常緑針葉樹のヒノキ属と落葉広葉樹のクリであった。検出数は，クリが 38 試料，ヒノキ属が 18 試料であった。出土状況から大型の炭化材となる可能性がある材は，No. 13 とNo. 14 からなる炭化材，No. 15 とNo. 16 からなる炭化材，No. 18 の炭化材，No. 44 の炭化材であり，これらはいずれもクリであった（図 1）。同様に，No. 38 とNo. 39 からなる炭化材，No. 10 とNo. 11 からなる炭化材はヒノキ属であった。また，No. 21 からNo. 25 はヒノキ属の炭化材が集中していた。なお，試料No. 9 とNo. 28 およびNo. 34 は，資料の状態が悪く取り上げられていない。

表 1　第 10 号焼失住居跡（SH10）炭化材の樹種

試料No.	樹種	試料No.	樹種	試料No.	樹種	試料No.	樹種
1	クリ	16	クリ	31	クリ	46	クリ
2	クリ	17	クリ	32	クリ	47	クリ
3	クリ	18	クリ	33	クリ	48	クリ
4	クリ	19	ヒノキ属	34	－	49	ヒノキ属
5	クリ	20	クリ	35	クリ	50	クリ
6	ヒノキ属	21	ヒノキ属	36	ヒノキ属	51	クリ
7	ヒノキ属	22	ヒノキ属	37	クリ	52	クリ
8	ヒノキ属	23	ヒノキ属	38	ヒノキ属	53	クリ
9	－	24	ヒノキ属	39	ヒノキ属	54	クリ
10	ヒノキ属	25	ヒノキ属	40	クリ	55	クリ
11	ヒノキ属	26	ヒノキ属	41	クリ	56	ヒノキ属
12	クリ	27	クリ	42	クリ	57	クリ
13	クリ	28	－	43	クリ	58	ヒノキ属
14	クリ	29	クリ	44	クリ	59	クリ
15	クリ	30	クリ	45	クリ	60	クリ

こうした炭化材の樹種およびその分布から，建築材にはクリとヒノキ属が利用されていた。なお，クリとヒノキ属は，耐朽性が高く，割裂性が高い材である。他の樹種が見られなかったことから，この２分類群が選択的に用いられたことが考えられる。

以下に，検出された樹種の木材組織の解剖学的な特徴および木材の材質について述べる。

（1）ヒノキ属　Chamaecyparis　ヒノキ科　図版　1a-1c（№ 11），2a-2c（№ 58）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材である。晩材の量は非常に少ない。分野壁孔はやや小さいヒノキ型で，1 分野に 1 ～ 3 個である。

ヒノキ属は，本州の福島県以南・四国・九州の山中のやや乾燥した尾根や岩上に生育するヒノキと，ヒノキより分布域は狭く東北南部から中部地方の沢沿いの岩上に生育するサワラがある。材は耐朽性・切削性，割裂性に優れている。

（2）クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版　3a-3c（№ 53），4a-4c（№ 60）

年輪の始めに大型の管孔が配列し，晩材部は非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状，穿孔は単穿孔である。放射組織は単列同性，道管との壁孔は孔口が大きく交互状・柵状である。

クリは，北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通に生育する落葉高木である。材は粘りがあり耐朽性に優れている。

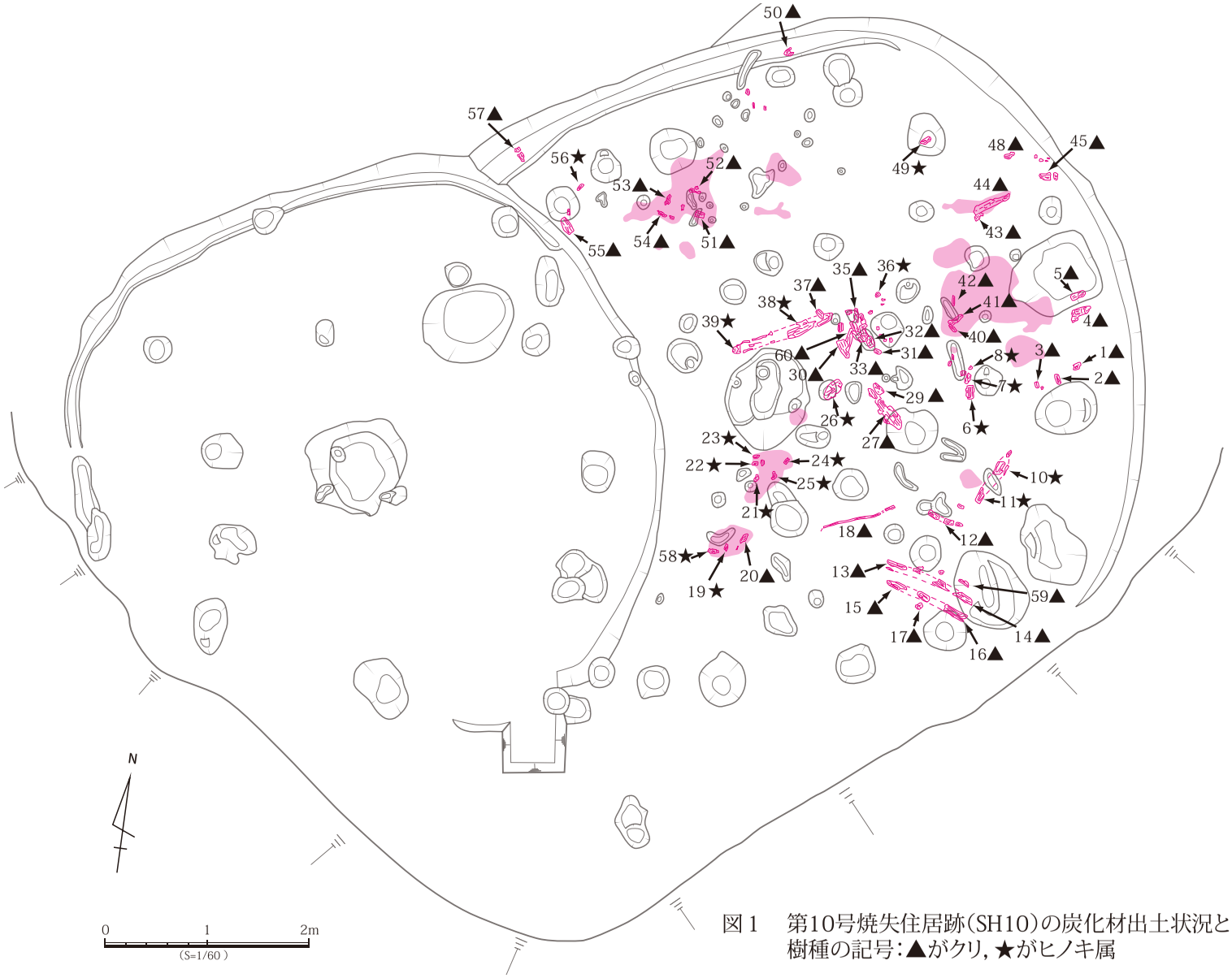


図１　第10号焼失住居跡（SH10）の炭化材出土状況とその樹種
樹種の記号：▲がクリ，★がヒノキ属

トンガ坊城遺跡から出土した弥生土器の胎土材料

藤根 久・米田恭子・中村賢太郎（パレオ・ラボ）

1. はじめに

土器の胎土分析は，一般的には製作地の推定を目的として行われる場合が多い。しかしながら，例えば胎土中に含まれる岩石片の特徴から，これら砂粒物の示す地域がいずれであるかを推定することは容易でない。

土器胎土は，基本材料として粘土と砂粒などの混和材から構成されるが，粘土材料は比較的良質な粘土層から採取されたことが，粘土採掘坑の調査から推察される（藤根・今村，2001）。

一方，混和材としての砂粒は，これら粘土採取の際に粘土層の上下層に分布する砂層などを採取したことが想定される。東海地域には，弥生時代後期の赤彩を施したパレススタイル土器が知られているが，これら３分の１程度の土器では，砂粒物として火山ガラスが多量に含まれるが（藤根，1996；車崎ほか，1996），これら火山ガラスは，粘土採取の際に上下層に分布したと思われるテフラ層と考えられる。このように，胎土中の混和材は，地層中の砂の特徴である可能性が高く，現河川砂とは大きく異なることから，現在の河川砂との比較では問題が大きい。こうしたことから，以前に堆積した段丘堆積物の砂層などとの比較検討が必要と思われる。土器胎土については，第一に土器に使用した粘土や混和材がどのような特徴を持つかを十分理解することが重要であり，こうした特徴を持つと思われる粘土層や砂層などと比較検討すべきと考える。

トンガ坊城遺跡は，安佐北区上町屋地内の山裾に所在する弥生時代～古墳時代前期にかけての集落跡である。調査では，弥生土器や石器，鉄器などの遺物も出土している。このうち弥生土器は，在地土器（赤くて厚い土器）のほか，白く薄い山陰系の土器が大量に出土した。

ここでは，トンガ坊城遺跡から出土した弥生土器について，土器の胎土材料の粘土および砂粒の特徴について調べた。

2. 試料と方法

試料は，トンガ坊城遺跡から出土した弥生時代の甕６と鼓形器台１の試料である（表１）。

表１　胎土材料を検討した甕試料とその特徴

試料№	器種	遺構	時期	切断面の色調	備考
1	甕	竪堀埋土		浅黄橙色（10YR 8/3）	山陰系土器
2	甕	Ｖ 28 区埋土	KⅢ-1 期	浅黄色（2.5Y 7/3）	在地系くの字口縁
3	甕	JK9 区弥生埋土	KⅡ-3 期	黄灰色（2.5Y 6/1）	在地系くの字口縁
4	鼓型器台	D14 区竪堀埋土		浅黄橙色（10YR 8/3），中黒サンドイッチ構造有り	その他の地域か？
5	甕	CD13 区竪堀埋土		灰白食（2.5Y 7/1）	その他の地域か？
6	甕	T27 区 Pit1		浅黄色（2.5Y 8/3）	山陰系土器
7	甕	T28 区 SK2 土器⑥		浅黄色（2.5Y 7/4）	在地系くの字口縁

これら土器は，次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片を作成した。

(1) 試料は，始めに岩石カッターなどで整形し，恒温乾燥機により乾燥させた。全体にエポキシ系

樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドグラスに接着し平面を作成した後，同様にしてその平面の固化処理を行った。

(2) さらに，研磨機およびガラス板を用いて研磨し，平面を作成した後スライドグラスに接着した。

(3) その後，精密岩石薄片作製機を用いて切断し，ガラス板などを用いて研磨し，厚さ 0.02mm 前後の薄片を作成した。仕上げとして，研磨剤を含ませた布板上で琢磨し，コーティング剤を塗布した。

各試料は，偏光顕微鏡を用いて，薄片全面について微化石類（珪藻化石，骨針化石，胞子化石）や大型粒子などの特徴について観察・記載を行った。なお，ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。

［珪藻化石］

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で，その大きさは 10 ～数百 μm 程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し，個々の種類によって特定の生息環境をもつ。最近では，小杉（1988）や安藤（1990）によって環境指標種群が設定され，具体的な堆積環境の復原が行われている。ここでは，種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石（淡水種）と分類し，同定できないものは珪藻化石（不明種）とした。なお，各胎土中の珪藻化石は，その詳細を記載した。

［植物珪酸体化石］

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり，大きさは種類によっても異なり，主に約 10 ～ 50 μ m 前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ，イネ科草本，スゲ，シダ，トクサ，コケ類などに存在することが知られている。ファン型や亜鈴型あるいは棒状などがあるが，ここでは大型のファン型と棒状を対象とした。

［胞子化石］

胞子状粒子は，珪酸質と思われる直径 10 ～ 30 μm 程度の小型無色透明の球状粒子である。これらは，水成堆積中で見られるが，土壌中に多く含まれる。

［石英・長石類］

石英あるいは長石類は，いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く一括して扱う。

［長石類］

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は，双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は，細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また，ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶 (微文象構造という) である。累帯構造を示す斜長石は，火山岩中の結晶 (斑晶) の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石は花崗岩などの SiO 2 % の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。

ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は，火成岩，堆積岩，変成岩に普通に産する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く，黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で，へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩などのSiO 2％の多い火成岩に普遍的に産し，泥質，砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は，肉眼的に淡褐色および淡緑色などの色を呈し，形は長柱状である。SiO 2％が少ない深成岩，SiO 2％が中間あるいは少ない火山岩，ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は，肉眼的に緑色から淡緑色を呈し，柱状である。主としてSiO 2％が中間から少ない火山岩によく見られ，SiO 2％の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり，色は黒色から黒緑色で，薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のようなSiO 2％が中間的な深成岩や斑れい岩などに産する。

[ガラス質]

透明の非結晶の物質で，電球のガラス破片のような薄くて湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山の噴出物と考えられる。

[複合石英類]

複合石英類は石英の集合している粒子で，基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒なものから細粒なものまで様々である。ここでは，便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01mm未満のものを微細，0.01 ～ 0.05mmのものを小型，0.05 ～ 0.1mmのものを中型，0.1mm以上のものを大型と分類した。なお，角閃石類などの有色鉱物から構成される粒子は，複合鉱物類（角閃石類など）とした。

[砂岩質・泥岩質]

石英，長石類，岩片類などの粒子が集合し，それらの間に基質の部分をもつもので，含まれる粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質とし，約0.06mm未満のものを泥岩質とする。

[凝灰岩質]

凝灰岩質は，ガラスや鉱物，火山岩片などの火山砕屑物などから構成され，非晶質でモザイックな文様構造を示す。起源となる火山により鉱物組成は変わる。

[斑晶質・完晶質]

斑晶質は斑晶（鉱物の結晶）状の部分と石基状のガラス質の部分が明瞭に確認できるもの，完晶質は，ほとんどが結晶からなり石基の部分が見られないか，ごくわずかのものをいう。これらの斑晶質，完晶質の粒子は主として玄武岩，安山岩，デイサイト，流紋岩などの火山岩類を起源とする可能性が高い。

[片岩類]

複合石英類は石英の集合している粒子で，これら粒子が片理状組織を示す場合は片岩類とした。

［不透明・不明］

下方ポーラーのみ，直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや，変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明とする。

3. 結果

土器胎土中の微化石類や鉱物・岩石片を記載するために，プレパラート全面を精査・観察した。以下では，粒度分布や 0.1mm 前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお，不等号は，概略の量比を示し，二重不等号は極端に多い場合を示す。なお，表２の微化石類および砂粒の出現頻度は，◎が特に多い，○が多い，△が少ない，空欄は検出されないことを示す。

№ 1：100-900 μ m，最大粒径 1.1mm。石英・長石類〉複合石英類〉複合石英類（微細），砂岩質，ガラス質（軽石型），斜長石（双晶），角閃石類，斜方輝石，単斜輝石，雲母類，カリ長石（パーサイト），珪藻化石（沼沢湿地付着生指標種群 Pinnularia viridis，Eunotia praerupta var.bidens，淡水種 Eunotia biareofera，Cymbella 属，Eunotia 属），胞子化石，植物珪酸体化石

№ 2：150 μ m-1.2mm，最大粒径 3.7mm。石英・長石類〉複合石英類〉斜長石（双晶）〉雲母類，凝灰岩質，角閃石類多い，複合鉱物類（角閃石類），カリ長石（パーサイト），ジルコン，単斜輝石，植物珪酸体化石

№ 3：130-800 μ m，最大粒径 2.3mm。石英・長石類〉斜長石（双晶）〉複合石英類〉角閃石類，カリ長石（パーサイト），雲母類，ガラス質，単斜輝石，ジルコン，珪藻化石（不明種），胞子化石，植物珪酸体化石少ない

№ 4：120 μ m-1.0mm，最大粒径 1.2mm。石英・長石類〉複合石英類〉複合石英類（微細），斜長石（双晶），カリ長石（パーサイト），角閃石類，単斜輝石，斜方輝石，ジルコン，珪藻化石（陸域指標種群 Pinnularia borealis），胞子化石，植物珪酸体化石少ない

№ 5：150-900 μ m，最大粒径 1.4mm。石英・長石類〉複合石英類〉複合石英類（微細），砂岩質，角閃石類，斜長石（双晶），カリ長石（パーサイト），単斜輝石，ガラス質（軽石型），珪藻化石（沼沢湿地付着生指標種群 Eunotia praerupta var.bidens，淡水種 Eunotia biareofera 多い，Cymbella 属，Eunotia 属多い），胞子化石，植物珪酸体化石

№ 6：200 μ m-1.0mm，最大粒径 1.7mm。石英・長石類〉複合石英類〉複合石英類（微細），砂岩質，角閃石類，斜長石（双晶），カリ長石（パーサイト），単斜輝石，ガラス質（軽石型），珪藻化石（淡水種 Eunotia biareofera 多い，Cymbella 属，Eunotia 属多い），胞子化石，植物珪酸体化石

№ 7：150 μ m-1.1mm，最大粒径 2.7mm。石英・長石類〉複合石英類〉ガラス質〉斜長石（双晶），角閃石類，カリ長石（パーサイト），雲母類，ガラス質，単斜輝石，ジルコン，植物珪酸体化石多い

4. 考察

ｉ）微化石類による材料粘土の分類

検討した土器胎土中には，その薄片全面の観察から，珪藻化石や骨針化石などが検出された。こ

れら微化石類の大きさは，珪藻化石が 10 ～数 100μm（実際観察される珪藻化石は大きいもので 150 μ m程度），骨針化石が 10 ～ 100 μ m 前後である（植物珪酸体化石が 10 ～ 50μm 前後）。一方，砕屑性堆積物の粒度は，粘土が約 3.9 μ m以下，シルトが約 3.9 ～ 62.5μm，砂が 62.5μm ～ 2mm である（地学団体研究会・地学事典編集委員会編，1981）。このことから，植物珪酸体化石を除いた微化石類は胎土の材料となる粘土中に含まれるものと考えられ，その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお，植物珪酸体化石は，堆積物中に含まれているものの，土器の製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど，他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した胎土は，粘土部分に含まれる微化石類の出現により，a）淡水成粘土を用いた胎土，b）水成粘土を用いた胎土，c）その他粘土を用いた胎土，に分類された。以下では，分類された粘土の特徴について述べる。

a) 淡水成粘土を用いた胎土（3 胎土）

これらの胎土中には，淡水種珪藻化石が特徴的に含まれていた。いずれの胎土においても，淡水種 Eunotia biareofera や Eunotia 属が特徴的に含まれていた。また，№ 1 と№ 5 の胎土中には，沼沢湿地付着生指標種群 Eunotia praerupta var.bidens などが含まれ，沼沢湿地環境で堆積した粘土を利用していることが推定される。

b) 水成粘土を用いた胎土（1 胎土）

この胎土中には，不明種珪藻化石が含まれていた。

c) その他粘土を用いた胎土（3 胎土）

これら胎土中には，珪藻化石や骨針化石などの微化石類は含まれていなかった。

遺跡周辺は，広島花こう岩類や阿武層群や高田流紋岩類，あるいは中•古生層の玖珂層群（チャートや砂岩など固結した地層）が分布する地域であり（図 1 および図 2），在地土器としての粘土材料としては段丘堆積物中の粘土層など比較的新しい地層粘土が候補になると考えられる。なお，段丘堆積物中の粘土層中には珪藻化石が含まれない場合が多い。

ii）胎土中の砂粒組成による分類

ここで用いた岩石分類群は，構成する鉱物種や岩石片の構造的特徴から設定した分類群であるが，地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。このため，粘土塊や土器胎土中の鉱物，岩石粒子の岩石学的特徴は，地質学的状況に一義的に対応しない。

ここでは，比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った（表 2）。岩石の推定は，複合石英類または複合鉱物類が深成岩類，泥岩質や砂岩質あるいは複合石英類（微細）が堆積岩類，凝灰岩質が凝灰岩類または風化岩石，ガラス質がテフラ (火山噴出物) である。さらに，推定した起源

岩石は，表３の組み合わせに従って分類した。

表２　土器胎土中の粘土および砂粒の特徴

試料No.	器種	備考	粘土の特徴					砂粒の特徴								鉱物の特徴				植物珪酸体化石	特徴
			種類	淡水種珪藻化石	不明種珪藻化石	骨針化石	胞子化石	分類	片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ	ジルコン	角閃石類	輝石類	雲母類		
1	甕	山陰系土器	淡水成	○	○		△	Ｂｃ		○	○				○		○	◎	○	○	軽石型ガラス質
2	甕	在地系くの字口縁	その他					Ｂ		○			△		△	△	◎	○	◎	△	角閃石類多い
3	甕	在地系くの字口縁	水　成		△		△	Ｂ		○					△	△	△	△	△	△	イネ頴
4	鼓型器台	その他の地域か	その他					Ｂｃ		○	○					△	○	△	△	△	陸域指標種群珪藻化石，イネ頴
5	甕	その他の地域か	淡水成	○	○		△	Ｂｃ		○	○				○		○	◎	△	○	軽石型ガラス質
6	甕	山陰系土器	淡水成	◎	○		△	Ｂｃ		○	○				○		○	○	△	△	軽石型ガラス質
7	甕	在地系くの字口縁	その他					Ｂｇ		○	△		△		○	△	△	△	△	○	陸域指標種群珪藻化石

検討した土器胎土中の岩石組成は，深成岩類を主としたＢ群（2 胎土），深成岩類を主として堆積岩類を伴うＢｃ群（4 胎土），深成岩類を主としてテフラを伴うＢｇ群（1 胎土）に分類された（表 2）。

テフラとしたガラス質は，バブル（泡）型（図版 2-10,11,14）のほか軽石型（図版 1-12,13）が含まれていた。この軽石型からなるテフラは，試料№ 1，№ 5，№ 6 の土器胎土中に特徴的に含まれていた。なお，この軽石型テフラを含む胎土中の岩石組成はいずれも深成岩類を主として堆積岩類を伴うＢｃ群である。

表３　胎土中の岩石片と組み合わせ

			第 1 出現群						
			A	B	C	D	E	F	G
			片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
第２出現群	a	片岩類		Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab		Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc		Dc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd		Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De		Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef		Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Ef	Fg	

ⅲ）胎土材料の特徴

土器胎土の特徴を調べた結果，粘土は淡水成粘土，水成粘土，その他粘土に分類された。一方，砂粒組成は，深成岩類を主としたＢ群，深成岩類を主として堆積岩類を伴うＢｃ群，深成岩類を主としてテフラを伴うＢｇ群に分類された。

対象とした土器胎土の粘土と砂粒組成の関係について見ると，淡水種珪藻化石を特徴的に含む胎土は，深成岩類を主として堆積岩類を伴うＢｃ群である（試料№ 1，№ 5，№ 6）。これらの土器胎土中には，Eunotia biareofera や Eunotia 属などの淡水種珪藻化石が共通して含まれていたことを考えると，非常に類似した粘土および砂粒組成を示していると言える。試料№ 1 の甕と試料№ 6

は，考古学的な知見によると山陰系土器とされているが，材料的にも共通した特徴を示している。No.５は，考古学的な知見によるとその他の地域と考えられているが，材料的には山陰系土器と共通した特徴を示している。

試料No.２とNo.３は，考古学的な知見によると在地系くの字口縁の甕であるが，両者は珪藻化石を含まない粘土であり，深成岩類を主としたＢ群の砂粒組成を示すことから，材料的に共通した特徴を示す。なお，試料No.２は，角閃石類を多く含む点において若干異なる胎土である。

試料No.４は，珪藻化石を含まない粘土であり，深成岩類を主として堆積岩類を伴うＢｃ群の砂粒組成を示す。砂粒組成では，先の山陰系の甕の特徴と類似する。

試料No.７は，珪藻化石を含まない粘土であり，深成岩類を主としてテフラを伴うＢｇ群である。ただし，堆積岩類を少ないものの含むことから，他のＢｃ群の土器胎土と近い組成と考えられる。その他の特徴としては，試料No.３とNo.４の胎土中には，イネの頴に形成される尖った形状を示す珪酸体が含まれていた（図版 2-24，25）。これらは，偶発的に混入したものと考えられる。試料No.４とNo.６の土器胎土中には，砂粒表面に接して陸域指標種群の珪藻化石が見られた（図版 2-23）。

５．おわりに

対象とした土器胎土は，土器胎土の特徴を調べた結果，粘土は淡水成粘土，水成粘土，その他粘土に分類された。一方，深成岩類を主としたＢ群，深成岩類を主として堆積岩類を伴うＢｃ群，深成岩類を主としてテフラを伴うＢｇ群に分類された。

考古学的な知見による山陰系土器において，材料的にも共通した特徴を示していることが理解された。

土器胎土の粘土および砂粒物などの材料は，今後該当地域堆積物の精査を行うことにより，その実態が明らかになるものと考えている。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42,2,73-88.
地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）増補改訂 地学事典，平凡社，1612p.
藤根 久（1998）東海地域（伊勢－三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料．第６回東海考古学フォーラム岐阜大会，土器・墓が語る，108 － 117.
藤根　久・今村美智子（2001）第３節　土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴．波志江中宿遺跡，日本道路公団・伊勢崎市・(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団，262-277.
小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27,1-20.
車崎正彦・松本　完・藤根　久・菱田　量・古橋美智子（1996）(39) 土器胎土の材料－粘土の起源を中心に－．日本考古学協会第 62 回大会研究発表要旨，153-156.
日本の地質『中国地方』編集委員会編（1991）日本の地質７　中国地方 . 共立出版，290p.

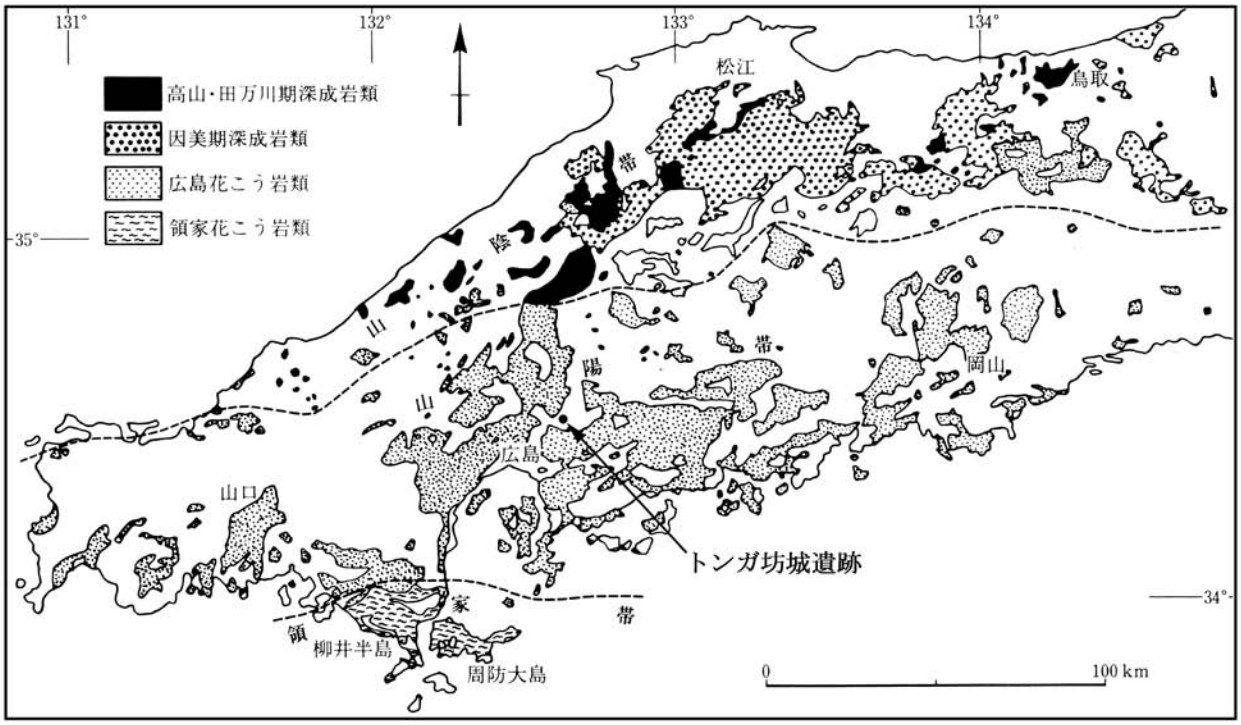


図１　中国地方における白亜紀～古第三紀の深成岩類の分布　（日本の地質 『中国地方』 編集委員会編，1991 より引用）

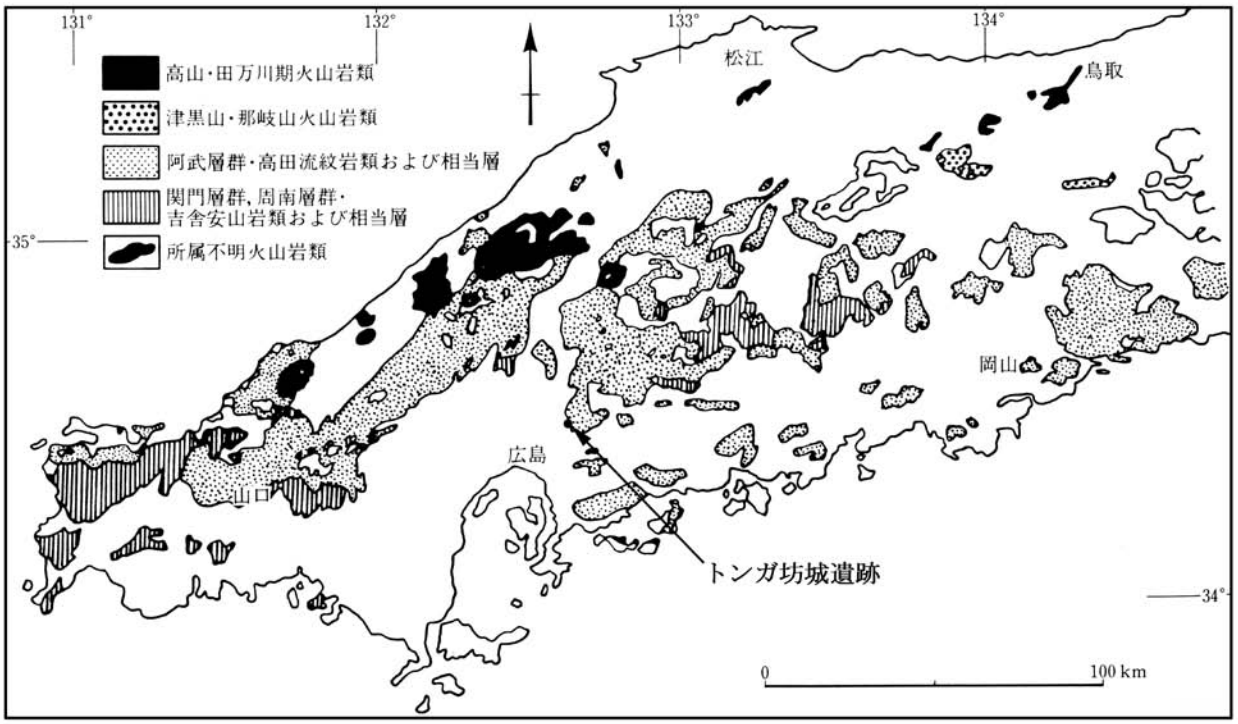


図２　中国地方における白亜紀～古第三紀の火山岩類の分布　（日本の地質 『中国地方』 編集委員会編，1991 より引用）

トンガ坊城遺跡における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

放射性炭素年代測定は，呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が，放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去の大気中の^{14}C濃度は一定ではなく，年代値の算出に影響を及ぼしていることから，年輪年代学の成果などを利用した較正曲線により^{14}C年代から暦年代に換算する必要がある。

2. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理	測定法
No. 1	SH10，9番炭	炭化材	酸 - アルカリ - 酸洗浄	AMS
No. 2	SH10，26番炭	炭化材	酸 - アルカリ - 酸洗浄	AMS
No. 3	SH10，28番炭	炭化材	酸 - アルカリ - 酸洗浄	AMS
No. 4	SH 9，土坑	人骨（胸椎）	酸洗浄	AMS

AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

3．測定結果

試料名	測定No.（Beta-）	未補正^{14}C年代（年BP）	$\delta^{13}C$（‰）	^{14}C年代（年BP）	暦年代 Calendar Age（2σ:95%確率，1σ:68%確率）
No. 1	235220	1840 ± 40	-22.5	1880 ± 40	交点：Cal AD 120 2σ：Cal AD 50 ～ 230 1σ：Cal AD 80 ～ 140
No. 2	235221	1810 ± 40	-21.1	1870 ± 40	交点：Cal AD 130 2σ：Cal AD 80 ～ 210 1σ：Cal AD 60 ～ 240
No. 3	235222	1800 ± 40	-22.9	1830 ± 40	交点：Cal AD 210 2σ：Cal AD 80 ～ 260，300 ～ 310 1σ：Cal AD 130 ～ 240
No. 4	235223	(101.3±0.5pMC)	-19.8	(100.2 ± 0.5pMC)	modern

BP：Before Physics（Present），Cal：Calibrated，AD：紀元後，modern：現代

（1）未補正^{14}C年代

試料の^{14}C / ^{12}C比から，単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は5,730年であるが，国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。なお，No. 4についてはモダン・スタンダードからの%で表示している。

（2）デルタ$\delta^{13}C$測定値

試料の測定^{14}C / ^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C / ^{12}C）。この値は標準物質（PDB）

の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料の $\delta^{13}C$ 値を -25(‰) に標準化することで同位体分別効果を補正する。

（３）^{14}C 年代

$\delta^{13}C$ 測定値により同位体分別効果を補正して算出した年代。暦年代較正にはこの年代値を使用する。なお，№4 についてはモダン・スタンダードからの％で表示している。

（４）暦年代（Calendar Age）

^{14}C 年代を実際の年代（暦年代）に近づけるには，過去の宇宙線強度の変動などによる大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正する必要がある。較正には，年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値およびサンゴの U/Th（ウラン / トリウム）年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。

暦年代の交点は，^{14}C 年代値と較正曲線との交点の暦年代値を示し，1 σ（68％確率）と 2 σ（95％確率）は，^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって，複数の交点や複数の 1 σ・2 σ 値が表記される場合もある。

４．所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果，№1 の炭化材では 1880±40 年 BP（2 σ の暦年代で AD50 ～ 230 年），№2 の炭化材では 1870±40 年 BP（AD80 ～ 210 年），№3 の炭化材では 1830 ± 40 年 BP（AD80 ～ 260, 300 ～ 310 年）の年代値が得られた。

№4 の人骨は modern（現代：AD1950 年 ± 以降）であった。2 σ の偏差を考慮すると 19 世紀後半以降の試料と考えられる。

文献

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.

尾嵜大真（2005）INTCAL98 から IntCal04 へ．学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジア№3 －炭素年代測定による高精度編年体系の構築－，p.14-15.

中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院，p.1-36.

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-22.5:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-235220**

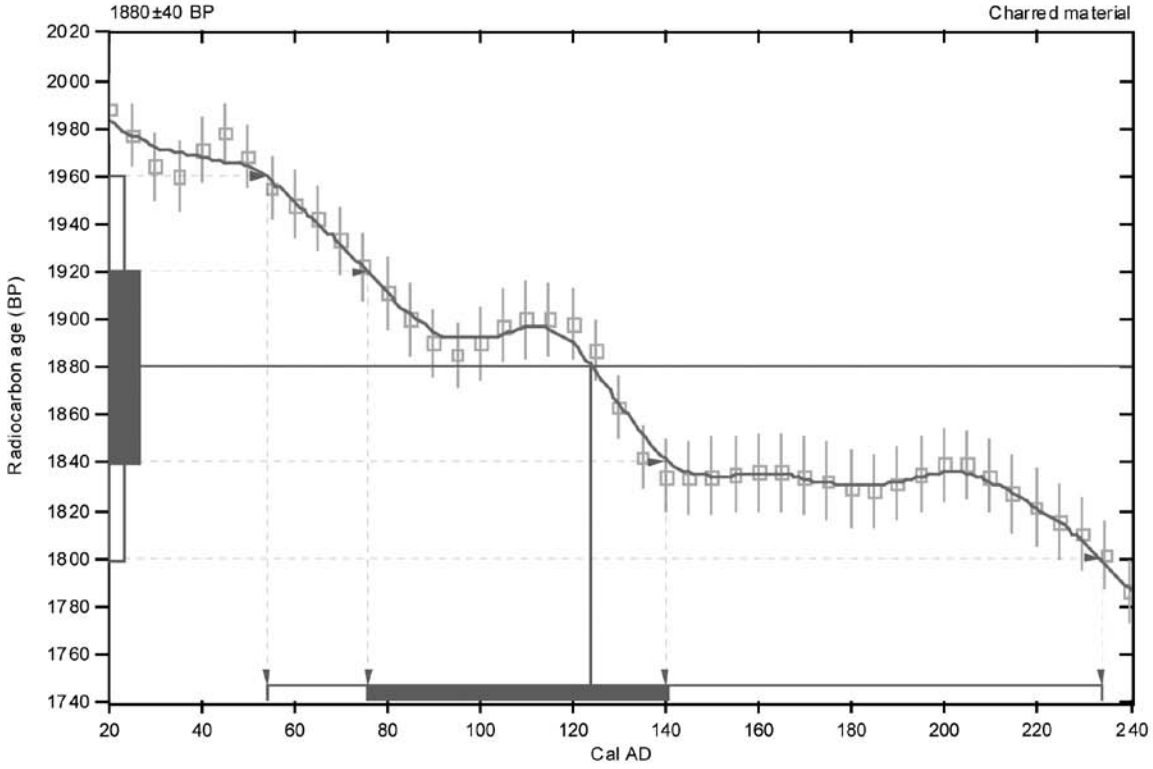
Conventional radiocarbon age: **1880±40 BP**

2 Sigma calibrated result: (95% probability) **Cal AD 50 to 230 (Cal BP 1900 to 1720)**

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal AD 120 (Cal BP 1830)

1 Sigma calibrated result: (68% probability) Cal AD 80 to 140 (Cal BP 1870 to 1810)



References:

Database used

INTCAL04

Calibration Database

INTCAL04 Radiocarbon Age Calibration

IntCal04: Calibration Issue of Radiocarbon (Volume 46, nr 3, 2004).

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-21.1:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-235221**

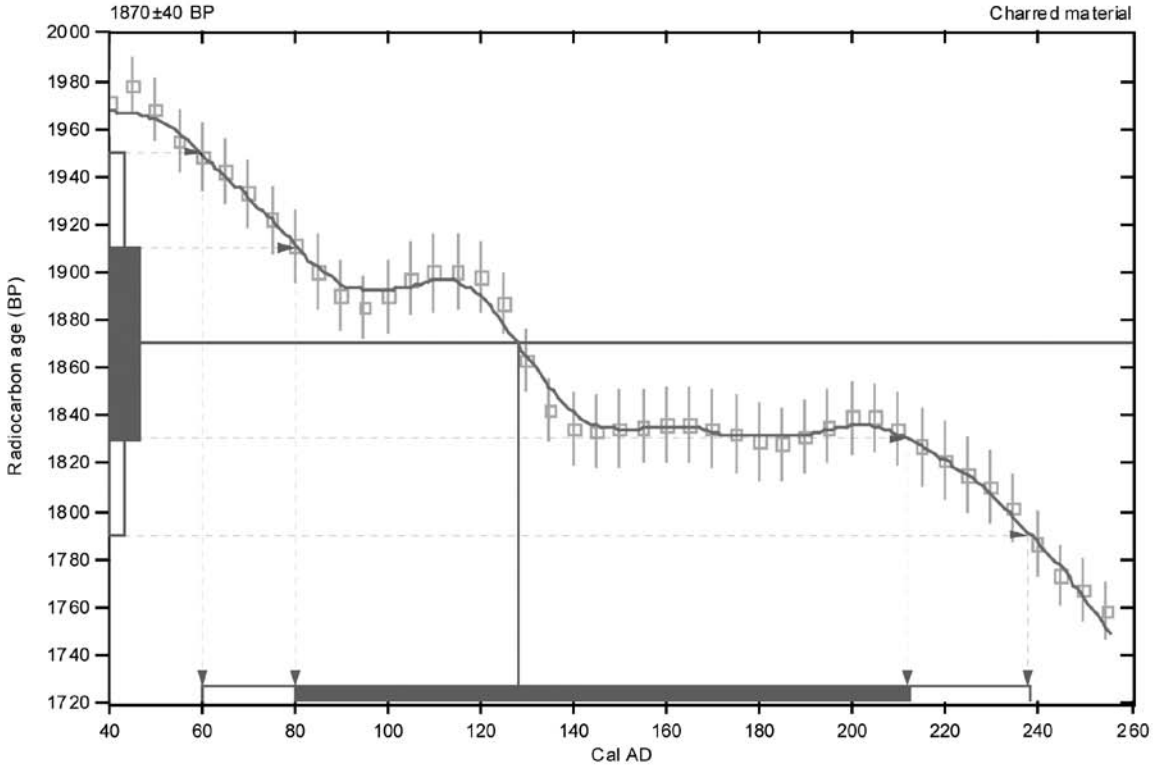
Conventional radiocarbon age: **1870±40 BP**

2 Sigma calibrated result: (95% probability) **Cal AD 60 to 240 (Cal BP 1890 to 1710)**

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal AD 130 (Cal BP 1820)

1 Sigma calibrated result: (68% probability) Cal AD 80 to 210 (Cal BP 1870 to 1740)



References:

Database used

INTCAL04

Calibration Database

INTCAL04 Radiocarbon Age Calibration

IntCal04: Calibration Issue of Radiocarbon (Volume 46, nr 3, 2004).

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-22.9:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-235222**

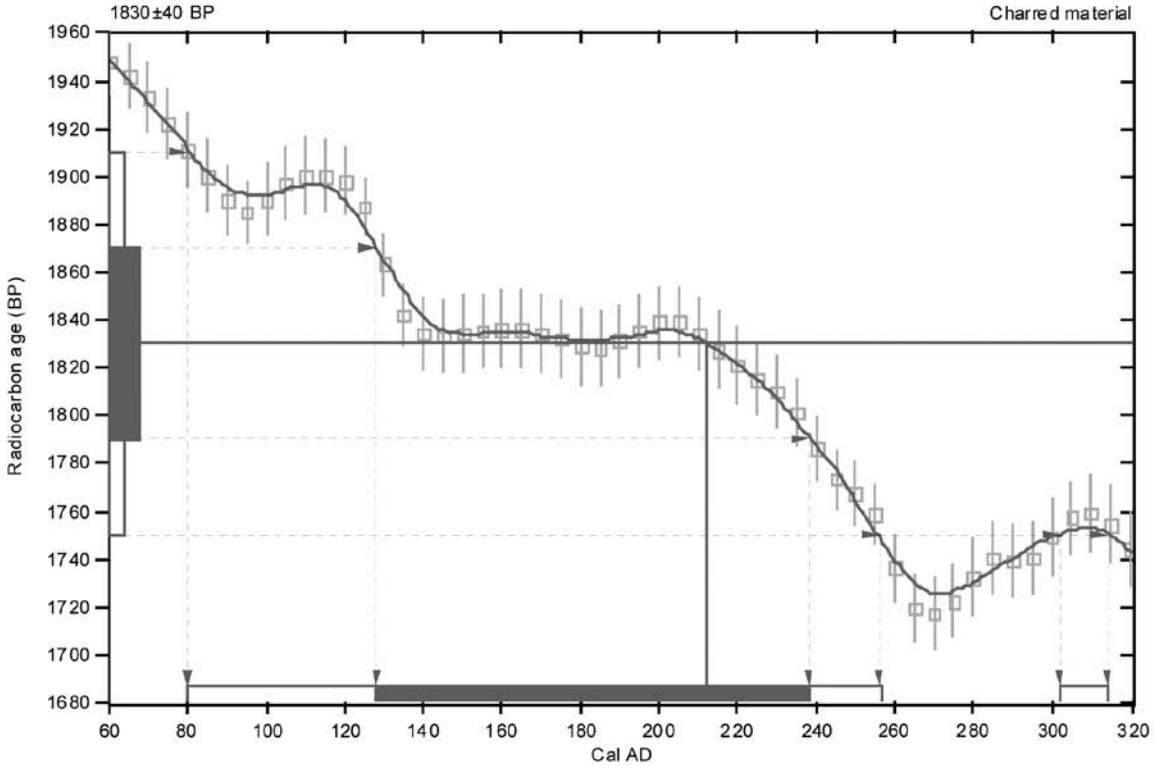
Conventional radiocarbon age: **1830±40 BP**

2 Sigma calibrated results: (95% probability) **Cal AD 80 to 260 (Cal BP 1870 to 1690) and Cal AD 300 to 310 (Cal BP 1650 to 1640)**

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal AD 210 (Cal BP 1740)

1 Sigma calibrated result: (68% probability) Cal AD 130 to 240 (Cal BP 1820 to 1710)



References:

Database used

INTCAL04

Calibration Database

INTCAL04 Radiocarbon Age Calibration

IntCal04: Calibration Issue of Radiocarbon (Volume 46, nr 3, 2004).

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

BETA

Consistent Accuracy...
Delivered On Time.

Beta Analytic Inc.
4985 SW 74 Court
Miami, Florida 33155 USA
Tel: 305 667 5167
Fax: 305 663 0964
Beta@radiocarbon.com
Www.radiocarbon.com

Mr. Darden Hood
Director

Mr. Ronald Hatfield
Mr. Christopher Patrick
Deputy Directors

Quality Assurance Report

This report provides the results of reference materials used to validate radiocarbon dating results on unknown materials, prior to reporting. Known age reference materials were analyzed as QA measurements to verify the accuracy of the results. These are analyzed in multiple detectors. To test accuracy, the "blind sample" was measured in TWO separate detectors without the engineers knowing the age. This report quotes the results of the QA measurements.

Report Date: October 17, 2007
Submitter: Mr. Kazumi Asai / Mr. Sumihisa Matsuyama
Sample: Beta-235220-235223

QA MEASUREMENTS

TIRI wood standard (international standard)

Expected value:	4500 +/- 50 BP
Measured value:	4510 +/- 40 BP
Agreement:	accepted

TIRI carbonate standard (international standard)

Expected value:	18160 +/- 100 BP
Measured value:	18190 +/- 90 BP
Agreement:	accepted

Blind sample

Known age:	350 +/- 40 BP
AMS age:	300 +/- 40 BP
Agreement:	accepted

Background signal

Expected value:	39000 to 48000 BP
Measured value:	42450 +/- 280 BP
Agreement:	accepted

COMMENT: All standards were within accepted ranges. (TIRI stands for Third International Radiocarbon Inter-comparison. This material has a very well known age.) The "Blind sample" is a sample that was measured at least twice in a detector at different times.

Validation: Darden Hood Date: October 17, 2007

広島市坊主山遺跡出土の弥生人骨

松下孝幸[1]・松下真実[2]

【キーワード】：広島県，弥生人骨，石棺墓，男性，低・広顔

はじめに

広島市安佐北区大林町字真香に所在する坊主山遺跡の発掘調査が一般国道 54 号 (可部バイパス) 建設工事に伴って 2008 年 (平成 20 年) におこなわれ， 1 基の埋葬遺構 (ST-14，箱式石棺) から人骨が出土した。本遺跡は弥生時代後期の土壙墓群と石棺墓からなる集団墓地である。埋葬遺構は 40 基存在しているが，人骨が検出されたのはわずかに 1 基に過ぎなかった。

広島県内で，これまで筆者らが古人骨の調査に加わったり，報告したもののうち，弥生人骨は，広島市の佐久良遺跡 (松下，1984a)，末光遺跡群 B 地点 (松下，1984b)，梨ヶ谷遺跡 B 地点 (松下，1998a)，千代田町の壬生西谷遺跡 (松下・他，1989)，須倉城遺跡 (松下，1998b)，府中市の打堀山遺跡 (松下，1997b)，山の神遺跡群 (松下，1998d)，池ノ迫遺跡群 (松下，1998d)，世羅町の矢の迫遺跡 (松下，1997a)，神辺町の池之坊墳墓群 (松下，2004b)，琴平遺跡，丸子山墳墓群から出土した人骨ぐらいしかない。

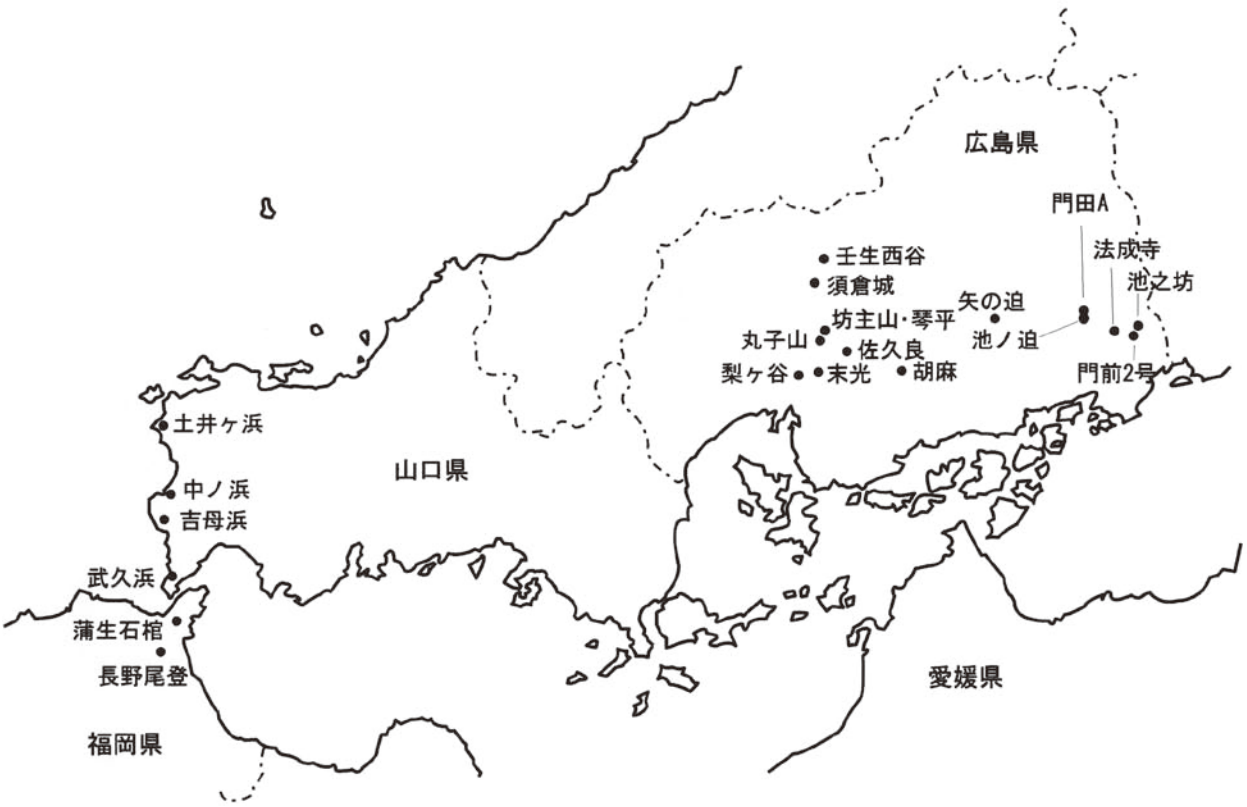
また，弥生時代から古墳時代にかけての人骨としては，千代田町の歳ノ神遺跡群 (松下・他，1986a)，中出勝負峠墳墓群 (松下・他，1986b)，竹原市の鷺の森遺跡 (松下・他，1991a)，豊栄町の手島山墳墓群 (松下・他，1991b)，東広島市の胡麻 4 号遺跡 (松下・他，1990a)，府中市の門田 A 遺跡 (松下，1999)，福山市の法成寺サコ遺跡 (松下，1998c) から出土している。

弥生時代や弥生時代から古墳時代にかけての人骨のうち保存状態が良好で形質の特徴が明らかになったものは，壬生西谷遺跡，佐久良遺跡，歳ノ神遺跡群，中出勝負峠墳墓群から出土した人骨ぐらいしかないので，広島県全域で弥生人の特徴を把握し，考察できるまでには至っていなかった。弥生人や古墳人に関しては千代田町，東広島市，府中市での特徴が次第に明らかになりつつある程度であったが，2009 年に丸子山墳墓群から出土した人骨の一部が発見され，その特徴を明らかにすることができた (松下真実，2010)。その特徴は衝撃的であった。研究ができたのは 2 個の頭蓋であるが， 1 体はかなりの高顔で，これほどまでに顔が高いものは北部九州の甕棺から出土する弥生人骨の中でもそう多くはない。これほどの高顔の弥生人骨が広島市内から出土した意義はかなり大きく，今後その出自を明らかにしていく必要がある。この墳墓群からはイモガイ製腕輪や小札状製品も発見されており，副葬品と人骨形質との関連も課題である。

今回出土した人骨の保存状態は必ずしも良好なものではないが，頭蓋は比較的よく残っており，人類学的観察や計測をおこなうことができた。その結果，興味ある所見を得たので，その結果を報告しておきたい。

---

1 Takayuki MATSUSHITA 2 Masami MATSUSHITA
The Doigahama Site Anthropological Museum〔土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム〕



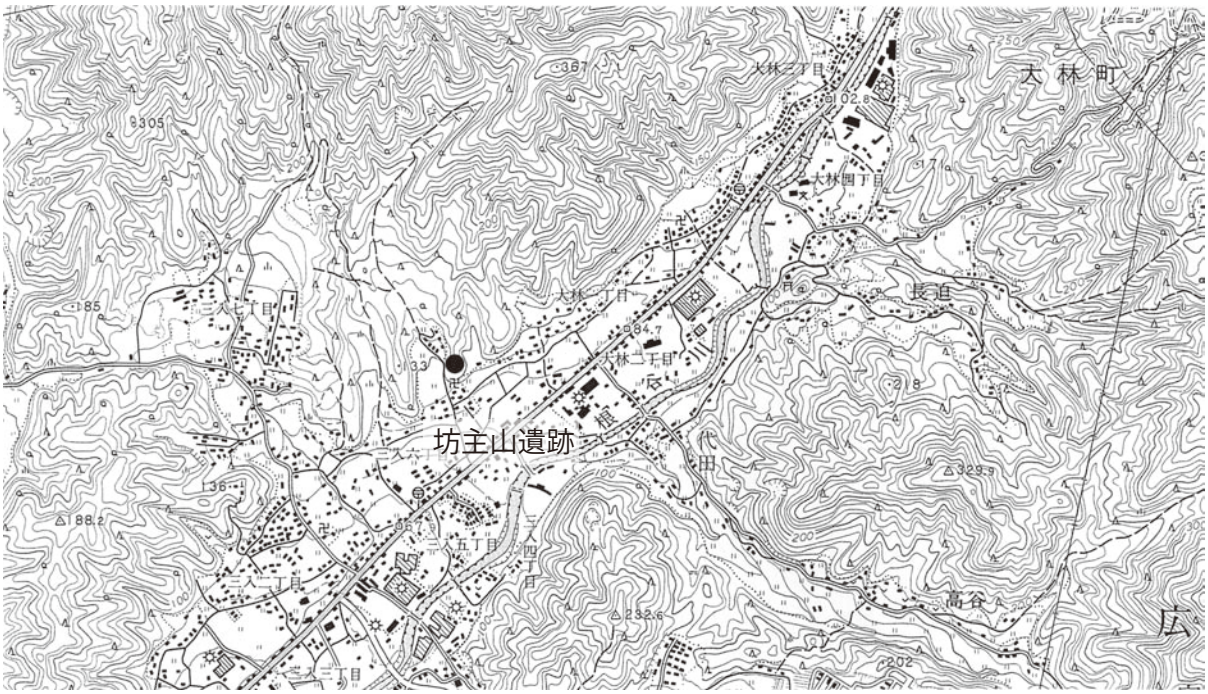


図１　遺跡の位置

（Fig.1　Location of the Bouzuyama site, Hiroshima City, Hiroshima Prefecture）

資　料

今回の発掘調査で弥生時代の石棺墓 1 基と土壙墓 39 基が確認されたが，人骨が残存していたのは 1 基の石棺墓 (ST-14) のみであった (表 1)。石棺は厚手の花崗岩でできている。残存していたのは頭蓋，左右の鎖骨と上腕骨，左側肩甲骨，左右の大腿骨と脛骨および椎骨と右側肋骨であった。埋葬姿勢は仰臥。頭位は西。膝関節は伸展状態である。肘関節の様態は前腕の骨が残存していないので，不明であるが，上腕骨が残っていたので，もし肘関節を屈曲していれば，前腕の骨も残っていた可能性がある。しかし実際は残っていなかったことから，肘関節は伸展状態であった可能性が強い。

頭蓋の保存状態は良好である。第二頸椎が残存していた。椎骨は大部分が椎弓部分のみである。肋骨の保存状態はよくない。上腕骨，大腿骨は骨体のみ。脛骨は近位端がわずかに残存していたに過ぎない。鎖骨，上腕骨，大腿骨はいずれも骨体が細い。大腿骨の長さは短いことが観察から予測される。また，石棺の長さは内径で 165cm しかない。おそらく身長は 160cm 以下の低身長であったものと予測される。

本人骨は考古学的所見から，弥生時代に属する人骨と推測されているが，人骨から ^{14}C 炭素年代測定 (AMS 法) をおこなったところ，2000±40B.P. という値が得られた。本人骨は後述している形質人類学的所見から，老年の男性骨である。

表 1　出土人骨一覧（Table 1. List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	埋葬姿勢	頭位	埋葬遺構
ST-14	男性	老年	仰臥伸展	西	石棺

表 2　年齢区分　(Table 2. Division of age)

年齢区分		年　齢
未成人	乳児	1 歳未満
	幼児	1 歳～ 5 歳 (第一大臼歯萌出直前まで)
	小児	6 歳～ 15 歳 (第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年	16 歳～ 20 歳 (蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21 歳～ 39 歳 (40 歳未満)
	熟年	40 歳～ 59 歳 (60 歳未満)
	老年	60 歳以上

注）成年という用語については土井ヶ浜遺跡第 14 次発掘調査報告書 (1996) を参照されたい。

所　見

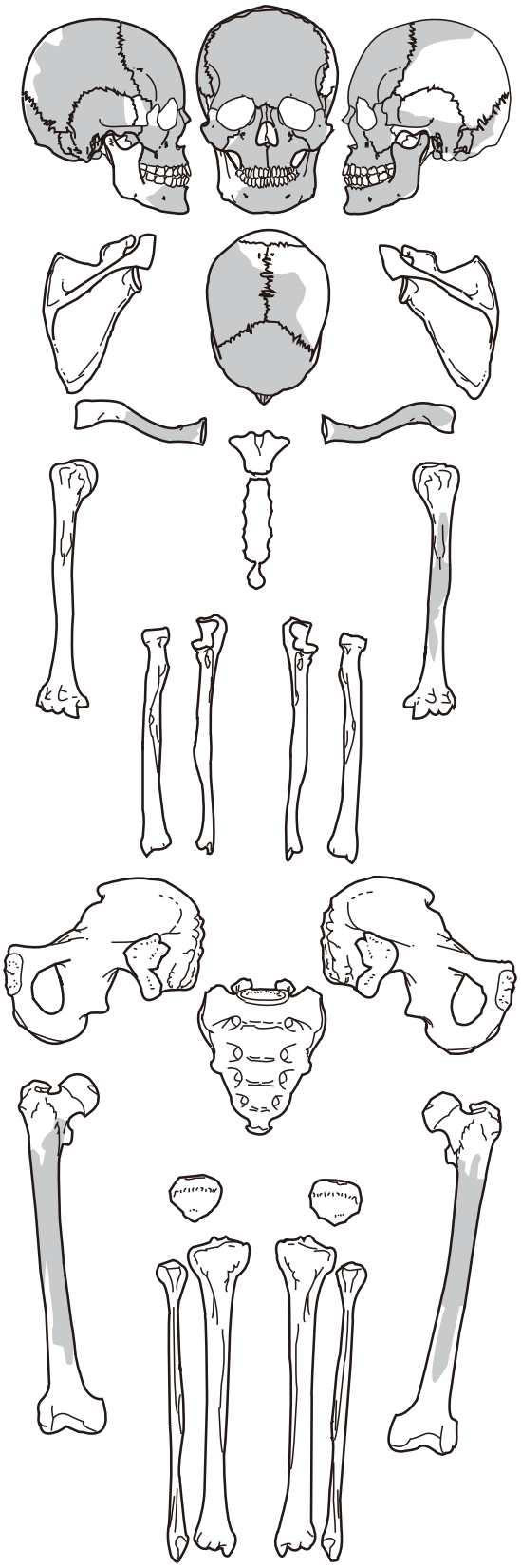
人骨の残存部は図 2 に示すとおりである。また，各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

ST-14 人骨（男性，老年）

1．頭蓋

(1) 脳頭蓋

後頭骨後頭鱗の大部分と左側側頭骨の鱗部を欠損している。骨壁は薄く脆い。外後頭隆起の様態



坊主山遺跡出土人骨・ST-14（男性・老年）

図 2 人骨残存図（アミかけ部分）

（Fig.2 Regions of preservasion of the skeleton. Shaded areas are preserved.）

は不明である。乳様突起は短いが，根部は大きい。外耳道は両側とも観察できたが，骨腫は左右とも認められない。三主縫合は冠状縫合および矢状縫合の大部分とラムダ縫合の一部の観察ができた。矢状縫合と冠状縫合は内外両板とも癒合閉鎖しており，ラムダ縫合も両板ともほとんど癒合している。

脳頭蓋の計測値は，頭蓋最大長も頭蓋最大幅も計測できないが，バジオン・ブレグマ高は130mm である。頭蓋長幅示数は算出できないが，観察したところ，頭型はやや長頭に傾いた中頭型と思われる。

(2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋は左側の頬骨弓などを欠損しているが，ほぼ完全である。前頭結節の発達は良好であるが，眉上弓の隆起もかなり強い。鼻根部は狭く，鼻骨も隆起しており，鼻根部は扁平ではない。頬骨はやや外側に張り出しているが，上顎骨は狭く，かなりきゃしゃである。

顔面頭蓋の計測値は，顔長が 100mm，頬骨弓幅は〔70mm× 2 ＝ 140mm〕，中顔幅は102mm，顔高は 117mm，上顔高は 66mm で，顔示数は〔83.57(K)〕，114.71(V)，上顔示数は〔47.14(K)〕，64.71(V) となり，顔面には低・広顔傾向が認められる。

眼窩幅は 43mm(右)，眼窩高は 32mm(右)，32mm(左) で，眼窩示数は 74.42(右) となり，右側は低眼窩 (chamaekonch) に属しており，形態は四角形で眼窩上縁は水平である。

鼻幅は 27mm，鼻高は 51mm で，鼻示数は 52.94 となり，低鼻 (chamaerrhin) に属している。

鼻根部の計測値は，前眼窩間幅が 17mm，鼻根横弧長は 19mm，鼻根彎曲示数は 89.47 となり，示数値はやや大きいが，鼻骨は鼻骨間縫合へ向けてやや隆起しており，鼻根部は示数値ほど扁平ではない。鼻骨最小幅は 7mm で，前頭突起水平傾斜角は 114 度を示し，前頭突起の向きは矢状方向である。鼻根角は 146 度，鼻根陥凹示数は 12.12 である。鼻頬骨角は 148 度で，この角度は大きく，顔面扁平示数は 13.54 である。

側面角は，全側面角が 86 度，鼻側面角が 87 度，歯槽側面角は 80 度で，歯槽性突顎の傾向は認められない。

下顎骨は右側の下顎枝と左側の下顎頭などを欠損している。下顎体の高径は低く，下顎骨の径は小さいが，オトガイ隆起はよく発達している。

２．歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと，次のとおりである。

❽ ❼ ❻ 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 ❻ ❼ ❽
／ ❼ ❻ 5 ❹ 3 ② ❶	① 2 3 4 5 6 ❼ ❽

〔●: 歯槽閉鎖　○: 歯槽開存　／: 不明，番号は歯種〕

〔1: 中切歯，2: 側切歯，3: 犬歯，4: 第一小臼歯，5: 第二小臼歯，6: 第一大臼歯，7: 第二大臼歯，8: 第三大臼歯〕

咬耗度は Broca の３度 (咬耗が象牙質まで及ぶ) で，咬耗は強い。なお，下顎右側の中切歯の歯槽は閉鎖しているが，本例の歯槽は全体的に健康的ではなく，歯槽の吸収が全体的にみられる。また下顎左側中切歯の歯槽の状態からこの歯も脱落直後と思われる。以上のことから下顎右側中切歯が風習的に抜去されたとは考えにくい。歯の咬合形式は鉗子状咬合である。

3．四肢骨

(1) 上肢骨

左右の鎖骨，上腕骨，左側肩甲骨が残存していた。

①鎖骨

長さの割にかなり細い。

②上腕骨

左側骨体の一部が残存していたに過ぎない。

(2) 下肢骨

左右の大腿骨と脛骨が残存していた。

①大腿骨

左右の骨体が残存していた。緻密質が剥落しており，計測はできないが，骨体は細い。粗線の様態は不明であるが，骨体上部はやや扁平である。

②脛骨

両側とも近位端がわずかに残存していたに過ぎない。保存状態は著しく悪く，ほとんど取り上げることができない状態で，その様態は不明である。

4．性別・年齢

前頭結節は発達がよく，四肢骨の骨体も細いが，眉上弓の隆起がかなり強いことから，性別を男性と推定した。三主縫合の内外両板がほとんど癒合閉鎖していることから，年齢は老年と思われる。

考　察

保存状態が良好であった頭蓋について，広島県内での検討をおこなってみた。

1．脳頭蓋

表３は男性の脳頭蓋の比較表である。本例は頭蓋長幅示数が算出できなかったが，観察所見から頭型は長頭に傾いた中頭型と思われる。また，バジオン・ブレグマ高は 130mm で，頭の高さは低く，表３では，丸子山１号に次いで小さい。

広島県での男性の頭型について，少し考察してみよう。広島県内の男性弥生人で頭蓋長幅示数が算出できたのは，池之坊 (神辺町)，佐久良 (広島市) しかない。弥生時代から古墳時代にかけてのものは鷺の森 (竹原市) だけで，古墳人については成岡 (広島市)，新宮 (八千代町)，山の神 (府中市)，中出勝負峠 (千代田町)，氏神正田 (千代田町)，八鳥矢内迫 (西城町) がある。

池之坊 (１号第１主体) は長頭型 (頭蓋長幅示数 72.38) であるが，佐久良 (１号石棺) は短頭型 (82.12) である。その他に観察所見によって頭型を推測することができた例がある。丸子山墳墓群から出土した２例の頭蓋については，計測はできなかったが，観察によって頭型を推測することができ，１例 (１号人骨) は短頭型か，短頭に近い中頭型で，もう１例 (９号人骨) は短頭型である。壬生西谷遺跡から出土した１例 (SK-12) は中頭型と思われる。弥生時代から古墳時代にかけての人骨である鷺の森は１例が短頭型 (82.76)，もう１例は中頭型 (76.50) である。また，弥生時代から古墳時代にかけての墳墓群とみられている手島山墳墓群出土人骨では頭型が推測できるものが２例

あり，１例 (SK-30) は短頭型で，もう１例 (SK-31) は中頭型とみられる。これら９例をみると，長頭型が１例，中頭型が３例で，残りの５例は短頭型もしくは短頭に傾いた中頭型であることから，弥生時代や弥生時代から古墳時代にかけては，男性の頭型は短頭に傾いていたようである。

一方，古墳人については，成岡 (２号墳人骨) が中頭型 (76.22)，新宮 (第２古墳人骨) は短頭に近い中頭型 (79.14)，山の神の１例 (２号墳２号) は長頭型 (74.46)，もう１例 (１号墳 2-1) は短頭型 (81.6) で，中出勝負峠の１例 (5 号人骨) は短頭型 (81.25)，もう１例 (7 号人骨) は長頭型 (74.73) である。氏神正田は長頭型 (73.5)，八鳥矢内迫の３例は３例とも中頭型 (78.49，76.34，79.78) である。すなわち，10 例のうち，短頭型が２例，中頭型は５例，長頭型は３例である。10 例の平均値は 77.55 となり，この示数値は中頭型である。この 10 例を見る限りでは古墳人の頭型は中頭型で若干長頭型に傾いていると考えてもよさそうである。

すなわち，弥生時代ではやや短頭型に傾いているが，古墳時代になると長頭型に傾く傾向があるようである。

表3　脳頭蓋計測値（男性、㎜）(Table 3. Comparison of male calvarial measurements and indices)

		坊主山 弥生人 広島県 広島市 （松下・他）	丸子山 弥生人 広島県 広島市 （松下・他）		池之坊 弥生人 広島県 神辺町 （松下）	佐久良 弥生人 広島県 広島市 （松下）		胡麻4号 弥生～古墳人 広島県 東広島市 （松下・他）	須倉城 弥生人 広島県 千代田町 （松下）	壬生西谷 弥生人 広島県 千代田町 （松下・他）		鷺の森 弥生～古墳人 広島県 竹原市 （松下・他）			手島山 弥生～古墳人 広島県 豊栄町 （松下・他）	
		ST-14	1号	9号	1号第1主体	1号石棺	2号石棺1号	SK9	SK-34	SK-12	SK-34	2-1	2-2	3	SK-30	SK-31
1.	頭蓋最大長	－	－	－	(181)	(179)	－	－	－	－	－	174	183	－	－	－
8.	頭蓋最大幅	－	－	141	131	147	－	－	－	－	－	(144)	140	－	144	144
17.	バジオン・ブレグマ高	130	125	－	－	138	(144)	－	－	－	－	－	－	－	136	133
8/1	頭蓋長幅示数	－		－	(72.38)	(82.12)	－	－	－	－	－	(82.76)	76.50	－	－	－
17/1	頭蓋長高示数	－	－	－	－	(77.09)	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
17/8	頭蓋幅高示数	－	－	－	－	93.88	－	－	－	－	－	－	－	－	94.44	92.36
1+8+17/3	頭蓋モズルス	－	－	－	－	154.67	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
23.	頭蓋水平周	－	－	－	－	(520)	－	－	－	－	－	－	516	－	－	－
24.	横弧長	－	(312)	(314)	－	－	(321)	－	－	－	－	－	317	－	316	－
25.	正中矢状弧長	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
26.	正中矢状前頭弧長	128	119	125	－	－	－	126	126	115	125	－	127	128	133	129
27.	正中矢状頭頂弧長	－	－	－	123	－	－	－	－	－	131	129	122	－	－	－
28.	正中矢状後頭弧長	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	121	－	－	－	－
29.	正中矢状前頭弦長	111	116	107	－	－	－	113	112	102	109	－	133	116	115	112
30.	正中矢状頭頂弦長	－	－	－	113	－	－	－	－	－	116	114	119	－	－	－
31.	正中矢状後頭弦長	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	105	－	－	－	－
29/26	矢状前頭示数	－	89.08	85.60	－	－	－	89.68	88.89	88.70	87.20	－	88.98	－	86.47	86.82
30/27	矢状頭頂示数	－	－	－	91.87	－	－	－	－	－	88.55	88.37	97.54	－	－	－
31/28	矢状後頭示数	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	86.78	－	－	－	－

(　):推定値

２．顔面頭蓋

表４は男性の顔面頭蓋の比較表である。顔の幅径である頬骨弓幅は〔140mm〕で，佐久良１号石棺人骨の 143mm，丸子山１号人骨の〔142mm〕に次いで大きい。中顔幅は 102mm で，丸子山９号人骨，壬生西谷 SK-12 と同値で，佐久良１号石棺人骨の 107mm，胡麻 SK-9 の〔106mm〕，池之坊の 104mm に次いで大きい。一方，顔の高さを表す顔高は 117mm で，丸子山９号人骨の 133mm よりはかなり小さく，また，壬生西谷 SK-12 と佐久良１号石棺人骨の 122mm よりも小さく，表４では最小値である。上顔高は 66mm で，壬生西谷 SK-34 と同値で，佐久良３号石棺１号人骨の 61mm よりは大きいが，その他の資料よりは小さい。顔示数 (Ｋ) は〔83.57〕となり，表４では最小値で，ウィルヒョーの顔示数も 114.71 と小さく，表４では最小値を示す佐久良１号石棺人骨の 114.02 と大差ない。上顔示数 (Ｋ) は〔47.14〕で，表４では最小値となる。ウィルヒョーの上顔示数も 64.71 しかなく，表４では最小値となるが，佐久良３号石棺１号人骨の 64.89 とほとんど差がない。すなわち，本例の顔面は低・広顔である。

表4　顔面頭蓋(男性、mm、度)(Table 4. Comparison of male facial measurements and indices)

		坊主山 弥生人 広島県 広島市 (松下・他)	丸子山 弥生人 広島県 広島市 (松下・他)		池之坊 弥生人 広島県 神辺町 (松下)	壬生西谷 弥生人 広島県 千代田町 (松下・他)		佐久良 弥生人 広島県 広島市 (松下)			須倉城 弥生人 広島県 千代田町 (松下)	胡麻 弥生～古墳 広島県 東広島市 (松下・他)
		ST-14	1号	9号	1号第1主体	SK-12	SK-34	1号石棺	2号石棺1号	3号石棺1号	SK-34	SK9
40.	顔長	100	102	−	−	−	−	94	−	−	−	−
45.	頬骨弓幅	〔140〕	〔142〕	−	(136)	〔138〕	−	(143)	138	−	−	〔106〕
46.	中顔幅	102	101	102	(104)	〔102〕	〔96〕	107	98	94	−	−
47.	顔高	117	−	133	−	122	−	122	−	−	−	−
48.	上顔高	66	69	80	−	68	66	70	−	61	−	(73)
47/45	顔示数(K)	〔83.57〕	−	−	−	〔88.41〕	−	(85.31)	−	−	−	−
48/45	上顔示数(K)	〔47.14〕	〔48.59〕	−	−	〔49.28〕	−	(48.95)	−	−	−	−
47/46	顔示数(V)	114.71	−	130.39	−	〔119.61〕	−	114.02	−	−	−	−
48/46	上顔示数(V)	64.71	68.32	78.43	−	〔66.67〕	〔68.75〕	65.42	−	64.89	−	〔68.87〕
40+45+47/3	顔面モズルス	〔119.00〕	−	−	−	−	−	46	−	−	−	−
50.	前眼窩間幅	17	15	−	−	21	21	18	−	18	21	16
44.	両眼窩幅	−	−	−	−	98	−	20	−	96	−	99
50/44	眼窩間示数	−	−	−	−	21.43	−	90.00	−	18.75	−	16.16
51.	眼窩幅(右)	43	49	−	−	41	43	46	−	43	44	45
	(左)	−	−	45	−	41	−	45	42	43	−	45
52.	眼窩高(右)	32	36	36	−	33	33	35	36	33	33	36
	(左)	32	37	36	36	32	−	35	34	32	−	35
52/51	眼窩示数(右)	74.42	−	−	−	80.49	76.74	76.09	−	76.74	75.00	80.00
	(左)	−	73.47	80.00	−	78.05	−	77.78	80.95	74.42	−	77.78
54.	鼻幅	27	27	30	−	26	25	27	−	25	−	27
55.	鼻高	51	53	56	−	50	51	53	−	46	−	57
54/55	鼻示数	52.94	50.94	53.57	−	52.00	49.02	50.94	−	54.35	−	47.37
72.	全側面角	86	85	87	−	81	−	89	−	86	−	−
73.	鼻側面角	87	84	90	−	86	−	92	−	90	−	−
74.	歯槽側面角	80	93	81	−	66	−	83	−	73	−	−

〔　〕:片側×2　(　):推定値

また，眼窩示数は 74.42(右) で，表 4 では最小値，鼻示数は 52.94 で，佐久良 3 号石棺 1 号人骨の 54.35，丸子山 9 号人骨の 53.57 に次いで大きく，眼窩と鼻部の高径はともに低い。歯槽側面角は 80 度で，丸子山 1 号人骨の 93 度，佐久良 1 号石棺人骨の 83 度，丸子山 9 号人骨の 81 度に次いで大きく，歯槽性突顎の傾向は認められない。

次いで広島県内での顔面頭蓋の特徴について若干検討をおこなってみたい。計測ができた弥生人骨は本例の他に丸子山 (広島市)，池之坊 (旧神辺町)，壬生西谷 (旧千代田町)，佐久良 (広島市) しかない。弥生時代から古墳時代にかけての人骨としては胡麻 (東広島市) があるにすぎない。顔高が 120mm を超えてるのは丸子山 9 号人骨，壬生西谷 SK-12，佐久良 1 号石棺人骨で，上顔高が 70mm を超え高上顔傾向を示すのは，丸子山 9 号人骨，佐久良 1 号石棺人骨および胡麻 SK-9 である。しかし，佐久良 1 号石棺人骨は頬骨弓幅や中顔幅がより広いので，顔示数や上顔示数は小さくなり，顔面のプロポーションは広顔である。丸子山 9 号人骨は顔示数 (V) が 130.39，上顔示数 (V) は 78.43 となり，ともに示数値がかなり高く，顔面は高・狭顔である。壬生西谷 SK-12 の顔示数 (K) は〔88.41〕となり，これも高・狭顔である。また，胡麻 SK-9 の上顔高は (73mm) で，上顔高は高い。頬骨弓幅の計測ができないので，顔面は広いのか狭いのかわからないが，眼窩高も鼻高も高いので顔が高いのは間違いないと思われる。坊主山 ST-14 は低・広顔で，佐久良 1 号石棺人骨は広顔である。また計測はできなかったが，観察所見から須倉城 SK-34 も低･広顔の弥生人であった。

広島県内における弥生人骨の例数が少ないので，全体の傾向や地域差を把握するところまで研究は進展していないが，今のところ，旧千代田町の壬生西谷と広島市の丸子山で高・狭顔タイプの弥生人がみられ，胡麻でも高径が高い人骨がみられるようであるが，なかでも特筆すべきは丸子山弥生人である。9 号人骨は著しく高顔で，これほど顔が高い弥生人は北部九州でも珍しい。また 1 号人骨の顔面頭蓋は二塚山や三津永田と同じように屈強であり，北部九州弥生人との関係が気になる

ところである。

3．鼻根部

表5は鼻根部の比較表である。本例の鼻根彎曲示数は89.47で，この値は佐久良3号石棺1号，手島山SK-32，壬生西谷SK-12，佐久良1号石棺に次いで大きいが，実際は鼻骨が鼻骨間縫合へ向かって隆起しており，鼻根部は示数値ほど扁平ではない。

表5　鼻根部(男性、mm、度)(Table 5. Comparison of male nasal root mesurements and indices)

		坊主山 弥生人 広島県 広島市 (松下・他)	丸子山 弥生人 広島県 広島市 (松下・他)		佐久良 弥生人 広島県 広島市 (松下)			須倉城 弥生人 広島県 千代田町 (松下)	壬生西谷 弥生人 広島県 千代田町 (松下・他)		歳ノ神 弥生～古墳人 広島県 千代田町 (松下・他)	鷺の森 弥生～古墳人 広島県 竹原町 (松下・他)		手島山 弥生～古墳人 広島県 豊栄町 (松下、他)		胡麻4号 弥生～古墳人 広島県 東広島市 (松下・他)
		ST-14	1号	9号	1号石棺	2号石棺1号	3号石棺1号	SK-34	SK-12	SK-34	6号墓1号	2-2	3	SK-21	SK-32	SK9
50.	前眼窩間幅	17	15	－	18	－	18	21	18	21	16	19	16	16	22	16
50A.	鼻根横弧長	19	18	－	20	－	19	24	20	24	19	22	19	18	24	19
50/50A	鼻根彎曲示数	89.47	83.33	－	90.00	－	94.74	87.50	90.00	87.50	84.21	86.36	84.21	88.89	91.67	84.21
57.	鼻骨最小幅	7	7	－	7	－	7	11	8	10	7	8	5	9	－	6
44.	両眼窩幅	－	－	－	102	－	96	－	98	－	99	99	－	94	103	99
50/44	眼窩間示数	－	－	－	17.65	－	18.75	－	21.43	－	16.16	19.19	－	17.02	21.36	16.16
a.	前頭突起上幅(右)	10	11	－	9	－	10	11	10	10	9	9	13	10	12	11
	(左)	10	12	16	9	－	9	10	10	10	8	11	13	9	12	11
b.	前頭突起水平傾斜角	114	81	－	111	－	－	－	－	－	－	92	－	84	118	－
c.	G-N投影距離	1	1	2	4	2	－	－	－	－	－	1	－	3	1	－
d.	鼻根角	146	－	－	145	－	144	－	133	－	138	－	－	145	143	129
e.	G-R距離	33	－	－	－	－	－	－	28	－	35	－	－	38	29	35
f.	垂線高	4	－	－	－	－	－	－	5	－	5	－	－	5	4	7
f/e	鼻根陥凹示数	12.12	－	－	16.67	－	16.67	－	17.86	－	14.29	－	－	13.16	13.79	20.00
77.	鼻頬骨角	148	150	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Fa	fmo間距離	96	100	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Fh	垂線高	13	13	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
Fh/Fa	顔面扁平示数	13.54	13.00	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

要　約

広島市安佐北区大林町字真香にある坊主山遺跡の発掘調査が2008年(平成20年)におこなわれ，1基の埋葬遺構(ST-14，箱式石棺)から人骨が出土した。顔面頭蓋の保存状態は良好で，人類学的観察と計測をおこない，以下の結果を得た。

1．埋葬遺構は石棺墓と土壙墓である。石棺墓は1基，土壙墓は39基確認されたが，人骨が残存していたのは1基(ST-14)の石棺墓のみであった。埋葬姿勢は仰臥伸展で，頭位は西である。顔面頭蓋の保存状態は比較的良好であったが，四肢骨は残りが悪かった。

2．本人骨は弥生時代後期に属する人骨と推測されている。

3．本人骨は老年の男性骨である。弥生人としては珍しくかなりの高齢である。

4．頭蓋最大長と最大幅は計測できなかったので，頭蓋長幅示数は算出できないが，観察によれば，頭型は長頭型に傾いた中頭型と思われる。

5．顔面頭蓋の計測値は，頬骨弓幅〔70mm× 2 = 140mm〕，中顔幅102mm，顔高117mm，上顔高66mmで，顔示数は〔83.57(K)〕，114.71(V)，上顔示数は〔47.14(K)〕，64.71(V)となり，顔面には低・広顔傾向が認められる。

6．眼窩示数は74.42(右)となり，右側は低眼窩に，鼻示数は52.94となり低鼻に属している。

7．鼻根部は狭く，鼻骨はやや隆起しており，鼻根部は扁平ではない。

8．歯の咬耗はかなり強い。風習的抜歯は認められない。

9．本男性は頭型が長頭型に傾き，顔面は低・広顔である。また，上顎骨は狭く，きゃしゃである。鼻根部は扁平ではなく，鼻骨はやや隆起しており，眼窩は四角形で，その上縁は水平であった。四肢骨の保存状態は悪く，その特徴は明らかにすることはできなかったが，上腕骨も大腿骨も骨体は細いものであった。本遺跡は高・狭顔という特異な形質を持った弥生人が検出された丸子山

墳墓群に近いことから，その特徴が注目されたが，顔面の特徴はこれまで出土している弥生人と同様に低・広顔タイプで，鼻根部も扁平ではない。ただし，扁平ではないといっても縄文人の鼻根部とは異なり，鼻骨の付け根から隆起することはなく，鼻骨も縄文人ほど厚くはない。

謝辞

≪擱筆するにあたり，本研究と発表の機会を与えていただいた財団法人広島市未来都市創造財団の皆様に感謝致します。≫

≪参考文献≫

1. 松下孝幸，1984a：広島市佐久良遺跡出土の弥生時代人骨。広島市安佐北区白木町所在佐久良遺跡発掘調査報告 (広島市の文化財第 27 集)：25-46.
2. 松下孝幸，1984b：広島市末光遺跡群 B 地点出土の弥生時代人骨。広島市安佐北区高陽町所在末光遺跡群発掘調査報告 (広島市の文化財第 28 集)：90-95.
3. 松下孝幸・他，1986a：歳ノ神遺跡群出土の弥生・古墳時代人骨。歳ノ神遺跡群・中出勝負峠墳墓群 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 49 集)：201-212.
4. 松下孝幸・他，1986b：中出勝負峠墳墓群出土の弥生・古墳時代人骨。歳ノ神遺跡群・中出勝負峠墳墓群 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 49 集)：213-244.
5. 松下孝幸・他，1989：広島県千代田町壬生西谷遺跡出土の弥生時代人骨。壬生西谷遺跡 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 75 集)：63-80.
6. 松下孝幸・他，1990a：東広島市胡麻 2 号古墓・胡麻 4 号遺跡出土の人骨，東広島市ニュータウン遺跡群Ⅰ：341-357.
7. 松下孝幸，1990b：広島県の古人骨。みよし風土記の丘，№ 40：1-4．みよし風土記の丘友の会 .
8. 松下孝幸•他，1991a:広島県竹原市鷺の森遺跡出土の弥生～古墳時代人骨。鷺の森遺跡発掘調査報告 (付編):1-40.
9. 松下孝幸・他，1991b：広島県豊栄町手島山墳墓群出土の弥生～古墳時代人骨。手島山墳墓群 (広島県埋蔵文化財センター文化財発掘調査報告第 93 集)：61-80.
10. 松下孝幸，1997a：広島県世羅町矢ノ迫遺跡出土の人骨。矢の迫遺跡：11-20.
11. 松下孝幸，1997b：広島県府中市打堀山遺跡 A 地点出土の弥生・古墳時代人骨。打堀山遺跡 A ・ B 地点 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 147 集)：47-50.
12. 松下孝幸，1998a：広島市梨ヶ谷遺跡 B 地点出土の弥生時代人骨。梨ヶ谷遺跡発掘調査報告 (財団法人広島市歴史科学教育事業団調査報告書第 22 集)：105-113.
13. 松下孝幸，1998b：広島県千代田町須倉城遺跡出土の弥生時代人骨。広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 161 集：75-84.
14. 松下孝幸，1998c：広島県福山市法成寺サコ遺跡・法成寺本谷古墳出土の弥生・古墳人骨。法成寺サコ遺跡・法成寺本谷古墳 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 166 集)：52-58.
15. 松下孝幸，1998d：広島県府中市山の神・池ノ迫遺跡群出土の弥生・古墳時代人骨。山の神・池ノ迫遺跡群 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 165 集)：75-105.
16. 松下孝幸，1999：広島県府中市門田 A 遺跡・東槙山第 1 号古墳南斜面出土の人骨。門田 A 遺跡・東槙山第 1・4 号古墳 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 183 集)：103-112.
17. 松下孝幸，2004a：広島県神辺町門前 2 号遺跡・道上第 3 号古墳出土の弥生・古墳人骨。道上第 2 ・ 3 ・ 5 号古墳，門前 2 号遺跡 (財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第 6 集)：113-119.
18. 松下孝幸，2004b：広島県神辺町池之坊墳墓群出土の弥生人骨。神辺町内遺跡発掘調査概要 2002 年度 (神辺町埋蔵文化財調査報告第 27 集)：28-38.
19. 松下孝幸・他，広島市琴平遺跡出土の弥生人骨。(投稿中)
20. 松下真実・他，2010：広島市丸子山墳墓群出土の弥生人骨。土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要第 5 号：33-43.

表6 脳頭蓋(㎜)(Calvaria)

		坊主山 ST-14 男性
1.	頭蓋最大長	−
8.	頭蓋最大幅	−
17.	バジオン・ブレグマ高	130
8/1	頭蓋長幅示数	−
17/1	頭蓋長高示数	−
17/8	頭蓋幅高示数	−
1+8+17/3	頭蓋モズルス	−
5.	頭蓋底長	101
9.	最小前頭幅	87
10.	最大前頭幅	−
11.	両耳幅	129
12.	最大後頭幅	109
13.	乳突幅	−
7.	大後頭孔長	37
16.	大後頭孔幅	32
16/7	大後頭示数	86.49
23.	頭蓋水平周	−
24.	横弧長	−
25.	正中矢状弧長	−
26.	正中矢状前頭弧長	128
27.	正中矢状頭頂弧長	−
28.	正中矢状後頭弧長	−
29.	正中矢状前頭弦長	111
30.	正中矢状頭頂弦長	−
31.	正中矢状後頭弦長	−
29/26	矢状前頭示数	86.72
30/27	矢状頭頂示数	−
31/28	矢状後頭示数	−

表7 顔面頭蓋(㎜、度)(Facial skeleton)

		坊主山 ST-14 男性
40.	顔長	100
41.	側顔長	68
42.	下顔長	108
43.	上顔幅	101
45.	頬骨弓幅	〔140〕
46.	中顔幅	102
47.	顔高	117
48.	上顔高	66
47/45	顔示数(K)	〔83.57〕
48/45	上顔示数(K)	〔47.14〕
47/46	顔示数(V)	114.71
48/46	上顔示数(V)	64.71
40+45+47/3	顔面モズルス	〔119.00〕
50.	前眼窩間幅	17
44.	両眼窩幅	−
50/44	眼窩間示数	−
51.	眼窩幅(右)	43
	(左)	−
52.	眼窩高(右)	32
	(左)	32
52/51	眼窩示数(右)	74.42
	(左)	−
54.	鼻幅	27
55.	鼻高	51
54/55	鼻示数	52.94
55(1).	梨状口高	31
56.	鼻骨長	26
57.	鼻骨最小幅	7
57(1).	鼻骨最大幅	16
60.	上顎歯槽長	−
61.	上顎歯槽幅	56
62.	口蓋長	−
63.	口蓋幅	−
64.	口蓋高	−
61/60	上顎歯槽示数	−
63/62	口蓋示数	−
64/63	口蓋高示数	−
72.	全側面角	86
73.	鼻側面角	87
74.	歯槽側面角	80

表9 下顎骨(男性、㎜、度)(Mandibula)

		坊主山 ST-14 男性
65	下顎関節突起幅	−
65(1).	下顎筋突起幅	−
66	下顎角幅	−
67	前下顎幅	44
68	下顎長	−
68(1).	下顎長	−
69	オトガイ高	29
69(1).	下顎体高(右)	26
	(左)	31
69(2).	下顎体高(右)	−
	(左)	20
70	枝高(右)	−
	(左)	−
70(1).	前枝高(右)	−
	(左)	−
70(2).	最小枝高(右)	−
	(左)	(47)
70(3).	下顎切痕高(右)	−
	(左)	−
71(1).	下顎切痕幅(右)	−
	(左)	−
71	枝幅(右)	−
	(左)	(32)
71a.	最小枝幅(右)	−
	(左)	−
79	下顎枝角(右)	−
	(左)	−
66/65	下顎幅示数	−
68/65	幅長示数	−
68(1)/65	幅長示数(右)	−
69(2)/69	下顎高示数(右)	−
	(左)	67.00
71/70	下顎枝示数(右)	−
	(左)	−
71a/70(2)	下顎枝示数(右)	−
	(左)	−
70(3)/71(1)	下顎切痕示数(右)	−
	(左)	−

表8 鼻根部(㎜、度)(Nasal root)

		坊主山 ST-14 男性
50.	前眼窩間幅	17
50A.	鼻根横弧長	19
50/50A	鼻根彎曲示数	89.47
57.	鼻骨最小幅	7
44.	両眼窩幅	−
50/44	眼窩間示数	−
a.	前頭突起上幅(右)	10
	(左)	10
b.	前頭突起水平傾斜角	114
c.	G−N投影距離	1
d.	鼻根角	146
e.	G−R距離	33
f.	垂線高	4
f/e	鼻根陥凹示数	12.12
77.	鼻頬骨角	148
Fa	fmo間距離	96
Fh	垂線高	13
Fh/Fa	顔面扁平示数	13.54

表10 鎖骨(㎜)(Clavicula)

		坊主山 ST-14 男性
1.	鎖骨最大長(右)	−
	(左)	−
2a	骨体彎曲高(右)	−
	(左)	−
2(1)	肩峰端彎曲高(右)	−
	(左)	−
4.	中央垂直径(右)	9
	(左)	9
5.	中央矢状径(右)	10
	(左)	11
6.	中央周(右)	31
	(左)	32
6/1	長厚示数(右)	−
	(左)	−
2a/1	彎曲示数(右)	−
	(左)	−
4/5	鎖骨断面示数(右)	90.00
	(左)	81.82
2(1)/1	肩峰端彎曲示数(右)	−
	(左)	−

表11 形態小変異(Non-metoric crania variants)

		坊主山 ST-14 男性 右	左
1.	Medial palatine canal(内側口蓋管)	−	−
2.	Pterygospinous foramen(翼棘孔)	−	−
3.	Hypoglossal canal bridging(舌下神経管二分)	−	−
4.	Clinoid bridging(床状突起間骨橋)	−	−
5.	Condylar canal absent(顆間欠如)	−	+
6.	Tympanic dehiscence,Foramen of Huschke(＞1㎜)(フシュケ孔、鼓室骨裂孔)	−	−
7.	Jugular foramen bridging	−	−
8.	Precondylar tubercle	−	−
9.	Supra-orbital foramen(incl.frontal foramen)(眼窩上孔)	−	−
10.	Accesory infraorbital foramen(副眼窩下孔)	/	−
11.	Zygo-facial foramen absent	−	−
12.	Aural exostosis(外耳道骨腫)	−	−
13.	Metopism(前頭縫合)	−	
14.	Os incae(インカ骨)	/	
15.	Ossicle at the lambda(ラムダ小骨)	/	
16.	Parietal notch bone(頭頂切痕骨)	−	−
17.	Transverse zygomatic suture(＞5㎜)	−	/
18.	Asterionic ossicle	−	/
19.	Occipitomastoid ossicle	−	/
20.	Epipteric ossicle	/	/
21.	Frontotemporal articulation	/	/
22.	Biasterionic suture(＞10㎜)	−	/
23.	Mylohyoid bridging(顎舌骨筋神経溝骨橋)	/	−
24.	Accessory mental foramen(副オトガイ孔)	−	−
25.	Mandibular torus(下顎隆起)	−	−
26.	滑車上孔(上腕骨)	/	/

坊主山遺跡における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

放射性炭素年代測定は，光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体，骨，貝殻，土壌，土器付着炭化物などが測定対象となり，約５万年前までの年代測定が可能である。

2. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理	測定法
No. 1	箱形石棺墓内	人骨（椎骨）	コラーゲン抽出 アルカリ洗浄	AMS

AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

３．測定結果

加速器質量分析法（AMS）によって得られた^{14}C濃度について，同位体分別効果の補正を行った後に，放射性炭素（^{14}C）年代および暦年代（較正年代）を算出した。次表にこれらの結果を示す。

試料名	測定No. (Beta-)	未補正^{14}C年代 （年 BP）	$\delta^{13}C$ (‰)	^{14}C年代 （年 BP）	暦年代 Calendar Age （２σ:95％確率，１σ:68％確率）
No. 1	286481	1910 ± 40	-19.3	2000 ± 40	交点：Cal AD 10 ２σ：Cal BC 90 - AD 80 １σ：Cal BC 40 - AD 50

BP：Before Physics（Present），Cal：Calibrated，AD：紀元後

（１）未補正^{14}C年代

試料の^{14}C / ^{12}C比から，単純に現在（AD1950 年）から何年前かを計算した値。 ^{14}Cの半減期は5,730 年であるが，国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いている。

（２）デルタ$\delta^{13}C$測定値

試料の測定^{14}C / ^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C / ^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料の $\delta^{13}C$値を -25(‰) に標準化することで同位体分別効果を補正する。

（３）^{14}C年代

$\delta^{13}C$測定値により同位体分別効果を補正して算出した年代。暦年代較正にはこの年代値を使用する。

（４）暦年代（Calendar Age）

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中^{14}C 濃度の変動および^{14}C の半減期の違いを較正することで，より実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には，年代既知の樹木年輪の詳細な^{14}C 測定値およびサンゴの U/Th（ウラン / トリウム）年代と^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線（IntCal04）を使用した。

暦年代の交点は，^{14}C 年代値と較正曲線との交点の暦年代値を示し，１σ（68％確率）と２σ（95％確率）は，^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって，複数の交点や複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。

４．所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果，№１の人骨（椎骨）では 2000±40 年 BP（２σの暦年代で BC90 ～ AD80 年）の年代値が得られた。

文献

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.

中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院，p.1-36.

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-19.3:lab. mult=1)

Laboratory number: **Beta-286481**

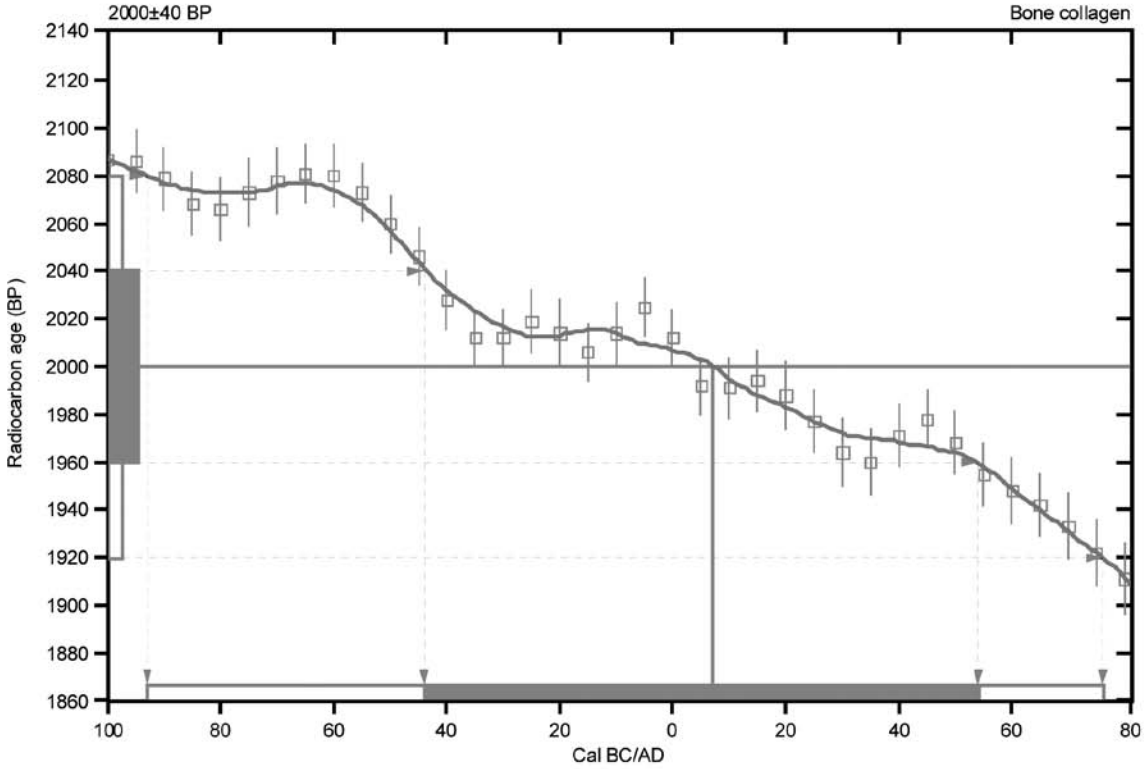
Conventional radiocarbon age: **2000±40 BP**

2 Sigma calibrated result: (95% probability) **Cal BC 90 to Cal AD 80 (Cal BP 2040 to 1870)**

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve: Cal AD 10 (Cal BP 1940)

1 Sigma calibrated result: (68% probability) Cal BC 40 to Cal AD 50 (Cal BP 1990 to 1900)



References:

Database used

INTCAL04

Calibration Database

INTCAL04 Radiocarbon Age Calibration

IntCal04: Calibration Issue of Radiocarbon (Volume 46, nr 3, 2004).

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

BETA

Consistent Accuracy
Delivered On Time

Beta Analytic Inc
4985 SW 74 Court
Miami, Florida 33155
Tel: 305-667-5167
Fax: 305-663-0964
beta@radiocarbon.com
www.radiocarbon.com

Mr. Darden Hood
President

Mr. Ronald Hatfield
Mr. Christopher Patrick
Deputy Directors

The Radiocarbon Laboratory Accredited to ISO-17025 Testing Standards (PJLA Accreditation #59423)

Quality Assurance Report

This report provides the results of reference materials used to validate radiocarbon dating results on unknown materials, prior to reporting. Known age reference materials were analyzed as QA measurements to verify the accuracy of the results. These are analyzed in multiple detectors. To test accuracy, the "blind sample" was measured in TWO separate detectors. This report quotes the results of the QA measurements.

Report Date: November 8, 2010
Submitter: Mr. Kazumi Asai / Mr. Sumihisa Matsuyama
Sample: Beta-286481, 286483, 286484

QA MEASUREMENTS

TIRI wood standard (international standard)

Expected value:	4500 +/- 40 BP
Measured value:	4520 +/- 40 BP
Agreement:	accepted

TIRI wood standard (international standard)

Expected value:	4500 +/- 40 BP
Measured value:	4580 +/- 40 BP
Agreement:	accepted

TIRI wood standard (international standard)

Expected value:	4500 +/- 40 BP
Measured value:	4500 +/- 40 BP
Agreement:	accepted

Blind sample

Known age:	180 +/- 40 BP
AMS age:	180 +/- 40 BP
Agreement:	accepted

COMMENT: All standards were within accepted ranges. (TIRI stands for Third International Radiocarbon Inter-comparison. This material has a very well known age.) The "Blind sample" is a sample that was measured at least twice in a detector at different times.

Validation: Darden Hood Date: November 8, 2010

広島市琴平遺跡出土の弥生人骨

松下孝幸[1]・松下真実[2]

【キーワード】：広島県，弥生人骨，石棺墓，遊離歯

はじめに

広島市安佐北区大林町字真香に所在する琴平遺跡の発掘調査が一般国道 54 号 (可部バイパス) 建設工事に伴って 2009 年 (平成 21 年) におこなわれ， 1 基の埋葬遺構 (ST-8) から人骨片と遊離歯が出土した。本遺跡は弥生時代のものと推測される木棺墓と石棺墓からなる集団墓地である。埋葬遺構は 21 基存在したが，後世の削平や改変によって，石材が抜き取られるなどの撹乱を受けており，遺構の保存状態は悪く，人骨が残存していたものはわずかに 1 基に過ぎなかった。

広島県内で，これまで筆者らが古人骨の調査に加わったり，報告したもののうち，弥生人骨は，広島市の佐久良遺跡 (松下，1984a)，末光遺跡群 B 地点 (松下，1984b)，梨ヶ谷遺跡 B 地点 (松下，1998a)，千代田町の壬生西谷遺跡 (松下・他，1989)，須倉城遺跡 (松下，1998b)，府中市の打堀山遺跡 (松下，1997b)，山の神遺跡群 (松下，1998d)，池ノ迫遺跡群 (松下，1998d)，世羅町の矢の迫遺跡 (松下，1997a)，神辺町の池之坊墳墓群 (松下，2004b) から出土した人骨ぐらいしかない。

また，弥生時代から古墳時代にかけての人骨としては，千代田町の歳ノ神遺跡群 (松下・他，1986a)，中出勝負峠墳墓群 (松下・他，1986b)，竹原市の鷺の森遺跡 (松下・他，1991a)，豊栄町の手島山墳墓群 (松下・他，1991b)，東広島市の胡麻 4 号遺跡 (松下・他，1990a)，府中市の門田 A 遺跡 (松下，1999)，福山市の法成寺サコ遺跡 (松下，1998c) から出土している。

弥生時代や弥生時代から古墳時代にかけての人骨のうち保存状態が良好で形質の特徴が明らかになったものは，壬生西谷遺跡，佐久良遺跡，歳ノ神遺跡群，中出勝負峠墳墓群から出土した人骨ぐらいしかないので，広島県全域で弥生人の特徴を把握し，考察できるまでには至っていないが，弥生人や古墳人に関しては千代田町，東広島市，府中市での特徴が次第に明らかになりつつある。

今回出土した人骨の保存状態は悪いものであったが，人類学的観察などをおこなったので，その結果を報告しておきたい。

資料および所見

表 1　出土人骨一覧（Table 1. List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	埋葬姿勢	頭位	埋葬遺構
ST-8	男性	不明	不明	北	石棺

1　Takayuki　MATSUSHITA　2　Masami　MATSUSHITA
The Doigahama Site Anthropological Museum〔土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム〕

図１　　遺跡の位置

（Fig.1　Location of the Kotohira site, Hiroshima City, Hiroshima Prefecture）

今回の発掘調査で墓坑は 21 基確認されたが，人骨が残存していたのは 1 基 (ST-8) のみであった (表 1)。残存していたのは頭蓋片と遊離歯冠であるが，残存部分と検出状況から人骨は 1 体分と思われる。埋葬遺構は石棺墓と推測されている。埋葬姿勢は不明であるが，頭位は北である。本人骨は考古学的所見から，弥生時代に属する人骨である。

残存していたのは骨片と遊離歯冠のみである。骨片は頭蓋と思われるが，ほとんどが小片で，骨種の同定はできなかった。

残存していた遊離歯冠を歯式で示すと，次のとおりである。

／ 7 6 ／ 4 ／ ／ ／	／ ／ ／ ／ ／ 6 7 ／
／ ／ 6 ／ ／ ／ ／ ／	／ ／ ／ ／ ／ 6 7 ／

〔●: 歯槽閉鎖　○: 歯槽開存　／：不明　▽：先天性欠損，番号は歯種〕

〔1: 中切歯，2：側切歯，3：犬歯，4：第一小臼歯，5：第二小臼歯，6：第一大臼歯，7：第二大臼歯，8：第三大臼歯〕

咬耗度は Broca の 1 度 (咬耗がエナメル質のみ) で，咬耗は弱い。歯冠サイズはかなり大きい。

人骨がほとんど残存していないので，性別を推測する有力な手がかりがないが，歯冠が大きいことを根拠にすれば男性の可能性が強い。年齢は不明である。年齢は推測することができなかったが，参考までに年齢区分を表 2 に示した。

表 2　年齢区分（Table2.Division of age）

	年齢区分	年　　齢
未成人	乳児	1 歳未満
	幼児	1 歳～ 5 歳 (第一大臼歯萌出直前まで)
	小児	6 歳～ 15 歳 (第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年	16 歳～ 20 歳 (蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21 歳～ 39 歳 (40 歳未満)
	熟年	40 歳～ 59 歳 (60 歳未満)
	老年	60 歳以上

注）成年という用語については土井ヶ浜遺跡第 14 次発掘調査報告書（1996）を参照されたい。

要　約

広島市安佐北区大林町字真香に所在する琴平遺跡の発掘調査が 2009 年 (平成 21 年) におこなわれ， 1 基の埋葬遺構 (ST-8) から人骨片と遊離歯冠が出土した。保存状態は悪かったが，人類学的観察をおこない，以下の結果を得た。

1. 墓壙は 21 基確認されたが，人骨が残存していたのは 1 基 (ST-8) のみで，遺構は石棺と推測されている。埋葬姿勢は不明であるが，頭位は北である。
2. ST-8 から検出された人骨と遊離歯冠は 1 体分である。
3. 本人骨は弥生時代に属する人骨と推測されている。
4. 残存していた人骨は頭蓋の小片であるが，骨種の同定はできない。頭蓋片のほかに遊離歯冠が残存していた。サイズはかなり大きく，咬耗は弱い。歯冠サイズが大きいことから男性人骨の可能性が強い。
5. 本例は保存状態が悪く，頭型や顔面の形態，四肢骨の様態および推定身長値などはまったく不明であるが，安佐北区可部町に所在した丸子山墳墓群からは「高・狭顔」を示す注目すべき弥生

人骨が出土している。この弥生人骨は壬生西谷遺跡や胡麻４号遺跡から出土した弥生人よりもはるかに高顔で，北部九州の甕棺出土人骨に酷似する人骨であることから，筆者らは今，安佐北区にもっとも注目している。

謝辞

≪擱筆するにあたり，本研究と発表の機会を与えていただいた財団法人広島市未来都市創造財団の皆様に感謝致します。≫

≪参考文献≫

1．松下孝幸，1984a：広島市佐久良遺跡出土の弥生時代人骨。広島市安佐北区白木町所在佐久良遺跡発掘調査報告 (広島市の文化財第 27 集)：25-46.
2．松下孝幸，1984b：広島市末光遺跡群 B 地点出土の弥生時代人骨。広島市安佐北区高陽町所在末光遺跡群発掘調査報告 (広島市の文化財第 28 集)：90-95.
3．松下孝幸・他，1986a：歳ノ神遺跡群出土の弥生・古墳時代人骨。歳ノ神遺跡群・中出勝負峠墳墓群 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 49 集)：201-212.
4．松下孝幸・他，1986b：中出勝負峠墳墓群出土の弥生・古墳時代人骨。歳ノ神遺跡群・中出勝負峠墳墓群 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 49 集)：213-244.
5．松下孝幸・他，1989：広島県千代田町壬生西谷遺跡出土の弥生時代人骨。壬生西谷遺跡 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 75 集)：63-80.
6．松下孝幸・他，1990a：東広島市胡麻２号古墓・胡麻４号遺跡出土の人骨，東広島市ニュータウン遺跡群Ⅰ：341-357.
7．松下孝幸，1990b：広島県の古人骨。みよし風土記の丘，№ 40：1-4．みよし風土記の丘友の会 .
8．松下孝幸・他，1991a：広島県竹原市鷺の森遺跡出土の弥生～古墳時代人骨。鷺の森遺跡発掘調査報告 (付編)：1-40.
9．松下孝幸・他，1991b：広島県豊栄町手島山墳墓群出土の弥生～古墳時代人骨。手島山墳墓群 (広島県埋蔵文化財センター文化財発掘調査報告第 93 集)：61-80.
10．松下孝幸，1997a：広島県世羅町矢ノ迫遺跡出土の人骨。矢の迫遺跡：11-20.
11．松下孝幸，1997b：広島県府中市打堀山遺跡 A 地点出土の弥生・古墳時代人骨。打堀山遺跡 A ・ B 地点 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 147 集)：47-50.
12．松下孝幸，1998a：広島市梨ヶ谷遺跡 B 地点出土の弥生時代人骨。梨ヶ谷遺跡発掘調査報告 (財団法人広島市歴史科学教育事業団調査報告書第 22 集)：105-113.
13．松下孝幸，1998b：広島県千代田町須倉城遺跡出土の弥生時代人骨。広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 161 集：75-84.
14．松下孝幸，1998c：広島県福山市法成寺サコ遺跡・法成寺本谷古墳出土の弥生・古墳人骨。法成寺サコ遺跡・法成寺本谷古墳 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 166 集)：52-58.
15．松下孝幸，1998d：広島県府中市山の神・池ノ迫遺跡群出土の弥生・古墳時代人骨。山の神・池ノ迫遺跡群 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 165 集)：75-105.
16．松下孝幸，1999：広島県府中市門田 A 遺跡・東槙山第 1 号古墳南斜面出土の人骨。門田 A 遺跡・東槙山第 1・4 号古墳 (広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第 183 集)：103-112.
17．松下孝幸，2004a：広島県神辺町門前２号遺跡・道上第３号古墳出土の弥生・古墳人骨。道上第２・３・５号古墳，門前２号遺跡 (財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第６集)：113-119.
18．松下孝幸，2004b：広島県神辺町池之坊墳墓群出土の弥生人骨。神辺町内遺跡発掘調査概要 2002 年度 (神辺町埋蔵文化財調査報告第 27 集)：28-38.
19．松下真実，2010：広島市丸子山墳墓群出土の弥生人骨。土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究　紀要第５号：33-43.

琴平遺跡出土赤色顔料の蛍光 X 線分析

竹原弘展（パレオ・ラボ）

1. はじめに

広島市安佐北区大林町に所在する琴平遺跡では、弥生時代の石棺墓および木棺墓計 18 基が確認され、うち 5 基からは赤色顔料が検出されている。この赤色顔料について蛍光 X 線分析を行い、組成を検討した。

2. 試料と方法

分析対象資料は、各遺構より検出された赤色顔料計 6 点である（表 1）。現地で採取された赤色顔料を含む土を実体顕微鏡下で観察して赤色部分を抽出し、セロハンテープに採取して分析試料とした。

表 1　分析対象資料

資料№	出土遺構
1	ST2
2	ST3
3	ST4
4	ST13
5	ST12
6	

分析装置はエネルギー分散型蛍光 X 線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡 XGT-5000Type Ⅱを使用した。装置の仕様は、X 線管が最大 50kV・1mA のロジウムターゲット、X 線ビーム径が 100 μ m または 10 μ m、検出器は高純度 Si 検出器（Xerophy）である。検出可能元素はナトリウム～ウランであるが、ナトリウム、マグネシウムといった軽元素は蛍光 X 線分析装置の性質上、検出感度が悪いため、試料中に少量含む程度ではピークを検出し難く、検出できてもその定量値はかなり誤差が大きい。

本分析での測定条件は、50kV、0.12 ～ 0.46mA（自動設定）、ビーム径 100 μ m、測定時間 500s に設定した。定量分析は、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法（FP 法）による半定量分析を装置付属ソフトで行った。そのため、定量値の誤差は大きい。

また、採取した試料は光学顕微鏡下での観察も行い、赤色顔料の粒子形状を確認した。

3. 結果

分析により得られたスペクトルおよび FP 法による半定量分析結果を図 1 に示す。

いずれの試料からも鉄（Fe）、ケイ素（Si）、アルミニウム（Al）などを中心に、リン（P）、硫黄（S）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、チタン（Ti）、マンガン（Mn）などが検出された。
また、光学顕微鏡観察により得られた画像を図版に示す。

4. 考察

弥生時代に使用されていた赤色顔料としては、朱（水銀朱）とベンガラが挙げられる。水銀朱は硫化水銀（HgS）で、鉱物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。ベンガラは狭義には三酸化二鉄（Fe2O3、鉱物名は赤鉄鉱）を指すが、広義には鉄（Ⅲ）の発色に伴う赤色顔料全

般を指し（成瀬，2004）、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直径約 1 μ m のパイプ状の粒子形状を示すものも多く報告されている。これは鉄バクテリアを起源とすることが判明しており（岡田, 1997）、含水水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱がこのようなパイプ状の粒子形状を示す（成瀬，1998）。

いずれの試料もケイ素など土中成分に由来すると考えられる元素は検出されたものの、水銀は検出されなかった。鉄が多く検出されていることから、赤い発色は鉄によるものであると推定できる。すなわち、顔料としてはベンガラにあたると考えられる。また、光学顕微鏡下で観察したがパイプ状の粒子は観察されなかった。

5. おわりに

琴平遺跡より出土した赤色顔料について分析した結果、鉄が多く検出され、鉄（Ⅲ）による発色と推定された。顔料としてはベンガラであると考えられる。

引用・参考文献

成瀬正和（1998）縄文時代の赤色顔料 I ―赤彩土器―．考古学ジャーナル№ 438，10-14，ニューサイエンス社.
成瀬正和（2004）正倉院宝物に用いられた無機顔料．正倉院紀要，13-61，宮内庁正倉院事務所.
岡田文男（1997）パイプ状ベンガラ粒子の復元．日本文化財科学会第 14 回大会研究発表要旨集，38-39.

報 告 書 抄 録

ふりがな	とんがぼうじょういせき・ぼうずやまいせき・やなぎいせき・ことひらいせき
書　　名	トンガ坊城遺跡・坊主山遺跡・柳遺跡・琴平遺跡
副 書 名	一般国道 54 号（可部バイパス）建設工事に伴う発掘調査
シリーズ名	財団法人広島市未来都市創造財団発掘調査報告書
シリーズ番号	第 1 集
編著者名	椙木敬太　平岡啓二
編集機関	財団法人広島市未来都市創造財団文化科学部文化財課
所 在 地	〒 732-0052　広島県広島市東区光町二丁目 15 番 36 号
発行年月日	西暦 2012 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号	゜ ′ ″	゜ ′ ″			
トンガ坊城遺跡	広島県広島市安佐北区上町屋字新迫	34106	―	34° 32′ 55″	132° 31′ 55″	20050613 ～ 20070316	3000	一般国道 54 号 (可 部 バ イ パ ス) 建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
坊主山遺跡	広島県広島市安佐北区大林町字真香	34106	―	34° 32′ 58″	132° 31′ 01	20071126 ～ 20080331	1500	
柳遺跡	広島県広島市安佐北区大林町字柳	34106	―	34° 33′ 01″	132° 32′ 07″	20080306 ～ 20080331 20080701 ～ 20081225	2500	
琴平遺跡	広島県広島市安佐北区大林町字真香	34106	―	34° 32′ 06″	132° 32′ 12″	20090511 ～ 20090731	1000	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特　記　事　項
トンガ坊城遺跡	集落跡，墳墓群，古墳，山城跡，墓跡	弥生時代～古墳時代前期，古墳時代中期，中世，近世	住居跡 14 軒 , テラス状遺構 18 か所 , 柱穴群 1 か所 , 土坑 13 基，土 壙 墓 13 基 , 石 棺 墓 2 基 , 古 墳 1 基，山城跡 , 近世墓 23 基	弥生土器，土師器，須恵器，鉄器，石器，陶磁器，銭貨	「山陰系」土器・コシキ形土器多数出土
坊主山遺跡	墳墓群	弥生時代	石棺墓 1 基，土壙墓 39 基，土坑 1 基	弥生土器	石棺内より人骨出土
柳遺跡	集落跡	弥生時代～古墳時代前期	住居跡 13 軒，掘立柱建物跡 1 軒，テラス状遺構 6 か所，土坑 10 基	弥生土器，土師器，鉄器，石器	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特　記　事　項
琴平遺跡	墳墓群	弥生時代	土壙墓 21 基	弥生土器，須恵器	
要約		広島市北部の三入大林地区の丘陵上に位置する 4 遺跡の調査。トンガ坊城遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落及び墳墓群，古墳時代中期の古墳，山城跡，近世墓群が検出された。坊主山遺跡では弥生時代後期の石棺墓 1 基や土壙墓 39 基からなる墳墓群を検出し，石棺からは人骨を検出した。柳遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡である。琴平遺跡は弥生時代後期の石棺墓や土壙墓 21 基からなる墳墓群である。		

（財）広島市未来都市創造財団発掘調査報告書　第 1 集
トンガ坊城遺跡・坊主山遺跡・柳遺跡・琴平遺跡
－一般国道 54 号（可部バイパス）建設工事に伴う発掘調査－
―本文編―
２０１２年３月

編集発行　財団法人広島市未来都市創造財団文化科学部文化財課
〒 732-0052　広島市東区光町二丁目 15 番 36 号
TEL　082-568-6511

印　　刷　大村印刷株式会社　広島営業所
〒 730-0847　広島市中区舟入南一丁目 10 番 10 号
TEL　082-503-1221

（財）広島市未来都市創造財団発掘調査報告書　第１集

トンガ坊城遺跡・坊主山遺跡
柳遺跡・琴平遺跡

－一般国道５４号（可部バイパス）建設工事に伴う発掘調査－

－写真図版編－

2011

財団法人広島市未来都市創造財団

目　　次

第２分冊・写真図版編

図版　1　　トンガ坊城遺跡 SH4b・SH5
図版　2　a　トンガ坊城遺跡遠景
　　b　トンガ坊城遺跡
図版　3　a　トンガ坊城遺跡
　　b　トンガ坊城遺跡
図版　4　a　トンガ坊城遺跡
　　b　トンガ坊城遺跡
図版　5　a　トンガ坊城遺跡 SH1 堅緻面検出状況
　　b　トンガ坊城遺跡 SH1 遺物出土状況
図版　6　a　トンガ坊城遺跡 SH1 遺物出土状況
　　b　トンガ坊城遺跡 SH1
図版　7　a　トンガ坊城遺跡 SH1 炉跡
　　b　トンガ坊城遺跡 SH2・SH4a
図版　8　a　トンガ坊城遺跡 SH3
　　b　トンガ坊城遺跡 SH3
図版　9　a　トンガ坊城遺跡 SH4b 遺物出土状況
　　b　トンガ坊城遺跡 SH4b
図版 10　a　トンガ坊城遺跡 SH4b 貼床部土層
　　・SH4a 遺物出土状況
　　b　トンガ坊城遺跡 SH4a 炉跡
図版 11　a　トンガ坊城遺跡 SK2
　　b　トンガ坊城遺跡 SH5 遺物出土状況
図版 12　a　コシキ形土器出土状況
　　b　コシキ形土器出土状況
　　c　コシキ形土器出土状況
図版 13　a　トンガ坊城遺跡 SH5
　　b　トンガ坊城遺跡 SH5 炉跡
図版 14　a　トンガ坊城遺跡 SH6・SH8
　　b　トンガ坊城遺跡 SH7
図版 15　a　トンガ坊城遺跡 SK1
　　b　トンガ坊城遺跡 SH9・SH10 遺物
　　・炭化材出土状況
図版 16　a　トンガ坊城遺跡 SH10 炭化材出土
　　状況
　　b　トンガ坊城遺跡 SH10 コシキ形土
　　器出土状況
図版 17　a　トンガ坊城遺跡 SH9・SH10
　　b　トンガ坊城遺跡 SH11
図版 18　a　トンガ坊城遺跡 SH11・SX5
　　b　トンガ坊城遺跡 SX5 遺物出土状況
図版 19　a　SX5 遺物出土状況
　　b　SX5 遺物出土状況
図版 20　a　SX5P2 付近遺物出土状況
　　b　SX5P1 遺物出土状況
　　c　SX5P5 遺物出土状況
図版 21　a　トンガ坊城遺跡 SK8・SK9
　　b　トンガ坊城遺跡 SH12 遺物出土状 況
図版 22　a　トンガ坊城遺跡 SH12 コシキ形土
　　器出土状況
　　b　トンガ坊城遺跡 SH12
図版 23　a　トンガ坊城遺跡 SH13b
　　b　トンガ坊城遺跡 SH13b 遺物出土
　　状況
図版 24　a　トンガ坊城遺跡 SH13a 遺物出土
　　状況
　　b　トンガ坊城遺跡 SH13a 炉跡周辺
　　遺物出土状況
図版 25　a　トンガ坊城遺跡 SH13a
　　b　トンガ坊城遺跡 SH14 遺物出土状況
図版 26　a　トンガ坊城遺跡 SH14 遺物出土状況
　　b　トンガ坊城遺跡 SH14 遺物出土状況
図版 27　a　トンガ坊城遺跡 SH14
　　b　トンガ坊城遺跡 SX1 遺物出土状況

図版 28　a　トンガ坊城遺跡 SX2 遺物出土状況
　　b　トンガ坊城遺跡 SX4 遺物出土状況
図版 29　a　トンガ坊城遺跡 SX1・SX2・SX4
　　b　トンガ坊城遺跡 SX3 遺物出土状況
図版 30　a　トンガ坊城遺跡 SX3
　　b　トンガ坊城遺跡 SX6
図版 31　a　トンガ坊城遺跡 SK4
　　b　トンガ坊城遺跡 SX7 遺物出土状況
図版 32　a　トンガ坊城遺跡 SX7a 遺物出土状況
　　b　トンガ坊城遺跡 SX7b 遺物出土状況
図版 33　a　トンガ坊城遺跡 SX7c 遺物出土状況
　　b　トンガ坊城遺跡 SX7
図版 34　a　トンガ坊城遺跡 SX7a
　　b　トンガ坊城遺跡 SX8・SX9
図版 35　a　トンガ坊城遺跡 SX8 遺物出土状況
　　b　トンガ坊城遺跡 SX8
図版 36　a　トンガ坊城遺跡 SX9 遺物出土状況
　　b　トンガ坊城遺跡 SX9
図版 37　a　トンガ坊城遺跡 SK6
　　b　トンガ坊城遺跡 SX10
図版 38　a　トンガ坊城遺跡 SX11
　　b　トンガ坊城遺跡 SK3
図版 39　a　トンガ坊城遺跡 SX12 遺物出土状況
　　b　トンガ坊城遺跡 SX12
図版 40　a　トンガ坊城遺跡 SX13
　　b　トンガ坊城遺跡 SX13P1 遺物出土状況
図版 41　a　トンガ坊城遺跡 SK11
　　b　トンガ坊城遺跡 SK11 遺物出土状況
図版 42　a　トンガ坊城遺跡 SK11 遺物出土状況
　　b　トンガ坊城遺跡 SK12
図版 43　a　トンガ坊城遺跡 SX14
　　b　トンガ坊城遺跡 SX15・SX16・SX17
図版 44　a　トンガ坊城遺跡 SX16 遺物出土状況
　　b　トンガ坊城遺跡 SX18
図版 45　a　トンガ坊城遺跡 SK7
　　b　トンガ坊城遺跡 SK10 遺物出土状況
図版 46　a　トンガ坊城遺跡 SK10
　　b　トンガ坊城遺跡 SK13
図版 47　a　トンガ坊城遺跡柱穴群
　　b　トンガ坊城遺跡柱穴群 P1 遺物出土状況
図版 48　a　トンガ坊城遺跡 ST1・ST2・ST3
　　b　トンガ坊城遺跡 ST4・ST6・ST7
図版 49　a　トンガ坊城遺跡 ST4 石材検出状況
　　b　トンガ坊城遺跡 ST4
図版 50　a　トンガ坊城遺跡 ST5・ST6・ST8
　　b　トンガ坊城遺跡 ST5 石材検出状況
図版 51　a　トンガ坊城遺跡 ST5
　　b　トンガ坊城遺跡 ST6
図版 52　a　トンガ坊城遺跡 ST7
　　b　トンガ坊城遺跡 ST8
図版 53　a　トンガ坊城遺跡 ST9 ～ 12
　　b　トンガ坊城遺跡 ST9 ～ 12
図版 54　a　トンガ坊城遺跡 ST13 ～ 15
　　b　トンガ坊城遺跡 ST15 遺物出土状況
図版 55　a　トンガ坊城古墳
　　b　トンガ坊城古墳周溝遺物出土状況
図版 56　出土遺物（1）
図版 57　出土遺物（2）
図版 58　出土遺物（3）
図版 59　出土遺物（4）
図版 60　出土遺物（5）
図版 61　出土遺物（6）
図版 62　出土遺物（7）
図版 63　出土遺物（8）
図版 64　出土遺物（9）
図版 65　出土遺物（10）
図版 66　出土遺物（11）
図版 67　出土遺物（12）
図版 68　出土遺物（13）

図版 69　出土遺物（14）
図版 70　出土遺物（15）
図版 71　出土遺物（16）
図版 72　出土遺物（17）
図版 73　出土遺物（18）
図版 74　出土遺物（19）
図版 75　出土遺物（20）
図版 76　出土遺物（21）
図版 77　出土遺物（22）
図版 78　出土遺物（23）
図版 79　出土遺物（24）
図版 80　出土遺物（25）
図版 81　出土遺物（26）
図版 82　出土遺物（27）
図版 83　出土遺物（28）
図版 84　出土遺物（29）
図版 85　出土遺物（30）
図版 86　a　トンガ坊城跡
　　b　トンガ坊城跡西側斜面
図版 87　a　トンガ坊城跡西側斜面
　　b　トンガ坊城跡西側斜面
図版 88　a　トンガ坊城跡東側斜面
　　b　トンガ坊城跡東側斜面崩落面
図版 89　a　トンガ坊城跡調査区北端より
　　b　トンガ坊城跡第 1・2 平坦面
図版 90　a　トンガ坊城跡第 2 平坦面西側
　　b　トンガ坊城跡第 2 平坦面東側
図版 91　a　トンガ坊城跡第 2 平坦面東側
　　b　トンガ坊城跡小平坦面 A
図版 92　a　トンガ坊城跡第 3・4 平坦面
　　b　トンガ坊城跡通路状遺構
図版 93　a　トンガ坊城跡通路状遺構
　　b　トンガ坊城跡階段状遺構
図版 94　a　トンガ坊城跡階段状遺構
　　b　トンガ坊城跡第 6 平坦面
図版 95　a　トンガ坊城跡調査区南端より
　　b　トンガ坊城跡第 10・11 平坦面
図版 96　a　火葬墓群墓標石検出状況
　　b　火葬墓群墓標石検出状況
図版 97　a　火葬墓群墓標石検出状況
　　b　火葬墓群
図版 98　a ST1 断面　b ST1 人骨等出土状況
　c ST2 断面　d ST2 人骨等出土状況
　e ST5 断面　f ST5 人骨等出土状況
　g ST6 人骨等出土状況　h ST8 人骨等出土状況
図版 99　a ST9 人骨等出土状況　b ST9 人骨等出土状況　c　ST21 人骨出土状況
図版 100 a　ST22・ST23
　　b　ST22
図版 101 a　ST23
　　b　出土遺物（1）
図版 102　出土遺物（2）
図版 103　出土遺物（3）
図版 104　出土遺物（4）
図版 105 a　坊主山遺跡遠景
　　b　坊主山遺跡遠景
図版 106 a　坊主山遺跡
　　b　坊主山遺跡
図版 107 a　坊主山遺跡 ST1
　　b　坊主山遺跡 ST2・ST3・ST4
図版 108 a　坊主山遺跡 ST5
　　b　坊主山遺跡 ST6・ST7
図版 109 a　坊主山遺跡 ST8
　　b　坊主山遺跡 ST9・ST10
図版 110 a　坊主山遺跡 ST11
　　b　坊主山遺跡 ST12・ST13
図版 111 a　坊主山遺跡 ST14 石棺開棺前・ST15
　　b　坊主山遺跡 ST14 人骨取り上げ後
図版 112 a　坊主山遺跡 ST14 人骨出土状況
　　b　坊主山遺跡 ST14 人骨出土状況

図版 113 a　坊主山遺跡 ST14 棺材除去後
b　坊主山遺跡 ST16
図版 114 a　坊主山遺跡 ST17 墓標石検出状況
b　坊主山遺跡 ST17・ST18
図版 115 a　坊主山遺跡 ST19・ST20
b　坊主山遺跡 ST21
図版 116 a　坊主山遺跡 ST22 ～ 25
b　坊主山遺跡 ST26
図版 117 a　坊主山遺跡 ST27
b　坊主山遺跡 ST28・29
図版 118 a　坊主山遺跡 ST30 ～ 34
b　坊主山遺跡 ST35
図版 119 a　坊主山遺跡 ST36
b　坊主山遺跡 ST37
図版 120 a　坊主山遺跡 ST38
b　坊主山遺跡 ST39 土器出土状況
図版 121 a　坊主山遺跡 ST38 ～ 40・SK1
b　出土遺物
図版 122 a　柳遺跡遠景
b　柳遺跡
図版 123 a　柳遺跡遠景
b　柳遺跡
図版 124 a　柳遺跡 SH1 遺物出土状況
b　柳遺跡 SH1
図版 125 a　柳遺跡 SH1 炉跡
b　柳遺跡 SH2 遺物出土状況
図版 126 a　柳遺跡 SH3 遺物出土状況
b　柳遺跡 SH3 遺物出土状況
図版 127 a　柳遺跡 SH2・SH3
b　柳遺跡 SH4 遺物出土状況
図版 128 a　柳遺跡 SH4
b　柳遺跡 SH5 遺物出土状況
図版 129 a　柳遺跡 SH5
b　柳遺跡 SH6 遺物出土状況
図版 130 a　柳遺跡 SH6 ベッド状遺構検出状況
b　柳遺跡 SH6・SB1
図版 131 a　柳遺跡 SH7
b　柳遺跡 SH7
図版 132 a　柳遺跡 SH8・SH9 遺物出土状況
b　柳遺跡 SH9 遺物出土状況
図版 133 a　柳遺跡 SH10 遺物出土・貼床検出状況
b　柳遺跡 SH8・SH9・SH10
図版 134 a　柳遺跡 SH11・SH12 遺物出土状況
b　柳遺跡 SX6 遺物出土状況
図版 135 a　柳遺跡 SH11・SH12 遺物出土状況
b　柳遺跡 SH11・SH12 遺物出土状況
図版 136 a　柳遺跡 SH11・SH12・SX6
b　柳遺跡 SH12 炉跡
図版 137 a　柳遺跡 SH12 掘り込み
b　柳遺跡 SH13
図版 138 a　柳遺跡 SX1 北側遺物出土状況
b　柳遺跡 SX1 南側遺物出土状況
図版 139 a　柳遺跡 SX1
b　柳遺跡 SX2・SX3
図版 140 a　柳遺跡 SX2 遺物出土状況
b　柳遺跡 SX2
図版 141 a　柳遺跡 SX3 遺物出土状況
b　柳遺跡 SX3 北側遺物出土状況
図版 142 a　柳遺跡 SX3 南側遺物出土状況
b　柳遺跡 SX3
図版 143 a　柳遺跡 SX5 遺物出土状況
b　柳遺跡 SX4・SX5
図版 144 a　柳遺跡 SK1
b　柳遺跡 SK2
図版 145 a　柳遺跡 SK3
b　柳遺跡 SK3
図版 146 a　柳遺跡 SK4・SK5
b　柳遺跡 SK5
図版 147 a　柳遺跡 SK6
b　柳遺跡 SK7
図版 148 a　柳遺跡 SK8・SK9・SK10
b　柳遺跡 SK8・SK9・SK10

図版 149　出土遺物（1）
図版 150　出土遺物（2）
図版 151　出土遺物（3）
図版 152　出土遺物（4）
図版 153　出土遺物（5）
図版 154　出土遺物（6）
図版 155　出土遺物（7）
図版 156　出土遺物（8）
図版 157　出土遺物（9）
図版 158　出土遺物（10）
図版 159　出土遺物（11）
図版 160　出土遺物（12）
図版 161　出土遺物（13）
図版 162　出土遺物（14）
図版 163　出土遺物（15）
図版 164　a　SX1 出土貝殻
　　b　SX1 出土貝殻
図版 165　a　琴平遺跡遠景
　　b　琴平遺跡
図版 166　a　琴平遺跡遠景
　　b　琴平遺跡遠景
図版 167　a　琴平遺跡
　　b　琴毘羅社
図版 168　a　琴毘羅社
　　b　琴平遺跡 ST1 石材検出状況
図版 169　a　琴平遺跡 ST1
　　b　琴平遺跡 ST2 赤色顔料検出状況
図版 170　a　琴平遺跡 ST2
　　b　琴平遺跡 ST3 赤色顔料検出状況
図版 171　a　琴平遺跡 ST3
　　b　琴平遺跡 ST4
図版 172　a　琴平遺跡 ST5
　　b　琴平遺跡 ST6 ～ 14
図版 173　a　琴平遺跡 ST6・ST7
　　b　琴平遺跡 ST6・ST7
図版 174　a　琴平遺跡 ST8 人骨出土状況
　　b　琴平遺跡 ST8 人骨出土状況
図版 175　a　琴平遺跡 ST8
　　b　琴平遺跡 ST12 赤色顔料検出状況
図版 176　a　琴平遺跡 ST12
　　b　琴平遺跡 ST9 ～ 11・ST13・ST14
図版 177　a　琴平遺跡 ST9
　　b　琴平遺跡 ST10・ST11
図版 178　a　琴平遺跡 ST10・ST11・ST13・ST14
　　b　琴平遺跡 ST13 赤色顔料検出状況
図版 179　a　琴平遺跡 ST14
　　b　琴平遺跡 ST15 ～ 21
図版 180　a　琴平遺跡 ST15・ST16
　　b　琴平遺跡 ST16 石材検出状況
図版 181　a　琴平遺跡 ST16 石材検出状況
　　b　琴平遺跡 ST16
図版 182　a　琴平遺跡 ST17・ST18
　　b　琴平遺跡 ST18 ～ 21
図版 183　出土遺物
図版 184　トンガ坊城遺跡 ST21
図版 185　トンガ坊城遺跡 ST21
図版 186　トンガ坊城遺跡 SH10 出土炭化材
　　木材組織の走査電子顕微鏡写真
図版 187　土器胎土の偏光顕微鏡写真
図版 188　土器胎土の偏光顕微鏡写真
図版 189　坊主山遺跡 ST14
図版 190　琴平遺跡　赤色顔料の光学顕微鏡写真
図版 191　琴平遺跡　赤色顔料の蛍光Ｘ線分析結果

図　版

トンガ坊城遺跡 SH4b・SH5（北から）

図版 2

a　トンガ坊城遺跡遠景（航空写真・調査前・西から）

b　トンガ坊城遺跡（航空写真・調査前・東から）

a　トンガ坊城遺跡（航空写真・調査前・南から）

b　トンガ坊城遺跡（航空写真・調査後・西から）

図版 4

a　トンガ坊城遺跡（航空写真・調査後・西から）

b　トンガ坊城遺跡（航空写真・調査後・東から）

a　トンガ坊城遺跡 SH1 竪緻面検出状況（東から）

b　トンガ坊城遺跡 SH1 遺物出土状況（南から）

図版 6

a　トンガ坊城遺跡 SH1 遺物出土状況（南から）

b　トンガ坊城遺跡 SH1（南西から）

a　トンガ坊城遺跡 SH1 炉跡（北西から）

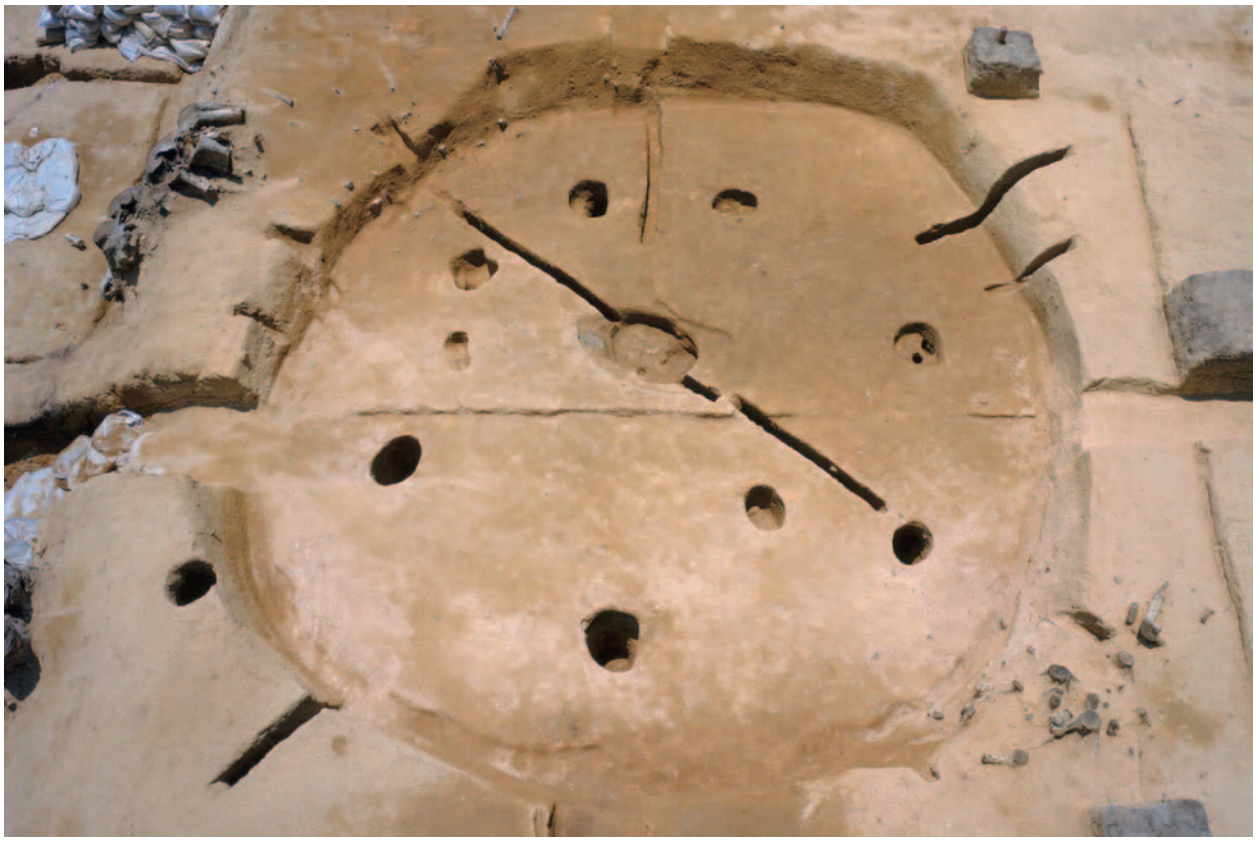
b　トンガ坊城遺跡 SH2・SH4a（北から）

図版 8

a　トンガ坊城遺跡 SH3（北から）

b　トンガ坊城遺跡 SH3（南から）

a　トンガ坊城遺跡 SH4b 遺物出土状況（北から）



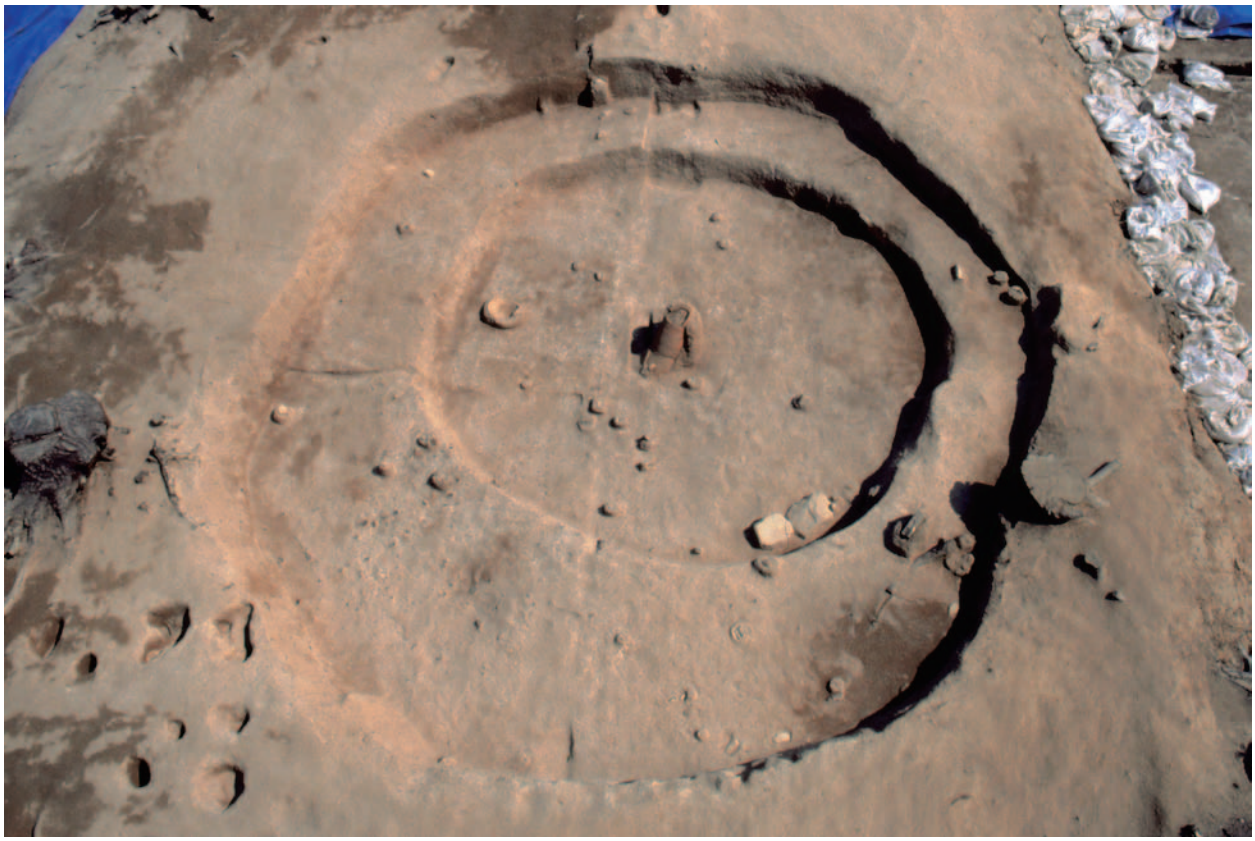
b　トンガ坊城遺跡 SH4b（北から）

図版 10

a　トンガ坊城遺跡 SH4b 貼床部土層・SH4a 遺物出土状況（北から）

b　トンガ坊城遺跡 SH4a 炉跡（南東から）

a　トンガ坊城遺跡 SK2（東から）



b　トンガ坊城遺跡 SH5 遺物出土状況（北から）

図版 12

a　コシキ形土器出土状況
（北から）

b　コシキ形土器出土状況
（東から）

c　コシキ形土器出土状況
（北東から）

a　トンガ坊城遺跡 SH5（南から）

b　トンガ坊城遺跡 SH5 炉跡（南から）

図版 14

a　トンガ坊城遺跡 SH6・SH8（南から）

b　トンガ坊城遺跡 SH7（南から）

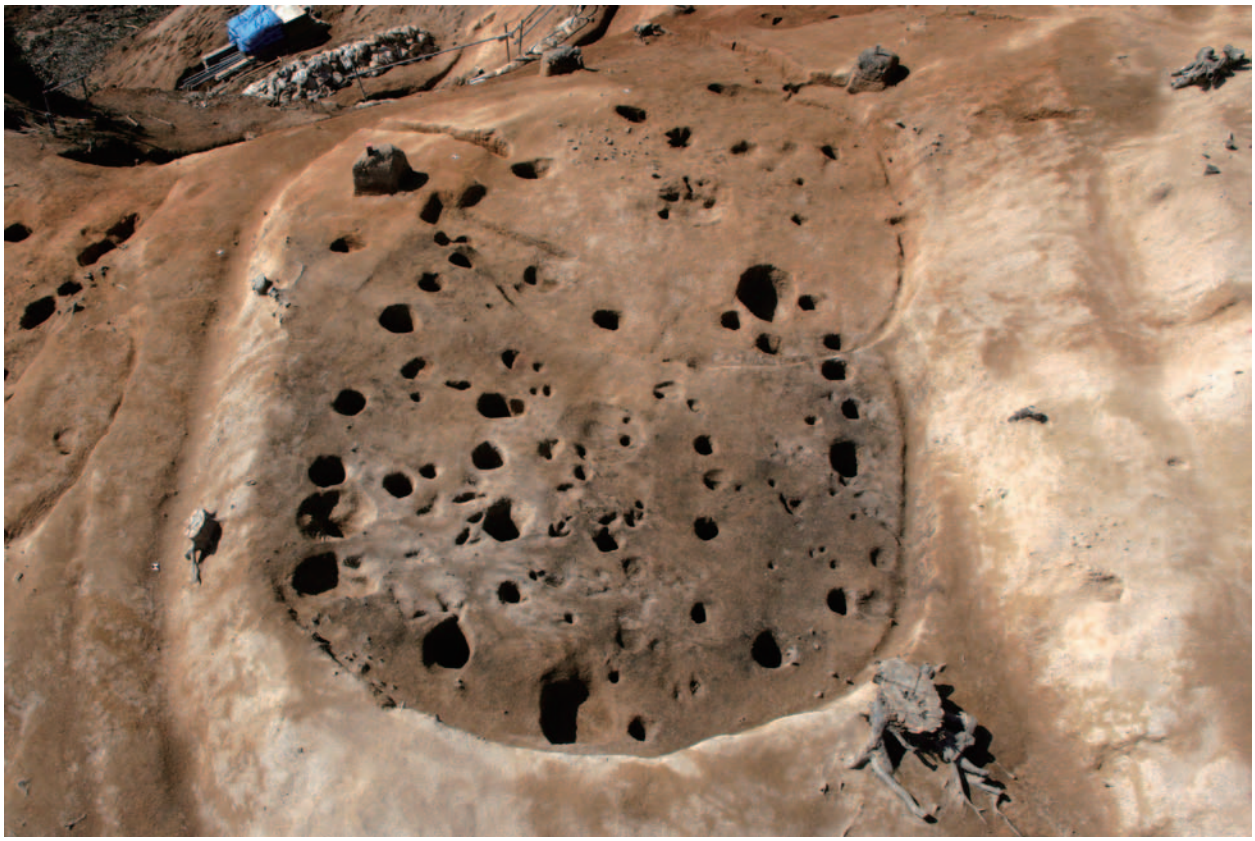
a　トンガ坊城遺跡 SK1（東から）

b　トンガ坊城遺跡 SH9・SH10 遺物・炭化材出土状況（北から）

図版 16

a　トンガ坊城遺跡 SH10 炭化材出土状況（南東から）

b　トンガ坊城遺跡 SH10 コシキ形土器出土状況（東から）



a　トンガ坊城遺跡 SH9・SH10（東から）

b　トンガ坊城遺跡 SH11（南東から）

図版 18

a　トンガ坊城遺跡 SH11・SX5（南から）

b　トンガ坊城遺跡 SX5 遺物出土状況（北から）

a　SX5 遺物出土状況
（北東から）

b　SX5 遺物出土状況
（北東から）

図版 20

a　SX5P2 付近遺物出土状況
（東から）

b　SX5P1 遺物出土状況
（南から）

c　SX5P5 遺物出土状況
（北東から）

a　トンガ坊城遺跡 SK8・SK9（南東から）

b　トンガ坊城遺跡 SH12 遺物出土状況（南東から）

図版 22

a　トンガ坊城遺跡 SH12 コシキ形土器出土状況（北東から）

b　トンガ坊城遺跡 SH12（西から）

a　トンガ坊城遺跡 SH13b（南から）

b　トンガ坊城遺跡 SH13b 遺物出土状況（南から）

図版 24

a　トンガ坊城遺跡 SH13a 遺物出土状況（南東から）

b　トンガ坊城遺跡 SH13a 炉跡周辺遺物出土状況（北から）

a　トンガ坊城遺跡 SH13a（南から）

b　トンガ坊城遺跡 SH14 遺物出土状況（北から）

図版 26

a　トンガ坊城遺跡 SH14 遺物出土状況（北東から）

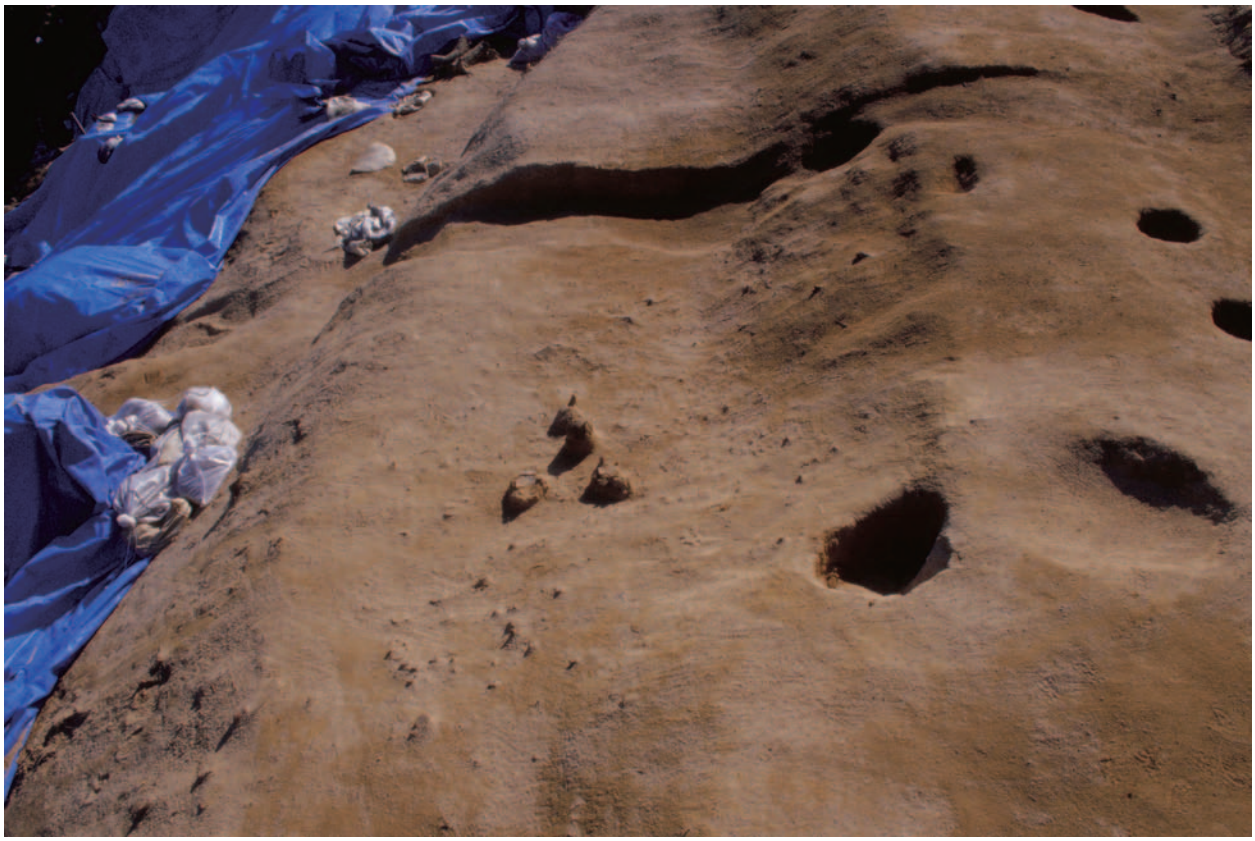
b　トンガ坊城遺跡 SH14 遺物出土状況（南西から）

a　トンガ坊城遺跡 SH14（南西から）

b　トンガ坊城遺跡 SX1 遺物出土状況（東から）

図版 28

a　トンガ坊城遺跡 SX2 遺物出土状況（北から）



b　トンガ坊城遺跡 SX4 遺物出土状況（北から）

a　トンガ坊城遺跡 SX1・SX2・SX4（東から）

b　トンガ坊城遺跡 SX3 遺物出土状況（南から）

図版 30

a　トンガ坊城遺跡 SX3（南から）

b　トンガ坊城遺跡 SX6（西から）

a　トンガ坊城遺跡 SK4（北から）

b　トンガ坊城遺跡 SX7 遺物出土状況（南西から）

図版 32

a　トンガ坊城遺跡 SX7a 遺物出土状況（北から）

b　トンガ坊城遺跡 SX7b 遺物出土状況（北西から）

a　トンガ坊城遺跡 SX7c 遺物出土状況（北西から）

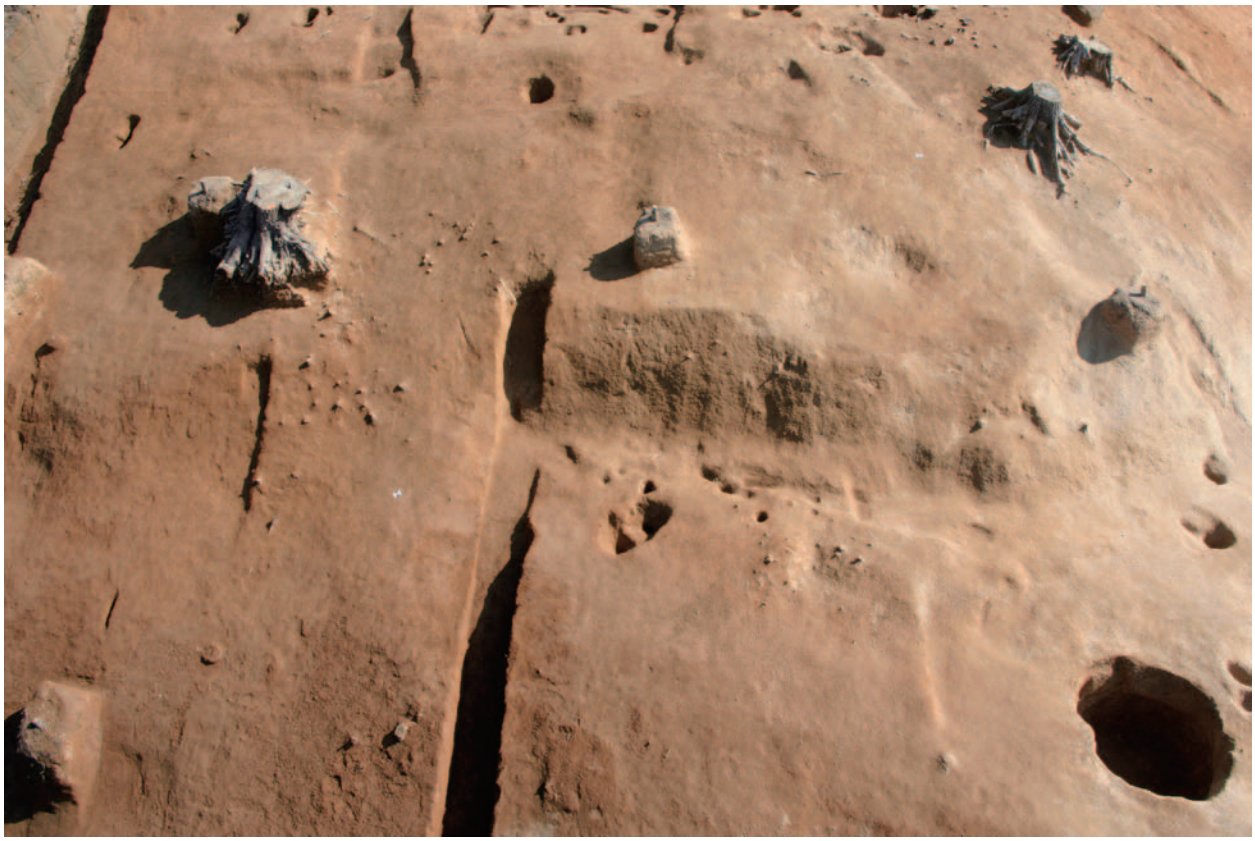
b　トンガ坊城遺跡 SX7（南西から）

図版 34

a　トンガ坊城遺跡 SX7a（南西から）

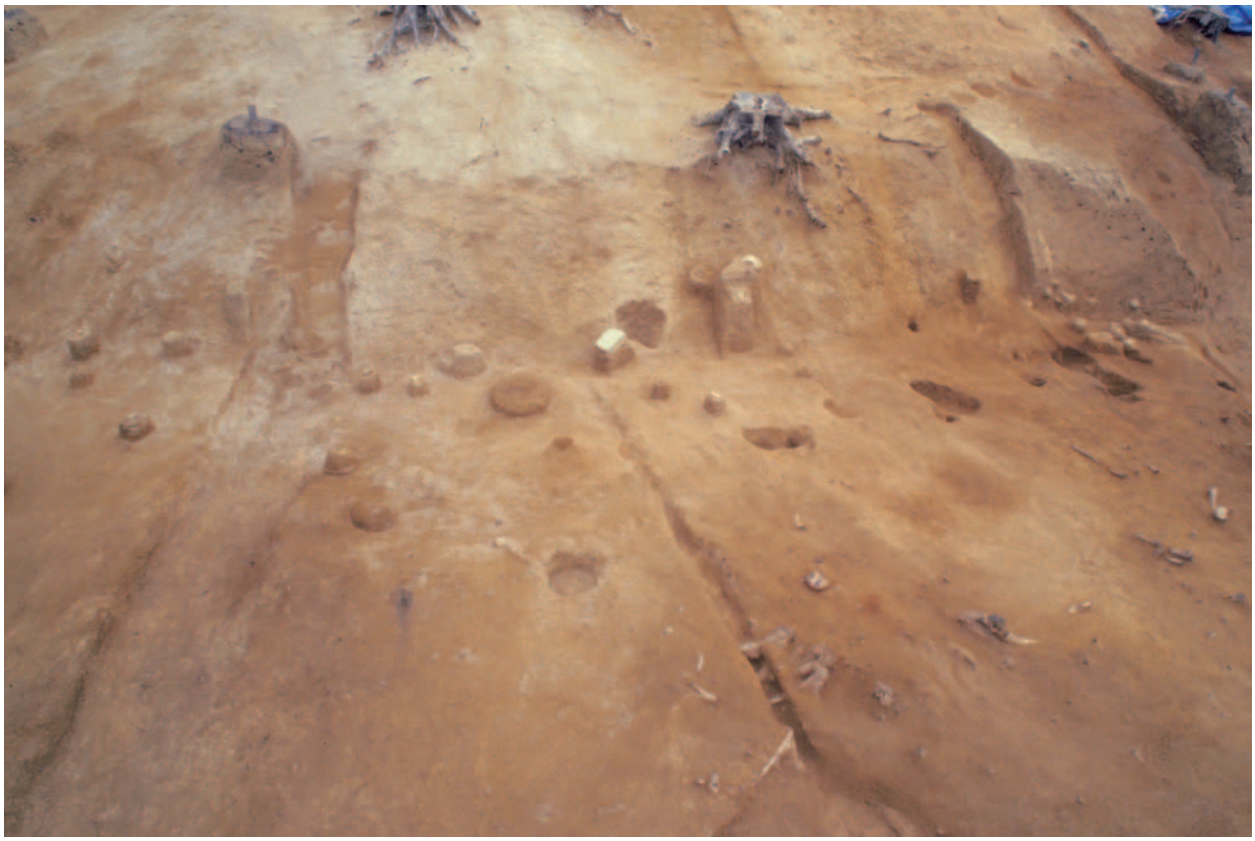
b　トンガ坊城遺跡 SX8・SX9（南西から）

a　トンガ坊城遺跡 SX8 遺物出土状況（西から）



b　トンガ坊城遺跡 SX8（西から）

図版 36



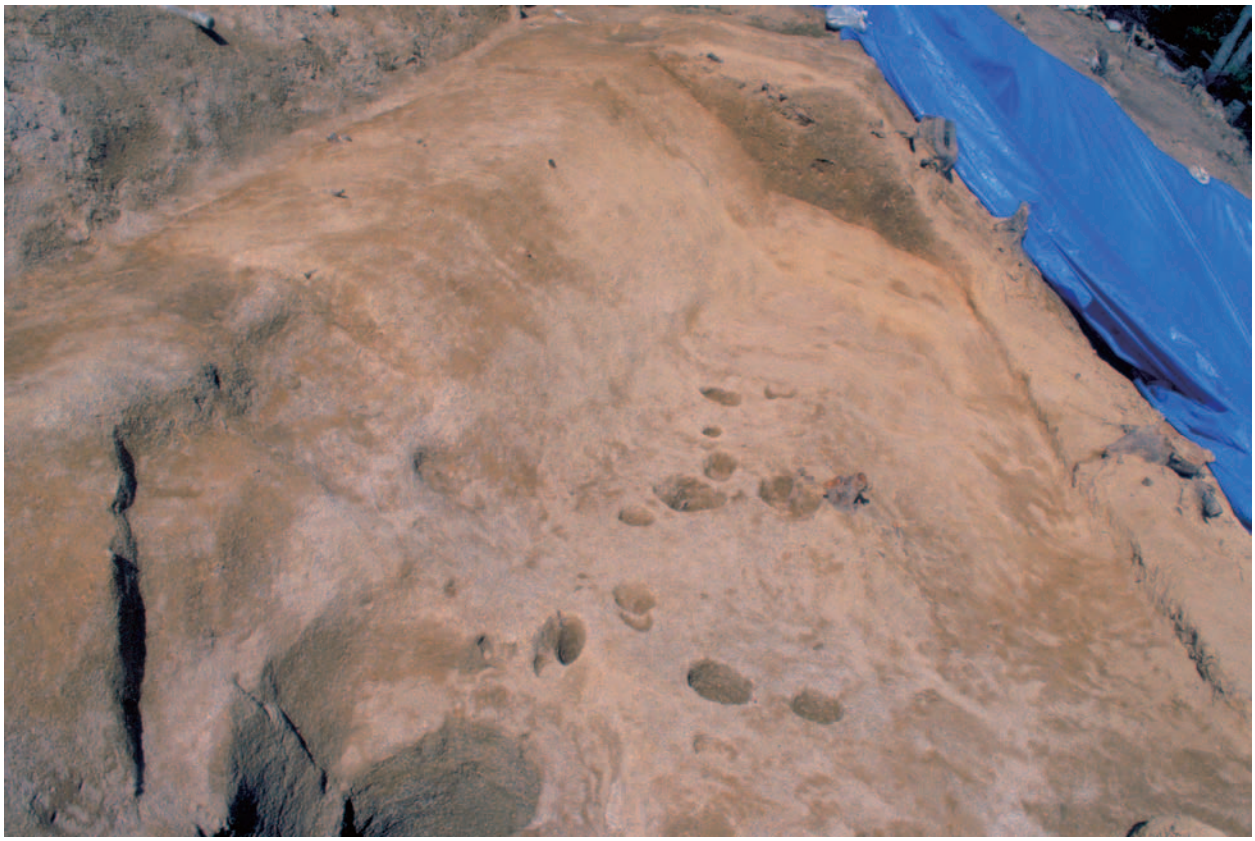
a　トンガ坊城遺跡 SX9 遺物出土状況（南西から）

b　トンガ坊城遺跡 SX9（南西から）

a　トンガ坊城遺跡 SK6（北から）

b　トンガ坊城遺跡 SX10（南東から）

図版 38



a　トンガ坊城遺跡 SX11（南から）

b　トンガ坊城遺跡 SK3（南西から）

a　トンガ坊城遺跡 SX12 遺物出土状況
（北から）

b　トンガ坊城遺跡 SX12（北から）

図版 40

a　トンガ坊城遺跡 SX13（南東から）

b　トンガ坊城遺跡 SX13P1 遺物出土状況（南西から）

a　トンガ坊城遺跡 SK11（南西から）

b　トンガ坊城遺跡 SK11 遺物出土状況（東から）

図版 42

a　トンガ坊城遺跡 SK11 遺物出土状況（東から）

b　トンガ坊城遺跡 SK12（東から）

a　トンガ坊城遺跡 SX14（南西から）

b　トンガ坊城遺跡 SX15・SX16・SX17（北から）

図版 44

a　トンガ坊城遺跡 SX16 遺物出土状況（北から）

b　トンガ坊城遺跡 SX18（南から）

a　トンガ坊城遺跡 SK7（西から）

b　トンガ坊城遺跡 SK10 遺物出土状況（南から）

図版 46

a　トンガ坊城遺跡 SK10（北から）

b　トンガ坊城遺跡 SK13（北西から）

a　トンガ坊城遺跡柱穴群（南から）

b　トンガ坊城遺跡柱穴群 P1 遺物出土状況（西から）

図版 48

a　トンガ坊城遺跡 ST1・ST2・ST3（南東から）

b　トンガ坊城遺跡 ST4・ST6・ST7（南西から）

a　トンガ坊城遺跡 ST4 石材検出状況（北西から）

b　トンガ坊城遺跡 ST4（北西から）

図版 50

a　トンガ坊城遺跡 ST5・ST6・ST8（北東から）

b　トンガ坊城遺跡 ST5 石材検出状況（北西から）

a　トンガ坊城遺跡 ST5（北西から）

b　トンガ坊城遺跡 ST6（北西から）

図版 52

a　トンガ坊城遺跡 ST7（北西から）

b　トンガ坊城遺跡 ST8（南東から）

a　トンガ坊城遺跡 ST9 ～ 12（東から）

b　トンガ坊城遺跡 ST9 ～ 12（北西から）

図版 54

a　トンガ坊城遺跡 ST13 ～ 15（西から）

b　トンガ坊城遺跡 ST15 遺物出土状況（北から）

a　トンガ坊城古墳（南東から）

b　トンガ坊城古墳周溝遺物出土状況（南西から）

図版 56

1

2

3

4

5

6

7

出土遺物（1）

8

9

10

11

12

13

14

出土遺物（2）

図版 58

15

16

17

18

19

20 上面

21

20 側面

出土遺物（3）

22

23

24

25

26

出土遺物（4）

図版 60

27

28

29

31

30

33

出土遺物（5）

32

34

35

37

36

38 立面

出土遺物（6）

図版 62

38 俯瞰

39

40

41 上部

41 下部

41 下部穿孔

42

44

出土遺物（7）

図版 63

43 上部

43 下部

45

46

47

48

49

51

出土遺物（8）

図版 64

50

52

54

53

55

出土遺物（9）

56

57

58

59

60

62

61

出土遺物（10）

図版 66

63

64

65

66

67

68

69

70

出土遺物（11）

71

72

73

74

75

76

77

78

出土遺物（12）

図版 68

79

80

81

82

83

84

85

86

出土遺物（13）

87

88

89

90

91

92

93

94

出土遺物（14）

図版 70

95

96

97

98

99

100

101

102

出土遺物（15）

103

104

105

106

107

108

109

110

出土遺物（16）

図版 72

111

113

112

114

115

116

117

出土遺物（17）

118

119

120

121

122

124

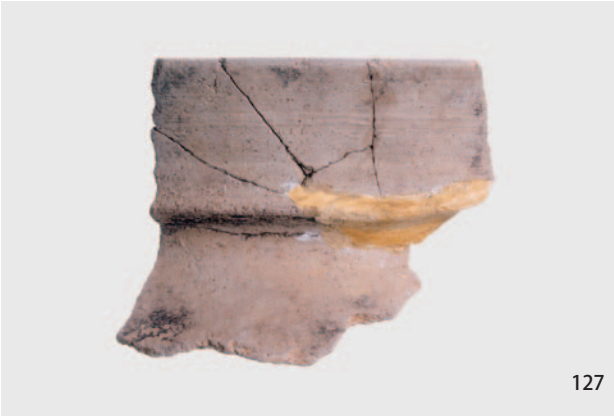
123

出土遺物（18）

図版 74

125

126


127

128

129

130

131

132

出土遺物（19）

133

137

134

135

136

出土遺物（20）

図版 76

138

139

140

141

142

143

144

145

出土遺物（21）

図版 77

146

147

148

149

150

151

152

153

出土遺物（22）

図版 78

154

155

156

157

158

159

160

161

出土遺物（23）

162

163

164

165

166

167

168

出土遺物（24）

図版 80

169

170

171

172

173

174

175

176

出土遺物（25）

図版 81

177

178

179

180

181

181 底面

182

183

184

出土遺物（26）

図版 82

185

186

187 表

187 裏

188

189

190

191

192

193

194

195

出土遺物（27）

図版 83

196 表

196 裏

197

198

199

202

200 左

200 表

200 右

200 裏

201 表

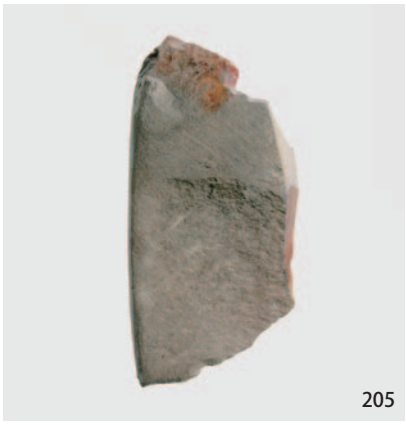
201 裏

203

出土遺物（28）

図版 84

204


205

206

207

208 209 210

211

212

213 214

215

216

217 表

217 右

218

出土遺物（29）

219

220

221

222

223

224

225

226

227

228

下町屋トンネル出土

出土遺物（30）

図版 86

a　トンガ坊城跡（航空写真・山城面・東から）

b　トンガ坊城跡西側斜面（航空写真・山城面・西から）

a　トンガ坊城跡西側斜面（航空写真・山城面・西から）

b　トンガ坊城跡西側斜面（南西から）

図版 88

a　トンガ坊城跡東側斜面（航空写真・山城面・東から）

b　トンガ坊城跡東側斜面崩落面（航空写真・山城面・東から）

a　トンガ坊城跡調査区北端より（北から）

b　トンガ坊城跡第 1・2 平坦面（南から）

図版 90

a　トンガ坊城跡第 2 平坦面西側（南から）

b　トンガ坊城跡第 2 平坦面東側（南から）

a　トンガ坊城跡第 2 平坦面東側（北から）

b　トンガ坊城跡小平坦面 A（南東から）

図版 92

a　トンガ坊城跡第 3・4 平坦面（南から）

b　トンガ坊城跡通路状遺構（南から）

a　トンガ坊城跡通路状遺構（北西から）

b　トンガ坊城跡階段状遺構（北東から）

図版 94

a　トンガ坊城跡階段状遺構（東から）

b　トンガ坊城跡第 6 平坦面（南東から）

a　トンガ坊城跡調査区南端より（南東から）

b　トンガ坊城跡第 10・11 平坦面（南から）

図版 96

a　火葬墓群墓標石検出状況（南西から）

b　火葬墓群墓標石検出状況（南東から）

a　火葬墓群墓標石検出状況（北西から）

b　火葬墓群（航空写真・南西から）

図版 98

a　ST1 断面（東から）

b　ST1 人骨等出土状況（東から）

c　ST2 断面（北西から）

d　ST2 人骨等出土状況（南西から）

e　ST5 断面（北西から）

f　ST5 人骨等出土状況（南東から）

g　ST6 人骨等出土状況（南西から）

h　ST8 人骨等出土状況（北西から）

a　ST9 人骨等出土状況（西から）

b　ST9 人骨等出土状況（下層・南西から）

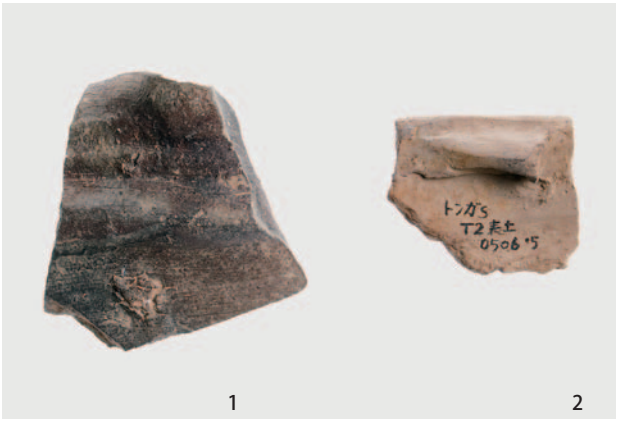
c　ST21 人骨出土状況（南東から）

図版 100

a　ST22・23（北西から）

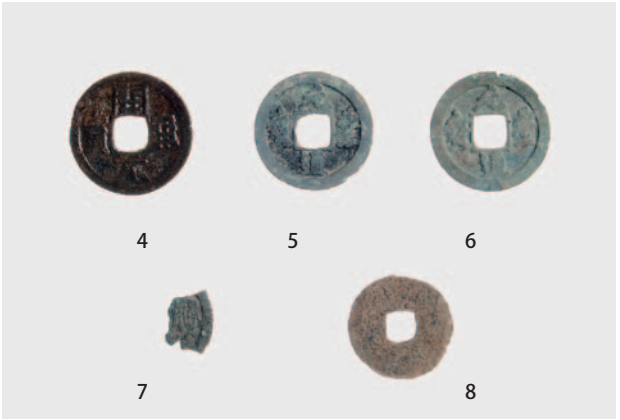
b　ST22（北西から）

a　ST23（北西から）



1　2

3

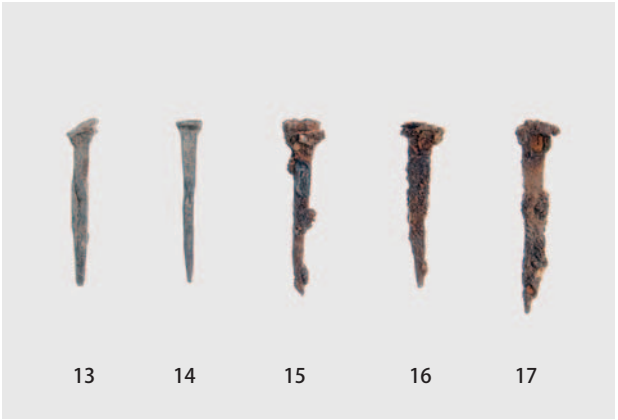


4　5　6　7　8

9　10　11　12

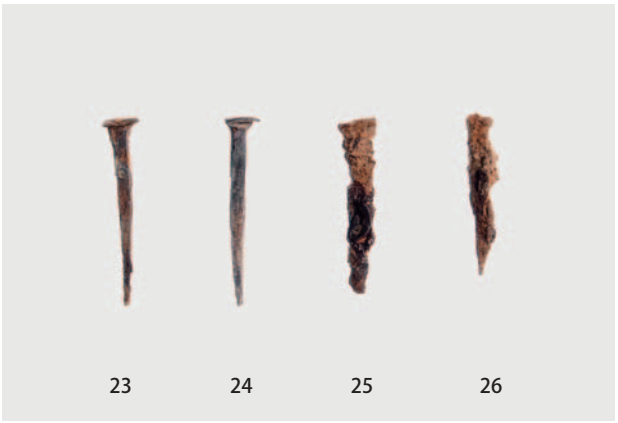
b　出土遺物（1）

図版 102



13　14　15　16　17

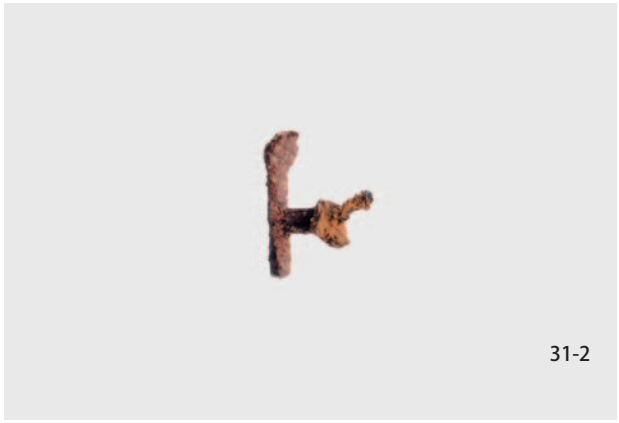
18　19　20　21　22



23　24　25　26

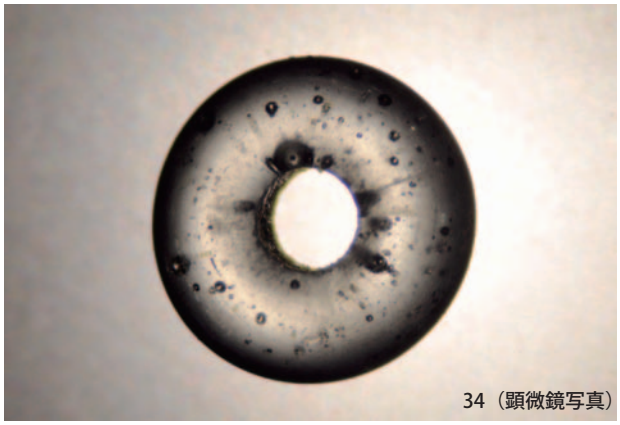
27　28　29　30

31-1



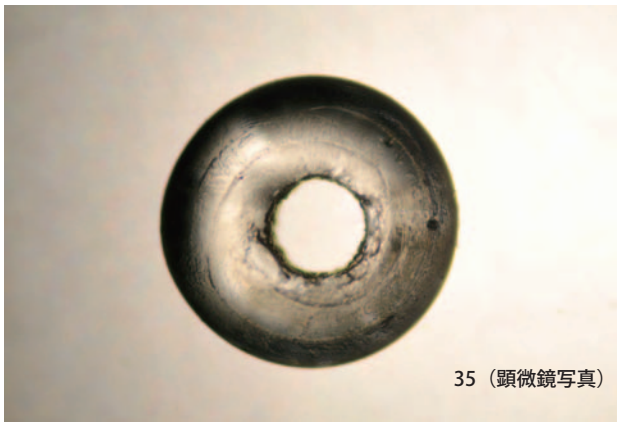
31-2

32　33

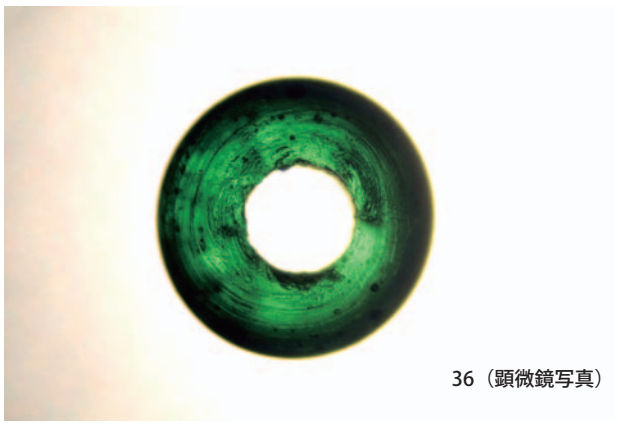


34（顕微鏡写真）

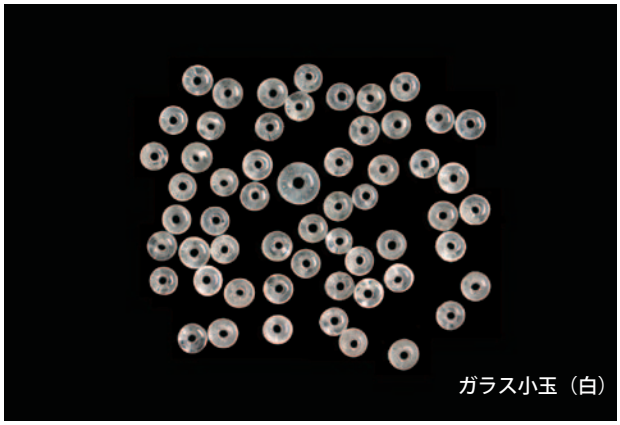
出土遺物（2）



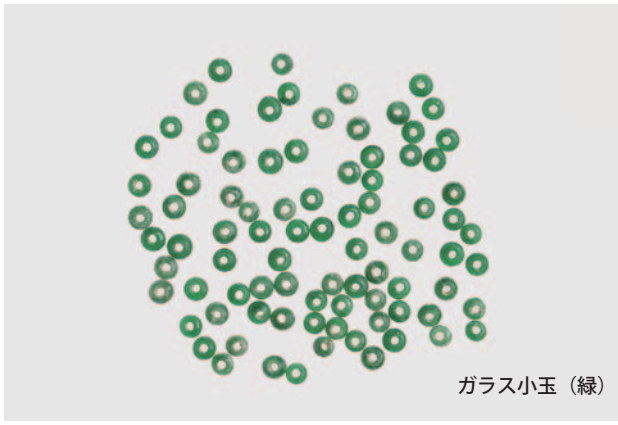
35（顕微鏡写真）



36（顕微鏡写真）



ガラス小玉（白）



ガラス小玉（緑）

陶磁器類

出土遺物（3）

図版 104

出土遺物（4）

a　坊主山遺跡遠景（航空写真・調査前・北東から）

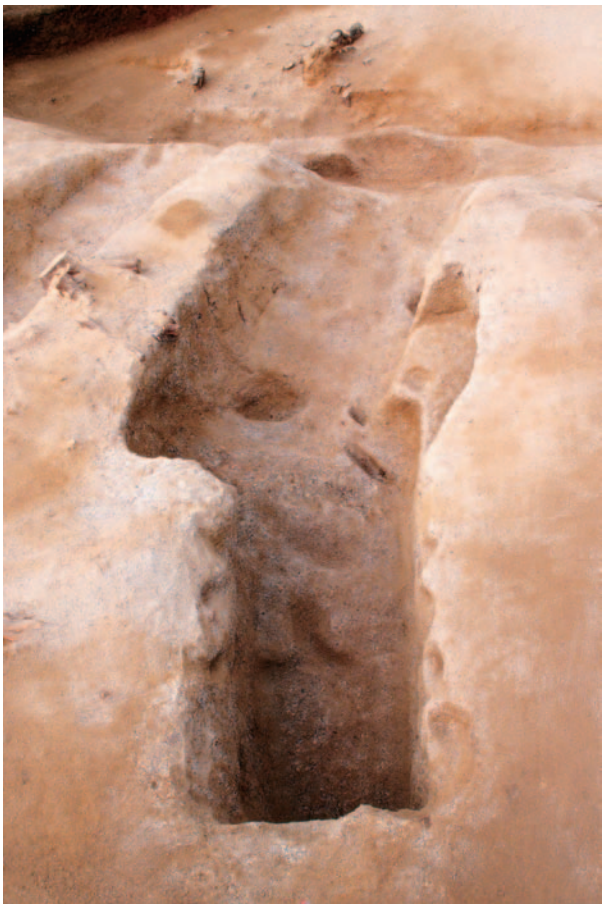
b　坊主山遺跡遠景（航空写真・調査前・南西から）

図版 106

a　坊主山遺跡（航空写真・調査前・西から）

b　坊主山遺跡（航空写真・調査後・東から）

a　坊主山遺跡 ST1（東から）



b　坊主山遺跡 ST2・ST3・ST4（東から）

図版 108

a　坊主山遺跡 ST5（北から）

b　坊主山遺跡 ST6・ST7（西から）

a　坊主山遺跡 ST8（東から）

b　坊主山遺跡 ST9・ST10（東から）

図版 110

a　坊主山遺跡 ST11（西から）

b　坊主山遺跡 ST12・ST13（東から）

a　坊主山遺跡 ST14 石棺開棺前・ST15（東から）

b　坊主山遺跡 ST14 人骨取り上げ後（東から）

図版 112

a　坊主山遺跡 ST14 人骨出土状況（東から）

b　坊主山遺跡 ST14 人骨出土状況（東から）

a　坊主山遺跡 ST14 棺材除去後（東から）

b　坊主山遺跡 ST16（北から）

図版 114

a　坊主山遺跡 ST17 墓標石検出状況（東から）

b　坊主山遺跡 ST17・ST18（北から）

a　坊主山遺跡 ST19・ST20（東から）

b　坊主山遺跡 ST21（西から）

図版 116

a　坊主山遺跡 ST22 ～ 25（北から）

b　坊主山遺跡 ST26（西から）

a　坊主山遺跡 ST27（西から）

b　坊主山遺跡 ST28・ST29（西から）

図版 118

a　坊主山遺跡 ST30 ～ 34（東から）

b　坊主山遺跡 ST35（東から）

a　坊主山遺跡 ST36（東から）

b　坊主山遺跡 ST37（東から）

図版 120

a　坊主山遺跡 ST38（東から）

b　坊主山遺跡 ST39 土器出土状況（東から）

図版 121

a　坊主山遺跡 ST38 ～ 40・SK1（東から）

1

2

b　出土遺物

図版 122

a　柳遺跡遠景（航空写真・調査前・東から）

b　柳遺跡（航空写真・モザイク合成・調査前）

a　柳遺跡遠景（航空写真・調査後・西から）

b　柳遺跡（航空写真・調査後・西から）

図版 124

a　柳遺跡 SH1 遺物出土状況（北西から）

b　柳遺跡 SH1（北西から）

a　柳遺跡 SH1 炉跡（西から）

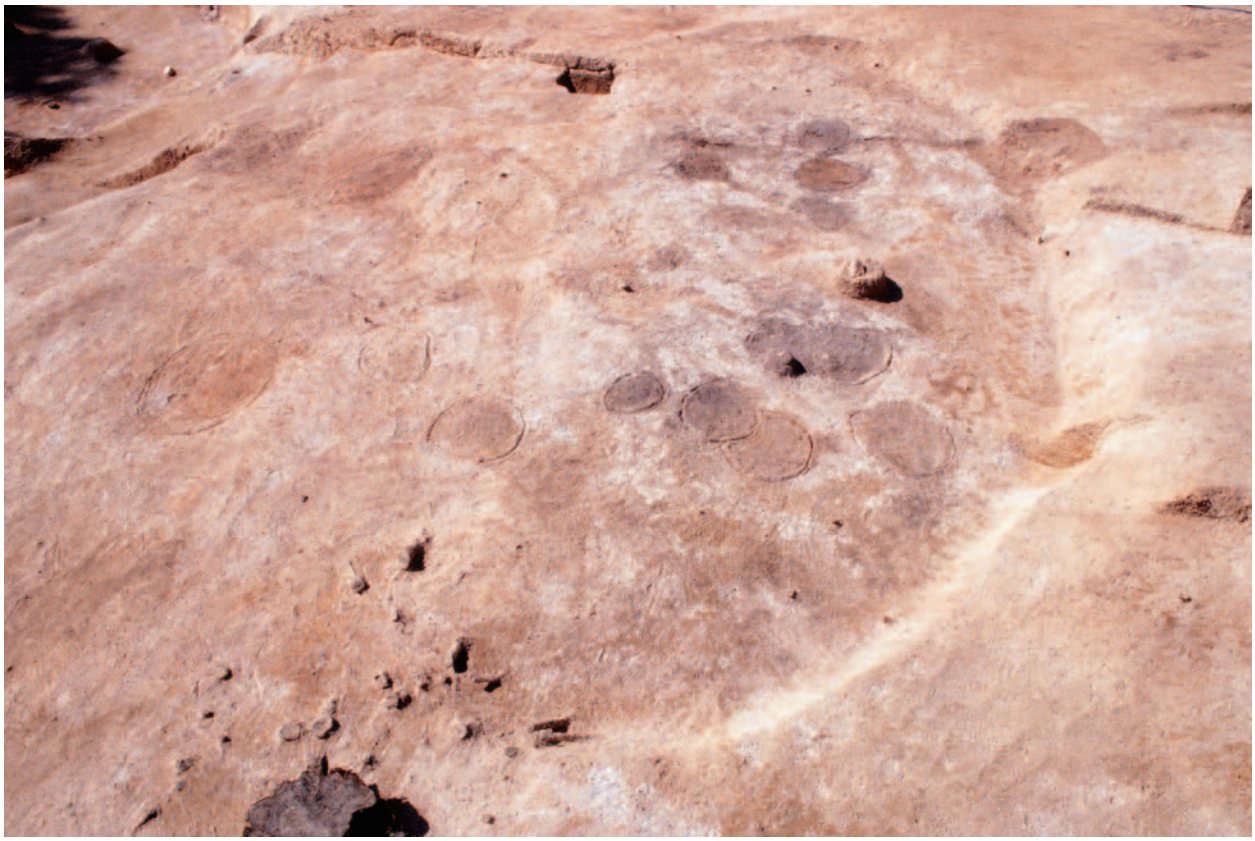
b　柳遺跡 SH2 遺物出土状況（北から）

図版 126

a　柳遺跡 SH3 遺物出土状況（北から）

b　柳遺跡 SH3 遺物出土状況（南東から）

a　柳遺跡 SH2・SH3（西から）



b　柳遺跡 SH4 遺物出土状況（東から）

図版 128

a　柳遺跡 SH4（南から）

b　柳遺跡 SH5 遺物出土状況（南から）

a　柳遺跡 SH5（南西から）

b　柳遺跡 SH6 遺物出土状況（東から）

図版 130

a　柳遺跡 SH6 ベッド状遺構検出状況（東から）

b　柳遺跡 SH6・SB1（東から）

a　柳遺跡 SH7（西から）

b　柳遺跡 SH7（北から）

図版 132

a　柳遺跡 SH8・SH9 遺物出土状況（北西から）

b　柳遺跡 SH9 遺物出土状況（南西から）

a　柳遺跡 SH10 遺物出土・貼床検出状況（東から）

b　柳遺跡 SH8・SH9・SH10（南西から）

図版 134

a　柳遺跡 SH11・SH12 遺物出土状況（北東から）

b　柳遺跡 SX6 遺物出土状況（東から）

a　柳遺跡 SH11・SH12 遺物出土状況 (北東から）

b　柳遺跡 SH11・SH12 遺物出土状況（北東から）

図版 136

a　柳遺跡 SH11・SH12・SX6(北東から）

b　柳遺跡 SH12 炉跡（北東から）

a　柳遺跡 SH12 掘り込み（南西から）

b　柳遺跡 SH13（北東から）

図版 138

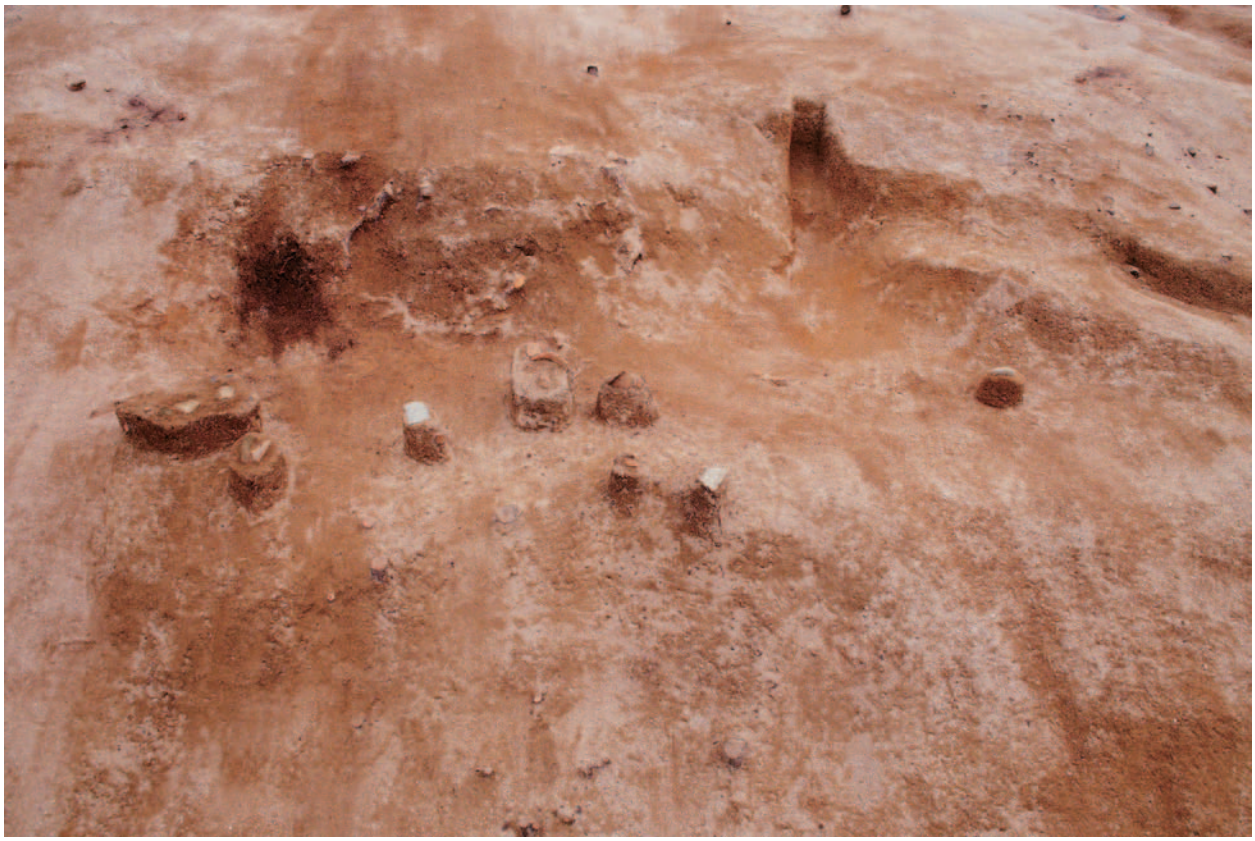
a　柳遺跡 SX1 北側遺物出土状況（西から）

b　柳遺跡 SX1 南側遺物出土状況（西から）

a　柳遺跡 SX1（北から）

b　柳遺跡 SX2・SX3（西から）

図版 140



a　柳遺跡 SX2 遺物出土状況（西から）

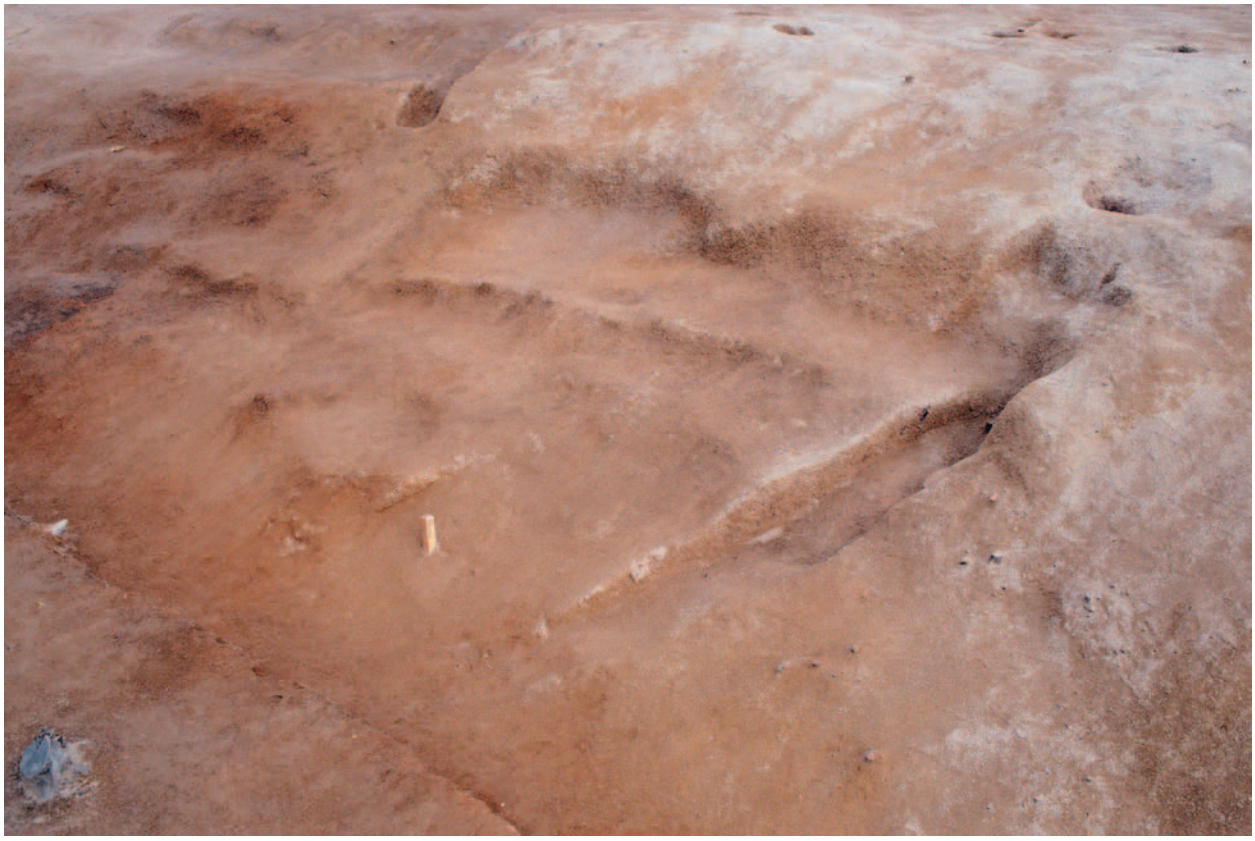
b　柳遺跡 SX2（西から）

a　柳遺跡 SX3 遺物出土状況（西から）

b　柳遺跡 SX3 北側遺物出土状況（東から）

図版 142

a　柳遺跡 SX3 南側遺物出土状況（東から）



b　柳遺跡 SX3（南西から）

a　柳遺跡 SX5 遺物出土状況（南東から）

b　柳遺跡 SX4・SX5（南から）

図版 144

a　柳遺跡 SK1（西から）

b　柳遺跡 SK2（北から）

a　柳遺跡 SK3（東から）

b　柳遺跡 SK3（北から）

図版 146

a　柳遺跡 SK4・SK5（南東から）

b　柳遺跡 SK5（北東から）

a　柳遺跡 SK6（北東から）

b　柳遺跡 SK7（南から）

図版 148

a　柳遺跡 SK8・SK9・SK10（東から）

b　柳遺跡 SK8・SK9・SK10（南西から）

図版 149

1

2

3

4

5

8

9

10

出土遺物（1）

図版 150

6

7

11

12

13

14

出土遺物（2）

15

16

17

18

19

20

21

22

出土遺物（3）

図版 152

23

24

25

26

27

28

29

30

出土遺物（4）

図版 153

31

32

33

34

35

36

37

38

出土遺物（5）

図版 154

39

40

41

42

43

44

45

46

出土遺物（6）

図版 155

47 上

47 下

48

49

50

51

52

54

出土遺物（7）

図版 156

53

55

56

57

58

59

60

出土遺物（8）

61

62

63

64

65

66

67

68

出土遺物（9）

図版 158

69

70

71

72

73

74

75

出土遺物（10）

76

77

78

79

80

81

82 上

82 下

出土遺物（11）

図版 160

83

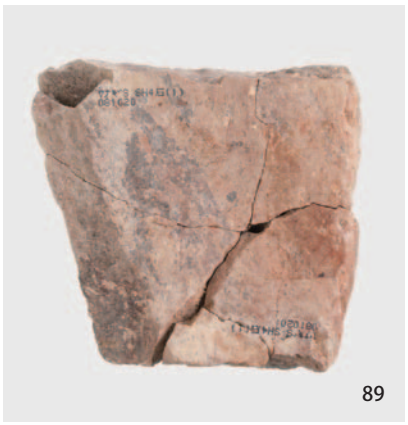
84

85

86

87

88


89

90

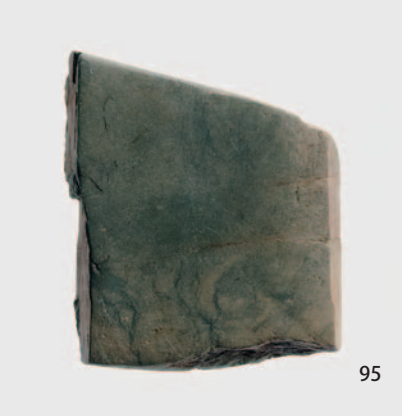
91

92

出土遺物（12）

93

94


95

96

97

98

99

100

101

102

103

104

出土遺物（13）

図版 162

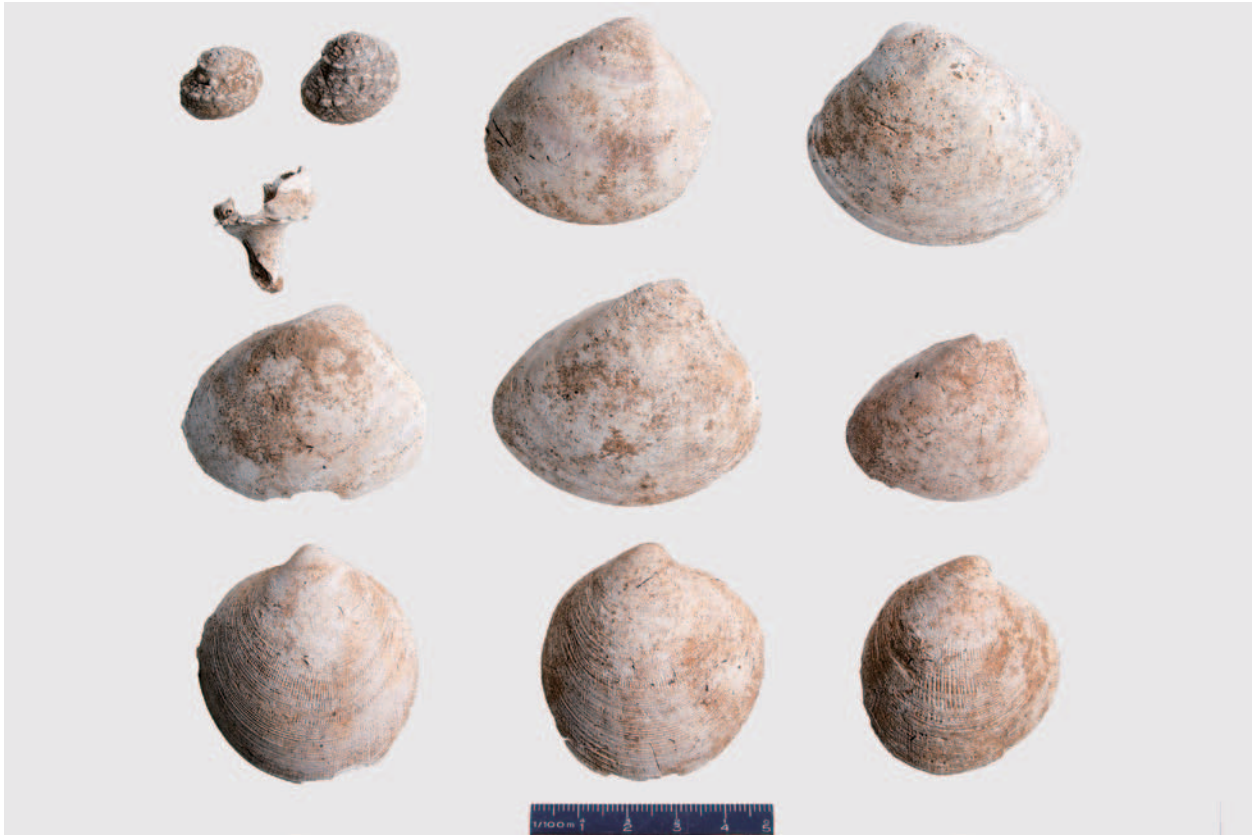
出土遺物（14）

図版 163

出土遺物（15）

図版 164

a　SX1 出土貝殻（カキ）



b　SX1 出土貝殻（その他 2 枚貝・巻貝類）

a　琴平遺跡遠景（航空写真・調査前・南東から）

b　琴平遺跡（航空写真・調査前・南東から）

図版 166

a　琴平遺跡遠景（航空写真・調査後・北東から）

b　琴平遺跡遠景（航空写真・調査後・西から）

a　琴平遺跡（航空写真・調査後・東から）

b　琴毘羅社（調査前・南東から）

図版 168

a　琴毘羅社　（調査前・西から）

b　琴平遺跡 ST1 石材検出状況（北から）

a　琴平遺跡 ST1（北から）

b　琴平遺跡 ST2 赤色顔料検出状況（東から）

図版 170

a　琴平遺跡 ST2（南から）

b　琴平遺跡 ST3 赤色顔料検出状況（南から）

a　琴平遺跡 ST3（南から）

b　琴平遺跡 ST4（北から）

図版 172

a　琴平遺跡 ST5（北東から）

b　琴平遺跡 ST6 ～ 14（南から）

a　琴平遺跡 ST6・ST7（南西から）

b　琴平遺跡 ST6・ST7（西から）

図版 174

a　琴平遺跡 ST8 人骨出土状況（南東から）

b　琴平遺跡 ST8 人骨出土状況（南西から）

a　琴平遺跡 ST8（東から）

b　琴平遺跡 ST12 赤色顔料検出状況（北から）

図版 176

a　琴平遺跡 ST12（南から）

b　琴平遺跡 ST9 ～ 11・S13・ST14（東から）

a　琴平遺跡 ST9（南西から）

b　琴平遺跡 ST10・ST11（東から）

図版 178

a　琴平遺跡 ST10・ST11・ST13・ST14（西から）

b　琴平遺跡 ST13 赤色顔料検出状況（南から）

a　琴平遺跡 ST14（南から）

b　琴平遺跡 ST15 ～ 21（航空写真・西から）

図版 180

a　琴平遺跡 ST15・ST16（南西から）

b　琴平遺跡 ST16 石材検出状況（北西から）

a　琴平遺跡 ST16 石材検出状況（北西から）

b　琴平遺跡 ST16（西から）

図版 182

a　琴平遺跡 ST17・ST18（南西から）

b　琴平遺跡 ST18 ～ 21（西から）

図版 183

1　2

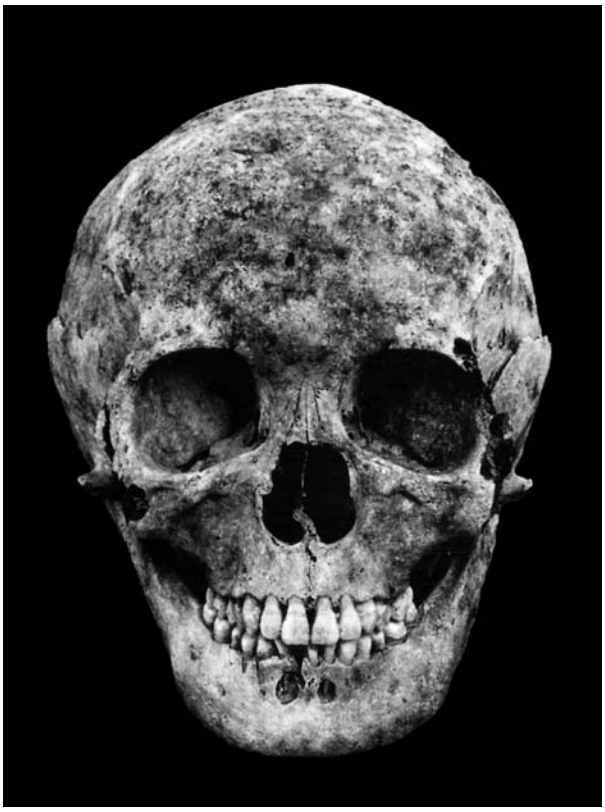
3　4

5

出土遺物

図版 184

頭蓋上面（Superior view of the Skull）



頭蓋正面（Frontal view of the Skull）

頭蓋側面（Lateral view of the Skull）

トンガ坊城遺跡 ST-21（女性・壮年）

（The tongabojo ST-21，young adlut female）

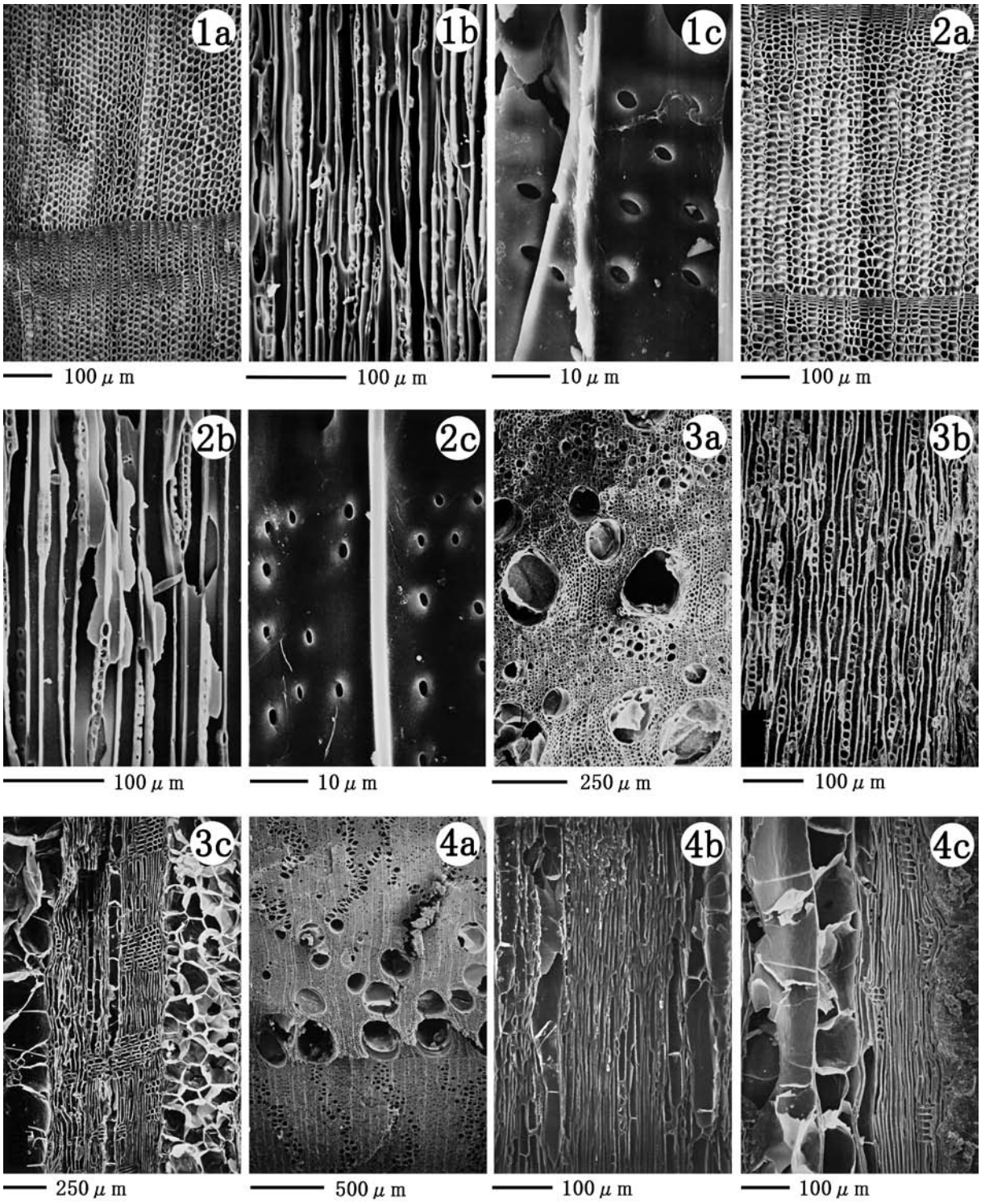
下肢骨（Bone of the lower limb）

上肢骨（Bone of the upper limb）

トンガ坊城遺跡 ST-21（女性・壮年）

（The tongabojo ST-21，young adlut female）

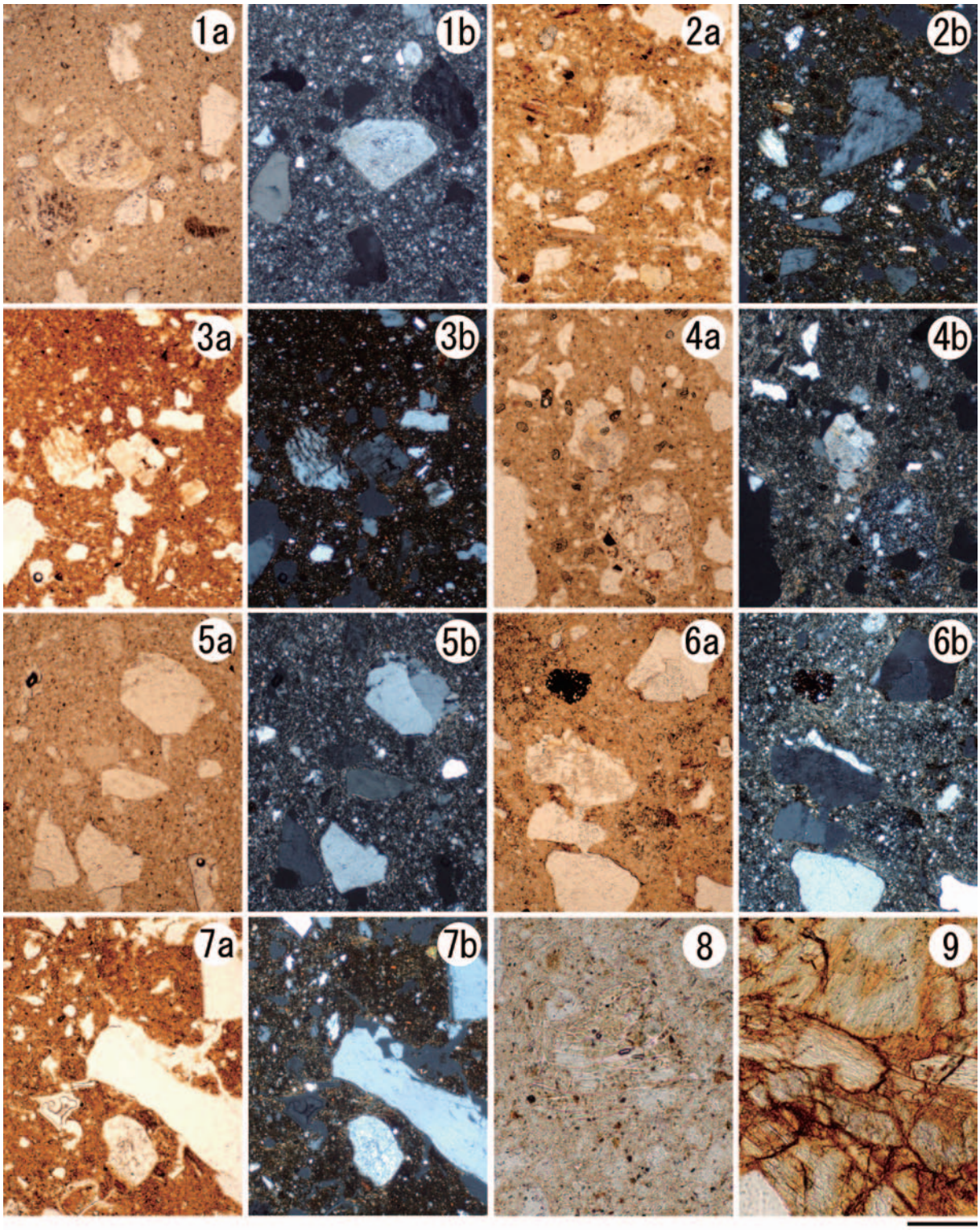
図版 186



a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

1a-1c. ヒノキ属（No. 11） 2a-2c. ヒノキ属（No. 58） 3a-3c. クリ（No. 53） 4a-4c. クリ（No. 60）

SH10 出土炭化材木材組織の走査電子顕微鏡写真



土器胎土の偏光顕微鏡写真（スケール，1a-7b:500μm,8-9: 100μm）

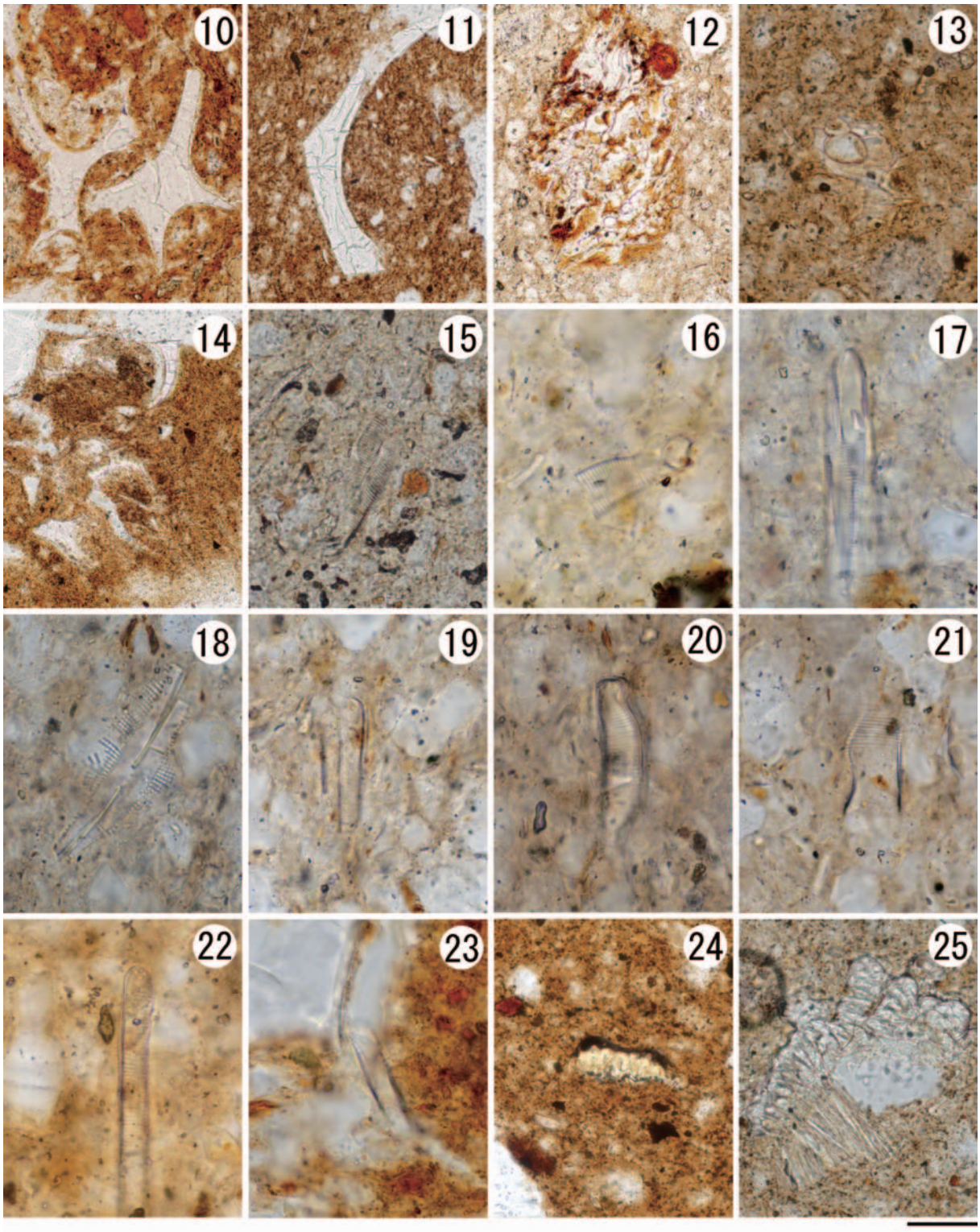
1a. 試料No. 1（解放ニコル）1b. 試料No. 1（直交ニコル）2a. 試料No. 2（解放ニコル）2b. 試料No. 2（直交ニコル）

3a. 試料No. 3（解放ニコル）3b. 試料No. 3（直交ニコル）4a. 試料No. 4（解放ニコル）4b. 試料No. 4（直交ニコル）

5a. 試料No. 5（解放ニコル）5b. 試料No. 5（直交ニコル）6a. 試料No. 6（解放ニコル）6b. 試料No. 6（直交ニコル）

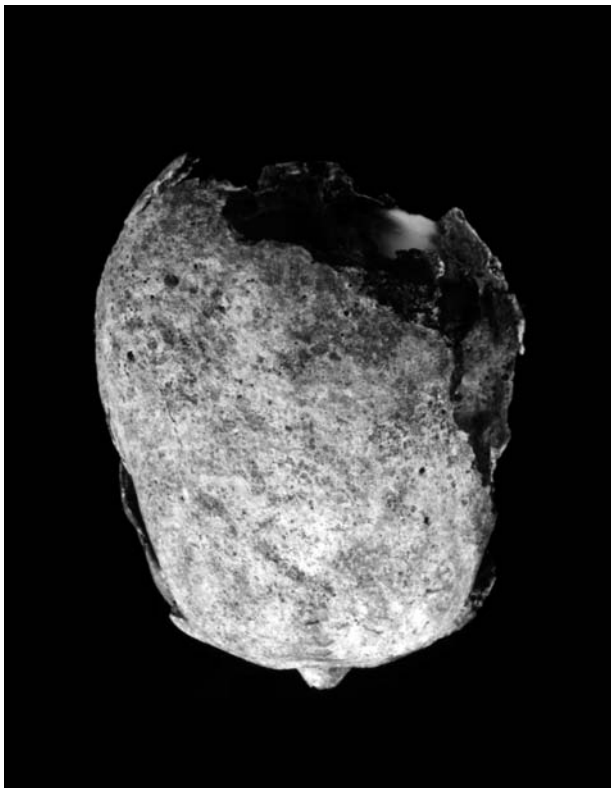
7a. 試料No. 7（解放ニコル）7b. 試料No. 7（直交ニコル）8. ガラス質（No. 1）9. 複合鉱物類（角閃石類）No. 2

図版 188

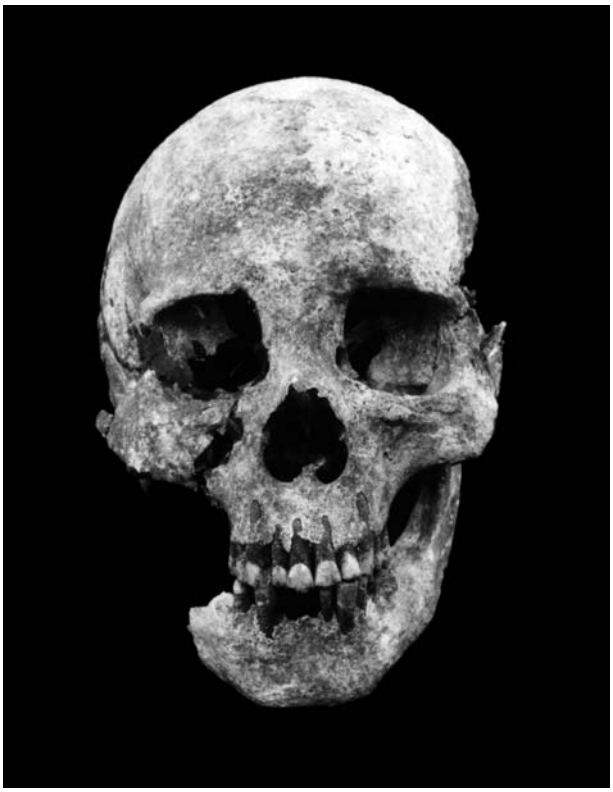


土器胎土の偏光顕微鏡写真（スケール，10-12,14: 100μm,13,15,24,25:50μm,16-23:20μm）

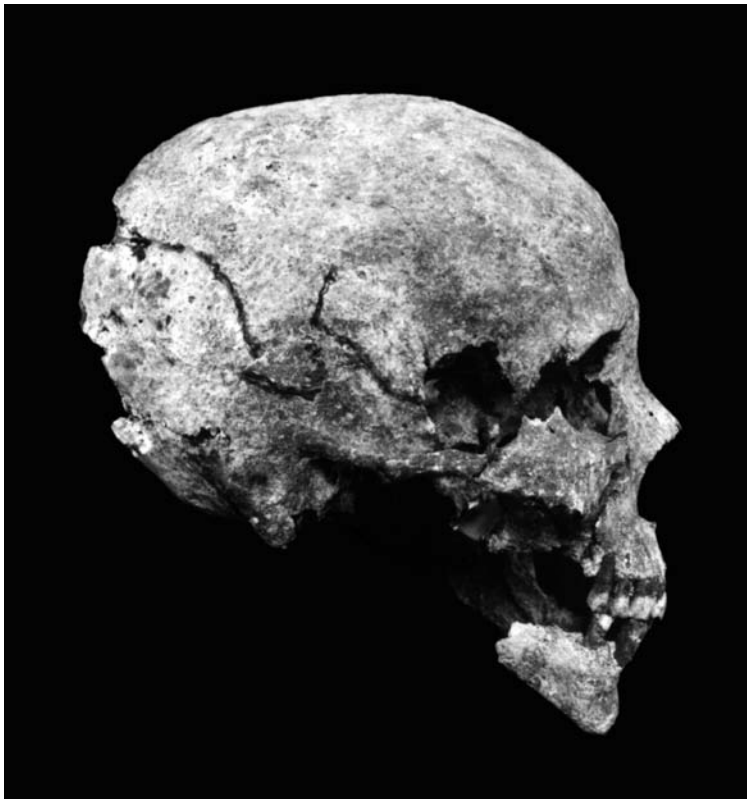
10. ガラス質（No. 2）11. ガラス質（No. 3）12. ガラス質 - 軽石型（No. 5）13. ガラス質 - 軽石型（No. 6）14. ガラス質（No. 7）15. 珪藻化石 Pinnularia viridis（No. 1）16. 珪藻化石 Eunotia praerupta var.bidens（No. 1）17. 珪藻化石 Eunotia biareofera（No. 1）18. 珪藻化石 Cymbella 属（No. 5）19. 珪藻化石 Eunotia biareofera（No. 5）20. 珪藻化石 Eunotia praerupta var.bidens（No. 5）21. 珪藻化石 Eunotia monodon（No. 5）22. 珪藻化石 Eunotia biareofera（No. 6）23. 珪藻化石 Hantzschia amphioxys（No. 7）24. イネ頴珪酸体（No. 3）25. イネ頴珪酸体（No. 4）



頭蓋上面（Superior view of the Skull）

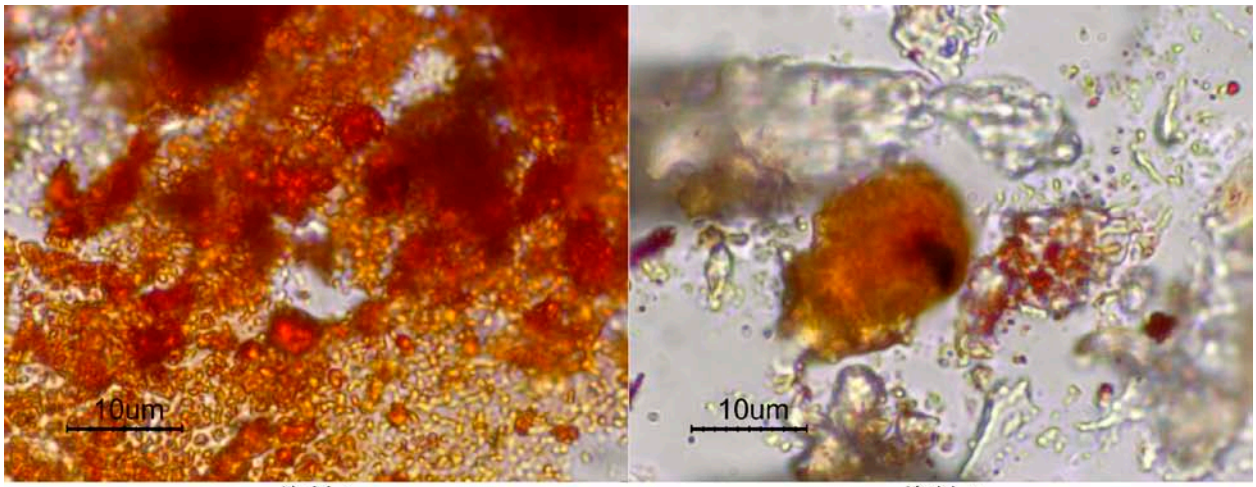


頭蓋正面（Frontal view of the Skull）

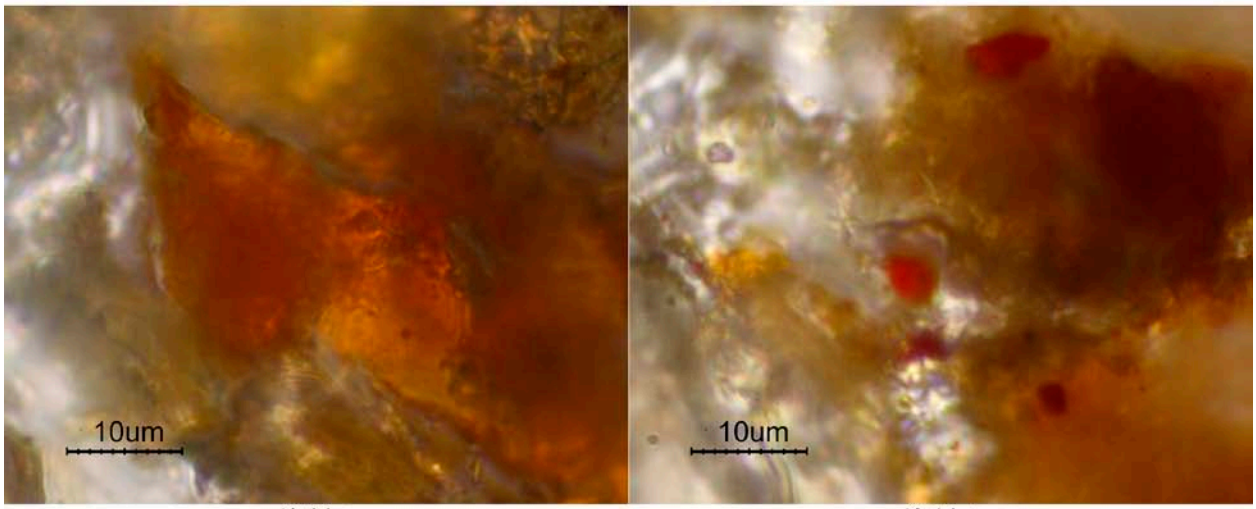


頭蓋側面（Lateral view of the Skull）
坊主山遺跡 ST-14（男性・老年）
（The bouzuyama ST-14，senile male）

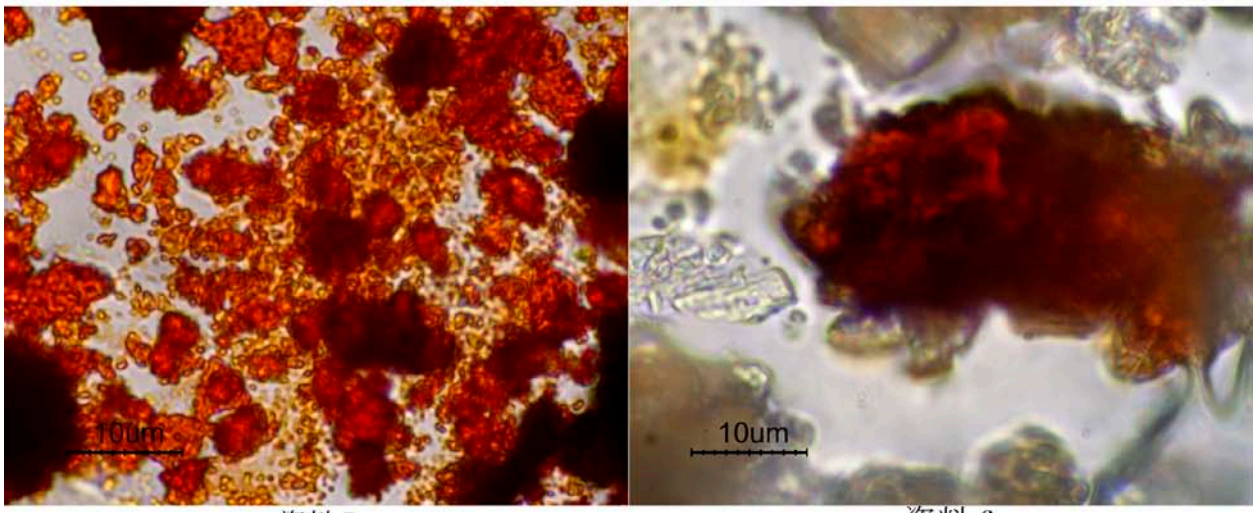
図版 190



資料 1　　資料 2

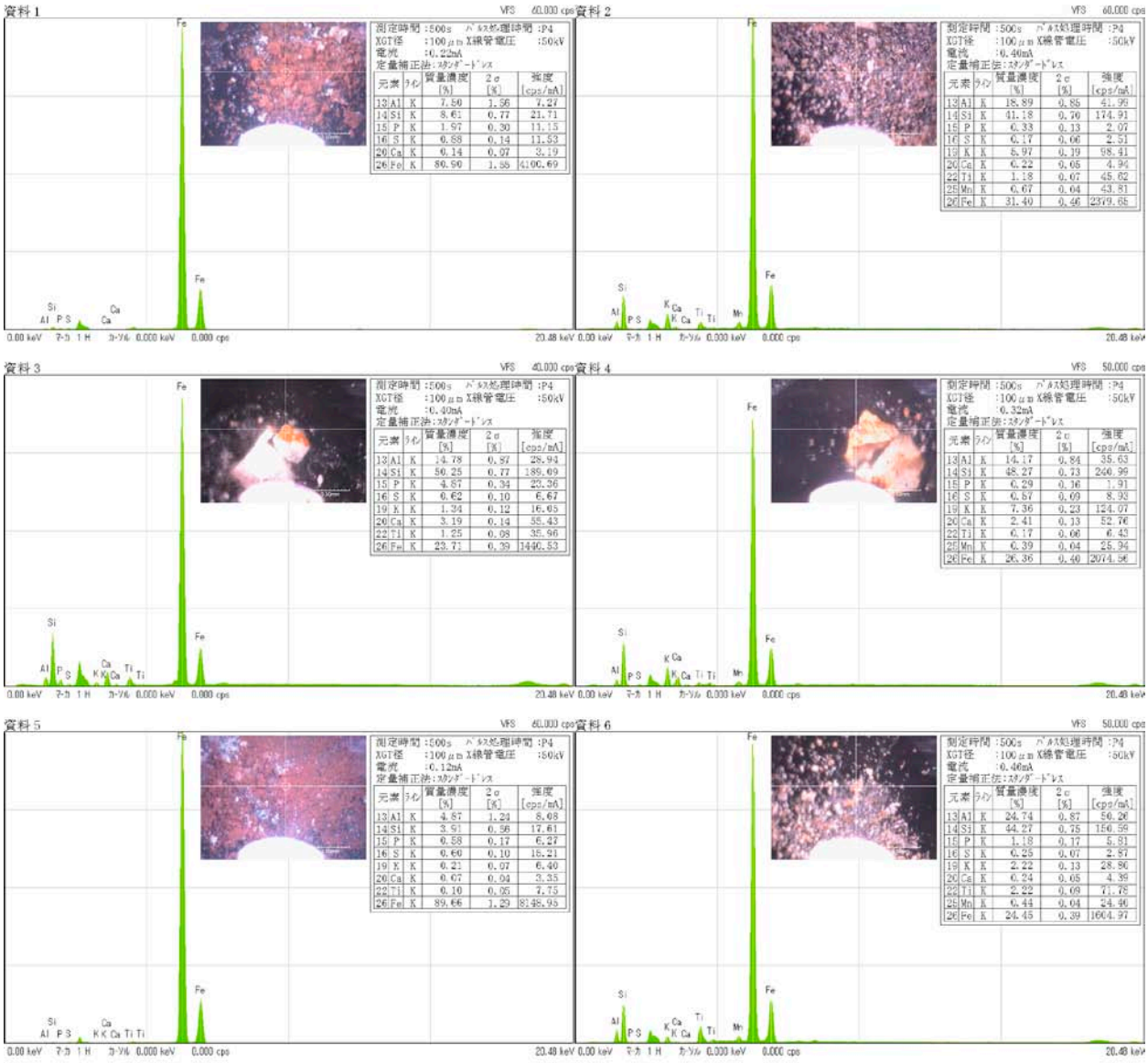


資料 3　　資料 4



資料 5　　資料 6

琴平遺跡　赤色顔料の光学顕微鏡写真



琴平遺跡　赤色顔料の蛍光 X 線分析結果

（財）広島市未来都市創造財団発掘調査報告書　第１集
トンガ坊城遺跡・坊主山遺跡・柳遺跡・琴平遺跡
－一般国道 54 号（可部バイパス）建設工事に伴う発掘調査－
―写真図版編―
２０１２年３月

編集発行　財団法人広島市未来都市創造財団文化科学部文化財課
〒 732-0052　広島市東区光町二丁目 15 番 36 号
TEL　082-568-6511

印　刷　大村印刷株式会社　広島営業所
〒 730-0847　広島市中区舟入南一丁目 10 番 10 号
TEL　082-503-1221